

茨城県教育財団文化財調査報告第402集

馬立原遺跡 馬立原西遺跡

国道354号岩井バイパス事業
地内埋蔵文化財発掘調査報告書

茨城県教育財団文化財調査報告第402集

馬立原西遺跡

公益財団法人茨城県教育財団

平成27年3月

茨城県境工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第402集

ま たて はら 遺 跡
馬 立 原 遺 跡
ま たて はら に し
馬 立 原 西 遺 跡

国道354号岩井バイパス事業
地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27年3月

茨城県境工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、市町村や県の枠を超える広域的な交流と連携を進めるため、また県土の均衡のある発展を支える基盤として、県土の骨格を成すとともに、首都圏中央連絡自動車道へアクセスするための一般国道や主要地方道などの幹線道路を整備しています。

その一環として、茨城県境工事事務所は、坂東市において国道354号岩井バイパス事業を計画しました。しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である、馬立原遺跡及び馬立原西遺跡が存在することから記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県境工事事務所から発掘調査事業の委託を受け、馬立原遺跡を平成23年1月から6月まで及び平成25年6月から7月まで、馬立原西遺跡を平成24年10月15日から11月9日まで及び平成25年2月から5月まで、これを実施しました。

本書は、馬立原遺跡及び馬立原西遺跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県境工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、坂東市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成27年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一

例 言

1 本書は、茨城県境工事事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成 22・23・25 年度に発掘調査を実施した茨城県坂東市大字馬立字原 674 - 1 番地ほかに所在する馬立原^{またてはら}遺跡と、平成 24・25 年度に発掘調査を実施した茨城県坂東市大字馬立字西 143 番地ほかに所在する馬立原西^{またてはらにし}遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査

平成 22 年度（馬立原遺跡） 平成 23 年 1 月 1 日～3 月 31 日

平成 23 年度（馬立原遺跡） 平成 23 年 4 月 1 日～6 月 30 日

平成 24 年度（馬立原西遺跡） 平成 24 年 10 月 15 日～11 月 9 日及び平成 25 年 2 月 1 日～3 月 31 日

平成 25 年度（馬立原遺跡・馬立原西遺跡） 平成 25 年 4 月 1 日～7 月 31 日

整理

平成 26 年度（馬立原遺跡・馬立原西遺跡） 平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

3 発掘調査は、平成 22 年度が調査課長池田晃一のもと、平成 23・24 年度が調査課長樫村宣行のもと、平成 25 年度が調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。

平成 22 年度（馬立原遺跡）

首席調査員兼班長 皆川 修

主任 調 査 員 櫻井完介

調 査 員 関 絵美

平成 23 年度（馬立原遺跡）

首席調査員兼班長 皆川 修

主任 調 査 員 櫻井完介

調 査 員 宮崎 剛

調 査 員 佐藤一也 平成 23 年 4 月 1 日～5 月 31 日

平成 24 年度（馬立原西遺跡）

首席調査員兼班長 皆川 修

首 席 調 査 員 綿引英樹

次 席 調 査 員 舟橋 理

平成 25 年度（馬立原遺跡・馬立原西遺跡）

首席調査員兼班長 酒井雄一

首 席 調 査 員 駒澤悦郎

調 査 員 中泉雄太

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員中泉雄太が担当した。

- 5 馬立原遺跡出土の金属製品3点の保存処理（第2・9号竪穴建物跡出土の鉄製品2点，第1号溝跡出土の弥勒仏立像1点）及び弥勒仏立像の成分分析については，株式会社吉田生物研究所に委託し，成分分析結果は付章として掲載した。
- 6 馬立原西遺跡出土の漆器椀1点（第6号井戸跡）の保存処理及び樹種同定については，株式会社吉田生物研究所に委託し，樹種同定結果は付章として掲載した。
- 7 馬立原遺跡出土の弥勒仏立像については，前茨城県文化財保護審議会委員の後藤道雄氏，NPO法人古仏修復工房代表の飯泉太子宗氏に御指導いただいた。

凡 例

- 1 両遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、馬立原遺跡が $X = + 7,080 \text{ m}$ 、 $Y = + 5,880 \text{ m}$ の交点、馬立原西遺跡が $X = + 7,040 \text{ m}$ 、 $Y = + 5,600 \text{ m}$ の交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 FP - 炉跡 P - ピット PG - ピット群 SA - 柱穴列 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡
SE - 井戸跡 SF - 道路跡 SH - 方形竪穴遺構 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑
SN - 粘土貼土坑 SS - 石器集中地点 TP - 陥し穴 UP - 地下式坑
遺物 DP - 土製品 M - 鉄製品・銅製品・銭貨 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器 W - 木製品
土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・施釉		炉・火床面						
	竈部材・粘土範囲・黒色処理		柱痕跡・柱あたり・煤						
●	土器	○	土製品	□	石器・石製品	△	鉄製品・銅製品・銭貨	- - - -	硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は[]を付して示した。
- (2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

馬立原遺跡

変更 SK46 → SK46・384, SK57 → SK57・385, SK119 → SK119・390, SK121 → SK121・386,
SK124 → TP 1, SK271 → SK271・387, SK279 → SK279・388, SK294 → SK294・389,
SK295 → SN 1, SK351～360 → SK322～331, SK365～403 → SK332～370, SD29 → SK383,
PG 1 P 1 → SK381, PG 1 P 2 → SK382, PG 2 P 1 → SK378, PG 2 P 2 → SK379, PG 2 P 3
→ SK377, PG 2 P 4 → SK380, PG 3 P 1～3 → SA 6, PG 3 P 6・10・11・19・20・SA 3
P 1～4 → SB 4, PG 3 P 14 → SK376, PG 3 P 16 → SK375, PG 3 P 24 → SK371, PG 3 P
25 → SK372, PG 3 P 26 → SK373, PG 3 P 4・5・7～9・12・13・15・17・18・21～23・SA
4 P 5・7 → PG 1, SA 4 P 2～4・6・8・SA 5 → SB 5, SA 4 P 1 → SK374

欠番 SK58・76・116・117・201・275・276・322～350・361～364, SD 8

馬立原西遺跡

変更 SB 2 P 4～10 → SA 8, SK 9 → SN 2, SK12 → SN 3, SK13 → SN 1, SK15 → SE10,
SK27 → SN 4, SK29 → SN 5, SK31 → SN10, SK35 → SH 1, SK36 → SE11, SK57 → SN
6, SK64・65 → FP23, SK69・72・131・138・242・243・424 → SB 5, SK137 → SB 5 P 2・
SK137, SK108・112～114・152・154 → SB 4, SK124・125 → SH 2, SK128 → SN 7・SK128,
SK151 → SH 3, SK156・158・164 → SA 7, SK165 → SH 4, SK182 → SH 5, SK184 A
→ SK528, SK184 B → SK184, SK184 C → SK529, SK203・204 → SK203, SK213・214 → SK213,
SK239・261・269・274・288・295・297・307・335・350・416 → SB 6, SK247 → SN 8,
SK309・313・315・360・379・396 → SB 7, SK390 → SH 6, SK398 → SN 9, SK400 → SH 7,
PG 2 P 36～39 → SA 5, PG 3 P 37～39 → SA 6, PG 3 P 95 → SH 1 P 1, PG 2 P 8～
12・14～35 → PG 2 P 1～18, PG 3 P 80～91・93～139 → PG 3 P 1～18, PG 4 P 24～
140 → PG 4 P 1～55, SX 2 → SK530

欠番 SK32・37～39・63・73・116・119・130・133・142・147・148・162・166～170・172・174・177・181・
190・192・194・195・197～199・205・217・220・223～226・228～231・248～251・253～255・257・
259・262・268・283～285・296・301・322・324・332・333・340～342・346・357・367・368・372
～375・399・413・418・419・422・427・428・432・434・436・441～443・448・450・451・456・457・
459・464・468～474・476～484・486～489・491・492・495～500・502・504・505・507～
509・511・512・514・515・517～524・526・527, SD 5, PG 2 P 13, PG 3 P 92・140,
SX 1・3

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
馬立原遺跡・馬立原西遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 馬立原遺跡	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 旧石器時代の遺構と遺物	13
石器集中地点	13
2 縄文時代の遺構と遺物	16
(1) 竪穴建物跡	16
(2) 陥し穴	18
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	19
(1) 竪穴建物跡	19
(2) 土坑	48
4 江戸時代の遺構と遺物	48
(1) 掘立柱建物跡	48
(2) 井戸跡	54
(3) 道路跡	58
(4) 溝跡	58
(5) 粘土貼土坑	63
(6) 土坑	63
5 その他の遺構と遺物	65
(1) 土坑	65
(2) 炉跡	89
(3) 溝跡	90

(4) 柱穴列	92
(5) ピット群	93
(6) 遺構外出土遺物	94
第4節 まとめ	99
第4章 馬立原西遺跡	111
第1節 調査の概要	111
第2節 基本層序	111
第3節 遺構と遺物	113
1 古墳時代の遺構と遺物	113
竪穴建物跡	113
2 室町時代の遺構と遺物	118
(1) 方形竪穴遺構	118
(2) 井戸跡	125
(3) 地下式坑	128
(4) 土坑	144
3 江戸時代の遺構と遺物	145
(1) 掘立柱建物跡	145
(2) 井戸跡	152
(3) 粘土貼土坑	160
(4) 土坑	169
(5) 炉跡	185
(6) 柱穴列	196
4 その他の遺構と遺物	197
(1) 竪穴建物跡	197
(2) 土坑	199
(3) 炉跡	219
(4) 道路跡	221
(5) 溝跡	221
(6) 柱穴列	222
(7) ピット群	223
(8) 遺構外出土遺物	227
第4節 まとめ	229
付 章	233
1 馬立原遺跡出土弥勒仏立像の成分分析結果	233
2 馬立原西遺跡出土木製品の樹種同定結果	235
写真図版	PL 1 ~ PL 36
抄録	
付図	

馬立原遺跡・馬立原西遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

馬立原遺跡は、坂東市のほぼ中央部に位置し、南流する江川左岸の標高 16～18 m の台地上に立地しています。馬立原西遺跡は、馬立原遺跡の西側に隣接し、標高 13～16 m の台地平坦部から台地縁辺部にかけて立地しています。



両遺跡の調査は、国道 354 号岩井バイパスの建設に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が実施しました。馬立原遺跡の調査期間は、平成 23 年 1 月から 6 月まで及び平成 25 年 6 月から 7 月までの 8 か月間、馬立原西遺跡の調査期間は、平成 24 年 10 月 15 日から 11 月 9 日まで及び平成 25 年 2 月から 5 月までの 5 か月間です。

馬立原遺跡の調査の内容と結果

調査の結果、旧石器時代から江戸時代にかけて断続的に土地利用された遺跡



馬立原遺跡・馬立原西遺跡調査区遠景（東から）

であることが判明しました。特に奈良時代（約 1,300 年前）には、本格的な集落が形成され始めました。当地は、古代は下総国猿島郡しもうさのくに さしまぐんに属し、地理的に東は常陸国ひたちのくに、西は武蔵国むさしのくにとの国境から比較的近い距離にありました。竪穴建物跡たてあなたてものあとから出土した須恵器は、常陸国新



竪穴建物跡出土の産地の異なる須恵器

治窯産はりようをはじめ、製作地が異なる製品が混在している状況で、遠く離れた東海地方から運び込まれた製品もありました。このような当時の国を越えて運び込まれた土器は、他国との交流や交易を背景とした物資の流通を物語っています。江戸時代（約 300 年前）には、屋敷地として利用され、調査区東部の区画溝からは室町時代に製作された弥勒仏立像みろくほとけりゅうぞうが出土しています。

馬立原西遺跡の調査の内容と結果

調査の結果、古墳時代から江戸時代にかけて断続的に土地利用された遺跡であることが判明しました。古墳時代（約 1,500 年前）には、小規模な集落が営まれていました。室町時代（約 500 年前）には、倉庫と考えられる地



井戸跡から出土した漆器碗

下式坑かしくいが群集していました。また、井戸跡からは、いわゆる「武蔵型板碑」むさしがたいたびの完形品が出土し、使用した石材が当遺跡周辺では入手できないことから、他地域との交流を示す貴重な資料となりました。江戸時代（約 300 年前）には屋敷地として利用され、居住目的の建物や倉庫と考えられる掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとを確認しました。その周辺に位置する井戸跡や粘土貼土坑ねんどぼりどころからは、土師質土器はじしつどきや陶磁器とうじきをはじめ、漆器碗しっきわんや銭貨など、当時の生活を彩った多種多様な遺物が出土しています。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県境工事事務所（旧 茨城県境土木事務所）は、首都圏中央連絡自動車道へのアクセスを円滑にするために、国道354号岩井バイパスの整備を進めている。

平成19年2月26日、茨城県境土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長にあてに、国道354号岩井バイパス事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成19年10月24日に現地踏査を実施した。

平成21年10月29・30日及び平成23年10月13日、平成24年1月16日に馬立原遺跡、平成23年10月12日に馬立原西遺跡の試掘調査をそれぞれ実施し、両遺跡の所在を確認した。

平成22年1月18日及び平成24年1月31日に馬立原遺跡、平成24年1月31日に馬立原西遺跡について、茨城県教育委員会教育長は茨城県境工事事務所長あてに、事業地内に両遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成22年2月8日及び平成24年2月2日に馬立原遺跡、平成24年2月2日に馬立原西遺跡に関して、茨城県境工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県境工事事務所長あてに、平成22年2月26日及び平成24年2月13日に馬立原遺跡、平成24年2月13日に馬立原西遺跡について、工事着手前にそれぞれ発掘調査を実施するよう通知した。

平成22年3月17日及び平成23年3月4日、平成25年2月14日に馬立原遺跡、平成24年2月17日及び平成25年2月14日に馬立原西遺跡に関して、茨城県境工事事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、国道354号岩井バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。

平成22年3月26日及び平成23年3月22日、平成25年2月20日に馬立原遺跡、平成24年2月23日及び平成25年2月20日に馬立原西遺跡について、茨城県教育委員会教育長は茨城県境工事事務所長あてに、それぞれ発掘調査の範囲及び面積について回答した。併せて、調査機関として財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県境工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受けて、平成23年1月1日から6月30日まで、及び平成25年6月1日から7月31日まで馬立原遺跡、平成24年10月15日から11月9日まで、及び平成25年2月1日から5月31日まで馬立原西遺跡の発掘調査をそれぞれ実施した。

第2節 調査経過

馬立原遺跡の調査は、平成22年度が平成23年1月1日から3月31日まで、平成23年度が平成23年4月1日から6月30日まで、平成25年度が平成25年6月1日から7月31日までの8か月間にわたって実施した。馬立原西遺跡の調査は、平成24年度が平成24年10月15日から11月9日まで、及び平成25年2月1日から3月31日まで、平成25年度が平成25年4月1日から5月31日までの5か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

馬立原遺跡

工程 \ 期間	平成22年度			平成23年度			平成25年度	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	6月	7月
調査準備 表土除去 遺構確認	■						■	■
遺構調査		■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 写真整理		■	■	■	■	■	■	■
撤収						■		■

馬立原西遺跡

工程 \ 期間	平成24年度				平成25年度	
	10月	11月	2月	3月	4月	5月
調査準備 表土除去 遺構確認	■					■
遺構調査			■	■	■	■
遺物洗浄 写真整理			■	■	■	■
撤収				■		

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

馬立原遺跡は坂東市大字馬立字原 674 - 1 番地ほかに、馬立原西遺跡は坂東市大字馬立字西 143 番地ほかに隣接して所在している。

坂東市の地勢は標高 18 ~ 20m とほぼ平坦で、洪積台地と河川流域の沖積低地に大別される。台地は猿島台地に属し、飯沼川低地と利根川低地間に挟まれ、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の西部を占めている。台地面は古河付近から南東方向に向かって次第に高度を増し、常総市大塚戸付近で標高 24 m と最も高くなる¹⁾。また、この台地は数多くの河川によって開析され、樹枝状の入り組んだ複雑な地形を形成している。主な河川は、西部に県内を南東方向に流れて太平洋へと注ぐ利根川、中央部に市内を南流しながら菅生沼を経て利根川へと合流する江川をはじめ、飯沼川及び東仁連川、東部に県内を南流しながら守谷市付近で利根川に合流する鬼怒川がある。こうした河川に沿って発達している沖積低地は標高 7 ~ 10m で、現況は水田地帯となっている。一方で、台地は主に畑地や宅地として利用されている。市内中央部を流れる飯沼川は、享保年間に八代将軍徳川吉宗が主導した享保の改革において、湖沼や低湿地での新田開発が進められた際に開削されたものである²⁾。

猿島台地は、第四紀の氷河性海水準変動によって古東京湾内に堆積した成田層を基盤として、これを覆うように竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、その上部には関東ローム層が堆積している。

馬立原遺跡及び馬立原西遺跡は、標高 13 ~ 18 m の猿島台地の中央部に立地し、沖積低地との比高は最大 8 m である。両遺跡の西側には、旧岩井市域を二分する江川が南流し、南側は飯沼川によって分断されている。両遺跡が立地する台地は、大小河川によっていくつかの小台地面に区分され、水利の便に富み、台地縁辺部には樹枝状に入り込んだ谷津が発達した環境であるため、人々の生活活動の舞台として土地利用されたものと考えられる。

第2節 歴史的環境

馬立原遺跡〈1〉及び馬立原西遺跡〈2〉が立地する猿島台地は、飯沼川や江川などの大小河川によって開析された谷津によって小台地面に分断されている。各時代の遺跡は、これらの台地上や谷部に向かう台地縁辺部で多く確認されている。ここでは、両遺跡に関連する周辺の遺跡を中心に、時代ごとに述べる。

旧石器時代の遺跡は、両遺跡周辺では確認されていないが、馬立原遺跡から南南東へ約 6.5km の地点に位置する北前遺跡³⁾では、瑪瑙やチャート、安山岩製のスクレイパーや頁岩製を主体とした剥片などが、北前遺跡に隣接する高崎貝塚⁴⁾では、安山岩製のスクレイパーなどが出土している。

縄文時代の遺跡は、飯沼川及び江川流域の平坦な台地上あるいは緩斜面部に多く点在している。両遺跡の周辺には、早期後葉の条痕文系土器が採集された松葉遺跡〈4〉が位置している。江川を挟んで対岸の宮内遺跡⁵⁾〈38〉では、早期後葉から後期中葉にかけての土器が出土し、炉跡や土坑が確認され、長右衛門元屋敷遺跡〈39〉では、晚期中葉の安行Ⅲ d 式期に相当する竪穴建物跡 1 棟、陥し穴 1 基が確認されている。両遺跡より上流の江川流域では、早期中葉の田戸下層式土器及び中期後葉の加曾利 E 式土器が採集された長丁遺跡〈14〉、

中期後葉の加曾利 E 式土器が採集された香取東遺跡〈44〉をはじめ、早期後葉及び後期の土器が採集された遺跡が点在している。一方で、両遺跡より下流の江川流域では、草創期前葉の長者久保・神子柴段階に相当する尖頭器及び前期後葉の諸磯式土器が採集された天神山遺跡〈26〉をはじめ、型式比定は困難であるが、前期の繊維土器が採集された遺跡が集中している。前期中葉以降の遺跡は、旧岩井市の中心部に当たる地域に集中しており、前期中葉の黒浜式土器及び後期前葉の堀之内式土器が採集された遺跡が多い。その他、両遺跡から北東へ約 2 km の地点には、中期から晩期に至る多くの土器が採集された駒寄遺跡〈16〉が位置している。

弥生時代の遺跡は、調査例が少なく不明な部分が多い。当該期の遺跡は高崎貝塚の他に、馬立原遺跡から南東へ約 2.6 km の地点に所在する姥ヶ谷津遺跡⁶⁾がある。高崎貝塚では後期中葉の竪穴建物跡 4 棟、姥ヶ谷津遺跡では後期中葉の竪穴建物跡 1 棟が確認されている。

古墳時代の遺跡は、飯沼川及び江川流域の平坦な台地上あるいは緩斜面部に多く点在している。馬立原遺跡及び馬立原西遺跡の周辺には、中期の土師器甕が採集された松葉遺跡、中期あるいは後期と考えられる竪穴建物跡をはじめ、土師器や石製模造品が確認された馬立中の台遺跡〈7〉などが位置している。江川を挟んで対岸には、前期後葉から後期後葉にかけての竪穴建物跡 48 棟が確認された宮内遺跡が位置しており、時期別に建物跡数を見ると、中期から後期にかけて急激に増加している。前期の遺跡は、江川上流域に刷毛目調整の残る土師器甕が採集された元屋敷遺跡〈43〉、下流域に土師器台付甕や壺が採集された前畑遺跡〈27〉及び奈ノ下遺跡〈32〉が位置している。その他、馬立原遺跡から北東へ約 2 km の地点には、中期に相当する竪穴建物跡 2 棟をはじめ、土師器椀・高坏・鉢・壺・甕などが出土した駒寄遺跡が位置している。

古墳は半島状に延びた台地の突端部に多く所在している。馬立原遺跡に隣接する高山古墳⁷⁾〈3〉は、筑波山麓雲母片岩の板石で構成された複室板石組み横穴式石室をもつ円墳で、築造時期は 7 世紀前半と推定される。出土遺物は瑪瑙製や硬玉製の勾玉、水晶製切子玉、ガラス玉、馬具などで、それらの多くは東京国立博物館に所蔵されている。その他、築造時期は不明であるが、本来は群集墳であったと推定される浅間塚古墳〈9〉、馬立中の台古墳群〈8〉、辺田北山古墳〈28〉、経塚古墳〈29〉が確認されている。

律令期の当地域は、下総国後嶋郡石井郷に属していた。奈良・平安時代の遺跡は、江川流域の台地縁辺部に多く点在している。馬立原西遺跡から江川を挟んで対岸には、8 世紀から 10 世紀にかけての竪穴建物跡 54 棟をはじめ、掘立柱建物跡や鍛冶工房跡などが確認された宮内遺跡、平安時代の火葬墓 1 基を確認した長右衛門元屋敷遺跡が位置している。また、宮内遺跡の竪穴建物跡の中には、8 世紀代にはあまり類例のみられないコーナー竈を付設する例をはじめ、特徴的な建物構造を呈する例が確認されている。火葬墓は、坂東市民ホール敷地内で施設建設中に須恵器有蓋短頸壺が出土し、短頸壺内からは火葬骨が確認されている。同様に、北ノ妻遺跡及び入畑遺跡においても蔵骨器が確認され、当地域へも火葬が浸透したことを示している。

また、両遺跡からほぼ西に約 4.3 km の地点に長洲馬牧の比定地である長須という地名があり、隣接する西原遺跡では鉄滓が採集されている。宮内遺跡の調査でも多量の鉄滓が出土していることや、周辺に「馬立」、「駒寄」、「駒跳」等の馬に関する地名が残っていることは、馬牧と鉄器の生産と供給の関連を推測することができる。

鎌倉時代になると、当地域は秀郷流藤原氏の後裔が統括した下河辺荘に属し、その後古河公方足利氏の支配下となっていく。両遺跡から北東へ約 2 km には、小田原北条氏との関連が推測される弓田城址〈15〉があり、現在も堀と土塁が残存している。

徳川家康の江戸入府に伴い、当地域は天領、旗本相馬家領及び関宿藩を始めとする大名領となる。以後、統治者がめまぐるしく替わりながら幕末を迎える。享保年間には、飯沼川周辺は大規模な新田開発が行われ、その石高は 1 万 4 千石にも及んだ。現在でも「勘助新田」などの新田が付いた地名が残り、豊かな水田地帯が広

がっている。本地域では、当該期に相当する遺跡が少ない。その中で、馬立原西遺跡から江川を挟んで対岸に位置する長右衛門元屋敷遺跡では、屋敷跡と推測された17世紀後葉から18世紀代にかけての掘立柱建物跡をはじめ、付随する井戸跡や日常雑器類が確認されている。『岩井市史』によれば、馬立原西遺跡が所在する馬立地区には、江戸時代に古矢氏が入植して屋敷を構えたとの記録が残っている⁸⁾。

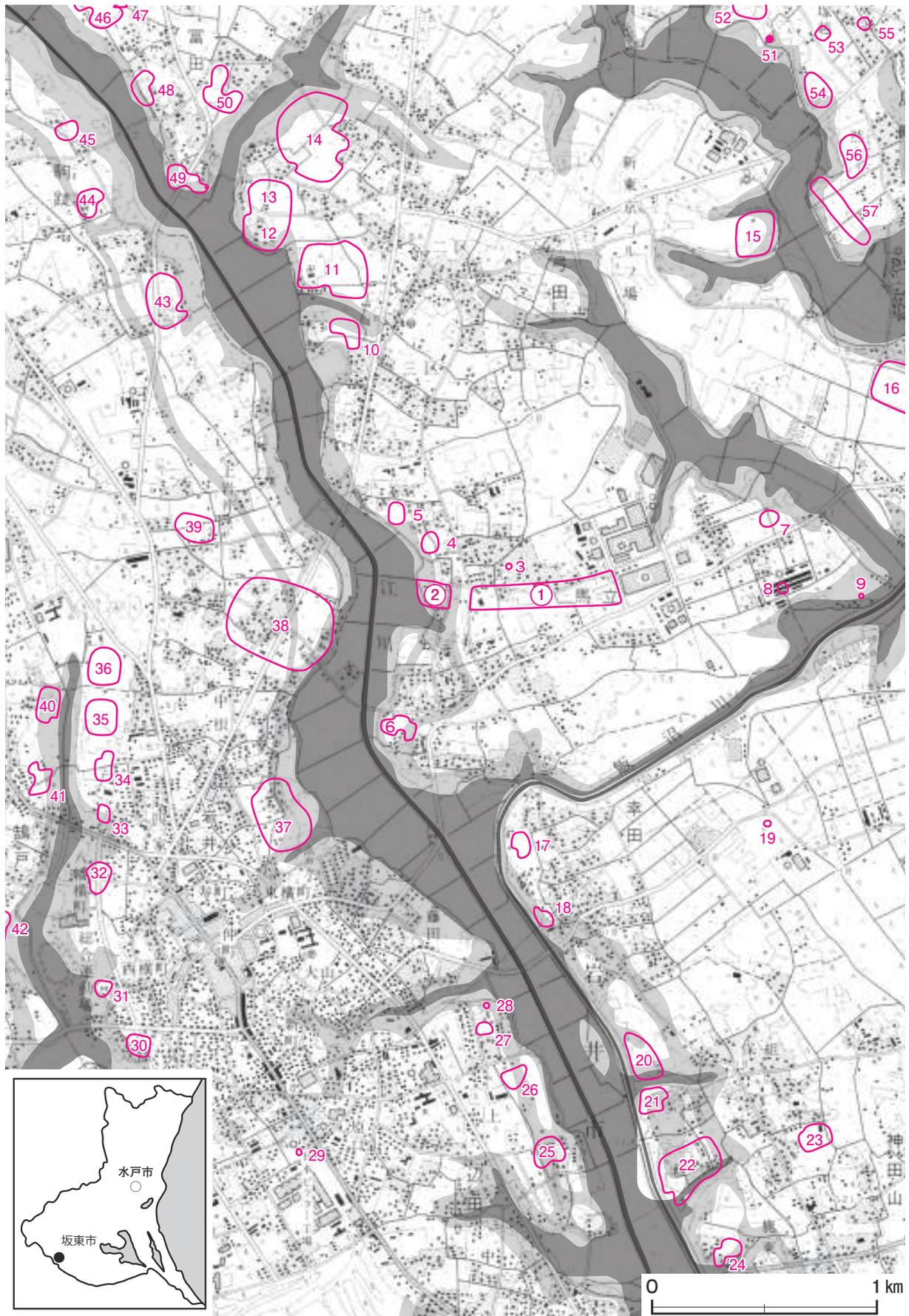
※文中の〈 〉内の番号は第1図及び表1の当該番号と同じである。

註

- 1) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 水海道』1985年12月
- 2) 岩井市史編さん委員会『岩井市史(通史編)』岩井市 2001年3月
- 3) 大森雅之「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第83集 1993年3月
- 4) 鶴見貞雄「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第88集 1994年3月
- 5) 小林和彦 宮崎剛「宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第359集 2012年3月
舟橋理 長洲正博 大島孝博「宮内遺跡2 長右衛門元屋敷遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第387集 2014年3月
- 6) 中村敬治「岩井幸田工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書 姥ヶ谷津遺跡・南開遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第89集 1994年3月
- 7) 三木ますみ「2.高山古墳 岩井市の遺跡」『岩井市史遺跡調査報告書』第1集 1992年3月
- 8) 註2に同じ

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・岩井市史編さん委員会『岩井市史(考古編)』岩井市 1999年3月



第1図 馬立原遺跡・馬立原西遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「宝珠花」「水海道」）

表1 馬立原遺跡・馬立原西遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	馬立原遺跡	○	○			○	○	○	30	入田台遺跡		○					
②	馬立原西遺跡				○	○	○	○	31	天王遺跡		○					
3	高山古墳				○				32	寮ノ下遺跡				○	○		
4	松葉遺跡		○		○				33	大日道遺跡		○					
5	西遺跡					○			34	西高野南遺跡		○		○	○		
6	遠西遺跡				○				35	西高野遺跡					○		
7	馬立中の台遺跡				○				36	西高野北遺跡				○	○		
8	馬立中の台古墳群				○				37	薬師原遺跡					○		
9	浅間塚古墳				○				38	宮内遺跡		○		○	○	○	○
10	新屋敷遺跡				○	○			39	長右衛門元屋敷遺跡		○			○		○
11	正光院脇遺跡				○	○			40	原遺跡		○					
12	榊山古墳				○				41	原高野遺跡		○		○	○		
13	談義所遺跡		○		○				42	堂前遺跡		○		○	○		
14	長丁遺跡		○						43	元屋敷遺跡				○			
15	弓田城址		○			○			44	香取東遺跡		○					
16	駒寄遺跡		○		○				45	角田東遺跡				○	○		
17	迎地遺跡					○			46	吉右衛門前遺跡		○			○		
18	宝光院遺跡		○						47	大日後塚							○
19	南開遺跡							○	48	宮ノ後遺跡					○		
20	弁天遺跡		○			○			49	打出遺跡		○			○		
21	宝珠山北遺跡		○			○			50	黒阿弥陀遺跡		○			○		
22	宝珠山南遺跡		○			○			51	大杉古墳				○			
23	堀畑遺跡		○			○			52	塚越西遺跡		○					
24	神田山堀之内遺跡					○			53	塚越東遺跡		○		○		○	○
25	堀込遺跡		○		○	○			54	塚越南遺跡		○		○		○	
26	天神山遺跡		○						55	塚越塚遺跡				○			
27	前畑遺跡				○				56	然山遺跡		○		○			
28	辺田北山古墳				○				57	然山西遺跡		○		○	○	○	
29	経塚古墳				○												



第2図 馬立原遺跡・馬立原西遺跡調査区設定図 (坂東市都市計画図2,500分の1より引用)

第3章 馬立原遺跡

第1節 調査の概要

馬立原遺跡は、坂東市の中央部を南流する江川左岸の標高16～18mの平坦な台地上に位置している。遺跡の範囲は、遺構の配置や周辺の地形などから、江川左岸の広範囲に広がると推測される。調査面積は、平成22・23年度が9,212㎡、平成25年度が5,024㎡である。

調査の結果、竪穴建物跡10棟（縄文時代1・奈良時代6・平安時代3）、掘立柱建物跡5棟（江戸時代）、陥し穴1基（縄文時代）、井戸跡5基（江戸時代）、粘土貼土坑1基（江戸時代）、土坑381基（平安時代1・江戸時代1・時期不明379）、炉跡1基（時期不明）、道路跡1条（江戸時代）、溝跡32条（江戸時代2・時期不明30）、柱穴列5条（時期不明）、ピット群1か所（時期不明）、石器集中地点1か所（旧石器時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に25箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・甕）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・長頸瓶・鉢・甕・甑）、土師質土器（小皿・焙烙）、陶器（碗・皿・鉢・播鉢・香炉）、磁器（碗）、土製品（土玉・管状土錘・泥面子・紡錘車・支脚）、石器（ナイフ形石器・尖頭器・錐・鏃・磨石・敲石・砥石・台石・紡錘車）、銅製品（煙管・弥勒仏立像）、鉄製品（手鎌・鏝）、銭貨（寛永通寶）、剥片などである。

第2節 基本層序

今回の調査区は、平坦な台地上に位置している。テストピットを馬立原遺跡の調査区東部（D11j 1）に1か所設定して、基本土層の観察を行った。なお、安全上、土層観察は表土下2mまでとした。

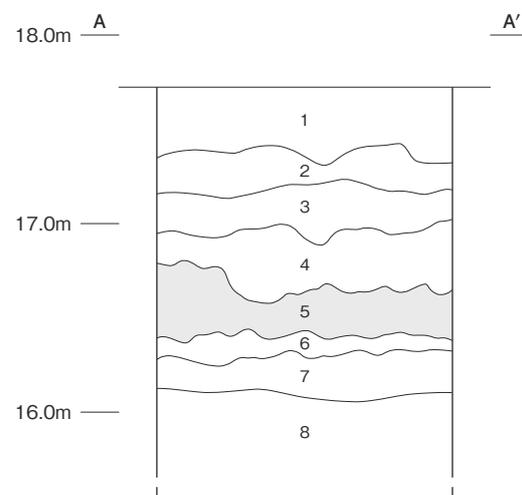
土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性・締まりなどから第1～8層に細分した。

第1層は、極暗褐色土を呈する表土層である。ローム粒子を微量、炭化粒子を微量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は38～44cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層である。炭化粒子を微量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は10～26cmである。

第3層は、明褐色を呈するソフトロームからハードロームへの漸移層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は20～34cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は18～40cmである。



第3図 基本土層図

第5層は、暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は18～40cmである。
第2黒色帯と考えられる。

第6層は、にぶい褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は10～18cmである。

第7層は、橙色を呈するハードローム層である。黒色粒子を少量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は18～38cmである。

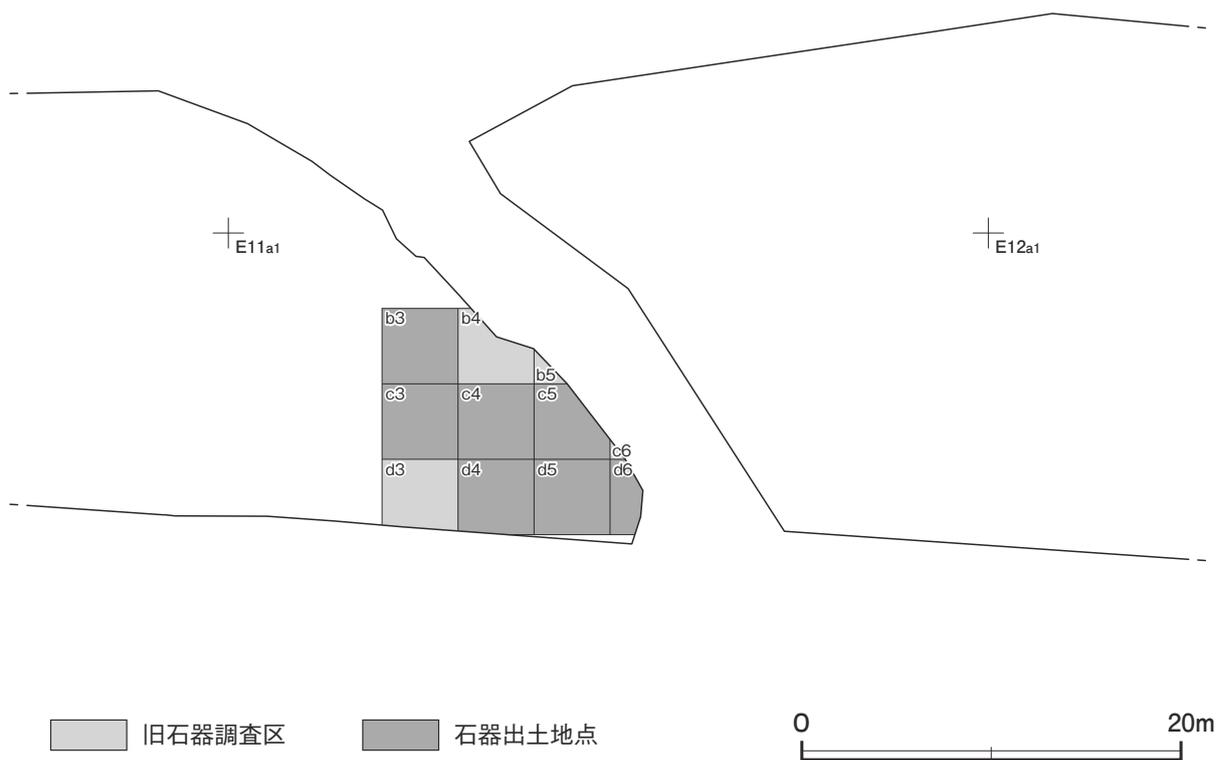
第8層は、黄褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子を少量含み、粘性は強く、締まりは普通である。
下部が未掘のため、層厚は不明である。

なお、遺構は第2層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺構と遺物

調査区際のトレンチ調査を行った際、旧石器時代の石器が出土したため、石器集中地点の可能性のあるE 11b3～E 11b5・E 11c3～E 11c6・E 11d3～E 11d6区の11グリッドに調査区を設定し、ローム層の掘削を行った。調査区は南北12m、東西16mで、調査面積は192㎡である。掘削の結果、石器集中地点1か所を確認し、E 11c4・E 11c5区を中心に頁岩を主体とした剥片が出土した。以下、第1号石器集中地点とし、出土した剥片について記述する。なお、遺物は出土剥片すべてに通し番号を付し、実測図を掲載した剥片は備考欄にQ番号を記載した。



第4図 旧石器時代調査区設定図

第1号石器集中地点 (第5・6図)

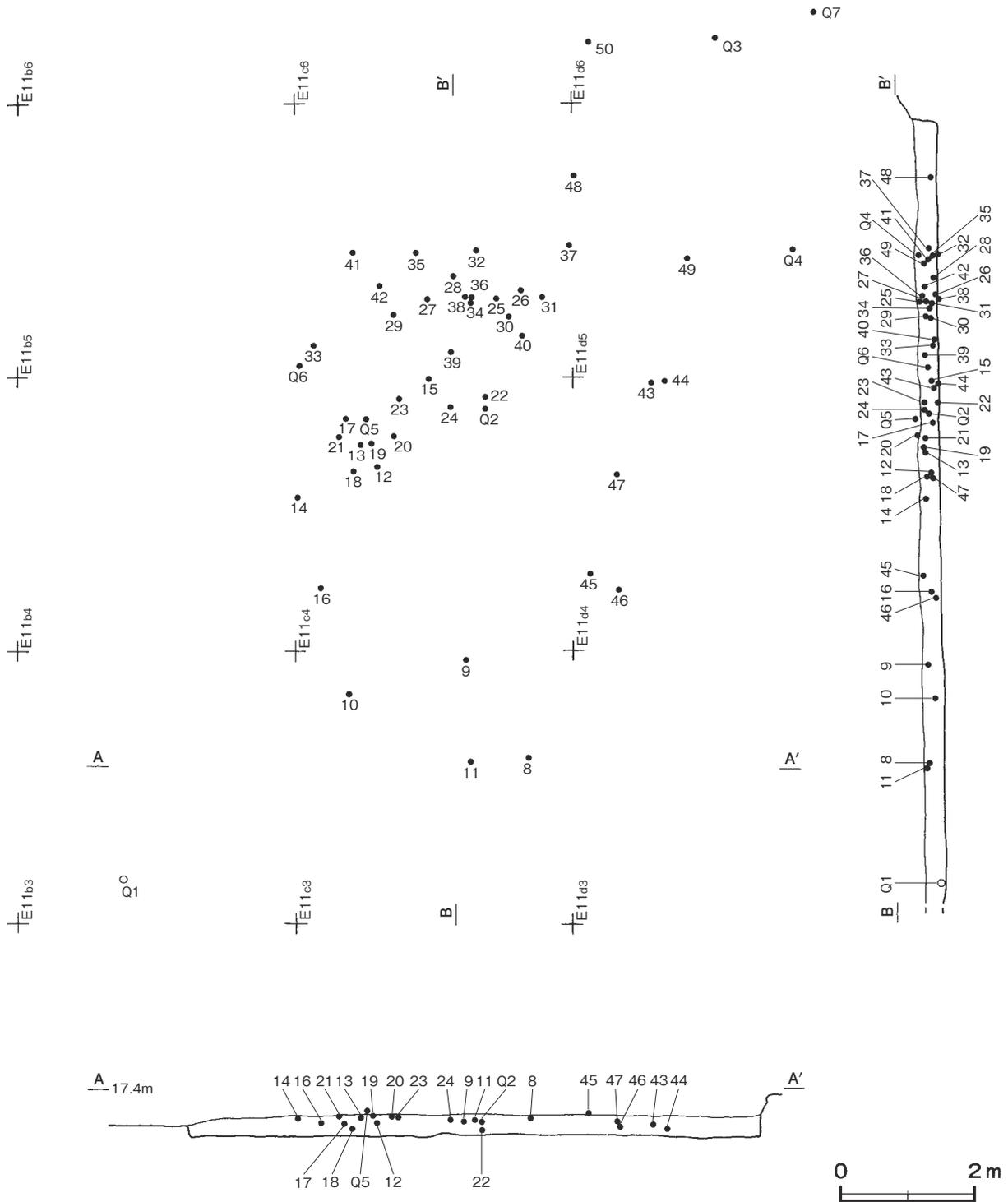
位置 調査区中央部のE 11b3・E 11c3～E 11c5・E 11d4～E 11d6区、標高17mほどの台地平坦部に位置している。

遺物出土状況 剥片50点(流紋岩1, 頁岩49)が、基本層序の第2・3層(ソフトローム層)から散在して出土している。Q1～Q7は剥離後に廃棄されたものとみられる。

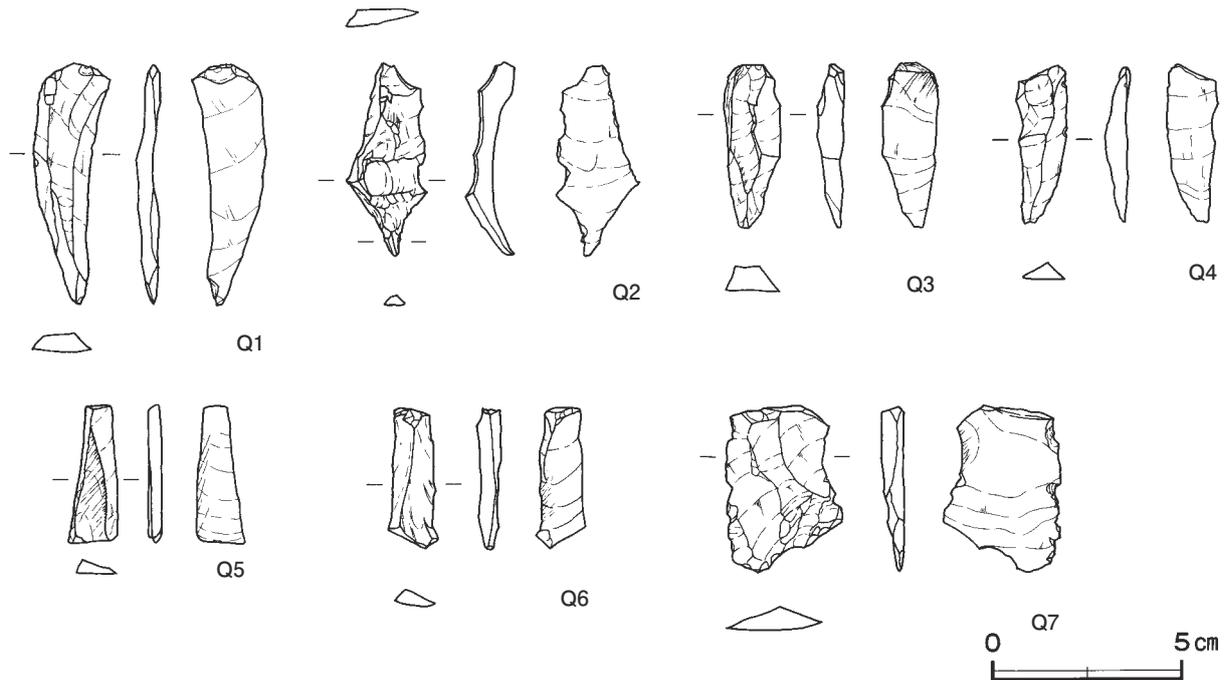
所見 時期は、出土遺物と出土層位から後期旧石器時代に比定できる。明瞭な石器は出土していないが、本地点は小規模な石器製作跡と考えられる。



- 流紋岩
- 頁岩



第5図 第1号石器集中地点石材別分布図



第6図 第1号石器集中地点出土遺物実測図

第1号石器集中地点出土遺物観察表（第6図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置	標高 (m)	備考
1	縦長剥片	6.4	2.0	0.6	5.0	流紋岩	打面欠失	E 11b3	16.748	Q 1 PL18
2	縦長剥片	5.1	2.1	1.3	3.8	頁岩	打面欠失	E 11c4	16.928	Q 2 PL18
3	縦長剥片	4.3	1.5	0.7	3.6	頁岩	打面調整あり	E 11d6	16.976	Q 3 PL18
4	縦長剥片	4.2	1.3	0.7	2.1	頁岩	打面調整あり	E 11d5	17.043	Q 4 PL18
5	縦長剥片	3.7	1.3	0.4	1.7	頁岩	打面欠失	E 11c4	17.062	Q 5 PL18
6	縦長剥片	3.7	1.3	0.6	2.2	頁岩	打面欠失	E 11c5	16.926	Q 6 PL18
7	剥片	4.4	3.1	0.6	7.0	頁岩	打面調整あり	E 11d6	17.108	Q 7 PL18
8	剥片	2.8	1.3	0.6	1.5	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c3	16.939	
9	剥片	2.6	1.9	0.3	1.0	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c3	16.926	
10	剥片	2.0	1.3	0.4	0.8	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c3	16.822	
11	剥片	1.5	1.1	0.2	0.4	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c3	16.947	
12	剥片	4.2	1.6	0.5	2.5	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.892	
13	剥片	3.8	3.5	0.5	3.8	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.955	
14	剥片	3.5	1.8	0.6	2.1	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.961	
15	剥片	3.3	3.0	0.6	4.0	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.827	
16	剥片	3.0	1.7	0.5	1.7	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.862	
17	剥片	2.7	1.2	0.4	0.7	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.846	
18	剥片	2.5	1.5	0.2	0.5	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.780	
19	剥片	2.4	0.8	0.5	0.8	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.990	
20	剥片	2.3	1.5	0.4	1.3	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	17.021	
21	剥片	2.2	0.9	0.6	0.7	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.956	
22	剥片	2.1	1.3	0.4	0.9	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.756	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴	出土位置	標高 (m)	備考
23	剥片	2.0	1.5	0.5	1.1	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.978	
24	剥片	1.6	0.5	0.2	0.1	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c4	16.922	
25	剥片	3.1	1.5	0.4	1.8	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.986	
26	剥片	3.0	1.8	0.3	0.7	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.781	
27	剥片	2.9	2.8	0.8	4.8	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.915	
28	剥片	2.8	1.2	0.7	1.1	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.832	
29	剥片	2.6	1.5	0.3	0.9	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.905	
30	剥片	2.4	2.1	0.5	1.5	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.869	
31	剥片	2.3	1.4	0.5	0.8	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.854	
32	剥片	2.3	1.1	0.3	1.1	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.796	
33	剥片	2.3	1.2	0.3	0.7	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.848	
34	剥片	2.3	0.7	0.2	0.3	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.895	
35	剥片	2.2	1.9	0.5	1.8	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.852	
36	剥片	2.1	1.2	0.3	0.4	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.961	
37	剥片	1.8	1.3	0.3	0.5	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.870	
38	剥片	1.8	1.2	0.4	0.6	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.751	
39	剥片	1.7	1.6	0.3	0.5	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.923	
40	剥片	1.7	1.5	0.4	0.4	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.844	
41	剥片	1.5	0.5	0.4	0.3	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.940	
42	剥片	1.4	1.0	0.2	0.1	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11c5	16.950	
43	剥片	3.0	1.5	0.5	1.3	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11d4	16.820	
44	剥片	2.5	2.1	0.8	2.3	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11d4	16.795	
45	剥片	2.2	1.9	0.5	1.2	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11d4	17.028	
46	剥片	1.9	1.6	0.5	1.1	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11d4	16.801	
47	剥片	1.9	0.5	0.3	0.2	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11d4	16.901	
48	剥片	2.1	1.2	0.4	0.6	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11d5	16.880	
49	剥片	1.9	1.2	0.3	0.4	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11d5	16.970	
50	剥片	2.4	0.9	0.4	0.5	頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 11d6	16.897	

2 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡1棟、陥し穴1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡 (第7・8図)

位置 調査区中央部のD 8j7区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径3.87m、短径3.25mの楕円形で、長径方向はN-68°-Wである。壁は高さ18~22cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は認められない。

炉 中央部に位置している。長径88cm、短径70cmの楕円形で、深さ6cmの地床炉である。炉床は床面から皿状に浅く掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量

ピット 2か所。P1・P2は深さ44cm・20cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P1・P2の覆土は、土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから、建物が埋没する段階で既に柱は抜き取られていたとみられる。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

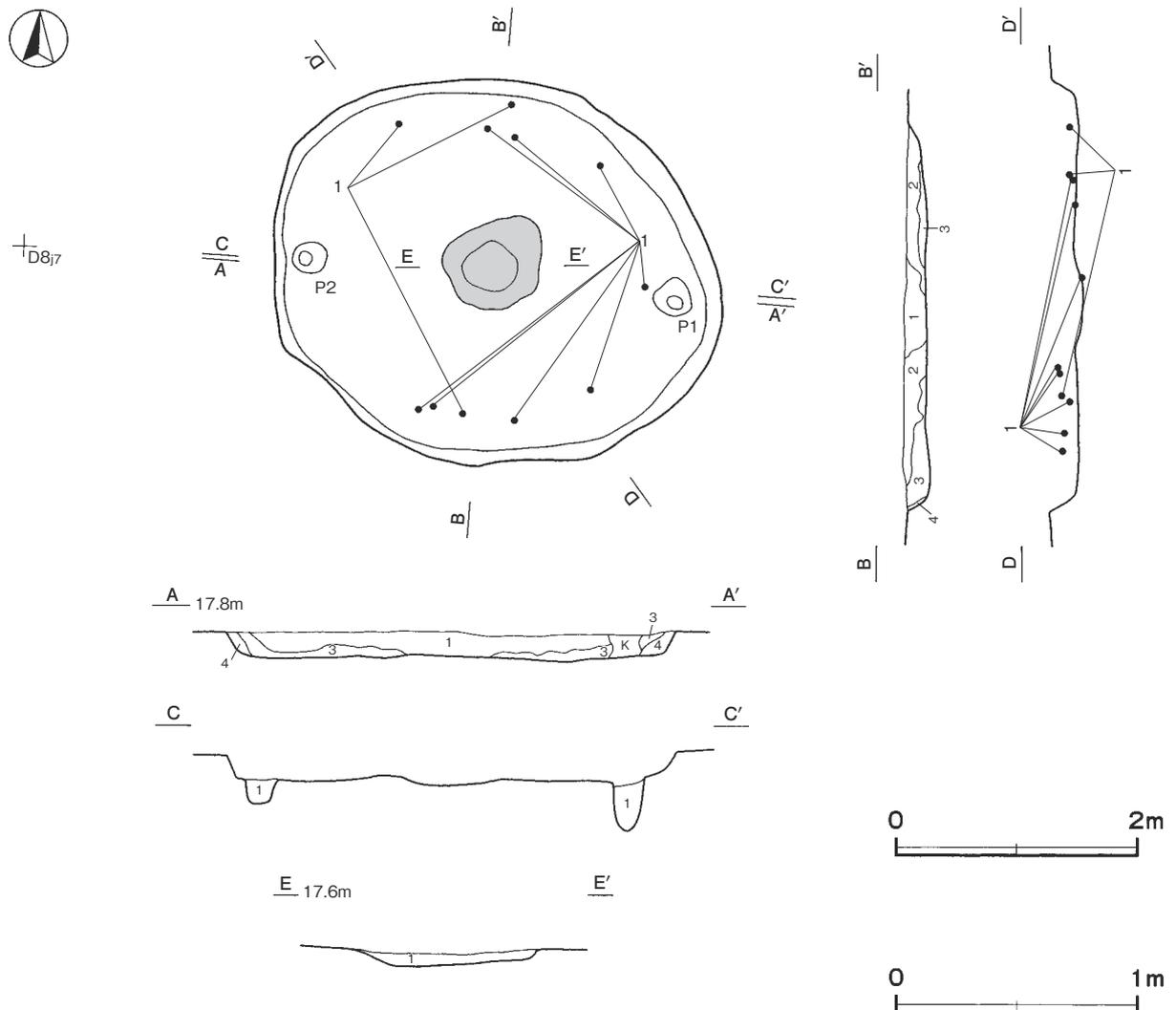
覆土 4層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

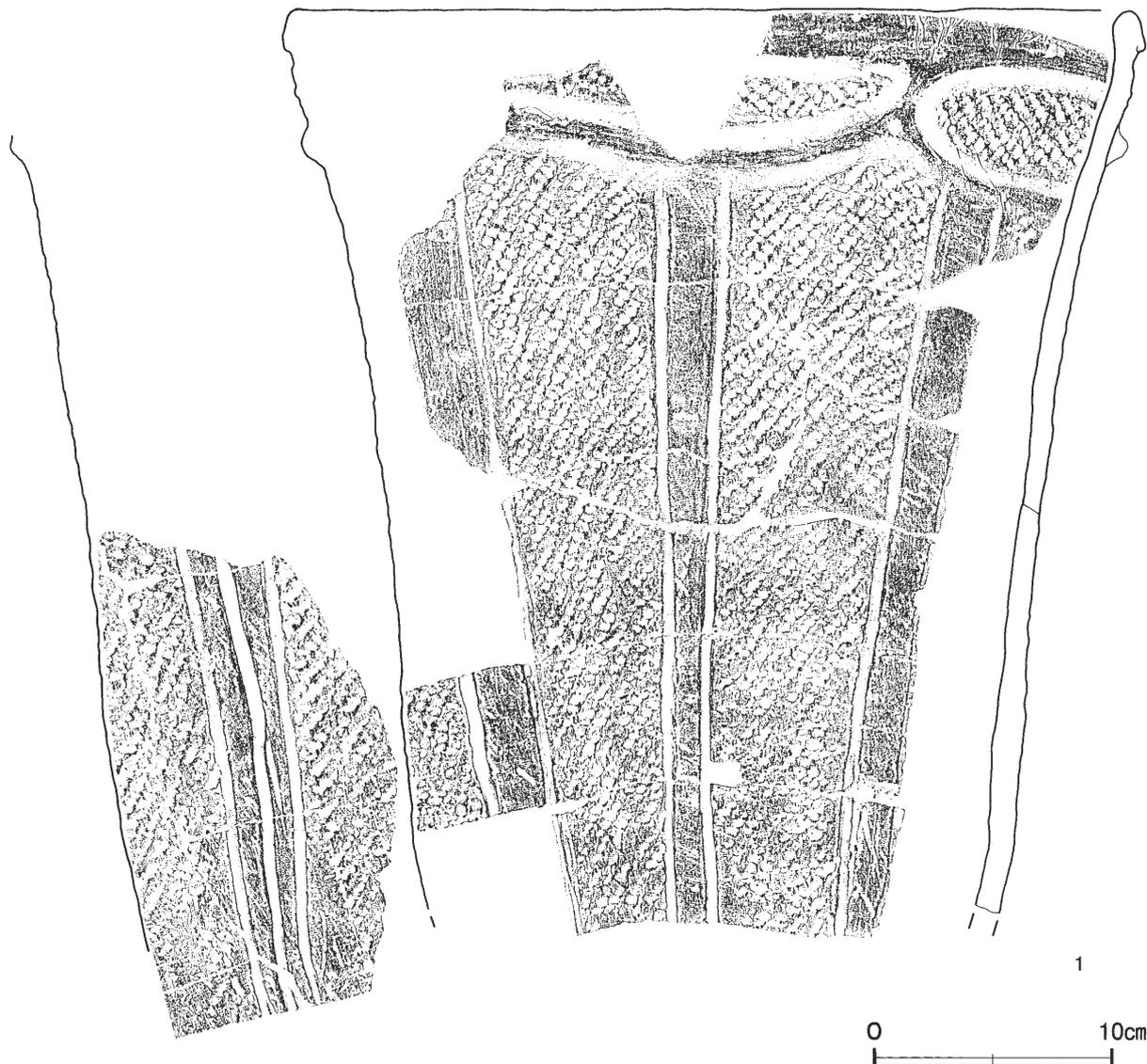
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片17点（深鉢）が北壁と南壁周辺の覆土中層から下層にかけて出土している。土器はすべて破片であるが、形や文様などの特徴から同一個体と考えられる。1は分散して出土した破片がそれぞれ接合していることから、建物が埋没する過程で投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第7図 第1号竪穴建物跡実測図



第8図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[35.0]	(38.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	隆帯による楕円形の口縁部区画内は単節縄文LRを縦位回転で施文。胴部は単節縄文LRを横位回転で施文後、2本1組及び3本1組の沈線を垂下させ、沈線間を磨り消し	覆土中層～下層	20% PL12

(2) 陥し穴

第1号陥し穴（第9図）

位置 調査区中央部のD7h4区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

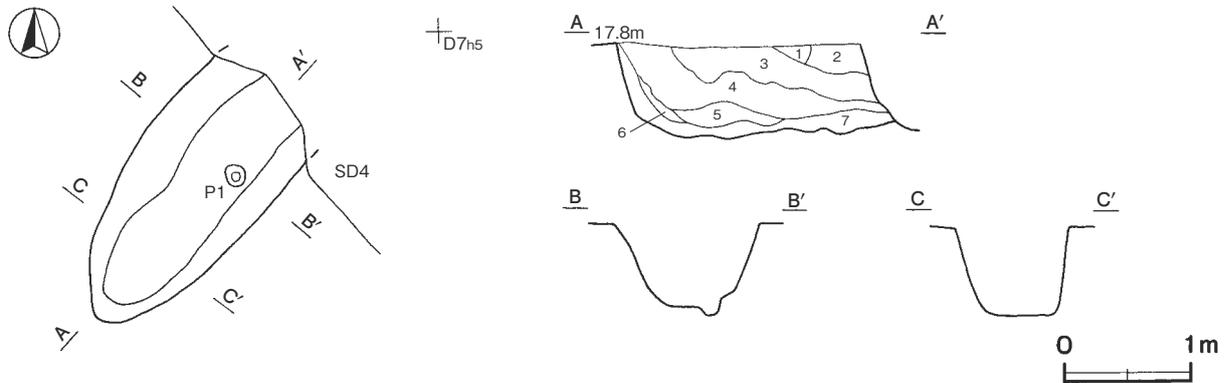
規模と形状 北東部が第4号溝に掘り込まれ、北西・南東径は1.14mで、北東・南西径は2.26mしか確認できなかった。平面形は楕円形で、北東・南西径方向はN-41°-Eと推測できる。深さは65cmで、底面は幅62cmほどである。短径方向の断面は逆台形で、壁は緩斜している。底面で径16cmのピット1か所を確認した。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | | |

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、規模と形状から縄文時代と考えられる。



第9図 第1号陥し穴実測図

3 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡9棟、土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第2号竪穴建物跡（第10・11図）

位置 調査区西部のD2f3区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第130号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.38m、短軸4.10mの方形で、主軸方向はN-38°-Eである。壁は高さ15～37cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、ほぼ全体が踏み固められている。東壁を除く壁下には壁溝が巡っている。北部の床面に火熱を受けて赤変硬化した範囲を1か所確認した。

竈 北東コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで144cm、燃焼部幅は48cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山に粘土粒子を主体とした第10層を積み上げて構築されている。火床部は、床面を18cmほど掘りくぼめた部分に第6～9層を埋土して構築されている。火床面は第6・7層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面上に焼土ブロックや粘土粒子を含む第1～5層が堆積していることから、天井部は廃絶後に崩落したとみられる。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、火床部から外傾している。

竈土層解説

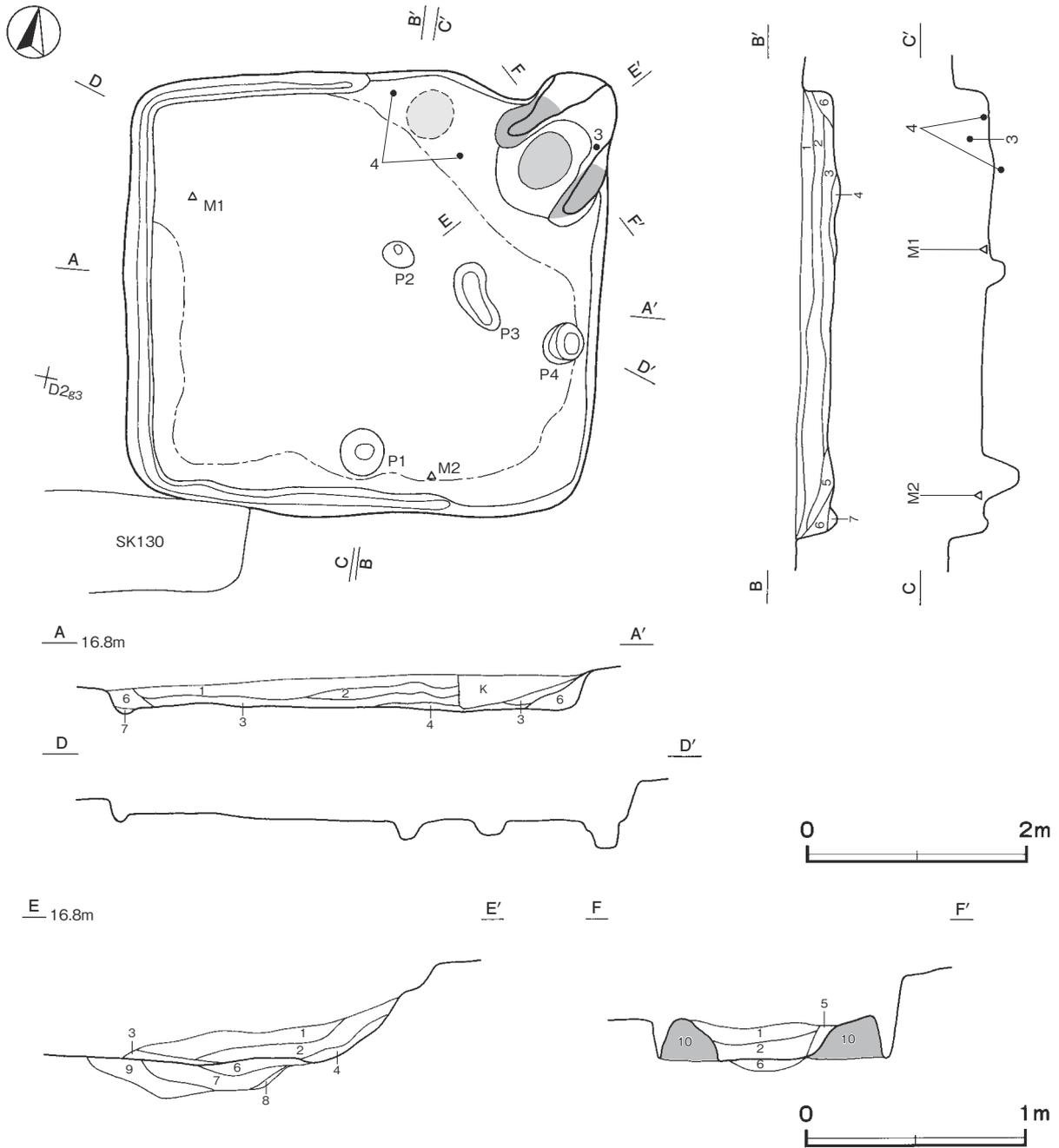
- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 粘土粒子・細砂微量 | 5 褐色 | 粘土粒子少量, 細砂少量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子少量, 粘土粒子・細砂微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| | | 9 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 10 灰褐色 | 粘土粒子・細砂中量, ローム粒子・焼土粒子微量 |

ピット 4か所。主柱穴は認められない。P1は深さ36cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P2～P4は深さ13～25cmで、性格不明である。

覆土 7層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

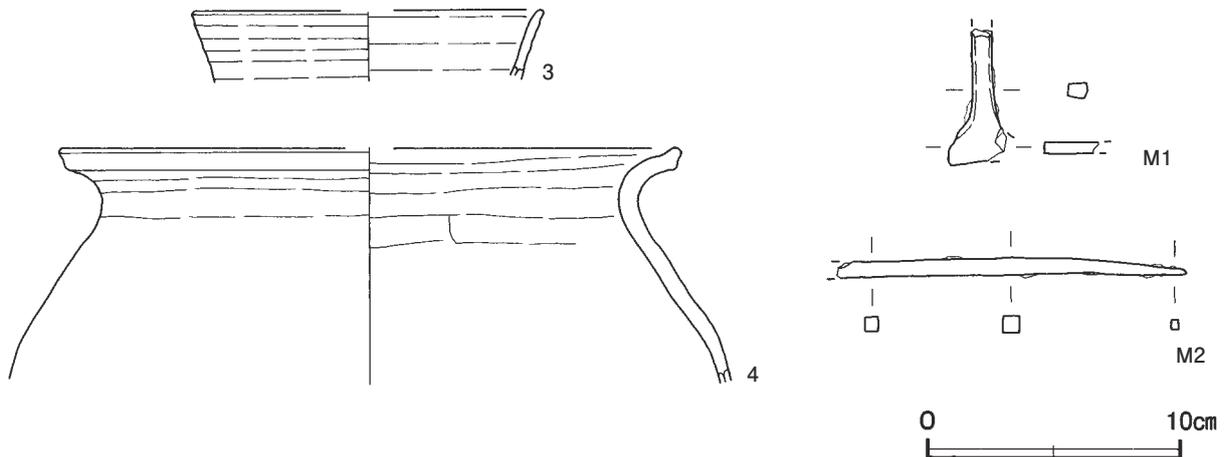
- | | | | |
|-------|----------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |



第10図 第2号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 75 点 (甕), 須恵器片 18 点 (坏 17, 高台付坏カ 1), 土製品 2 点 (支脚), 鉄製品 3 点 (鑿 1, 不明 2), 鉄滓 2 点 (21.3 g) のほか, 古墳時代の土師器片 20 点 (坏), 陶器片 4 点 (碗), 磁器片 3 点 (碗), 粘土塊 2 点が, 全域の覆土上層から床面にかけて出土している。遺物は壁際の覆土中層と床面から出土した破片が多いことから, 建物が埋没する過程で周囲から流れ込んだものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。



第 11 図 第 2 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 11 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	須恵器	高台付坏カ	[13.8]	(2.7)	-	長石・石英・細礫	褐灰	良好	外・内面ロクロナデ	覆土中層	5% 産地不明
4	土師器	甕	[24.4]	(9.4)	-	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ	床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	鑿	(5.5)	(2.4)	0.5~0.7	(17.2)	鉄	両端部欠損 断面四角形	床面	
M 2	不明	(13.9)	(0.90)	0.3~0.7	(30.8)	鉄	左端部欠損 断面四角形	床面	PL19

第 3 号竪穴建物跡 (第 12・13 図)

位置 調査区西部の D 2b7 区, 標高 17 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため, 東西軸は 4.97 m で, 南北軸は 3.97 m しか確認できなかった。平面形は方形で, 主軸方向は N-2°-E と推測できる。壁は高さ 12~27cm で, 直立している。

床 平坦で, 硬化面は認められない。確認できた範囲の壁下には, 壁溝が巡っている。

ピット 4 か所。主柱穴は認められない。P 1 は深さ 28cm で, 南壁際の中央部に位置していることから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。P 2~P 4 は深さ 10~26cm で, 性格不明である。

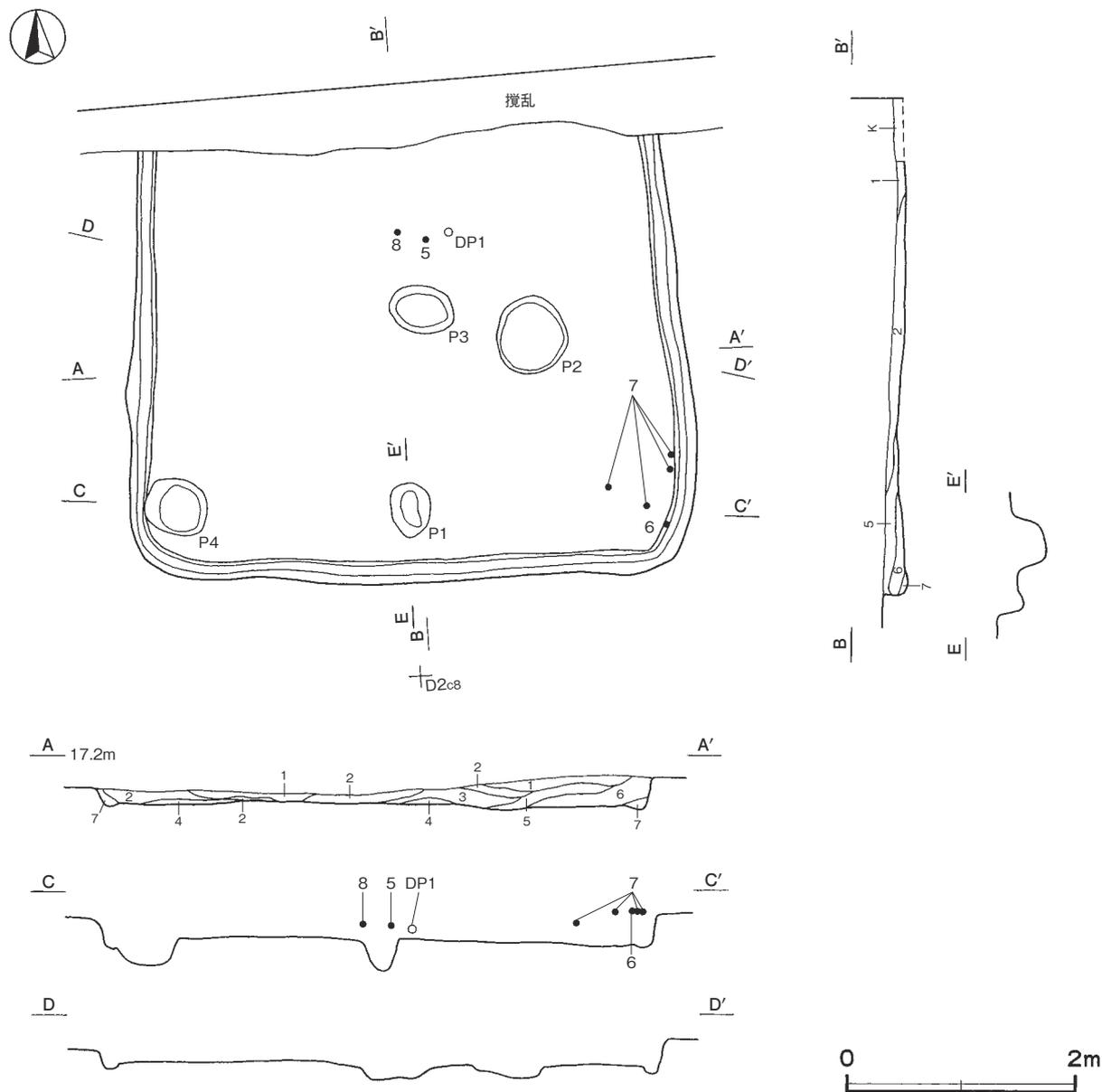
覆土 7 層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------------|
| 1 明褐色 | ロームブロック中量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片 119 点（坏 2，鉢 1，甕 116），須恵器片 24 点（坏 22，蓋 1，甕 1），土製品 1 点（支脚），鉄滓 3 点（157.0 g）が，北部と南東部を中心に全域の覆土上層から下層にかけて出土している。遺物は覆土上層から下層にかけて出土した破片であることから，埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

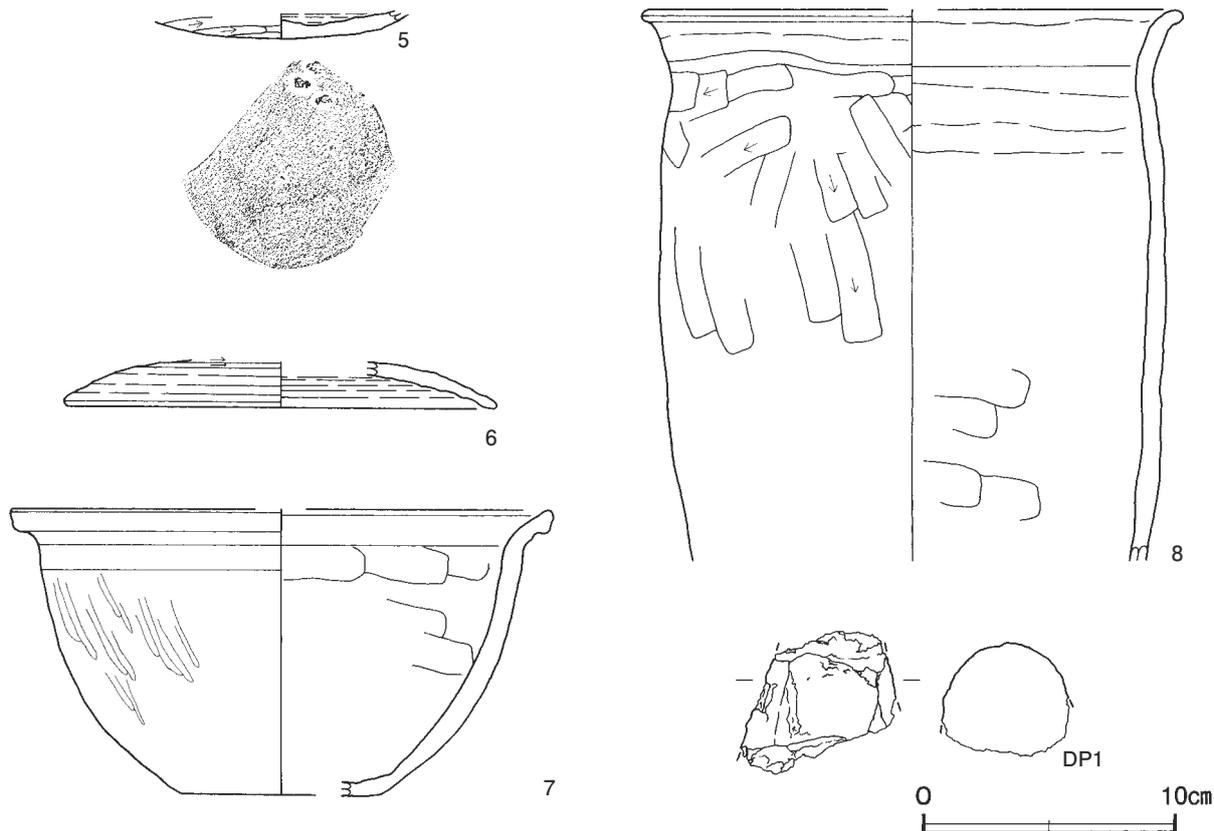
所見 時期は，出土遺物から 8 世紀前葉と考えられる。



第 12 図 第 3 号竪穴建物跡実測図

第 3 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 13 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	須恵器	坏	-	(10)	7.5	長石・石英・白色粒子	灰白	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土中層	10% 産地不明
6	須恵器	蓋	[17.0]	(18)	-	長石・石英	黄灰	良好	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	10% 産地不明



第13図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	土師器	鉢	[21.2]	11.4	[7.8]	長石・石英・雲母	黄橙	普通	体部外面縦位のヘラ磨き 体部内面横位のヘラナデ	覆土上層	40% PL15
8	土師器	甕	[21.0]	(22.0)	-	長石・石英・雲母・細礫	黄橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ 体部外面上半横位及び縦位のヘラ削り	覆土中層	40% PL15

番号	器種	長さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	支脚	(5.7)	(4.5)	(7.0)	(102.2)	長石	明赤褐	摩耗のため調整不明瞭	覆土下層	

第4号竪穴建物跡（第14～18図）

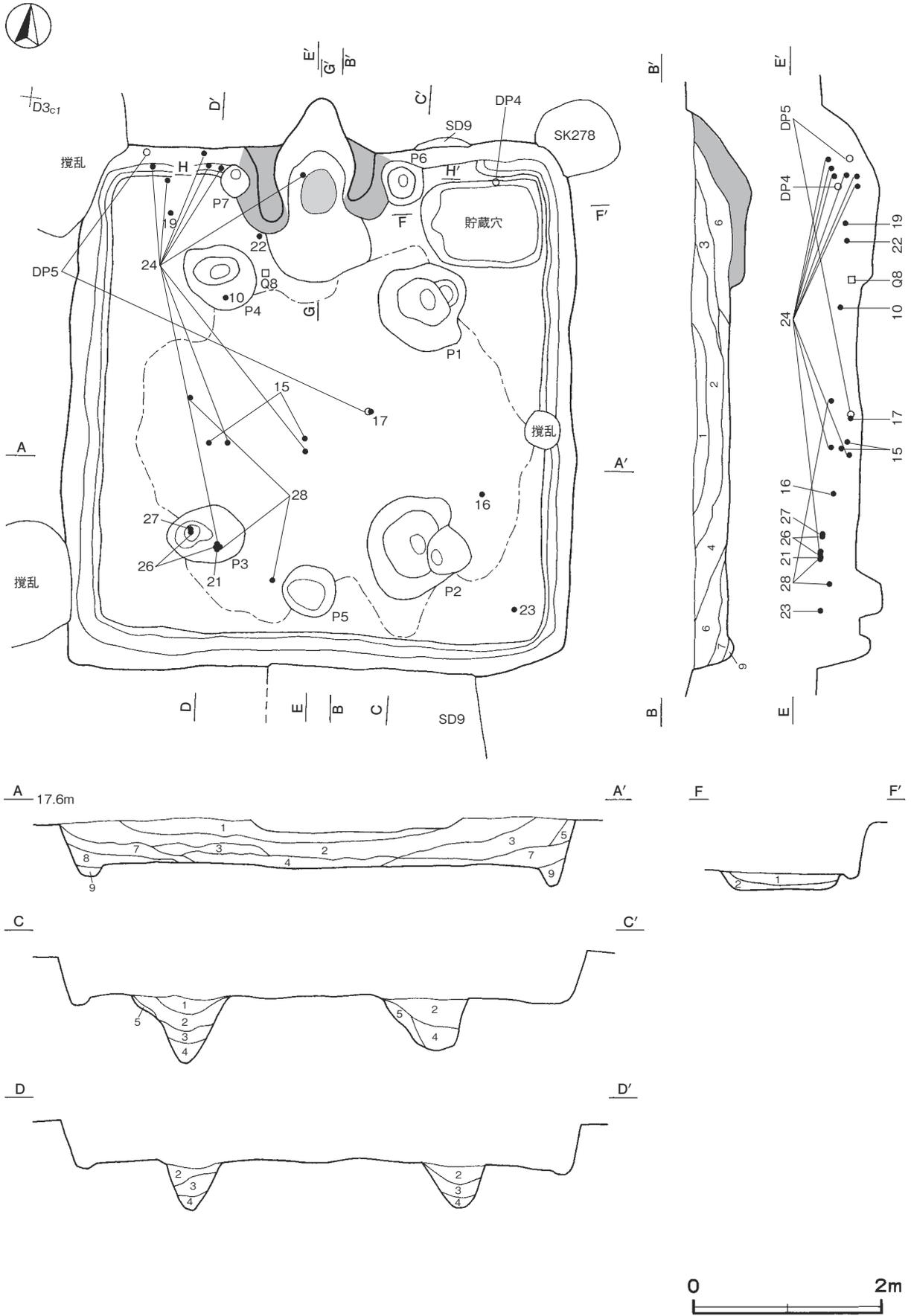
位置 調査区西部のD 3c1区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第278号土坑、第9号溝に掘り込まれている。

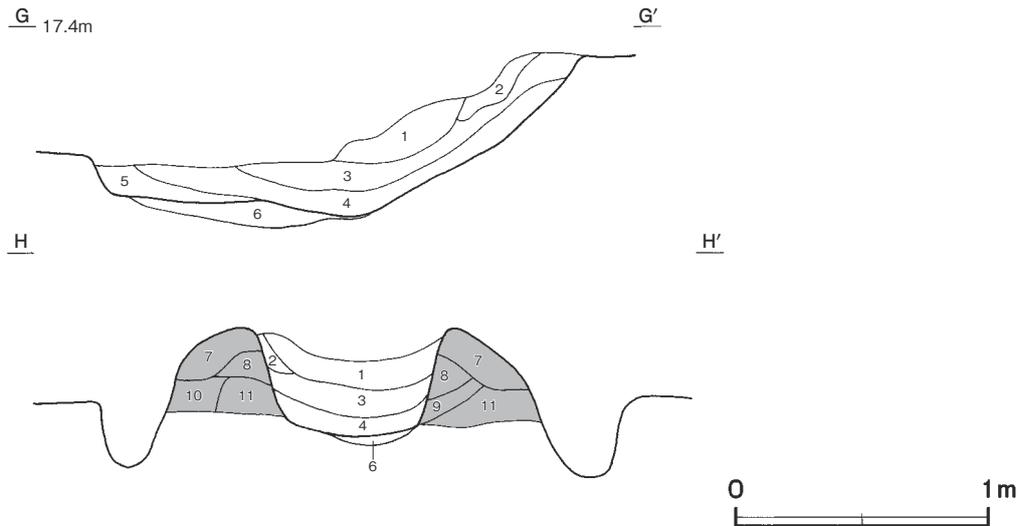
規模と形状 長軸5.55m、短軸5.30mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁は高さ39～44cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。竈袖部の東側を除いて、壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで208cm、燃焼部幅は52cmである。袖部は、床面とほぼ同じ高さの地山に粘土粒子を主体とした第7～11層を積み上げて構築されている。火床部は、床面から深さ24cmほど掘りくぼめられている。火床面は第6層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面上に焼土ブロックを含む第1～5層が堆積していることから、天井部は廃絶後に崩落したとみられる。煙道部は壁外に52cm掘り込まれ、火床部から外傾している。



第 14 图 第 4 号竖穴建物跡实测图 (1)



第15図 第4号竪穴建物跡実測図(2)

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化物微量 | 8 灰褐色 粘土粒子多量, 焼土ブロック中量, 細砂微量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 9 褐色 焼土粒子少量, 粘土粒子・細砂微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化物微量 | 10 極暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土粒子・細砂微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 11 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土粒子・細砂微量 |
| 5 暗褐色 焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量 | |
| 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | |
| 7 灰褐色 粘土粒子中量, 細砂少量, 焼土粒子微量 | |

ピット 7か所。P1～P4は深さ44～72cmで、規模と配置から支柱穴である。P1～P4の覆土は、土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから、建物が埋没する前に柱は抜き取られていたとみられる。P5は深さ24cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ24cm・28cmで、規模と配置から竈に伴うピットと考えられる。

柱穴土層解説(各柱穴共通)

- | | |
|----------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 3 極暗褐色 ローム粒子少量 | |

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長軸132cm, 短軸92cmの隅丸長方形で、深さは16cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 2 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
|-------------------------|-----------------------------|

覆土 9層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

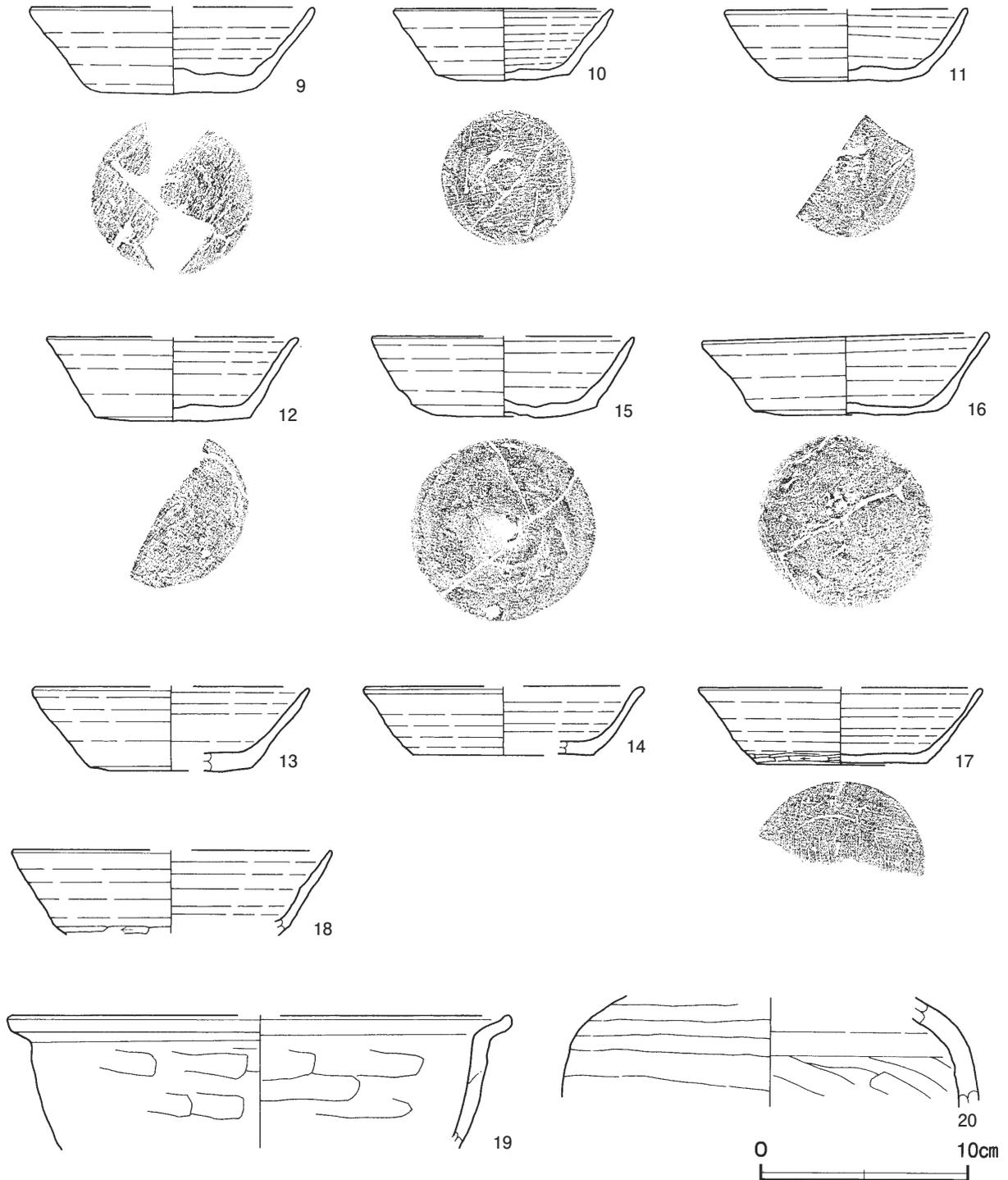
土層解説

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 9 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 5 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | |

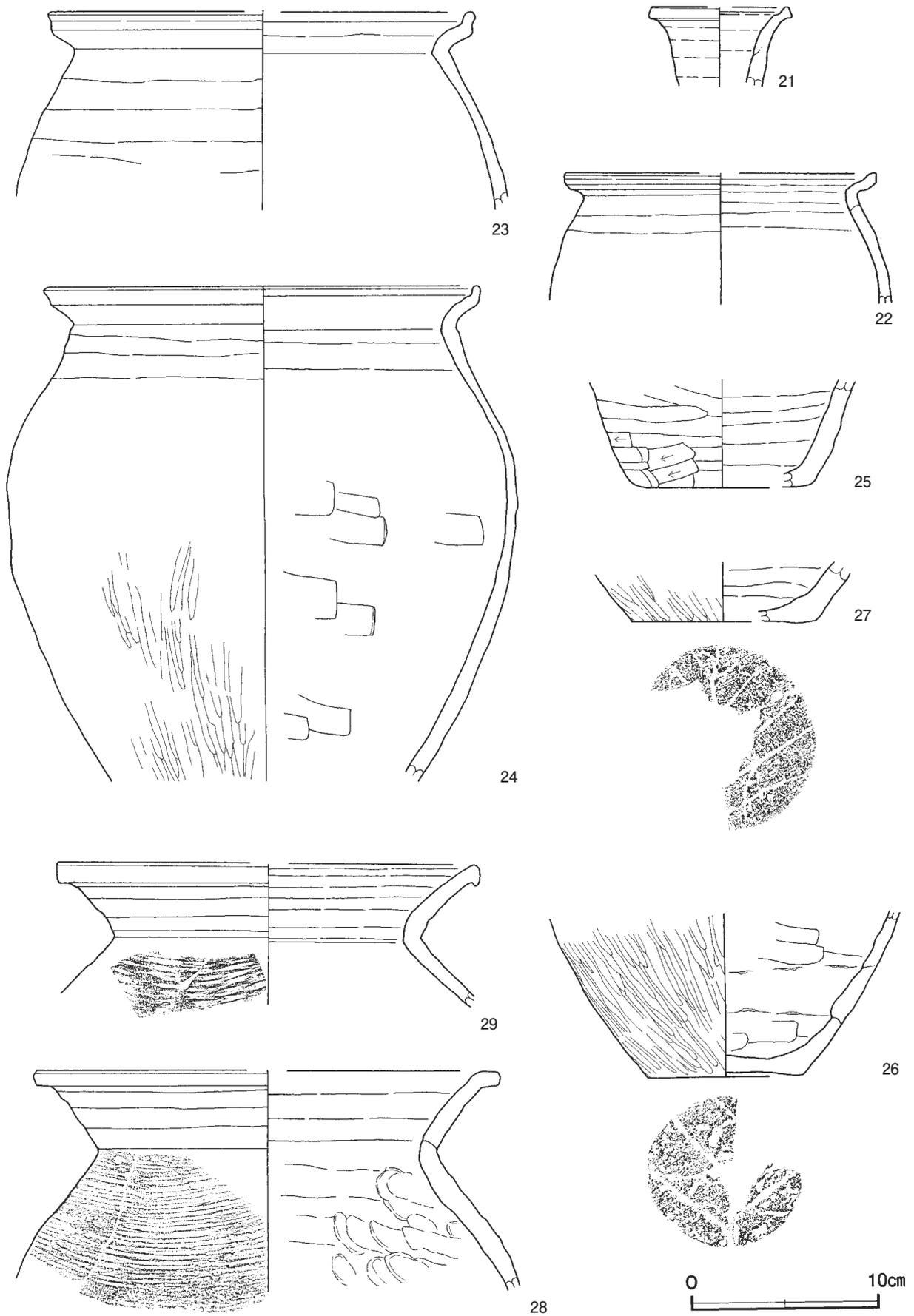
遺物出土状況 土師器片555点(甕), 須恵器片303点(坏259, 高台付坏4, 長頸瓶10, 鉢1, 甕29), 土製品20点(土玉1, 支脚19), 石器2点(磨石, 砥石), 鉄製品11点(鏃10, 不明1), 鉄滓21点(1581.5g)

のほか、古墳時代の土師器片9点（坏5，高坏4），剥片3点が，北部と南西部を中心に全域の覆土上層から下層にかけて出土している。遺物は主に覆土中から出土した破片で，出土位置が北部と南西部にまとまっていることから，建物が埋没する過程で投棄されたものとみられる。24・DP 5は広域に分散して出土した破片が接合していることから，建物が埋没する過程で破碎して投棄されたものとみられる。

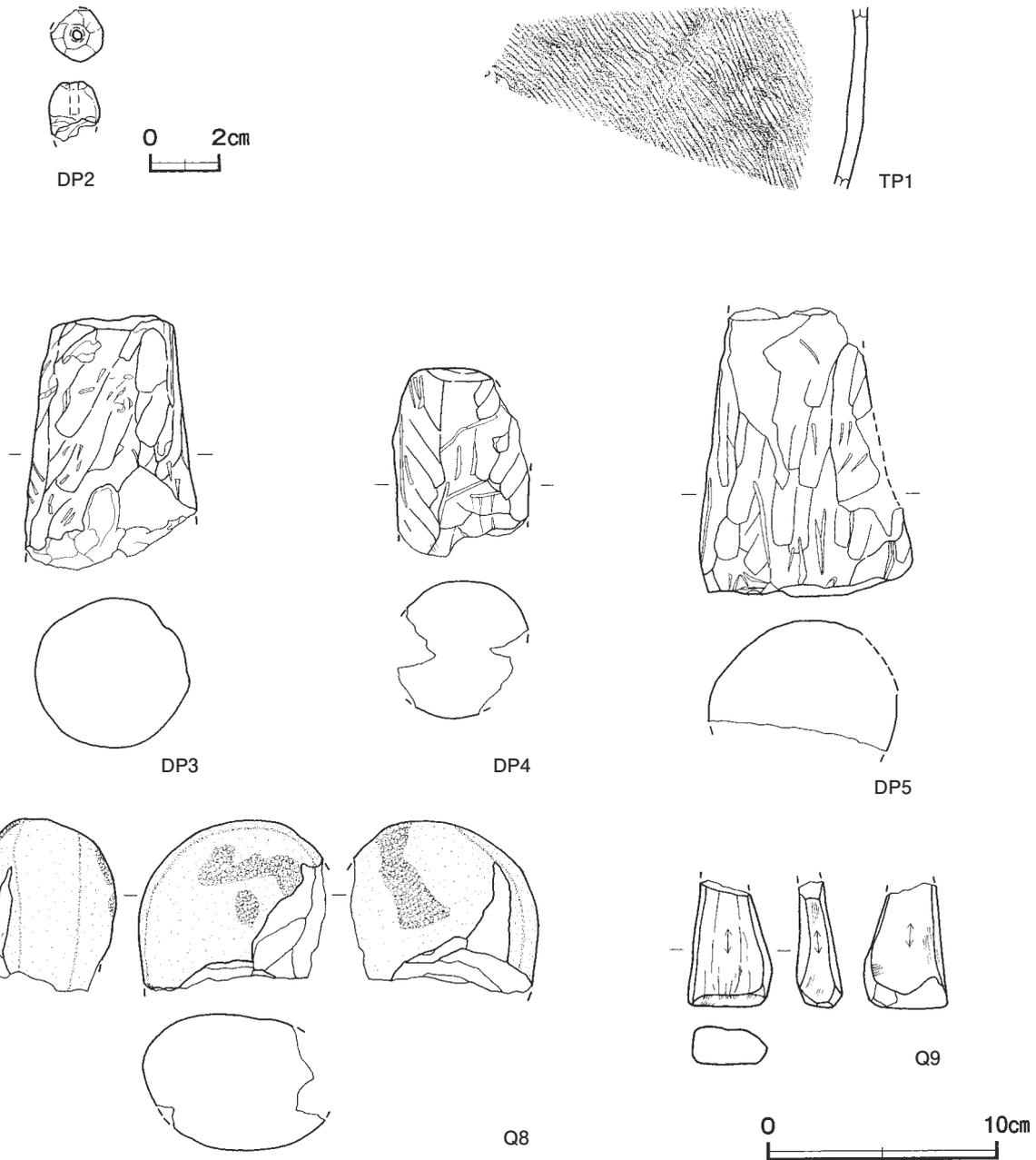
所見 時期は，出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第16図 第4号竖穴建物跡出土遺物実測図（1）



第 17 図 第 4 号 竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)



第 18 図 第 4 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (3)

第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 16 ~ 18 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	須恵器	坏	[13.6]	4.2	7.8	長石・石英	暗灰黄	普通	底部多方向のヘラナデ	覆土中	50% PL12 産地不明
10	須恵器	坏	10.6	3.4	6.2	長石・石英・ 白色粒子	灰黄	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土中層	80% PL12 産地不明
11	須恵器	坏	[11.7]	3.5	[6.8]	長石・石英・ 白色粒子	灰黄	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土中	40% 産地不明
12	須恵器	坏	[12.0]	4.1	[7.4]	長石・石英・ 白色粒子	灰白	普通	底部多方向のヘラナデ	覆土中	40% 産地不明
13	須恵器	坏	[13.2]	4.1	[7.4]	長石・石英・ 白色粒子	灰黄	普通	底部多方向のヘラナデ	覆土中	20% 産地不明
14	須恵器	坏	[13.2]	3.3	[8.6]	長石・石英	灰	良好	底部ヘラ削り	覆土中	15% 産地不明
15	須恵器	坏	[12.6]	4.9	9.0	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部ヘラナデ	覆土中層	70% PL12 産地不明

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
16	須恵器	坏	138	4.0	8.2	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	底部へら削り	覆土中層	70% PL12 新治窯産
17	須恵器	坏	[13.7]	3.7	[8.2]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちへら削り 底部多方向のへら削り	覆土下層	50% PL13 新治窯産
18	須恵器	坏	[15.2]	(4.1)	-	長石・石英・雲母	黄橙	普通	底部下端手持ちへら削り	覆土中	30% 新治窯産
19	土師器	鉢	[23.8]	(6.5)	-	長石・石英・雲母・細礫	橙	普通	体部外・内面横位のへらナデ	覆土中層	5%
20	須恵器	長頸瓶カ	-	(5.3)	-	長石・石英・白色粒子	灰黄	普通	肩部外面横位のへらナデ	覆土中	10% 産地不明
21	須恵器	長頸瓶カ	[7.2]	(4.3)	-	長石・石英・白色粒子	灰黄	普通	外・内面口ロナデ	覆土上層	5% PL14 産地不明
22	土師器	甕	[16.6]	(7.1)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横位のへらナデ	覆土中層	5%
23	土師器	甕	[22.6]	(10.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横位のへらナデ	覆土上層	5%
24	土師器	甕	23.0	(26.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横位のへらナデ 体部外面下半縦位のへら磨き	覆土上層～下層	70% PL14
25	土師器	甕	-	(5.7)	[9.8]	長石・石英・赤色粒子	灰黄	普通	体部外面横位のへらナデ後、下端横位のへら削り	覆土中	30% PL15
26	土師器	甕	-	(8.8)	8.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面縦位のへら磨き 木葉痕	覆土上層～中層	20% PL15
27	土師器	甕	-	(3.3)	[9.8]	長石・石英・雲母・細礫	橙	普通	体部外面縦位のへら磨き 木葉痕	覆土上層	5%
28	須恵器	甕	[24.6]	(11.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	体部外面横位の平行叩き 内面指頭圧痕を残す横位のナデ	覆土上層	10% PL14 新治窯産
29	須恵器	甕	[22.4]	(7.6)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外面横位の平行叩き	覆土中	5% 新治窯産

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	須恵器	甕	長石・石英	灰黄	体部外面斜位の平行叩き	竈覆土中	産地不明

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 2	土玉	0.7～1.5	0.3	(1.7)	(2.5)	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 3	支脚	(11.2)	5.3	(7.5)	(453.2)	長石・石英・雲母	明赤褐	側面斜位のへらナデ 工具痕	覆土中	PL17
DP 4	支脚	(8.3)	(3.6)	5.8	(184.3)	長石・石英・雲母	橙	側面斜位のへらナデ 工具痕	覆土上層	
DP 5	支脚	(12.6)	(5.9)	9.3	(518.9)	長石・石英・雲母	橙	側面縦位のへらナデ 工具痕	覆土中層	PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 8	磨石	(7.4)	(8.2)	5.9	(461.5)	花崗岩	全面研磨痕 上端部・下端部敲打痕	覆土下層	
Q 9	砥石	(5.5)	3.6	2.0	(49.0)	安山岩	砥面4面 上端部欠損	覆土中	

第5号竪穴建物跡（第19～21図）

位置 調査区西部のD3e2区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第9号溝に掘り込まれている。

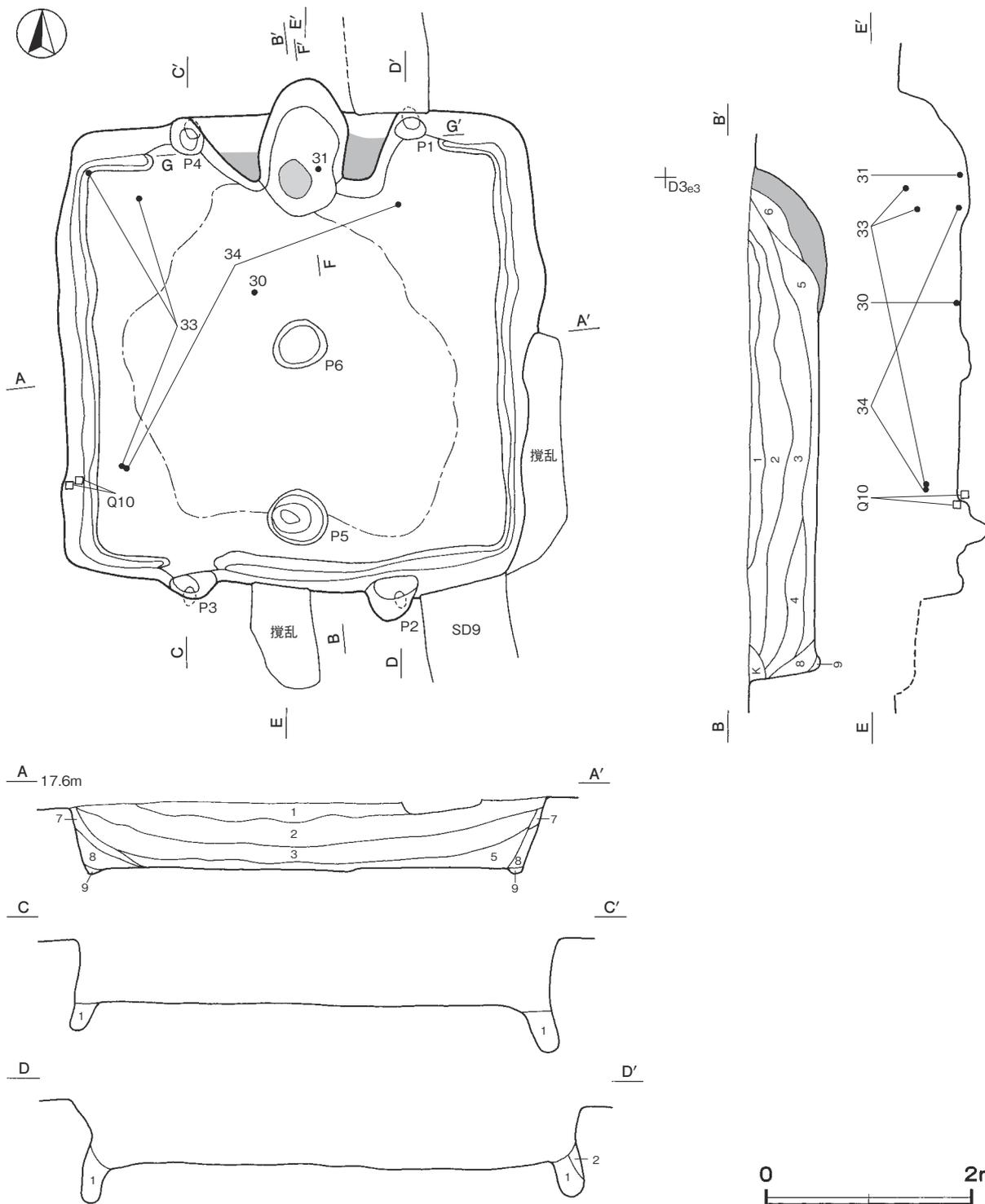
規模と形状 長軸4.74m、短軸4.68mの方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁は高さ63～67cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。竈袖部の両脇と南壁の一部を除いて、壁下には壁溝が巡っている。

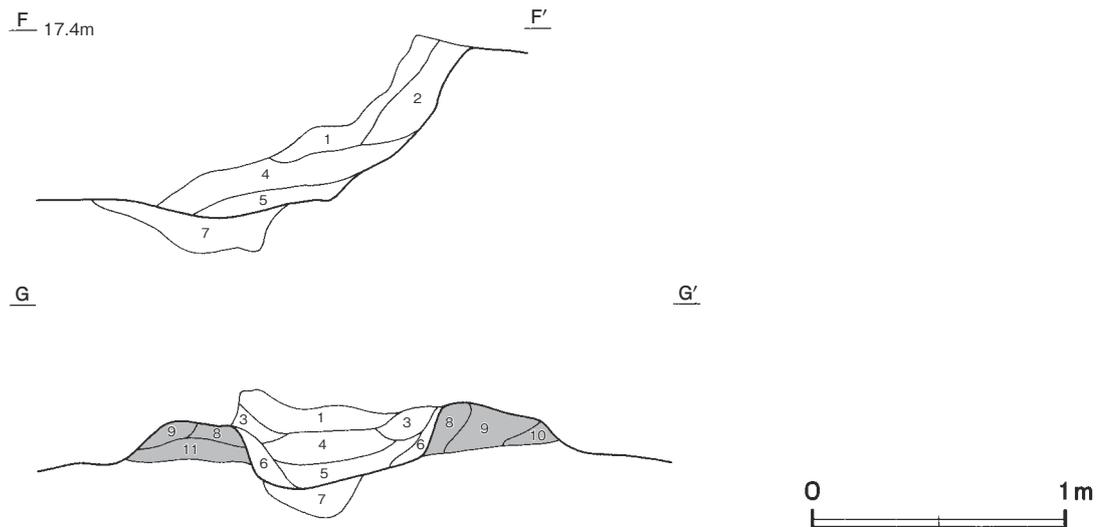
竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚き口部から煙道部まで140cm、燃焼部幅は68cmである。袖部は、床面とほぼ同じ高さの地山に粘土粒子を主体とした第8～11層を積み上げて構築されている。火床部は、床面を20cmほど掘りくぼめた部分に第7層を埋土して構築されている。火床面は第7層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面上に焼土ブロックや粘土粒子を含む第1～6層が堆積していることから、天井部は廃絶後に崩落したとみられる。煙道部は壁外に32cm掘り込まれ、火床部からほぼ直立している。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・細砂微量 | 6 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・粘土粒子・細砂微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 極暗褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 炭化物少量, ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・細砂微量 | 8 灰褐色 | 粘土粒子多量, 焼土粒子・細砂微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化物・粘土粒子・細砂微量 | 9 黒褐色 | 粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子・細砂微量 | 10 褐色 | 粘土粒子・細砂微量 |
| | | 11 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・細砂微量 |



第19図 第5号竪穴建物跡実測図(1)



第20図 第5号竪穴建物跡実測図(2)

ピット 6か所。P1～P4は深さ28～44cmで、南北の壁際に位置し、内傾して掘り込まれている。これらは規模から支柱穴であり、配置から上屋構造が同時期の第4号竪穴建物跡とは異なる可能性がある。P1～P4の覆土は、土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから、建物が埋没する前に柱は抜き取られていたとみられる。P5は深さ32cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ10cmで、性格不明である。

柱穴土層解説(各柱穴共通)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ローム粒子少量

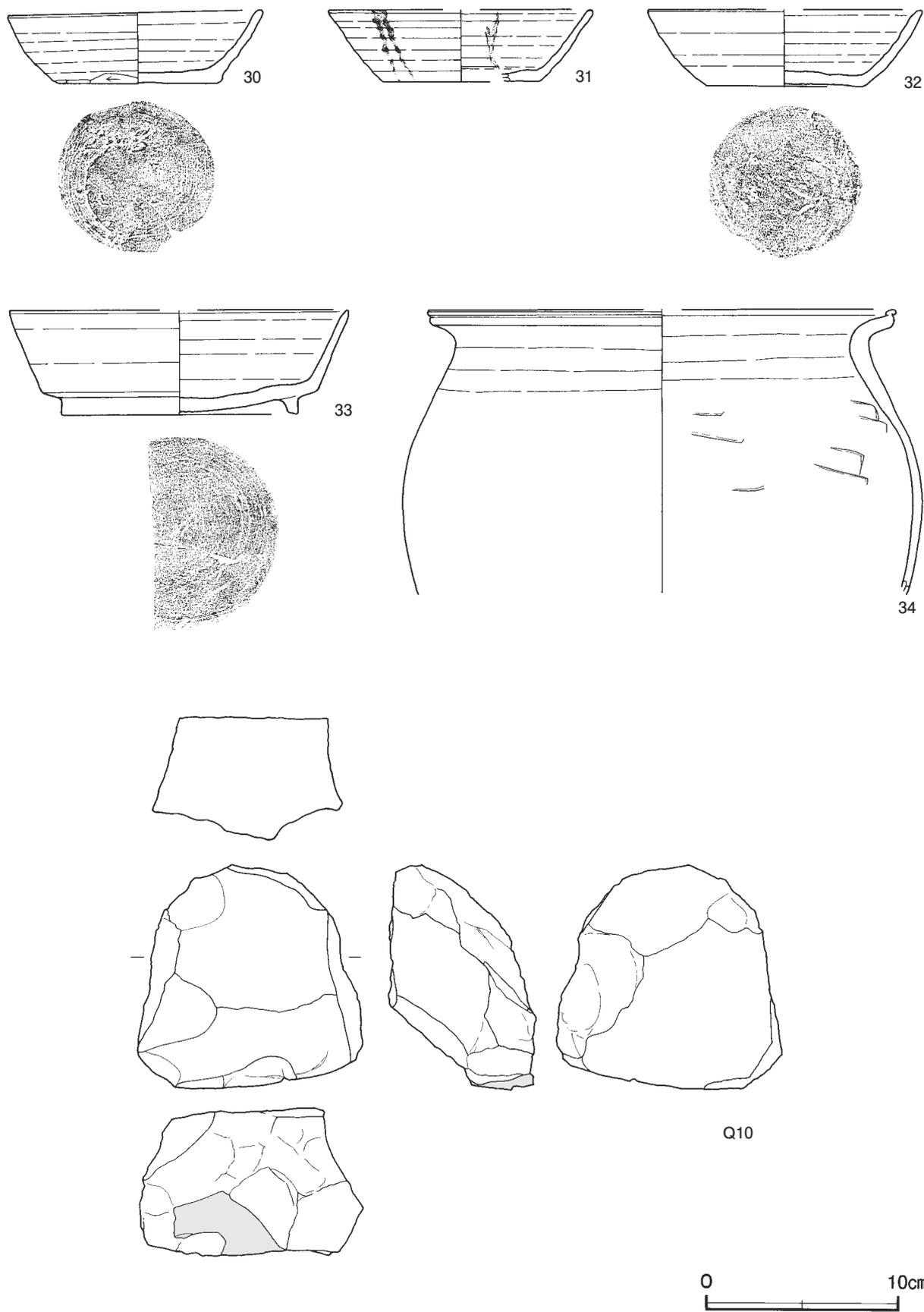
覆土 9層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 6 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 7 褐色 ローム粒子中量
 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 8 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
 4 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 9 褐色 ローム粒子少量
 5 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片227点(甕227), 須恵器片146点(坏131, 高台付坏1, 蓋2, 長頸瓶4, 甕8), 土製品4点(支脚), 石器1点(台石), 鉄製品3点(鏃), 鉄滓12点(351.2g)のほか, 古墳時代の土師器片7点(坏6, 高坏1), 陶器片1点(碗), 石器1点(錐)が, 北部と南西部を中心に全域の覆土上層から床面にかけて出土している。30はほぼ完形で, 北部の床面から出土していることから, 使用時のまま遺棄されたものとみられる。31は竈の覆土下層から出土した二次被熱を受けていない破片であることから, 廃絶時に廃棄されたものとみられる。33・34は広域に分散して出土した破片がそれぞれ接合していることから, 建物が埋没する過程で破碎して投棄されたものとみられる。Q10は南西壁際の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合していることから, 建物が埋没する過程で周囲から流れ込んだものとみられる。

所見 時期は出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第 21 図 第 5 号 豎 穴 建 物 跡 出 土 遺 物 実 測 図

第5号竪穴建物跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	須恵器	坏	13.1	3.9	8.2	長石・石英・黒色粒子	褐灰	良好	体部下端手持ヘラ削り 底部外縁のみ回転ヘラ削り	床面	95% PL13堀ノ内窯産
31	須恵器	坏	[13.6]	3.8	[8.1]	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	体部下端ヘラ削り 底部ヘラ削り 体部外・内面の一部に火襷	竈覆土下層	40% 新治窯産
32	須恵器	坏	[14.2]	4.1	8.0	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄褐	普通	不明瞭であるが体部下端ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土中	60% 新治窯産
33	須恵器	高台付坏	[17.6]	5.5	[12.2]	長石・石英・黒色粒子	灰白	良好	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け 底面朱付着 硯転用	覆土上層～中層	40% PL13湖西窯産
34	土師器	甕	[24.4]	(14.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ	覆土上層～下層	20% PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 10	台石	(11.8)	(11.7)	(7.8)	(1178.3)	安山岩	側面の一部に被熱痕あり	覆土下層～床面	

第6号竪穴建物跡（第22・23図）

位置 調査区西部のD 3c3区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸3.73m、短軸3.27mの長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ31～38cmで、直立している。

床 平坦で、中央部から南壁際にかけて踏み固められている。南部の壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで164cm、燃焼部幅は60cmである。袖部は、床面とほぼ同じ高さの地山に粘土粒子を主体とした第9・10層を積み上げて構築されている。火床部は、床面を22cmほど掘りくぼめた部分に第7・8層を埋土して構築されている。火床面は第7・8層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面上に焼土ブロックや粘土粒子を含む第1～6層が堆積していることから、天井部は廃絶後に崩落したとみられる。煙道部は壁外に68cm掘り込まれ、火床部からはほぼ直立している。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	6 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子・細砂微量
2 暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子・細砂微量	7 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子・細砂微量	8 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子・細砂微量	9 灰褐色	粘土粒子中量、焼土粒子・細砂微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子・細砂微量	10 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・細砂微量

ピット 1か所。主柱穴は認められない。P1は深さ32cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長径55cm、短径53cmの円形で、深さは35cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
-------	-------------------

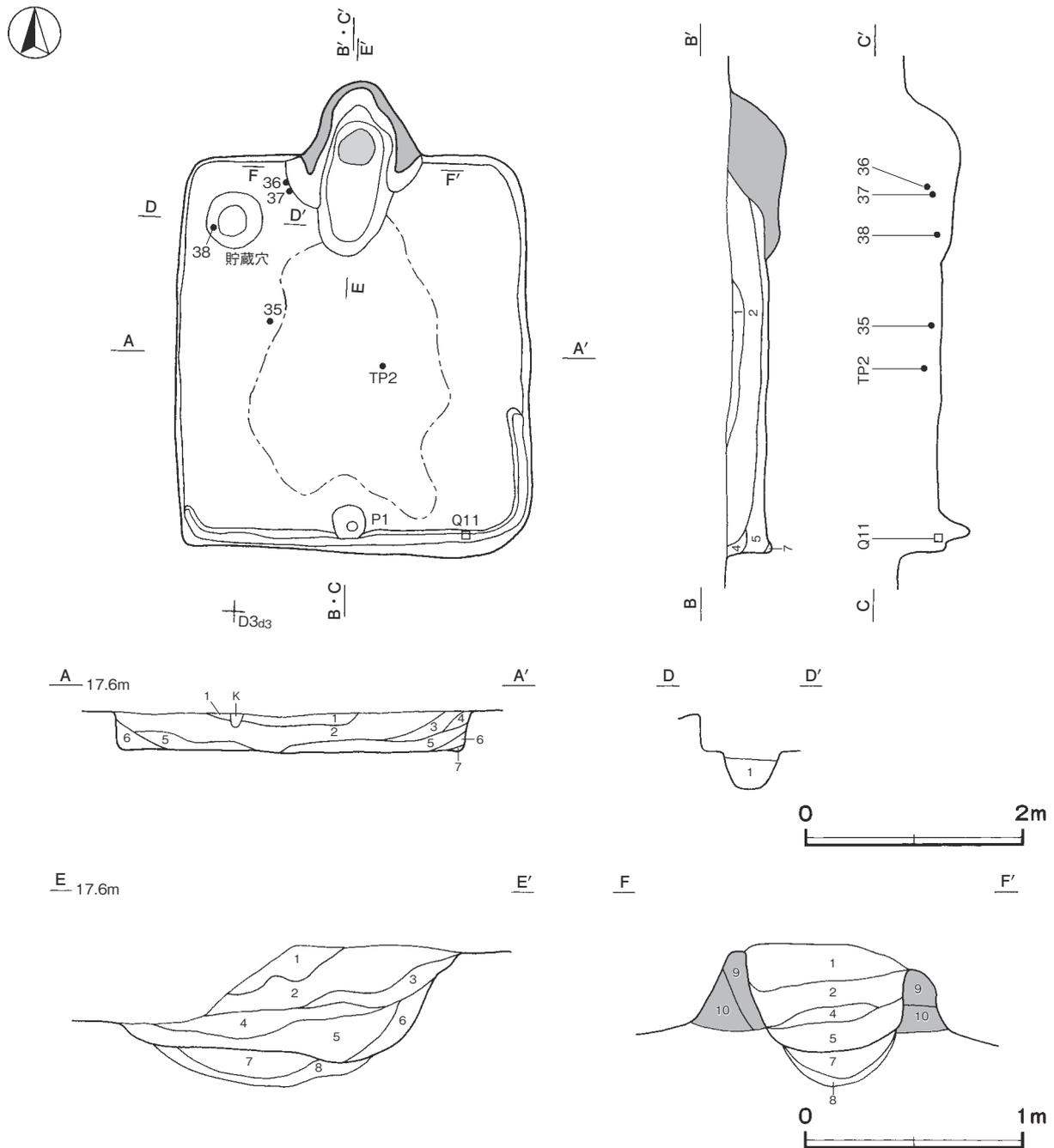
覆土 7層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

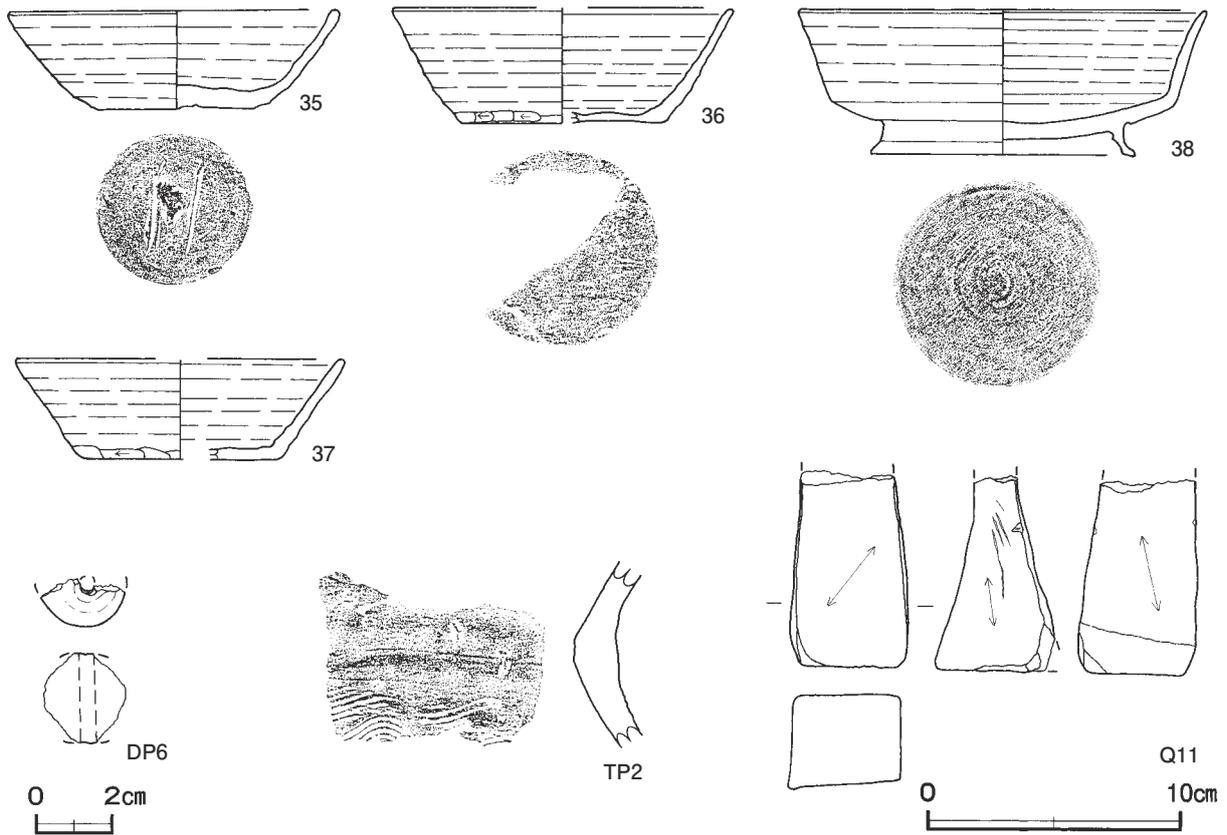
1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子少量
3 極暗褐色	ローム粒子少量	7 褐色	ローム粒子少量
4 褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 土師器片 28 点 (甕), 須恵器片 35 点 (坏 31, 高台付坏 1, 長頸瓶 1, 甕 2), 土製品 1 点 (土玉), 石器 1 点 (砥石), 鉄滓 6 点 (153.3 g) のほか, 粘土塊 1 点が, 北西部を中心に全域の覆土上層から下層にかけて出土している。35 は遺存状態が良好で, 広域に分散して出土した破片が接合していることから, 埋没する過程で破碎して投棄されたものとみられる。36~38 は壁際の覆土中層から下層にかけて出土した破片であることから, 建物が埋没する過程で周囲から流れ込んだものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。



第 22 図 第 6 号竪穴建物跡実測図



第23図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

第6号竪穴建物跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	須恵器	坏	13.0	3.9	6.2	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	底部ヘラ削り ヘラ記号「=」	覆土下層	80% PL13 本葉下窯産カ
36	須恵器	坏	[13.3]	4.6	[8.0]	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り	覆土中層	50% PL13 新治窯産
37	須恵器	坏	[13.0]	4.0	[7.8]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り	覆土中層	30% 新治窯産
38	須恵器	高台付坏	16.1	5.8	10.4	長石・石英・黒色粒子	黄灰	良好	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	70% PL13 堀ノ内窯産

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 2	須恵器	甕	長石・石英・雲母	黄灰	頸部櫛歯状工具による波状文	覆土中層	産地不明

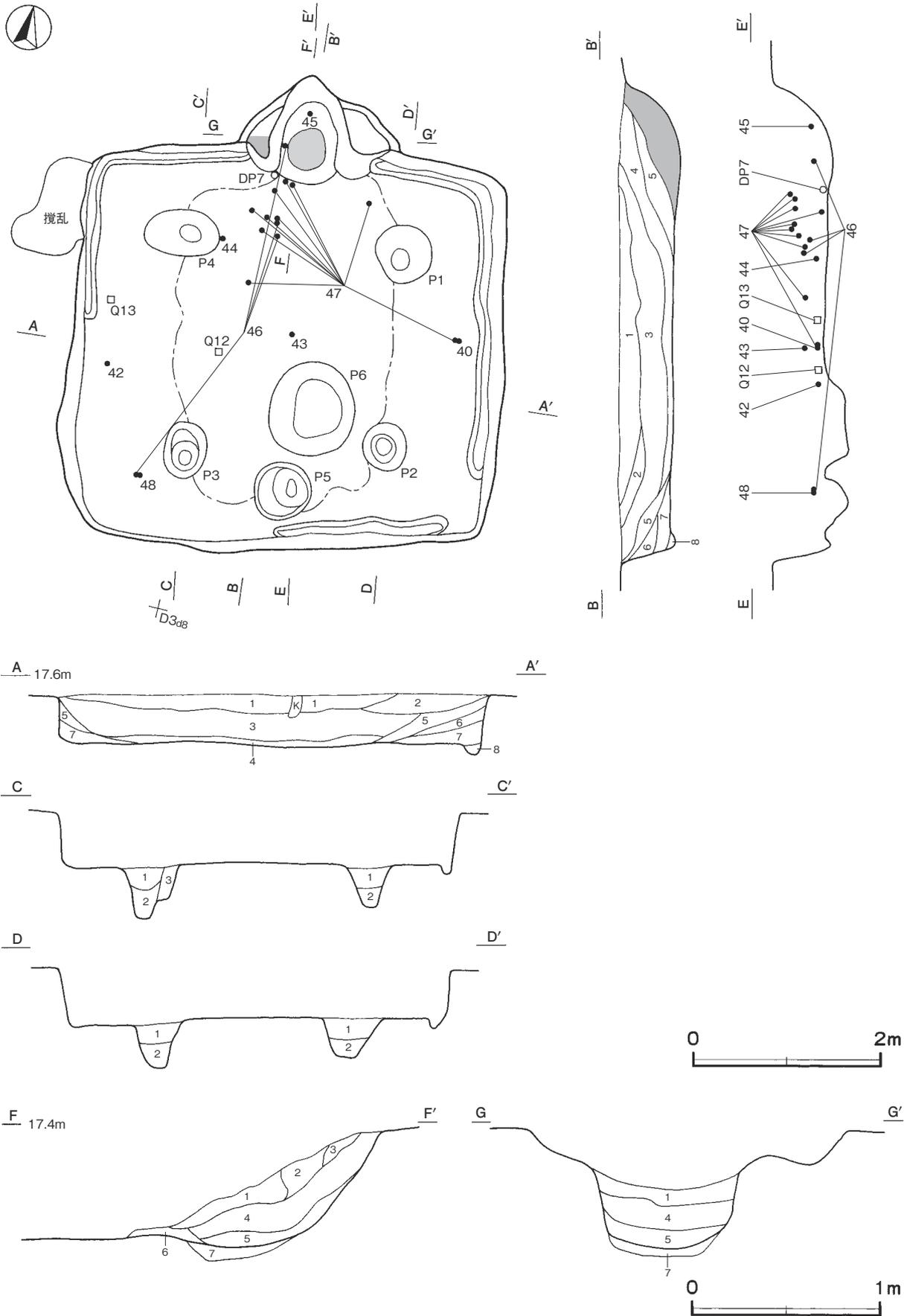
番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 6	土玉	(0.6~2.2)	0.3	2.4	(4.8)	長石・石英	明褐	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q11	砥石	(7.8)	4.7	4.7	(208.7)	凝灰岩	砥面4面 上端部欠損	覆土下層	PL19

第7号竪穴建物跡（第24～27図）

位置 調査区中央部のD3c8区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸4.73m、短軸4.37mの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁は高さ50～64cmで、直立している。



第 24 图 第 7 号竖穴建物跡実測图

床 平坦で、中央部が踏み固められている。西壁中央部から南壁中央部にかけての範囲と南東コーナー部を除いて、壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 118cm、燃焼部幅は 56cm である。袖部は、床面と同じ高さの地山に粘土粒子を含む暗褐色土で構築されている。火床部は、床面から 8cm ほど掘りくぼめた部分に第 7 層を埋土して構築されている。火床面は第 7 層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面上に焼土ブロックや粘土粒子を含む第 1～5 層が堆積していることから、天井部は廃絶後に崩落したとみられる。煙道部は壁外に 72cm 掘り込まれ、火床部から外傾している。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物・細砂微量 | 5 暗赤褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・細砂微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・細砂微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子・細砂微量 | | |

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ 36～56cmで、規模と配置から支柱穴である。P 1～P 4の覆土は、ロームブロックを多く含んでいることから、埋め戻す前に柱は抜き取られていたとみられる。P 5は深さ 28cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ 24cmで、性格不明である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

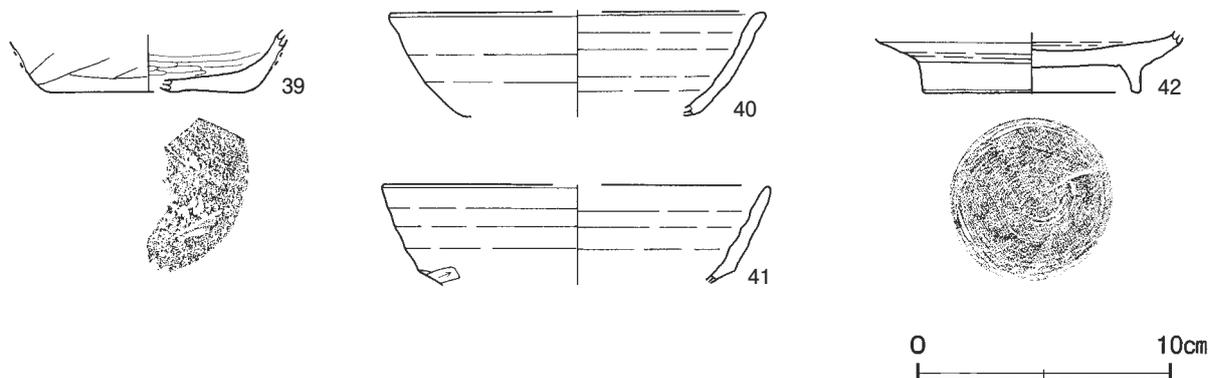
覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

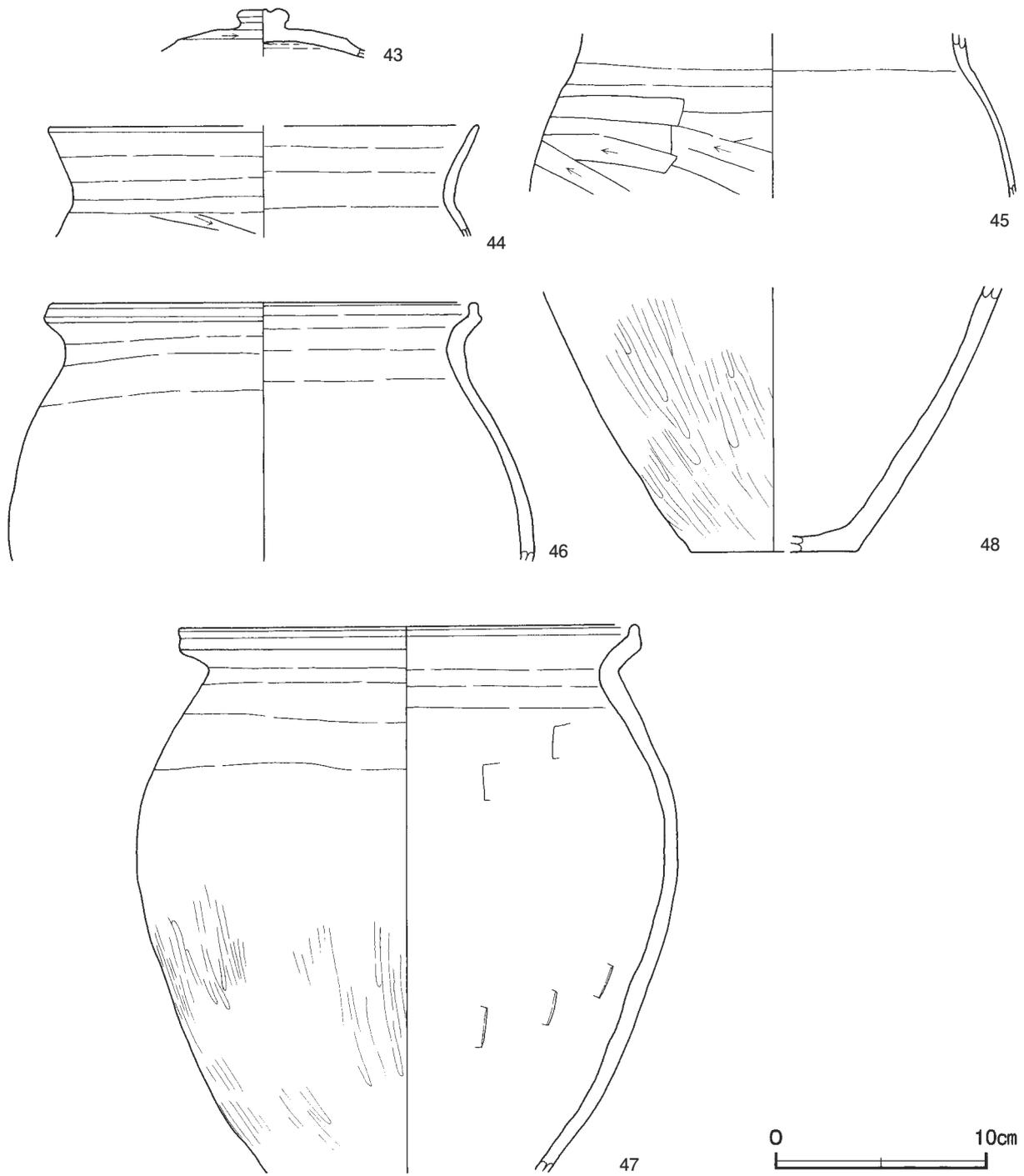
- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 346 点（坏 16，甕 330），須恵器片 86 点（坏 69，高台付坏 4，蓋 5，高盤 1，甕 7），土製品 2 点（支脚），石器 3 点（紡錘車 1，磨石 2），鉄製品 1 点（刀子），鉄滓 14 点（289.5 g）のほか、陶器片 3 点（碗 1，甕 2）が、北部を中心に全域の覆土中層から下層にかけて出土している。遺物はすべて覆土中から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。46・47 は広範囲に散在して出土した破片が接合していることから、埋め戻す際に破碎して投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。



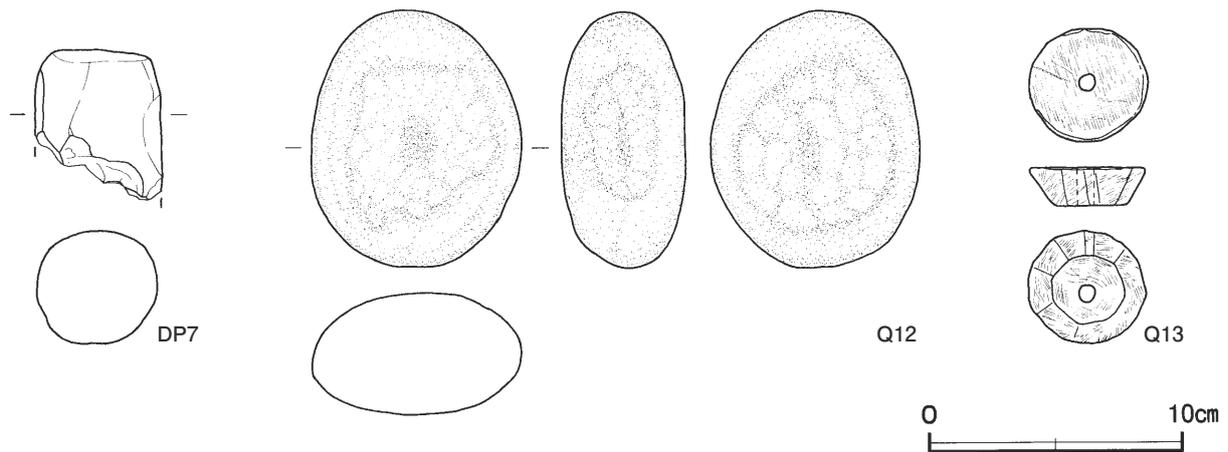
第 25 図 第 7 号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第26図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表(第25~27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
39	土師器	坏	-	(24)	[8.0]	長石・石英	灰黄褐	普通	体部外面ナデ 内面横位のヘラ磨き 底部ヘラ削り	覆土中	10%
40	須恵器	坏	[14.8]	(42)	-	長石・石英	灰黄	普通	外・内面口クロナデ	覆土下層	20% 新治窯産
41	須恵器	坏	[15.2]	(40)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	10% 新治窯産
42	須恵器	高台付坏	-	(24)	8.4	長石・石英・ 白色粒子	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け 底面朱付着 硯転用	覆土下層	50% 新治窯産



第 27 図 第 7 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (3)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
43	須恵器	蓋	-	(2.2)	-	長石・石英・雲母・細礫	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	20% PL14 産地不明
44	土師器	甕	[20.3]	(5.3)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデのヘラ削り	覆土下層	5%
45	土師器	甕	-	(7.8)	-	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	体部外面横位と斜位のヘラ削り	竈覆土下層	10%
46	土師器	甕	20.0	(12.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ	覆土中層～下層	20% PL15
47	土師器	甕	21.6	(26.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ 縦位のヘラ磨き	覆土中層～下層	60% PL14
48	土師器	甕	-	(12.6)	[7.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	体部外面下半縦位のヘラ磨き	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 7	支脚	(6.0)	4.0	(5.0)	(119.4)	長石・石英	橙	摩耗のため調整不明瞭	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	磨石	10.3	8.3	4.9	634.9	安山岩	全面研磨痕	覆土下層	PL19

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	紡錘車	2.9～4.6	0.7	1.5	47.9	滑石	全面研磨痕 一方向からの穿孔	覆土下層	PL19

第 8 号竪穴建物跡 (第 28 ～ 30 図)

位置 調査区東部の D5g5 区、標高 17 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 255・257 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.25 m、短軸 4.14 m の方形で、主軸方向は N - 3° - W である。壁は高さ 32 ～ 40cm で、ほぼ直立している。

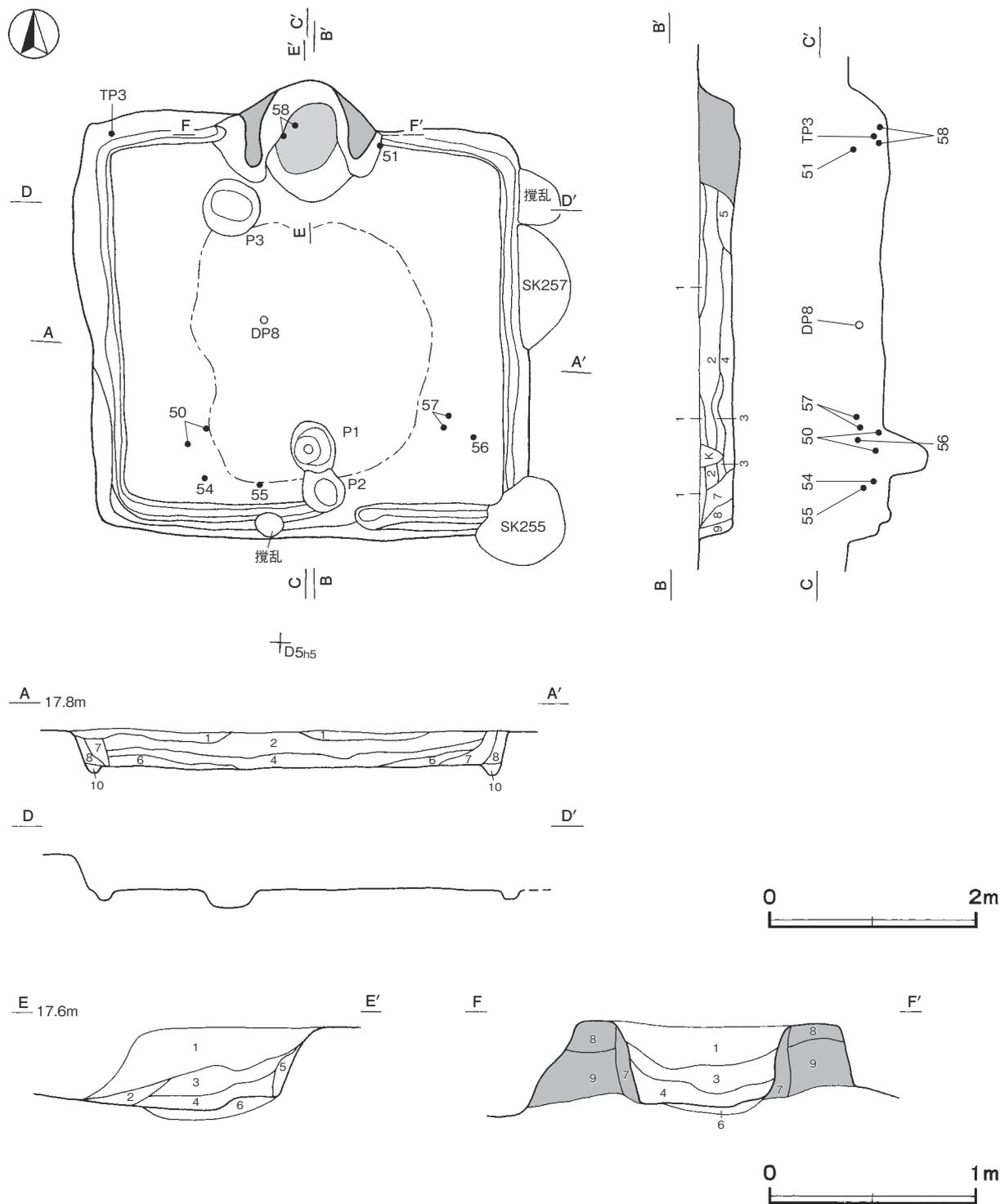
床 平坦で、中央部が踏み固められている。南壁の中央部を除いて、壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 120cm、燃焼部幅は 62cm である。袖部は、床面とほぼ同じ高さの地山に粘土粒子を主体とした第 7 ～ 9 層を積み上げて構築されている。火床部は、床面を 5cm ほど掘りくぼめた部分に第 6 層を埋土して構築されている。火床面は第 6 層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面上に焼土ブロックを含む第 1 ～ 5 層が堆積していることから、天井部は廃絶後に崩落したとみられる。煙道部は壁外に 40cm 掘り込まれ、火床部から外傾している。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物中量, 焼土ブロック少量, ローム粒子微量 | 6 暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 7 黒褐色 粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・細砂微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量 | 8 極暗褐色 粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・細砂微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化物微量 | 9 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量, ローム粒子・細砂微量 |
| 5 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | |

ピット 3か所。主柱穴は認められない。P1は深さ36cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P2・P3は深さ10・16cmで、性格不明である。



第28図 第8号竈穴建物跡実測図

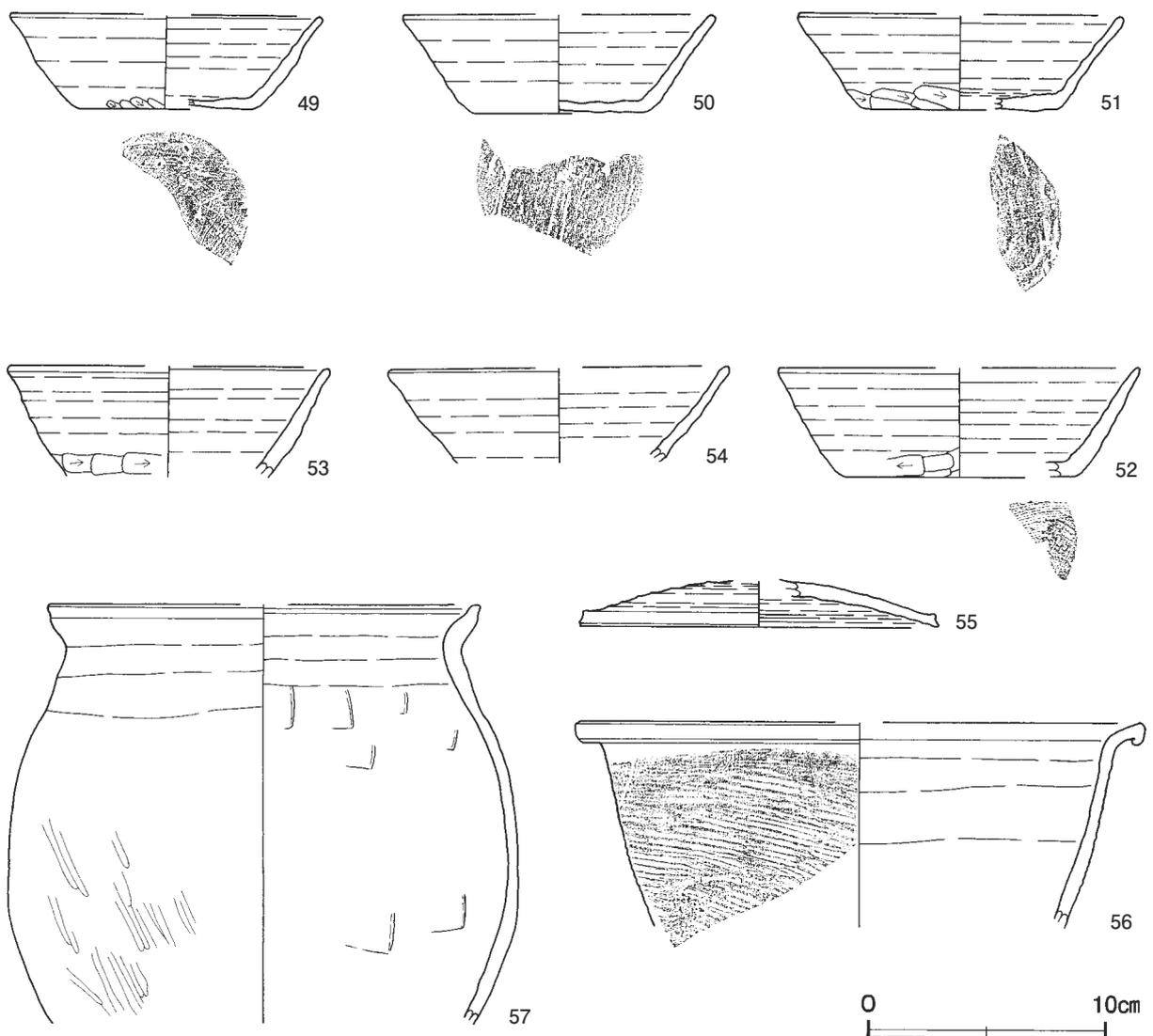
覆土 10層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

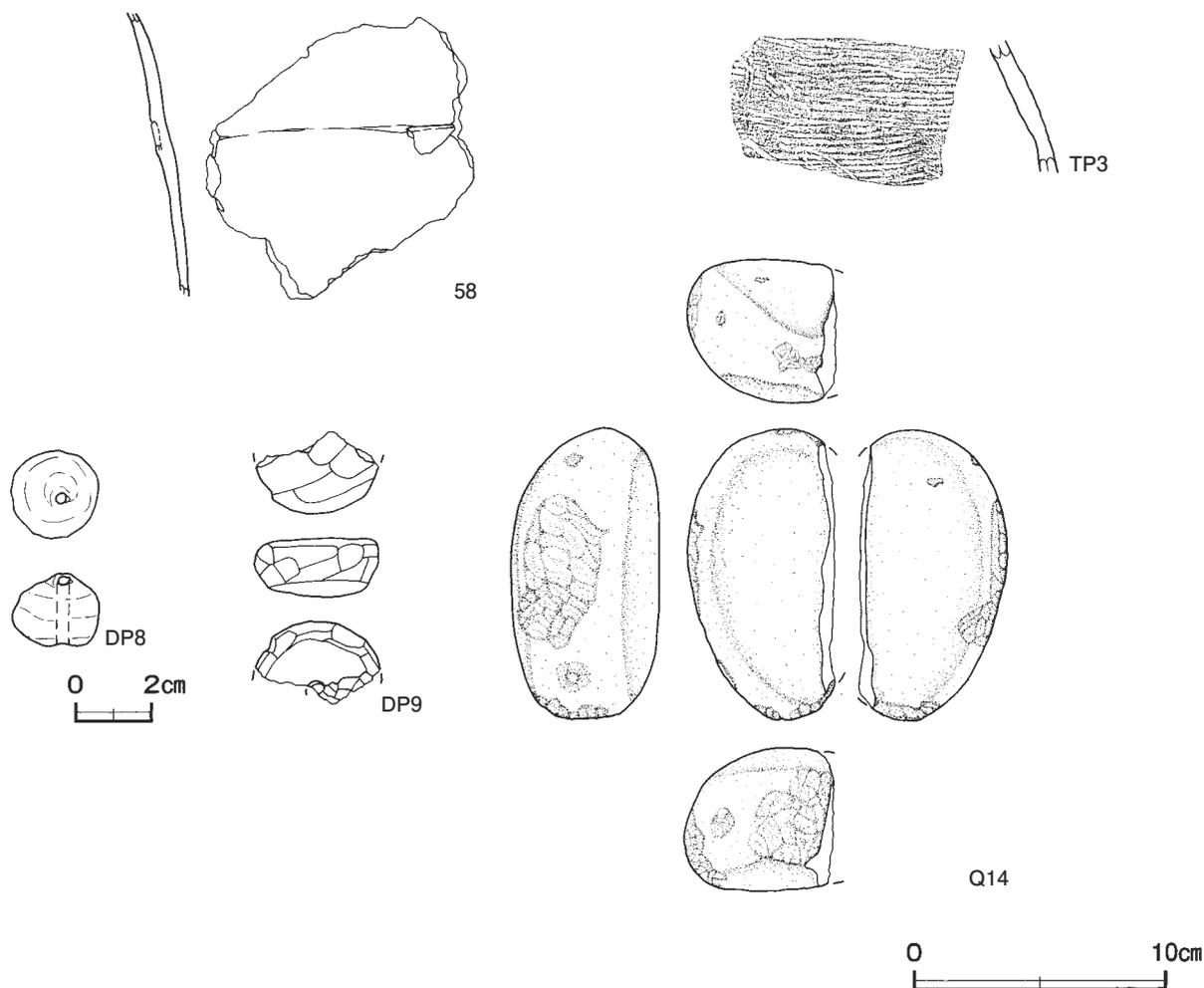
- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 113 点（甕）、須恵器片 122 点（坏 87、蓋 5、甕 30）、土製品 2 点（土玉 1、紡錘車 1）、鉄製品 1 点（不明）、石器 1 点（敲石）、鉄滓 17 点（1406.3 g）のほか、陶器片 1 点（碗）、剥片 3 点が、全域の覆土上層から下層にかけて出土している。遺物は主に覆土中から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。58 は竈の火床部から出土しているが、二次被熱を受けていない破片であることから、廃絶時に廃棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。58 は土師器甕の胴部破片で、胎土中に須恵器坏の口縁部破片を含んでおり、焼成前に混入したものとみられる。



第 29 図 第 8 号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第30図 第8号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第8号竪穴建物跡出土遺物観察表(第29・30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
49	須恵器	坏	[12.8]	4.0	[7.4]	長石・石英・白色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部へら削り	覆土中	30% 新治窯産
50	須恵器	坏	[13.0]	4.2	[7.2]	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	底部一方向のへら削り	覆土中層～下層	25% PL13 新治窯産
51	須恵器	坏	[13.5]	4.1	[8.5]	長石・石英・白色粒子	灰	普通	体部下端手持ちへら削り 底部へら削り	覆土上層	30% 新治窯産
52	須恵器	坏	[15.2]	4.6	[9.6]	長石・石英・白色粒子	暗灰黄	普通	体部下端手持ちへら削り 底部糸切り痕を残すへら削り	覆土中	10% 新治窯産
53	須恵器	坏	[13.4]	(4.7)	-	長石・石英・細礫	灰	普通	体部下端手持ちへら削り	覆土中	10% 産地不明
54	須恵器	坏	[14.2]	(4.0)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中層	25% 産地不明
55	須恵器	蓋	[15.0]	(2.0)	-	長石・石英・白色粒子	灰黄	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中層	20% 産地不明
56	須恵器	鉢	[23.6]	(8.7)	-	長石・石英・雲母	黄橙	普通	体部外面横位の平行叩き 内面横位のへらナデ	覆土上層	5% 新治窯産
57	土師器	甕	[18.0]	(17.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横位のへらナデ 体部外面下半縦位のへら磨き	覆土上層	20%
58	土師器	甕	-	(11.4)	-	長石・石英	橙	普通	胎土中に須恵器坏の細片を含む	竈火床部	5% PL15

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 3	須恵器	甕	長石・石英	にぶい黄橙	体部外面横位の平行叩き	竈覆土下層	産地不明

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q14	敲石	11.6	(5.9)	5.8	(624.6)	安山岩	全面研磨痕 側面敲打痕	覆土下層	

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 8	土玉	10~23	0.3	1.9	8.1	長石・石英	にぶい黄	全面ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	PL18
DP 9	紡錘車未製品	(3.9~4.8)	0.6	2.3	(25.9)	長石・石英	にぶい黄橙	全面ナデ 穿孔部未貫通	覆土中層	PL18

第9号竪穴建物跡（第31・32図）

位置 調査区東部のD5h7区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第258・322～329・359号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.20m、短軸4.03mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ23～43cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。竈袖部の東側を除いて、壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで136cm、燃焼部幅は46cmである。袖部は、床面とほぼ同じ高さの地山に粘土粒子を主体とした第9層を積み上げて構築されている。火床部は床面を14cmほど掘りくぼめた部分に第7・8層を埋土として構築されている。火床面は第7・8層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面上に焼土ブロックや粘土粒子を含む第5・6層が堆積していることから、天井部は廃絶後に崩落したとみられる。煙道部は壁外に56cm掘り込まれ、火床部から外傾している。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	6 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・細砂微量
2 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
3 暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	8 褐色	ロームブロック微量
4 暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ16～32cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P1～P4の覆土は、ロームブロックを多く含んでいることから、埋め戻す前に柱は抜き取られていたとみられる。P5は深さ44cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	3 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量		

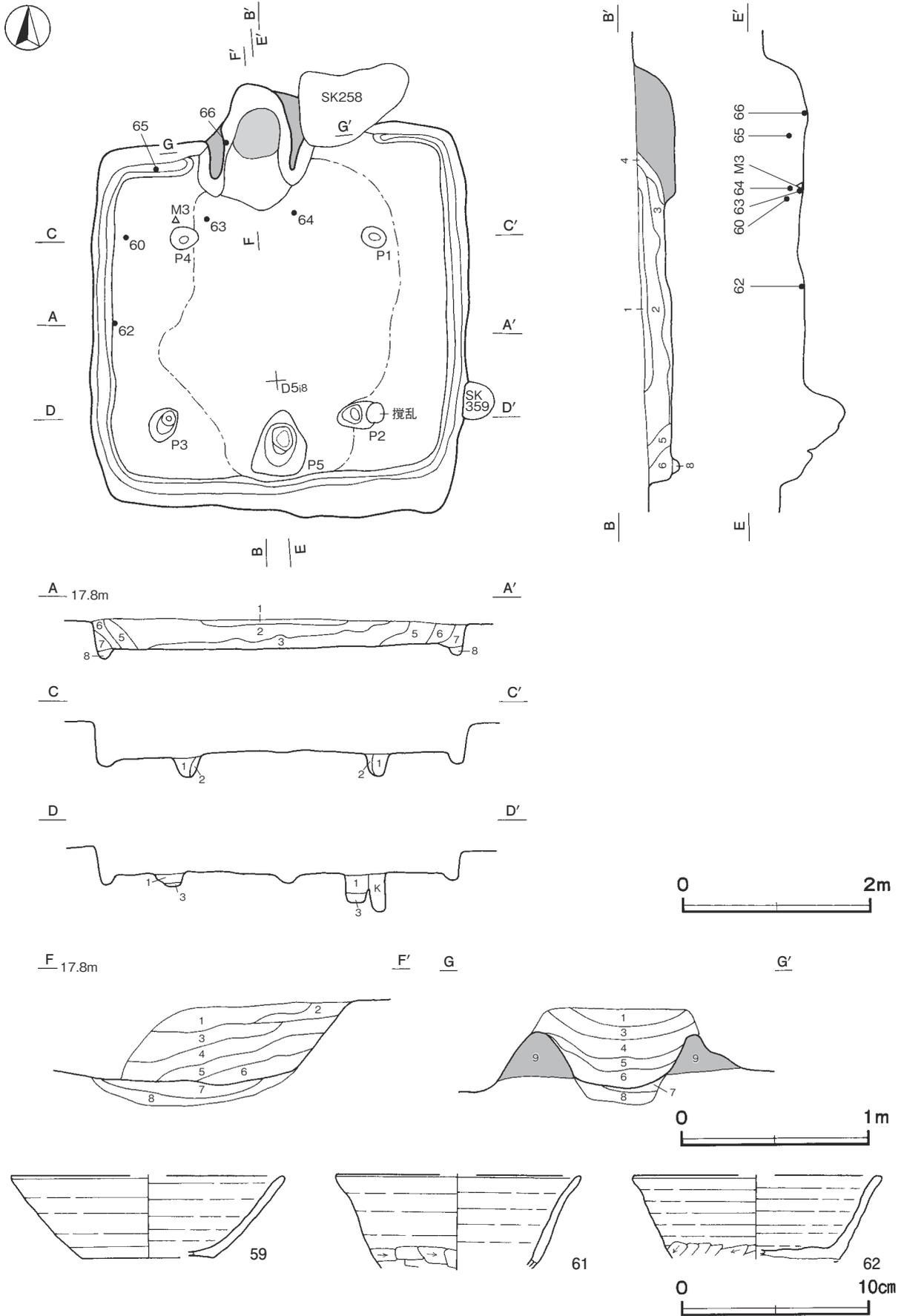
覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

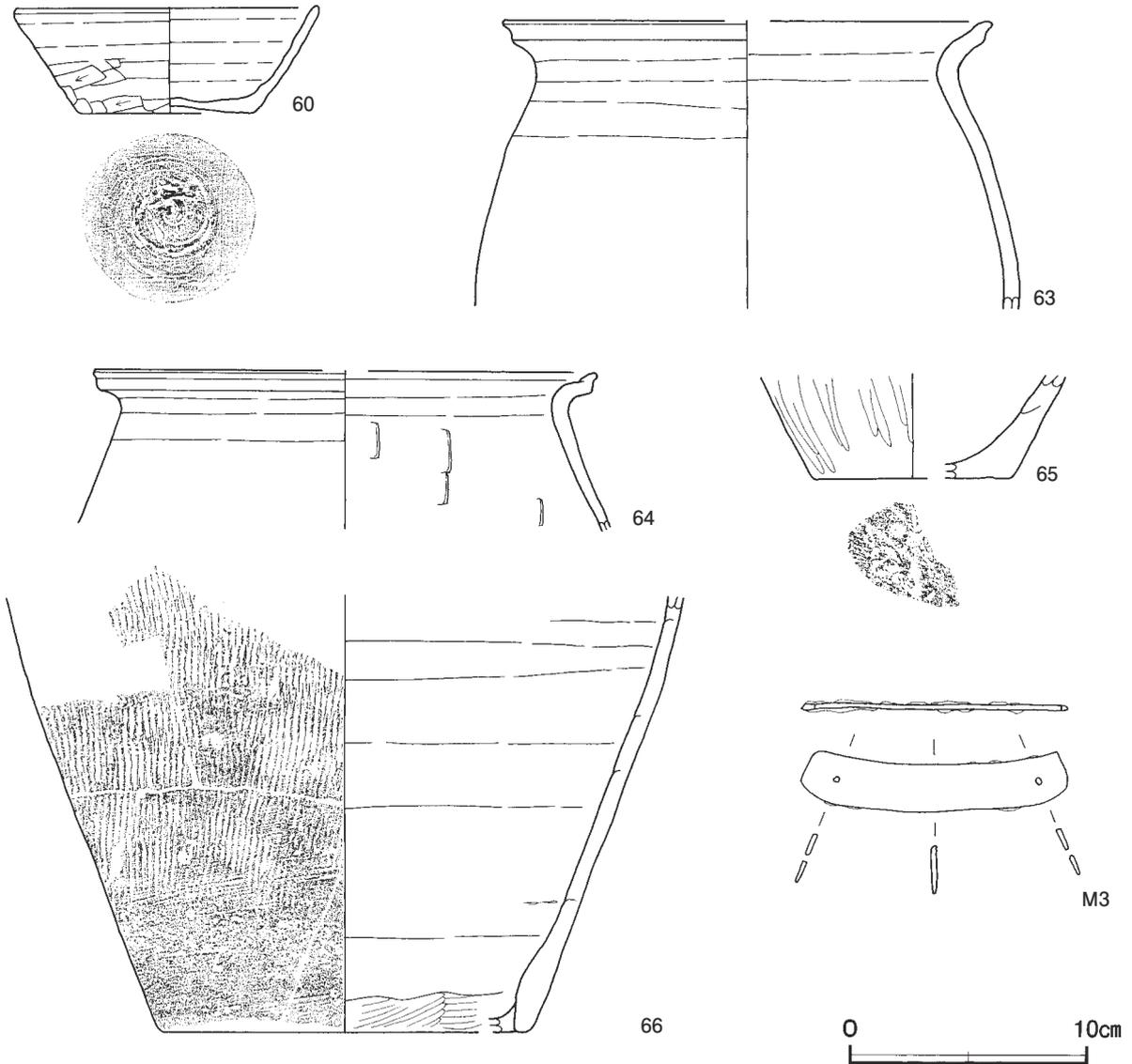
1 黒褐色	ローム粒子少量	6 褐色	ロームブロック中量
2 極暗褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量	7 極暗褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量		
5 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片179点（甕）、須恵器片134点（坏92、長頸瓶2、甗2、甕38）、鉄製品2点（釘、手鎌）、鉄滓10点（1420.6g）のほか、縄文土器片2点（深鉢）、古墳時代の土師器片3点（坏2、高坏1）、剥片1点、粘土塊3点が、北部を中心に全域の覆土中層から下層にかけて出土している。60は覆土中層から出土した完形で出土しており、62～65は覆土中層から床面にかけて出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。66は竈の火床部から出土した二次被熱を受けていない破片であることから、廃絶時に廃棄されたものとみられる。M3は完形で、床面から正位で出土していることから、使用時のまま遺棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第31图 第9号竖穴建物跡・出土遺物実測図



第 32 図 第 9 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 9 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 31・32 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
59	須恵器	坏	[14.4]	4.4	[7.0]	長石・石英・白色粒子	黄灰	普通	底部ヘラ削り	覆土中	15% 産地不明
60	須恵器	坏	12.6	4.5	7.2	長石・石英	灰	良好	体部外面手持ちヘラ削り 底部外縁のみ回転ヘラ削り	覆土中層	100% PL13 堀ノ内窯産
61	須恵器	坏	[13.0]	(5.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	20% 新治窯産
62	須恵器	坏	[13.2]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り	床面	40% PL13 新治窯産
63	土師器	甕	[20.4]	(12.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ	床面	10%
64	土師器	甕	[21.0]	(6.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ	覆土中層	5%
65	土師器	甕	-	(4.4)	[8.2]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部外面縦位のヘラ磨き 木葉痕	覆土中層	5%
66	須恵器	甗	-	(18.6)	[15.4]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面縦位の平行叩き後、下端横位のヘラ削り 底部蒸気孔内横位のヘラ磨き	竈火床部	20% PL14 新治窯産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	手鎌	11.3	2.6	0.1~0.2	16.5	鉄	刃部断面三角形 両端部穿孔	床面	PL19

第10号竖穴建物跡（第33・34図）

位置 調査区北部のA1j6区，標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

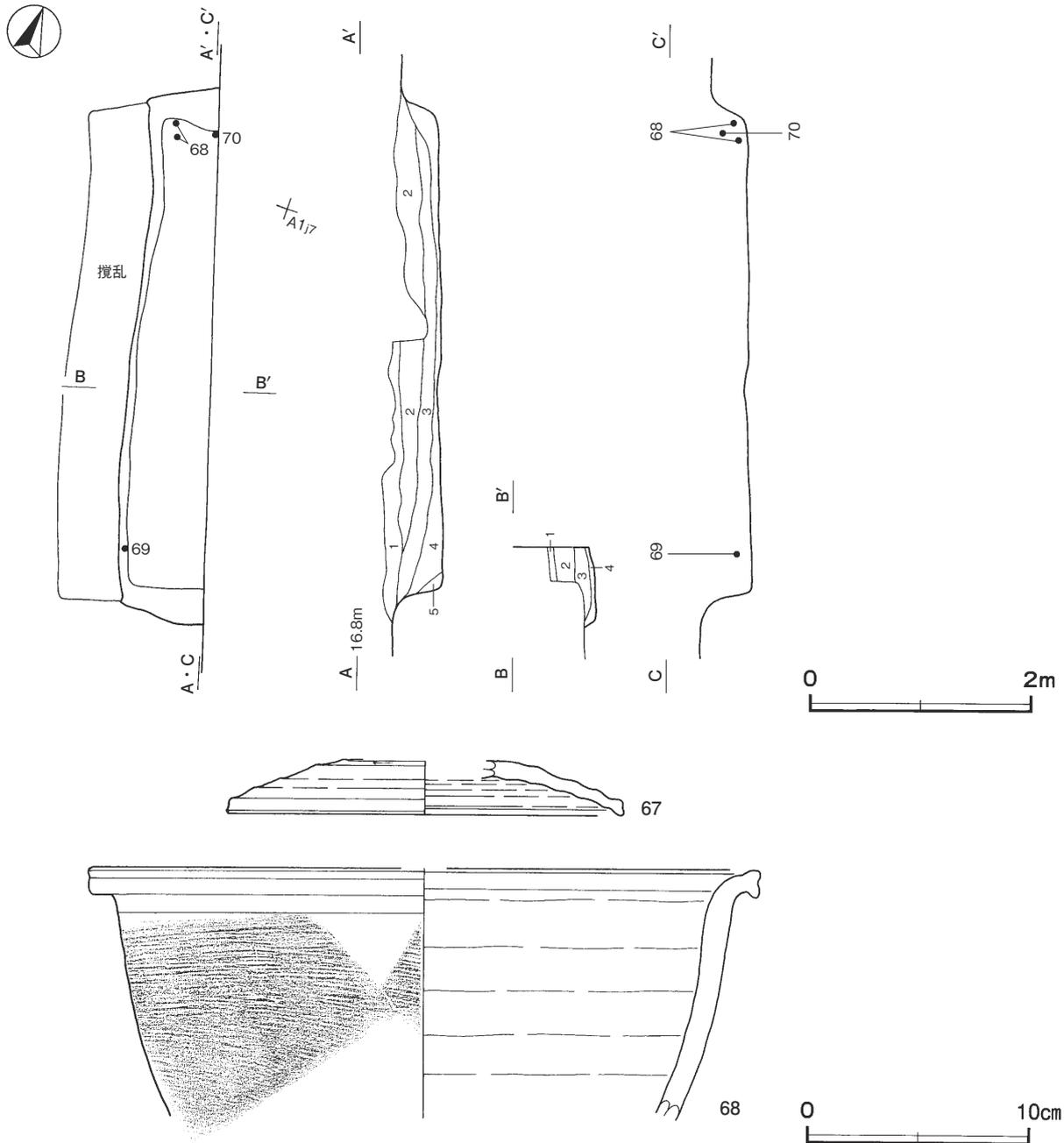
規模と形状 東部の大部分が調査区域外へ延びているため，南北軸は4.88m，東西軸は0.79mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形で，主軸方向はN-18°-Wと推測できる。壁は高さ30~48cmで，ほぼ直立している。

床 平坦であるが，確認できた範囲で硬化面や壁溝は認められない。

覆土 5層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

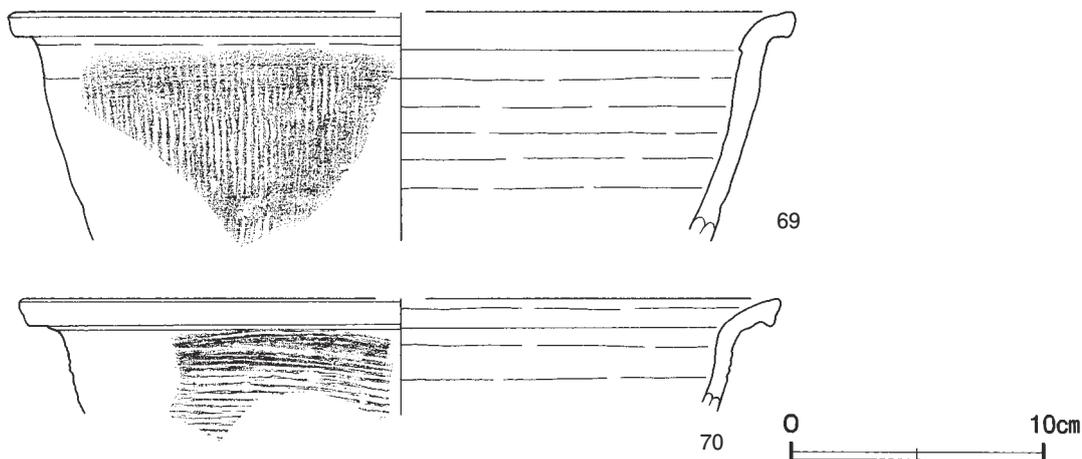
- | | | | |
|-------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | | |



第33図 第10号竖穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 16 点 (甕), 須恵器片 10 点 (坏 1, 蓋 1, 鉢 3, 甕 5), 鉄滓 3 点 (230.9 g) が, 北部と南部を中心に全域の覆土上層から下層にかけて出土している。68 ~ 70 は壁際の覆土上層から下層にかけて出土した破片であることから, 建物が埋没する過程で周囲から流れ込んだものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。



第 34 図 第 10 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 10 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 33・34 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
67	須恵器	蓋	[17.8]	(2.5)	-	長石・石英・白色粒子	褐灰	良好	天井部回転ヘラ削り	覆土中	10% 産地不明
68	須恵器	鉢	[30.2]	(11.3)	-	長石・石英・白色粒子	黄灰	普通	体部外面横位の平行叩き ナデ	覆土中層～ 下層	10% PL14 産地不明
69	須恵器	鉢	[30.8]	(9.1)	-	長石・石英・白色粒子	灰黄	良好	体部外面縦位の平行叩き ナデ	覆土中層	10% PL14 産地不明
70	須恵器	鉢	[30.0]	(4.3)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部外面横位の平行叩き ナデ	覆土上層	5% 産地不明

表 2 奈良・平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)				主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
2	D 2 f3	N - 38° - E	方形	4.38 × 4.10	15 ~ 37	平坦	一部	-	1	3	竈 コナテ	-	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 鉄製品, 鉄滓	8 世紀後葉	本跡 → SK130
3	D 2 b7	N - 2° - E	[方形]	(3.97) × 4.97	12 ~ 27	平坦	-	-	1	3	-	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品, 鉄滓	8 世紀前葉	
4	D 3 c1	N - 4° - W	方形	5.55 × 5.30	39 ~ 44	平坦	全周	4	1	2	北壁	1	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 鉄製品, 鉄滓	8 世紀後葉	本跡 → SK278, SD9
5	D 3 e2	N - 2° - E	方形	4.74 × 4.68	63 ~ 67	平坦	全周	4	1	1	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 石器, 鉄製品, 鉄滓	8 世紀後葉	本跡 → SD9
6	D 3 c3	N - 2° - W	長方形	3.73 × 3.27	31 ~ 38	平坦	一部	-	1	-	北壁	1	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 石器, 鉄製品, 鉄滓	8 世紀後葉	
7	D 3 c8	N - 11° - W	方形	4.73 × 4.37	50 ~ 64	平坦	一部	4	1	1	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品, 石器, 鉄製品, 鉄滓	9 世紀前葉	
8	D 5 g5	N - 3° - W	方形	4.25 × 4.14	32 ~ 40	平坦	一部	-	1	2	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品, 石器, 鉄製品, 鉄滓	8 世紀後葉	本跡 → SK255・SK257
9	D 5 h7	N - 3° - E	方形	4.20 × 4.03	23 ~ 43	平坦	一部	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 鉄製品, 鉄滓	9 世紀前葉	本跡 → SK258・322 ~ 329・359
10	A 1 j6	N - 18° - W	[方形・長方形]	4.88 × (0.79)	30 ~ 48	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器, 須恵器, 鉄滓	9 世紀前葉	

(2) 土坑

第316号土坑(第35図)

位置 調査区西部のD4g8区, 標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.48m, 短径1.36mの円形である。深さは18cmで, 底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから, 自然堆積である。

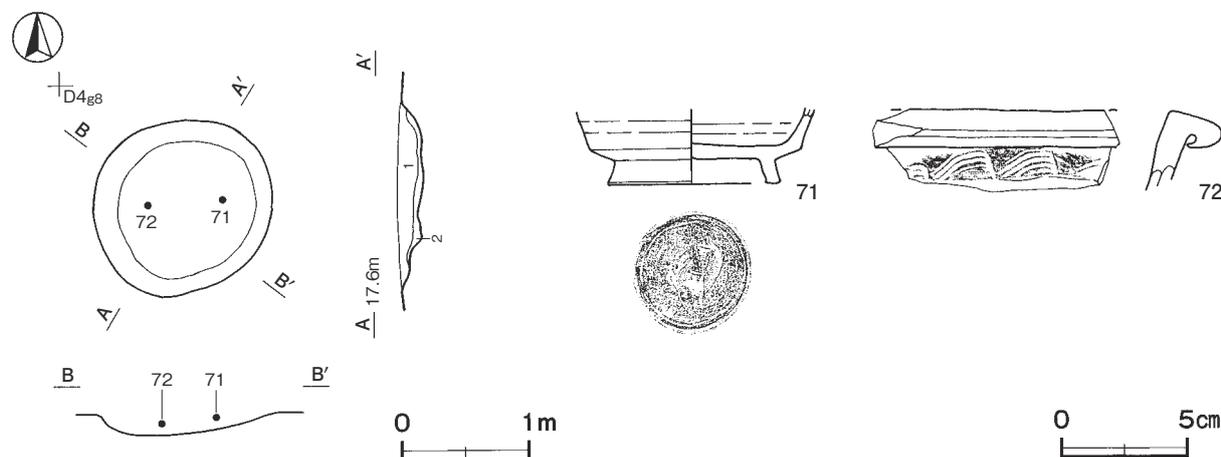
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量 炭化物微量

2 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片1点(甕), 須恵器片5点(坏3, 高台付坏1, 甕1), 鉄滓(4.2g)が, 覆土中から出土している。土器はすべて破片である。71・72は覆土中層から出土した破片であることから, 埋没する過程で流れ込んだものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第35図 第316号土坑・出土遺物実測図

第316号土坑出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
71	須恵器	高台付坏	-	(3.0)	6.7	長石・石英・白色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け	覆土中層	60% 産地不明
72	須恵器	甕	-	(3.2)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口縁部櫛歯状工具による波状文 体部内面ヘラナデ	覆土中層	5% 産地不明

4 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は, 掘立柱建物跡5棟, 井戸跡5基, 道路跡1条, 溝跡2条, 粘土貼土坑1基, 土坑1基を確認した。以下, 遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第36図)

位置 調査区中央部のD7g1区, 標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

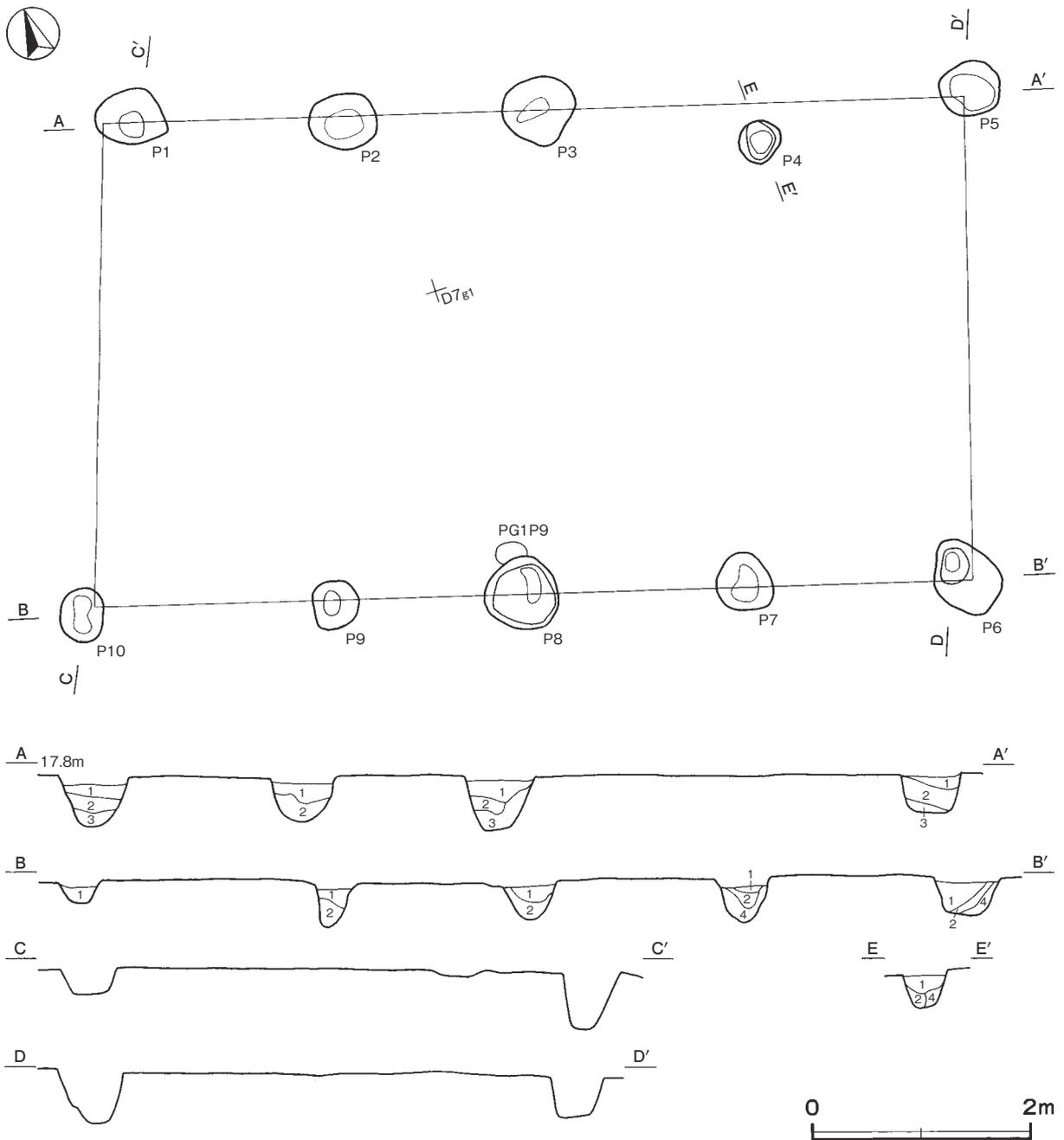
重複関係 第3・4号掘立柱建物跡，第1号ピット群と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行4間，梁行1間の側柱建物跡で，桁行方向がN - 74° - Wの東西棟である。規模は，桁行8.00 m，梁行4.50 mで，面積は36.0㎡である。柱間寸法は，桁行が1.80 m（6尺）～2.40 m（8尺）で，柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。平面形は円形または楕円形で，長径40～75cm，短径37～66cmである。深さは25～54cmで，掘方の断面はU字状である。すべて柱抜き取り後の覆土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |



第36図 第1号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)が、P9の覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。
所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は、他の掘立柱建物跡と比べて規模が大きいことから、居住目的の建物の可能性もあるが、詳細は不明である。重複関係や位置から第2号掘立柱建物跡と同時期に機能していた可能性がある。

第2号掘立柱建物跡 (第37図)

位置 調査区中央部のD7il区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

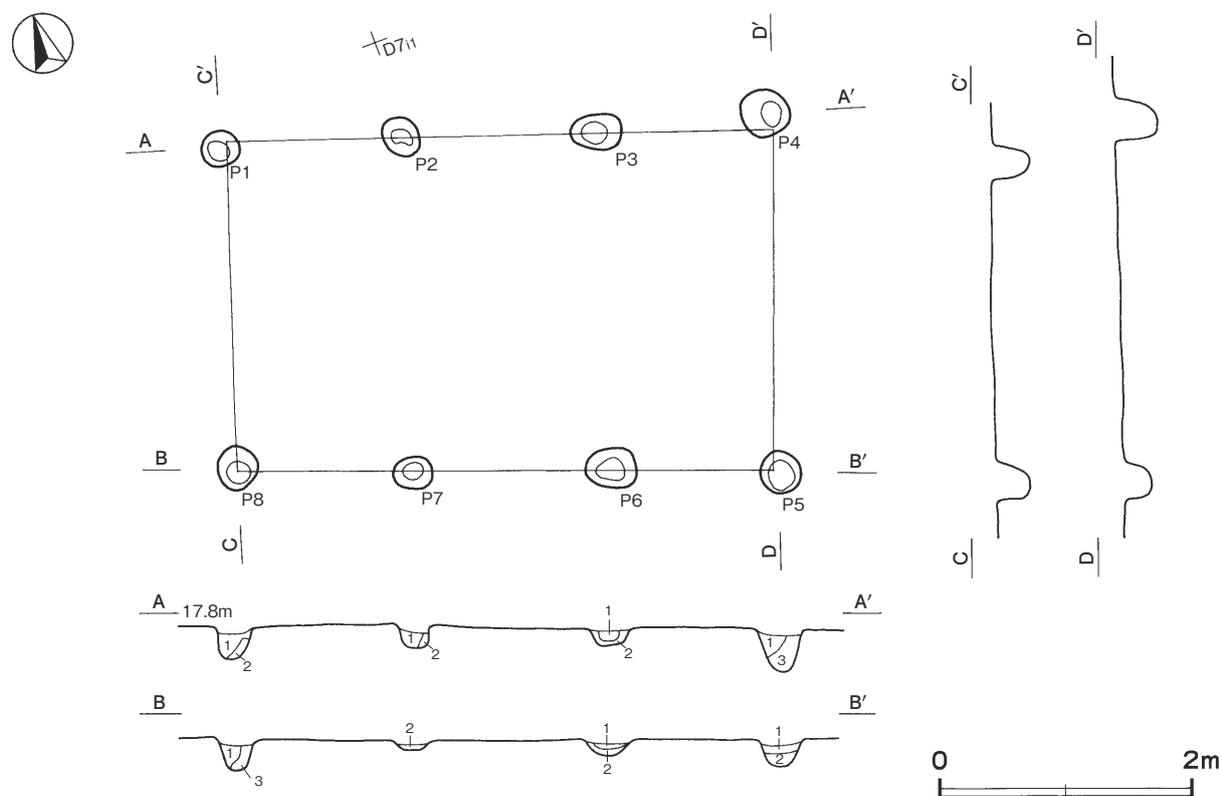
規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-72°-Wの東西棟である。規模は、桁行4.40m、梁行2.75mで、面積は12.1㎡である。柱間寸法は、桁行が1.35m(4.5尺)~1.50m(5尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径30~43cm、短径25~36cmである。深さは8~34cmで、掘方の断面はU字状である。すべて柱抜き取り後の覆土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、第1号掘立柱建物跡と軸方向がほぼ同じであることから、江戸時代と考えられる。性格は、構造が脆弱であることから、納屋などの倉庫と考えられるが、詳細は不明である。位置から第1号掘立柱建物跡と同時期に機能していた可能性がある。



第37図 第2号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡 (第38図)

位置 調査区中央部のD 6 f0区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN - 22° - Eの南北棟である。規模は、桁行3.92m、梁行3.56mで、面積は14.0㎡である。柱間寸法は、桁行が1.65m (5.5尺) ~ 1.80m (6尺)で、柱筋は不揃いである。

柱穴 9か所。平面形は円形または楕円形で、長径30~60cm、短径30~53cmである。深さは12~28cmで、掘方の断面はU字状である。土層はすべて柱抜き取り後の覆土である。

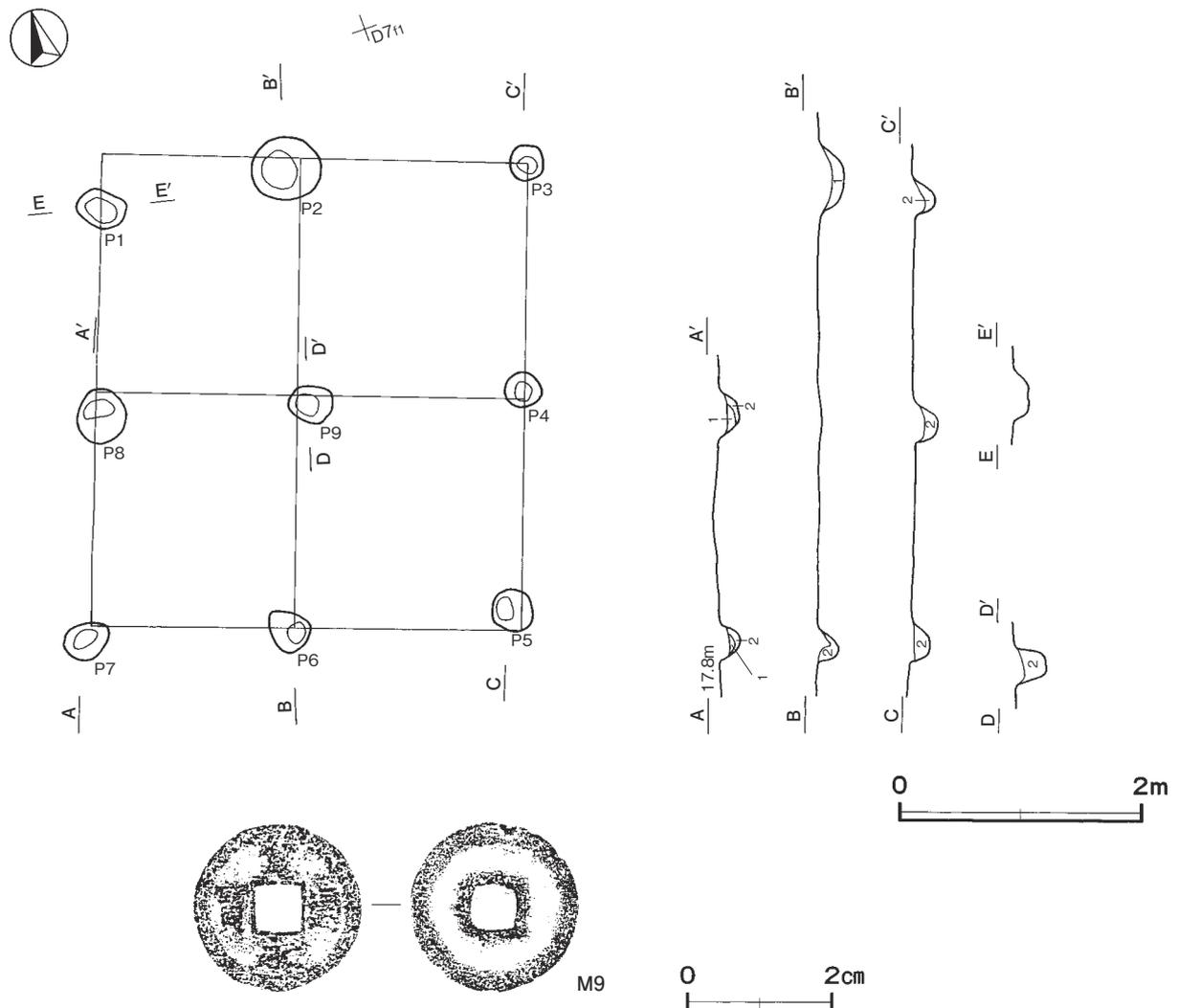
柱穴土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 銭貨1点(寛永通寶)が、P9の覆土中から出土している。M9は、柱を抜き取った後に周囲から流れ込んだものとみられる。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後葉以降と考えられる。性格は不明である。



第38図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M9	銭貨	寛永通寶	2.36	0.62	2.70	銅	1697	新寛永	P9覆土中	PL19

第4号掘立柱建物跡（第39図）

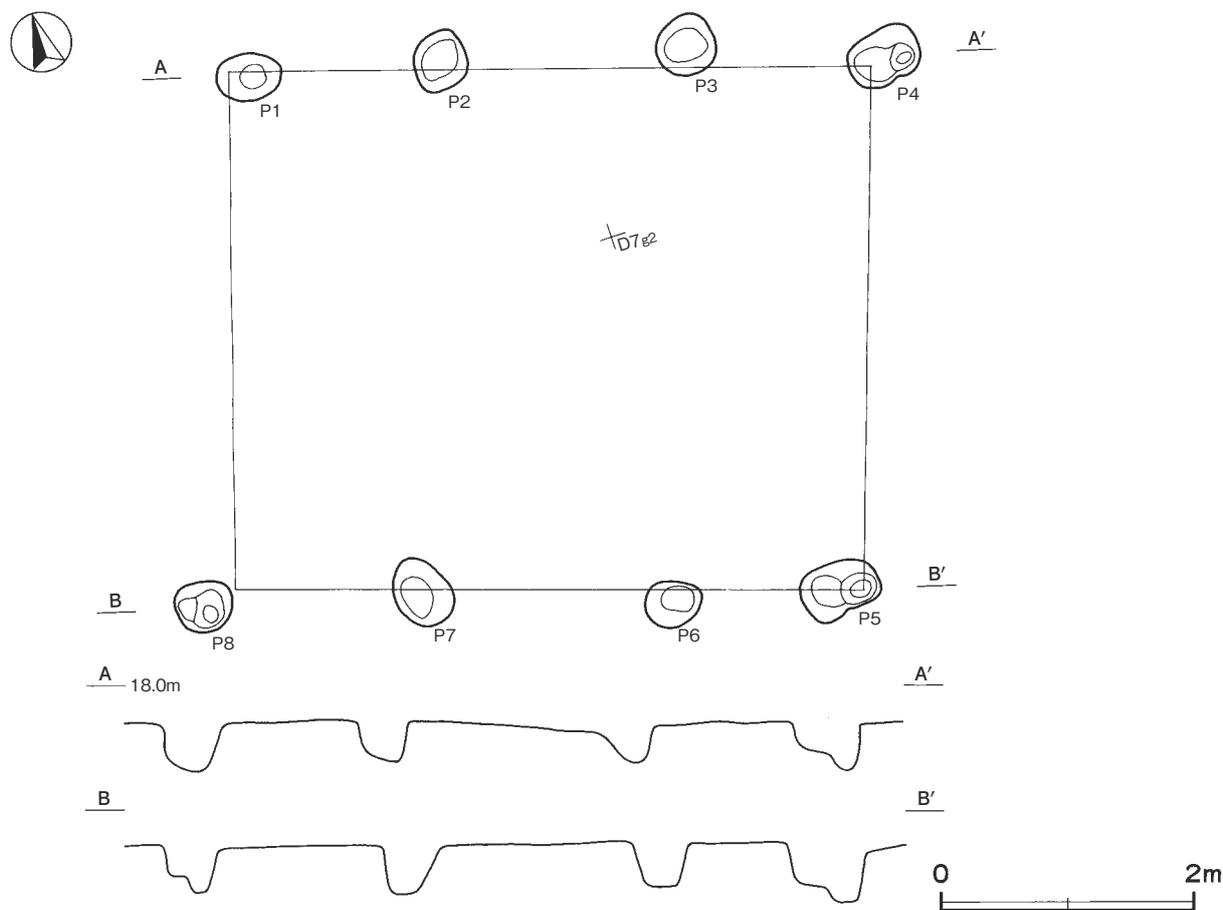
位置 調査区中央部のD7fl区、標高18mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡、第125・375号土坑、第1号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-73°-Wの東西棟である。規模は、桁行5.40m、梁行4.20mで、面積は22.7㎡である。柱間寸法は、桁行が1.50m（5尺）～2.10m（7尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径38～60cm、短径33～46cmである。深さは28～45cmで、掘方の断面はU字状である。

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は、構造が脆弱であることから、納屋などの倉庫と考えられるが、詳細は不明である。位置から第5号掘立柱建物跡と同時代に機能していた可能性がある。



第39図 第4号掘立柱建物跡実測図

第5号掘立柱建物跡（第40図）

位置 調査区中央部のD7h1区，標高18mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号ピット群と重複しているが，新旧関係は不明である。

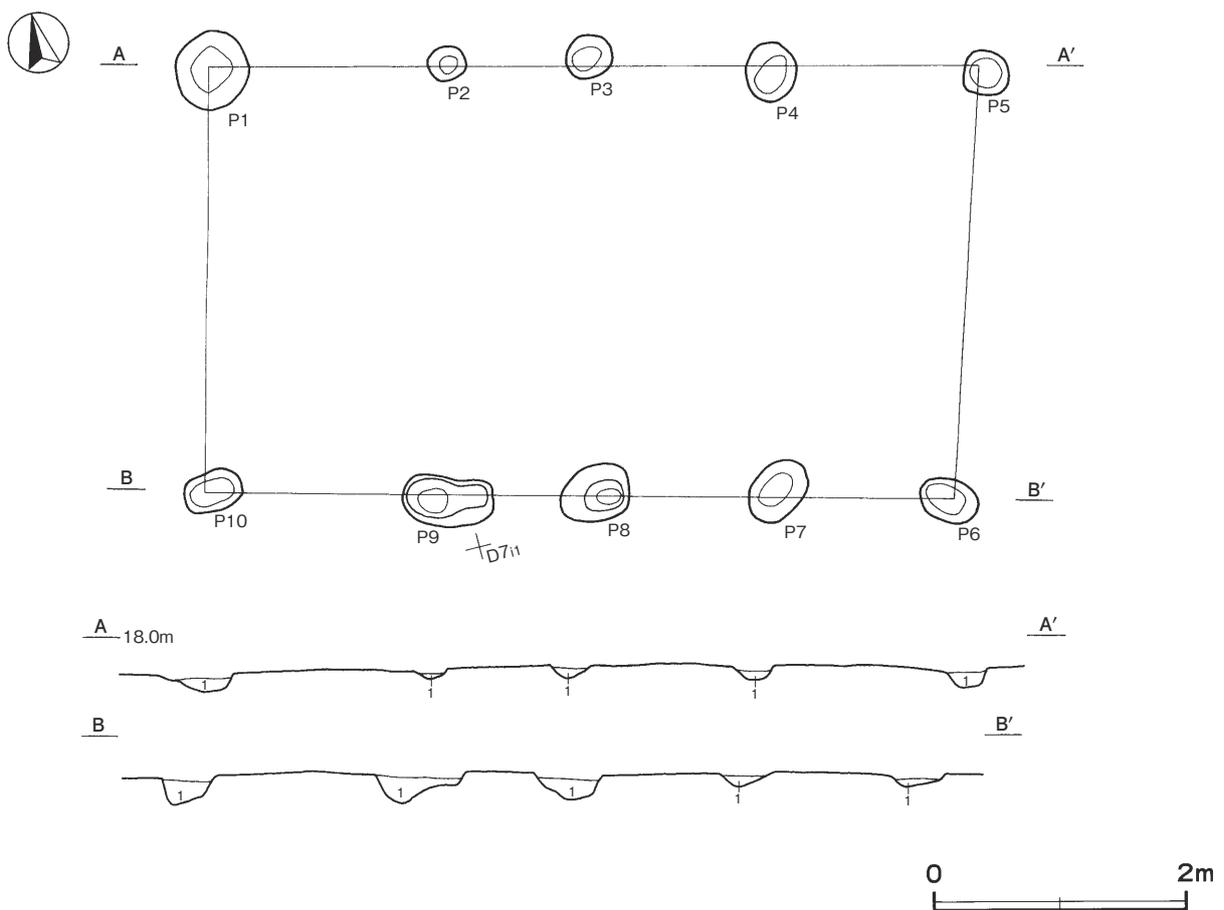
規模と構造 桁行4間，梁行1間の側柱建物跡で，桁行方向はN-75°-Wの東西棟である。規模は，桁行6.00m，梁行3.36mで，面積は20.2㎡である。柱間寸法は，桁行が1.20m（4尺）～1.80（6尺）で，柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。平面形は円形または楕円形で，長径30～73cm，短径30～49cmである。深さは5～25cmで，掘方の断面はU字状である。すべて柱抜き取り後の覆土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる。性格は，構造が脆弱であることから，納屋などの倉庫と考えられるが，詳細は不明である。位置から第4号掘立柱建物跡と同時期に機能していた可能性がある。



第40図 第5号掘立柱建物跡実測図

表3 江戸時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数		規模	面積 (㎡)	柱間寸法		柱 穴			主な出土遺物	時 期	備 考	
			桁×梁(間)	桁 × 梁 (m)			桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形				深さ(cm)
1	D6f0~ D7h2	N-74°-W	4×1		8.00×4.50	36.0	1.80~ 2.40	4.50	側柱	10	円形・楕円形	25~54	土師質土器	江戸時代	SB3・4、PG1との 新旧不明
2	D6f0~ D7j1	N-72°-W	3×1		4.40×2.75	12.1	1.35~ 1.50	2.60~ 2.75	側柱	8	円形・楕円形	8~34		江戸時代	
3	D6f0~ D6g0	N-22°-E	2×2		3.92×3.56	14.0	1.65~ 1.80	1.70~ 1.80	総柱	9	円形・楕円形	12~28	銭貨	17世紀後葉以降	SB1との新旧不明
4	D7f1~ D7g2	N-73°-W	3×1		5.40×4.20	22.7	1.50~ 2.10	4.20	側柱	8	円形・楕円形	28~45		江戸時代	SB1、SK125・375、 PG1との新旧不明
5	D6g0~ D7i1	N-75°-W	4×1		6.00×3.36	20.2	1.20~ 1.80	3.36	側柱	10	円形・楕円形	5~25		江戸時代	PG1との新旧不明

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第41図)

位置 調査区東部のD12j3区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は長径1.27m、短径1.20mの円形である。確認面から深さ188cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で、崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため、下部の構造は不明である。

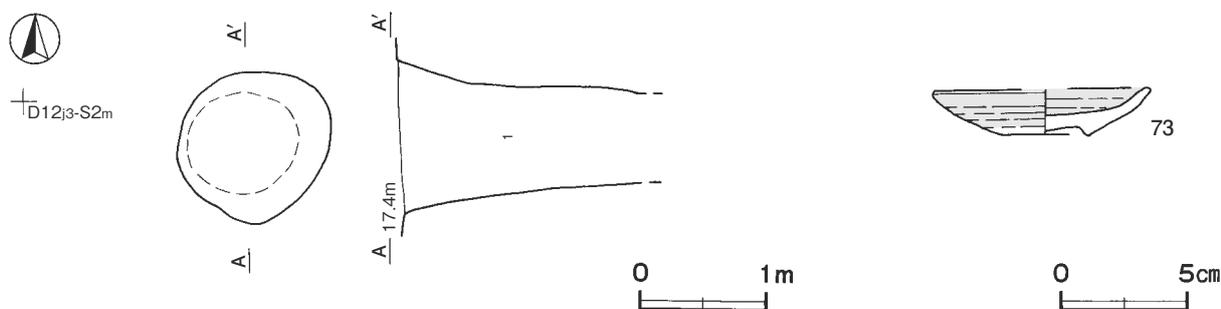
覆土 単一層であることから、一時に埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 陶器片3点(碗、小皿、播鉢)が、覆土中から出土している。土器は覆土中から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から17世紀後葉以降と考えられる。



第41図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文 様・特 徴	釉薬	産 地	出土位置	備 考
73	陶器	小皿	[8.4]	1.9	3.5	長石・石英 灰	外・内面ロクロナデ	灰	瀬戸・美濃系	覆土中	30%

第2号井戸跡 (第42図)

位置 調査区中央部のD9f2区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は長径0.96m、短径0.90mの円形である。確認面から深さ136cmまで円筒状に掘り込ま

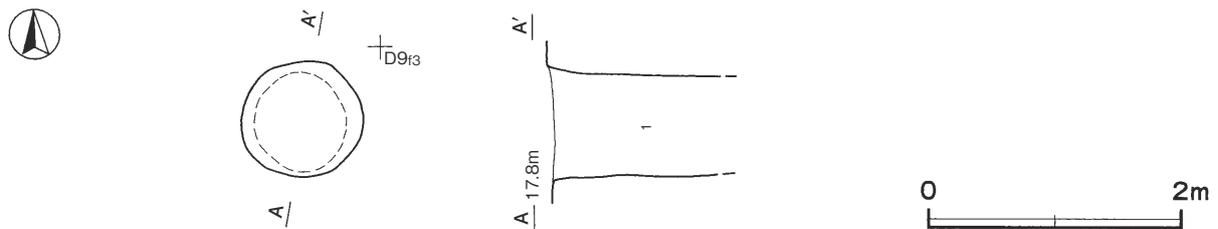
れていることを確認した時点で、崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため、下部の構造は不明である。

覆土 単一層であることから、一時に埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる第1・4号井戸跡と比較して、形状や覆土の土質が類似していることから、ほぼ同時期と推測できる。



第42図 第2号井戸跡実測図

第3号井戸跡 (第43図)

位置 調査区中央部のD9e1区, 標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

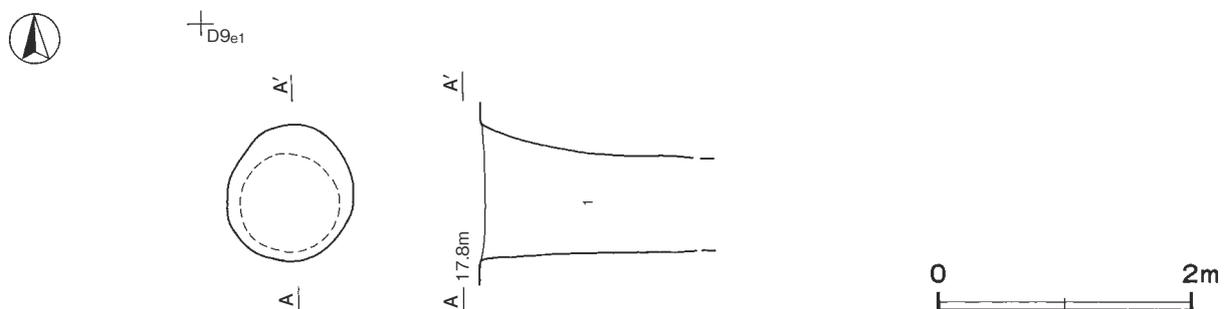
規模と形状 確認面は長径1.09m, 短径1.01mの円形である。確認面から深さ170cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で、崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため、下部の構造は不明である。

覆土 単一層であることから、一時に埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる第1・4号井戸跡と比較して、形状や覆土の土質が類似していることから、ほぼ同時期と推測できる。



第43図 第3号井戸跡実測図

第4号井戸跡（第44図）

位置 調査区中央部のD6h9区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は長径0.96m、短径0.93mの円形である。確認面から深さ218cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で、崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため、下部の構造は不明である。

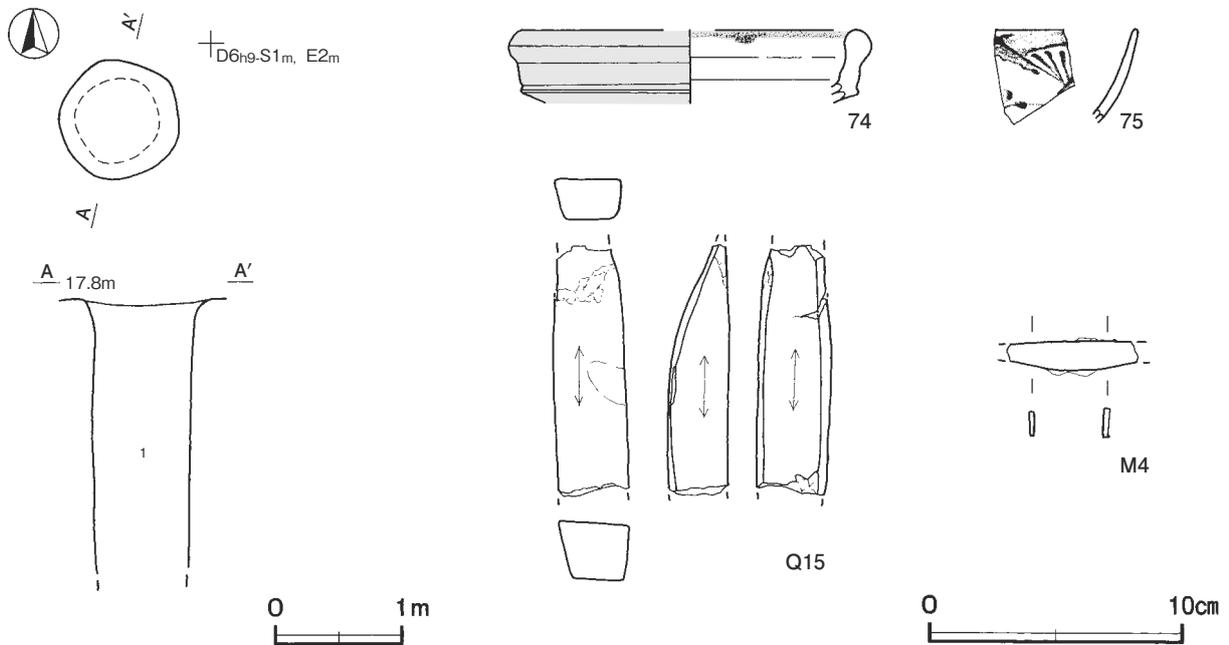
覆土 単一層であることから、一時に埋め戻されたとみられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 陶器片2点（碗、鉢）、磁器片2点（碗）、石器1点（砥石）、鉄製品1点（刀子）のほか、土師器片1点（甕）が、覆土中から出土している。遺物は覆土中から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から17世紀後葉以降と考えられる。



第44図 第4号井戸跡・出土遺物実測図

第4号井戸跡出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
74	陶器	鉢	[13.4]	(2.9)	-	長石 褐	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中	5%
75	磁器	碗	-	(3.7)	-	緻密 灰白	染付 草花文	透明	肥前系	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q15	砥石	(10.0)	2.8	2.4	(101.2)	凝灰岩	砥面4面	覆土中	PL19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	刀子	(5.2)	1.3	0.2~0.3	(4.4)	鉄	刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土中	

第5号井戸跡 (第45図)

位置 調査区西部のD 3g3区, 標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は長径1.24m, 短径1.04mの円形である。確認面からの深さは496cmである。上部は深さ40cmまで攪乱を受けているが, それより下部は深さ232cmまで円筒状を呈し, 一時張り出した後, 底面に向かってすぼまっている。張り出し部は, 壁が崩落したことによるものとみられる。底面は平坦で, 壁から湧水が認められた。

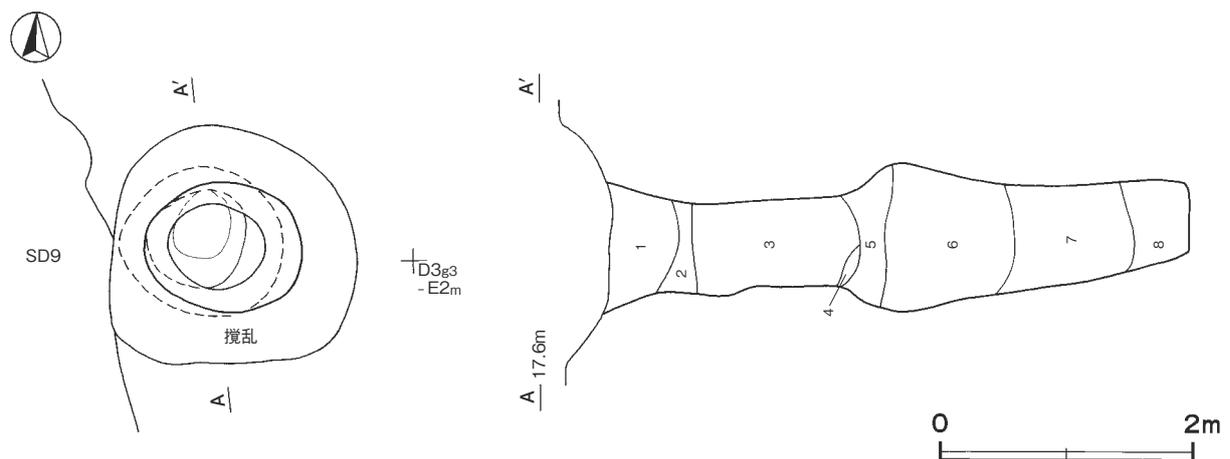
覆土 8層に分層できる。第8層は壁の崩落土である。第1～7層はロームブロックが多く含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量 |
| 3 明褐色 ロームブロック多量 | 7 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量 | 8 褐色 ロームブロック多量, 粘土ブロック微量 |

遺物出土状況 陶器片1点(碗)が, 覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土土器が細片のため特定は困難であるが, 江戸時代と考えられる。



第45図 第5号井戸跡実測図

表4 江戸時代井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	D 12j3	-	円形	1.27 × 1.20	(188)	-	直立	人為	陶器	
2	D 9f2	-	円形	0.96 × 0.90	(136)	-	直立	人為		
3	D 9e1	-	円形	1.09 × 1.01	(170)	-	直立	人為		
4	D 6h9	-	円形	0.96 × 0.93	(218)	-	直立	人為	陶器, 磁器, 石器, 鉄製品	
5	D 3g3	-	円形	1.24 × 1.04	496	平坦	直立	人為	陶器	

(3) 道路跡

第1号道路跡(第46図・付図1)

位置 調査区東部のD 13f6～D 14j6区, 標高17mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2号溝跡を掘り込み, 第1号溝に掘り込まれている。

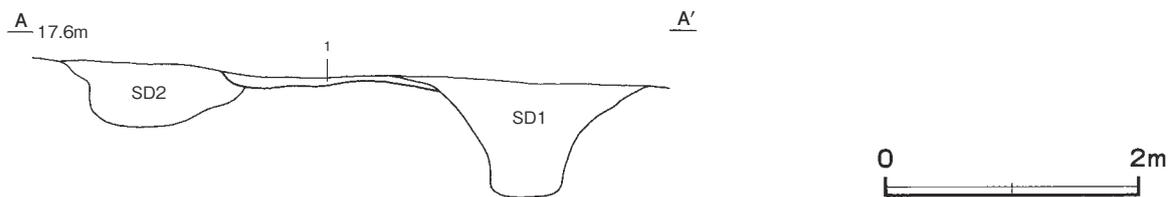
規模と形状 東西両端部が調査区域外に延びているため, 長さは46.30mしか確認できなかった。E 13f6区からN-65°-E方向にほぼ直線的に延びており, 幅は0.80～1.94mである。

構築土 覆土なし。第1層上面は路面で, 使用している間に堆積した層が踏み固められて硬化している。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量(締まり強い)

所見 時期は, 伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが, 重複関係から江戸時代と考えられる。



第46図 第1号道路跡実測図

(4) 溝跡

第1号溝跡(第47・48図)

位置 調査区東部のE 13f6～E 14a6区, 標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西両端部が調査区域外に延びているため, 長さは44.18mしか確認できなかった。E 13f6区からN-65°-E方向にほぼ直線的に延びており, 上幅1.08～2.40m, 下幅0.16～0.58m, 深さ62～100cmである。底面は平坦で, 壁は外傾している。

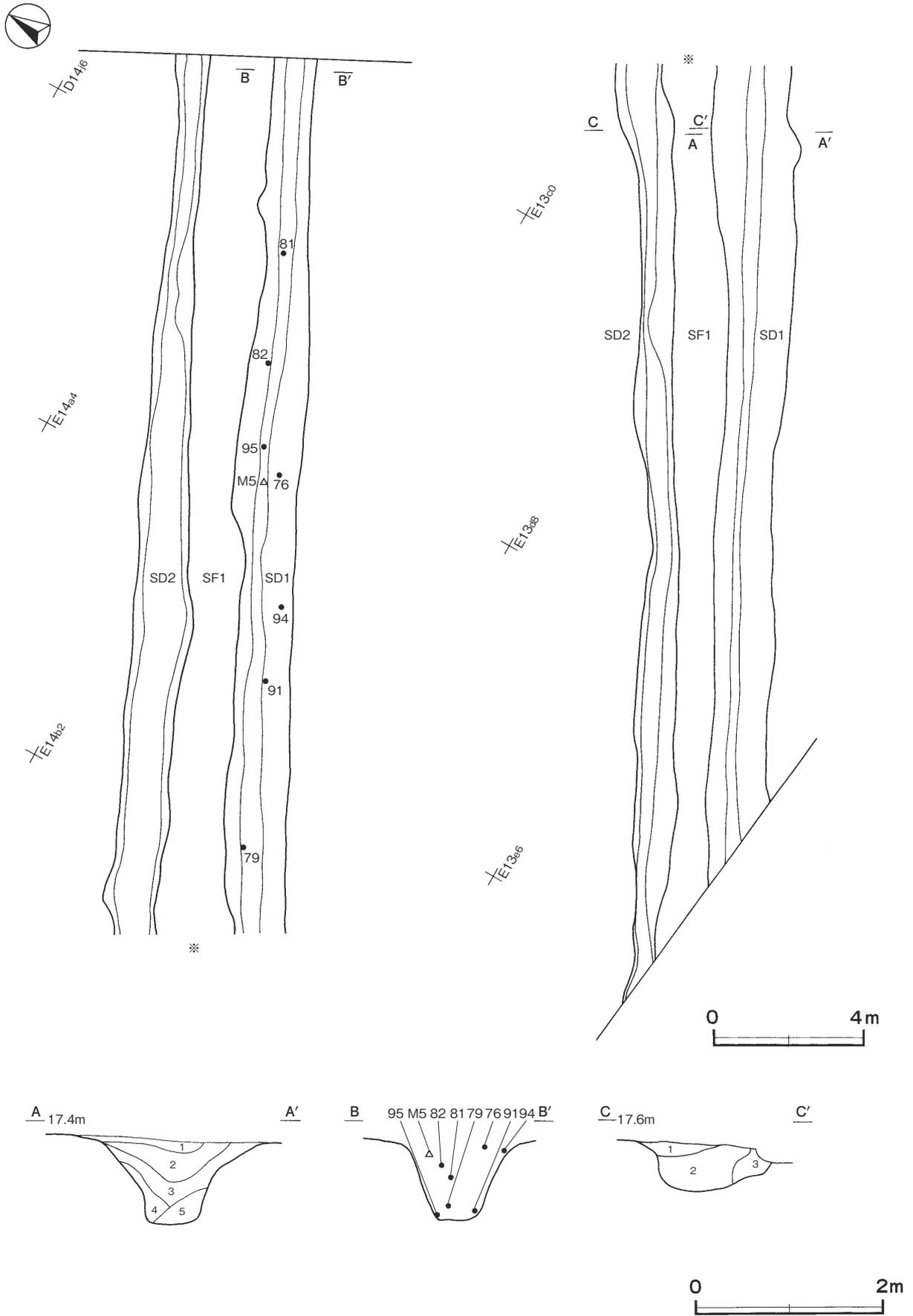
覆土 5層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

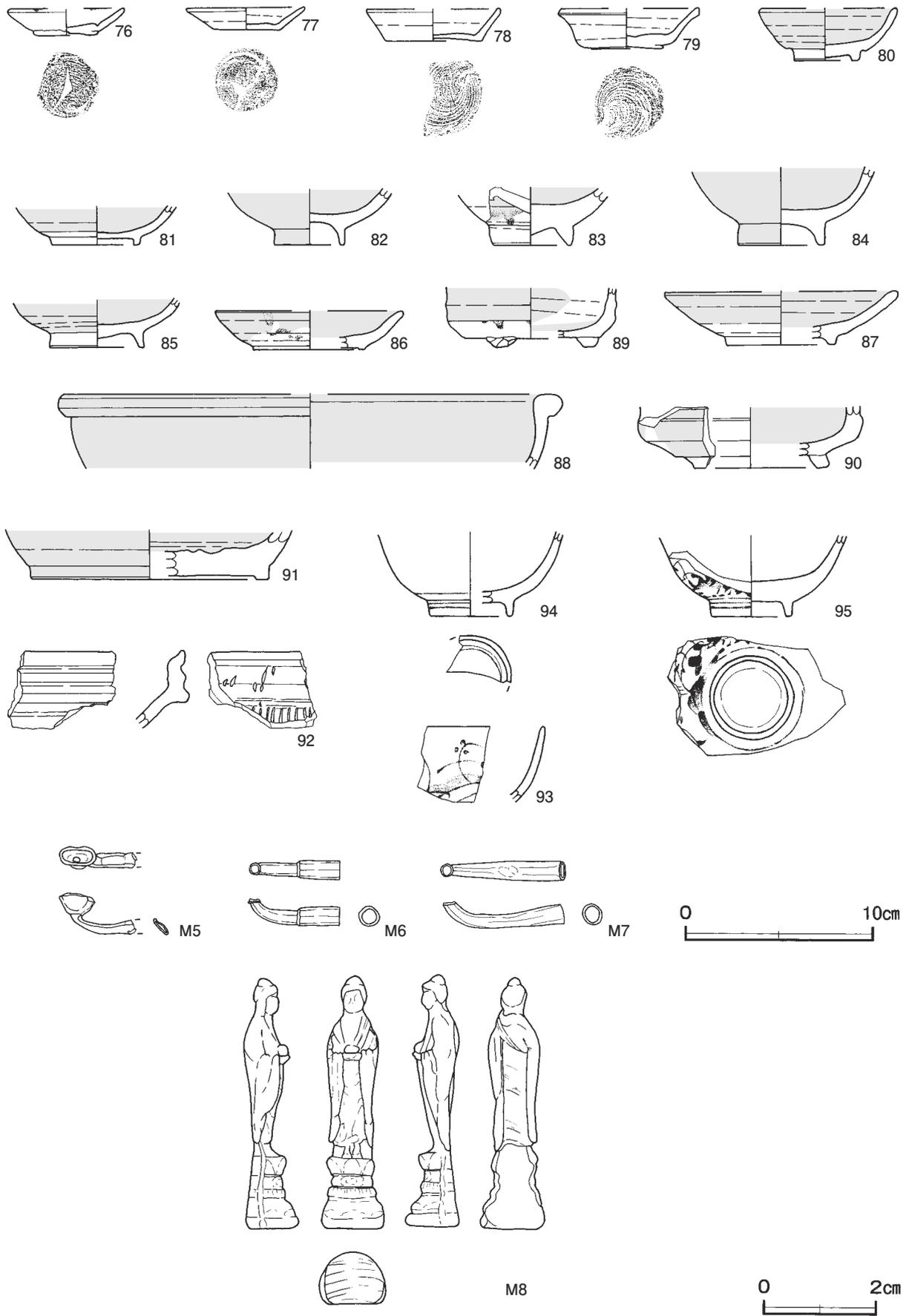
1 黒褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色 ロームブロック少量
5 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片72点(小皿11, 焙烙60, 鉢1), 陶器片53点(碗21, 灯明皿1, 皿13, 鉢1, 播鉢6, 香炉6, 瓶4, 甕1), 磁器片21点(碗), 石器8点(砥石6, 石臼2), 銅製品4点(煙管3, 弥勒仏立像1)のほか, 縄文土器片26点(深鉢25, 台付鉢1), 土師器片49点(壺17, 甕32), 須恵器片6点(高台付坏1, 甕5), 石器2点(鏃), 土製品3点(管状土錘2, 土玉1), 鉄製品5点(不明), 剥片3点が, 覆土上層から下層にかけて出土している。遺物は覆土中から出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から17世紀後葉から18世紀前葉と考えられる。性格は, 重複関係から第1号道路跡が廃絶した後に掘られた区画溝と考えられるが, 詳細は不明である。M8の鑄造年代は, 形態の特徴から室町時代と考えられることから, 伝世していると考えられる。



第 47 図 第 1・2 号溝跡実測図



第48图 第1号沟迹出土遗物实测图

第1号溝跡出土遺物観察表(第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
76	土師質土器	小皿	[6.0]	1.4	[3.4]	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	50% PL16
77	土師質土器	小皿	6.1	1.3	3.6	石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	80% PL16
78	土師質土器	小皿	[7.0]	1.8	[5.0]	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	30% PL16
79	土師質土器	小皿	[7.3]	2.2	4.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土下層	70% PL16

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
80	陶器	碗	[7.2]	2.8	3.4	長石・石英 灰白	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中	30% PL16
81	陶器	碗	-	(2.1)	[4.6]	長石 浅黄	外・内面ロクロナデ	灰	瀬戸・美濃系	覆土中層	30%
82	陶器	碗	-	(3.2)	3.6	石英 灰	全面施釉	灰	瀬戸・美濃系	覆土中層	30% PL16
83	陶器	碗	-	(3.1)	4.2	石英 灰白	外・内面ロクロナデ	灰	瀬戸・美濃系	覆土中	30%
84	陶器	碗	-	(4.2)	4.4	長石 浅黄	全面施釉	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	60% PL16
85	陶器	碗	-	(2.6)	4.8	長石・石英 明黄褐	外・内面ロクロナデ	灰	瀬戸・美濃系	覆土中	50% PL16
86	陶器	小皿	[10.0]	2.1	[6.0]	石英 にぶい黄橙	外・内面ロクロナデ	鉄	不明	覆土中	40% PL17
87	陶器	皿	[12.2]	2.9	[5.8]	長石 灰白	外・内面ロクロナデ	灰	瀬戸・美濃系	覆土中	30% PL17
88	陶器	鉢	[26.2]	(4.1)	-	長石 灰黄褐	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	5%
89	陶器	香炉	-	(3.2)	[7.4]	長石 灰白	脚部1か所残存	灰	瀬戸・美濃系	覆土中	15% PL17
90	陶器	香炉	-	(4.3)	[8.0]	長石 浅黄	脚部1か所残存	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	10%
91	陶器	瓶	-	(2.7)	[12.8]	長石 褐	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土下層	5%
92	陶器	播鉢	-	(4.1)	-	長石・石英 にぶい黄褐	体部内面櫛目	鉄	堺・明石系	覆土中	5%
93	磁器	碗	-	(4.1)	-	緻密 灰白	染付 草花文	透明	肥前系	覆土中	10%
94	磁器	碗	-	(4.6)	[4.4]	緻密 灰白	染付	透明	肥前系	覆土上層	20% PL16
95	磁器	碗	-	(4.4)	4.2	緻密 灰白	染付 草花文	透明	肥前系	覆土下層	60% PL16

番号	器種	長さ	火皿径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	煙管	(4.1)	-	-	(4.6)	銅	雁首部 火皿・小口ともに歪んでいる	覆土上層	
M6	煙管	(4.9)	-	1.0	(6.0)	銅	雁首部 火皿欠損	覆土中	
M7	煙管	(6.6)	-	1.1	(6.8)	銅	雁首部 火皿欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M8	弥勒仏立像	4.5	1.2	1.0	12.56	銅	鑄銅一鑄造り 頭部肉髻が2段 両手で宝珠をもつ 胸部厚手 台座の蓮弁幅が広い	覆土中	PL19

第2号溝跡(第47・49図)

位置 調査区東部のE 13f5～D 14j6区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 東西両端部が調査区域外に伸びているため、長さは47.70mしか確認できなかった。E 13f5区からN-65°-E方向にほぼ直線的に伸びている。南部は第1号道路と重複しているため、確認できたのは上幅0.60～1.56m、下幅0.20～1.16m、深さ12～43cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

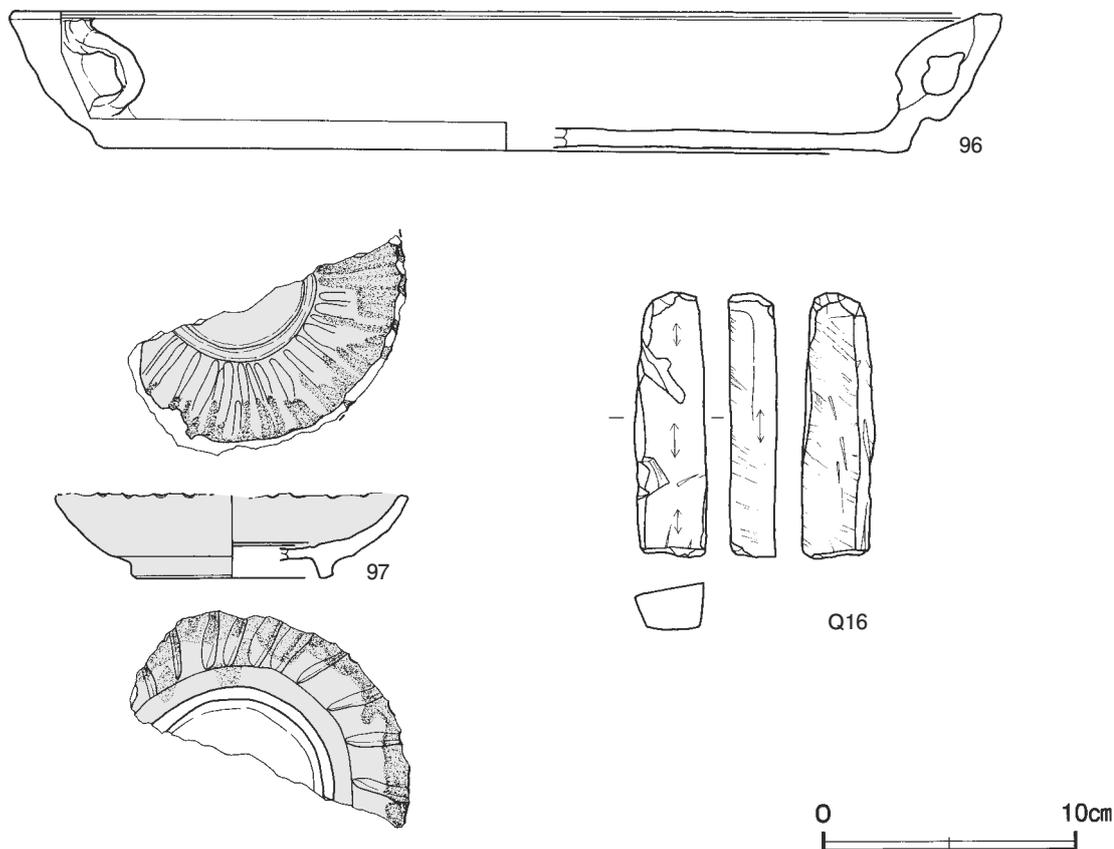
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片5点(焙烙)、陶器片7点(碗3、鉢2、播鉢2)のほか、縄文土器片8点(深鉢)、土師器片11点(甕)、須恵器片2点(坏)、土製品1点(不明)、剥片1点が、覆土中から出土している。遺物

は覆土中から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から17世紀後葉から18世紀前葉と考えられる。性格は、区画を目的とした溝と考えられるが、詳細は不明である。



第49図 第2号溝跡出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
96	土師質土器	焙烙	39.1	5.6	[32.2]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	内耳2か所残存 外・内面ナデ	覆土中	80% PL15	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴		釉薬	産地	出土位置	備考
97	陶器	皿	[14.0]	(3.4)	[8.0]	長石・石英 灰白	菊花形		灰	瀬戸・美濃系	覆土中	40% PL17
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考	
Q16	砥石	10.5	2.9	1.85	86.8	凝灰岩	砥面3面			覆土中	PL19	

表5 江戸時代溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	E 136 ~ E 14a6	N - 65° - E	直線	(44.18)	1.08 ~ 2.40	0.16 ~ 0.58	62 ~ 100	U字状	外傾	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 銅製品	SF1 → 本跡
2	E 135 ~ D 14j6	N - 65° - E	直線	(47.70)	(0.60 ~ 1.56)	(0.20 ~ 1.16)	12 ~ 43	浅いU字状	外傾	人為	土師質土器, 陶器	本跡 → SF1

(5) 粘土貼土坑

第1号粘土貼土坑 (第50図)

位置 調査区中央部のD 5 e9区, 標高17 mほどの平坦な台地上に位置している。

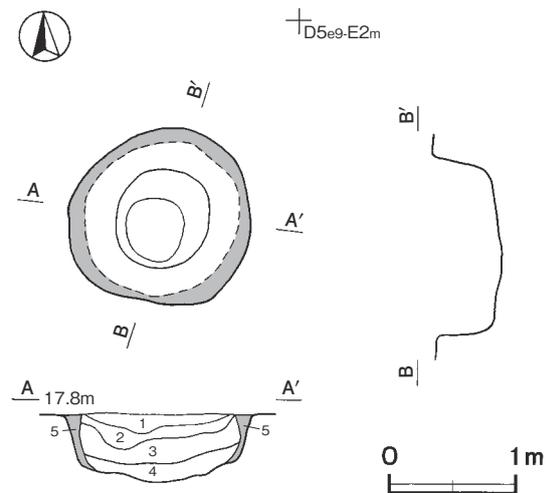
規模と形状 掘方の規模は, 径1.47 mほどの円形で, 深さは52cmである。壁面に厚さ8~16cmの厚さで粘土が貼られている粘土の内側は, 径1.24 mほどの円形で, 深さは52cmである。底面は皿状で, 壁はほぼ直立している。

覆土 4層に分層できる。第5層は壁面に貼られた粘土である。第1~4層はロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 灰白色 | 粘土ブロック多量 |

所見 時期は, 伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが, 江戸時代と考えられる同じ形状の粘土貼土坑が, 隣接する馬立原西遺跡で確認されていることから, ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第50図 第1号粘土貼土坑実測図

(6) 土坑

第75号土坑 (第51図)

位置 調査区東部のD 12i5区, 標高17 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径3.02 m, 短径2.57 mの楕円形で, 長径方向はN - 64° - Wである。深さは78cmで, 底面は平坦であるが, 東側が底面から24cmほど掘りくぼめられている。壁は外傾している。

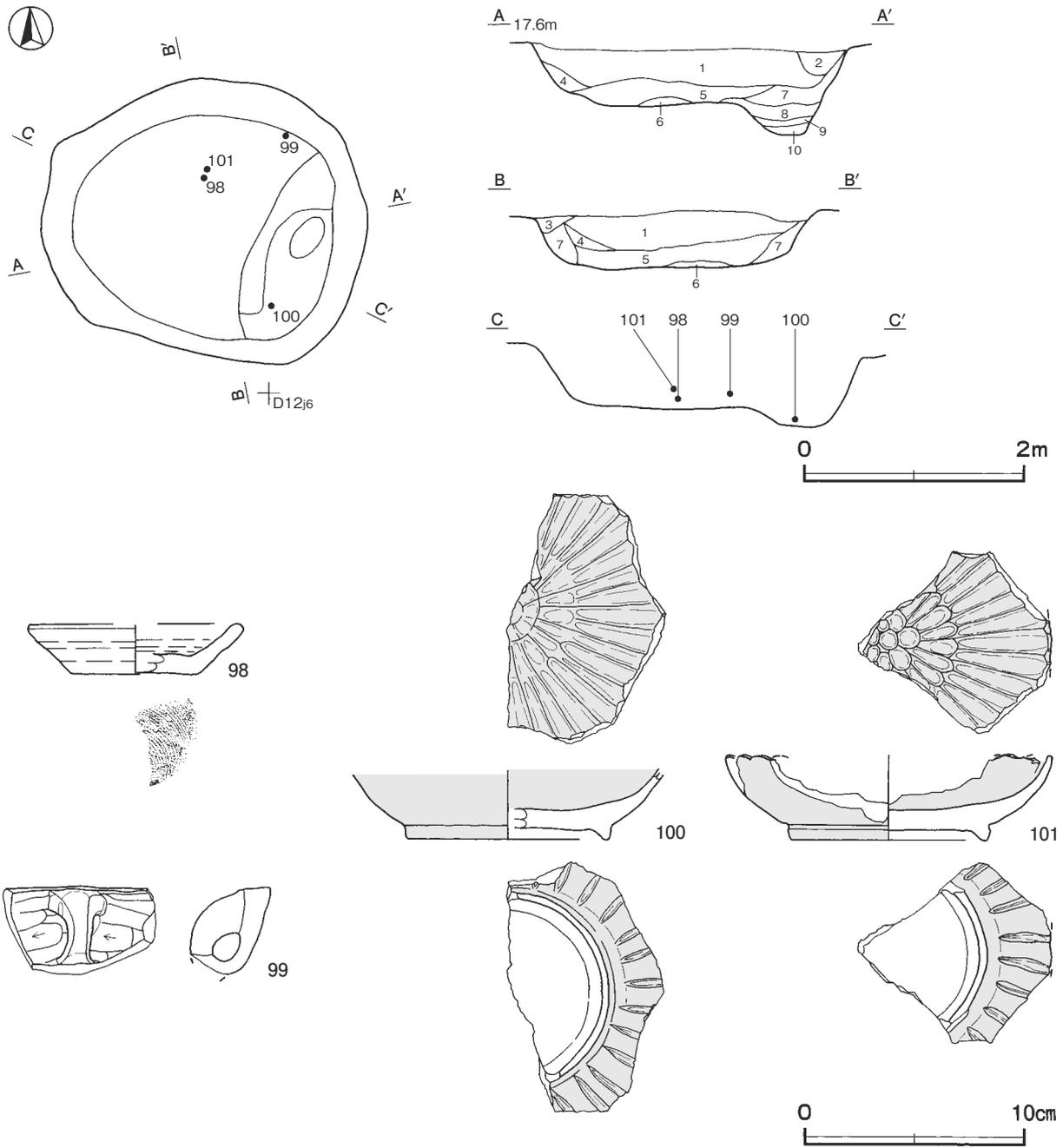
覆土 10層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|------|------------------------|----|-----|-----------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 | 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック少量 | 8 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック中量 | 9 | 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 | 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 | 暗褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師質土器片17点(小皿1, 焙烙16), 陶器片10点(碗8, 小皿2)のほか, 古墳時代の土師器片1点(高坏), 鉄滓1点(15.5 g)が出土している。遺物は覆土中から出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から17世紀後葉から18世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第51図 第75号土坑・出土遺物実測図

第75号土坑出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
98	土師質土器	小皿	[9.6]	2.3	[5.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土下層	30% PL16
99	土師質土器	焙烙	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	内耳1か所残存 外・内面ナデ	覆土下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
100	陶器	皿	-	(3.2)	[9.2]	長石・石英 灰白	菊花形	灰	瀬戸・美濃系	覆土下層	20% PL17
101	陶器	皿	[14.8]	3.9	[9.0]	長石・石英 灰白	菊花形	灰	瀬戸・美濃系	覆土下層	25% PL17

5 その他の遺構と遺物

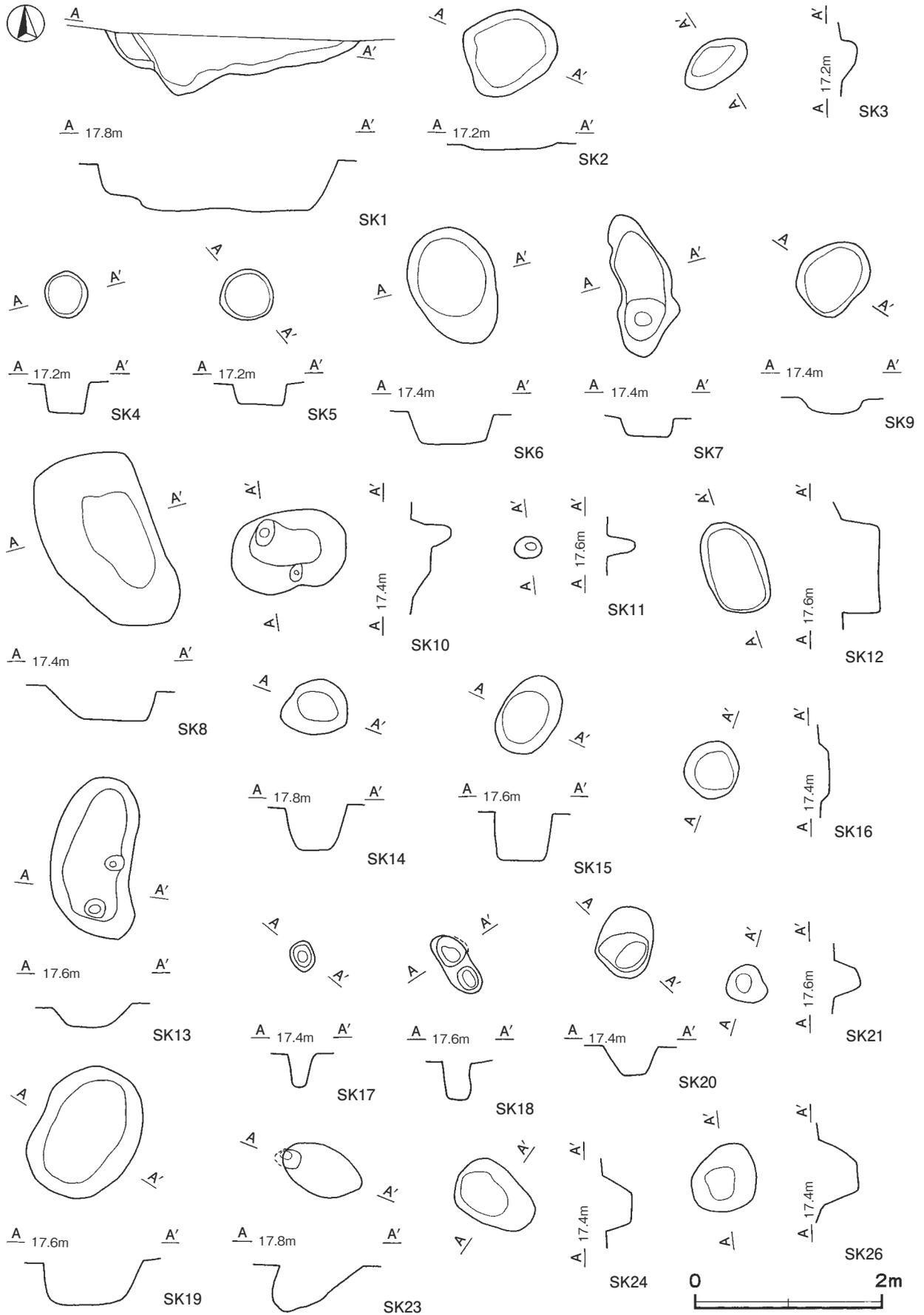
今回の調査で、伴う遺物が出土していないことから、時期が明らかでない土坑 379 基、炉跡 1 基、溝跡 30 条、柱穴列 5 条、ピット群 1 か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑

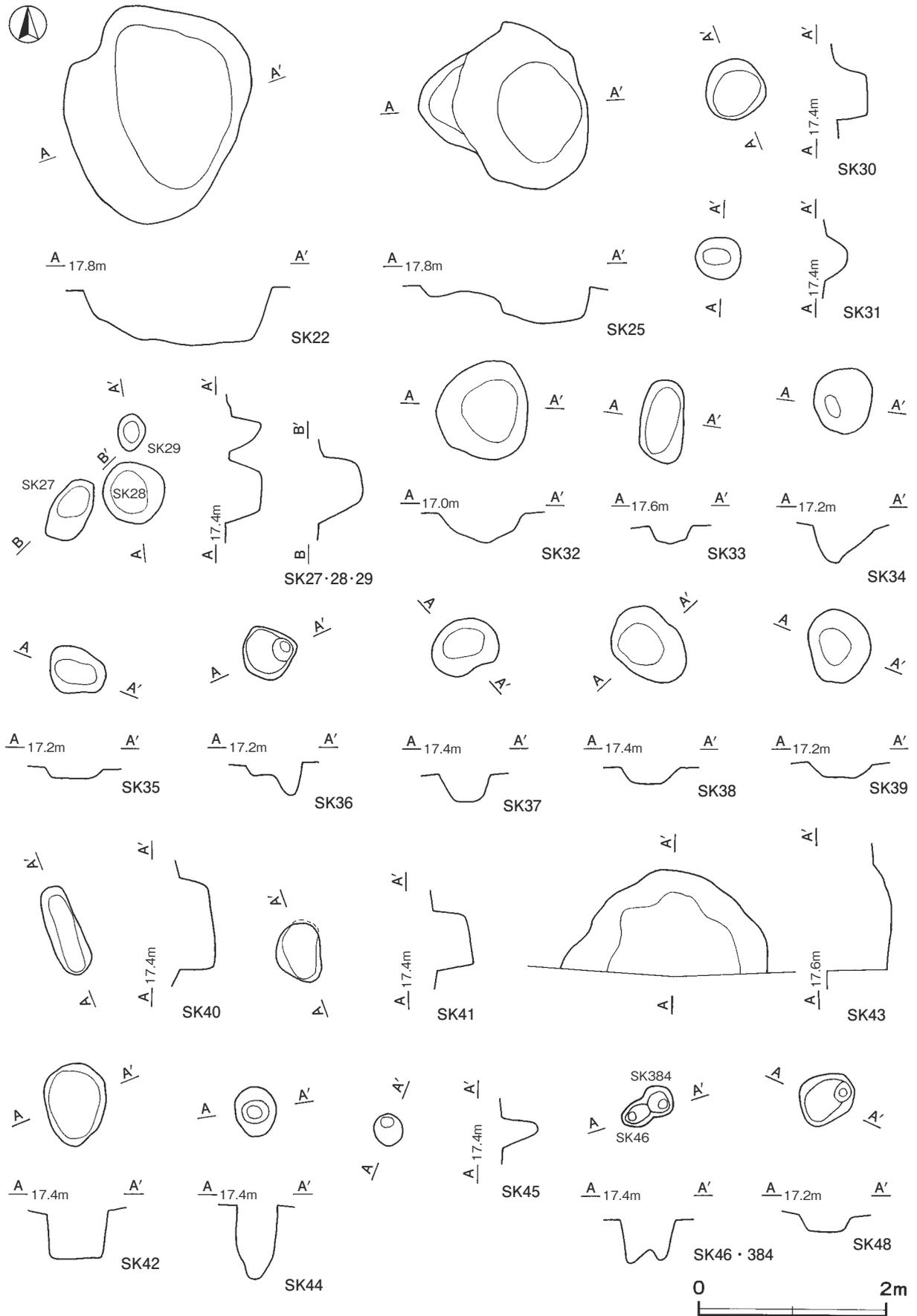
時期不明の土坑 379 基については、実測図（第 52～67 図）と一覧表を掲載する。

表 6 その他の土坑一覧表

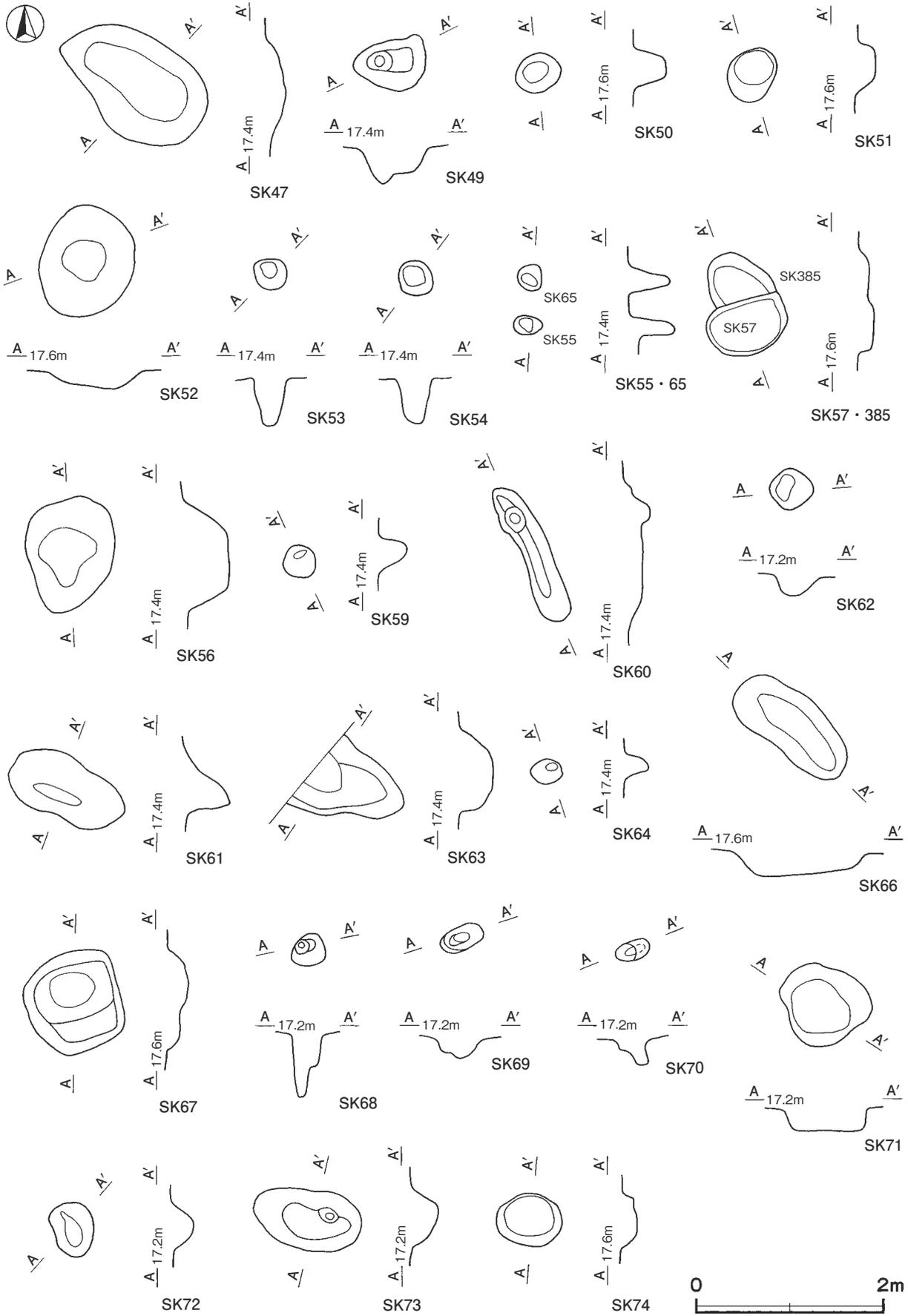
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	D 11f4	N - 87° - W	不定形	2.86 × (0.65)	46	平坦	外傾	人為		
2	E 14j9	N - 66° - E	隅丸長方形	0.98 × 0.87	10	平坦	緩斜	自然		
3	E 13d7	N - 56° - E	楕円形	0.76 × 0.54	17	平坦	外傾 緩斜	自然		
4	E 14d4	-	円形	0.48 × 0.46	32	平坦	直立	自然		
5	E 14d4	-	円形	0.56 × 0.56	24	平坦	直立	自然		
6	E 14d2	N - 22° - W	楕円形	1.20 × 0.93	35	平坦	外傾	自然		
7	E 13e0	N - 11° - W	不整楕円形	1.55 × 0.67	20	平坦	緩斜 直立	人為		
8	E 13e0	N - 22° - W	楕円形	2.13 × 1.21	37	平坦	外傾 緩斜	自然		
9	E 13e5	N - 33° - E	楕円形	0.83 × 0.68	17	平坦	外傾	自然		
10	E 13e4	N - 77° - E	楕円形	1.26 × 0.84	15	平坦	外傾 緩斜	自然		
11	E 13b0	N - 86° - W	楕円形	0.26 × 0.23	30	皿状	外傾	自然		
12	E 13b9	N - 37° - W	楕円形	1.04 × 0.70	42	平坦	直立	自然		
13	E 13c6	N - 7° - E	楕円形	1.70 × 0.85	21	平坦	外傾	自然		
14	E 13a8	N - 80° - E	楕円形	0.73 × 0.57	49	皿状	外傾	自然		
15	E 13a6	N - 22° - E	楕円形	0.88 × 0.61	54	平坦	直立	自然		
16	E 13b3	-	円形	0.62 × 0.58	10	平坦	緩斜	自然	縄文土器	
17	E 13c2	N - 51° - W	楕円形	0.32 × 0.26	36	平坦	外傾	人為		
18	E 13b0	N - 36° - W	楕円形	0.72 × 0.32	42	平坦	直立	自然		
19	E 14a1	N - 30° - E	楕円形	1.43 × 1.07	45	平坦	外傾	自然		
20	E 13c9	N - 1° - E	楕円形	0.77 × 0.60	30	平坦	外傾	自然		
21	E 14b1	-	円形	0.43 × 0.40	28	皿状	外傾	自然		
22	D 13j7	N - 33° - E	不整楕円形	2.28 × 2.00	60	平坦	外傾 緩斜	人為	縄文土器, 石器, 鉄製品	
23	D 13i4	N - 70° - W	楕円形	0.90 × 0.54	50	傾斜	緩斜 内傾	自然		
24	E 13c1	N - 56° - W	楕円形	0.93 × 0.63	31	平坦	外傾	自然		
25	D 13j6	-	不整円形	1.80 × 1.70	39	有段	外傾	自然		
26	E 13a3	N - 29° - E	楕円形	0.78 × 0.67	34	平坦	外傾 緩斜	自然		
27	E 13b4	N - 33° - E	楕円形	0.76 × 0.42	46	平坦	外傾 緩斜	自然		
28	E 13b4	-	円形	0.67 × 0.66	36	平坦	外傾	人為		
29	E 13b4	N - 3° - E	楕円形	0.39 × 0.28	34	傾斜	外傾	人為		
30	E 13c4	-	円形	0.63 × 0.63	31	平坦	直立	自然		
31	E 13b3	-	円形	0.46 × 0.45	21	皿状	外傾	自然		
32	E 13e3	-	円形	1.04 × 0.97	33	皿状	緩斜	人為		
33	E 13a2	N - 14° - E	楕円形	0.85 × 0.46	23	凹凸	外傾	人為		
34	E 12e9	N - 30° - E	楕円形	0.70 × 0.62	40	皿状	外傾 緩斜	自然		
35	E 13e1	N - 76° - W	楕円形	0.61 × 0.50	11	平坦	外傾	自然		
36	E 13d1	-	円形	0.60 × 0.59	10	有段	外傾 直立	自然		



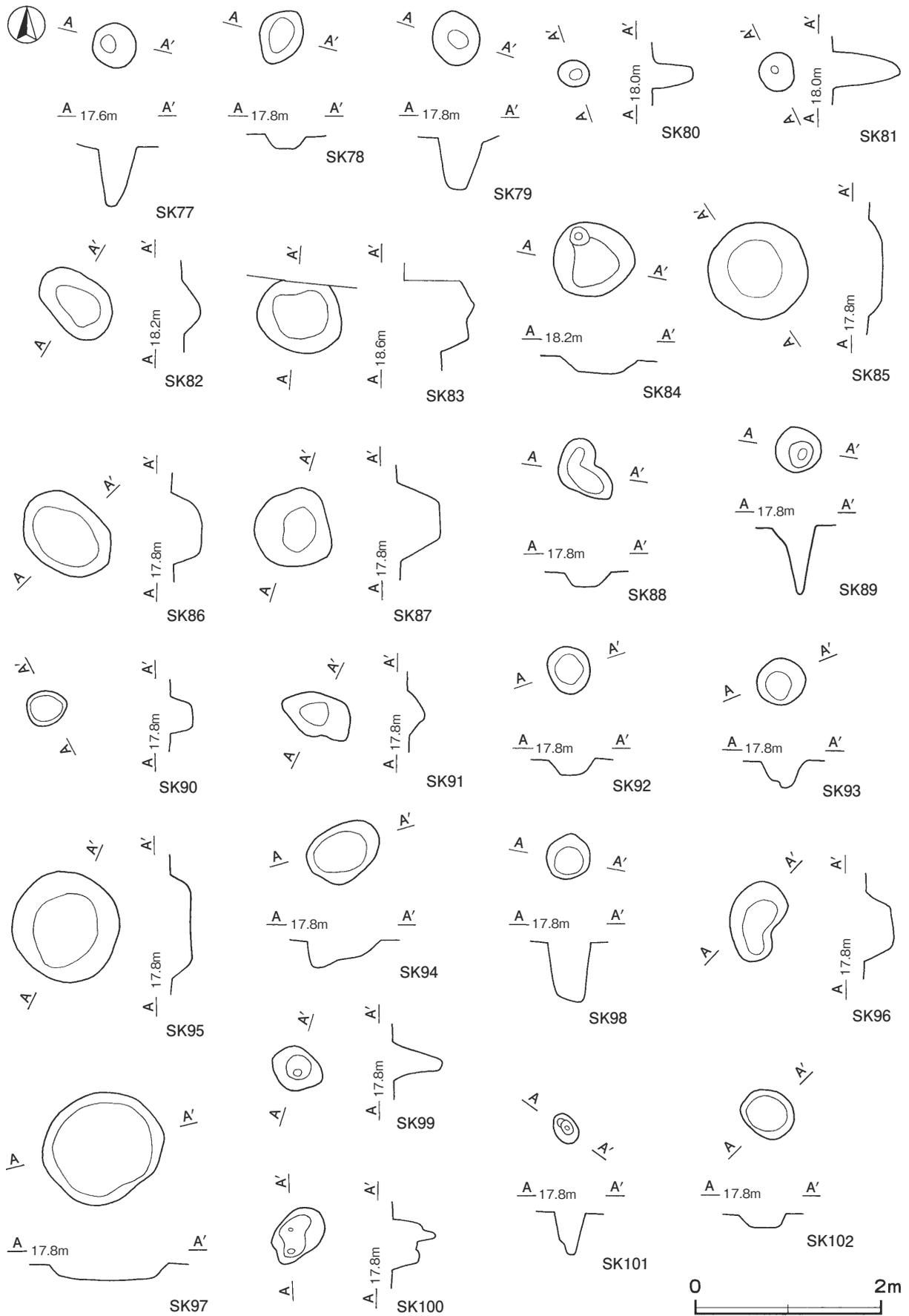
第 52 図 その他の土坑実測図 (1)



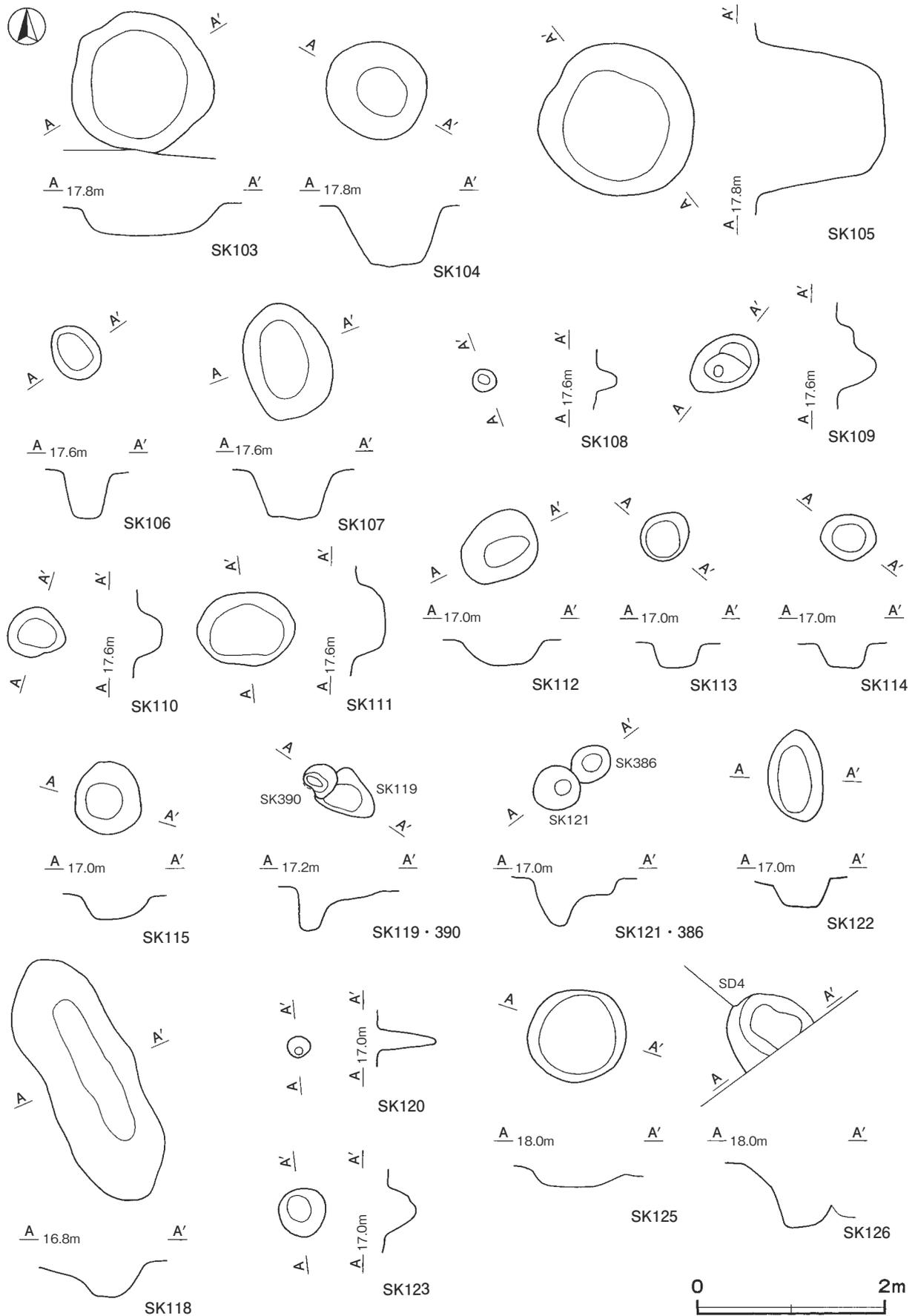
第 53 図 その他の土坑実測図 (2)



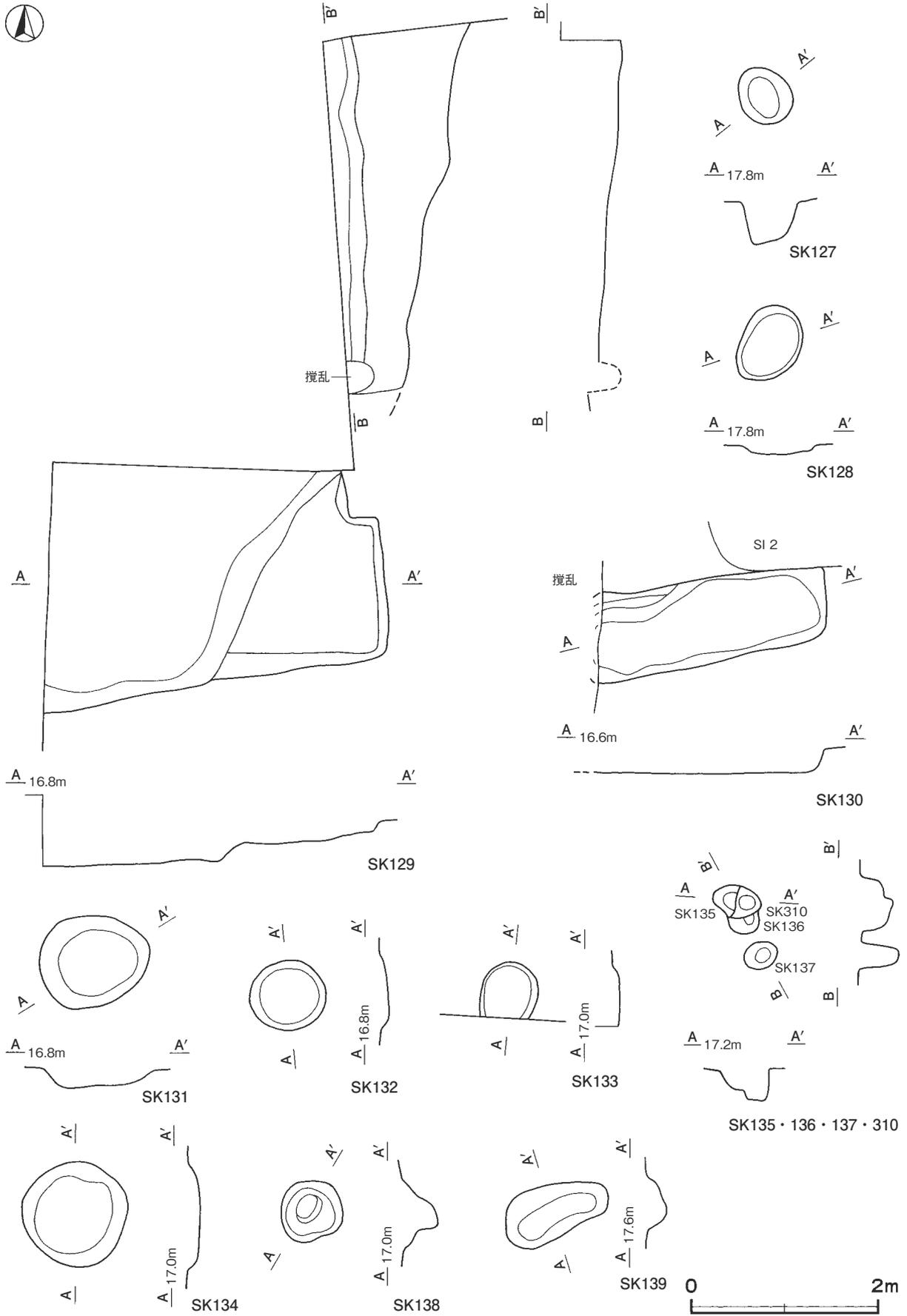
第 54 図 その他の土坑実測図 (3)



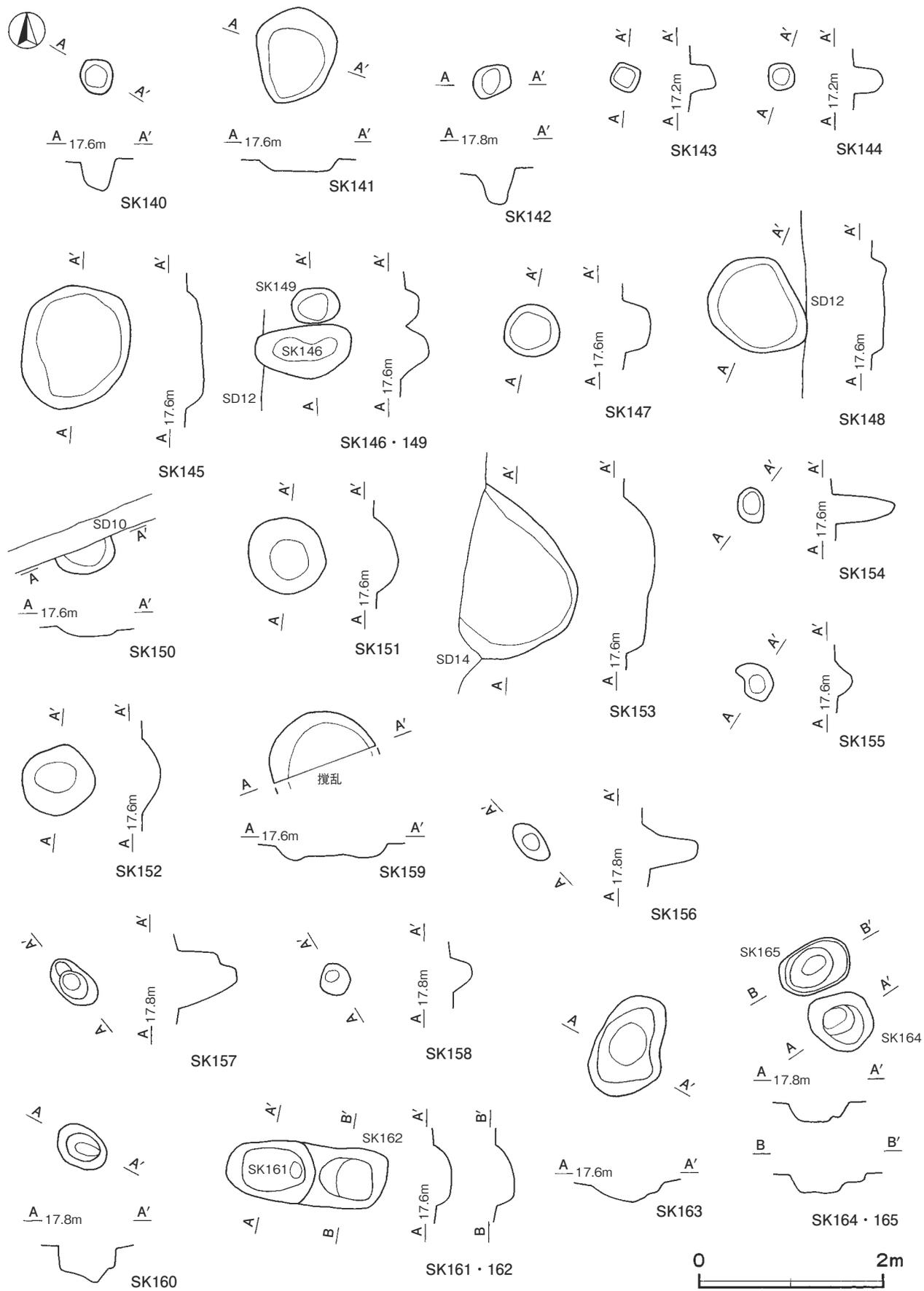
第 55 図 その他の土坑実測図 (4)



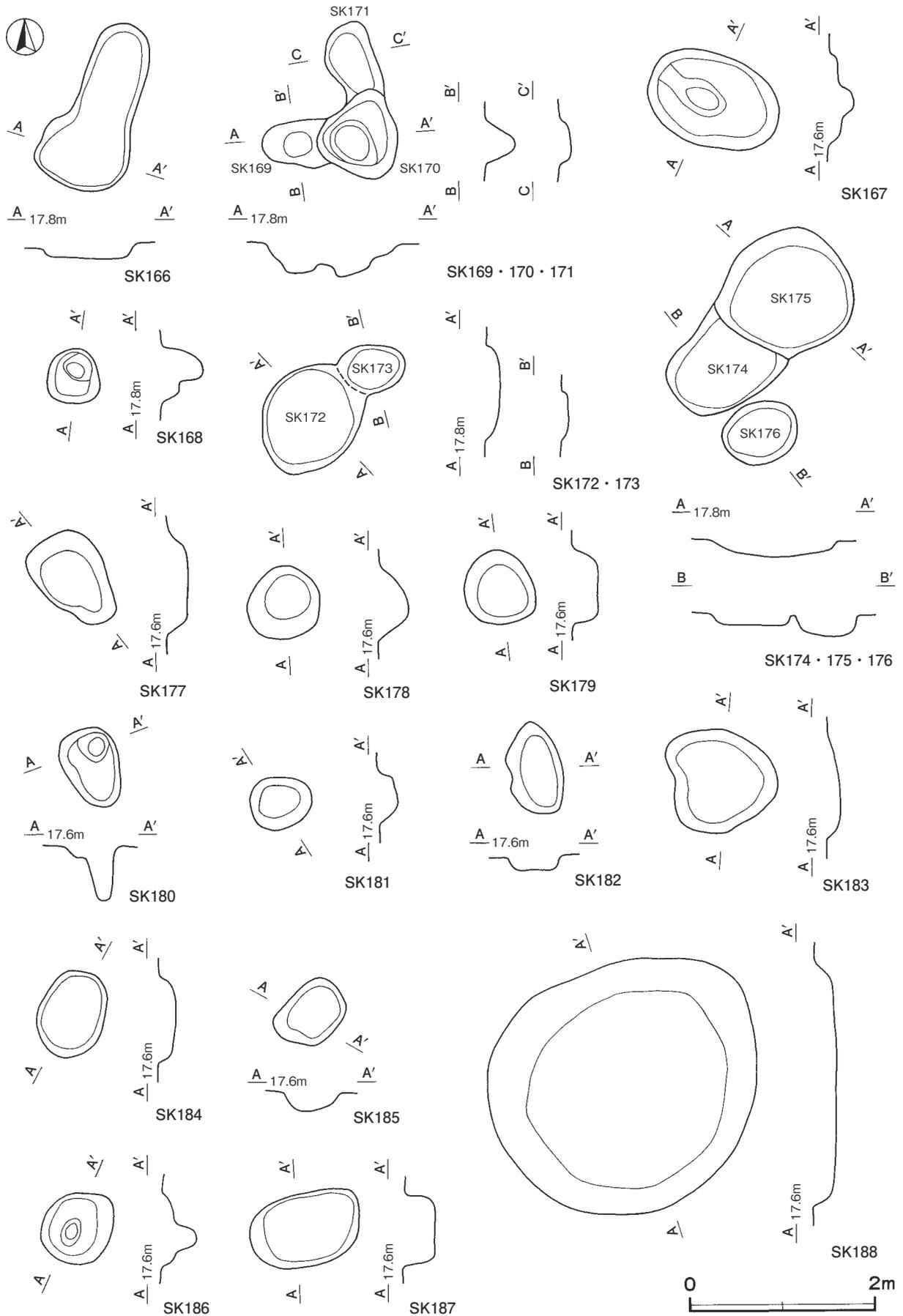
第 56 図 その他の土坑実測図 (5)



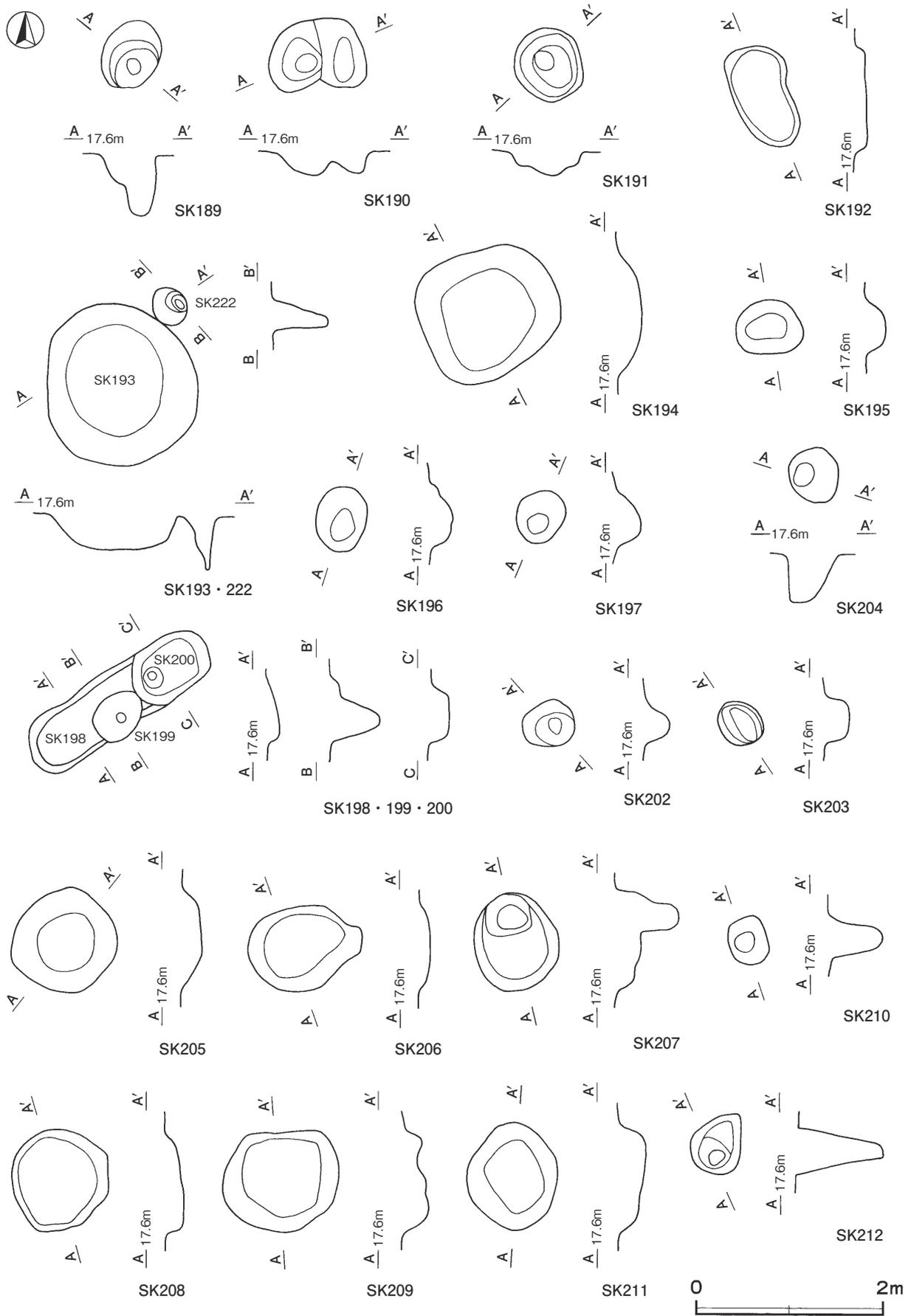
第 57 図 その他の土坑実測図 (6)



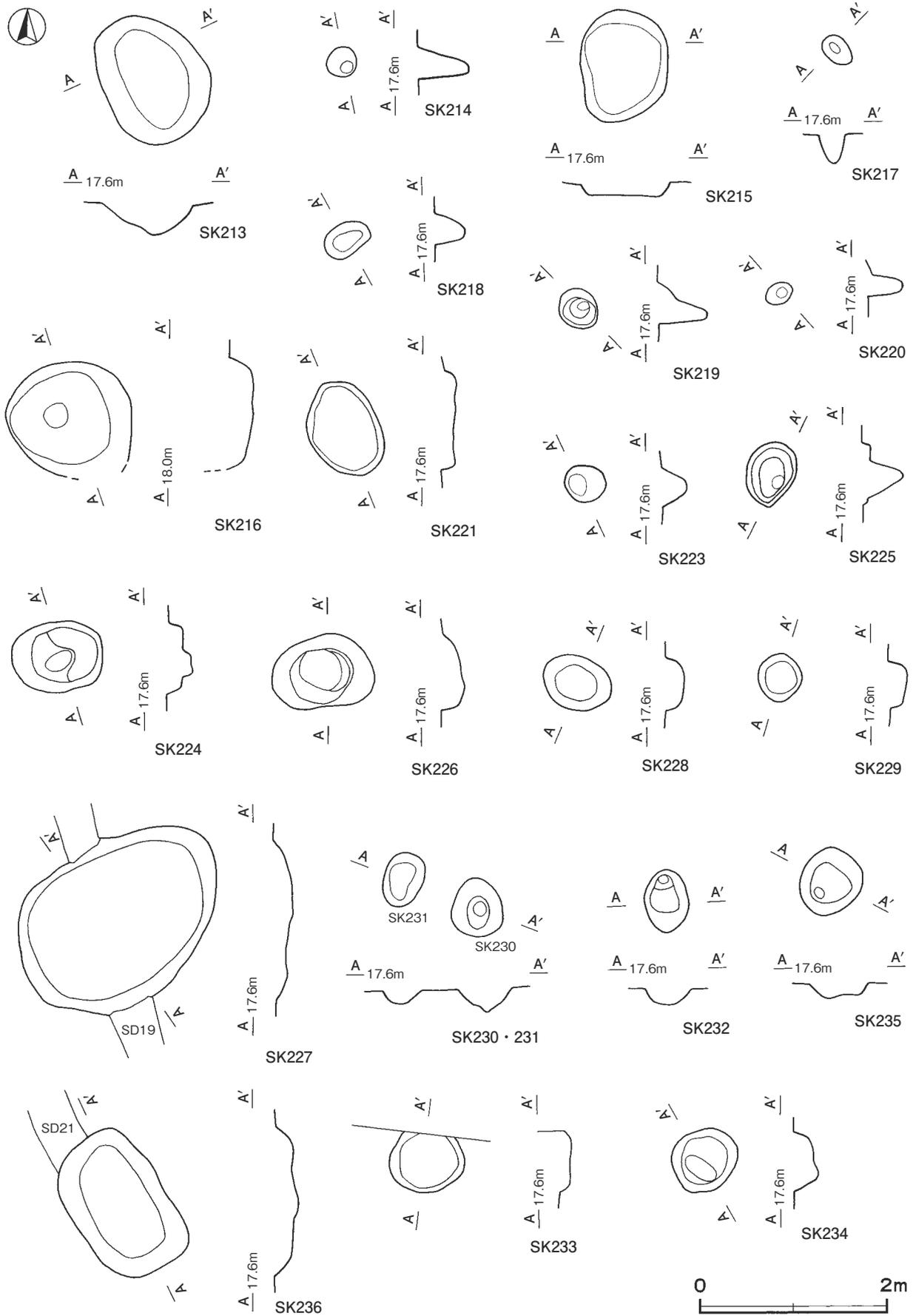
第 58 図 その他の土坑実測図 (7)



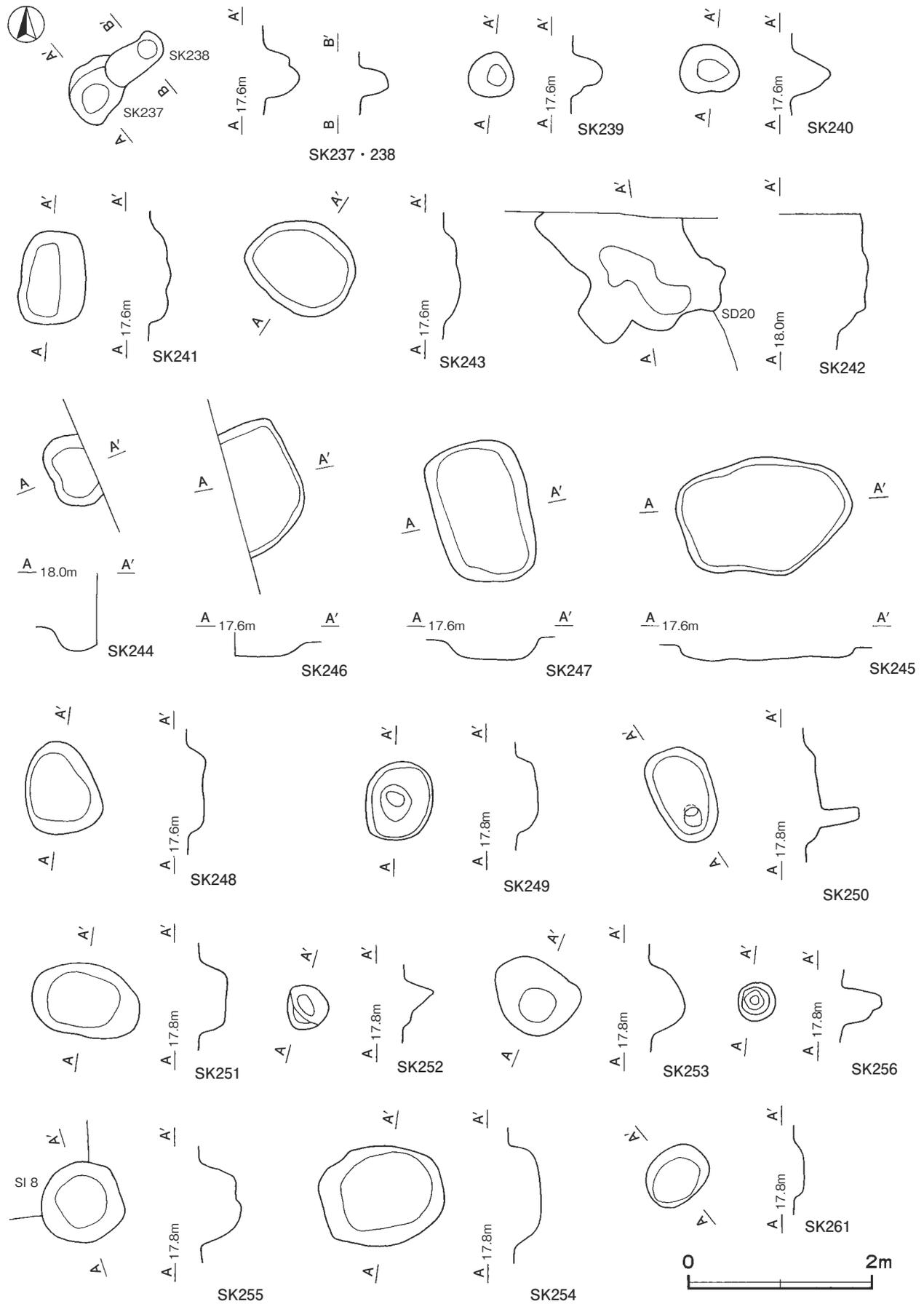
第 59 図 その他の土坑実測図 (8)



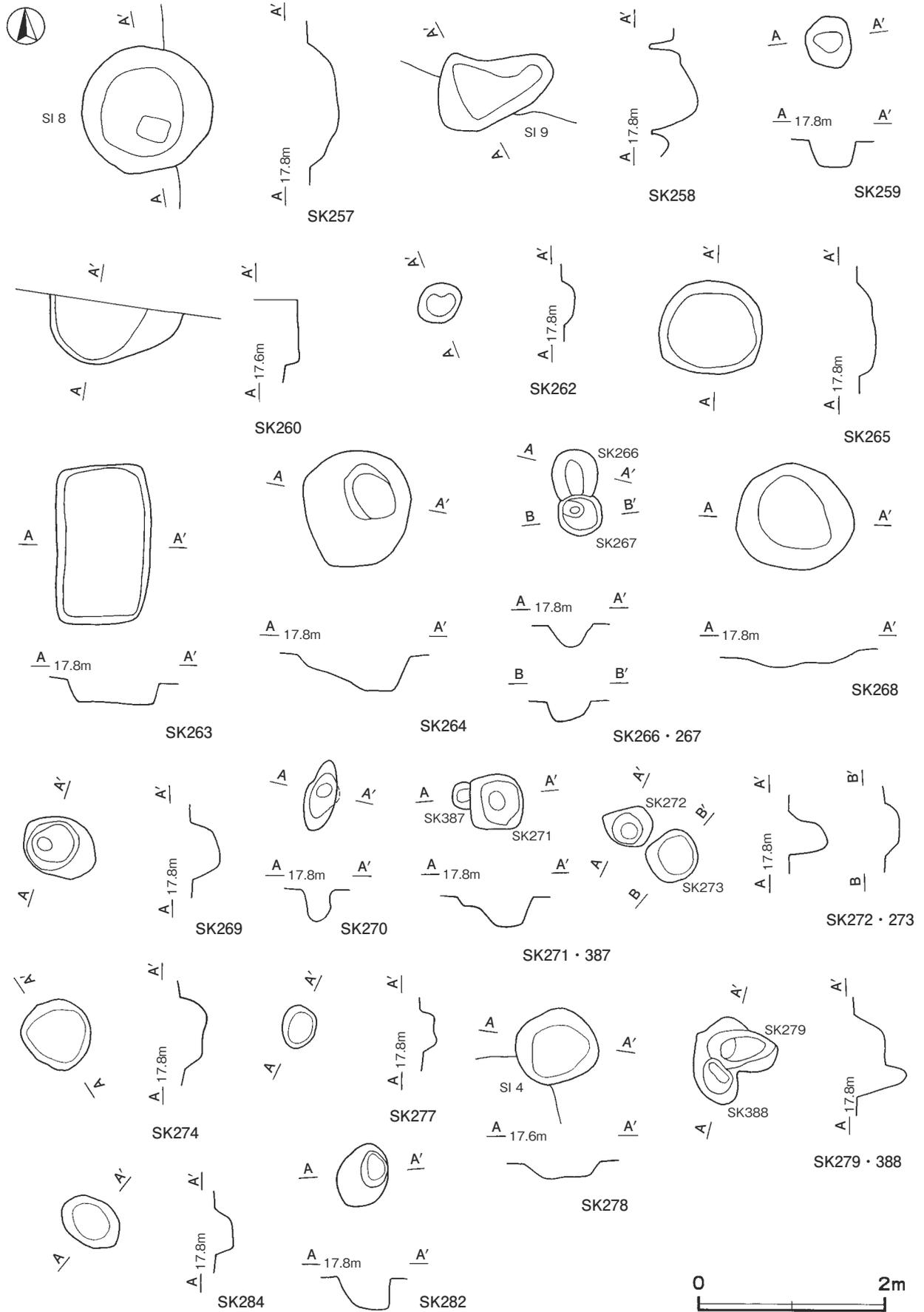
第 60 図 その他の土坑実測図 (9)



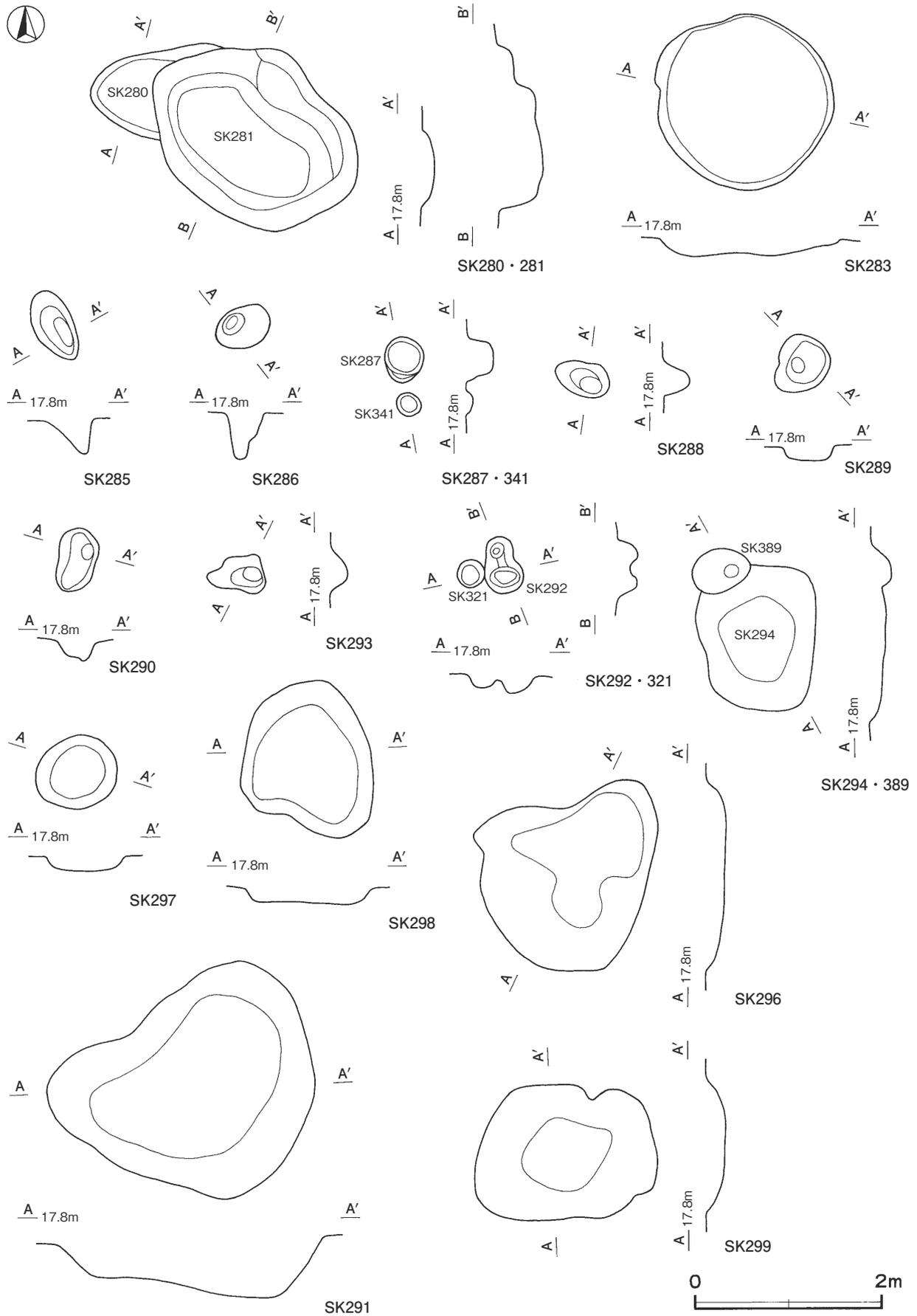
第 61 図 その他の土坑実測図 (10)



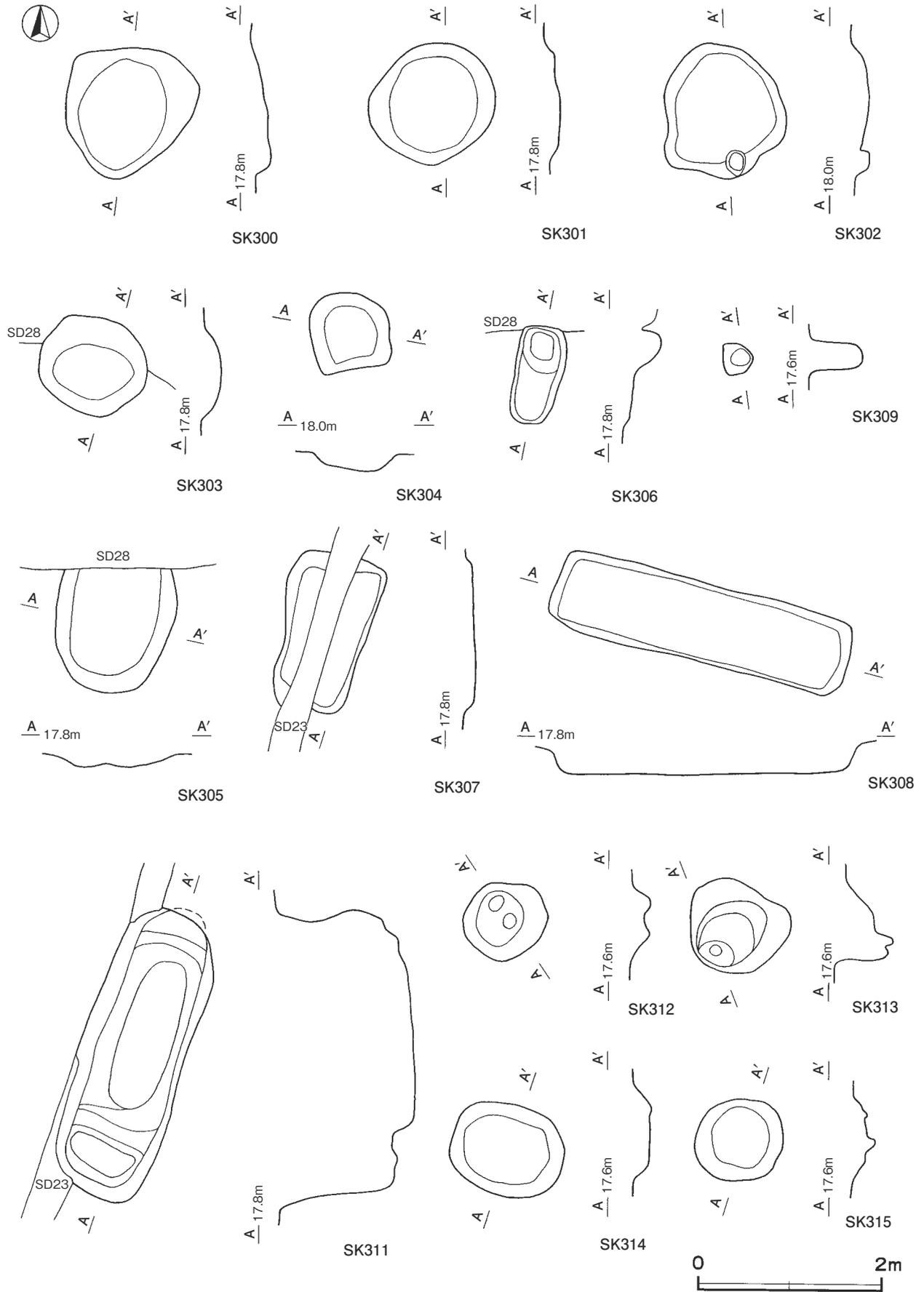
第 62 図 その他の土坑実測図 (11)



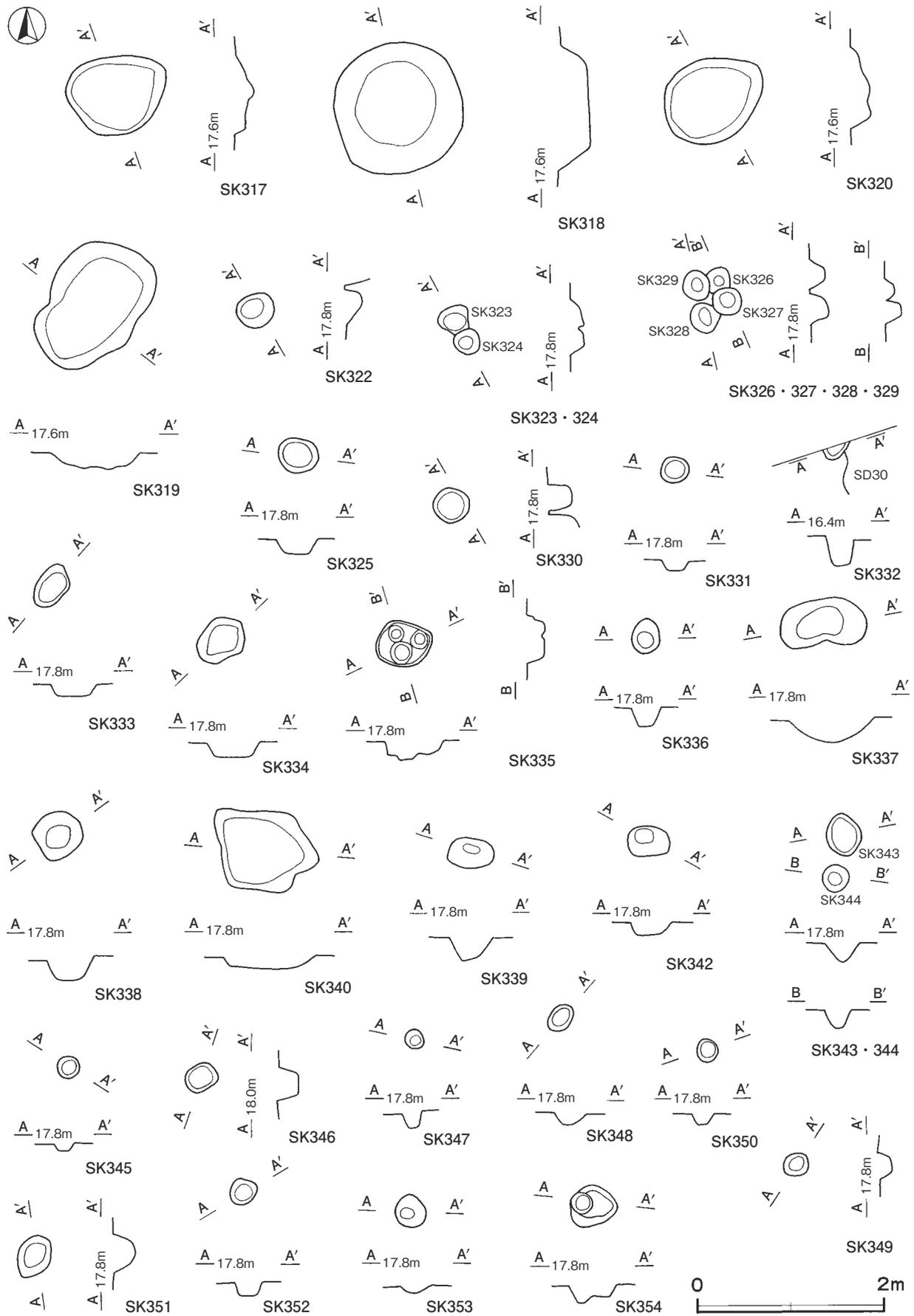
第 63 図 その他の土坑実測図 (12)



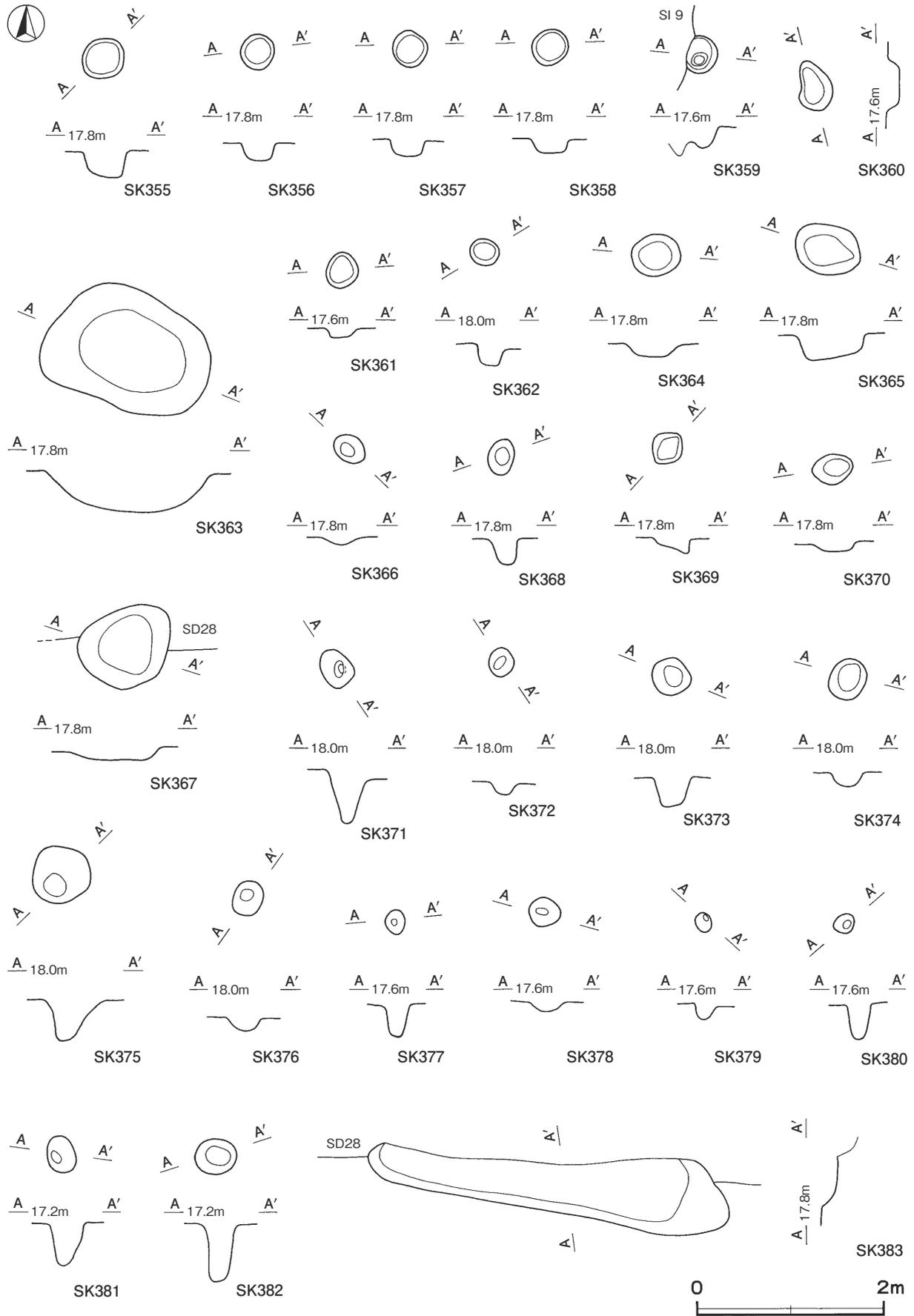
第 64 図 その他の土坑実測図 (13)



第 65 図 その他の土坑実測図 (14)



第 66 図 その他の土坑実測図 (15)



第 67 図 その他の土坑実測図 (16)

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
37	E 12c0	N - 58° - E	楕円形	0.73 × 0.54	31	皿状	外傾	自然		
38	E 13b1	N - 45° - W	楕円形	0.91 × 0.64	18	平坦	外傾	自然		
39	E 12d6	N - 9° - E	楕円形	0.78 × 0.68	16	平坦	緩斜	自然		
40	E 12b0	N - 21° - W	楕円形	0.98 × 0.35	39	平坦	直立	自然		
41	E 13a1	N - 10° - W	楕円形	0.62 × 0.47	38	平坦	直立	自然		
42	E 12b9	N - 2° - W	楕円形	0.88 × 0.66	53	平坦	直立	自然		
43	E 12e0	-	[円形・楕円形]	2.14 × (1.14)	24	平坦	緩斜	人為		
44	E 12a9	N - 13° - W	楕円形	0.51 × 0.43	90	皿状	直立	人為		
45	E 12c6	-	円形	0.32 × 0.32	42	皿状	外傾 直立	自然		
46	E 12c6	N - 60° - E	[不整楕円形]	(0.32) × 0.15	46	皿状	外傾 直立	自然		SK384と新旧不明
47	E 12b7	N - 56° - W	楕円形	1.70 × 1.08	19	平坦	緩斜	自然		
48	E 13e1	N - 55° - E	楕円形	0.60 × 0.51	17	平坦	外傾	自然		
49	E 12b8	N - 80° - E	楕円形	0.78 × 0.56	38	有段	外傾	自然		
50	E 12b7	N - 74° - E	楕円形	0.50 × 0.42	36	平坦	外傾	自然		
51	E 12a7	N - 20° - W	楕円形	0.62 × 0.47	22	平坦	外傾 緩斜	人為		
52	D 12j7	N - 35° - E	楕円形	1.18 × 1.00	20	傾斜	緩斜	自然		
53	E 12b6	-	円形	0.38 × 0.36	51	平坦	外傾	自然		
54	E 12b6	N - 48° - W	楕円形	0.42 × 0.38	50	平坦	外傾	自然		
55	E 12c5	N - 85° - E	楕円形	0.32 × 0.20	50	平坦	直立	自然		
56	E 12c5	N - 20° - E	楕円形	1.26 × 0.96	46	平坦	外傾	自然		
57	D 12j7	N - 72° - E	楕円形	0.88 × (0.58)	15	平坦	外傾 緩斜	自然		SK385と新旧不明
59	E 12b5	-	円形	0.28 × 0.26	30	皿状	直立 外傾	自然		
60	E 12b4	N - 28° - W	長楕円形	1.60 × 0.34	26	平坦	緩斜	自然		
61	E 12c4	N - 82° - W	楕円形	1.30 × 0.68	48	傾斜	外傾 緩斜	自然		
62	E 12c3	N - 45° - E	楕円形	0.42 × 0.40	38	皿状	緩斜	自然		
63	E 12b3	N - 65° - W	[楕円形]	(1.02) × 0.89	32	平坦	外傾	自然		
64	E 12a3	N - 89° - W	楕円形	0.34 × 0.28	20	皿状	外傾	自然		
65	E 12b5	-	円形	0.30 × 0.30	45	平坦	外傾	自然		
66	D 13j1	N - 46° - W	楕円形	1.43 × 0.61	26	平坦	外傾	自然		
67	D 12i8	N - 22° - W	隅丸方形	1.05 × 1.00	26	有段状	外傾 緩斜	人為		
68	E 12e1	-	円形	0.36 × 0.35	36	有段状	直立	自然		
69	E 11d9	N - 68° - E	楕円形	0.48 × 0.25	20	皿状	外傾	自然		
70	E 11d9	N - 68° - E	楕円形	0.39 × 0.21	28	皿状	外傾 内傾	自然		
71	E 11d9	-	不整円形	0.90 × 0.86	25	平坦	直立 外傾	自然		
72	E 11d9	N - 24° - W	楕円形	0.57 × 0.43	21	皿状	外傾	自然		
73	E 11b8	N - 88° - W	楕円形	1.18 × 0.65	38	皿状	外傾	自然		
74	D 12i7	N - 77° - W	楕円形	0.70 × 0.55	18	平坦	外傾	自然		
77	D 9 f6	-	円形	0.48 × 0.48	66	皿状	外傾	自然		
78	D 9 e5	N - 28° - E	楕円形	0.64 × 0.46	16	平坦	外傾	自然		
79	D 9 g4	-	円形	0.56 × 0.52	54	平坦	外傾	自然		
80	D 8 e5	-	円形	0.32 × 0.29	44	皿状	外傾	自然		
81	D 8 f4	-	円形	0.42 × 0.38	70	皿状	外傾	人為		
82	D 7 d7	N - 48° - W	楕円形	0.88 × 0.60	18	皿状	緩斜	自然		
83	D 7 c3	N - 58° - W	[楕円形]	0.92 × (0.78)	34	凹凸	緩斜	自然		
84	D 7 c2	-	円形	0.83 × 0.82	18	平坦	緩斜	自然		
85	D 7 i8	-	円形	1.07 × 1.04	15	平坦	緩斜	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
86	D 7 i8	N - 47° - W	楕円形	1.04 × 0.77	30	平坦	外傾	自然		
87	E 7 a6	-	円形	0.80 × 0.80	45	平坦	外傾	人為		
88	E 7 a0	N - 43° - W	不整楕円形	0.70 × 0.50	13	皿状	緩斜	自然		
89	E 8 a5	-	円形	0.48 × 0.48	74	皿状	外傾	人為		
90	E 8 a5	N - 72° - E	楕円形	0.43 × 0.38	24	平坦	直立	自然		
91	E 8 a5	N - 60° - E	不整楕円形	0.78 × 0.48	18	傾斜	緩斜	自然		
92	D 8 j5	N - 2° - W	楕円形	0.50 × 0.36	20	皿状	外傾	自然		
93	D 8 j5	-	円形	0.52 × 0.50	30	有段	外傾	自然		
94	D 8 j6	N - 64° - E	楕円形	0.80 × 0.56	28	有段	外傾 緩斜	自然		
95	D 8 j6	-	円形	1.20 × 1.15	21	平坦	外傾	人為		
96	E 8 a8	N - 18° - E	不整楕円形	0.86 × 0.53	32	平坦	外傾	人為		
97	E 8 a9	N - 54° - E	楕円形	1.26 × 1.14	20	平坦	緩斜	自然		
98	D 8 j9	-	円形	0.48 × 0.47	64	傾斜	直立	自然		
99	E 8 a9	N - 69° - W	楕円形	0.67 × 0.46	54	平坦	直立	自然		
100	E 8 b9	N - 39° - W	楕円形	0.62 × 0.46	48	有段	直立	自然		
101	E 8 b9	N - 39° - W	楕円形	0.32 × 0.26	44	有段	外傾	自然		
102	D 8 j7	N - 42° - W	楕円形	0.56 × 0.50	14	皿状	緩斜	自然		
103	E 8 b6	-	円形	1.57 × 1.48	32	平坦	緩斜	人為		
104	D 7 i8	-	円形	1.08 × 1.02	60	平坦	外傾	人為		
105	D 8 i6	-	円形	1.67 × 1.64	156	平坦	外傾	人為		
106	E 9 b2	N - 32° - W	楕円形	0.63 × 0.49	48	平坦	外傾	人為		
107	E 9 b2	N - 20° - W	楕円形	1.25 × 0.91	49	平坦	外傾	自然		
108	E 9 b3	-	円形	0.27 × 0.25	23	皿状	外傾	自然		
109	E 9 a5	N - 49° - E	楕円形	0.80 × 0.57	39	有段	外傾	人為		
110	D 9 j4	-	不整円形	0.59 × 0.56	27	平坦	外傾	自然		
111	E 9 b5	N - 90°	楕円形	1.05 × 0.79	32	平坦	外傾	人為		
112	D 10 j1	N - 62° - E	楕円形	0.88 × 0.70	25	皿状	緩斜	自然		
113	D 10 j1	N - 48° - E	楕円形	0.55 × 0.50	25	平坦	外傾	自然		
114	E 10 a2	N - 90°	楕円形	0.60 × 0.50	25	平坦	外傾	自然		
115	D 10 j2	-	円形	0.77 × 0.70	23	皿状	外傾	自然		
118	E 10 c8	N - 24° - W	長楕円形	2.78 × 1.02	33	平坦	外傾 緩斜	自然		
119	E 11 c4	N - 56° - W	[楕円形]	(0.50) × 0.45	15	平坦	外傾 緩斜	人為		本跡→SK390
120	E 11 c4	N - 78° - E	楕円形	0.26 × 0.22	62	平坦	直立	自然		
121	E 11 b4	-	[円形]	(0.50) × 0.49	52	皿状	外傾	人為		SK386→本跡
122	E 11 d5	N - 6° - W	楕円形	0.98 × 0.58	28	平坦	外傾	人為		
123	E 11 d5	-	円形	0.52 × 0.52	32	皿状	外傾 緩斜	人為		
125	D 7 f1	-	円形	1.05 × 1.04	16	平坦	緩斜	人為	石器	SB4と新旧不明
126	D 7 i5	N - 41° - W	[楕円形]	(0.90) × 0.67	65	皿状	外傾	人為		本跡→SD 4
127	D 7 j4	N - 41° - W	楕円形	0.67 × 0.58	48	傾斜	外傾	自然		
128	D 7 i3	N - 31° - E	楕円形	0.86 × 0.64	12	凹凸	外傾	自然		
129	D 2 b3	N - 10° - E	[楕円形]	(6.76) × (3.62)	42	平坦	緩斜	自然		
130	D 2 g3	N - 83° - E	[隅丸長方形]	(2.48) × 0.96	28	平坦	外傾	自然	土師器	SI 2→本跡
131	D 2 g4	N - 74° - E	楕円形	1.18 × 0.98	22	凹凸	外傾	自然	縄文土器, 土師器, 須恵器, 陶器	
132	D 2 f4	-	円形	0.80 × 0.75	12	皿状	緩斜	自然		
133	D 2 g4	N - 6° - E	[楕円形]	(0.63) × 0.62	8	平坦	緩斜	自然		
134	D 2 f5	-	円形	1.14 × 1.14	14	平坦	緩斜	自然	土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶器, 鉄製品	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
135	D 2 e6	N - 65° - W	[楕円形]	0.32 × (0.26)	24	平坦	外傾	自然		SK136 → 本跡 → SK310
136	D 2 e6	-	[円形]	0.34 × (0.18)	34	平坦	外傾	自然		本跡 → SK135 → SK310
137	D 2 f6	N - 55° - E	楕円形	0.38 × 0.30	42	皿状	外傾	自然		
138	D 2 b5	-	円形	0.74 × 0.68	36	有段	直立 外傾	自然		
139	D 3 d2	N - 66° - E	楕円形	1.16 × 0.60	21	傾斜	外傾	自然		
140	D 3 d3	N - 2° - W	楕円形	0.40 × 0.35	30	傾斜	外傾	自然		
141	D 3 d4	N - 28° - E	不整楕円形	1.10 × 0.88	14	平坦	緩斜	自然		
142	D 3 g3	N - 65° - E	楕円形	0.42 × 0.36	38	平坦	外傾	自然		
143	D 2 f9	-	円形	0.31 × 0.30	28	平坦	直立	自然		
144	D 2 e8	-	円形	0.31 × 0.30	32	皿状	直立	自然		
145	D 3 d4	N - 40° - E	楕円形	1.42 × 1.23	18	平坦	緩斜	自然	陶器, 磁器, 鉄製品	
146	D 3 f4	N - 88° - E	長楕円形	1.04 × 0.58	32	皿状	外傾	自然		SD12 → 本跡
147	D 3 f1	-	円形	0.59 × 0.58	28	平坦	直立	自然	陶器	
148	D 3 f4	N - 51° - W	[楕円形]	(1.18) × 0.98	15	平坦	緩斜	自然		SD12 → 本跡
149	D 3 e4	N - 87° - W	楕円形	0.53 × 0.40	20	皿状	緩斜	自然		
150	D 3 e4	N - 70° - E	[楕円形]	0.65 × (0.28)	8	平坦	緩斜	自然		本跡 → SD10
151	D 3 f5	-	円形	0.90 × 0.82	24	皿状	緩斜	自然		
152	D 3 e5	-	円形	0.79 × 0.78	20	皿状	緩斜	自然	土師器, 鉄滓	
153	D 3 f5	N - 16° - W	[楕円形]	(1.94) × (1.30)	32	平坦	外傾	自然		本跡 → SD14
154	D 3 g6	N - 53° - W	楕円形	0.44 × 0.36	67	皿状	直立	自然		
155	D 3 g6	N - 18° - W	不整楕円形	0.38 × 0.29	18	皿状	緩斜	自然		
156	D 3 f6	N - 34° - W	楕円形	0.50 × 0.28	56	皿状	外傾	自然		
157	D 3 f7	N - 38° - W	楕円形	0.62 × 0.34	63	有段	直立 外傾	人為		
158	D 3 f7	-	円形	0.35 × 0.35	23	皿状	外傾	自然		
159	D 3 f6	N - 25° - W	[楕円形]	1.18 × (0.61)	16	凹凸	外傾	自然		
160	D 3 f7	N - 62° - W	楕円形	0.60 × 0.44	36	凹凸	直立	人為		
161	D 3 f8	N - 80° - W	楕円形	0.95 × 0.68	27	平坦	外傾	自然		SK162 → 本跡
162	D 3 f8	N - 80° - W	[楕円形]	(0.79) × 0.66	20	平坦	外傾	自然		本跡 → SK161
163	D 3 f9	N - 25° - E	楕円形	1.17 × 0.77	19	有段	緩斜	人為		
164	D 3 f8	-	円形	0.70 × 0.65	22	有段	外傾	人為		
165	D 3 f8	N - 60° - E	楕円形	0.83 × 0.53	28	有段	直立 外傾	人為		
166	D 3 e8	N - 20° - E	不整楕円形	1.90 × 0.99	16	平坦	外傾	自然		
167	D 3 g9	N - 64° - W	楕円形	1.48 × 1.02	28	有段	緩斜	人為		
168	D 3 g8	-	円形	0.64 × 0.60	46	皿状	外傾	自然		
169	D 3 f9	N - 88° - E	楕円形	(0.65) × 0.48	34	皿状	外傾	自然	須恵器	本跡 → SK170
170	D 3 f9	-	不整円形	0.98 × 0.97	38	有段	外傾 緩斜	自然	土師器, 須恵器	SK169・171 → 本跡
171	D 3 f9	N - 20° - W	楕円形	(0.90) × 0.52	15	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器	本跡 → SK170
172	D 3 e9	N - 51° - E	楕円形	(1.15) × 1.03	13	平坦	外傾	自然	土師器, 須恵器	SK173 と新旧不明
173	D 3 e9	N - 90° - E	楕円形	0.75 × 0.52	10	平坦	直立	自然		SK172 と新旧不明
174	D 3 f9	N - 47° - E	[楕円形]	(1.80) × 1.00	14	平坦	外傾	自然	土師器, 須恵器	本跡 → SK175
175	D 3 f9	N - 85° - E	[不整楕円形]	(1.50) × 1.35	17	皿状	緩斜	自然		SK174 → 本跡
176	D 3 f9	N - 71° - E	楕円形	0.84 × 0.67	23	平坦	直立	人為	土師器	
177	D 3 e0	N - 39° - E	不整楕円形	1.10 × 0.74	20	平坦	外傾	人為		
178	D 3 f0	-	円形	0.81 × 0.78	30	皿状	緩斜	自然		
179	D 3 f0	-	円形	0.82 × 0.78	30	平坦	外傾	自然		
180	D 3 f0	N - 19° - W	楕円形	0.90 × 0.62	60	有段	直立	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
181	D 4 f1	N - 66° - E	楕円形	0.69 × 0.58	22	凹凸	外傾	自然		
182	D 4 f1	N - 11° - W	不整楕円形	1.13 × 0.60	16	凹凸	外傾	自然		
183	D 4 f1	-	不整円形	1.24 × 1.18	16	平坦	緩斜	人為		
184	D 4 f1	N - 29° - E	楕円形	0.96 × 0.71	19	平坦	外傾	人為		
185	D 4 f1	N - 41° - E	楕円形	0.82 × 0.61	24	皿状	外傾	自然		
186	D 4 f1	N - 32° - E	楕円形	0.81 × 0.72	38	有段	外傾	自然		
187	D 3 d6	N - 76° - E	楕円形	1.20 × 0.80	33	平坦	直立	自然	須恵器	
188	D 3 c6	N - 43° - E	楕円形	3.10 × 2.75	23	平坦	緩斜	自然	須恵器, 土師質土器, 磁器, 土製品, 銅製品	
189	D 3 c7	N - 30° - E	楕円形	0.80 × 0.60	63	有段	直立 外傾	自然		
190	D 3 e9	N - 70° - E	不整楕円形	1.02 × 0.80	25	凹凸	直立 外傾	人為		
191	D 3 e9	N - 28° - W	楕円形	0.82 × 0.73	29	凹凸	外傾	自然		
192	D 3 f7	N - 22° - W	楕円形	1.15 × 0.65	12	平坦	外傾	人為		
193	D 3 d9	-	円形	1.72 × 1.68	40	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器, 土製品	
194	D 4 e1	N - 65° - E	楕円形	1.50 × 1.38	26	皿状	緩斜	自然	土師器	
195	D 4 f2	N - 68° - E	楕円形	0.70 × 0.60	20	平坦	外傾	自然		
196	D 3 f7	N - 18° - E	楕円形	0.72 × 0.54	24	平坦	外傾	自然		
197	D 3 f8	N - 23° - E	楕円形	0.60 × 0.52	26	皿状	外傾	自然		
198	D 3 e0	N - 54° - E	[長楕円形]	(1.38) × 0.66	12	皿状	外傾 緩斜	人為		本跡→SK199・200
199	D 3 e0	N - 29° - E	楕円形	0.60 × 0.46	53	皿状	外傾	自然		SK198 → 本跡
200	D 3 e0	N - 56° - E	楕円形	0.92 × 0.63	20	平坦	外傾	人為		SK198 → 本跡
202	D 3 d8	N - 56° - E	楕円形	0.57 × 0.50	30	皿状	外傾	人為		
203	D 3 d8	N - 38° - W	楕円形	0.50 × 0.45	28	平坦	直立	人為		
204	D 3 b6	-	円形	0.58 × 0.55	50	傾斜	直立 緩斜	自然		
205	D 3 c6	-	円形	1.14 × 1.13	21	平坦	緩斜	人為		
206	D 4 d1	N - 82° - E	不整楕円形	1.24 × 0.90	12	平坦	緩斜	自然		
207	D 4 d2	N - 13° - W	楕円形	1.06 × 0.91	68	有段	外傾 緩斜	人為		
208	D 4 d1	-	円形	1.08 × 1.06	20	平坦	直立 緩斜	人為	土師器	
209	D 4 d4	N - 56° - E	不整楕円形	1.30 × 1.16	25	凹凸	外傾 緩斜	自然	土師器, 鉄滓	
210	D 4 d2	N - 20° - W	楕円形	0.52 × 0.42	57	皿状	外傾	自然		
211	D 4 d2	N - 4° - E	不整楕円形	1.17 × 0.96	26	傾斜	外傾	人為	須恵器, 鉄滓	
212	D 4 c2	N - 35° - W	楕円形	0.73 × 0.56	94	傾斜	外傾	人為		
213	D 4 e2	N - 22° - W	楕円形	1.42 × 1.12	35	皿状	緩斜	自然		
214	D 4 e3	-	円形	0.35 × 0.33	55	皿状	外傾	自然	鉄滓	
215	D 4 d3	N - 12° - E	楕円形	1.20 × 0.95	12	平坦	外傾	自然		
216	D 4 f5	-	円形	1.23 × 1.23	24	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
217	D 3 e9	N - 47° - W	楕円形	0.40 × 0.25	33	皿状	外傾	自然		
218	D 3 e9	N - 52° - E	楕円形	0.52 × 0.33	39	平坦	外傾	自然		
219	D 3 d9	-	円形	0.48 × 0.46	53	皿状	外傾	自然		
220	D 3 d9	N - 58° - E	楕円形	0.30 × 0.25	37	皿状	直立	自然		
221	D 4 b2	N - 22° - W	楕円形	1.06 × 0.76	14	凹凸	外傾	人為		
222	D 3 d9	N - 34° - W	楕円形	0.43 × 0.36	56	平坦	直立	自然		
223	D 3 e0	-	円形	0.45 × 0.42	28	皿状	外傾	自然		
224	D 4 e6	N - 82° - E	楕円形	0.96 × 0.77	33	凹凸	外傾	人為		
225	D 4 e4	N - 15° - E	楕円形	0.69 × 0.55	44	有段	外傾	自然	土師器	
226	D 3 b9	N - 90°	楕円形	1.20 × 0.80	23	有段	直立 緩斜	自然		
227	D 4 e5	N - 54° - E	楕円形	2.52 × 1.70	18	平坦	緩斜	自然		本跡→SD19

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
228	D 4 d6	N - 65° - W	楕円形	0.85 × 0.53	16	皿状	外傾	自然		
229	D 4 d6	-	円形	0.48 × 0.45	17	皿状	外傾	自然		
230	D 4 c7	-	円形	0.60 × 0.57	25	有段	外傾	自然		
231	D 4 c7	N - 18° - E	楕円形	0.58 × 0.41	14	平坦	外傾	自然	須恵器	
232	D 4 c7	N - 0°	楕円形	0.64 × 0.46	23	平坦	外傾	自然		
233	D 4 b7	N - 76° - W	[楕円形]	0.80 × (0.63)	15	平坦	外傾	自然		
234	D 4 d7	N - 60° - E	楕円形	0.73 × 0.66	24	凹凸	外傾	自然		
235	D 4 c8	N - 46° - E	楕円形	0.73 × 0.62	21	凹凸	外傾	人為		
236	D 4 d5	N - 30° - W	隅丸長方形	1.60 × 1.04	26	凹凸	緩斜	自然		SD21 → 本跡
237	D 4 c5	N - 36° - E	[楕円形]	(0.74) × 0.58	38	有段	外傾	人為		本跡 → SK238
238	D 4 c5	N - 54° - E	楕円形	0.72 × 0.37	30	平坦	直立	人為		SK237 → 本跡
239	D 4 c5	-	円形	0.52 × 0.50	34	皿状	外傾	自然		
240	D 4 c5	N - 65° - W	楕円形	0.66 × 0.56	42	皿状	外傾	自然		
241	D 4 b6	N - 9° - E	隅丸長方形	1.02 × 0.71	22	凹凸	外傾 緩斜	人為	土師器	
242	D 3 b0	N - 35° - W	[不定形]	(2.94) × (1.56)	33	凹凸	外傾	人為		SD20 → 本跡
243	D 4 c2	N - 60° - W	楕円形	1.16 × 0.98	18	凹凸	外傾	自然		
244	D 4 c8	N - 22° - W	[楕円形]	0.82 × (0.46)	32	皿状	外傾	人為		
245	D 4 b3	N - 81° - W	不整楕円形	1.91 × 1.30	18	平坦	直立	人為		
246	D 5 h2	N - 15° - E	[隅丸長方形]	1.38 × (0.76)	15	平坦	緩斜	自然		
247	D 5 g3	N - 10° - W	隅丸長方形	1.55 × 1.04	24	平坦	外傾	人為		
248	D 5 h3	N - 14° - W	楕円形	1.00 × 0.80	22	凹凸	外傾	自然		
249	D 5 h4	N - 20° - E	楕円形	0.90 × 0.72	24	傾斜	外傾	人為		
250	D 5 g3	N - 34° - W	楕円形	1.08 × 0.70	60	傾斜	外傾	自然		
251	D 5 g4	N - 68° - W	楕円形	1.20 × 0.82	30	平坦	外傾	自然	土師器, 磁器	
252	D 5 g4	N - 23° - E	楕円形	0.50 × 0.45	32	皿状	外傾	自然		
253	D 5 g4	N - 49° - W	楕円形	0.93 × 0.78	38	皿状	外傾	人為		
254	D 5 e2	N - 79° - E	楕円形	1.30 × 1.10	32	平坦	外傾	自然		
255	D 5 g5	-	円形	0.92 × 0.90	45	有段	外傾	自然	土師器, 鉄滓	SI8 → 本跡
256	D 5 g5	-	円形	0.43 × 0.43	42	有段	直立	人為		
257	D 5 g5	-	円形	1.39 × 1.38	32	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI8 → 本跡
258	D 5 h8	N - 63° - E	不整楕円形	1.30 × 0.88	50	傾斜	外傾	自然	土師器, 須恵器, 瓦質土器	SI9 → 本跡
259	D 5 e4	N - 17° - E	楕円形	0.60 × 0.48	28	平坦	外傾	人為		
260	D 3 a5	N - 7° - E	[楕円形]	1.50 × (0.67)	23	平坦	直立	自然		
261	D 5 d3	N - 48° - E	楕円形	0.75 × 0.58	7	平坦	緩斜	自然		
262	D 5 d3	N - 61° - E	楕円形	0.51 × 0.45	14	皿状	外傾	自然		
263	D 5 d4	N - 3° - E	隅丸長方形	1.74 × 1.03	22	平坦	直立 外傾	自然		
264	D 5 e5	N - 18° - E	楕円形	1.28 × 1.16	40	平坦	外傾	自然	須恵器	
265	D 5 g6	-	円形	1.10 × 1.02	20	皿状	外傾	自然	鉄滓	
266	D 5 h6	N - 10° - W	[楕円形]	(0.50) × 0.49	6	皿状	外傾	自然		本跡 → SK267
267	D 5 h6	-	円形	0.49 × 0.47	21	傾斜	外傾	自然		SK266 → 本跡
268	D 5 e5	N - 58° - W	楕円形	1.26 × 1.13	15	凹凸	緩斜	人為		
269	D 5 f4	N - 63° - W	楕円形	0.86 × 0.64	34	傾斜	外傾	自然		
270	D 5 g6	N - 15° - E	楕円形	0.79 × 0.35	30	皿状	直立	人為	土師器, 須恵器	
271	D 5 f4	N - 0°	[方形]	0.60 × (0.57)	32	平坦	外傾	自然		SK387 → 本跡
272	D 5 f4	N - 70° - W	楕円形	0.54 × 0.46	42	皿状	外傾 緩斜	自然		
273	D 5 f4	-	円形	0.56 × 0.54	16	平坦	外傾	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
274	D 5 e5	-	円形	0.76 × 0.75	28	傾斜	緩斜	自然		
277	D 5 f5	N - 25° - E	楕円形	0.44 × 0.38	15	凹凸	外傾	自然		
278	D 3 b2	-	円形	0.84 × 0.77	17	平坦	緩斜	自然	土師器, 須恵器	SI4 → 本跡
279	D 5 f7	N - 90°	不整楕円形	0.89 × (0.56)	32	平坦	緩斜	人為	土師器, 須恵器	SK388 と新旧不明
280	D 5 f3	N - 83° - W	[楕円形]	(0.90) × 0.70	14	皿状	緩斜	人為		本跡 → SK281
281	D 5 f4	N - 64° - W	楕円形	2.42 × 1.82	50	平坦	外傾	自然	陶器, 鉄製品	SK280 → 本跡
282	D 5 h7	N - 30° - E	楕円形	0.68 × 0.54	34	平坦	直立 外傾	人為		
283	D 5 f9	-	円形	1.93 × 1.85	20	凹凸	緩斜	自然		
284	D 5 g6	N - 53° - W	楕円形	0.69 × 0.50	21	平坦	外傾	人為		
285	D 5 h7	N - 28° - W	楕円形	0.83 × 0.43	31	皿状	外傾	人為		
286	D 5 g7	N - 61° - E	楕円形	0.62 × 0.46	52	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
287	D 5 g8	N - 15° - W	楕円形	0.48 × 0.39	28	平坦	直立	人為		
288	D 5 g8	N - 60° - W	楕円形	0.54 × 0.39	28	皿状	外傾	人為		
289	D 5 g8	N - 45° - E	楕円形	0.68 × 0.57	15	平坦	外傾	自然	須恵器, 鉄滓	
290	D 5 f7	N - 5° - E	楕円形	0.67 × 0.43	19	有段	外傾	人為		
291	D 5 f2	-	不整円形	2.64 × 2.52	68	凹凸	外傾	自然	須恵器, 陶器, 磁器, 石器, 鉄滓	
292	D 5 f7	N - 11° - W	楕円形	0.63 × 0.38	21	凹凸	外傾	自然		
293	D 5 d6	N - 82° - E	不整楕円形	0.58 × 0.40	20	皿状	外傾	自然		
294	D 5 d5	N - 4° - E	[楕円形]	1.56 × 1.30	18	平坦	緩斜	自然		SK389 と新旧不明
296	D 6 h1	N - 37° - W	不整楕円形	2.24 × 2.00	20	平坦	外傾 緩斜	自然		
297	D 6 h1	-	円形	0.87 × 0.84	17	平坦	外傾	自然		
298	D 6 i1	N - 49° - W	不整楕円形	1.70 × 1.50	18	平坦	外傾	自然		
299	D 5 e5	N - 89° - W	不整楕円形	1.95 × 1.47	21	皿状	緩斜	人為		
300	D 5 e6	N - 75° - E	不整楕円形	1.50 × 1.43	18	凹凸	外傾 緩斜	人為		
301	D 5 e6	N - 68° - E	楕円形	1.40 × 1.25	18	皿状	緩斜	人為		
302	D 5 e7	N - 14° - W	不整楕円形	1.50 × 1.34	15	皿状	緩斜	人為	須恵器, 陶器	
303	D 6 d1	-	円形	1.07 × 1.03	20	皿状	緩斜	自然		SD28 → 本跡
304	D 5 f8	N - 81° - E	不整楕円形	0.88 × 0.86	18	傾斜	外傾	自然		
305	D 5 d0	N - 5° - E	[楕円形]	(1.36) × 1.30	13	凹凸	緩斜	自然		本跡 → SD28
306	D 6 d2	N - 11° - E	[楕円形]	(1.06) × 0.53	40	皿状	緩斜	自然		SD28 → 本跡
307	D 6 g2	N - 18° - E	楕円形	1.73 × 1.02	10	平坦	緩斜	人為		本跡 → SD23
308	D 6 d4	N - 73° - W	隅丸長方形	3.30 × 0.90	28	平坦	外傾	人為		
309	D 3 c7	-	不整円形	0.37 × 0.35	58	皿状	直立	自然	陶器	
310	D 2 e6	-	不整円形	0.28 × 0.28	34	平坦	直立	自然		SK136 → SK135 → 本跡
311	D 6 f2	N - 19° - E	隅丸長方形	3.22 × 1.14	144	平坦	直立	人為	縄文土器, 土師器, 須恵器, 土師 質土器, 陶器	本跡 → SD23
312	D 4 g6	N - 61° - E	楕円形	1.03 × 0.85	21	凹凸	外傾 緩斜	人為		
313	D 4 g3	-	不整円形	1.07 × 1.05	50	有段	直立 外傾	人為		
314	D 4 f7	N - 52° - W	楕円形	1.28 × 1.04	20	平坦	外傾	自然		
315	D 4 f7	-	円形	1.00 × 0.97	25	凹凸	外傾	自然		
317	D 4 f9	N - 76° - E	楕円形	1.12 × 0.84	20	凹凸	外傾 緩斜	自然		
318	D 4 g9	-	円形	1.50 × 1.46	33	平坦	外傾	自然	土師器, 須恵器, 陶器	
319	D 4 g9	N - 37° - E	不整楕円形	1.50 × 1.01	18	凹凸	緩斜	人為	須恵器	
320	D 4 f9	N - 57° - E	楕円形	1.15 × 0.88	20	凹凸	外傾 緩斜	自然		
321	D 5 f7	-	円形	0.29 × 0.29	12	平坦	外傾	自然		
322	D 5 h8	N - 62° - E	楕円形	0.42 × 0.38	18	皿状	外傾 緩斜	自然	土師器, 須恵器, 鉄滓	SI 9 → 本跡
323	D 5 h8	N - 56° - E	[楕円形]	0.33 × (0.30)	14	皿状	外傾 緩斜	自然		SI 9 → 本跡 SK324 と新旧不明

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深 さ (cm)					
324	D 5 h8	N - 64° - E	[楕円形]	0.30 × (0.26)	16	皿状	緩斜	自然		SI9 →本跡 SK323と新旧不明
325	D 5 h8	N - 84° - W	楕円形	0.45 × 0.38	16	平坦	外傾	自然	土師器, 鉄製品	SI9 →本跡
326	D 5 h7	-	[円形]	(0.30) × (0.28)	12	平坦	緩斜	自然		SI9 →本跡 SK327・329と新旧不明
327	D 5 h7	N - 41° - E	[楕円形]	(0.34) × (0.26)	17	平坦	外傾	自然		SI9 →本跡 SK326・328と新旧不明
328	D 5 h7	N - 34° - W	[楕円形]	0.33 × (0.28)	20	皿状	外傾	自然		SI9 →本跡 SK327と新旧不明
329	D 5 h7	N - 14° - W	[楕円形]	0.30 × (0.27)	18	皿状	外傾	自然	土師器	SI9 →本跡 SK326と新旧不明
330	D 5 h8	-	円形	0.40 × 0.38	25	平坦	直立	自然		
331	D 5 h7	-	円形	0.29 × 0.29	13	平坦	外傾	自然		
332	B 1 a6	-	[円形]	0.30 × (0.13)	30	平坦	直立	自然		SD30 →本跡
333	D 5 g6	N - 40° - E	楕円形	0.50 × 0.31	11	平坦	外傾	自然		
334	D 5 g6	N - 47° - E	楕円形	0.57 × 0.42	16	平坦	外傾	自然		
335	D 5 g7	N - 65° - E	楕円形	0.62 × 0.50	15	凹凸	外傾	自然		
336	D 5 g5	N - 5° - E	楕円形	0.48 × 0.30	19	平坦	外傾	自然	須恵器	
337	D 5 f4	N - 65° - E	楕円形	0.94 × 0.50	26	皿状	緩斜	自然		
338	D 5 e3	-	円形	0.50 × 0.48	25	皿状	外傾	自然		
339	D 5 f4	N - 83° - W	楕円形	0.46 × 0.36	26	傾斜	外傾	自然		
340	D 5 f5	N - 58° - W	不整楕円形	1.17 × 0.94	12	平坦	外傾	自然		
341	D 5 g8	-	円形	0.25 × 0.24	8	平坦	緩斜	自然		
342	D 5 g7	N - 86° - W	楕円形	0.45 × 0.32	10	平坦	外傾 緩斜	自然		
343	D 5 g8	N - 15° - W	楕円形	0.45 × 0.36	21	皿状	外傾	自然		
344	D 5 g7	-	円形	0.38 × 0.38	18	平坦	外傾	自然		
345	D 5 g7	-	円形	0.25 × 0.23	9	平坦	外傾	自然		
346	D 5 g7	N - 57° - E	楕円形	0.34 × 0.31	22	平坦	外傾	自然		
347	D 5 g7	-	円形	0.22 × 0.20	18	平坦	外傾	自然		
348	D 5 g7	N - 48° - E	楕円形	0.34 × 0.25	10	皿状	外傾	自然		
349	D 5 h7	N - 32° - E	楕円形	0.27 × 0.24	13	平坦	外傾	自然		
350	D 5 h7	-	円形	0.25 × 0.23	13	平坦	外傾	自然		
351	D 5 h7	N - 27° - E	楕円形	0.48 × 0.36	21	皿状	外傾	自然		
352	D 5 h7	-	円形	0.30 × 0.28	15	平坦	外傾	自然		
353	D 5 g8	-	円形	0.38 × 0.34	5	皿状	緩斜	自然		
354	D 5 g8	N - 49° - E	楕円形	0.48 × 0.42	20	有段	緩斜	自然		
355	D 5 g8	-	円形	0.42 × 0.40	28	傾斜	直立	自然		
356	D 5 g9	-	円形	0.35 × 0.35	21	平坦	外傾	自然		
357	D 5 h9	-	円形	0.36 × 0.36	20	平坦	直立	自然		
358	D 5 h9	-	円形	0.39 × 0.38	14	平坦	外傾	自然		
359	D 5 i8	-	[円形]	0.39 × (0.32)	22	皿状	外傾	自然		SI9 →本跡
360	D 5 h8	N - 14° - W	楕円形	0.54 × 0.38	12	平坦	外傾	自然		
361	D 5 i8	-	円形	0.38 × 0.34	9	皿状	外傾	自然		
362	D 5 f7	-	円形	0.31 × 0.29	18	皿状	直立	自然		
363	D 5 h0	N - 68° - W	楕円形	1.77 × 1.26	42	皿状	外傾	自然		
364	D 5 i0	N - 86° - W	楕円形	0.55 × 0.46	13	平坦	緩斜	自然		
365	D 5 e8	N - 72° - W	楕円形	0.73 × 0.55	18	傾斜	外傾	自然		
366	D 5 e0	N - 46° - W	楕円形	0.33 × 0.27	10	皿状	緩斜	自然		
367	D 6 d2	N - 55° - E	不整楕円形	1.05 × 0.84	12	平坦	緩斜	自然		SD28 →本跡
368	D 5 d8	N - 21° - E	楕円形	0.37 × 0.26	29	皿状	外傾	自然		
369	D 5 d8	N - 42° - E	楕円形	0.40 × 0.35	18	傾斜	外傾	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
370	D 5 d9	N - 82° - E	楕円形	0.46 × 0.33	9	平坦	外傾 緩斜	自然		
371	D 6 h9	N - 6° - W	不整楕円形	0.43 × 0.35	52	皿状	外傾	自然		
372	D 6 h0	-	円形	0.30 × 0.28	12	皿状	外傾	自然		
373	D 6 h0	-	円形	0.43 × 0.43	32	平坦	外傾	自然		
374	D 6 g0	N - 33° - E	楕円形	0.43 × 0.38	18	平坦	外傾	自然		
375	D 7 f1	-	円形	0.66 × 0.61	43	皿状	外傾	自然		SB4と新旧不明
376	D 7 f2	N - 22° - E	楕円形	0.38 × 0.32	17	皿状	外傾	自然		
377	D 13j8	N - 8° - W	楕円形	0.28 × 0.24	34	皿状	外傾	自然		
378	E 13a7	N - 72° - W	楕円形	0.38 × 0.34	12	皿状	緩斜	自然		
379	E 13a7	N - 28° - W	楕円形	0.22 × 0.17	17	皿状	外傾	自然		
380	E 13a7	N - 56° - E	楕円形	0.24 × 0.21	38	皿状	直立	自然		
381	E 14c5	N - 17° - W	楕円形	0.40 × 0.31	48	皿状	外傾	自然		
382	E 14d4	N - 71° - E	楕円形	0.42 × 0.37	64	平坦	直立	自然		
383	D 5 d7	N - 81° - W	[不整楕円形]	3.93 × (0.80)	18	平坦	緩斜	自然		SD28 → 本跡
384	D 12c6	N - 41° - W	[楕円形]	0.37 × (0.25)	43	皿状	直立	自然		SK46と新旧不明
385	D 12j7	N - 37° - W	[不整楕円形]	(0.57) × 0.65	11	皿状	緩斜	自然		SK57と新旧不明
386	E 11b4	N - 52° - E	[楕円形]	(0.43) × 0.39	17	平坦	外傾	自然		本跡 → SK121
387	D 5 f4	-	[円形]	0.28 × (0.19)	10	平坦	外傾	自然		本跡 → SK271
388	D 5 f7	N - 27° - W	[楕円形]	0.83 × (0.38)	33	皿状	外傾	自然		SK279と新旧不明
389	D 5 d5	N - 77° - E	[楕円形]	0.66 × (0.46)	22	平坦	外傾	自然		SK294と新旧不明
390	E 11c4	-	円形	0.36 × 0.36	54	平坦	外傾 内傾	自然		SK119 → 本跡

(2) 炉跡

第1号炉跡 (第68図)

位置 調査区中央部のD 7 g4区、標高18mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

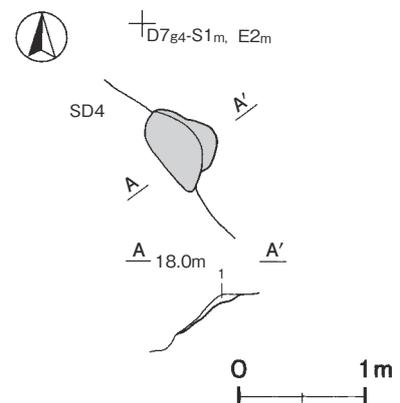
規模と形状 南西部の大半を第4号溝に掘り込まれているため、南北軸は0.60m、東西軸は0.48mしか確認できなかった。平面形は円形または楕円形で、長軸方向はN - 32° - Wと推測できる。炉床は第1層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 覆土なし。第1層は使用している間に堆積した層である。

土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量

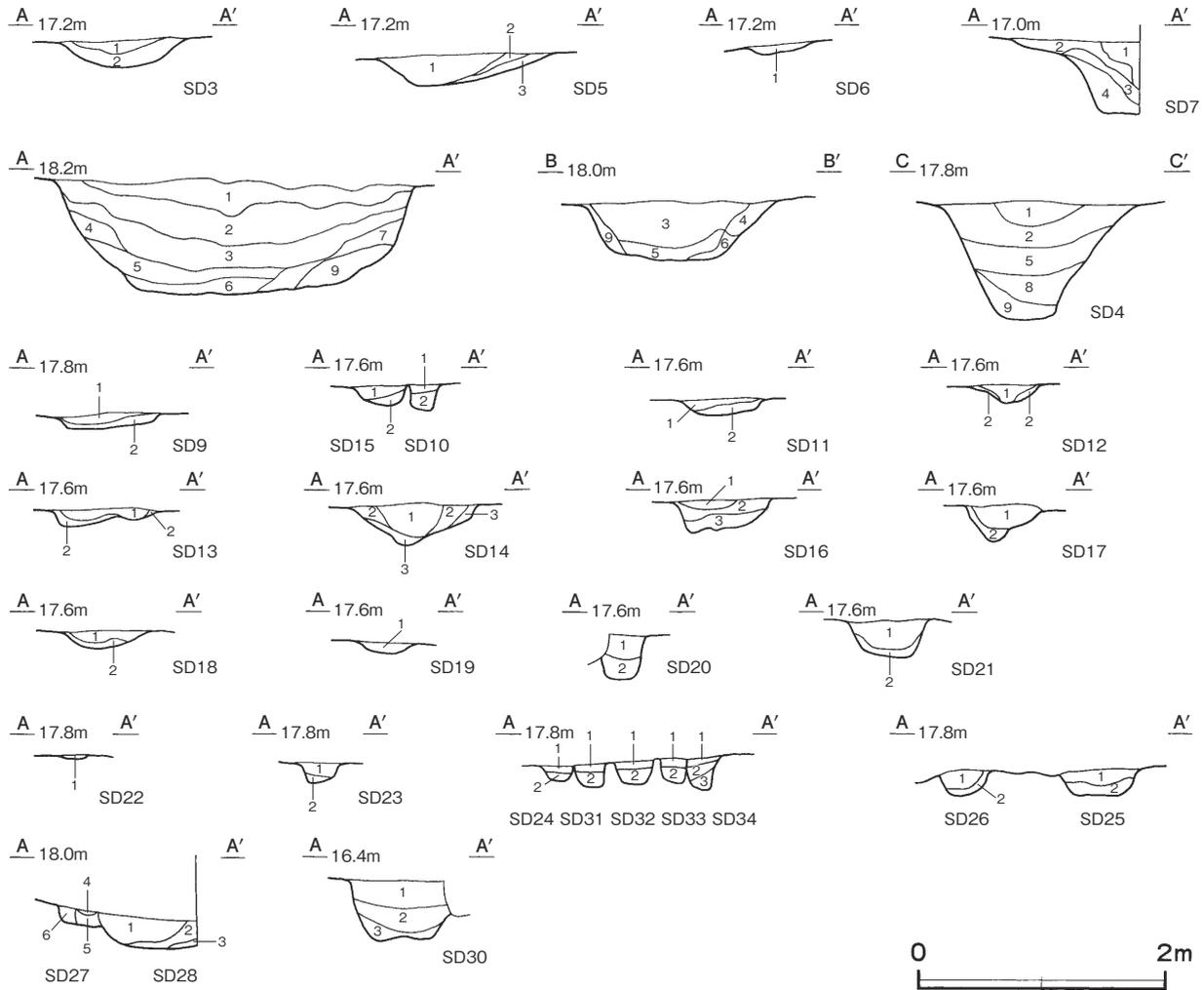
所見 時期, 性格ともに不明である。



第68図 第1号炉跡実測図

(3) 溝跡

時期不明の溝跡 30 条については、土層図（第 69 図）と土層解説、一覧表を掲載し、平面図は遺構全体図で示す。



第 69 図 その他の溝跡実測図

第 3 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第 4 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 にぶい褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム粒子中量

第 5 号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第 6 号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量

第 7 号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 炭化粒子少量，ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量

第 9 号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第 10 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第 11 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第12号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第13号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第14号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第15号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第16号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第17号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第18号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第19号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第20号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第21号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第22号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第23号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第24号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第25号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第26号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第27・28号溝跡土層解説(第1～3層が第28号溝跡, 第4～6層が第27号溝跡に相当)

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量
- 6 褐色 ロームブロック中量

第30号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第31号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第32号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第33号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第34号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量

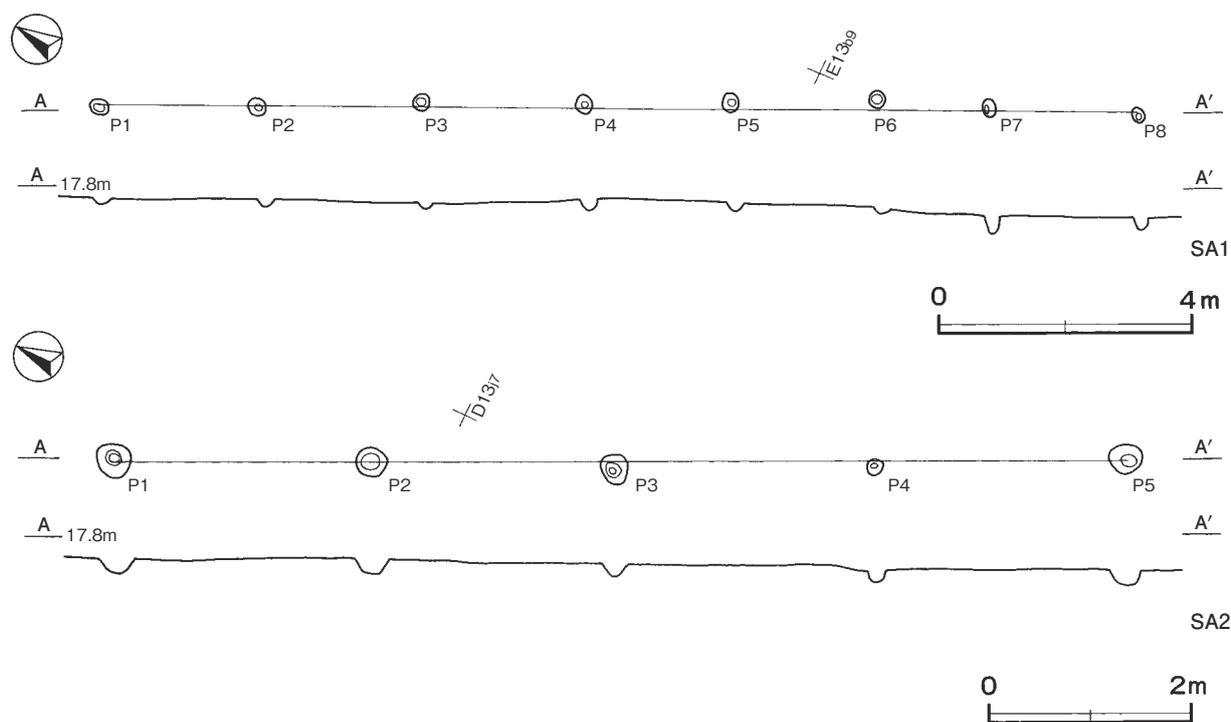
表7 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
3	E 13c2～E 13f5	N-38°-W	直線	(12.32)	0.90～1.26	0.36～0.60	23～39	浅いU字状	緩斜	自然	土師器	
4	D 6c9～E 7b9	N-45°-W	直線	(29.90)	1.22～3.20	0.19～2.06	45～97	逆台形	外傾	人為	土師器, 須恵器, 鉄滓	SK126, FP1・TP1→本跡
5	E 10d0～E 11b3	N-60°-E	直線	(19.73)	0.88～1.46	0.22～0.82	18～30	浅いU字状	緩斜	自然	須恵器, 土師質土器, 陶器, 石器, 鉄製品	SD 6→本跡
6	E 11b2～E 11c3	N-25°-E	直線	(3.78)	0.38～0.78	0.16～0.48	8～13	浅いU字状	緩斜	自然		本跡→SD 5
7	D 11i1～E 11a2	N-54°-W	直線	(7.68)	(0.88～1.22)	0.68	58～78	[U字状]	緩斜	人為	縄文土器, 土師器, 土師質土器, 陶器, 石器	
9	D 5b2～D 5g3	N-82°-E	直線	(18.80)	0.70～1.18	0.55～1.00	8～13	浅いU字状	緩斜	自然	土師器, 須恵器, 陶器	SI 4・5→本跡→SD10
10	D 2f0～D 3e5	N-84°-E	直線	17.65	0.23～0.42	0.80～0.23	10～23	U字状	外傾	自然	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	SK150, SD 9・13→本跡
11	D 3f1～D 3f2	N-72°-E	直線	2.81	0.50～0.72	0.22～0.51	12～17	浅いU字状	外傾	自然		
12	D 3e4～D 3g4	N-2°-E	直線	(7.85)	0.29～0.65	0.11～0.36	8～15	浅いU字状	外傾	自然	須恵器	本跡→SK146・148
13	D 3e3～D 3f4	N-163°-E	直線	(4.38)	0.58～0.88	0.43～0.74	5～12	浅いU字状	外傾 緩斜	自然	土師器, 須恵器, 陶器	本跡→SD10
14	D 3e4～D 3g4	N-9°-E	直線	(7.80)	0.95～1.37	0.26～0.52	20～38	U字状	外傾	人為	土師器, 須恵器, 鉄滓	SK153→本跡
15	D 3e3～D 3b7	N-73°-E	直線	19.18	0.25～0.79	0.11～0.40	8～16	逆台形	外傾	自然	土師器, 鉄滓	SD16→本跡

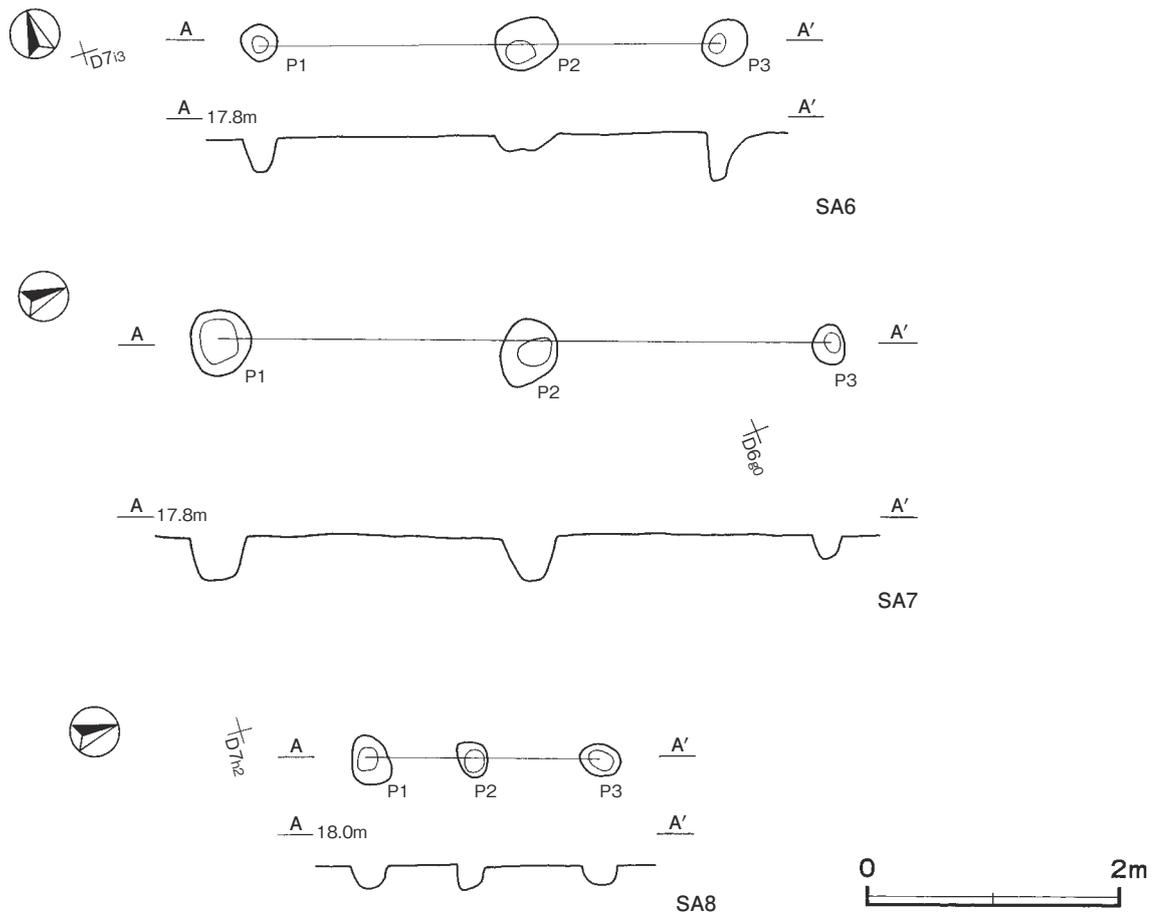
番号	位置	方向	形状	規模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						深さ(cm)
16	D 3b6 ~ D 3f7	N - 161° - E	直線	(6.98)	0.75 ~ 0.80	0.42 ~ 0.63	16 ~ 33	逆台形	外傾	自然		本跡→SD15
17	D 3d8 ~ D 3b0	N - 140° - W	直線	(10.78)	0.24 ~ 0.62	0.08 ~ 0.12	9 ~ 21	U字状	緩斜	自然	土師器, 須恵器	
18	D 3d0 ~ D 4c4	N - 72° - E	直線	16.78	0.38 ~ 0.96	0.18 ~ 0.64	9 ~ 20	浅いU字状	緩斜	自然		
19	D 4e4 ~ D 4f6	N - 15° - W	直線	(6.18)	0.40 ~ 0.67	0.19 ~ 0.30	8 ~ 12	浅いU字状	緩斜	自然		
20	D 3b0 ~ D 4c1	N - 20° - W	直線	(3.14)	0.27 ~ 0.54	0.12 ~ 0.26	16 ~ 44	U字状	外傾	自然	土師器, 陶器	本跡→SK242
21	D 4b4 ~ D 4d5	N - 73° - E	直線	(7.28)	0.36 ~ 0.48	0.20 ~ 0.29	8 ~ 15	逆台形	外傾	自然		本跡→SK236
22	D 6d2 ~ D 6e2	N - 162° - W	直線	5.22	0.24 ~ 0.36	0.11 ~ 0.16	4 ~ 18	浅いU字状	緩斜	自然		
23	D 6d2 ~ D 6h1	N - 162° - W	直線	14.92	0.25 ~ 0.40	0.10 ~ 0.20	18 ~ 30	U字状	外傾	自然		SK307・311, SD28→本跡
24	D 6e2 ~ D 6g2	N - 14° - E	直線	(10.10)	0.10 ~ 0.31	0.06 ~ 0.18	13	浅いU字状	緩斜	人為		SD31と新旧不明
25	D 4d6 ~ D 4e7	N - 20° - W	直線	(5.90)	0.52 ~ 0.84	0.36 ~ 0.62	4 ~ 22	U字状	外傾	自然	須恵器	
26	D 4b6 ~ D 4e7	N - 20° - W	直線	(13.48)	0.32 ~ 0.52	0.14 ~ 0.34	9 ~ 14	U字状	外傾	自然		
27	D 5c1 ~ D 5c5	N - 86° - W	直線	12.74	0.20 ~ 0.34	0.08 ~ 0.20	13	浅いU字状	緩斜	人為		本跡→SD28
28	D 5c1 ~ D 6d2	N - 84° - W	直線	45.82	0.54 ~ 1.32	0.22 ~ 0.98	24 ~ 36	逆台形	外傾	人為		SK305, SD27→本跡→SK303・306・367・383, SD23
30	B 1a6 ~ B 1a7	N - 92° - W	直線	(2.99)	0.79 ~ 1.83	0.49 ~ 0.54	38 ~ 50	逆台形	外傾	自然		本跡→SK332
31	D 6e3 ~ D 6i1	N - 15° - E	直線	(18.24)	0.22 ~ 0.42	0.08 ~ 0.18	20	浅いU字状	緩斜	人為		SD24・32と新旧不明
32	D 6e3 ~ D 6i2	N - 15° - E	直線	(18.24)	0.24 ~ 0.46	0.08 ~ 0.24	18	浅いU字状	緩斜	人為	磁器	SD31・33と新旧不明
33	D 6e3 ~ D 6h2	N - 15° - E	直線	(14.54)	0.14 ~ 0.28	0.08 ~ 0.20	22	浅いU字状	緩斜	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 鉄滓	SD32・34と新旧不明
34	D 6e3 ~ D 6i2	N - 15° - E	直線	(18.04)	0.20 ~ 0.34	0.07 ~ 0.22	28	浅いU字状	緩斜	人為		SD33と新旧不明

(4) 柱穴列

時期不明の柱穴列5条については、実測図(第70・71図)と一覧表を掲載する。



第70図 その他の柱穴列実測図(1)



第71図 その他の柱穴列実測図(2)

表8 その他の柱穴列一覧表

番号	位置	主軸方向	長さ(m)	柱間(m)	柱穴					主な出土遺物	備考
					柱穴数	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)		
1	D 13i7 ~ E 13c9	N - 24° - W	16.5	1.70 ~ 2.60	8	円形・楕円形	23 ~ 32	18 ~ 27	12 ~ 32		
2	D 13i6 ~ E 13a7	N - 25° - W	10.0	2.40 ~ 2.60	5	円形・楕円形	18 ~ 35	16 ~ 28	12 ~ 26		
6	D 7i3 ~ D 7i4	N - 73° - W	3.60	1.56 ~ 2.04	3	円形・楕円形	29 ~ 50	29 ~ 39	15 ~ 40		
7	D 6f9 ~ D 6h9	N - 21° - E	4.30	1.80 ~ 2.50	3	円形・楕円形	32 ~ 56	24 ~ 46	23 ~ 36		
8	D 7g2	N - 16° - E	1.90	0.90 ~ 1.00	3	円形・楕円形	29 ~ 42	25 ~ 33	16 ~ 28		

(5) ピット群

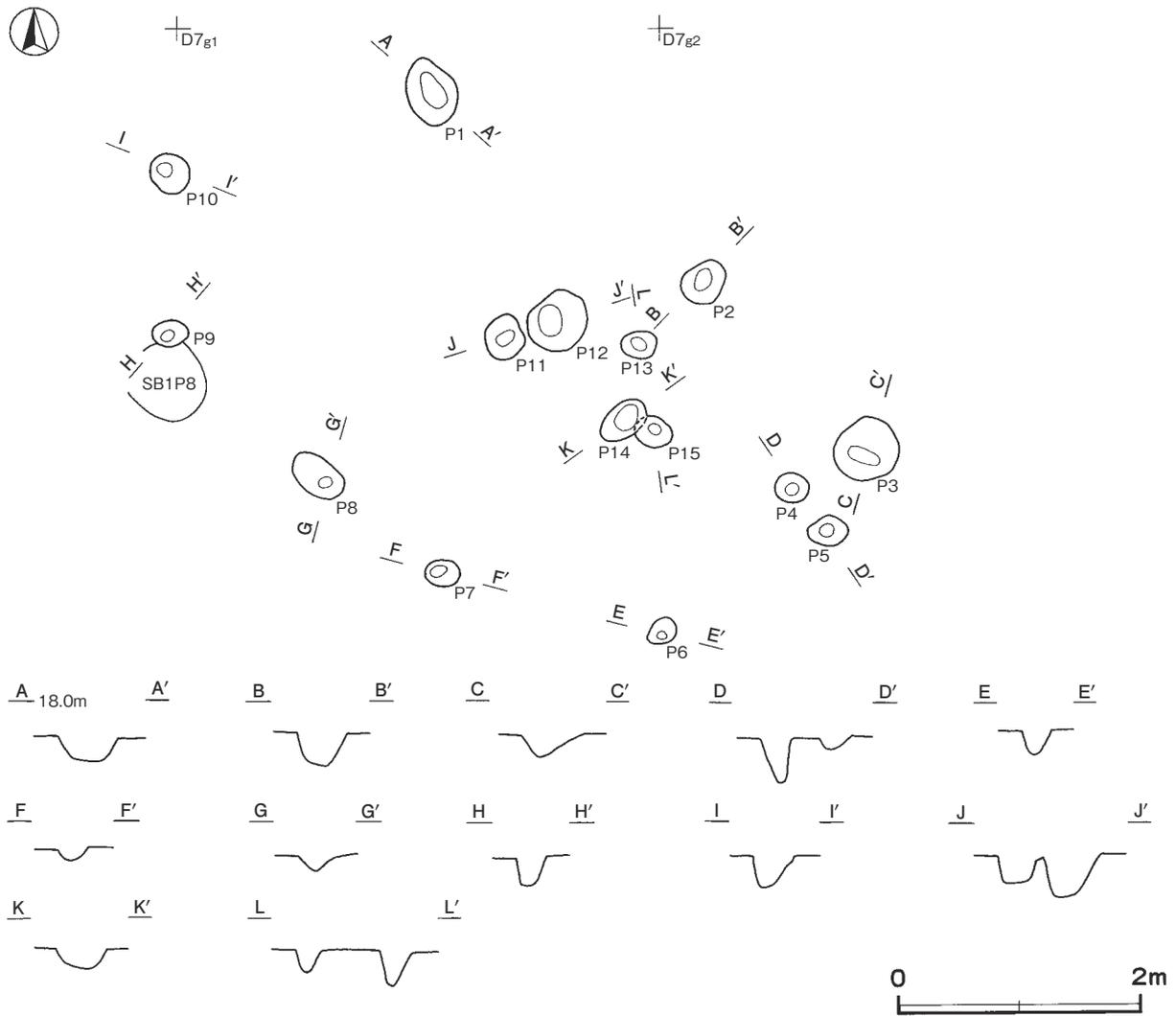
第1号ピット群(第72図)

位置 調査区中央部(D 6g0 ~ D 7h2区)、標高18mほどの平坦な台地上に位置している東西6.2m、南北4.9mの範囲から、ピット15か所を確認した。

重複関係 第1・4・5号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径24~56cm、短径21~52cmの円形または楕円形で、深さは9~37cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

所見 時期、性格ともに不明である。



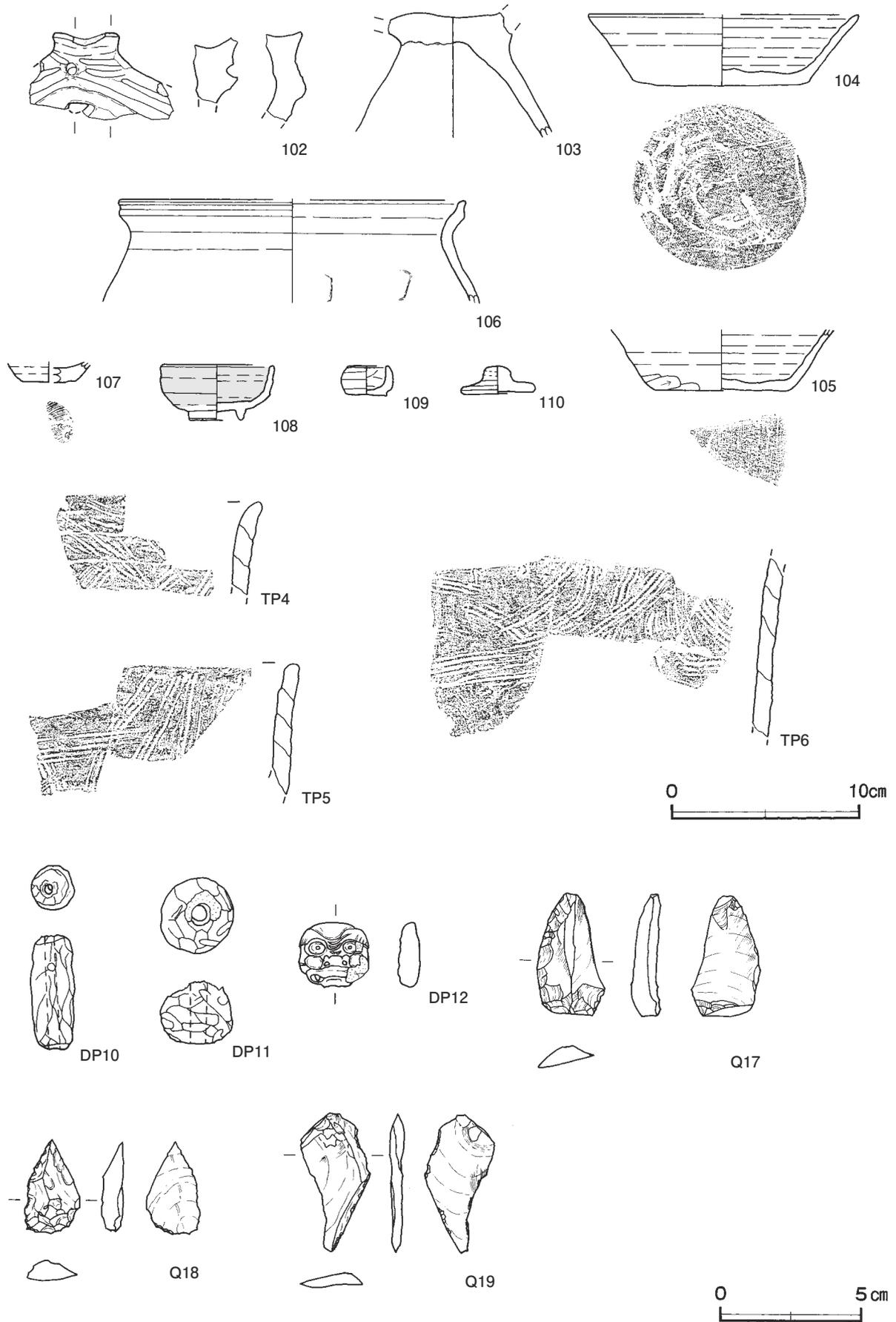
第72図 第1号ピット群実測図

第1号ピット群ピット計測表

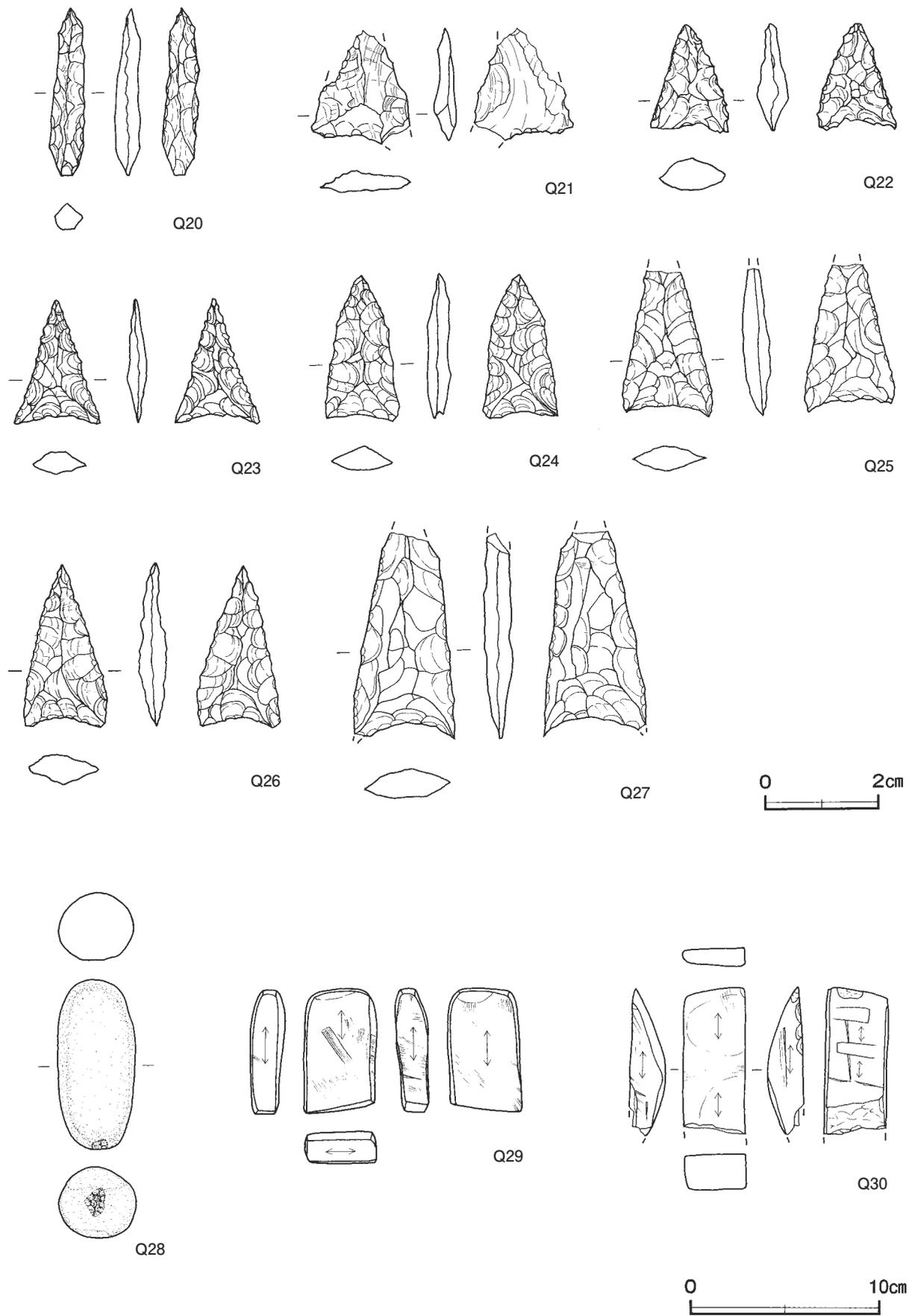
番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 7 g1	楕円形	56	43	21	6	D 7 h1	楕円形	26	21	25	11	D 7 g1	楕円形	36	32	24
2	D 7 g2	楕円形	40	33	18	7	D 7 h1	楕円形	29	24	10	12	D 7 g1	楕円形	54	49	37
3	D 7 g2	楕円形	55	52	20	8	D 7 g1	楕円形	47	31	14	13	D 7 g1	円形	24	23	18
4	D 7 g2	円形	30	28	39	9	D 6 g0	楕円形	29	23	24	14	D 7 g1	楕円形	44	27	17
5	D 7 h2	楕円形	32	28	9	10	D 6 g0	円形	35	33	24	15	D 7 g1	楕円形	32	27	28

(6) 遺構外出土遺物

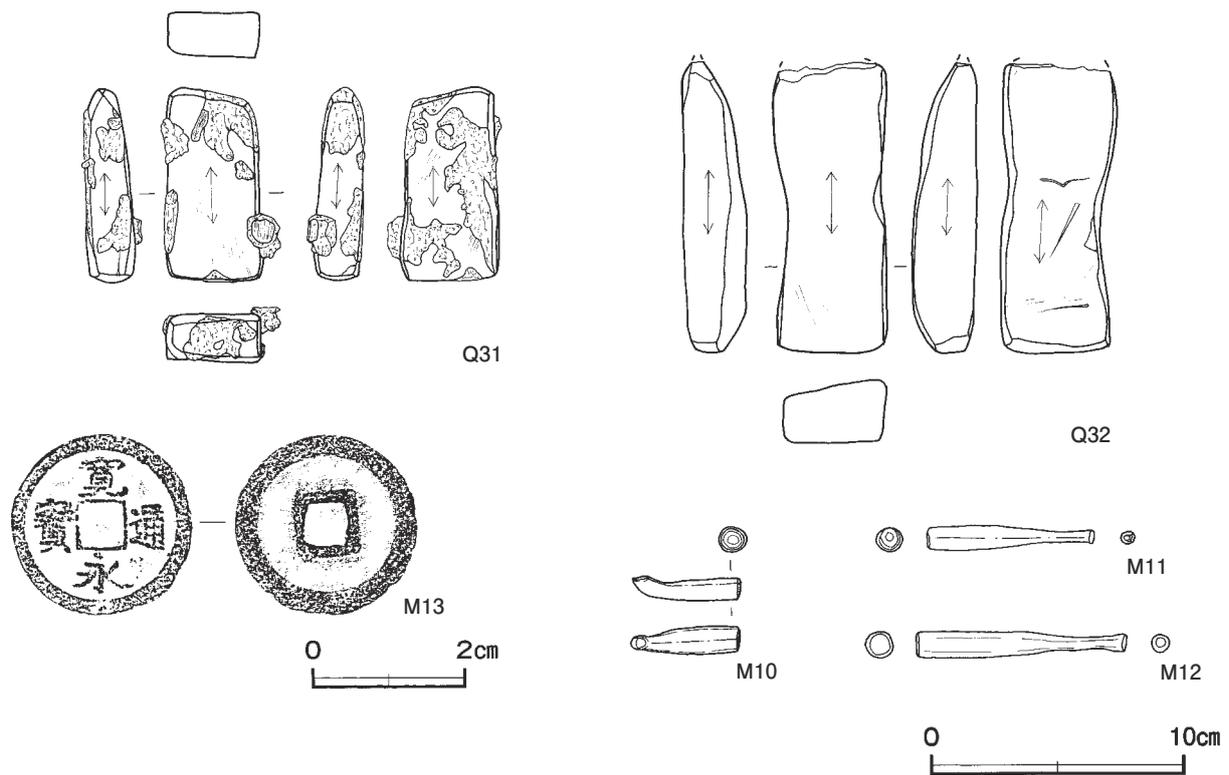
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については、実測図(第73～75図)と観察表を掲載する。



第 73 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第74図 遺構外出土遺物実測図(2)



第 75 図 遺構外出土遺物実測図 (3)

遺構外出土遺物観察表 (第 73 ~ 75 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
102	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部に沿った隆起帯をもつ 波頂部装飾は左右に張り出し、その直下に円形の孔を穿つ	SK16 覆土中	5%
103	縄文土器	台付鉢	-	(6.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	脚部外面ナデ	SK75 覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
104	須恵器	坏	[14.4]	3.9	9.3	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部多方向のヘラ削り	SD 4 覆土中	60% PL13 産地不明
105	須恵器	坏	-	(3.3)	[7.2]	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	SK169 覆土中	10% 産地不明
106	土師器	甕	[18.3]	(5.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ	SK176 覆土中	5%
107	土師質土器	小皿	-	(1.1)	[2.8]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ナデ	表土	40%
109	土師質土器	ミニチュア土器	2.1	1.6	2.2	長石・石英・雲母	橙色	普通	外・内面ナデ	SK129 覆土中	100% PL18
110	土師質土器	ミニチュア土器	3.8	1.5	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外・内面ナデ	表土	60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
108	磁器	碗	5.8	3.0	2.8	長石 暗オリーブ灰	外・内面クロコナデ	透明	不明	SK308 覆土中	90% PL17

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	横位と斜位の沈線文	表土	PL12
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	横位と斜位の沈線文	表土	PL12
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	橙	横位と斜位の沈線文	表土	PL12

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP10	管状土錘	4.1	1.6	0.3~0.4	11.6	長石・石英	にぶい黄褐	一方向からの穿孔 外面縦位の磨き	SD 1 覆土中	PL18

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP11	土玉	2.6	0.65~0.8	2.2	13.8	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔 外面ナデ	SD 1 覆土中	PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP12	泥面子	2.3	2.5	0.75	4.2	長石・石英	橙	鬼	SK188 覆土中	PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 17	ナイフ形石器	4.3	2.5	1.0	7.62	黒曜石	左側縁に調整	表土	PL18
Q 18	尖頭器	3.3	1.9	0.8	3.85	頁岩	左側縁に調整	SK125 覆土中	
Q 19	剥片	5.0	2.4	0.5	3.28	頁岩	調整剥片	SD 5 覆土中	
Q 20	錐	3.0	0.7	0.5	0.89	チャート	両面調整	SI 5 覆土中	PL18
Q 21	鎌	(2.0)	1.8	0.4	(0.86)	黒曜石	無茎鎌 一部欠損 両面調整	表土	
Q 22	鎌	1.9	1.4	0.5	1.10	チャート	無茎鎌 両面調整	SD 1 覆土中	PL18
Q 23	鎌	2.2	1.5	0.4	0.64	黒曜石	無茎鎌 両面調整	SK22 覆土中	PL18
Q 24	鎌	2.6	1.3	0.5	1.13	赤色チャート	無茎鎌 両面調整	表土	PL18
Q 25	鎌	(2.6)	1.6	0.5	(1.80)	頁岩	無茎鎌 一部欠損 両面調整	表土	PL18
Q 26	鎌	2.9	1.5	0.5	1.5	頁岩	無茎鎌 両面調整	SI 7 覆土中	PL18
Q 27	鎌	(3.6)	1.9	0.5	(3.03)	流紋岩	無茎鎌 一部欠損 両面調整	表土	PL18
Q 28	敲石	9.0	4.2	3.9	193.8	安山岩	下端部に敲打痕	SK22 覆土中	
Q 29	砥石	6.6	3.9	1.7	73.6	凝灰岩	砥面5面	表土	
Q 30	砥石	(7.9)	3.3	1.9	(66.1)	凝灰岩	砥面4面 下端部欠損	SD 7 覆土中	
Q 31	砥石	7.7	4.5	2.2	103.0	凝灰岩	砥面4面 砥面に木片と鉄付着	表土	
Q 32	砥石	(11.6)	4.5	2.5	(196.8)	凝灰岩	砥面4面 砥面に木片と鉄付着	表土	

番号	器種	長さ	火皿径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 10	煙管	4.2	-	1.1	4.8	銅	雁首部 火皿欠損 羅宇(竹)残存	SK188 覆土中	

番号	器種	長さ	小口径	口付径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 11	煙管	6.6	0.9	0.6	6.0	銅	吸口部 羅宇(竹)残存	SK188 覆土中	
M 12	煙管	8.3	1.0	0.7	18.8	銅	吸口部	表土	PL19

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M 13	銭貨	寛永通寶	2.45	0.57	2.60	銅	1636	古寛永	表土	PL19

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査によって、旧石器時代の石器集中地点1か所、縄文時代の竪穴建物跡1棟、陥し穴1基、奈良・平安時代の竪穴建物跡9棟、土坑1基、江戸時代の掘立柱建物跡5棟、井戸跡5基、溝跡2条、道路跡1条、粘土貼土坑1基、土坑1基をはじめ、時期不明の土坑、炉跡、溝跡、柱穴列、ピット群が確認できた。当遺跡は、人々の生活の痕跡が旧石器時代から江戸時代にかけて断続的に残されており、特に奈良・平安時代の集落跡が中心であることが明らかとなった。調査区は遺跡の一部にすぎないが、遺構の配置から、律令期の集落は調査区域外に広がっているものと推測される。ここでは、各時代における土地利用の変遷を概観した上で、本格的な集落が形成された奈良・平安時代の様相について出土土器から検討し、まとめたい。

2 土地利用の変遷（第76・77図）

当遺跡において、最初に土地利用がなされたのは後期旧石器時代である。遺構は石器集中地点1か所を確認し、主に頁岩製の剥片が出土している。本地点は小規模な石器製作跡で、剥離作業時に生じた不要な剥片を廃棄した痕跡とみられる。また、本地点の周辺では、黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代の土地利用は、早期後葉及び中期後葉の二時期に行われている。早期後葉は、深鉢形土器の破片とともに石鏃が僅かに出土していることから、小規模かつ短期間の狩猟活動の場として利用されたとみられる。中期後葉は、加曽利EⅢ式期に比定できる竪穴建物跡1棟を確認し、調査区域内における当該期の遺構と遺物が希薄であることから、小規模な集落が営まれていた可能性がある。

律令期には本格的な集落が形成される。今回の調査では、竪穴建物跡9棟を確認し、時期別にみると8世紀前葉が1棟、8世紀後葉が5棟、9世紀前葉が3棟であり、主に調査区西部に分布している。集落は8世紀前葉に出現し、8世紀後葉から9世紀前葉にかけて発展したことが明らかとなった。唯一、8世紀前葉に比定できる第3号竪穴建物跡は、北部が調査区域外に延びるため、詳細は不明である。表9は、当財団が発掘調査を実施した8・9世紀の遺跡¹⁾を対象として、県西部における竪穴建物跡の床面積の推移を示したものである。相対的には、床面積が25㎡以上の大形の建物は少なく、25㎡未満の小形ないし中形の建物が主体を占めており、ある程度の規格性が認められる²⁾。集落の実態としては、各時期に大形の建物1～2棟を中心に複数の小形ないし中形の

建物が点在する構成がみられる。当遺跡における8世紀後葉の竪穴建物跡は、平面形が方形ないし長方形で、第4号竪穴建物跡を除いて、長軸が3.73～4.74 m、短軸が3.27～4.56 mで、床面積が12～22㎡の中形の建物である。第4号竪穴建物跡は、床面積が29.4㎡と大形の建物で、竈、4か所の支柱穴、出入口施設に関する

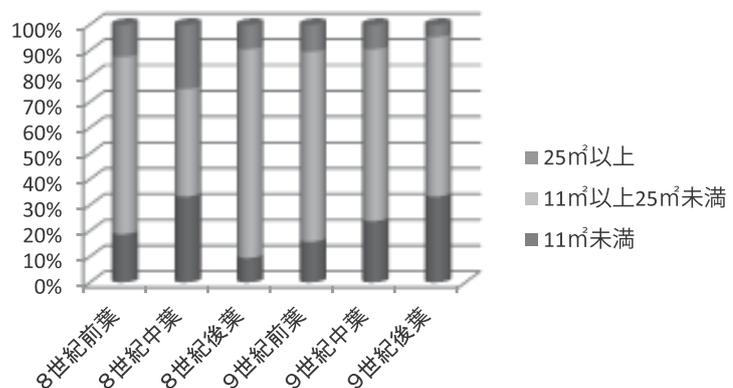
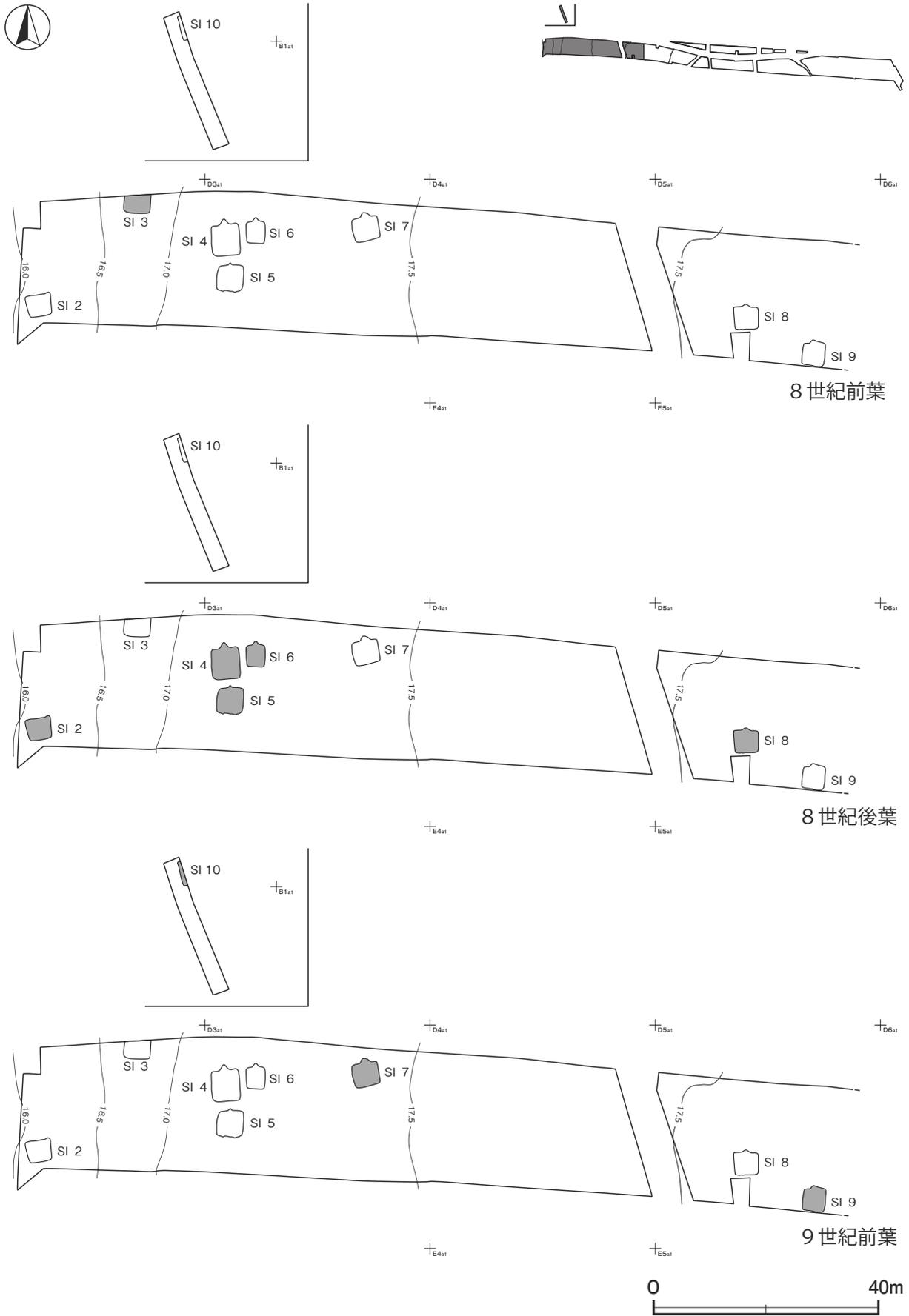


表9 県西部における竪穴建物跡の床面積の推移



第76図 奈良・平安時代の集落変遷

ピット、2か所の竈に付属するピット、貯蔵穴といった主要な内部施設を備えており、規模と遺物の出土量から、集落の中心となる建物であった可能性がある。竈に付属するピットを有する例は、つくば市中原遺跡の第54・58号竪穴建物跡（8世紀後葉）でも確認でき、大形の建物跡に共通した形態との指摘がされている³⁾。竈は第2号竪穴建物跡が北東コーナー部に、その他は北壁中央部に付設されている。当財団の『研究ノート』9号⁴⁾によると、県内におけるコーナー竈の竪穴建物跡は古墳時代に出現するが、検出例が多いのは9・10世紀であることが判明している。8世紀代の事例は少ないが、コーナー竈の検出例が徐々に増加する8世紀後葉に比定できる第2号竪穴建物跡の存在からは、特異な竈形態が県西部にも普及していたことが伺える。隣接する宮内遺跡では、8世紀後葉に比定できる第7号竪穴建物跡で北東コーナー竈が確認されており⁵⁾、竈の付設位置や支柱穴が検出されていない点は第2号竪穴建物跡と共通している。その他、第5号竪穴建物跡は壁柱穴を有する竪穴建物跡で、4か所の支柱穴の確認状況から、柱は壁際にやや斜めに立てられた可能性があり、他の同時期の建物とは異なる上屋構造であったことが想定される。9世紀代の竪穴建物跡の平面形や規模は、基本的に8世紀後葉と同様である。ただし、建物構造をみると、8世紀後葉にみられたコーナー竈や壁柱穴などの特徴的なものはない。8・9世紀代の竪穴建物跡からは、須恵器や土師器をはじめ、紡錘車、手鎌、鉄滓などが僅かに出土している。

江戸時代には、井戸を備えた簡易的な屋敷を建て、居住地として利用されていたとみられる。調査区東部では区画溝と考えられる第1・2号溝跡を確認し、その間の硬化面は道路の痕跡とみられる。特筆すべき遺物としては、第1号溝跡から出土した小銅仏（弥勒仏立像）が挙げられる。県内では、稲敷市下君山廃寺（誕生釈迦仏立像）⁶⁾、つくば市熊の山遺跡（天部立像）⁷⁾、桜川市犬田神社前遺跡（観世音菩薩立像）⁸⁾、結城市下り松遺跡（地藏菩薩立像・聖観音菩薩立像）⁹⁾などで類例を確認できる。時期は、下君山廃寺の事例が奈良時代で、その他は平安時代末から鎌倉時代にかけての時期に集中している。形状をみると、9世紀末に比定できる下り松遺跡出土の2例は、台座に光背支持用の柄を鋳出しているが、その他は大きさに違いがあるものの、台座に柄はみられない。当遺跡出土の小銅仏は、17世紀後葉から18世紀前葉の陶磁器と共伴しているが、鋳造時期は室町時代と鑑定されたことから、伝世品と考えられる。後藤道雄氏によると、当遺跡出土の小銅仏の使用法は、背面下端部と台座底部が平坦であることから、持ち歩き用のお守りであった可能性があり、中世以降、当地域に弥勒仏に対する信仰が浸透していたことが伺える。



第77図 県内出土の小銅仏

3 奈良・平安時代の土器（第78～81図）

ここでは、堅穴建物跡から出土した奈良・平安時代の土器から遺跡の性格を捉えたい。土器は出土量が少ないことから、変遷をたどることは難しいが、当遺跡で主体をなす8世紀後葉から9世紀前葉にかけての土器を観察した結果、産地が異なる土器が混在している状況が確認できたので、各時代における土器の器形・製作技法・産地などの特徴について記述した上で、土師器甕から遺跡の性格づけを試みたい。時期については、当財団の『研究ノート』及び報告書に掲載された土器編年研究や研究論文の成果¹⁰⁾を参考にするとともに、坂東市域を中心とした当財団の発掘調査報告書を踏まえながら検討を行った。

(1) 奈良時代の土器様相（第78図）

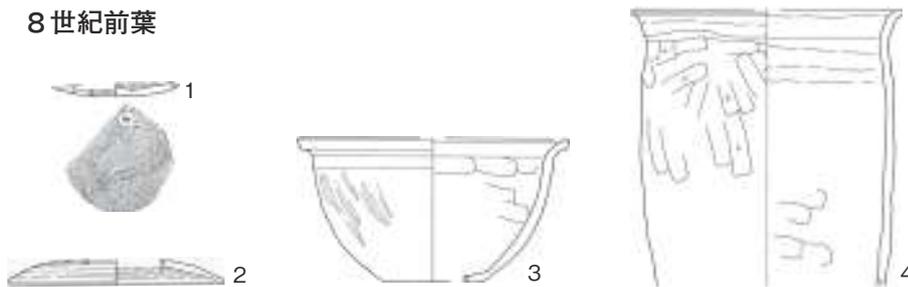
第2～6・8号堅穴建物跡出土土器が該当する。第3号堅穴建物跡が8世紀前葉に、その他が8世紀後葉に比定できる。

8世紀前葉の土器は、須恵器坏・蓋・甕、土師器鉢・甕などで構成されるが、出土量が極端に少ないことから、詳細は不明である。須恵器坏（1）は底部が丸底気味の大形品が、蓋（2）は天井部が低い扁平なものが出土している。土師器鉢（3）は、体部外面を縦方向にヘラ磨きしたもので、器形から須恵器を模倣したものとみられる。甕（4）は、口縁部が緩やかな「く」字状を呈する長胴形のもので、頸部付近を横方向、それ以下を縦方向にヘラ削りする特徴がみられる。このような特徴を有する長胴形の甕は、時代的に先行する7世紀代に江戸川流域から東京湾沿岸に主体的に分布しており、その出自が南武蔵地域あるいは多摩川流域に求められる可能性が指摘されている¹¹⁾。県西部の様相をみると、坂東市宮内遺跡の第80号堅穴建物跡（7世紀後葉）、古河市本田山遺跡の第24号堅穴建物跡¹²⁾（8世紀初頭）、同北新田A遺跡の第59・60号堅穴建物跡¹³⁾（8世紀前葉）、同行屋西遺跡の第15号堅穴建物跡¹⁴⁾（8世紀前葉から中葉）などから出土しており、8世紀中葉以前にみられる甕と考えられる。その他、細片のため図示できないが、第3号堅穴建物跡からは、口縁部をつまみ上げ、体部下半を縦方向にヘラ磨きしたいわゆる「常総型甕」も出土している。胎土には長石・石英・雲母が含まれている。なお、上記した遺跡の各堅穴建物跡においても、長胴形の甕と常総型甕が相伴している。

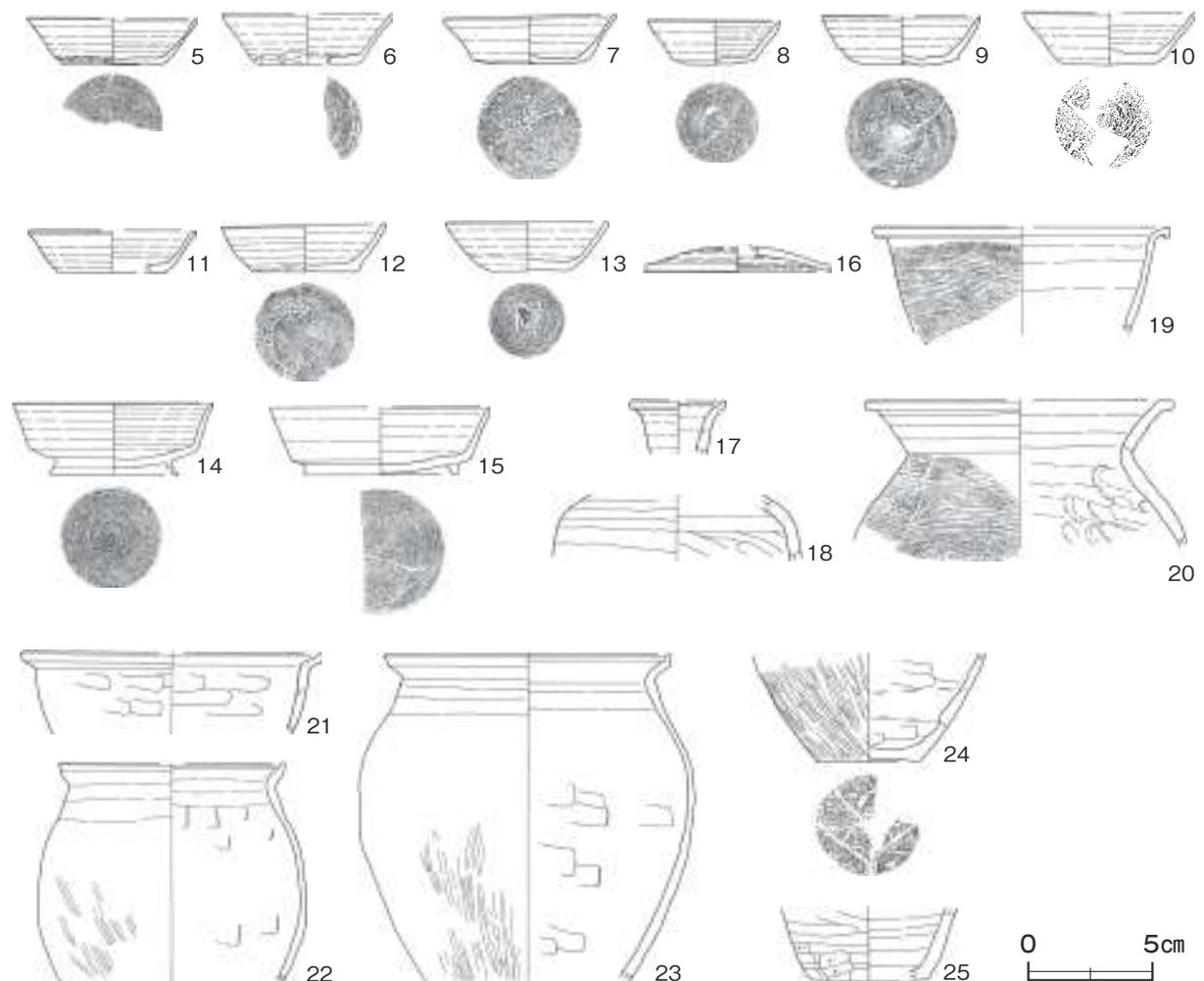
8世紀後葉の土器は、須恵器坏・高台付坏・蓋・長頸瓶・鉢・甕、土師器鉢・甕などで構成される。須恵器は、器種別に破片数を集計した結果、坏類が全体の8割を占め、その他の出土量は極めて少ない。須恵器は胎土や製作技法などから、複数の生産窯から供給された製品が混在している状況である。坏（5～13）は、口径が13～14cm、底径が7～8cm、器高が4cm前後のものが多い。5～7は、焼成が軟質で、胎土に長石・石英・雲母を含み、体部下端と底部にヘラ削りを施していることから、新治窯産の製品とみられる。8～10は、焼成が軟質で、胎土は灰白色を呈している。製作技法をみると、底部切り離した後、底部にヘラナデを施しただけのもの（9・10）、ヘラ削りしたもの（8）があり、底部が比較的厚手で丸底気味である。常総市上谷田遺跡では、8世紀前葉段階に新治窯と技術的系譜を同じくする在地的な一群が存在した可能性が指摘されている¹⁵⁾。報告者は、古代下総国岡田郡内に未確認の窯がある可能性も示唆している。8～10は、出土量の主体を占め、焼成が軟質な点は新治窯産の製品と同じであるが、器形・製作技法・胎土などは相違している。今後、県西部における未発見の窯の存在も考慮した上で、当該地域における位置づけを検討する必要がある。その他、焼成が良好で重厚感のある堀ノ内窯産の製品（12）、底部が段状に張り出し、「＝」のヘラ記号がみられる製品（13）などが出土している。13は、胎土や製作技法から、木葉下窯産の製品の可能性もあるが、詳細は不明である。なお、本田山遺跡では、8世紀代に相当する胎土に白色針状物質を含む木葉下窯産の可能性のある高台付坏が出土している。高台付坏（14・

15) は、硬質で青灰色を呈した重厚感のある堀ノ内窯産の製品 (14), 底部が高台部に向かって張り出し、均質で堅緻な焼成の湖西窯産の製品 (15) が出土している。15 は底部に朱が付着し、擦った痕跡を確認できたことから転用硯と考えられる。蓋 (16) と長頸瓶 (17・18) は、小破片のため詳細は不明である。鉢 (19) と甕 (20) は、焼成が軟質で、胎土に長石・石英・雲母を含んでおり、体部外面に横方向の平行叩きを施している。土師器鉢 (21) は、器形から須恵器を模倣したものとみられる。甕 (22～24) は、胴部上半に最大径を測り、底部へとすぼまる長胴形を呈する。口縁部はつまみ上げ、体部下半に縦方向のヘラ磨きを施し、底部には木葉痕を残す特徴がみられる。胎土は長石・石英・雲母を比較的多く含んでい

8世紀前葉



8世紀後葉



第78図 奈良時代の土器様相

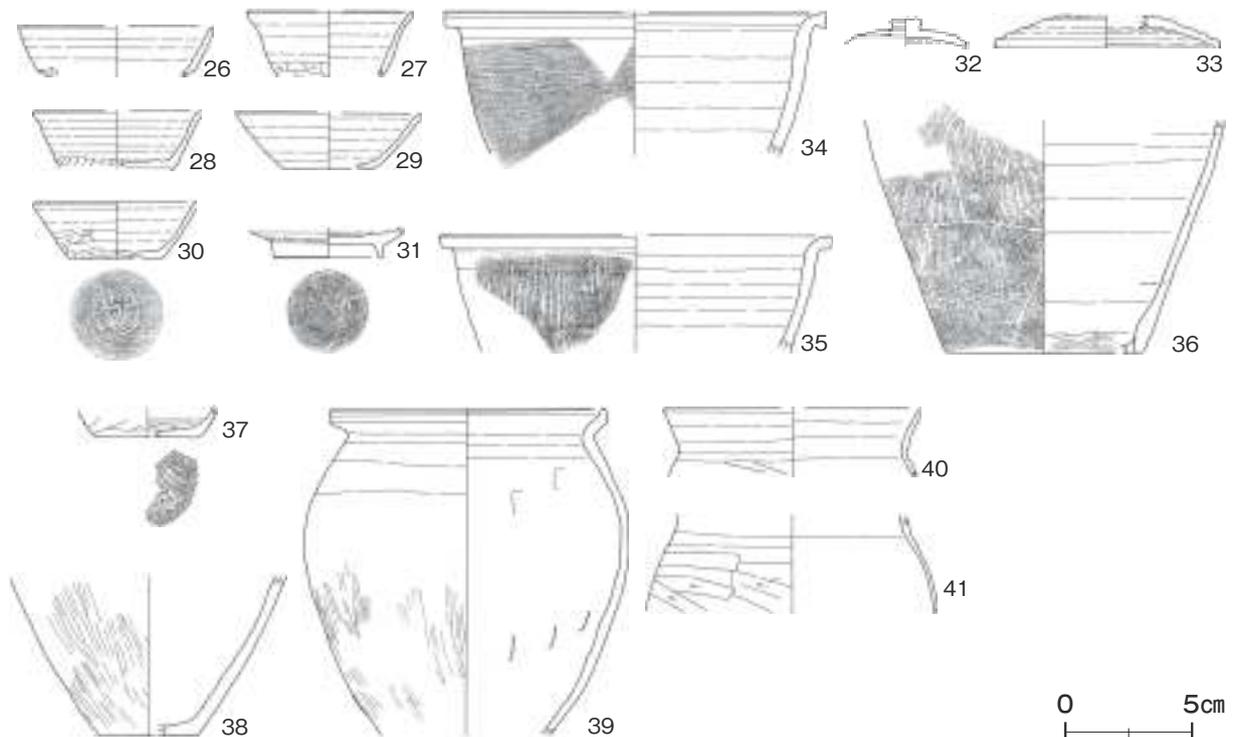
る。これらの甕は、器形と製作技法から、いわゆる「常総型甕」である。その他、体部下端に横方向のヘラ削りを施した比較的厚手のもの(25)、細片のため図示できないが、いわゆる「武蔵型甕」が極少量出土している。

(2) 平安時代の土器様相 (第79図)

第7・9・10号竪穴建物跡出土土器が該当し、時期は9世紀前葉に比定できる(26~41)。

9世紀前葉の土器は、須恵器坏・高台付坏・蓋・高盤・長頸瓶・鉢・甑・甕、土師器坏・甕などで構成される。須恵器は、器種別に破片数を集計した結果、坏類が全体の7割を占め、その他の出土量は少ない。須恵器坏(26~30)は、8世紀後葉に比べて、器高が若干高くなり、底径が小形化し、逆台形を呈するものがみられる。27・28は、焼成が軟質で、胎土に長石・石英・雲母を含み、体部下端と底部にヘラ削りを施していることから、新治窯産の製品とみられる。新治窯産以外にも、胎土や製作技法から、複数の生産窯から供給された製品が混在しているものとみられる。出土量的には、新治窯産が主体を占めている。高台付坏(31)と蓋(32・33)は、小破片のため詳細は不明である。高盤と長頸瓶は、細片のため図示できなかった。鉢(34・35)は、体部外面に横方向の平行叩きを施すもの(34)と縦方向の平行叩きを施すもの(35)がみられる。甑(36)は、焼成が軟質で、胎土に長石・石英・雲母を含み、体部外面に縦方向の平行叩きを施している。土師器坏(37)は、出土量は少ないが、9世紀前葉の器種構成に加わる。小破片のため、詳細は不明であるが、体部内面に丁寧なヘラ磨きを施している。甕は、38・39などのいわゆる「常総型甕」の他に、40・41などの薄手のものが出土している。常総型甕(38・39)は、8世紀後葉に比べて、胴部最大径の位置が若干上位になり、底部が小形化し、細身になる。40・41は、口縁部が「く」字状を呈し、体部外面を横方向や斜方向にヘラ削りし、薄手に仕上げている。これらは、器形と製作技法から、いわゆる「武蔵型甕」である。胎土を観察した結果、41については、角閃石が含まれていることから、利根川

9世紀前葉



第79図 平安時代の土器様相

流域の河川堆積物を用いて製作された製品の可能性がある¹⁶⁾。

(3) 土師器甕からみた遺跡の性格（第80・81図）

県西部の台地は、旧飯沼を境として結城市から常総市にかけての結城台地と、利根川に沿って古河市から取手市へと延びる猿島台地に分けられる。当遺跡が立地する猿島台地は、台地を南流して利根川へと接続する向堀川、女沼川、宮戸川、江川などの大小河川によって開析された樹枝状の複雑な地形を形成している。これらの河川に沿って広がる低湿地帯は、現在は水田として利用されているが、近世中期の干拓・耕地整備事業以前は釈迦沼、鶴戸沼、飯沼などの沼沢地帯であったと考えられている¹⁷⁾。律令期の遺跡は、こうした河川や谷津、沼に面した台地縁辺部から平坦な台地上にかけて多く立地している。これらの遺跡の分布を大きく見ると、台地北西部の古河市では、宮戸川流域をはじめ、女沼川流域や向堀川流域に多くの遺跡が確認されている。当財団では、女沼川右岸に立地する羽黒遺跡¹⁸⁾、宮戸川左岸に立地する北新田A遺跡などの発掘調査を実施している。北新田A遺跡が立地する宮戸川左岸の上流域には、当該期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が多数確認された本田山遺跡や行屋西遺跡が隣接している。一方、台地南東部の坂東市では、市内を南流する江川と西部の利根川に挟まれた平坦な台地上から低地へと向かう台地縁辺部にかけて多くの遺跡が確認されている。発掘調査の事例が極端に少ないという問題もあるが、当財団が発掘調査を実施した宮内遺跡は、当遺跡から江川を挟んで西へ約1kmの地点に隣接し、8世紀から10世紀にかけての竪穴建物跡が54棟確認されている。集落は、8世紀中葉から徐々に規模を拡大させ、続く8世紀後葉から9世紀前葉の最盛期を迎えた後、9世紀中葉に一時終焉する。調査区は道路幅に限定されるため、推測の域はでないが、当遺跡で確認された集落もまた、宮内遺跡の集落が最盛期を迎える8世紀後葉から9世紀前葉に規模を拡大させている。

県西部の一部の地域は、千葉県北部や埼玉県南東部とともに律令期に下総国に属し、地理的にはその北西部にあたる。また、下総国には11の郡が置かれ、古河市から坂東市にかけての地域は猿嶋郡内にあったと考えられている¹⁹⁾。こうした下総国北西部にあたる猿島台地上の遺跡では、地理的な条件から、各遺跡から出土した須恵器が複合的な産地組成を示すという特徴がみられる。当遺跡は猿島台地南東部に立地し、集落が8世紀前葉に出現するが、その中心は8世紀後葉から9世紀前葉にかけての時期である。竪穴建物跡から出土した土器を用途別にみると、供膳具と貯蔵具は須恵器で、煮沸具は土師器甕と須恵器甕で構成されている。須恵器の製作技法や胎土を観察した結果、8世紀後葉から9世紀前葉にかけては、新治窯産の製品を主体的に消費していることが明らかとなった。その他、掘ノ内窯産、産地不明であるが、他地域から搬入された可能性がある製品が僅かに出土している。その中で、第5号竪穴建物跡出土の高台付坏は、湖西窯産の製品と考えられ、当該期に遠く離れた東海地方からも影響を受けていたとみられる。一方、猿島台地北西部に立地する古河市羽黒遺跡の状況を見ると、8世紀代は当遺跡同様、新治窯からの安定した供給を受けているが、9世紀以降になると本格的な操業を開始した三和窯の製品が増加する傾

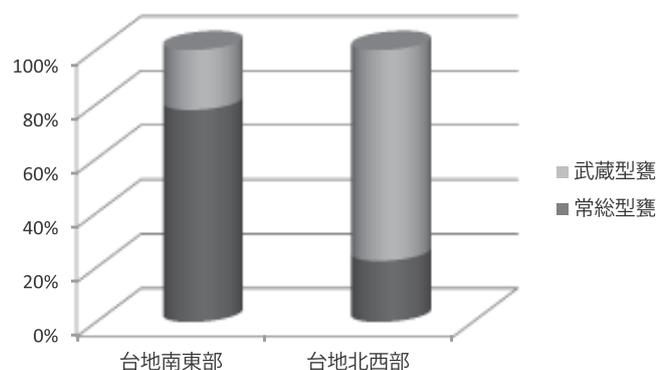


表10 常総型甕と武蔵型甕の出土比率

向がみられる。その他、南比企窯、益子窯、三嶋窯など、県外から運びこまれた製品が混在する状況が指摘されている²⁰⁾。

次に、煮沸具としての土師器甕²¹⁾についてみると、当遺跡ではいわゆる「常総型甕」と「武蔵型甕」が出土している。前者は茨城県南部から千葉県北部にかけて、後者は埼玉県北部から群馬県南部にかけての地域を中心として、それぞれが関東地方の中で広範囲に分布している。当遺跡の8世紀後葉及び9世紀前葉の竪穴建物跡からは、土師器甕が破片数にして1,017点(11,855g)出土しているが、主体を占めるのは常総型甕である。一方、武蔵型甕は全体の約3%(330g)と極めて出土量が少ない。表10²²⁾は、

	台地北西部の様相	台地南東部の様相
8世紀前葉	<p>長胴甕 本田山・S124</p> <p>常総型甕 北新田 A・S159</p>	<p>長胴甕 馬立原・S13</p> <p>常総型甕 宮内・S115</p>
8世紀中葉	<p>武蔵型甕 北新田 A・S113</p> <p>武蔵型甕 行屋西・S115</p>	<p>武蔵型甕 宮内・S157</p> <p>武蔵型甕 宮内・S145</p>
8世紀後葉	<p>常総型甕 本田山・S139</p>	<p>常総型甕 宮内・S140</p> <p>常総型甕 宮内・S140</p>
9世紀前葉	<p>常総型甕 羽黒・S151</p> <p>武蔵型甕 本田山・S103</p>	<p>常総型甕 宮内・S143</p> <p>常総型甕 宮内・S131</p>

第80図 猿島台地における8世紀前葉から9世紀前葉の土師器甕の様相

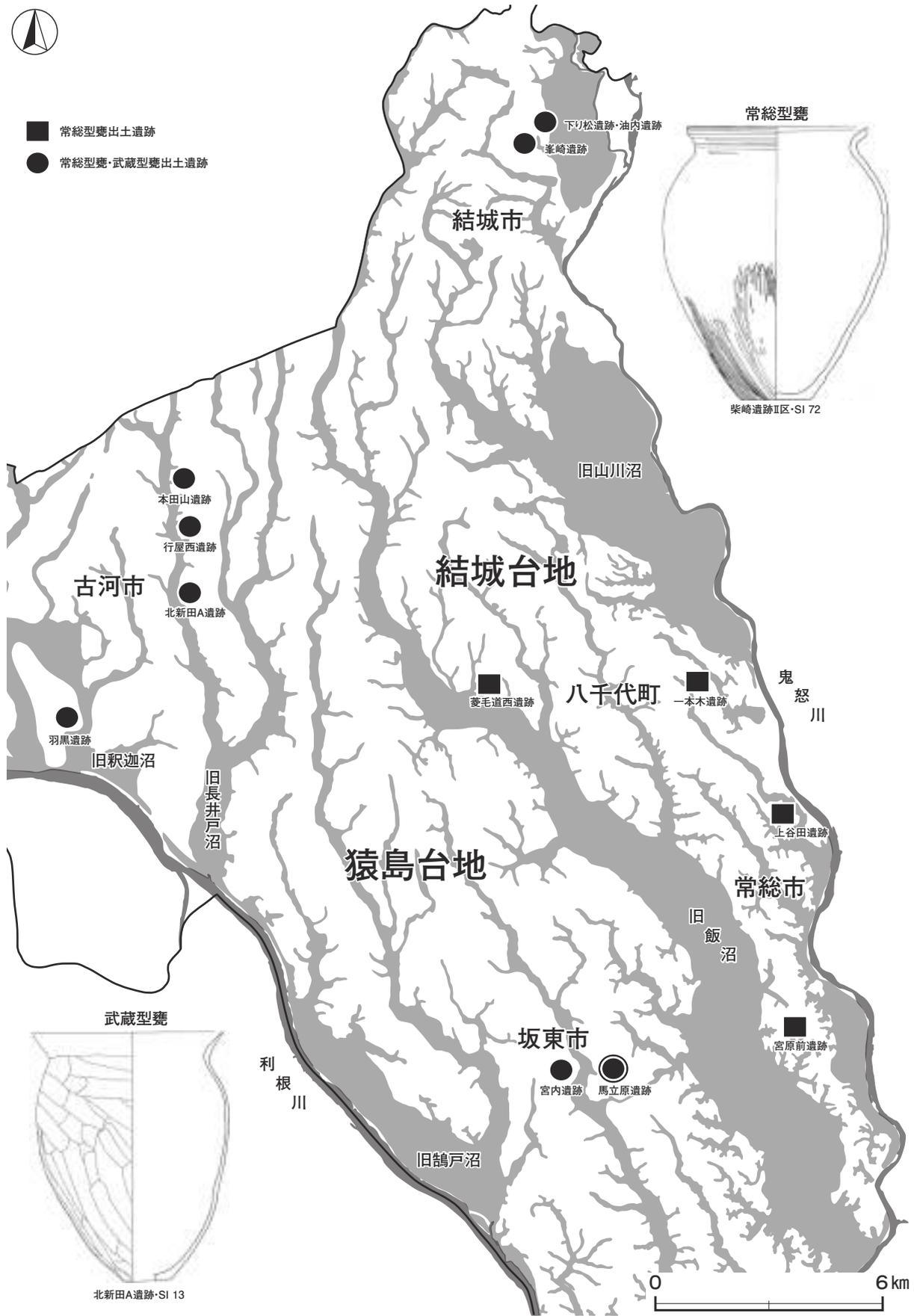
猿島台地における常総型甕と武蔵型甕の出土比率を示したものである。また、第80図²³⁾は、猿島台地における8世紀前葉から9世紀前葉の土師器甕の組成と時期的推移を示したものである。台地南東部に立地する宮内遺跡では、当遺跡と同様、常総型甕と武蔵型甕が出土している。武蔵型甕は8世紀中葉に出現するが、量的には常総型甕が主体である。一方、台地北西部の女沼川や宮戸川流域の遺跡では、9世紀中葉以降に竪穴建物跡の棟数が増加し、台地南東部とは集落の発展時期に違いがあるが、常総型甕と武蔵型甕が出土している。8世紀中葉から9世紀前葉の集落は、小規模で事例が少ないという問題もあるが、両者の出土量をみると、武蔵型甕が常総型甕を上回る傾向があり、台地南東部の状況とは対照的である。武蔵型甕は台地南東部と同様、8世紀中葉に出現する。高橋一夫氏の研究成果²⁴⁾によると、常総型甕は下総国に属した全地域で出土するが、その中で武蔵型甕が伴出する地域をみると、旧庄和町周辺や千葉県流山市から千葉市にかけての江戸川流域及び東京湾沿岸の武蔵国寄りの地域は、霞ヶ浦南岸の常陸国寄りの地域に比べて、出土量が増加することが指摘されている。第81図²⁵⁾は、坂東市を中心とした県西部における武蔵型甕の分布状況を示したものである。猿島台地上の遺跡では、常総型甕と武蔵型甕が出土しているが、両者の出土量及び結城台地上の遺跡との比較から、台地南東部的な土師器甕の組成は、常総型甕の主要な分布圏に武蔵型甕の分布の外縁が重なる地域の特徴と捉えることができる。資料の制約はあるが、旧飯沼以東の結城台地南東部に立地する遺跡では、武蔵型甕が出土していないことを考慮すると²⁶⁾、当遺跡は旧飯沼以西の地域における武蔵型甕の分布が及んだ東限に位置していた可能性がある。ただし、結城台地北東部をみると、当財団が発掘調査を実施した結城市下り松遺跡や油内遺跡、両遺跡の南側に隣接する峯崎遺跡²⁷⁾では、8世紀中葉から9世紀後葉にかけて武蔵型甕が僅かに出土している。一方、古河市を中心とした台地北西部的な土師器甕の組成は、両者の出土量から、武蔵型甕の主要な分布圏に常総型甕の分布の外縁が重なる地域の特徴と捉えることができ、台地南東部との相異には地理的な要因が強く影響しているものと考えられる。このような現象の背景には、律令期に下総国北西部に属した地域における煮沸具の需要形態²⁸⁾が、郡単位さらには同郡内においても一律ではなく、それぞれが隣接する地域からの影響を受けていたことを想定できる。当遺跡の場合、常総型甕と武蔵型甕の出土量の差は歴然としており、本来、煮沸具は常総型甕のみで補うことができたと考えられる。竈使用時の熱効率は、常総型甕よりも薄手の武蔵型甕の方が高かったと考えられるが、機能的に優れた後者を入手できる環境にありながら、出土量が客体的である背景には、単なる商品としての流通の結果に帰結させることができない要因があった可能性はある。

4 おわりに

以上、今回の調査では、旧石器時代から江戸時代にかけての人々の痕跡を確認することができた。特に律令期の竪穴建物跡では、須恵器・土師器ともに製作地が異なる製品が混在し、複合的な産地組成を示していることが明らかとなった。当遺跡が属した下総国北西部は、地理的に常陸国、武蔵国、下野国、上野国との国境から比較的近い距離に位置していた。日常生活で使用された土器が複雑な様相を示す背景には、周辺諸国との人やモノの交流があったことを想定できる。また、台地上を流れる河川や沼は、こうした人の動きや物流を支えていたと考えられる。今後の県西部における発掘調査の進展に期待するとともに、本報告が当該地域における律令期の実態を解明する一助となれば幸いである。



- 常総型甕出土遺跡
- 常総型甕・武蔵型甕出土遺跡



第 81 図 県西部における武蔵型甕の分布状況

註

- 1) 対象とした遺跡は、律令期の竪穴建物跡が10棟以上確認され、下総国に属したと考えられる結城市下り松遺跡、常総市宮原前遺跡、坂東市宮内遺跡、古河市北新田A遺跡の4遺跡である。時期別の竪穴建物跡の棟数は、8世紀前葉が16棟、8世紀中葉が12棟、8世紀後葉が21棟、9世紀前葉が19棟、9世紀中葉が21棟、9世紀後葉が21棟である。なお、建物跡の一部が調査区域外に延びるもの、他の遺構との重複などにより、本来の床面積を計測できないものは除外した。
- 2) 小形の竪穴建物跡は、床面積が11㎡未満で、主柱穴が確認されていないものとした。中形の竪穴建物跡は、床面積が11㎡以上25㎡未満で、主柱穴が確認されたものもあるが、主に確認されていないものとした。大形の竪穴建物跡は、床面積が25㎡以上で、4か所の主柱穴が確認されているものとした。
- 3) 成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集 2000年3月
- 4) 仙波亨「コーナーに竈をもつ住居跡について」『研究ノート』9号 茨城県教育財団 2000年6月
- 5) 小林和彦・宮崎剛「宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第359集 2012年3月
舟橋理 長洲正博 大島孝博「宮内遺跡2 長右衛門元屋敷遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第387集 2014年3月
- 6) 上高津貝塚ふるさと歴史の広場『上高津貝塚ふるさと歴史の広場第12回特別展 古代のみちー常陸を通る東海道駅路ー』2013年3月
- 7) 吉原作平・原信田正夫「(仮称)鳥名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第149集 1999年3月
- 8) 榊雅彦・石川武志「大田神社前遺跡1 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第229集 2004年3月
- 9) 川津法伸・平石尚和「一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 下り松遺跡・油内遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第145集 1999年3月
- 10) 浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅰ)」『研究ノート』創刊号 茨城県教育財団 1992年7月
稲田義弘「熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第190集 2002年3月
櫻村宣行「『常総型甕』編年小考ー茨城県南部を中心としてー」『列島の考古学ー渡辺誠先生還暦記念論集』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会 1998年2月
- 11) 金丸誠「下総地域の鬼高式土器」『月刊考古学ジャーナル』1月号No.342 1992年1月
- 12) 中山経一・平田博之・新里康・奥山和久「県営担い手育成畑地帯総合整備事業(上大野地区)埋蔵文化財発掘調査(第2号)報告書 本山遺跡」総和町教育委員会 2002年3月
- 13) 中沢時宗・桜井一美・和田雄次「一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書1(総和地区) 南坪A・B・C遺跡 向坪A・B遺跡 高野遺跡 北新田A・B・C遺跡 西坪A・B遺跡 溜原B遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第38集 1986年8月
- 14) 奥富雅之「都市計画道路西牛谷・大和田線(町道6号線)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 蔵王遺跡・行屋西遺跡」総和町 2002年3月
- 15) 江原美奈子「上谷田遺跡 一般国道高崎坂東線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集 2000年3月

報告』第319集 2009年3月

- 16) 武蔵型甕の胎土については、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の田中広明氏に御教授いただいた。記して感謝いたします。なお、今回、「武蔵型甕」と判断した土師器甕については、御指導いただいた内容を参考に報告者が抽出したものであり、事実誤認等の責は報告者にあることを記しておきたい。
- 17) 岩井市史編さん委員会『岩井市史』（通史編）岩井市 2001年3月
岩井市史編さん委員会『岩井市史』（考古編）岩井市 1999年3月
総和町史編さん委員会『総和町史』（資料編 原始・古代・中世）総和町 2002年3月
- 18) 駒澤悦郎「羽黒遺跡 一級河川女沼川河川改修工事事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第202集 2003年3月
- 19) 註17に同じ
- 20) 註18に同じ
- 21) 土師器甕については、口径が20cm前後の大形品を対象とした。各遺跡からは、大形品とともに口径が16cm未満の小形品が出土しているが、系譜や用途が異なる可能性があることから除外した。
- 22) 表10は、当遺跡及び註5・12～14・18に掲載された8世紀中葉から9世紀前葉に比定できる常総型甕と武蔵型甕を抽出し、作成した。なお、台地南東部では、当遺跡及び宮内遺跡の2遺跡から常総型甕39点、武蔵型甕11点が出土し、台地北西部では、本田山遺跡、行屋西遺跡、北新田A遺跡、羽黒遺跡の4遺跡から常総型甕9点、武蔵型甕31点が出土している。
- 23) 第80図は、坂東市及び古河市を中心とした市町村及び当財団から刊行された発掘調査報告書（註5・12～14・18）に掲載された竪穴建物跡出土の土師器甕の実測図から報告者が作成した。なお、時期については、本来、詳細な出土状況などからの検討を通して遺構への帰属や同時性を決定しなければならないが、今回は便宜的に共伴した須恵器の年代に準拠した。
- 24) 高橋一夫「常陸型甕と武蔵型甕」『埼玉考古』第45号 2010年6月
- 25) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 水海道』1985年12月
『土地分類基本調査 小山、古河』1986年12月
佐藤正好・松浦敏「研究学園都市桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）柴崎遺跡Ⅱ区 中塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第63集 1991年3月
なお、第81図に示した遺跡の位置は、市町村及び当財団で刊行した遺跡の発掘調査報告書（註5・9・12～15・18・25・26）から報告者が作成した。河川及び低地の範囲は、茨城県農地部農地計画課から発行された『土地分類基本調査 水海道』及び『土地分類基本調査 小山、古河』の地形分類図をトレースした。
- 26) 齋藤和浩「宮原前遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第335集 2011年3月
藤原均「一本木遺跡発掘調査報告書」『八千代町埋蔵文化財調査報告書』第6集 八千代町教育委員会 一本木遺跡調査会 1991年3月
山野井哲夫・齋藤洋・大橋生・野村浩史「菱毛道西遺跡 株式会社エフピコ工場建設に伴う遺跡の発掘調査」『八千代町埋蔵文化財調査報告書』13 八千代町教育委員会 2009年7月
- 27) 松田政基・斉藤伸明・広岡公夫・黒原秀夫「峯崎遺跡」『結城市文化財調査報告書』第7集 結城市 1996年3月
- 28) 佐々木義則「常陸型甕の生産と流通－奈良時代以前の様相－」『婆良岐考古』第29号 2007年3月
常総型甕の製作地は、かすみがうら市北部から土浦市北部にかけての筑波山麓南東部の台地上との指摘がある。また、当遺跡出土の武蔵型甕の一部は、利根川流域で製作された可能性があることから、煮沸具は他地域からの搬入品との前提で、『需要形態』という用語を使用した。

第4章 馬立原西遺跡

第1節 調査の概要

馬立原西遺跡は、坂東市の中央部を南流する江川左岸の標高13～16mの平坦な台地上及び江川に向かう緩斜面部に位置している。遺跡の範囲は、遺構の配置や周辺の地形などから、江川左岸の広範囲に広がると推測される。調査面積は、平成24年度が $1,503\text{m}^2$ 、平成25年度が $1,993\text{m}^2$ である。

調査の結果、竪穴建物跡3棟（古墳時代2・時期不明1）、掘立柱建物跡7棟（江戸時代）、方形竪穴遺構7基（室町時代）、井戸跡11基（室町時代2・江戸時代9）、地下式坑12基（室町時代）、粘土貼土坑10基（江戸時代）、土坑334基（室町時代1・江戸時代12・時期不明321）、炉跡23基（江戸時代19・時期不明4）、道路跡1条（時期不明）、溝跡5条（時期不明）、柱穴列8条（江戸時代2・時期不明6）、ピット群4か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（ $60 \times 40 \times 20\text{cm}$ ）に20箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・壺・甕・甑）、須恵器（坏・高台付坏・甕・甌）、土師質土器（小皿・内耳鍋・焙烙・鉢・播鉢・火鉢）、陶器（碗・蓋・皿・灯明皿・灯明受皿・鉢・播鉢）、磁器（碗・皿・猪口）、土製品（土玉・泥人形・泥面子・鳩笛）、石器（砥石）、石製品（板碑）、銅製品（小柄・煙管）、銭貨（嘉祐通寶・景祐元寶・熙寧元寶・永樂通寶・寛永通寶・文久永寶）、木製品（椀）などである。

第2節 基本層序

今回の調査区は、平坦な台地上及び江川に向かう緩斜面部に位置している。テストピット1を調査区東部（B5h9）に、テストピット2を調査区西部（B4g7）に設定して、基本土層の観察を行った。なお、安全上、土層観察は表土下2mまでとした。土層は13層に分層した。

第1層は明褐色を呈する表土である。ローム粒子を多量に含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は20～30cmである。

第2層は暗褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は18～30cmである。

第3層は明褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は32～120cmである。

第4層は橙色を呈するハードローム層である。黒色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は10～78cmである。

第5層は明褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は16～22cmである。

また、テストピットでは第2黒色帯を確認できなかった。

第6層は灰褐色を呈するハードローム層から常総粘土層への漸移層である。粘土粒子を多量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は8～16cmである。

第7層は灰白色を呈する常総粘土層である。粘性・締まりともに極めて強く、層厚は50cmである。

第8～13層は粘土粒子や砂粒などの河川堆積物を含む土層である。

第8層はにぶい黄褐色を呈する常総粘土層から砂層への漸移層である。粘土粒子・砂粒を多量に含み、粘性は普通で、締まりは強く、層厚は6～10cmである。

第9層は極暗褐色を呈する砂層である。鉄分が多量に沈着し、粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は4～10cmである。

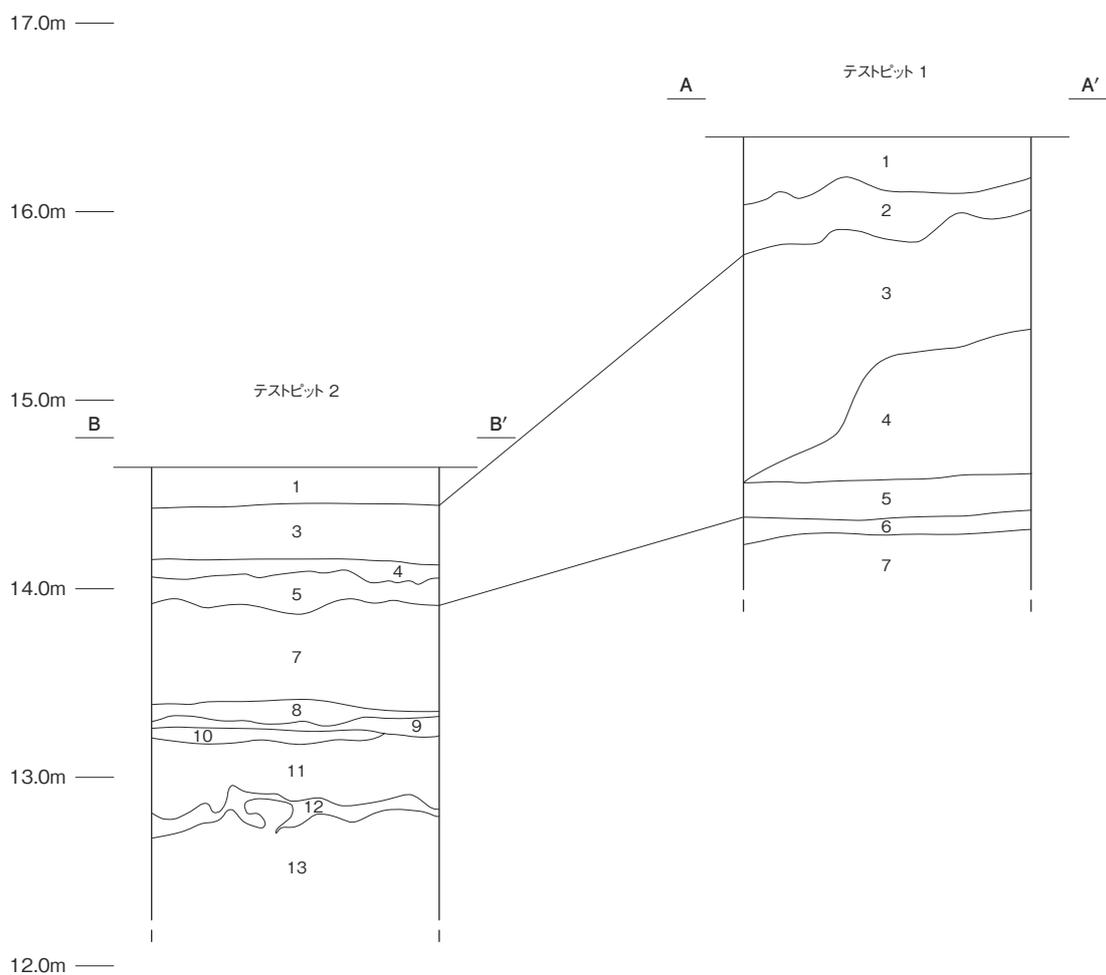
第10層は明褐色を呈する砂層である。鉄分が多量に沈着し、粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は4～10cmである。

第11層はにぶい橙色を呈し、粘土粒子・砂粒を多量に含み、粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は28～58cmである。

第12層はにぶい黄褐色を呈し、粘土粒子・砂粒を多量に含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は10～14cmである。

第13層はにぶい橙色を呈し、粘土粒子・砂粒を多量に含み、粘性・締まりともに普通である。下部が未掘のため、層厚は不明である。

なお、遺構は第3層上面で確認した。



第 82 図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡2棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第83・84図）

位置 調査区東部のB6j6区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第74号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が削平されているため、東西軸は7.20mで、南北軸は6.88mしか確認できなかった。平面形は方形で、主軸方向はN-9°-Wと推測できる。壁は高さ4～22cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。西壁際の南寄りから東側へと向かって、幅42～58cm、長さ210cm、深さ10cmほどで、断面が浅いU字状の間仕切り溝1条を確認した。

炉 3か所。すべて地床炉で、炉床は床面から皿状に浅く掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。炉1・2は北部に位置し、炉1の南部が炉2を掘り込んでいる。炉1は、長径94cm、短径66cmの楕円形で、深さ11cmである。炉2は、長径56cm、短径56cmの円形で、深さ6cmである。重複関係から、炉2から炉1へ作り替えられている。炉3は中央部に位置している。長径70cm、短径64cmの円形で、深さ9cmである。炉3と炉1・2との新旧関係は不明である。第1層は、廃絶後の流入土である。第2層は、使用している間に堆積した焼土の層である。

炉土層解説（各炉共通）

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量 |
|--------------------------|-----------------------------|

ピット 4か所。P1～P3は深さ87～108cmで、規模と配置から主柱穴である。南西部の主柱穴は確認できなかったが、攪乱により削平されたものとみられる。P1～P3では、柱抜き取り痕が確認できた。第1～3層は、柱抜き取り後の堆積土である。第4層は、掘方への埋土である。P4は深さ37cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径150cm、短径113cmの楕円形で、深さは38cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

覆土 4層に分層できる。含有物の少ない暗褐色土と黒褐色土を基調としていることから、自然堆積である。

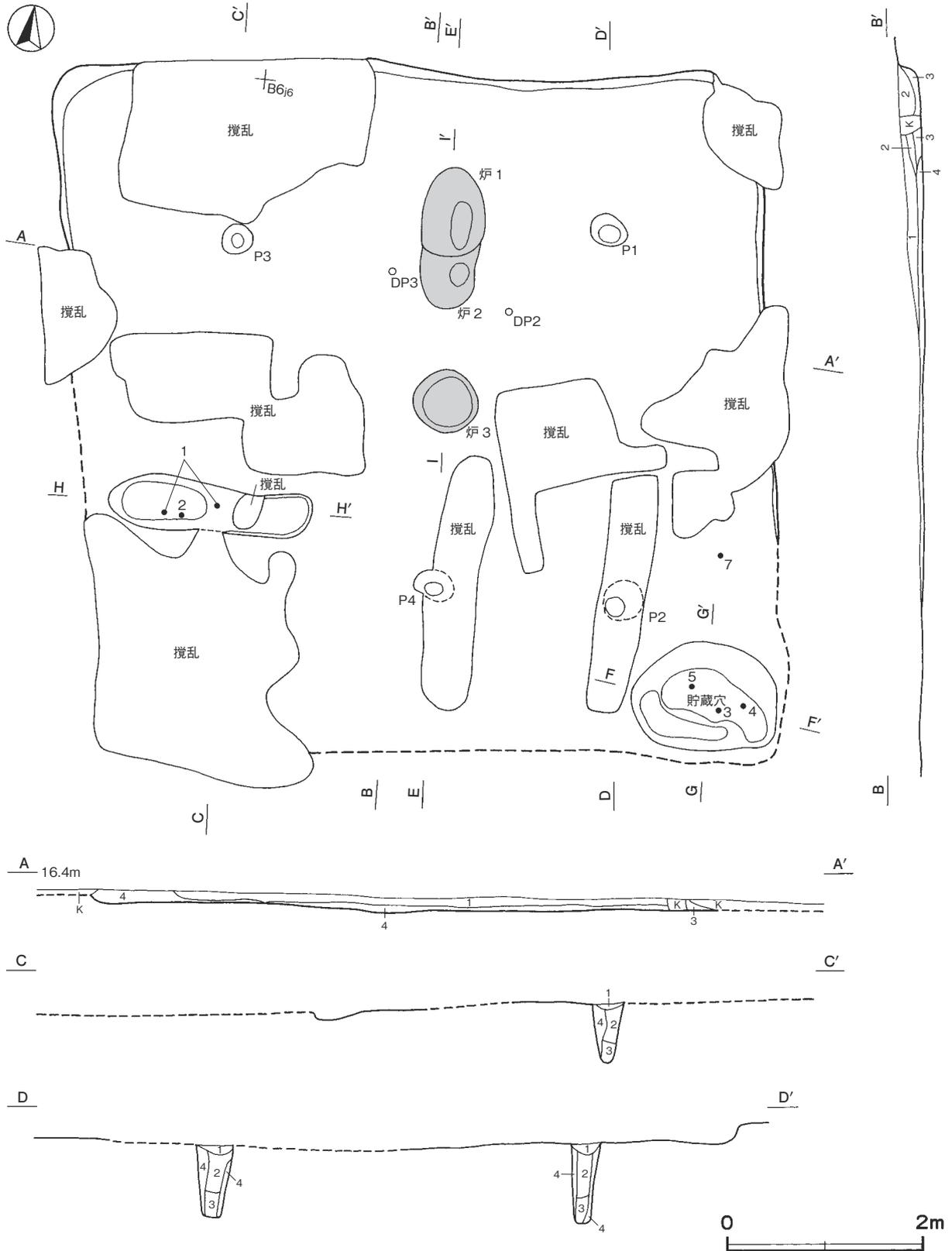
土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

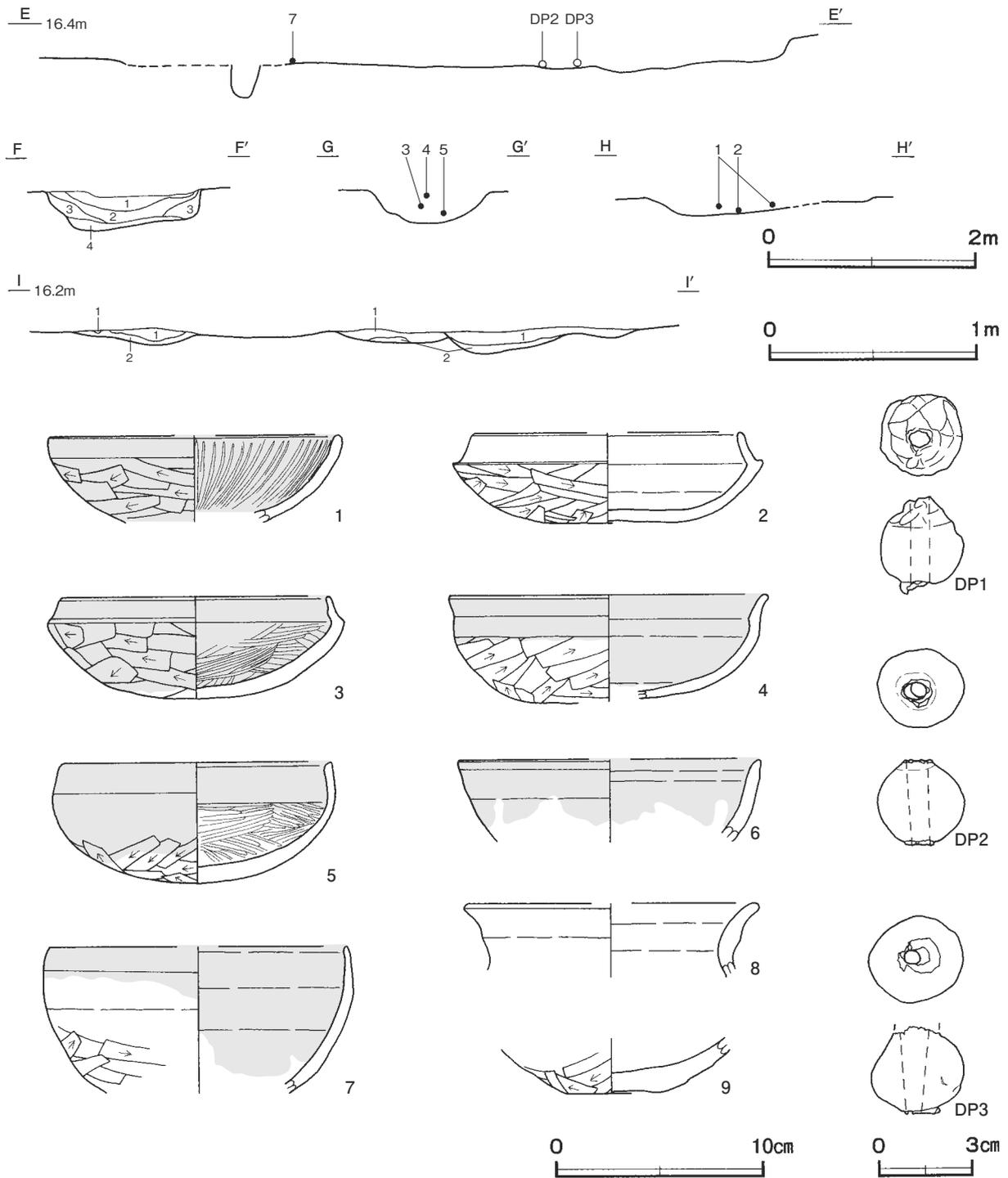
遺物出土状況 土師器片158点（坏59、碗1、甕98）、土製品5点（土玉4、不明1）、石器1点（砥石）が、全域の覆土上層から床面にかけて出土している。1・2は間仕切り溝の覆土下層から、3～5は貯蔵穴の覆土下層から、それぞれ完存率の高い破片であることから、建物廃絶時に遺棄されたものとみられる。8・9は覆

土中から出土した破片であることから、埋没する過程で流れ込んだものとみられる。DP 2・3は炉2周辺の床面から出土していることから、建物廃絶時に遺棄されたものとみられる。

所見 時期は、炉を使用していること及び出土土器から、5世紀末葉から6世紀初頭と考えられる。



第 83 図 第 1 号 竪穴建物跡実測図



第84図 第1号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[14.0]	(4.2)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 内面放射状のヘラ磨き	間仕切り溝	20%
2	土師器	坏	[12.8]	4.4	-	長石・石英・角閃石	黒褐	普通	口縁部外・内面横位のナデ 体部外面下半横位のヘラ削り	間仕切り溝	60% PL28
3	土師器	坏	12.8	4.9	-	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	口縁部外・内面横位のナデ 体部外面横位のヘラ削り 内面多方向のヘラ磨き	貯蔵穴	90% PL28

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	土師器	坏	15.3	5.2	-	長石・石英・角閃石	赤褐	普通	口縁部外・内面横位のナデ 体部外面横位のヘラ削り	貯蔵穴	50% PL28
5	土師器	坏	12.8	5.9	-	長石・石英・角閃石	赤	普通	口縁部外・内面横位のナデ 体部外面下半横位のヘラ削り 内面多方向のヘラ磨き	貯蔵穴	70% PL28
6	土師器	坏	[14.4]	(4.0)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	外・内面横位のナデ	覆土中	20%
7	土師器	碗	[14.4]	(7.1)	-	長石・石英・角閃石	赤褐	普通	口縁部外・内面横位のナデ 体部外面下半横位のヘラ削り 内面横位のナデ	覆土下層	25% PL28
8	土師器	甕	[14.0]	(3.6)	-	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	外・内面横位のナデ	覆土中	5%
9	土師器	甕	-	(2.7)	4.5	長石・石英・角閃石	明赤褐	普通	体部下端ヘラ削り	覆土中	5%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	土玉	12~26	0.6	3.2	17.4	長石・石英	明赤褐	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	PL34
DP 2	土玉	13~28	0.6~0.7	2.8	17.7	長石・石英	にぶい黄褐	ナデ 一方向からの穿孔	床面	PL34
DP 3	土玉	12~30	0.5~0.9	(2.8)	(20.0)	長石・石英	にぶい黄褐	ナデ 一方向からの穿孔	床面	PL34

第3号竪穴建物跡（第85・86図）

位置 調査区東部のC 6 c3区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

確認状況 確認面で、竈とピットを確認した。全体が削平されている。

規模と形状 床面が露出した状態で確認したため、規模や形状は不明であるが、竈と柱穴の配置から1辺7mほどの規模で、主軸方向はN-21°-Wと推測できる。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 火床部及び柱穴の配置から、北壁の中央部に付設されていると推測できる。大部分が削平されているため、詳細な規模は不明である。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめた部分に第4・5層を埋土として構築されている。火床面は第4・5層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面上に焼土ブロックを含む第1～3層が堆積していることから、天井部は廃絶後に崩落したとみられる。

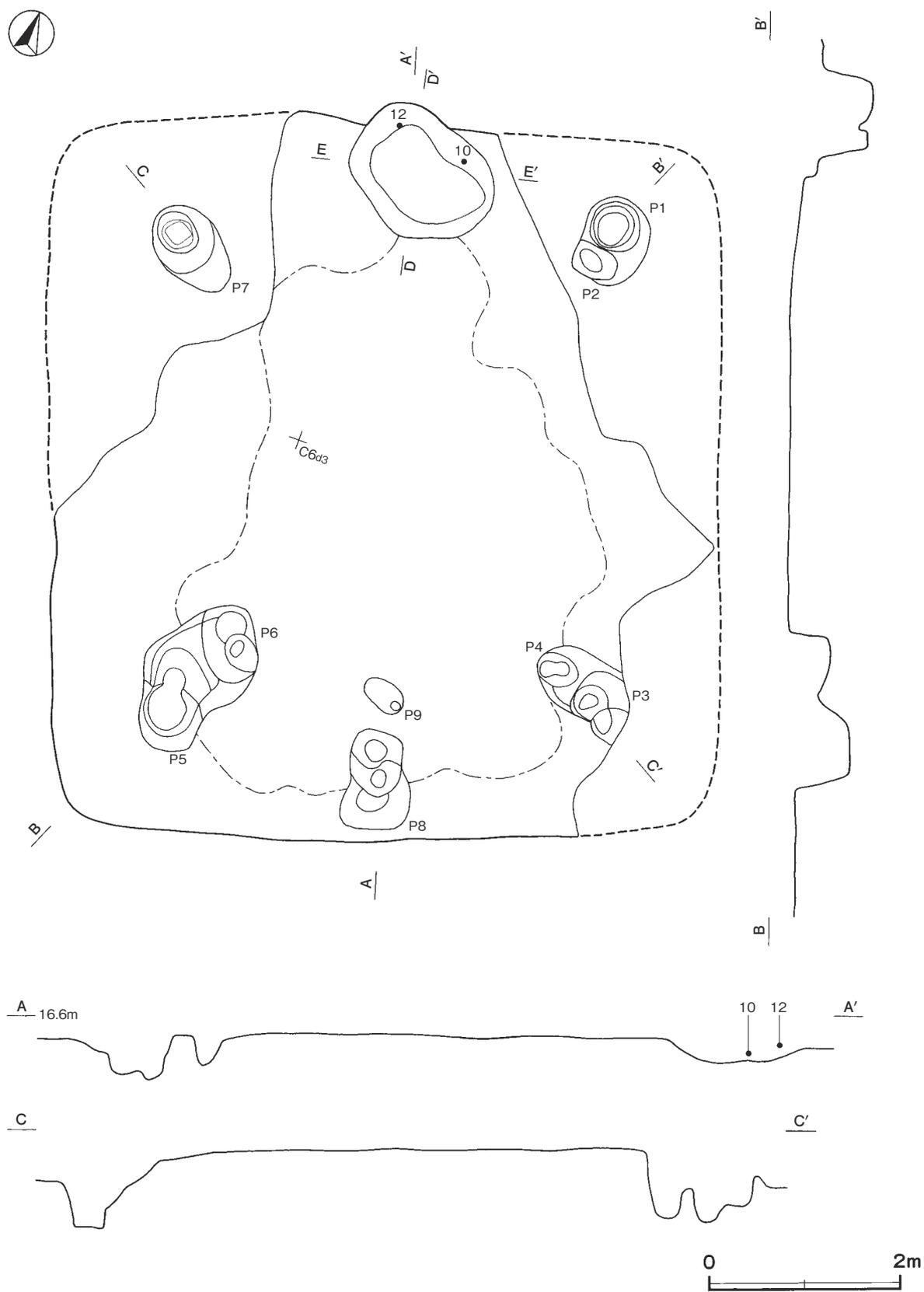
竈土層解説

- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック多量、炭化物中量、ローム粒子少量 | 5 明褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | |

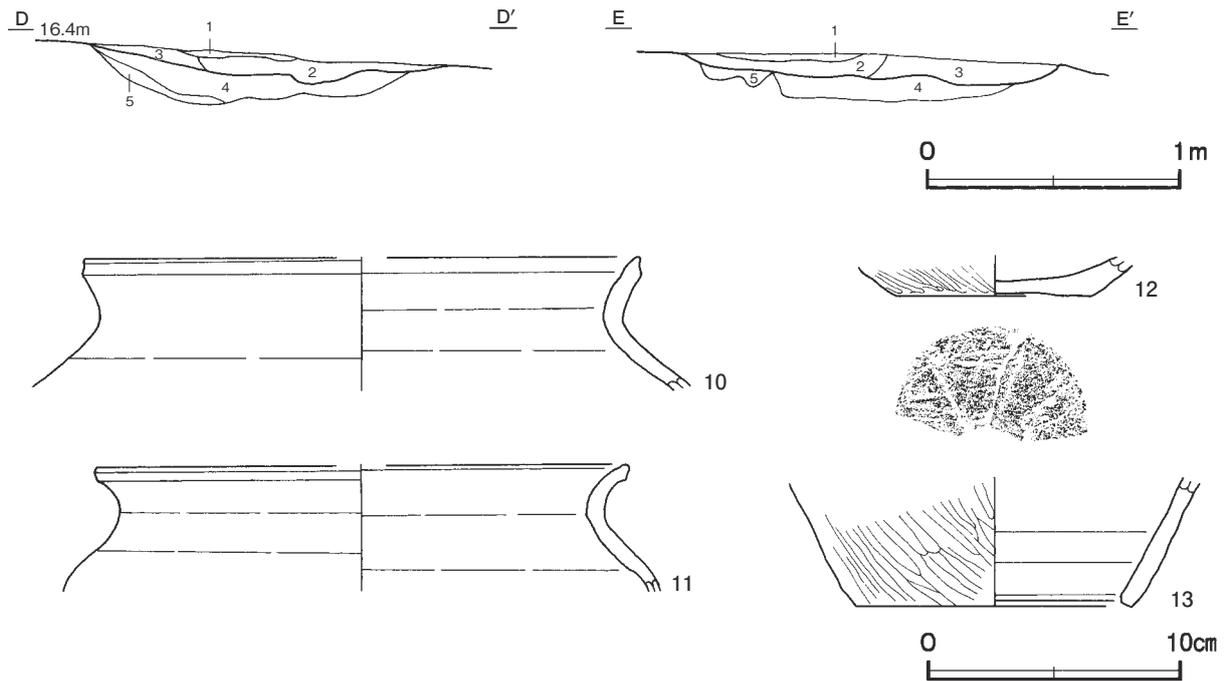
ピット 9か所。P1～P7は深さ40～70cmで、規模と配置から主柱穴である。P1からP2へ、P3からP4へ、P5からP6へ柱の立て替えが確認できた。P8・P9は深さ32～46cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。主柱穴の確認状況から、P8からP9へ柱の立て替えが行われたと推測できる。

遺物出土状況 土師器片291点（坏41, 壺16, 甕234）のほか、須恵器片26点（坏18, 蓋3, 長頸瓶2, 甕2, 甗1）, 陶器片2点（碗）, 剥片1点が、ピットの覆土中を中心に床面及び竈の覆土中から出土している。床面が露出した状態で確認したことから、詳細は不明であるが、柱穴の覆土中から出土した11・13については、柱抜き取り後に流れ込んだか、投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から古墳時代後期と考えられる。



第 85 図 第 3 号 豎 穴 建 物 跡 実 測 図



第 86 図 第 3 号 縦穴建物跡・出土遺物実測図

第 3 号 縦穴建物跡出土遺物観察表（第 86 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	土師器	甕	[22.0]	(5.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ	竈覆土下層	5%
11	土師器	甕	[21.0]	(5.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ	柱穴覆土中	5%
12	土師器	甕	-	(1.6)	7.6	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面縦位のヘラ磨き 底部木葉痕	竈覆土下層	5%
13	土師器	甕	-	(5.2)	[11.0]	長石・石英・雲母	明黄褐	普通	体部外面縦位のヘラ磨き 内面横位のヘラナデ	柱穴覆土中	5%

表 11 古墳時代 縦穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
1	B 6 j6	[N-9°-W]	[方形]	7.20 × (6.88)	4 ~ 22	平坦	-	3	1	-	3	1	自然	土師器, 土製品	5世紀末葉から6世紀初頭	本跡→SK74
3	C 6 c3	[N-21°-W]	-	(7.00) × (7.00)	-	平坦	-	7	2	-	北壁	-	-	土師器	古墳時代後期	

2 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、方形縦穴遺構 7 基、井戸跡 2 基、地下式坑 12 基、土坑 1 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 方形縦穴遺構

第 1 号 方形縦穴遺構（第 87 図）

位置 調査区西部の B 4 j4 区、標高 14 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2号掘立柱建物，第3号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 2.60 m，短軸 2.50 m の方形で，長軸方向は $N-0^\circ$ である。壁は高さ 18～20cm で，外傾している。南壁中央部が幅 0.90 m，長さ 1.10 m の範囲で張り出し，スロープ状を呈していることから，出入口施設と考えられる。

床 ほぼ平坦で，硬化面は認められない。

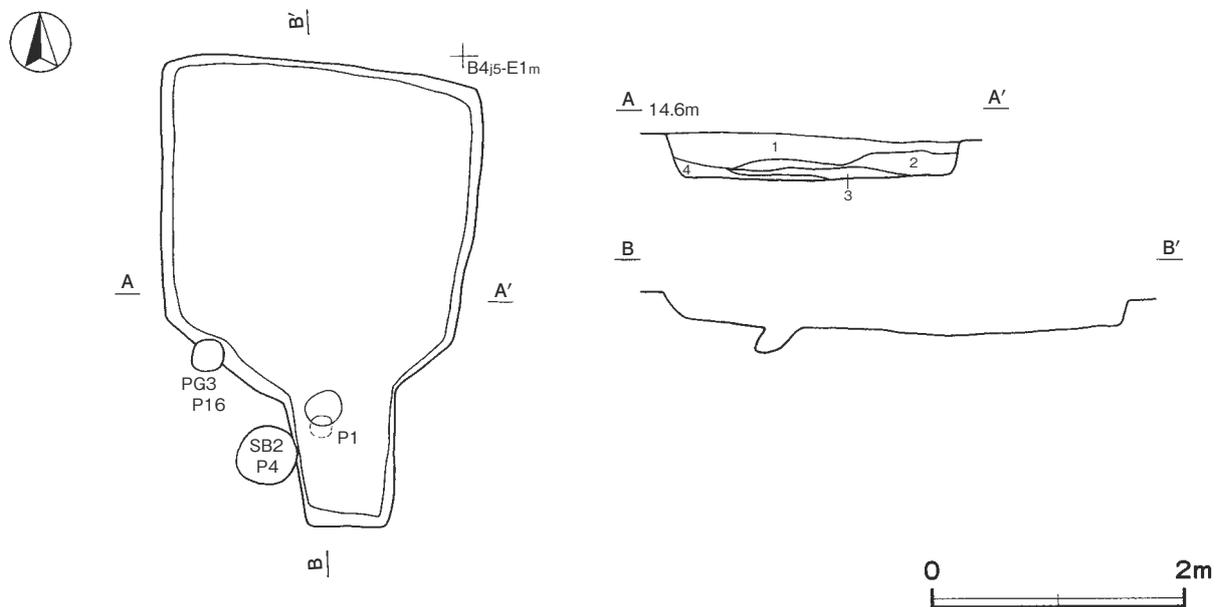
ピット P1 は深さ 20cm で，性格不明である。

覆土 4層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 極暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子微量 |

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，16世紀代と考えられる第2号方形竪穴遺構と比較して，形状と軸方向が類似していることから，ほぼ同時期と推測できる。性格は不明である。



第 87 図 第 1 号方形竪穴遺構実測図

第 2 号方形竪穴遺構 (第 88 図)

位置 調査区西部の C 5 c8 区，標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 180 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 2.61 m，短軸 2.33 m の長方形で，長軸方向は $N-8^\circ-E$ である。壁は高さ 24～48cm で，外傾している。攪乱を受けているが，南壁中央部が幅 1.14 m，長さ 0.48 m の範囲で張り出し，スロープ状を呈していることから，出入口施設と考えられる。

床 中央部が長径 1.20 m，短径 1.12 m の範囲で，土坑状に掘りくぼめられている。硬化面は認められない。

ピット P1 は深さ 10cm で，性格不明である。

覆土 4層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

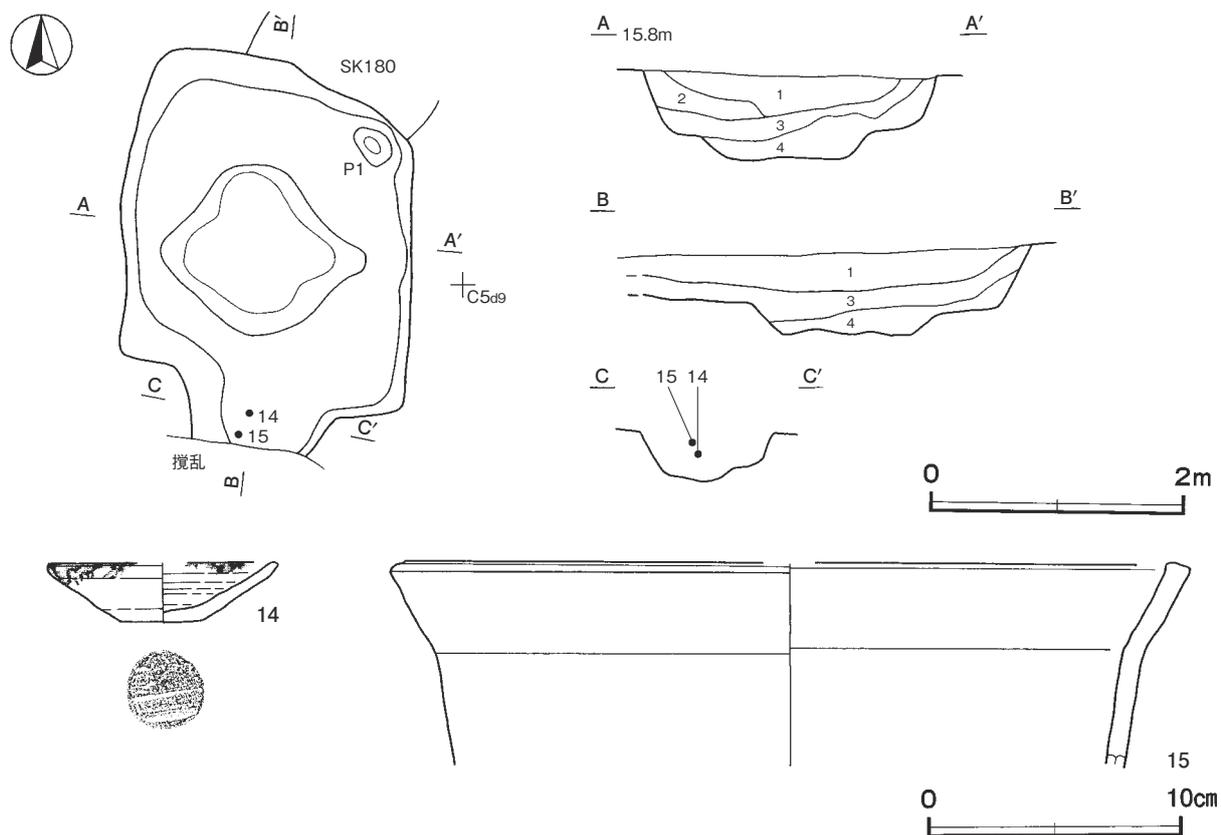
1 暗褐色 ローム粒子微量
2 褐色 ローム粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子少量
4 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片 2点（小皿，内耳鍋）のほか，須恵器片 1点（蓋）が，覆土中から出土している。

14・15 は壁際の覆土上層から中層にかけて出土した破片であることから，流れ込んだものとみられる。

所見 時期は，出土土器から 16 世紀代と考えられる。性格は不明である。



第 88 図 第 2 号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第 2 号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第 88 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
14	土師質土器	小皿	[8.8]	2.4	3.0	長石・石英・角閃石	にぶい黄褐色	普通	底部ナデ 外・内面ロクロナデ 口縁部の一部に油煙附着	覆土中層	60% PL30
15	土師質土器	内耳鍋	[31.8]	(8.2)	-	長石・石英	暗灰黄	普通	外・内面ナデ	覆土上層	5%

第 3 号方形竪穴遺構（第 89 図）

位置 調査区西部の B 5j2 区，標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 2.63 m，短軸 2.27 m の不整長方形で，長軸方向は N - 5° - W である。壁は高さ 28 ~ 40 cm で，ほぼ直立している。南東コーナー部が幅 0.68 m，長さ 0.80 m の範囲で張り出し，スロープ状を呈していることから，出入口施設と考えられる。

床 ほぼ平坦で，硬化面は認められない。

ピット 4か所。P1～P4は深さ2～27cmで、規模と配置から主柱穴の可能性はある。

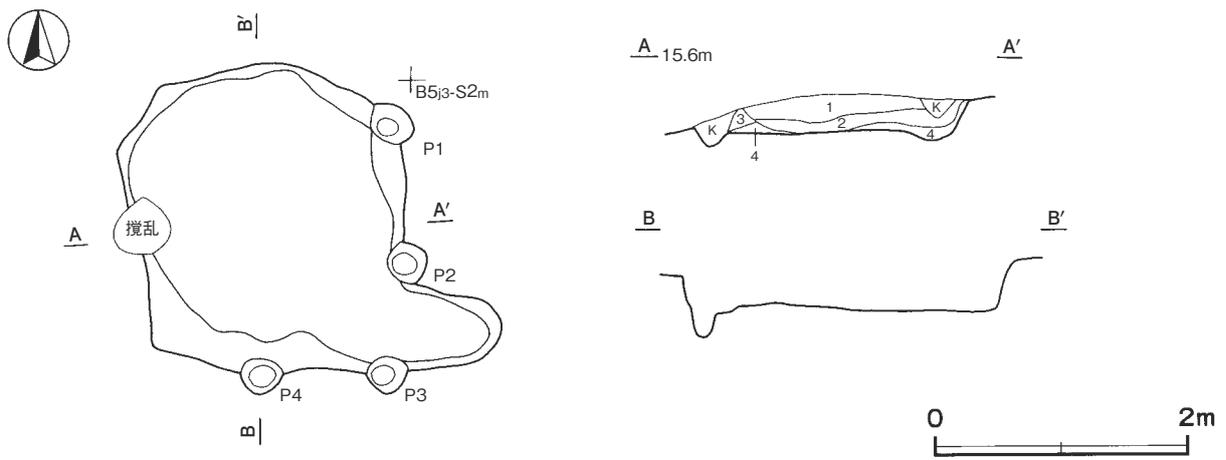
覆土 4層に分層できる。周囲から流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------|---------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片1点（甕）が覆土中から出土している。

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、スロープ状の出入り口施設が設置されている点では、その位置に相違があるものの、16世紀代と考えられる第2号方形竪穴遺構と類似していることから、ほぼ同時期と推測できる。性格は不明である。



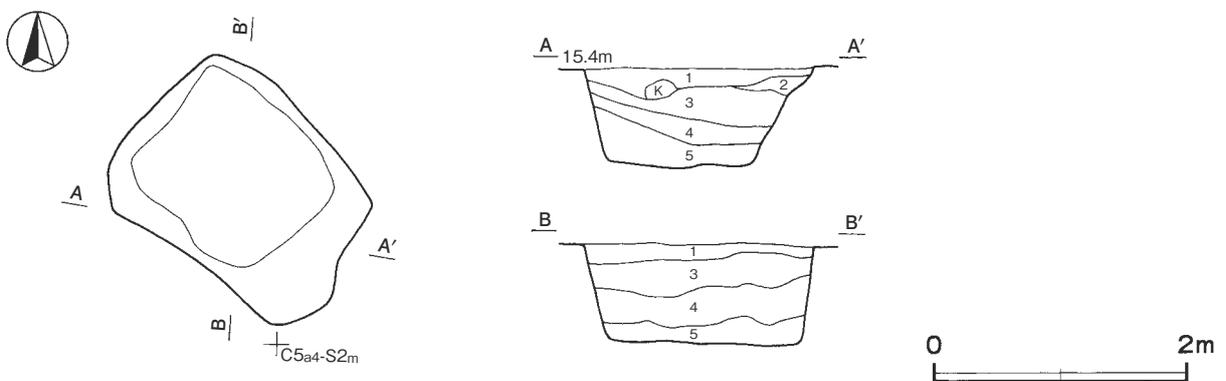
第 89 図 第 3 号方形竪穴遺構実測図

第 4 号方形竪穴遺構（第 90 図）

位置 調査区東部の C 5 a3 区、標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 1.91 m、短軸 1.47 m の不整長方形で、長軸方向は N - 40° - W である。壁は高さ 72 ~ 78 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。



第 90 図 第 4 号方形竪穴遺構実測図

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片3点（内耳鍋）が、覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、室町時代と考えられる。性格は不明である。

第5号方形竪穴遺構（第91図）

位置 調査区東部のB5j5区、標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号溝跡を掘り込み、第8号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 西部の大部分を第8号井戸に掘り込まれているため、南北軸は2.03m、東西軸は1.70mしか確認できなかった。平面形は長方形で、長軸方向はN-0°と推測できる。壁は高さ50～64cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。

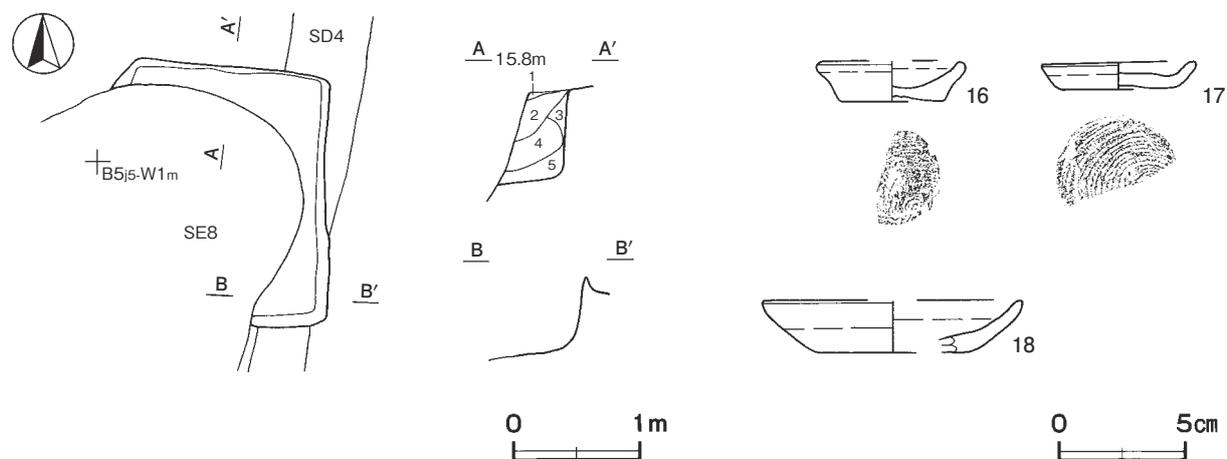
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片27点（小皿20,内耳鍋7）、陶器片1点（碗）、磁器片1点（碗）、石器1点（砥石）、鉄製品1点（鎌）のほか、土師器片4点（坏2,甕2）が、覆土中から出土している。16～18は、覆土中から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。



第91図 第5号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第5号方形竪穴遺構出土遺物観察表 (第91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
16	土師質土器	小皿	[5.4]	2.1	[4.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部ナデ 外・内面ロクロナデ	覆土中	50%
17	土師質土器	小皿	6.0	1.1	4.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	50% PL31
18	土師質土器	小皿	[10.2]	2.1	[6.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	15%

第6号方形竪穴遺構 (第92図)

位置 調査区東部のC 5 a9区, 標高15 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第530号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.13 m, 短軸1.47 mの長方形で, 長軸方向はN-8°-Eである。壁は高さ40~50 cmで, ほぼ直立している。南東コーナー部が幅0.90 m, 長さ0.66 mの範囲で張り出し, スロープ状を呈していることから, 出入り口施設と考えられる。

床 ほぼ平坦で, 硬化面は認められない。

ピット P1は深さ10 cmで, 性格不明である。

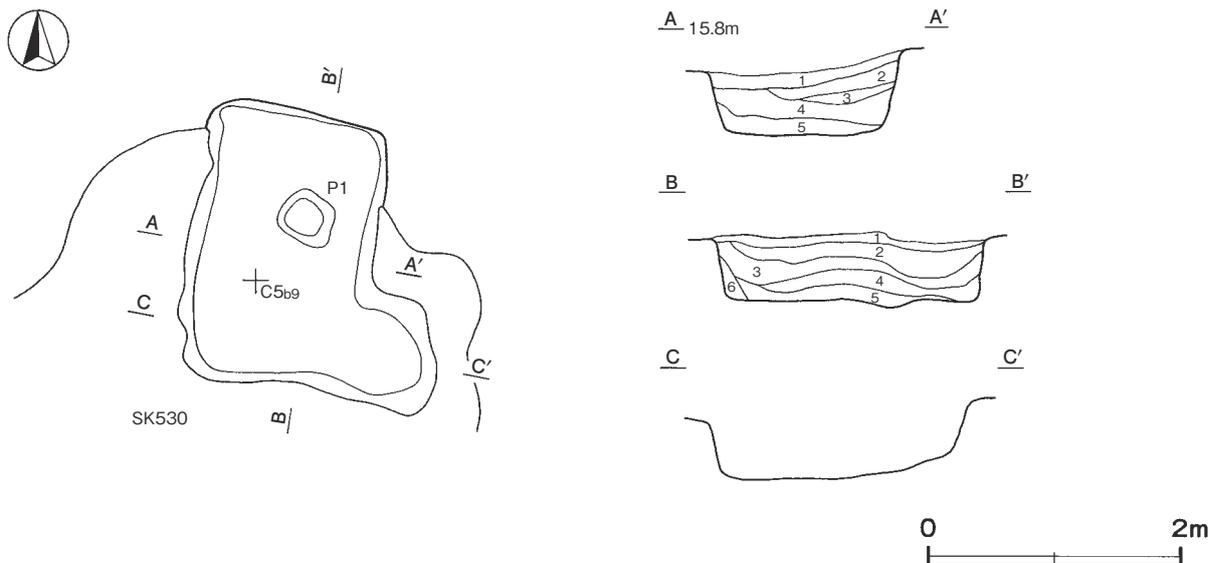
覆土 6層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから, 自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|--------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片12点(坏1, 甕11), 須恵器片2点(坏), 磁器片1点(碗)が, 覆土中から出土している。

所見 時期は, 伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが, スロープ状の出入り口施設が設置されている点では, その位置に相違があるものの, 16世紀代と考えられる第2号方形竪穴遺構と類似していることから, ほぼ同時期と推測できる。性格は不明である。



第92図 第6号方形竪穴遺構実測図

第7号方形竪穴遺構（第93図）

位置 調査区東部のC5b8区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第282・426号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.74m，短軸1.65mの方形で，長軸方向はN-15°-Eである。壁は高さ70～72cmで，ほぼ直立している。西壁が幅1.30m，長さ0.85mの範囲で張り出している。

床 ほぼ平坦で，硬化面は認められない。

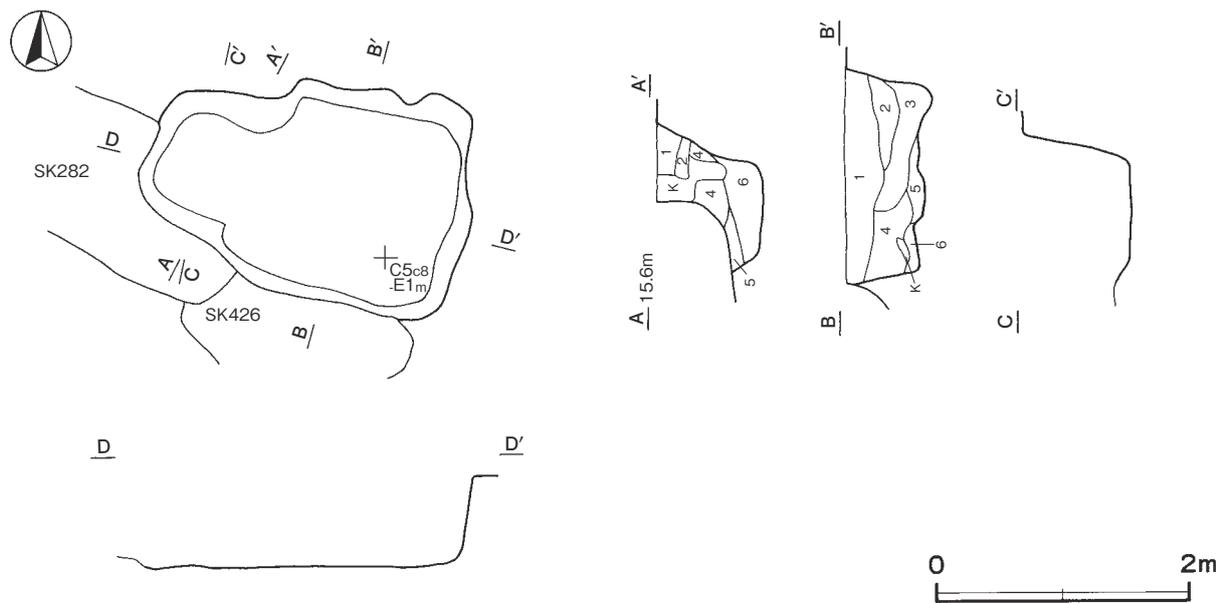
覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師質土器片8点（鉢），陶器片1点（碗），石製品1点（板碑）のほか，土師器片4点（甕）が，覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器が細片のため特定は困難であるが，室町時代と考えられる。性格は不明である。



第93図 第7号方形竪穴遺構実測図

表12 室町時代方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	内部施設			覆土	主な出土遺物	備考
				長軸×短軸 (m)			柱穴	出入口	ピット			
1	B 4 j4	N-0°	方形	2.60 × 2.50	18～20	平坦	-	1	1	自然		本跡→SB 2, PG 3
2	C 5 c8	N-8°-E	長方形	2.61 × 2.33	24～48	有段	-	1	1	自然	土師質土器	SK180→本跡
3	B 5 j2	N-5°-W	不整長方形	2.63 × 2.77	28～40	平坦	4	1	-	自然		
4	C 5 a3	N-40°-W	不整長方形	1.91 × 1.47	72～78	平坦	-	-	-	人為	土師質土器	
5	B 5 j5	N-0°	[長方形]	2.03 × (1.70)	50～64	平坦	-	-	-	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 鉄製品	SD 4→本跡→SE 8

番号	位置	長軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	内部施設			覆土	主な出土遺物	備考
				長軸×短軸 (m)			柱穴	出入口	ピット			
6	C 5 a9	N - 8° - E	長方形	2.13 × 1.47	40 ~ 50	平坦	-	1	1	自然		本跡→ SK530
7	C 5 b8	N - 15° - E	方形	1.74 × 1.65	70 ~ 72	平坦	-	-	-	人為 土師質土器	土師質土器, 陶器, 石製品	本跡→ SK282・426

(2) 井戸跡

第9号井戸跡 (第94・95図)

位置 調査区東部のC 5 a5区, 標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第256・458土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 確認面は長径1.13m, 短径1.05mの円形である。確認面からの深さは342cmである。上部は、深さ128cmまで円筒状を呈し、中部が張り出し、底部へと向かってすぼまっている。張り出し部は、壁が崩落したことによるものとみられる。底面は平坦で、壁から湧水が認められた。

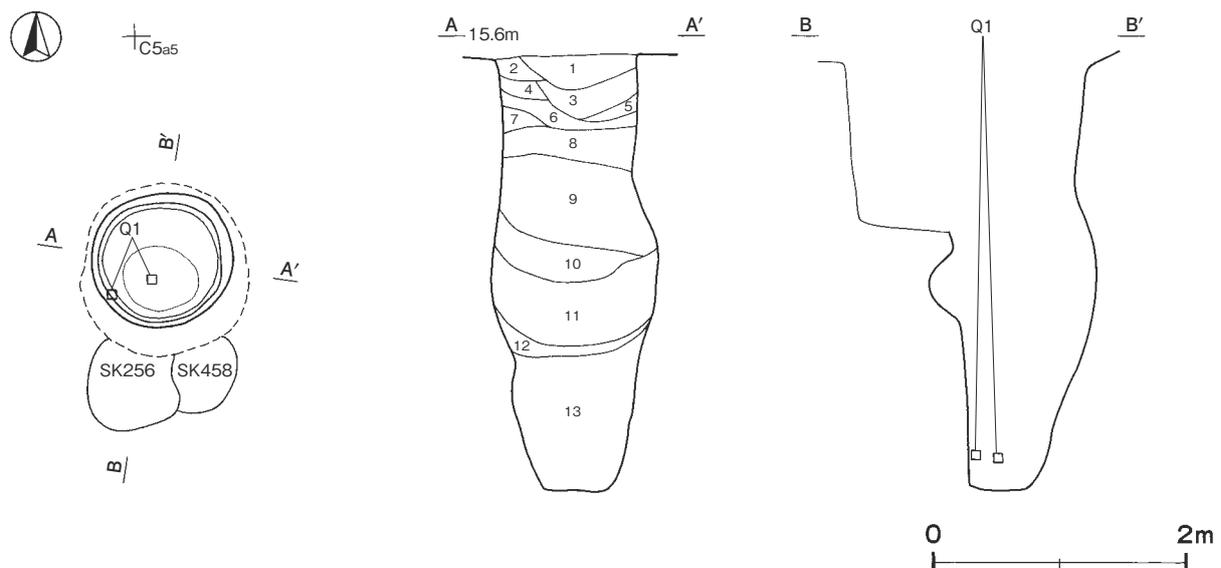
覆土 13層に分層できる。第13層は壁の崩落土である。第1～12層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

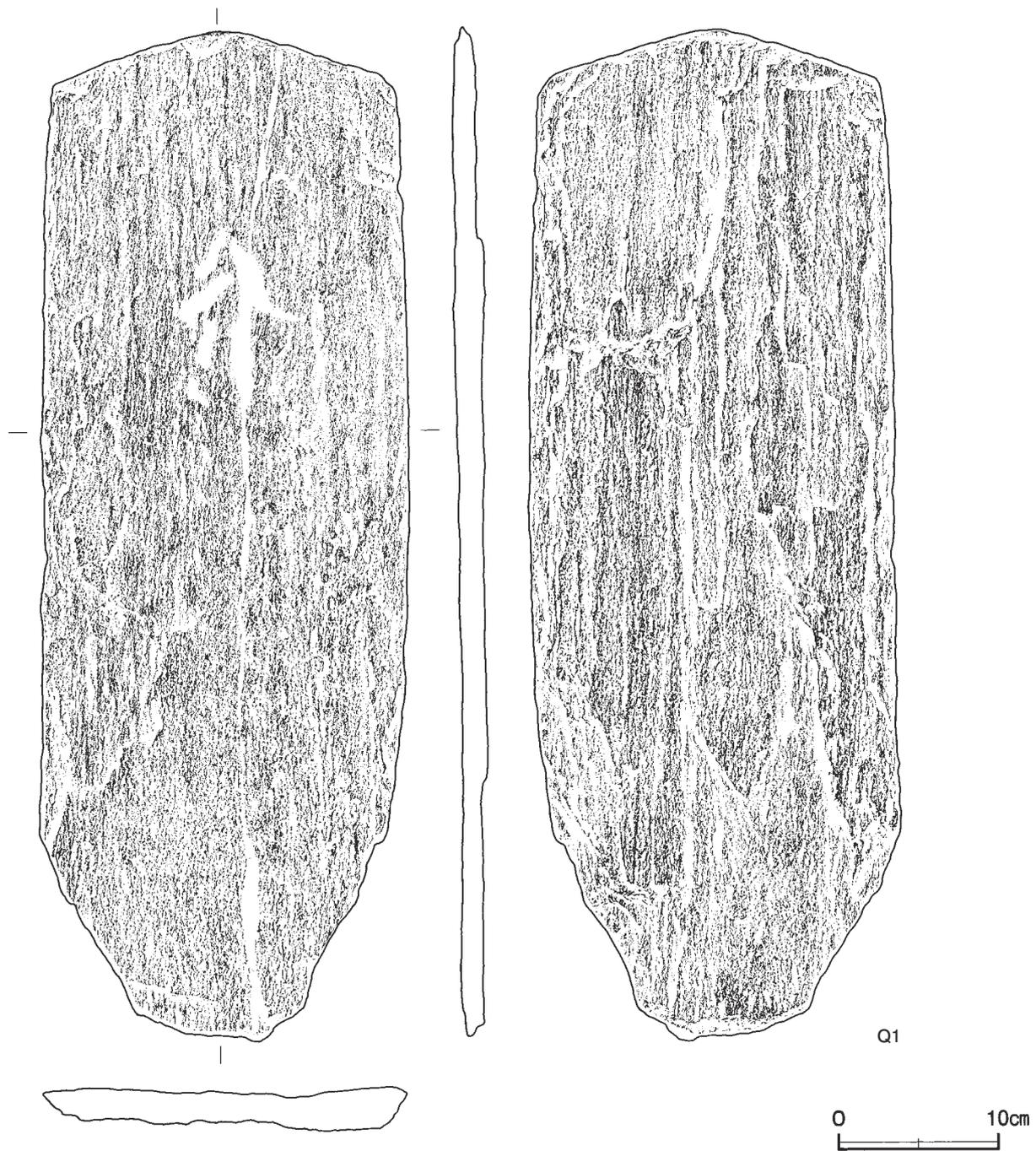
- | | | | |
|--------|---------------------|----------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 | 9 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 | 10 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 | 11 褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 5 黒褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 12 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック中量 | 13 褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 |
| 7 極暗褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(鉢), 石製品1点(板碑), 銭貨1点(不明)が、覆土中から出土している。Q1は完形で、使用時の崩落土である覆土最下層から二つに割れた状態で出土していることから、埋め戻す前に意図的に破碎して投棄したものとみられる。

所見 時期は、出土遺物から室町時代と考えられる。



第94図 第9号井戸跡実測図



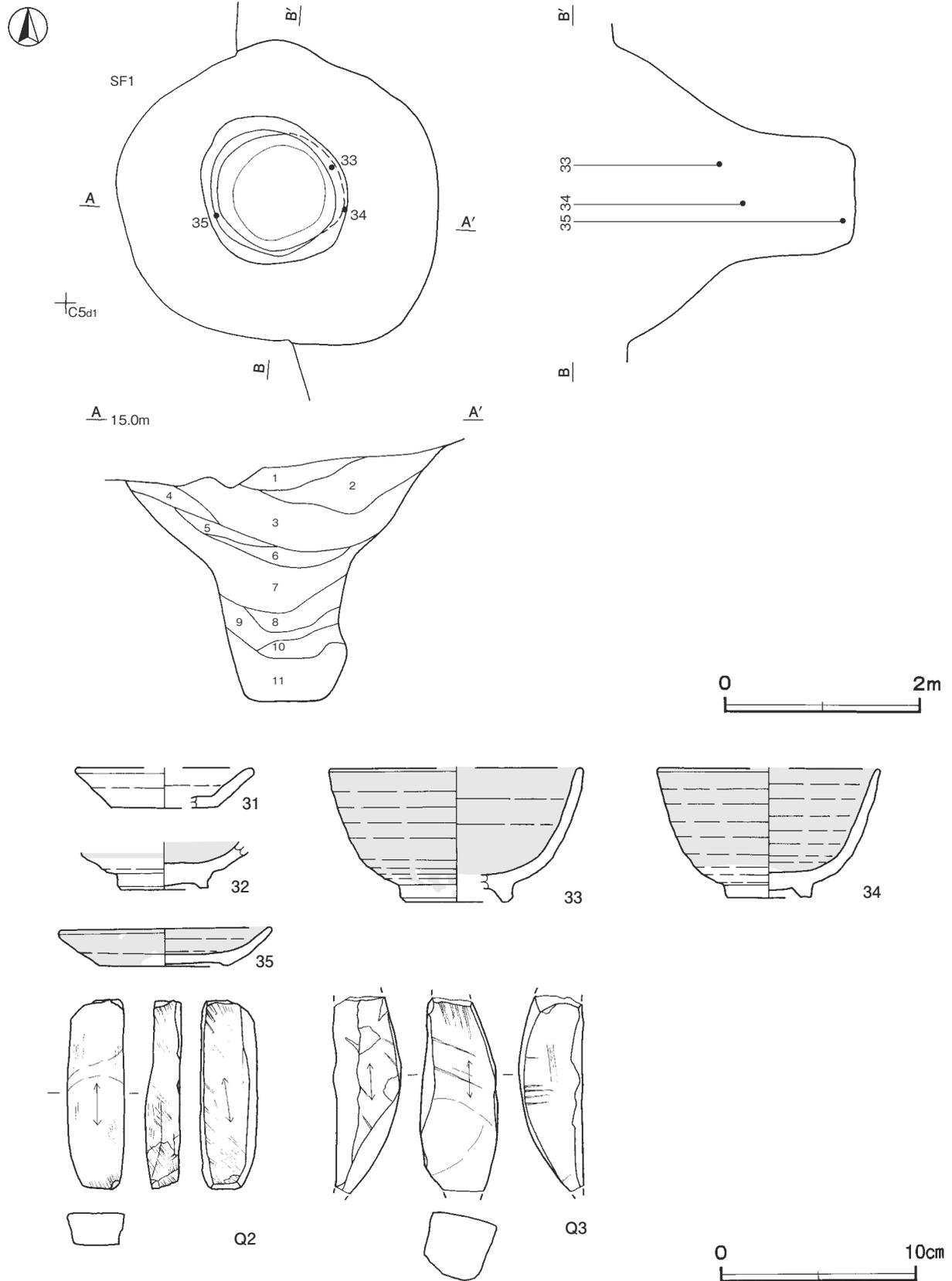
第95図 第9号井戸跡出土遺物実測図

第9号井戸跡出土遺物観察表（第95図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	板碑	62.7	22.5	1.6~2.5	5800.0	緑泥片岩	阿弥陀如来（異体）二条線	覆土最下層	PL35

第 10 号井戸跡 (第 96 図)

位置 調査区西部の C 5 c1 区, 標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。



第 96 図 第 10 号井戸跡・出土遺物実測図

重複関係 第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 確認面は長径 3.40 m, 短径 3.10 m の円形である。確認面からの深さは 240cm である。上部は、深さ 115cm まで漏斗状を呈し、それより下部は径 1.40 m の円筒状に掘り込まれている。底部は平坦である。

覆土 11 層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|----------|-------------------------|
| 1 明褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量 | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量, 炭化物微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量 | 9 暗褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 10 灰黄褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量 | 11 灰黄褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 6 褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片 3 点 (小皿 1, 鉢 2), 陶器片 8 点 (碗 7, 皿 1), 石器 2 点 (砥石), 石製品 3 点 (板碑) のほか、縄文土器片 2 点 (深鉢), 土師器片 16 点 (壺 2, 甕 14) が、覆土中から出土している。土器は覆土中から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から室町時代と考えられる。

第 10 号井戸跡出土遺物観察表 (第 96 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
31	土師質土器	小皿	[8.8]	2.1	[5.5]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転系切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	35% PL30

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
32	陶器	碗	-	(2.4)	[4.4]	長石・明黄褐	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	30%
33	陶器	碗	[12.8]	6.9	[5.2]	長石・にぶい褐	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中層	40% PL32
34	陶器	碗	[11.2]	6.7	[4.4]	長石・浅黄	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中層	20% PL32
35	陶器	皿	10.7	2.0	6.7	長石・灰白	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中層	60% PL32

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	砥石	9.8	2.9	1.8	79.5	凝灰岩	砥面 2 面	覆土中	PL35
Q 3	砥石	(10.1)	3.9	3.5	(149.9)	凝灰岩	砥面 2 面	覆土中	PL35

表 13 室町時代井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
9	C 5 a5	-	円形	1.13 × 1.05	342	平坦	内傾直立	人為	土師質土器, 石製品, 銭貨	SK256・458 → 本跡
10	C 5 c1	-	円形	3.40 × 3.10	240	平坦	外傾直立	人為	土師質土器, 陶器, 石器, 石製品	本跡 → SF 1

(3) 地下式坑

第 1 号地下式坑 (第 97 図)

位置 調査区東部の B 5 j8 区, 標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 126 号土坑に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は 2.30 m で, 軸方向は N - 44° - E である。

竪坑 主室の南西壁中央部に位置し、奥行0.62 m、横幅0.80 mの半円形である。確認面からの深さは124cmである。底面は緩やかに下り主室に至っている。壁はほぼ直立している。

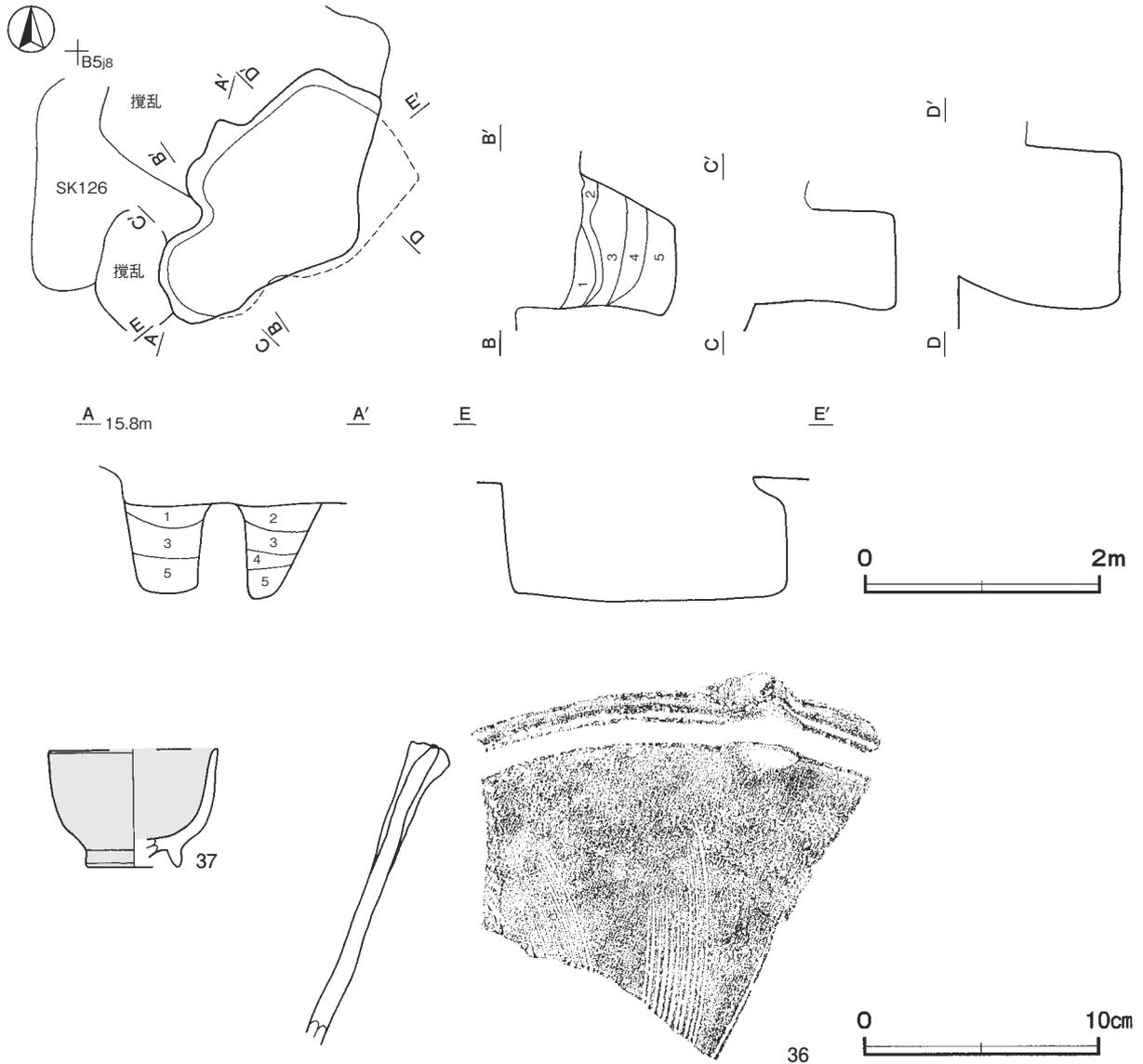
主室 奥行1.68 m、横幅1.40 mの隅丸長方形である。天井部は北東コーナー部にわずかに遺存しているほかは、崩落している。確認面からの深さは140cmである。底面は平坦で、硬化面は認められない。南東壁は内傾し、北西壁と北東壁は直立している。

覆土 5層に分層できる。天井部の崩落土は確認できなかったが、第1～5層は暗褐色や褐色の土砂で、大小のロームブロックが不規則に含まれていることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片13点（小皿3、鉢9、挿鉢1）、陶器片1点（碗）、磁器片1点（碗）が、覆土中から出土している。36・37は、覆土中から出土した破片であることから、天井部崩落後の窪地を埋め戻す際に投棄されたものとみられる。



第97図 第1号地下式坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器と遺構の形状から室町時代と考えられる。性格は、遺構の形状から倉庫の可能性があるが、詳細は不明である。

第1号地下式坑出土遺物観察表 (第97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
36	土師質土器	播鉢	-	(13.2)	-	長石・石英	橙	普通	内面播り目 片口	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
37	磁器	碗	[7.0]	5.0	[4.0]	緻密・灰白	全面施釉	透明	不明	覆土中	50%

第2号地下式坑 (第98図)

位置 調査区東部のB5i7区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

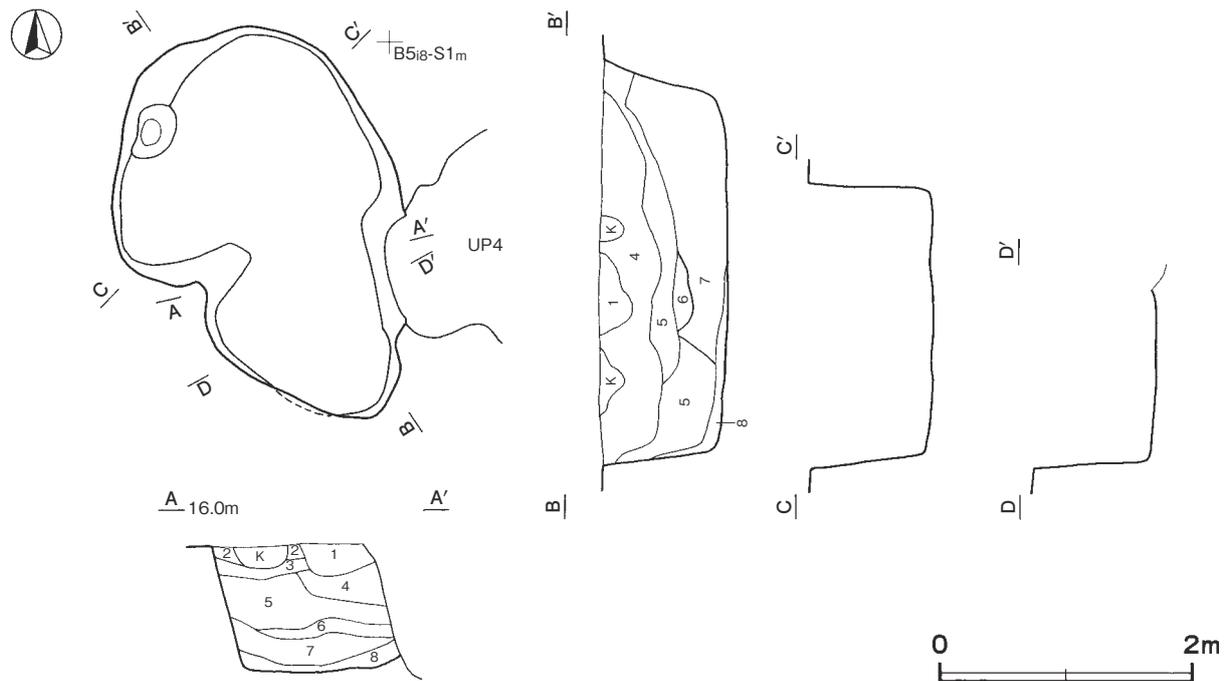
重複関係 第4号地下式坑に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は3.10mで、軸方向はN-31°-Wである。

竪坑 主室の南壁中央部に位置し、東壁の一部を第4号地下式坑に掘り込まれているため、奥行は1.40mで、横幅が1.32mしか確認できなかったが、不定形と推測できる。確認面からの深さは96cmである。底面は緩やかに下り主室に至っている。壁はほぼ直立している。

主室 奥行1.70m、横幅2.08mの不定形である。天井部は崩落している。確認面からの深さは98cmである。底面は平坦で、硬化面は認められない。北壁は外傾し、その他は直立している。

覆土 8層に分層できる。第8層は竪坑からの流入土である。第6・7層は天井部や壁の崩落土である。第1～5層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。



第98図 第2号地下式坑実測図

土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|---------|----------------------|
| 1 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐 色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 褐 色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐 色 | ロームブロック多量 | 7 明 褐 色 | ロームブロック多量 |
| 4 褐 色 | ロームブロック中量 | 8 暗 褐 色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師質土器片 11 点 (鉢 10, 播鉢 1), 陶器片 4 点 (碗 1, 急須 3), 磁器片 3 点 (碗), 石器 1 点 (砥石) が, 覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は, 遺構の形状と窪地に投棄された土器の出土状況から室町時代と考えられる。性格は, 遺構の形状から倉庫の可能性があり, 詳細は不明である。

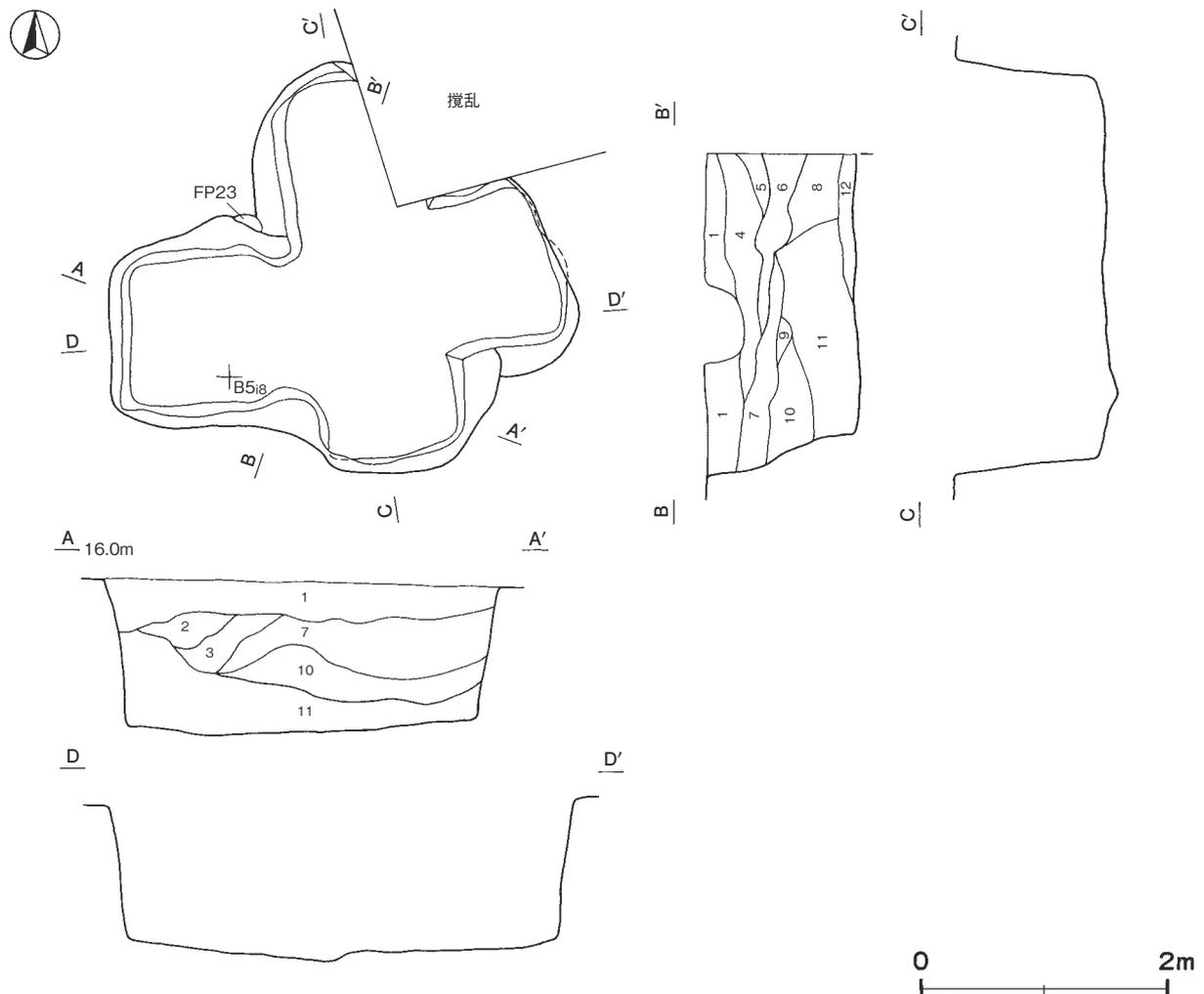
第 3 号地下式坑 (第 99 図)

位置 調査区東部の B 5 h8 区, 標高 16 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 23 号炉に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は 3.08 m で, 軸方向は N - 170° - E である。

竪坑 主室の北壁中央部に位置し, 東壁が攪乱を受けているため, 奥行は 1.22 m で, 横幅は 0.78 m しか確認できなかったが, 半円形と推測できる。確認面からの深さは 120cm である。底面は緩やかに下り主室に至っている。壁はほぼ直立している。



第 99 図 第 3 号地下式坑実測図

主室 奥行 1.86 m, 横幅 3.48 m の長方形である。南壁中央部が, 奥行 0.76 m, 横幅 1.04 m の範囲で張り出ししている。天井部は崩落している。確認面からの深さは 130cm である。底面は平坦で, 硬化面は認められない。壁はほぼ直立している。

覆土 12 層に分層できる。第 12 層は竪坑からの流入土である。第 10・11 層は天井部や壁の崩落土である。第 1～9 層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

1 褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量	7 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック・炭化粒子中量	8 褐色	ロームブロック少量
3 褐色	ロームブロック中量, 炭化物微量	9 暗褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック少量	10 褐色	ロームブロック多量
5 褐色	ロームブロック中量	11 明褐色	ロームブロック中量
6 褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	12 黒褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片 11 点 (鉢 10, 播鉢 1), 陶器片 4 点 (碗 1, 急須 3), 磁器片 3 点 (碗), 石器 1 点 (砥石) が, 覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は, 遺構の形状と窪地に投棄された土器の出土状況から, 室町時代と考えられる。性格は, 遺構の形状から倉庫の可能性はあるが, 詳細は不明である。

第 4 号地下式坑 (第 100 図)

位置 調査区東部の B 5 i8 区, 標高 16 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 2 号地下式坑を掘り込み, 第 3・4 号炉に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は 3.28 m で, 軸方向は N - 60° - E である。

竪坑 主室の西壁中央部に位置し, 奥行 0.68 m, 横幅 0.88 m の半円形である。確認面からの深さは 104cm である。底面は緩やかに下り主室に至っている。壁は外傾している。

主室 奥行 2.60 m, 横幅 1.54 m の隅丸長方形である。天井部は崩落している。確認面からの深さは 108m である。底面は平坦で, 硬化面は認められない。壁は直立している。

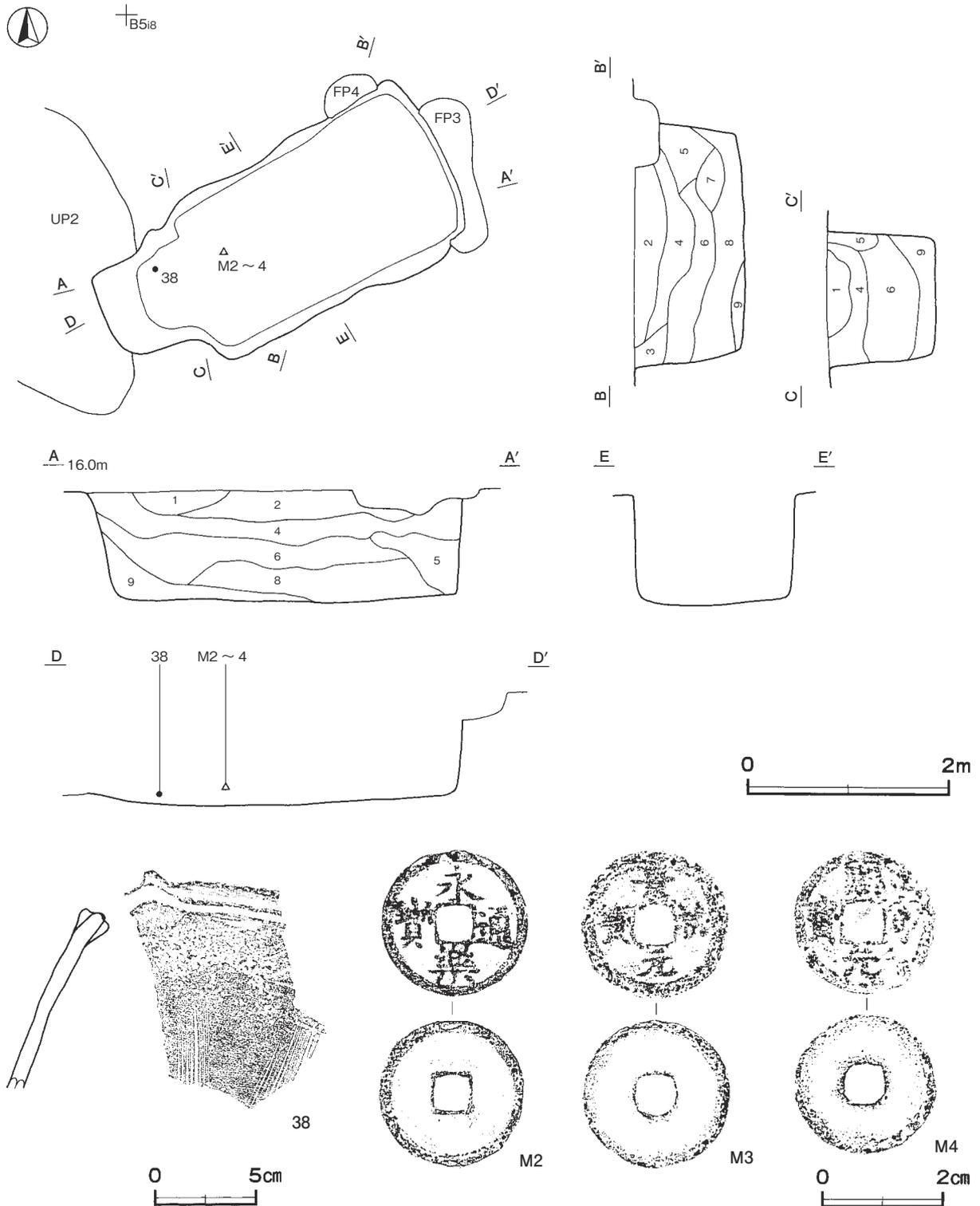
覆土 9 層に分層できる。第 9 層は竪坑からの流入土である。第 7・8 層は天井部や壁の崩落土である。第 1～6 層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	6 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子少量	7 褐色	ロームブロック多量
3 暗褐色	ロームブロック中量	8 暗褐色	ロームブロック多量, 炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子少量
5 褐色	ロームブロック中量, 炭化物微量		

遺物出土状況 土師質土器片 1 点 (播鉢), 石製品 1 点 (板碑), 銭貨 6 点 (景祐元寶, 熙寧元寶, 永樂通寶, 不明 3) が, 覆土中から出土している。M 2～M 4 を含めた銭貨 6 枚は, 天井部崩落以前に堆積した覆土下層からまともに出て出土したことから, 使用時に遺棄された可能性がある。

所見 時期は, 出土遺物と遺構の形状から 15 世紀以降と考えられる。性格は, 銭貨の出土状況から埋葬施設の可能性があるが, 詳細は不明である。



第 100 図 第 4 号地下式坑・出土遺物実測図

第 4 号地下式坑出土遺物観察表 (第 100 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
38	土師質土器	櫛鉢	-	(8.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	内面播り目 片口	覆土下層	5%

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M2	銭貨	永樂通寶	2.48	0.60	3.85	銅	1408	明銭	覆土下層	PL36
M3	銭貨	景祐元寶	2.55	0.68	2.37	銅	1034	北宋銭 真書	覆土下層	PL36
M4	銭貨	熙寧元寶	2.42	0.66	2.92	銅	1068	北宋銭	覆土下層	PL36

第5号地下式坑（第101・102図）

位置 調査区東部のB5j6区、標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号掘立柱建物跡、第7号地下式坑、第153号土坑に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は1.94mで、軸方向はN-154°-Eである。

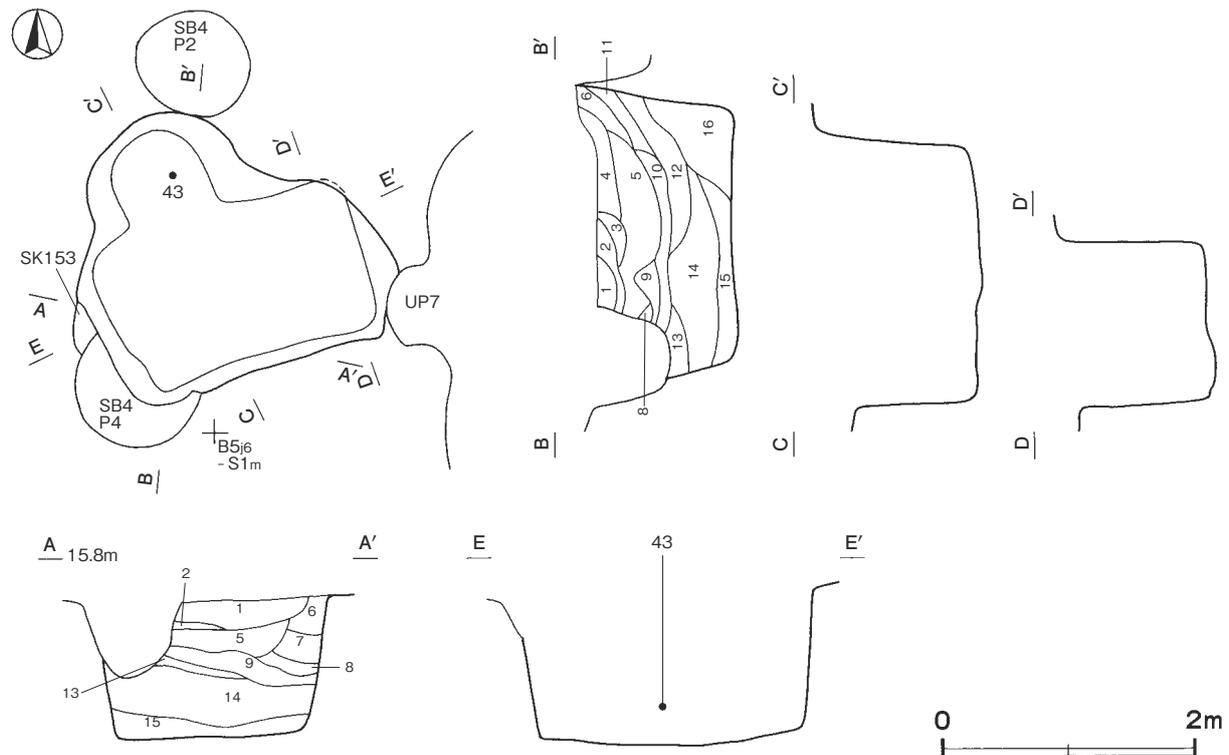
竪坑 主室の北壁中央部に位置し、奥行0.66m、横幅0.74mの半円形である。確認面からの深さは120cmである。底面は緩やかに下り主室に至っている。壁は直立している。

主室 奥行は1.28m、横幅2.05mの隅丸長方形である。天井部は崩落している。確認面からの深さは122cmである。底面は平坦で、硬化面は認められない。壁は直立している。

覆土 16層に分層できる。第16層は竪坑からの流入土である。第13～15層は天井部や壁の崩落土である。第1～12層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 7 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 9 褐色 ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量 | 10 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量 | 11 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 6 暗褐色 ロームブロック多量 | 12 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |



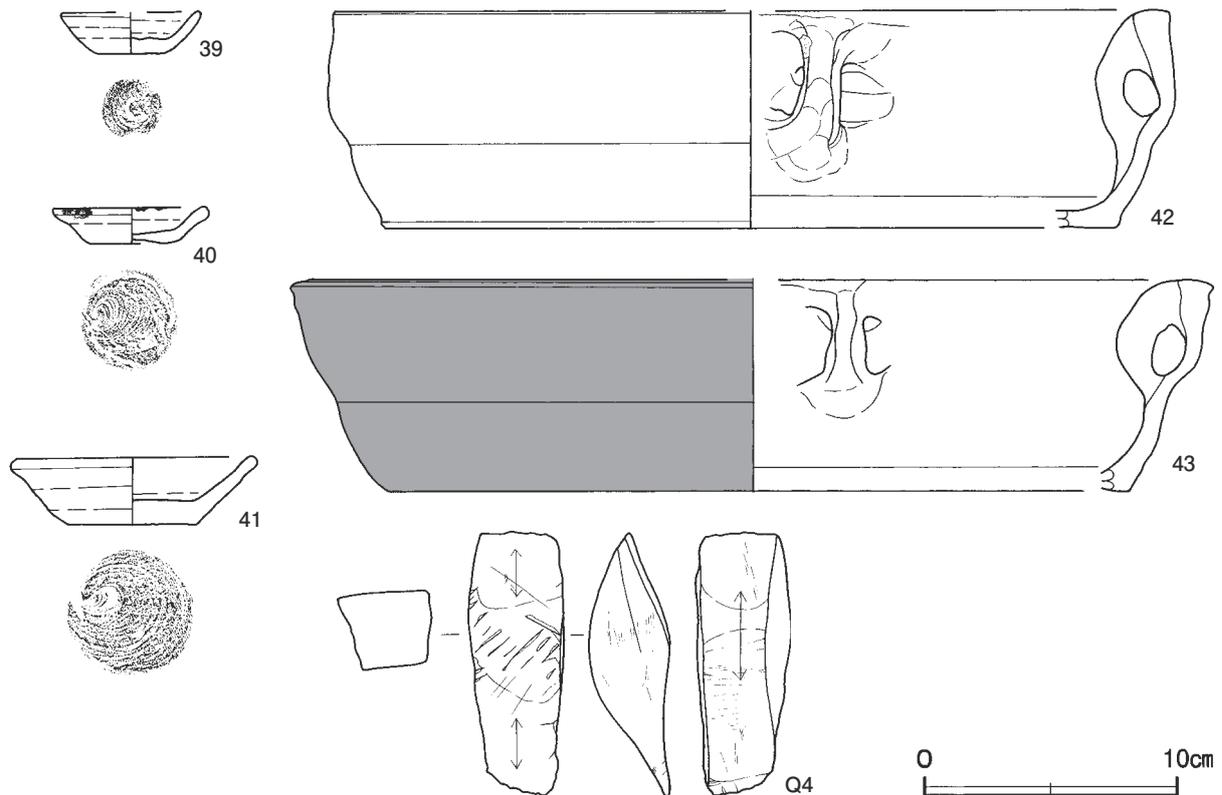
第101図 第5号地下式坑実測図

13 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
 14 褐色 ロームブロック多量

15 明褐色 ロームブロック多量
 16 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片 23 点（小皿 8，鉢 3，焙烙 12），陶器片 2 点（碗，皿），石器 1 点（砥石），石製品 1 点（板碑），鉄滓 1 点（190.0 g）が、覆土中から出土している。遺物は覆土上層から中層にかけて出土した破片であることから、天井部崩落後の窪地を埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、遺構の形状と窪地に投棄された 17 世紀代の土器の出土状況から、それ以前の室町時代と考えられる。性格は、遺構の形状から倉庫の可能性はあるが、詳細は不明である。



第 102 図 第 5 号地下式坑出土遺物実測図

第 5 号地下式坑出土遺物観察表（第 102 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
39	土師質土器	小皿	[5.5]	1.7	2.6	長石・石英	明赤褐	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	50% PL29
40	土師質土器	小皿	6.0	1.5	3.8	長石・石英	明赤褐	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	80% PL29
41	土師質土器	小皿	9.2	2.7	5.0	長石・石英・赤色粒子	黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	80% PL30
42	土師質土器	焙烙	[32.9]	8.7	[28.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	内耳 1 か所残存 外・内面ナデ	覆土上層	5% PL31
43	土師質土器	焙烙	[36.8]	8.4	[29.0]	長石・石英・雲母	明褐	普通	内耳 1 か所残存 外・内面ナデ	覆土中層	20% PL32

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	砥石	10.5	3.8	3.2	132.0	凝灰岩	砥面 2 面	覆土中	PL35

第6号地下式坑（第103・104図）

位置 調査区東部のB5i6区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第159・191号土坑を掘り込んでいる。

軸長・軸方向 軸長は2.46mで，軸方向はN-50°-Eである。

竪坑 主室の西壁中央部に位置し，奥行1.00m，横幅0.90mの半円形である。確認面までの深さは116cmである。底面は緩やかに下り主室に至っている。壁は外傾している。

主室 奥行1.46m，横幅2.98mの隅丸長方形である。天井部は崩落している。確認面までの深さは122cmである。底面は平坦で，硬化面は認められない。壁は外傾している。

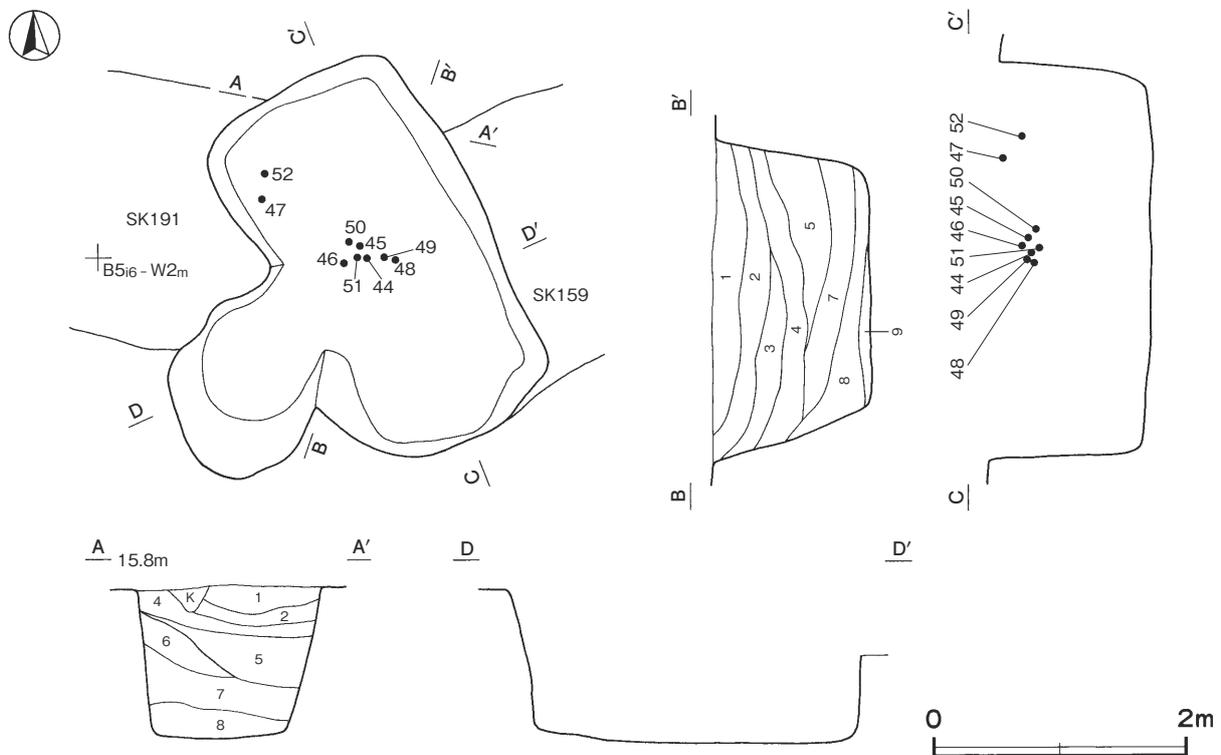
覆土 9層に分層できる。第9層は竪坑からの流入土である。第6～8層は天井部の崩落土である。第1～5層は土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

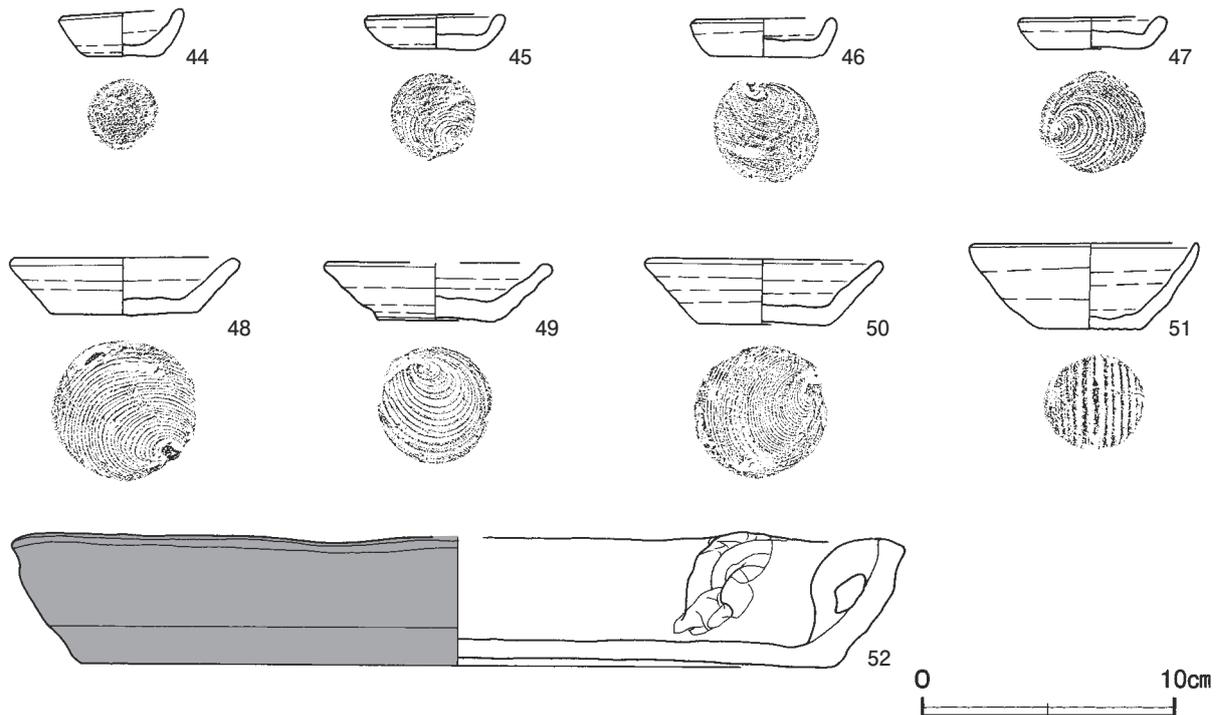
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック多量，炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片16点（小皿9，鉢6，焙烙1），石製品1点（板碑），鉄製品1点（不明）が，覆土中から出土している。土器は覆土上層から完形で出土したものが多く，出土位置が主室中央部にまとまっていることから，天井部崩落後の窪地が埋没する過程で一括投棄されたものとみられる。

所見 時期は，遺構の形状と窪地に一括投棄された17世紀中葉から後葉に比定できる土器の出土状況から，それ以前の室町時代と考えられる。性格は，遺構の形状から倉庫の可能性はあるが，詳細は不明である。



第103図 第6号地下式坑実測図



第104図 第6号地下式坑出土遺物実測図

第6号地下式坑出土遺物観察表（第104図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
44	土師質土器	小皿	4.7	1.9	2.8	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	100% PL29
45	土師質土器	小皿	5.3	1.4	3.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	100% PL29
46	土師質土器	小皿	5.4	1.6	4.2	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	90% PL29
47	土師質土器	小皿	5.6	1.3	4.2	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	70% PL29
48	土師質土器	小皿	8.7	2.4	5.9	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	100% PL30
49	土師質土器	小皿	[8.8]	2.3	4.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	50% PL30
50	土師質土器	小皿	9.1	2.6	5.1	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	100% PL30
51	土師質土器	小皿	8.8	3.5	4.0	長石・石英・角閃石	浅黄橙	普通	底部板目圧痕 外・内面ロクロナデ	覆土上層	95% PL30
52	土師質土器	焙烙	[35.5]	5.4	[30.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	内耳2か所残存 外・内面ナデ	覆土上層	50% PL32

第7号地下式坑（第105図）

位置 調査区東部のB5j6区、標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第5号地下式坑を掘り込み、第4号掘立柱建物、第185～187・525号土坑に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は2.78mで、軸方向はN-10°-Eである。

竪坑 主室の南壁中央部に位置し、奥行0.78m、横幅0.78mの方形である。確認面からの深さは120cmである。底面は平坦で、20cmの段差を有して主室に至っている。壁はほぼ直立している。

主室 奥行2.00m、横幅1.65mの隅丸方形である。天井部は崩落している。確認面からの深さは140cmである。底面は平坦で、硬化面は認められない。壁は直立している。

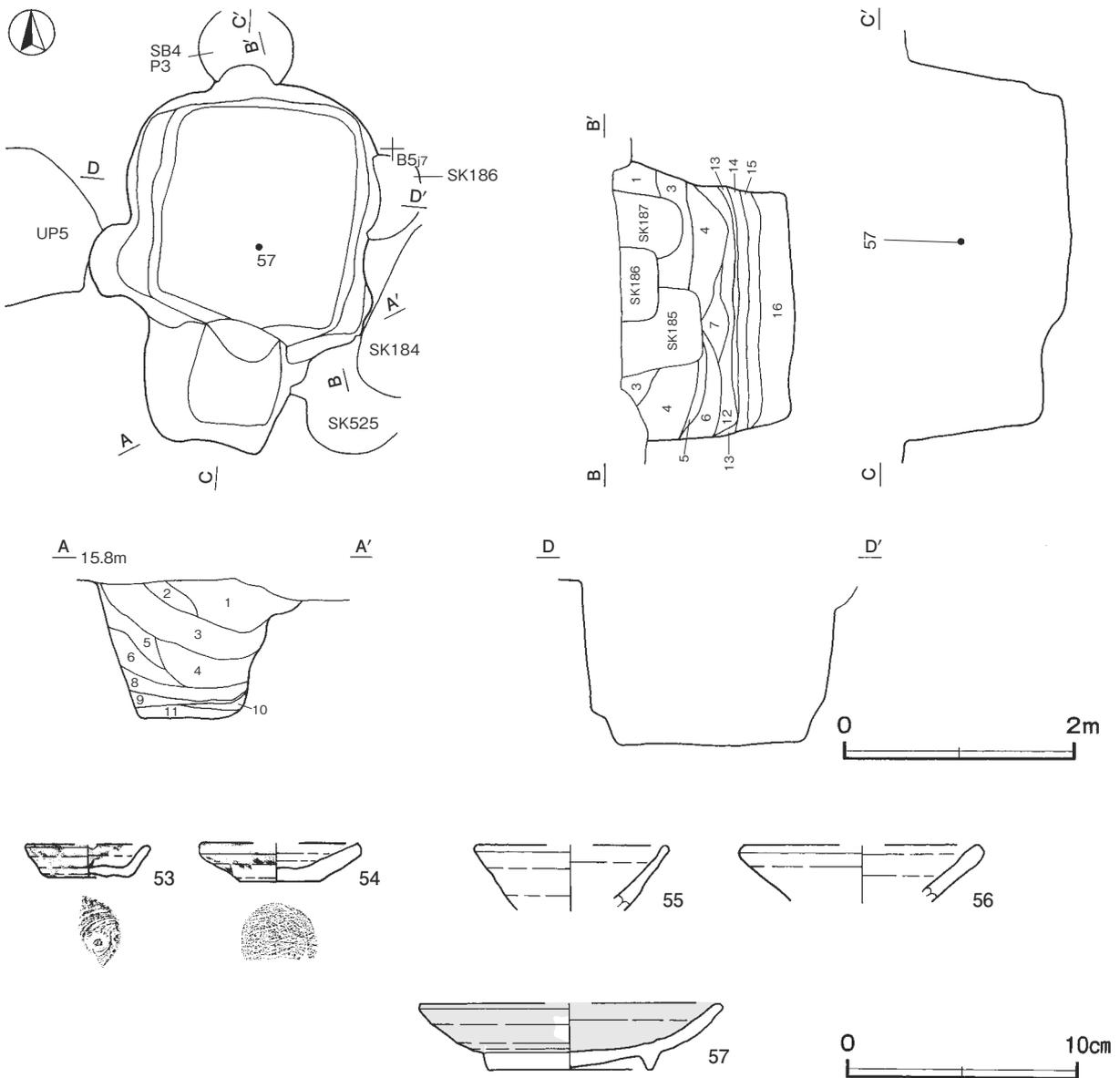
覆土 16層に分層できる。第12～16層は天井部や壁の崩落土である。第1～11層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|-------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック中量・炭化粒子微量 | 11 褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 12 橙色 | ロームブロック多量, 炭化粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 13 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子少量 |
| 6 褐色 | ロームブロック少量 | 14 橙色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 7 褐色 | ロームブロック中量 | 15 明褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 8 褐色 | ロームブロック微量 | 16 橙色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師質土器片 25 点 (小皿 16, 内耳鍋 9), 陶器片 10 点 (碗 6, 皿 3, 鉢 1), 磁器片 1 点 (碗), 石器 1 点 (砥石), 銭貨 1 点 (寛永通寶), 鉄滓 (79.0 g) が、覆土中から出土している。遺物は覆土中から出土した破片であることから、天井部崩落後の窪地を埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、遺構の形状と窪地に投棄された 17 世紀代の土器の出土状況から、それ以前の室町時代と考えられる。性格は、遺構の形状から倉庫の可能性はあるが、詳細は不明である。



第 105 図 第 7 号地下式坑・出土遺物実測図

第7号地下式坑出土遺物観察表 (第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
53	土師質土器	小皿	[5.2]	1.4	[3.2]	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	40%
54	土師質土器	小皿	[6.8]	1.7	3.3	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	50%
55	土師質土器	小皿	[8.2]	(2.9)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	30% PL30
56	土師質土器	小皿	[10.0]	(2.6)	-	長石・石英	橙	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
57	陶器	皿	[13.1]	2.9	7.1	長石・浅黄	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中層	40% PL33

第8号地下式坑 (第106図)

位置 調査区東部のB 5h3区、標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

軸長・軸方向 軸長は2.92mで、軸方向はN-119°-Eである。

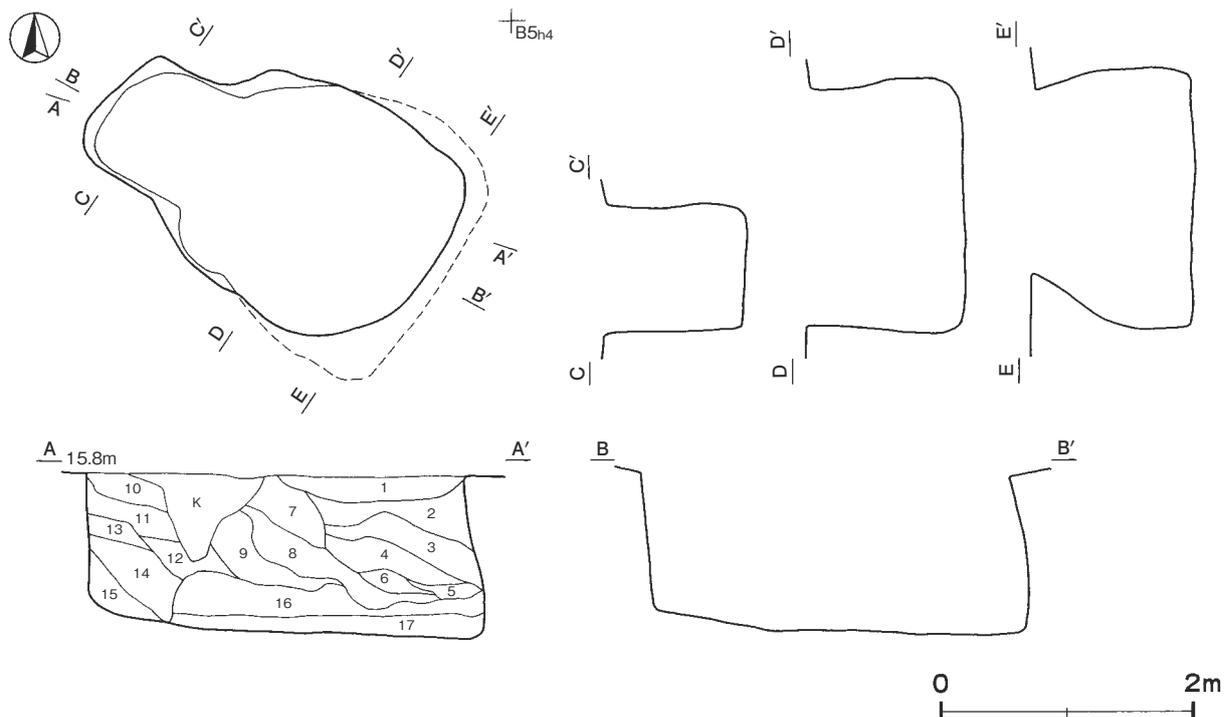
竪坑 主室の北西壁中央部に位置し、奥行0.86m、横幅0.95mの隅丸方形である。確認面からの深さは110cmである。底面は緩やかに下り主室に至っている。壁は直立している。

主室 奥行2.06m、横幅2.18mの隅丸長方形である。天井部は崩落している。確認面からの深さは126cmである。底面は平坦で、硬化面は認められない。壁は内傾している。

覆土 17層に分層できる。第16・17層は天井部や壁の崩落土である。第1～15層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|--------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 褐色 | ロームブロック多量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |



第106図 第8号地下式坑実測図

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|-------------------|
| 11 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 15 褐色 | ロームブロック少量 |
| 12 暗褐色 | ロームブロック微量 | 16 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 13 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 17 明褐色 | ロームブロック多量 |
| 14 黒褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片9点(鉢), 鉄滓1点(44.8g)が, 覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は, 室町時代と考えられる同形状の遺構が確認されていることから, ほぼ同時期と考えられる。性格は, 遺構の形状から倉庫の可能性はあるが, 詳細は不明である。

第9号地下式坑 (第107図)

位置 調査区東部のC6a1区, 標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

軸長・軸方向 軸長は2.10mで, 軸方向はN-95°-Eである。

竪坑 主室の西壁中央部に位置し, 奥行1.02m, 横幅0.86mの長方形である。確認面からの深さは96cmである。底面は平坦で, 16cmの段差を有して主室に至っている。壁は直立している。

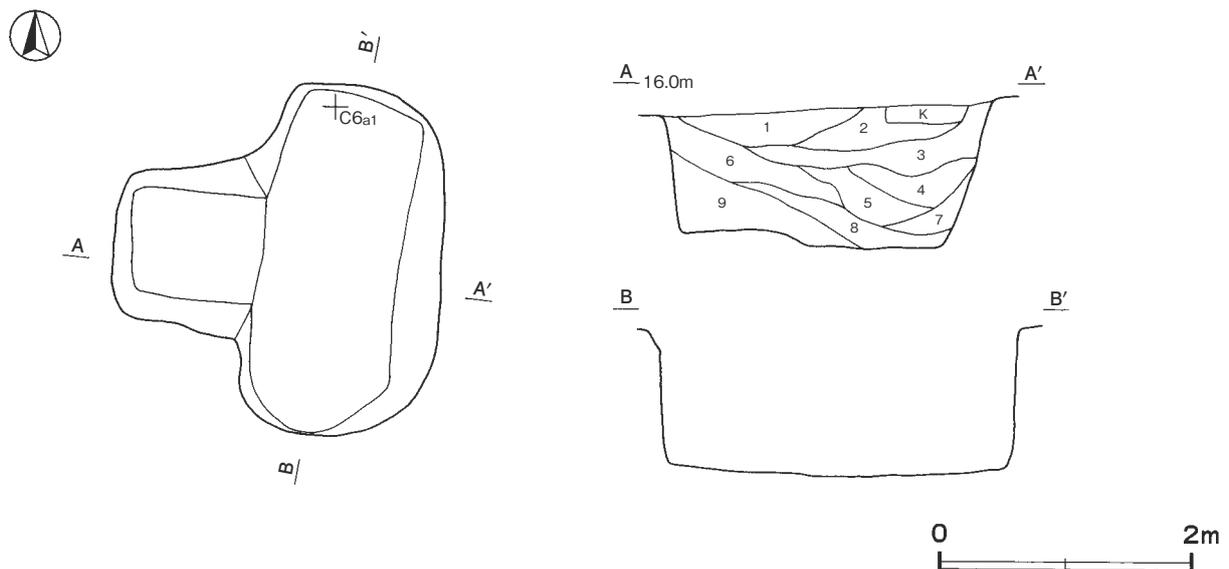
主室 奥行1.08m, 横幅2.70mの隅丸長方形である。天井部は崩落している。確認面からの深さは116cmである。底面は平坦で, 硬化面は認められない。壁は直立している。

覆土 9層に分層できる。第9層は竪坑からの流入土である。第1~8層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 7 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック多量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片6点(内耳鍋), 磁器片2点(碗)が, 覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。



第107図 第9号地下式坑実測図

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、室町時代と考えられる。性格は、遺構の形状から倉庫の可能性はあるが、詳細は不明である。

第 10 号地下式坑（第 108 図）

位置 調査区東部の B 5 i3 区、標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

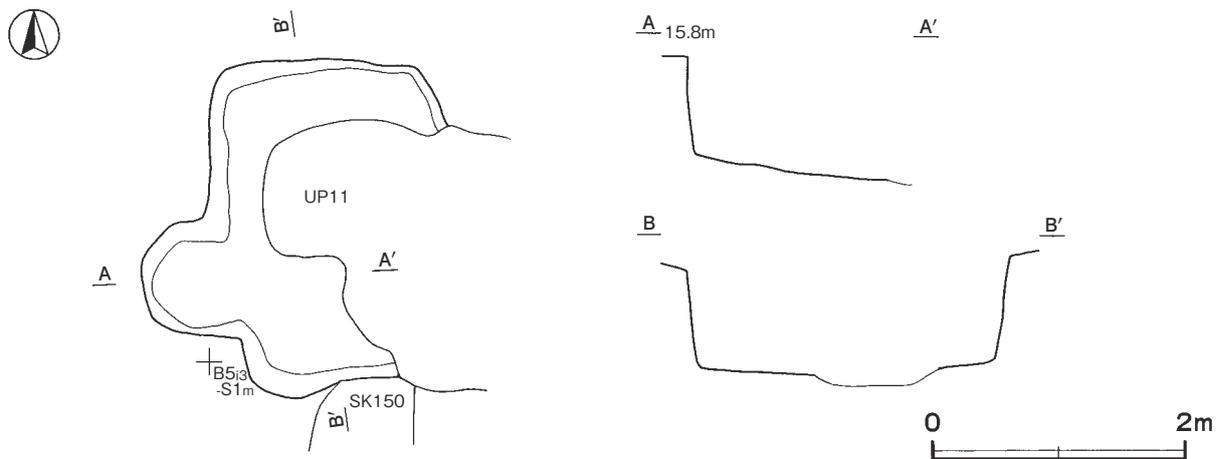
重複関係 第 11 号地下式坑・第 150 号土坑に掘り込まれている。

軸長・軸方向 東部を第 11 号地下式坑に掘り込まれているが、軸長は 2.28 m で、軸方向は $N - 85^\circ - W$ と推測できる。

竪坑 主室の南西コーナー部寄りに位置し、奥行 0.64 m、横幅 0.68 m の半円形である。確認面からの深さは 80 cm である。底面は緩やかに下り主室に至っている。壁は直立している。

主室 東部を第 11 号地下式坑に掘り込まれているが、奥行は 1.64 m、横幅が 2.42 m の隅丸長方形と推測できる。確認面からの深さは 92 cm である。底面は平坦で、硬化面は認められない。壁は直立している。

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、室町時代と考えられる同形状の遺構が確認されていることから、ほぼ同時期と考えられる。性格は、遺構の形状から倉庫の可能性はあるが、詳細は不明である。



第 108 図 第 10 号地下式坑実測図

第 11 号地下式坑（第 109 図）

位置 調査区東部の B 5 i3 区、標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 150 号土坑に掘り込まれ、第 10・12 号地下式坑を掘り込んでいる。

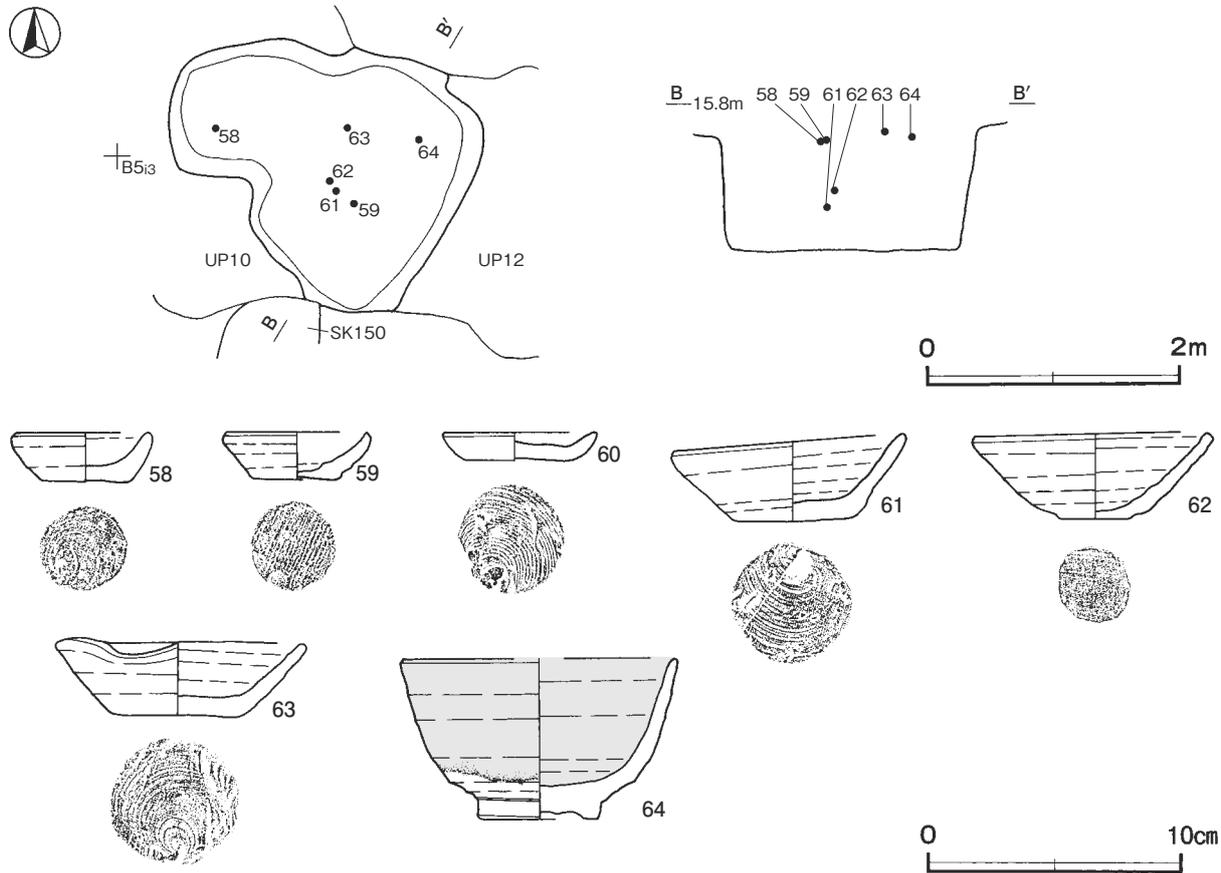
軸長・軸方向 軸長は 2.25 m で、軸方向は $N - 116^\circ - E$ である。

竪坑 主室の北西壁中央部に位置し、奥行 0.95 m、横幅 0.83 m の不整長方形である。確認面からの深さは 98 cm である。壁は直立している。

主室 奥行 1.30 m、横幅 1.78 m の隅丸長方形である。確認面からの深さは 100 cm である。底面は平坦で、硬化面は認められない。壁は直立している。

遺物出土状況 土師質土器片 22 点（小皿 9，焙烙 13），陶器片 2 点（碗，皿），鉄滓 1 点（6.4 g）が，覆土中層から出土している。土器は主室中央部の覆土上層から中層にかけて出土していることから，天井部崩落後の窪地を埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は，遺構の形状と窪地に投棄された 17 世紀中葉から後葉に比定できる土器の出土状況から，それ以前の室町時代と考えられる。性格は，遺構の形状から倉庫の可能性はあるが，詳細は不明である。



第 109 図 第 11 号地下式坑・出土遺物実測図

第 11 号地下式坑出土遺物観察表（第 109 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
58	土師質土器	小皿	5.1	2.0	3.4	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	80% PL29
59	土師質土器	小皿	5.5	1.9	3.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	板目圧痕 外・内面ロクロナデ	覆土上層	100% PL29
60	土師質土器	小皿	6.0	1.1	4.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中層	70%
61	土師質土器	小皿	9.1	3.5	4.6	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中層	90% PL31
62	土師質土器	小皿	9.2	3.5	2.8	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	普通	底部ナデ 外・内面ロクロナデ	覆土中層	80% PL31
63	土師質土器	小皿	9.7	3.1	5.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	80% PL31

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
64	陶器	碗	[10.8]	6.4	4.7	長石・浅黄	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土上層	30% PL32

第 12 号地下式坑（第 110 図）

位置 調査区東部の B 5 i 3 区，標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第11号地下式坑に掘り込まれている。

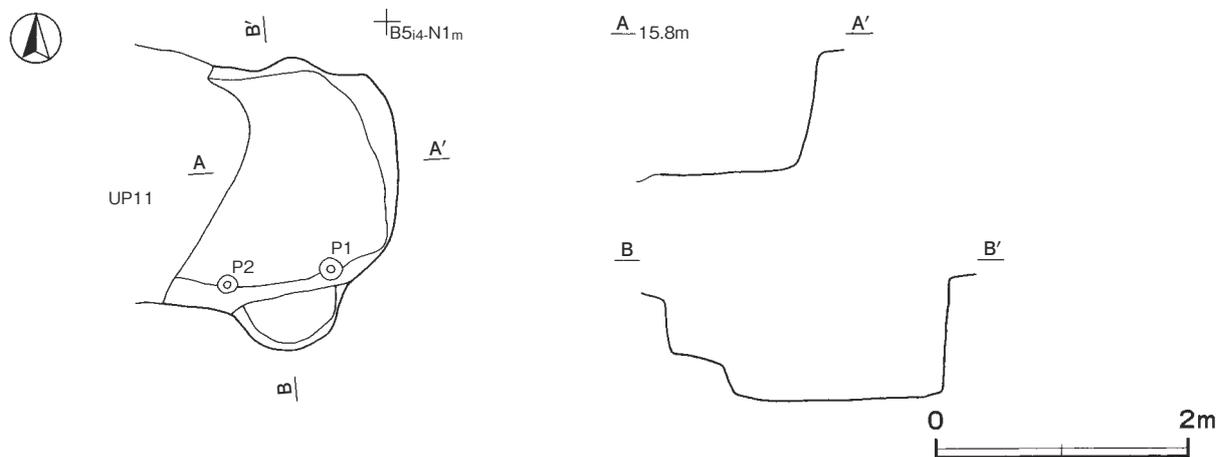
軸長・軸方向 西部を第11号地下式坑に掘り込まれているが、軸長は2.12mで、軸方向はN-5°-Wと推測できる。

竪坑 主室の南壁中央部に位置し、奥行0.50m、横幅0.72mの半円形である。確認面からの深さは52cmである。底面はほぼ平坦で、24cmの段差を有して主室に至っている。壁は直立している。

主室 西部を第11号地下式坑に掘り込まれているため、奥行は1.62mで、横幅は1.38mしか確認できなかったが、隅丸長方形と推測できる。確認面からの深さは90cmである。底面は平坦で、硬化面は認められない。壁は直立している。

ピット 2か所。P1・P2は深さ11cmで、性格は不明である。

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、室町時代と考えられる同形状の遺構が確認されていることから、ほぼ同時期と考えられる。性格は、遺構の形状から倉庫の可能性はあるが、詳細は不明である。



第110図 第12号地下式坑実測図

表14 室町時代地下式坑一覧表

番号	位置	軸方向	平面形		軸長 (m)	主室規模			竪坑規模			覆土	主な出土遺物	備考
			主室	竪坑		奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)			
1	B5j8	N-44°-E	隅丸長方形	半円形	2.30	1.68	1.40	140	0.62	0.80	124	人為	土師質土器, 陶器, 磁器	本跡→SK126
2	B5i7	N-31°-W	不定形	[不定形]	3.10	1.70	2.08	98	1.40	(1.32)	96	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器	本跡→UP4
3	B5h8	N-170°-E	長方形	半円形	3.08	1.86	3.48	130	1.22	(0.78)	120	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器	本跡→FP23
4	B5i8	N-60°-E	隅丸長方形	半円形	3.28	2.60	1.54	108	0.68	0.88	104	人為	土師質土器, 石製品, 銭貨	UP2→本跡→FP3・4
5	B5j6	N-154°-E	隅丸長方形	半円形	1.94	1.28	2.05	122	0.66	0.74	120	人為	土師質土器, 陶器, 石器, 石製品, 鉄滓	本跡→SB4, UP7, SK153
6	B5i6	N-50°-E	隅丸長方形	半円形	2.46	1.46	2.98	122	1.00	0.90	116	自然	土師質土器, 石製品, 鉄製品	SK159・191→本跡
7	B5j6	N-10°-E	隅丸長方形	方形	2.78	2.00	1.65	140	0.78	0.78	120	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 銭貨, 鉄滓	UP5→本跡→SB4, SK184~187・325
8	B5h3	N-119°-E	隅丸長方形	隅丸長方形	2.92	2.06	2.18	126	0.86	0.95	110	人為	土師質土器, 鉄滓	
9	C6a1	N-95°-E	隅丸長方形	長方形	2.10	1.08	2.70	116	1.02	0.86	96	人為	土師質土器, 磁器	
10	B5i3	N-85°-W	[隅丸長方形]	半円形	2.28	1.64	2.42	92	0.64	0.68	80	-		本跡→UP11, SK150
11	B5i3	N-116°-E	隅丸長方形	不整長方形	2.25	1.30	1.78	100	0.95	0.83	98	-	土師質土器, 陶器, 鉄滓	UP10・12→本跡→SK150
12	B5i3	N-5°-W	[隅丸長方形]	半円形	2.12	1.62	(1.38)	90	0.50	0.72	52	-		本跡→UP11

(4) 土坑

第 184 号土坑 (第 111 図)

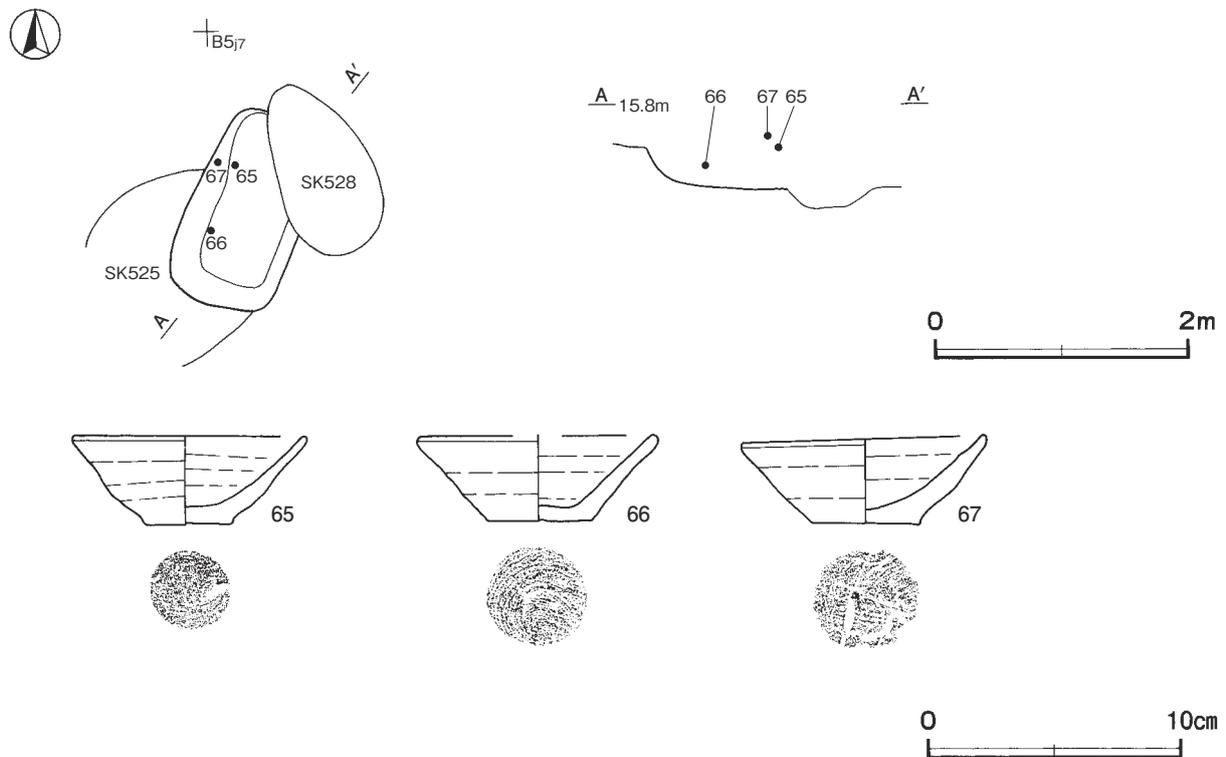
位置 調査区東部の B 5j7 区, 標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 525 号土坑を掘り込み, 第 528 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部を第 528 号土坑に掘り込まれているが, 南北軸 1.62 m, 東西軸 0.92 m の隅丸長方形で, 長径方向が N - 26° - E と推測できる。深さは 57cm で, 底面は平坦である。

遺物出土状況 土師質土器片 10 点 (小皿 6, 焙烙 4), 陶器片 5 点 (碗 3, 鉢 2), 磁器片 7 点 (碗), 石器 2 点 (砥石), 鉄製品 2 点 (刀子, 不明), 銅製品 2 点 (煙管, 不明), 石製品 1 点 (板碑), 鉄滓 1 点 (29.7 g), 粘土塊 1 点 が, 覆土中から出土している。土器は覆土上層から中層にかけて出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から 16 世紀後葉と考えられる。性格は不明である。



第 111 図 第 184 号土坑・出土遺物実測図

第 184 号土坑出土遺物観察表 (第 111 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
65	土師質土器	小皿	9.0	3.6	3.3	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部ナデ 外・内面ロクロナデ	覆土上層	70% PL31
66	土師質土器	小皿	[9.2]	3.4	4.1	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中層	50% PL31
67	土師質土器	小皿	9.6	3.6	4.2	長石・石英	にぶい黄	普通	底部ナデ 外・内面ロクロナデ	覆土上層	80% PL31

3 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡7棟、井戸跡9基、粘土貼土坑10基、土坑12基、炉跡19基、柱穴列2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第112図)

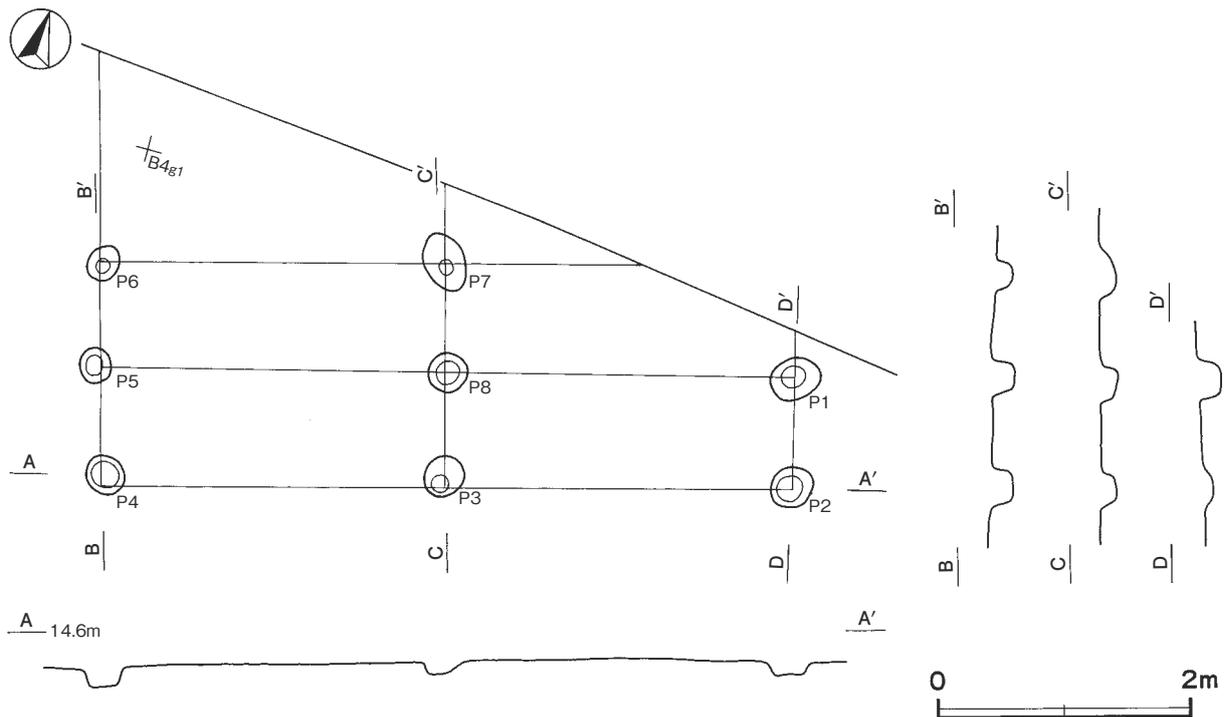
位置 調査区西部のB 4 g1 ~ B 4 g2区、標高14 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第23号土坑を掘り込んでいる。第17号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 北部が調査区域外へ延びているため、桁行は2間で、梁行は2間しか確認できなかった。総柱建物跡で、桁行方向がN - 76° - Eの東西棟と推定できる。規模は、桁行が5.40 mで、梁行は1.80 mしか確認できなかった。柱間寸法は、桁行が2.70 m (9尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径29 ~ 49cm、短径25 ~ 32cmである。深さは7 ~ 18cmで、掘方の断面はU字状である。

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる第2号掘立柱建物跡との位置関係から、ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第112図 第1号掘立柱建物跡実測図

第2号掘立柱建物跡(第113図)

位置 調査区西部のB 4 j4 ~ C 4 a4区、標高14 mほどの平坦な台地上に位置している。

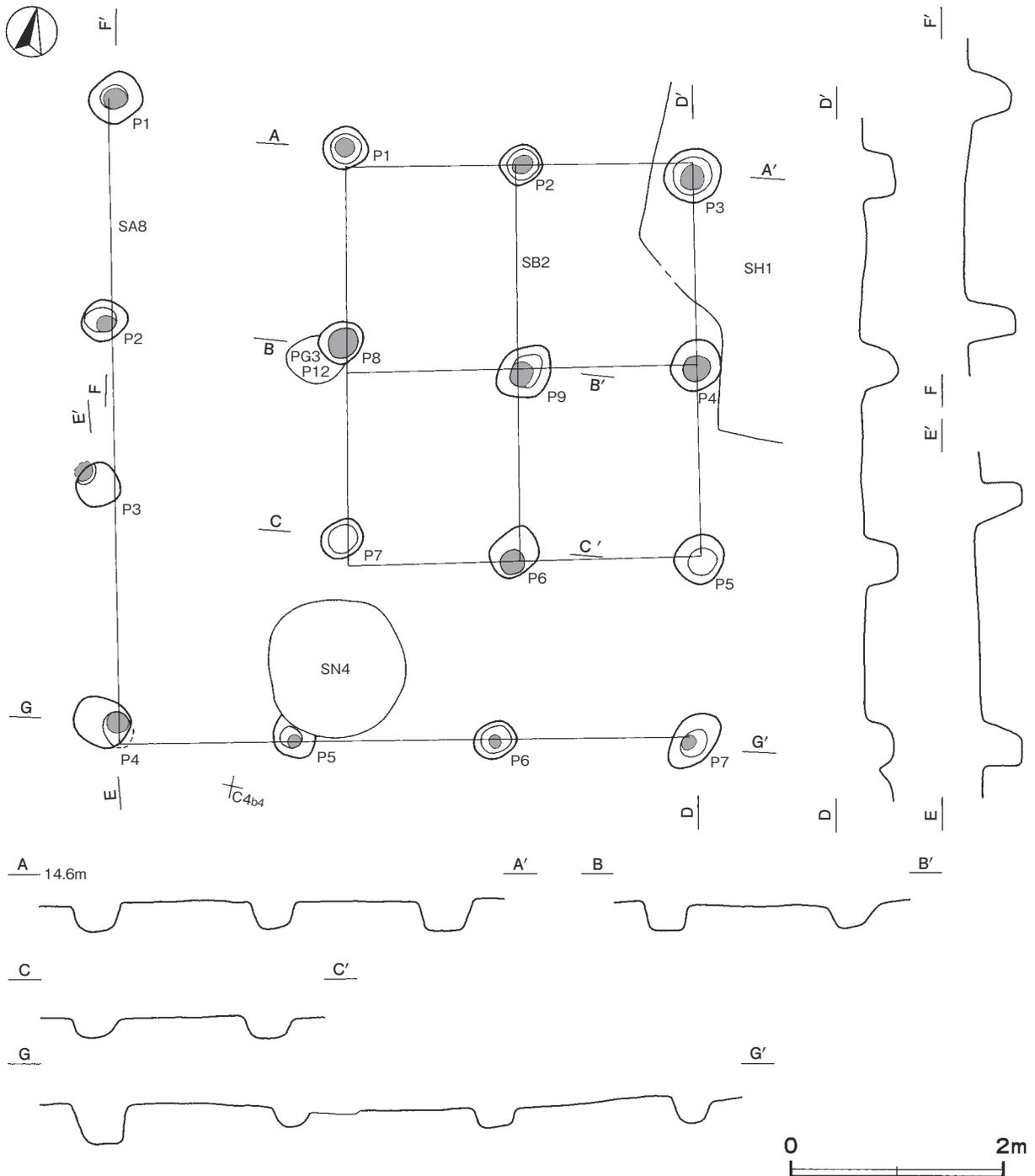
重複関係 第1号方形竪穴遺構、第3号ピット群を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の総柱建物跡で、桁行方向がN - 11° - Wの南北棟である。規模は、桁行3.60 m、梁行3.30 mで、面積は11.88㎡である。柱間寸法は、桁行が1.80m (6尺)、梁行が1.65 m (5.5尺)

で、柱筋は不揃いである。

柱穴 9か所。平面形は円形または楕円形で、長径 38～54cm、短径 30～38cmである。深さは 10～32cmで、掘方の断面はU字状である。P5・P7を除く柱穴の底面で柱のあたりを確認した。

第8号柱穴列 調査区西部のC4a2～C4a5区、標高 14 mほどの平坦な台地上に位置している。第4号粘土貼土坑に掘り込まれている。南北方向 6.00 m、東西方向 5.4 mの間にL字状に配置された柱穴7か所を確認した。軸方向は南北が $N - 11^\circ - W$ 、東西が $N - 78^\circ - E$ で、柱間寸法は 1.50 m (5尺)～2.40 m (8尺)である。柱筋はほぼ揃っている。平面形は、円形または楕円形で、長径 40～62cm、短径 34～44cmで、深さは 14～42cmである。掘方の断面はU字状である。柱穴の底面で柱のあたりを確認した。



第 113 図 第 2 号掘立柱建物跡・第 8 号柱穴列実測図

遺物出土状況 土師質土器片4点（小皿1，鉢3），陶器片1点（碗）のほか，縄文土器片1点（深鉢），土師器片1点（甕），鉄滓1点（2.8g）が，第2号掘立柱建物跡の柱穴の覆土中から出土しているが，細片のため図示できない。第8号柱穴列から遺物は出土していない。

所見 時期は，出土土器が細片のため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる。性格は，規模及び同時期に機能していたと考えられる第1・5号井戸跡との位置関係から，居住目的の建物の可能性がある。第8号柱穴列は，配置から第2号掘立柱建物跡に付帯する遺構と考えられ，遮扉の可能性があるが，詳細は不明である。

第3号掘立柱建物跡(第114図)

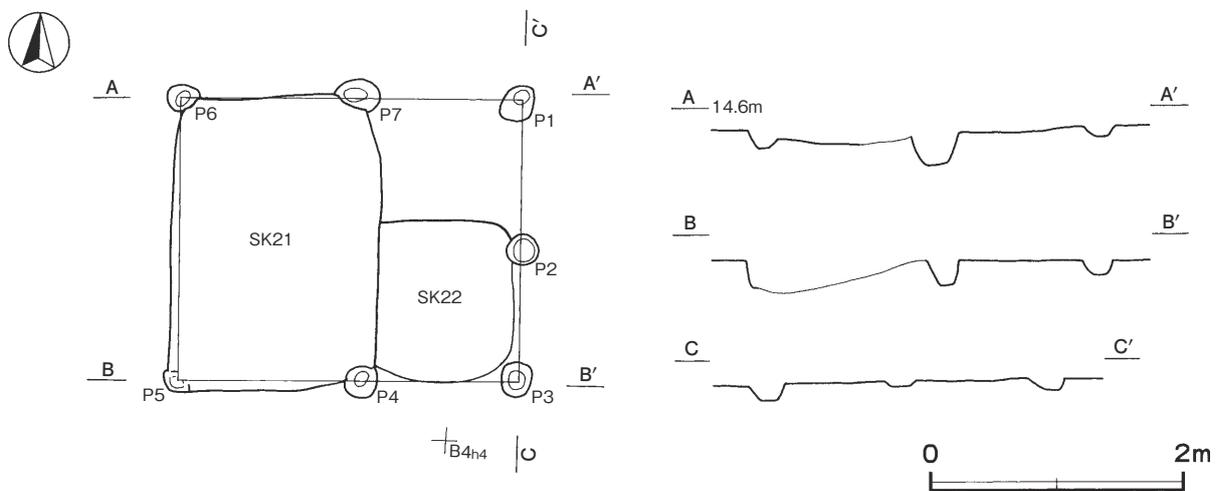
位置 調査区西部のB 4g3～B 4g4区，標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第22号土坑を掘り込み，第21号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行，梁行ともに2間の側柱建物跡で，桁行方向がN-87°-Eの東西棟である。規模は，桁行2.70m，梁行2.25mで，面積は6.08㎡である。柱間寸法は，桁行が西妻から1.50m（5尺）・1.20m（4尺），梁行が北平から1.20m（4尺）・1.05m（3.5尺）で，柱筋は揃っている。

柱穴 7か所。平面形は円形または楕円形で，長径25～28cm，短径24cmである。深さは5～26cmで，掘方の断面はU字状である。

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる第2号掘立柱建物跡との位置関係から，ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第114図 第3号掘立柱建物跡実測図

第4号掘立柱建物跡(第115図)

位置 調査区東部のB 5i5～B 5j6区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

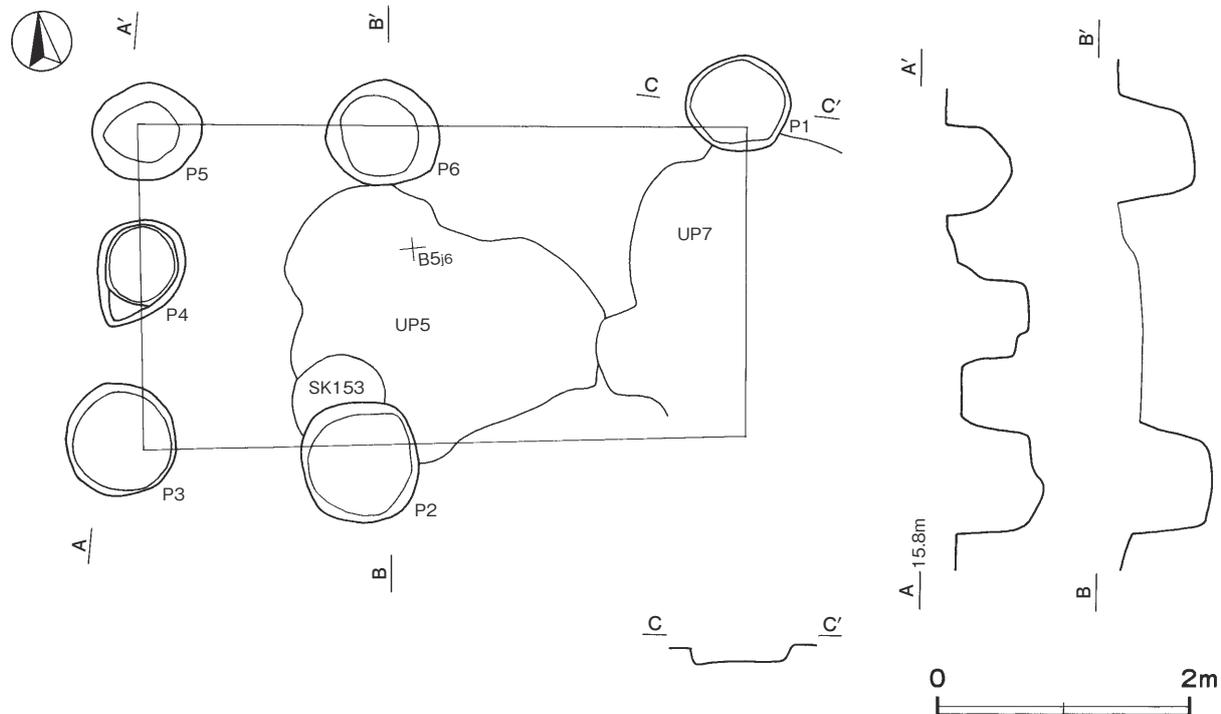
重複関係 第5・7号地下式坑，第153号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行，梁行ともに2間の側柱建物跡で，桁行方向がN-84°-Wの東西棟である。規模は，桁行4.65m，梁行2.70mで，面積は12.56㎡である。柱間寸法は，桁行が西妻から1.80m（6尺）・2.85m（9.5尺），梁行が1.35m（4.5尺）で，柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 6か所。平面形は円形または楕円形で、長径83～103cm、短径36～100cmである。深さは10～71cmで、掘方の断面はU字状である。

遺物出土状況 土師質土器片7点（焙烙）、陶器片3点（鉢2、播鉢1）のほか、須恵器片1点（坏）、鉄滓1点（8.0g）が、柱穴の覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器と第5号地下式坑との重複関係から、江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第115図 第4号掘立柱建物跡実測図

第5号掘立柱建物跡(第116図)

位置 調査区東部のB5j7～C5a9区、標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

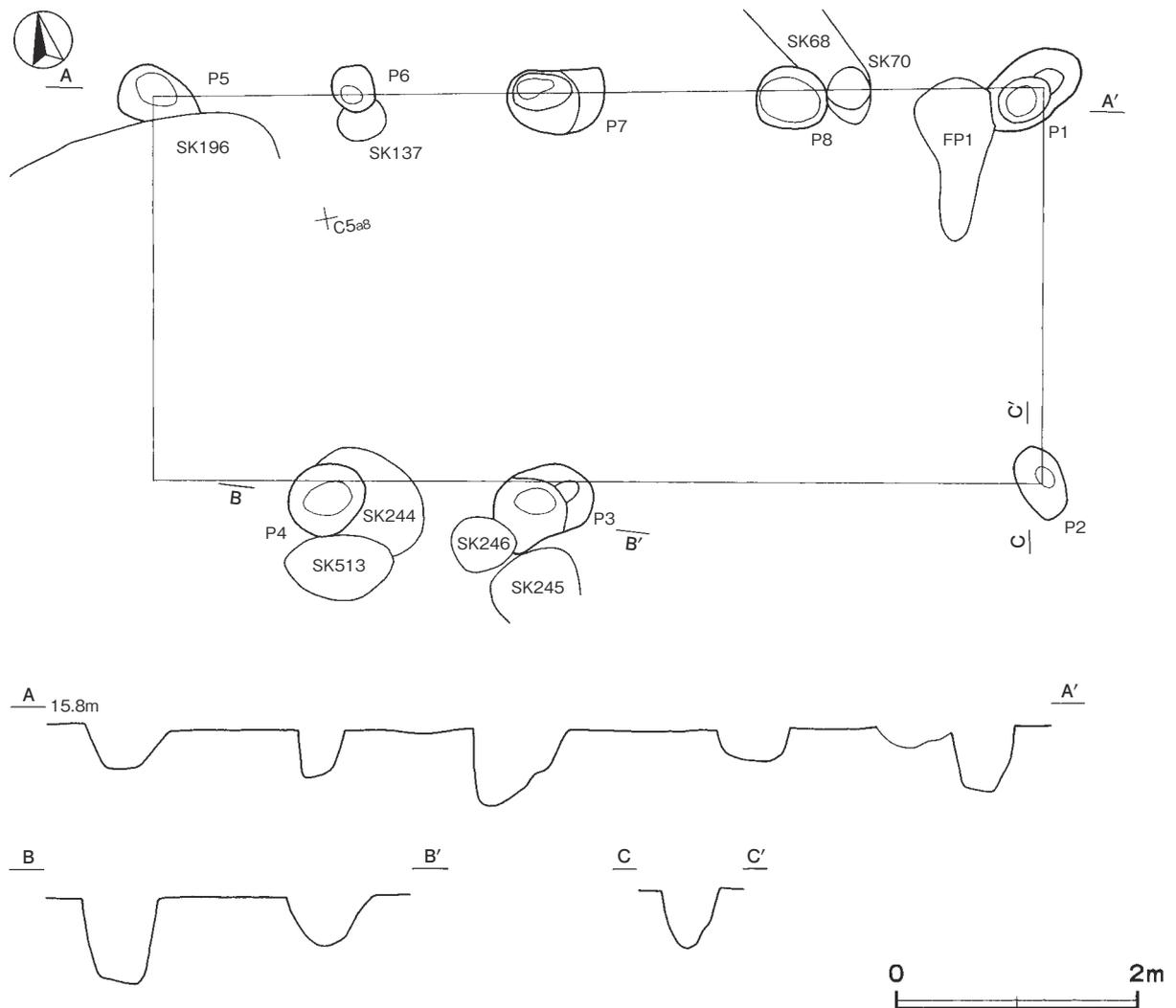
重複関係 第68・137・244・513号土坑を掘り込み、第196・246号土坑、第1号炉に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-79°-Wの東西棟である。規模は、桁行7.35m、梁行3.30mで、面積は24.26㎡である。柱間寸法は、桁行が1.50m（5尺）～2.10m（7尺）、梁行が3.30m（11尺）で、柱筋は揃っている。

柱穴 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径64～83cm、短径31～60cmである。深さは29～75cmで、掘方の断面はU字状である。

遺物出土状況 磁器片1点（碗）、石製品1点（砥石）が、柱穴の覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、同時期に機能していたと考えられる第8・9号粘土貼土坑との位置関係から、19世紀後半と考えられる。性格は、規模及び南面して建てられていることから、居住目的の建物と考えられる。本跡と第6号掘立柱建物跡は、直交した位置関係にあることから、同時期に機能していた可能性がある。



第116図 第5号掘立柱建物跡実測図

第6号掘立柱建物跡(第117図)

位置 調査区東部のC 5 a5～C 5 d5区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

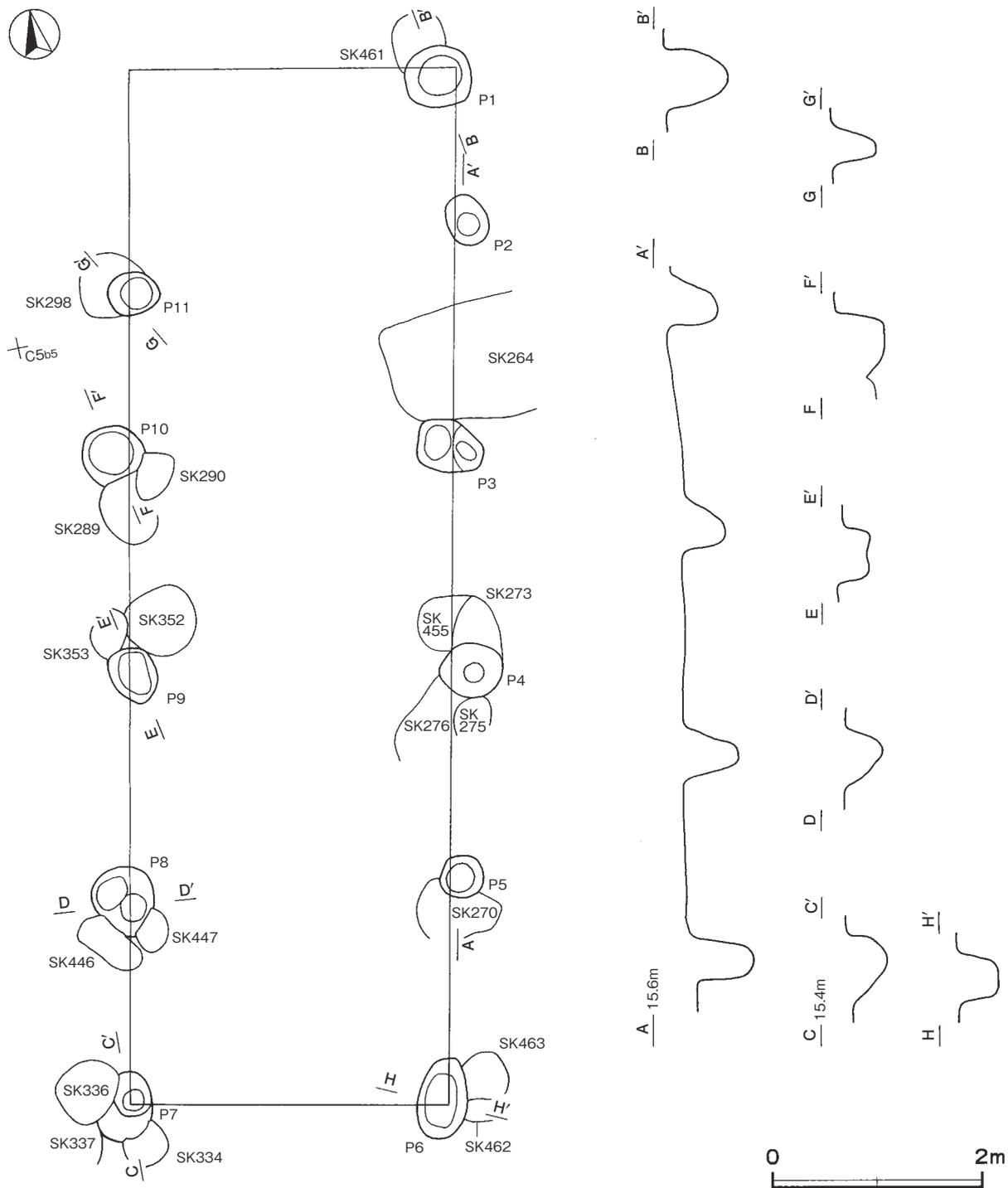
重複関係 第264・270・273・275・276・298・352・353・455・461～463号土坑を掘り込み，第289・290・334・336・337・446・447号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行5間，梁行1間の側柱建物跡で，桁行方向がN-11°-Eの南北棟である。規模は，桁行10.05m，梁行3.00mで，面積は30.15㎡である。柱間寸法は，桁行が1.50m(5尺)～2.25m(7.5尺)，梁行が3.00m(10尺)で，柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 11か所。平面形は円形または楕円形で，長径43～78cm，短径39～60cmである。深さは36～64cmで，掘方の断面はU字状である。

遺物出土状況 土師質土器片5点(小皿4，鉢1)，磁器片1点(碗)のほか，土師器片1点(甕)が，柱穴の覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器が細片のため特定は困難であるが，同時期に機能していたと考えられる第8・9号粘土貼土坑との位置関係から，19世紀後半と考えられる。性格は，居住目的の建物と考えられる第5号掘立柱建物跡との位置関係から，納屋などの倉庫の可能性がある。



第 117 図 第 6 号掘立柱建物跡実測図

第 7 号掘立柱建物跡(第 118 図)

位置 調査区東部の C 5 b3 ~ C 5 c4 区，標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

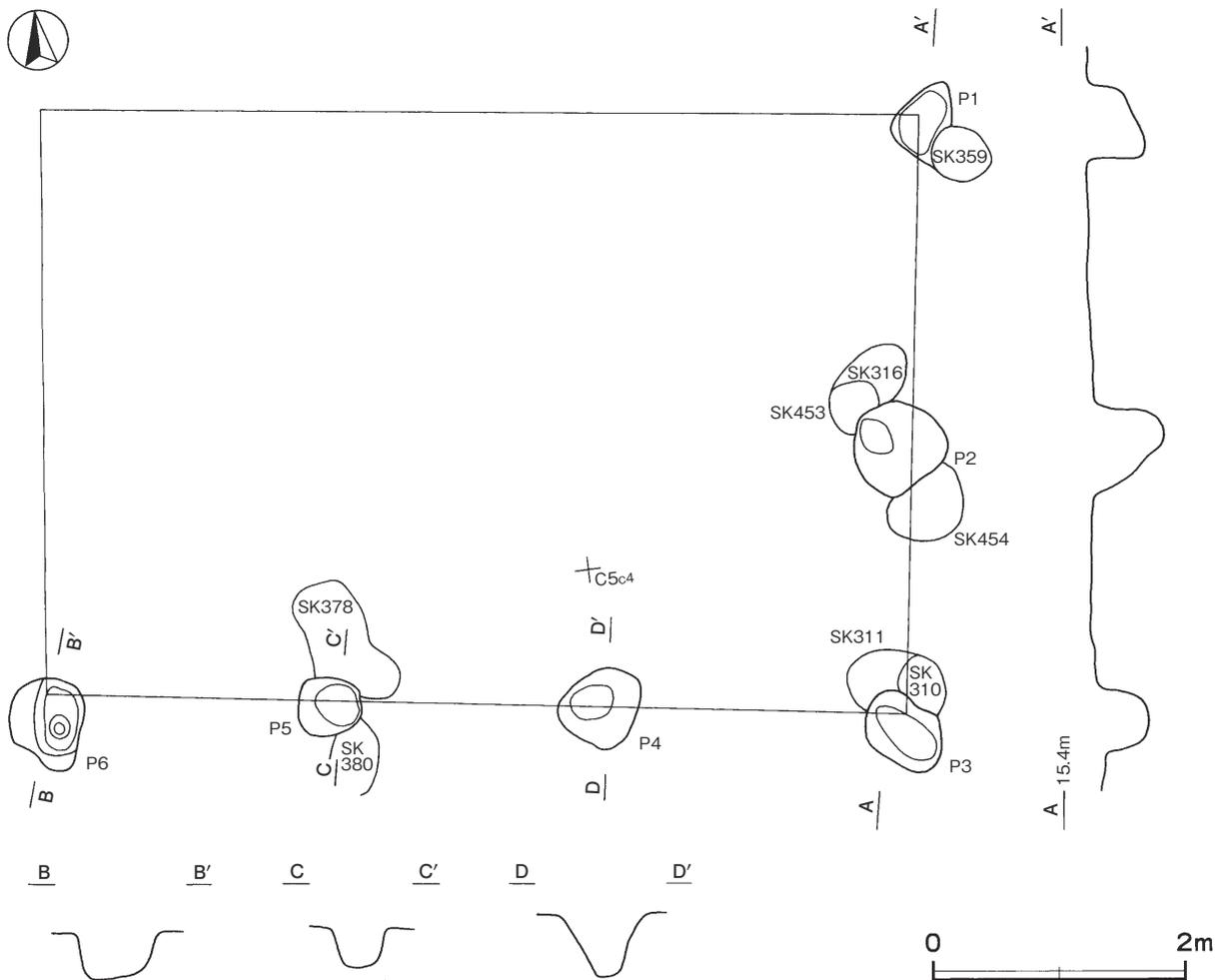
重複関係 第 310・311・316・378・380・453・454 土坑を掘り込み，第 359 号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 北部が削平されているため、北桁と西梁の柱穴は確認できなかったが、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-84°-Wの東西棟と推測できる。規模は、桁行6.87m、梁行4.80mで、面積が32.98㎡ある。柱間寸法は、桁行が2.10m(7尺)~2.40m(8尺)、梁行が北平から2.55m(8.5尺)・2.25m(7.5尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 6か所。平面形は円形または楕円形で、長径50~71cm、短径38~68cmである。深さは40~58cmで、掘方の断面はU字状である。

遺物出土状況 土師質土器片4点(小皿)、石器1点(砥石)が、柱穴の覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第118図 第7号掘立柱建物跡実測図

表15 江戸時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模		面積 (㎡)	柱間寸法		柱穴			主な出土遺物	時期	備考
				桁×梁(間)	桁×梁(m)		桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形			
1	B _{4g1} ~B _{4g2}	N-76°-E	2×(2)	5.40×(1.80)	-	2.70	0.90	総柱	8	円形・楕円形	7~18		江戸時代	SK23→本跡 SK17との 新旧不明
2	B _{4j1} ~C _{4a1}	N-11°-W	2×2	3.60×3.30	11.88	1.80	1.65	総柱	9	円形・楕円形	10~32	土師質土器, 陶器	江戸時代	SH 1, PG 3→本跡
3	B _{4g3} ~B _{4g4}	N-87°-E	2×2	2.70×2.25	6.08	1.20・ 1.50	1.05・ 1.20	側柱	7	円形・楕円形	5~26		江戸時代	SK22→本跡→SK21
4	B _{5j5} ~B _{5j6}	N-84°-W	2×2	4.65×2.70	12.56	1.80・ 2.85	1.35	側柱	6	円形・楕円形	10~71	土師質土器, 陶器	江戸時代	UP 5・7, SK153→本 跡

番号	位置	桁行方向	柱間数		規模	面積 (㎡)	柱間寸法		柱 穴			主な出土遺物	時 期	備 考
			桁×梁(間)	桁×梁(m)			桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形			
5	B57~ C5a9	N-79°-W	4×1	7.35×3.30	24.26	1.50~ 2.10	3.30	側柱	8	円形・楕円形	29~75	磁器、石製品	江戸時代	SK68・137・244・513→ 本跡→SK196・246 FP 1
6	C5a5 ~C5d5	N-11°-E	5×1	10.05×3.00	30.15	1.50~ 2.25	3.00	側柱	11	円形・楕円形	36~64	土師質土器、 磁器	江戸時代	SK264・270・273・275・ 276・298・352・353・ 455・461~463→本跡 →SK289・290・334・ 336・337・446・447
7	C5b3 ~C5c4	N-84°-W	3×2	6.87×4.80	32.98	2.10~ 2.40	2.25・ 2.55	側柱	6	円形・楕円形	40~58	土師質土器、 石製品	江戸時代	SK310・311・316・378・ 380・453・454→本跡 →SK339

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第119図)

位置 調査区西部のC4a2区、標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は長径1.56m、短径1.43mの円形である。確認面から深さ172cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で、崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため、下部の構造は不明である。

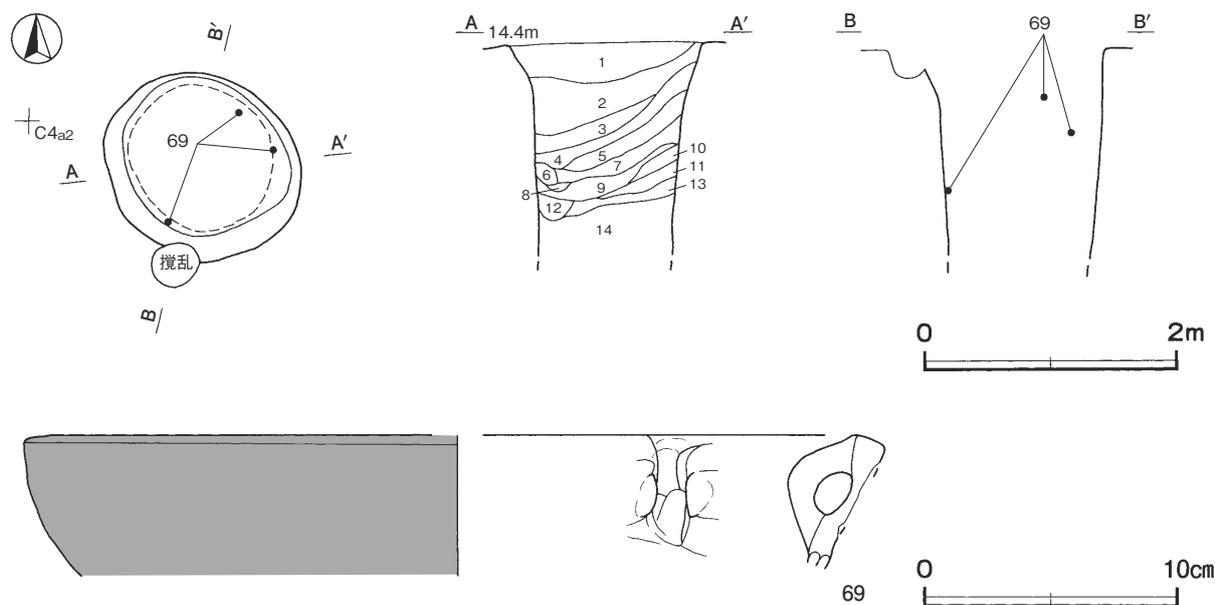
覆土 14層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------|---------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック微量 | 10 極暗褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量 |
| 5 灰褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 12 極暗褐色 | 粘土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量 |
| 6 極暗褐色 | ロームブロック微量 | 13 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 14 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、陶器片1点(皿)、銅製品1点(煙管)が、覆土中から出土している。69は、覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合していることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器から江戸時代と考えられる。



第119図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表 (第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
69	土師質土器	焙烙	[32.0]	(5.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内耳1か所残存 外・内面ナデ	覆土上層～中層	20%

第2号井戸跡 (第120図)

位置 調査区西部のB 4i9区, 標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は長径0.81m, 短径0.80mの円形である。確認面から深さ121cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で, 崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため, 下部の構造は不明である。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

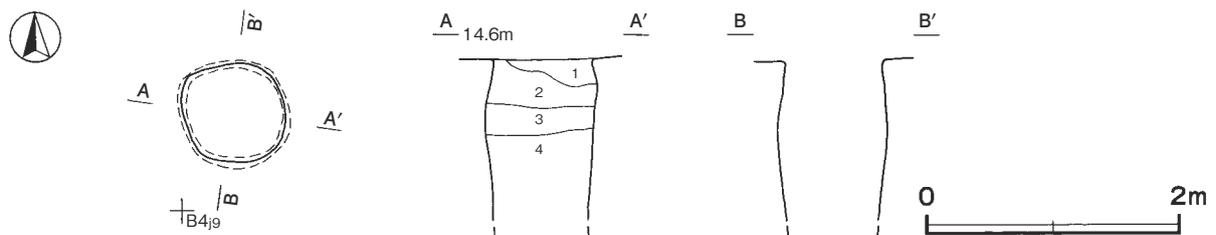
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量
2 極暗褐色 ロームブロック少量

3 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
4 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片3点(甕)が, 覆土中から出土している。

所見 時期は, 伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが, 周辺の遺構配置から江戸時代と考えられる。



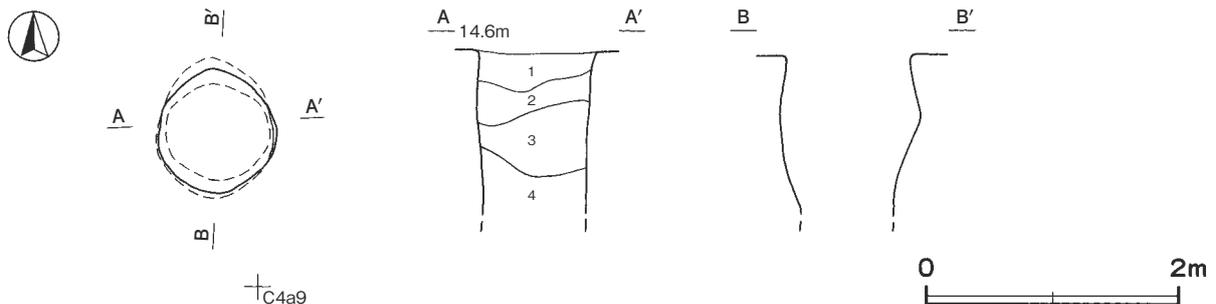
第120図 第2号井戸跡実測図

第3号井戸跡 (第121図)

位置 調査区西部のB 4j8区, 標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は長径0.99m, 短径0.95mの円形である。確認面から深さ126cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で, 崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため, 下部の構造は不明である。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。



第121図 第3号井戸跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|--------|---------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |

遺物出土状況 土師質土器片3点(鉢)が, 覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土土器が細片のため特定は困難であるが, 江戸時代と考えられる。

第4号井戸跡 (第122図)

位置 調査区西部のB4h0区, 標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は長径0.89m, 短径0.87mの円形である。確認面から深さ118cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で, 崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため, 下部の構造は不明である。

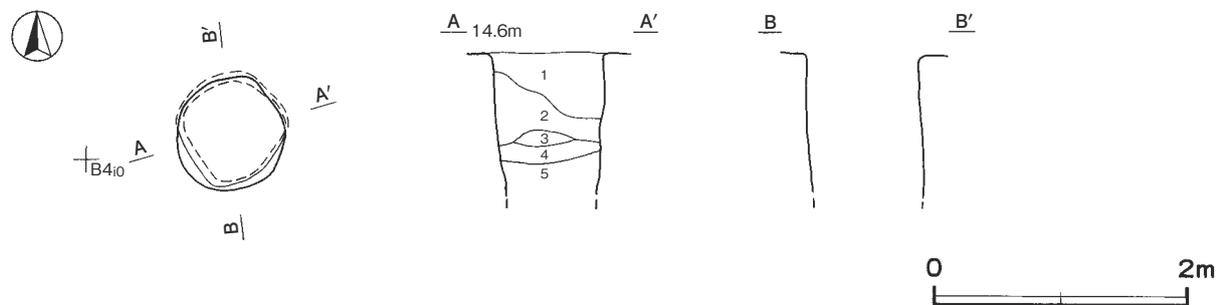
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|--------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 灰褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片9点(焙烙2, 挿鉢2, 焼炉5), 陶器片1点(碗), 磁器片2点(碗)のほか, 縄文土器片2点(深鉢), 土師器片8点(高坏1, 甕7), 鉄滓2点(76.6g)が, 覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土土器が細片のため特定は困難であるが, 江戸時代と考えられる。



第122図 第4号井戸跡実測図

第5号井戸跡 (第123図)

位置 調査区西部のB4j5区, 標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認面は径0.75mほどの円形である。確認面から深さ133cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で, 崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため, 下部の構造は不明である。

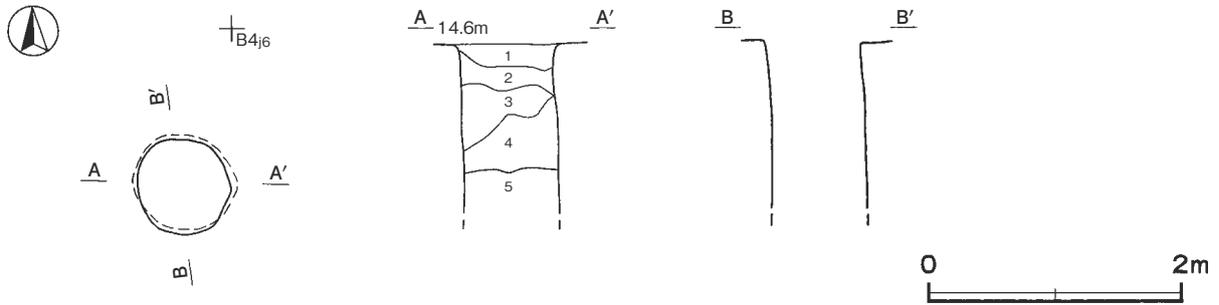
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片 1 点（小皿）のほか、須恵器片 1 点（甕）が、覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。

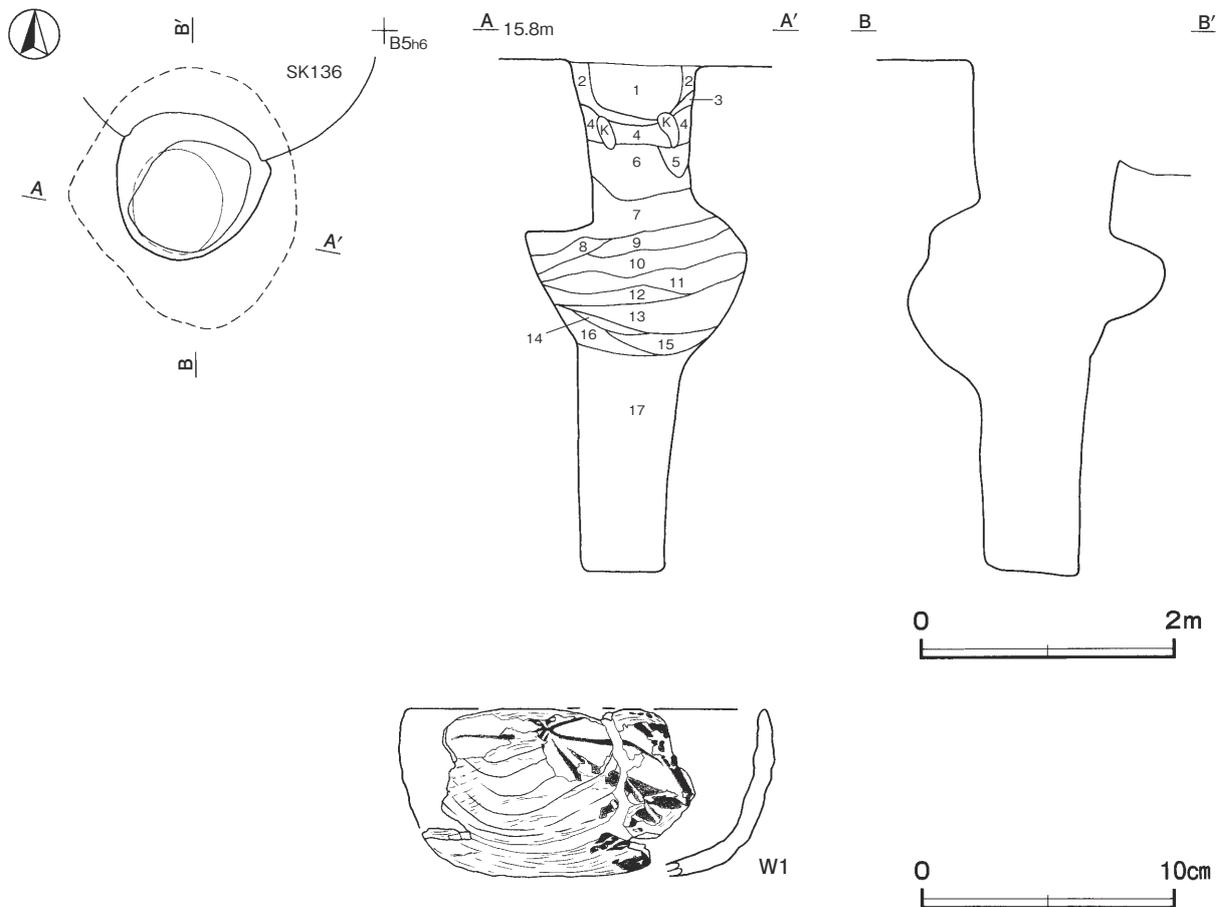


第 123 図 第 5 号井戸跡実測図

第 6 号井戸跡（第 124 図）

位置 調査区東部の B 5 h5 区、標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 136 号土坑に掘り込まれている。



第 124 図 第 6 号井戸跡・出土遺物実測図

規模と形状 確認面は長径 1.21 m，短径 1.16 m の円形である。確認面からの深さは 402cm である。上部は、深さ 128cm まで円筒状を呈し、それより下部は一時張り出した後、底面に向かってすぼまっている。張り出し部は、壁が崩落したことによるものとみられる。底面は平坦で、壁から湧水が認められた。

覆土 17 層に分層できる。第 17 層は壁の崩落土である。第 1～16 層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|---------|--------------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 明褐色 | ロームブロック中量，粘土ブロック微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 12 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量，炭化物微量 | 13 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック中量，炭化物少量 | 14 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 15 褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化物微量 | 16 褐色 | ロームブロック多量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化物微量 | 17 明褐色 | ロームブロック多量 |
| 9 にぶい褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片 9 点（鉢 8，挿鉢 1），陶器片 1 点（碗），石器 2 点（砥石），木製品 3 点（椀 1，不明 2）のほか、縄文土器片 4 点（深鉢），土師器片 8 点（坏 3，甕 5），須恵器片 2 点（坏，長頸瓶），石製品 2 点（板碑），鉄滓 1 点（164.7 g）が、覆土中から出土している。W1 は、覆土最下層から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、19 世紀後半と考えられる第 136 号土坑との重複関係から、それ以前の江戸時代と考えられる。

第 6 号井戸跡出土遺物観察表（第 124 図）

番号	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W1	漆碗	[14.0]	(6.6)	-	(45.51)	ブナ	漆塗り 花カ	覆土最下層	30% PL36

第 7 号井戸跡（第 125 図）

位置 調査区東部の B 5 i4 区，標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 3 号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認面は長径 1.23 m，短径 1.02 m の楕円形で、長径方向は N - 7° - E である。確認面からの深さは 372cm である。上部は、深さ 104cm まで円筒状を呈し、それ以下の中部と下部が張り出している。張り出し部は、壁が崩落したことによるものとみられる。底面はほぼ平坦で、壁から湧水が認められた。

覆土 24 層に分層できる。第 24 層は壁の崩落土である。第 1～23 層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

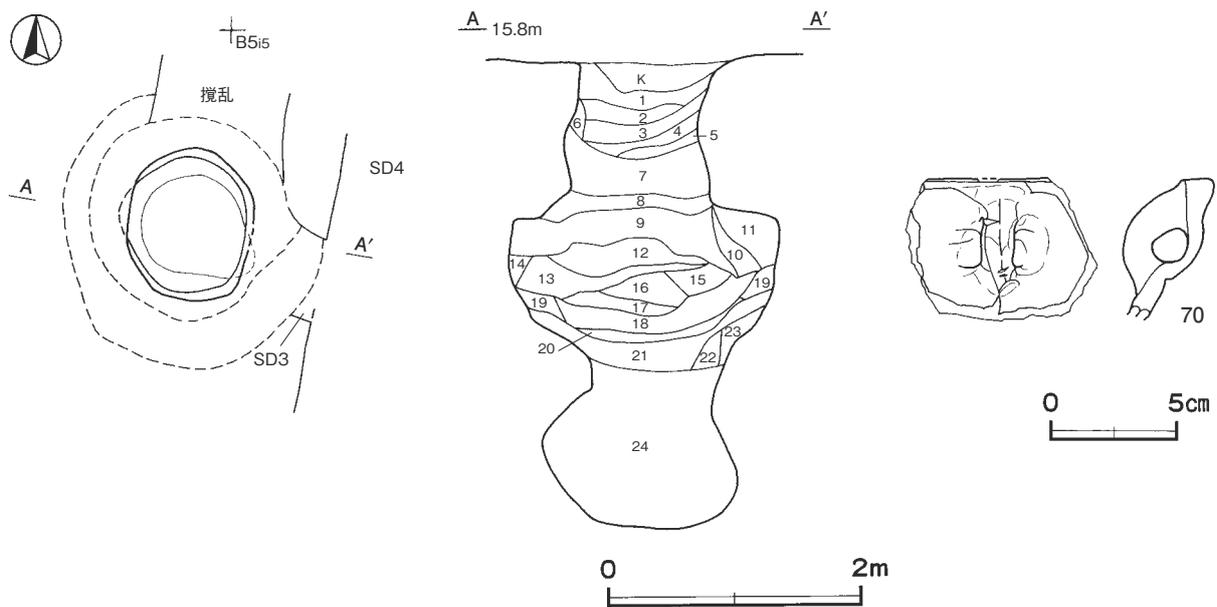
土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|---------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック中量，ロームブロック微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量，粘土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック少量，ロームブロック微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック多量，粘土ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 11 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 | 12 極暗褐色 | ロームブロック中量，粘土ブロック少量 |
| 6 褐色 | ロームブロック少量 | 13 褐色 | 粘土ブロック多量，ロームブロック微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック中量，粘土ブロック微量 | 14 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化物微量 |

- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|-------------------------|
| 15 極暗褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 20 黒褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 16 にぶい褐色 | 粘土ブロック多量, ロームブロック少量 | 21 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 17 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 22 極暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 18 極暗褐色 | 粘土ブロック多量, ロームブロック・炭化物微量 | 23 にぶい褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 19 褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 | 24 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量, ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師質土器片6点(小皿1, 焙烙4, 鉢1), 磁器片1点(碗)のほか, 須恵器片1点(甕)が, 覆土中から出土している。70は, 覆土中から出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から江戸時代と考えられる。



第125図 第7号井戸跡実測図

第7号井戸跡出土遺物観察表(第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
70	土師質土器	焙烙	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内耳1か所残存 外・内面ナデ	覆土中	5%

第8号井戸跡(第126・127図)

位置 調査区東部のB5j4区, 標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第5号方形竪穴遺構を掘り込み, 第183号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認面は長径3.02m, 短径2.53mの不整楕円形で, 長径方向はN-25°-Eである。確認面からの深さは373cmである。上部は, 深さ120cmまでほぼ円筒状を呈し, 中部が張り出し, 底部へと向かってすぼまっている。張り出し部は, 壁が崩落したことによるものとみられる。底部は皿状で, 壁から湧水が認められた。

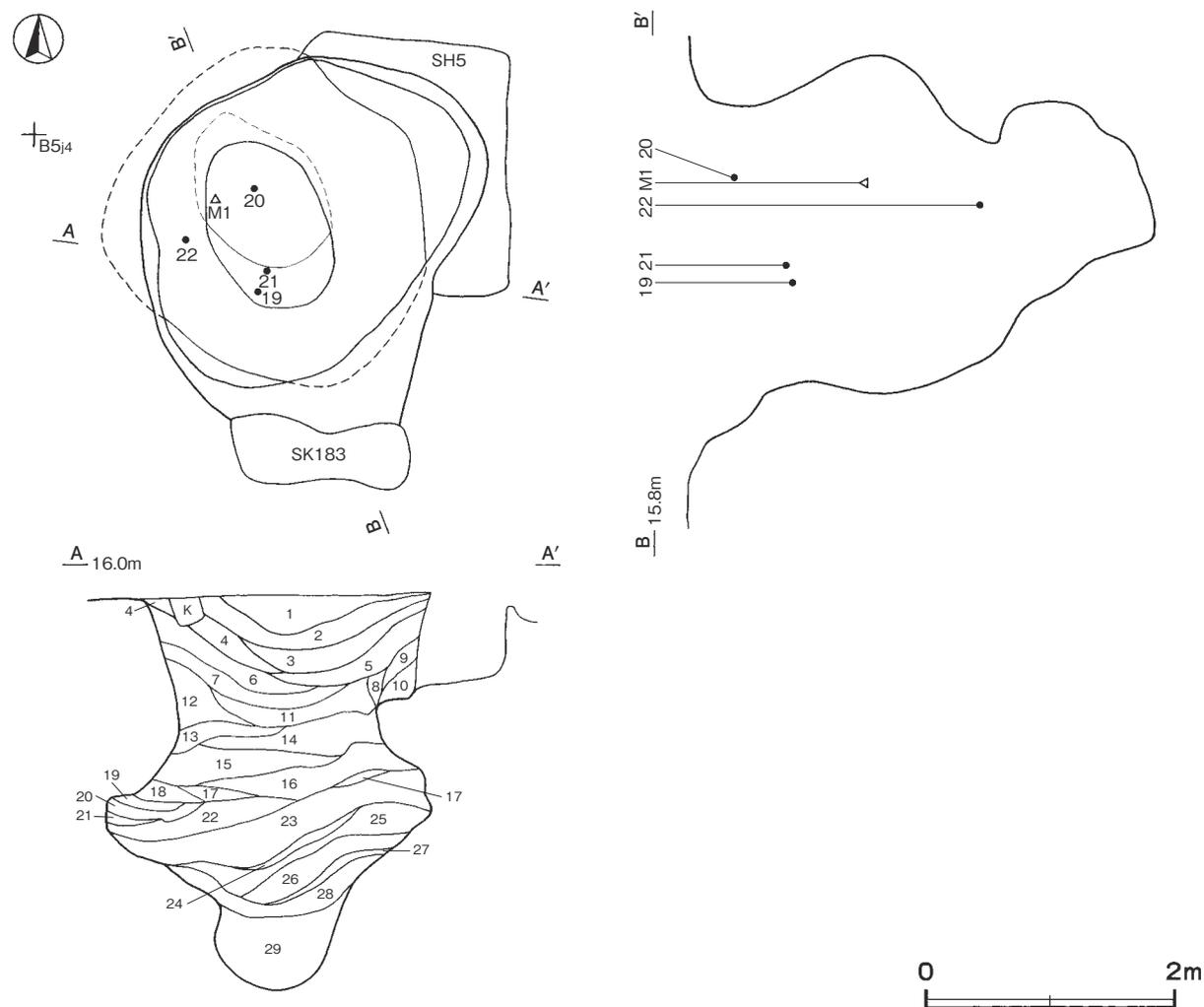
覆土 29層に分層できる。第29層は壁の崩落土である。第1~28層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

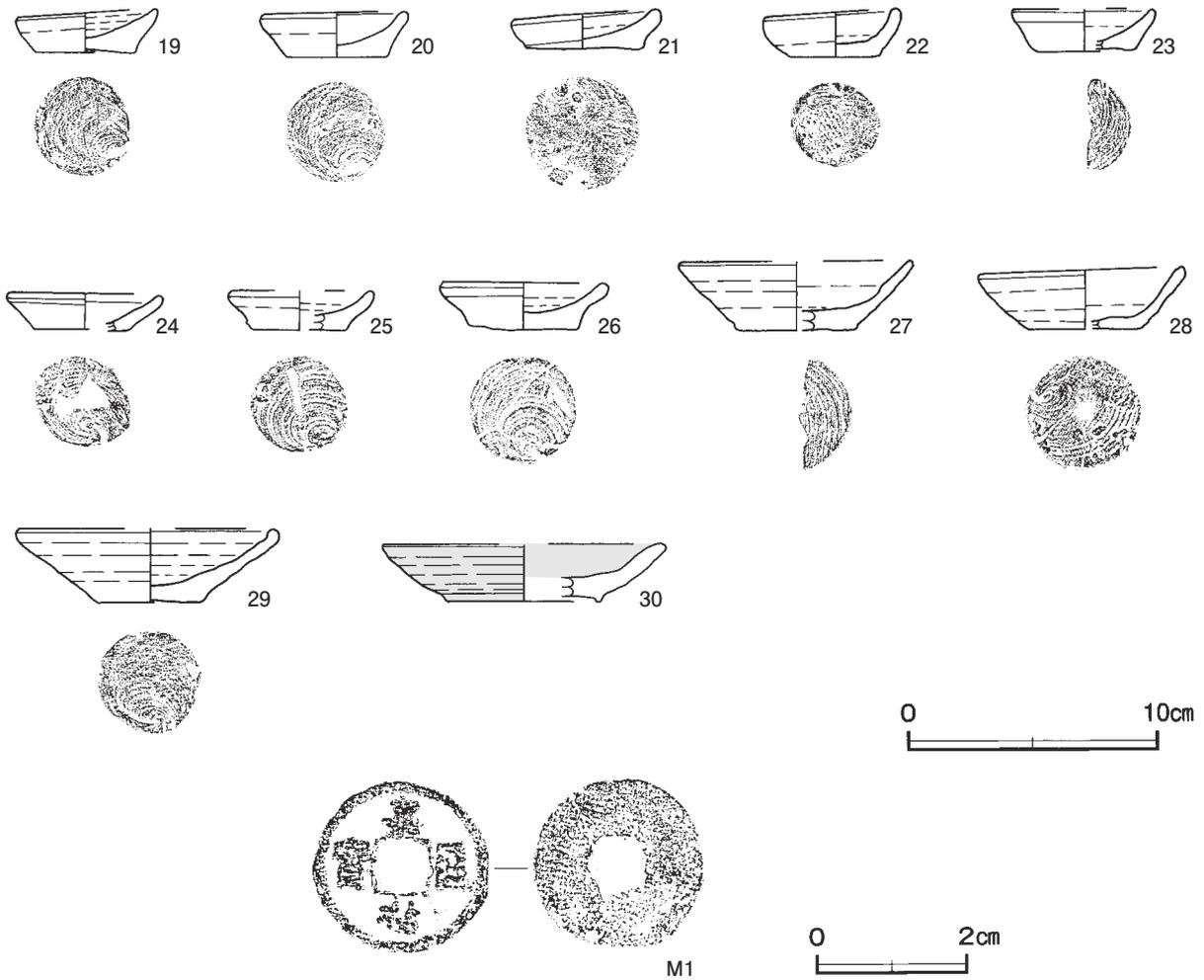
- | | | | |
|----------|------------------------|----------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 16 におい褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 17 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 18 におい褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 19 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック微量 | 20 暗褐色 | ロームブロック・細砂中量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 21 暗褐色 | ロームブロック少量, 細砂微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 22 におい褐色 | 粘土ブロック多量, ロームブロック微量 |
| 8 暗褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 23 極暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 9 暗褐色 | ロームブロック少量 | 24 褐色 | ロームブロック微量 |
| 10 褐色 | ロームブロック多量 | 25 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 11 暗褐色 | ロームブロック中量 | 26 極暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 12 極暗褐色 | ロームブロック少量 | 27 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 13 暗褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 | 28 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 14 におい褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 29 褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック・細砂少量 |
| 15 褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片 63 点 (小皿 43, 焙烙 20), 陶器片 7 点 (皿 4, 挿鉢 3), 磁器片 1 点 (碗), 石器 1 点 (砥石), 銅製品 2 点 (煙管, 不明), 銭貨 1 点 (嘉祐通寶), 木製品 3 点 (不明) のほか, 土師器片 17 点 (坏 3, 甕 14), 須恵器片 2 点 (坏, 甕) が, 覆土中から出土している。土器は覆土上層から中層にかけて出土した完形品が多いことから, 埋め戻す際に混入したか, 投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から 17 世紀中葉から後葉と考えられる。



第 126 図 第 8 号井戸跡実測図



第 127 図 第 8 号井戸跡出土遺物実測図

第 8 号井戸跡出土遺物観察表 (第 127 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
19	土師質土器	小皿	5.5	1.8	3.9	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	100% PL29
20	土師質土器	小皿	5.6	1.9	4.0	長石・石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	100% PL29
21	土師質土器	小皿	5.7	1.6	4.7	長石・石英	黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土上層	100% PL29
22	土師質土器	小皿	5.1	2.0	3.6	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り後ナデ 外・内面ロクロナデ	覆土下層	100% PL29
23	土師質土器	小皿	[5.5]	1.7	[4.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	30%
24	土師質土器	小皿	6.0	1.5	[3.8]	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	80% PL29
25	土師質土器	小皿	[5.6]	1.6	[3.8]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	70% PL29
26	土師質土器	小皿	6.3	1.9	4.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	80% PL29
27	土師質土器	小皿	[9.4]	2.8	[4.6]	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	20%
28	土師質土器	小皿	8.1	2.6	[4.4]	長石・石英	明赤褐	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	70% PL30
29	土師質土器	小皿	[10.0]	2.0	4.2	長石・石英・角閃石	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	覆土中	60% PL30

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
30	陶器	皿	[11.2]	2.3	[6.0]	長石・灰白	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	25%

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1	銭貨	嘉祐通寶	2.37	0.74	1.99	銅	1056	北宋銭	覆土中層	PL36

第11号井戸跡 (第128図)

位置 調査区西部のB4j0区, 標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

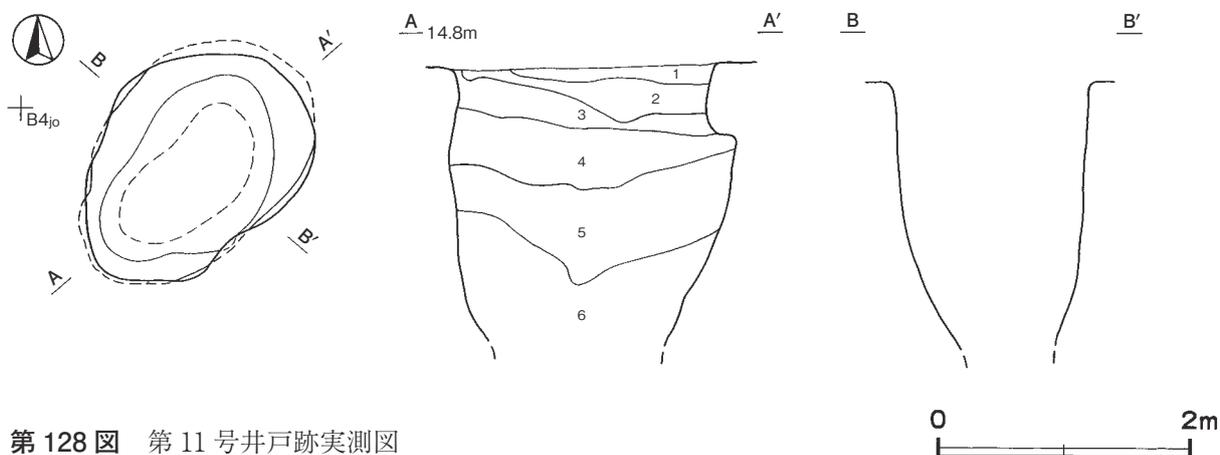
規模と形状 長径2.10m, 短径1.58mの楕円形で, 長径方向はN-39°-Eである。確認面から深さ213cmまで円筒状に掘り込まれていることを確認した時点で, 崩落のおそれがあることから以下の調査を断念した。そのため, 下部の構造は不明である。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 4 褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 5 灰褐色 ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 6 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |

所見 時期は, 伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが, 江戸時代と考えられる第2~4号井戸跡との位置関係から, ほぼ同時期の可能性がある。



第128図 第11号井戸跡実測図

表16 江戸時代井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	C4a2	-	円形	1.56 × 1.43	(172)	-	直立	人為	土師質土器, 陶器, 銅製品	
2	B4i9	-	円形	0.81 × 0.80	(121)	-	直立	人為		
3	B4j8	-	円形	0.99 × 0.95	(126)	-	直立	人為	土師質土器	
4	B4h0	-	円形	0.89 × 0.87	(118)	-	直立	人為	土師質土器, 陶器, 磁器	
5	B4j5	-	円形	0.75 × 0.75	(133)	-	直立	人為	土師質土器	
6	B5h5	-	円形	1.21 × 1.16	402	平坦	直立内傾	人為	土師質土器, 陶器, 石器, 木製品	本跡→SK136
7	B5i4	N-7°-E	楕円形	1.23 × 1.02	372	平坦	直立内傾	人為	土師質土器, 磁器	SD3→本跡
8	B5j4	N-25°-E	不整楕円形	3.02 × 2.53	373	皿状	直立内傾	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 銅製品, 銭貨, 木製品	SH5→本跡 →SK183
11	B4j0	N-39°-E	楕円形	2.10 × 1.58	(213)	-	直立	人為		

(3) 粘土貼土坑

第1号粘土貼土坑 (第129図)

位置 調査区西部のB4j1区, 標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

位置 調査区西部のB 4j1区，標高14 mほどの平坦な台地上に位置している。

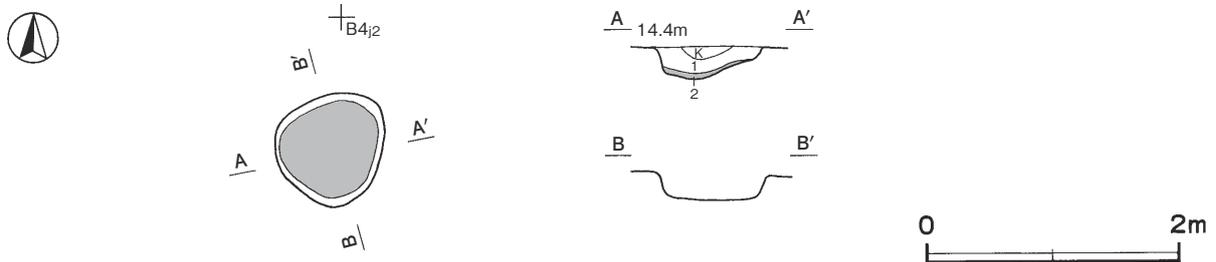
規模と形状 掘方の規模は，長径0.92 m，短径0.86 mの楕円形で，長径方向はN - 42° - Eである。深さは28 cmである。底面に4～6 cmの厚さで粘土が貼られている。確認面から粘土の上面までの深さは22 cmである。底面は東壁から西側の平坦部へと向かって下がっており，壁は外傾している。

覆土 単一層である。第1層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。第2層は底面に貼られた粘土である。

土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量，ロームブロック微量 2 灰白色 粘土ブロック多量

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる第3号粘土貼土坑との位置関係から，ほぼ同時期の可能性がある。性格は，構造及び周辺の遺構配置から水溜めの可能性があるが，詳細は不明である。



第129図 第1号粘土貼土坑実測図

第2号粘土貼土坑（第130図）

位置 調査区西部のC 3b0区，標高14 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 掘方の規模は，径1.0 mほどの円形で，深さは16 cmである。底面と壁面に4～16 cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は，径0.76 mほどの円形で，深さは8 cmである。底面は平坦で，壁はほぼ直立している。

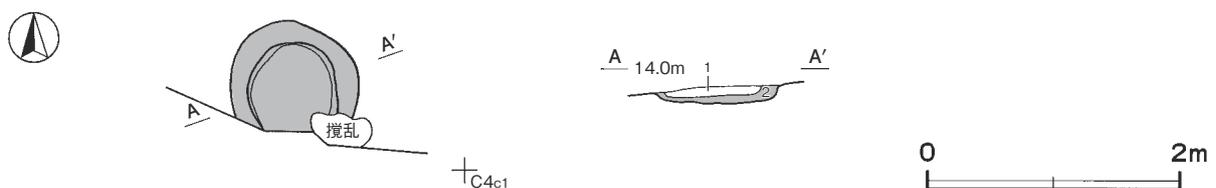
覆土 単一層である。第1層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。第2層は底面と壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量，ロームブロック微量 2 灰白色 粘土ブロック多量

遺物出土状況 陶器片2点（碗，鉢）が，覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器が細片のため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる。性格は，構造及び周辺の遺構配置から水溜めの可能性があるが，詳細は不明である。



第130図 第2号粘土貼土坑実測図

第3号粘土貼土坑（第131図）

位置 調査区西部のB4j2区、標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第33号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は、径1.0mほどの円形で、深さは56cmである。底面と壁面に4～28cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は、径0.8mほどの円形で、深さは28cmである。底面は皿状で、壁はほぼ直立している。底面の壁際で、径0.88m、幅8cm、深さ4cmほどの円形の溝を確認した。

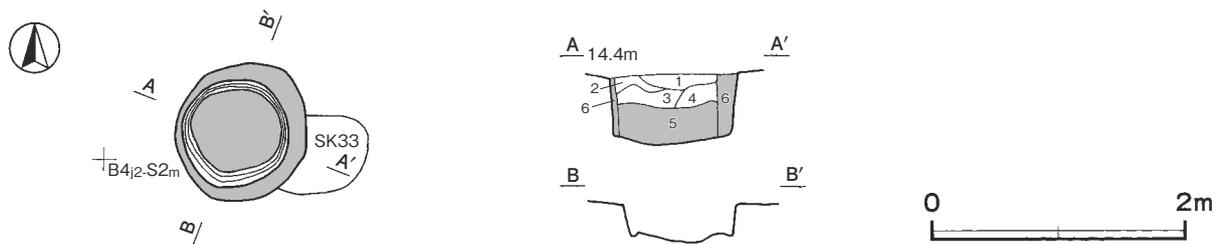
覆土 4層に分層できる。第1～4層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第5・6層は底面と壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・粘土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 5 灰褐色 | 粘土ブロック多量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 | 6 灰白色 | 粘土ブロック多量 |

遺物出土状況 磁器片2点（碗）、石製品7点（砥石）が、覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は、構造から水溜めの可能性があり、底面で確認した円形の溝は、掘えられていた桶の底部の痕跡と考えられる。



第131図 第3号粘土貼土坑実測図

第4号粘土貼土坑（第132図）

位置 調査区西部のC4a4区、標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第8号柱穴列を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は、径1.35mほどの円形で、深さは52cmである。底面北部と壁面に4～32cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は、径0.88mほどの円形で、深さは48cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

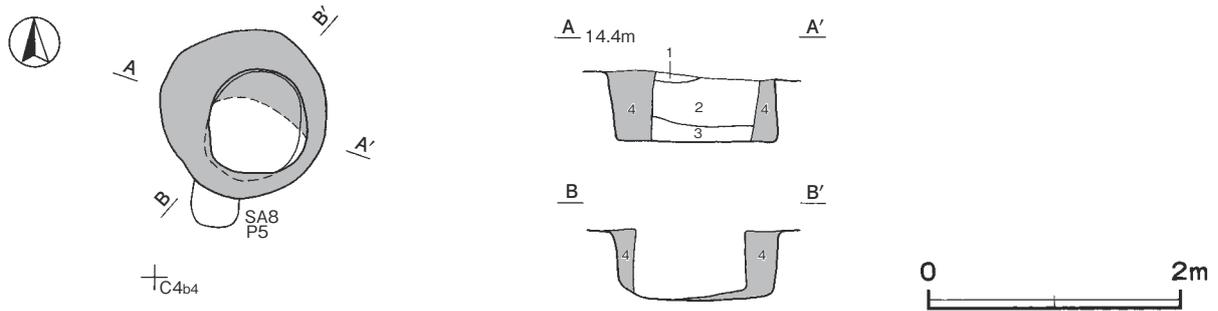
覆土 3層に分層できる。第1～3層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第4層は底面北部と壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|--------|---------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 3 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 4 灰白色 | 粘土ブロック多量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点（甕）、鉄製品1点（不明）が、覆土中から出土している。遺物は、細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は、構造及び第2号掘立柱建物跡との位置関係から、水溜めの可能性がある。



第132図 第4号粘土貼土坑実測図

第5号粘土貼土坑 (第133図)

位置 調査区西部のC 4 d0区、標高14 mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、掘方の規模は、東西径は1.48 mで、南北径は0.64 mしか確認できなかった。平面形は円形ないし楕円形と推測できる。深さは32cmである。確認できた底面と壁面に8～12cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は、東西径は1.16 mで、南北径は0.44 mしか確認できなかった。平面形は円形ないし楕円形と推測でき、深さは24cmである。底面は皿状で、壁は内傾している。底面の壁際で、径1.20 m、幅8 cm、深さ4 cmの円形と推測できる溝を確認した。

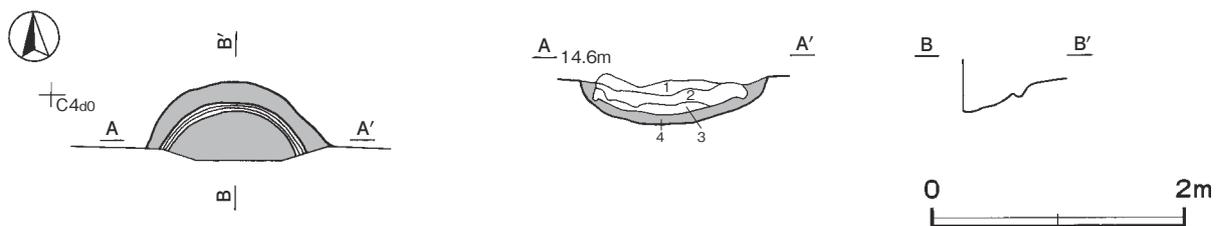
覆土 3層に分層できる。第1～3層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第4層は底面と壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 4 黄灰色 粘土ブロック中量、ロームブロック微量 |

遺物出土状況 陶器片1点(甕)、銅製品1点(不明)が、覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は、構造から水溜めの可能性があり、底面で確認した円形と推測できる溝は、据えられていた桶の底部の痕跡と考えられる。



第133図 第5号粘土貼土坑実測図

第6号粘土貼土坑 (第134図)

位置 調査区東部のB 5 i9区、標高16 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第77号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は、径1.36 mほどの円形で、深さは56cmである。底面と壁面に6～12cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は、径1.08 mほどの円形で、深さは44cmである。底面は平坦で、壁は内傾している。

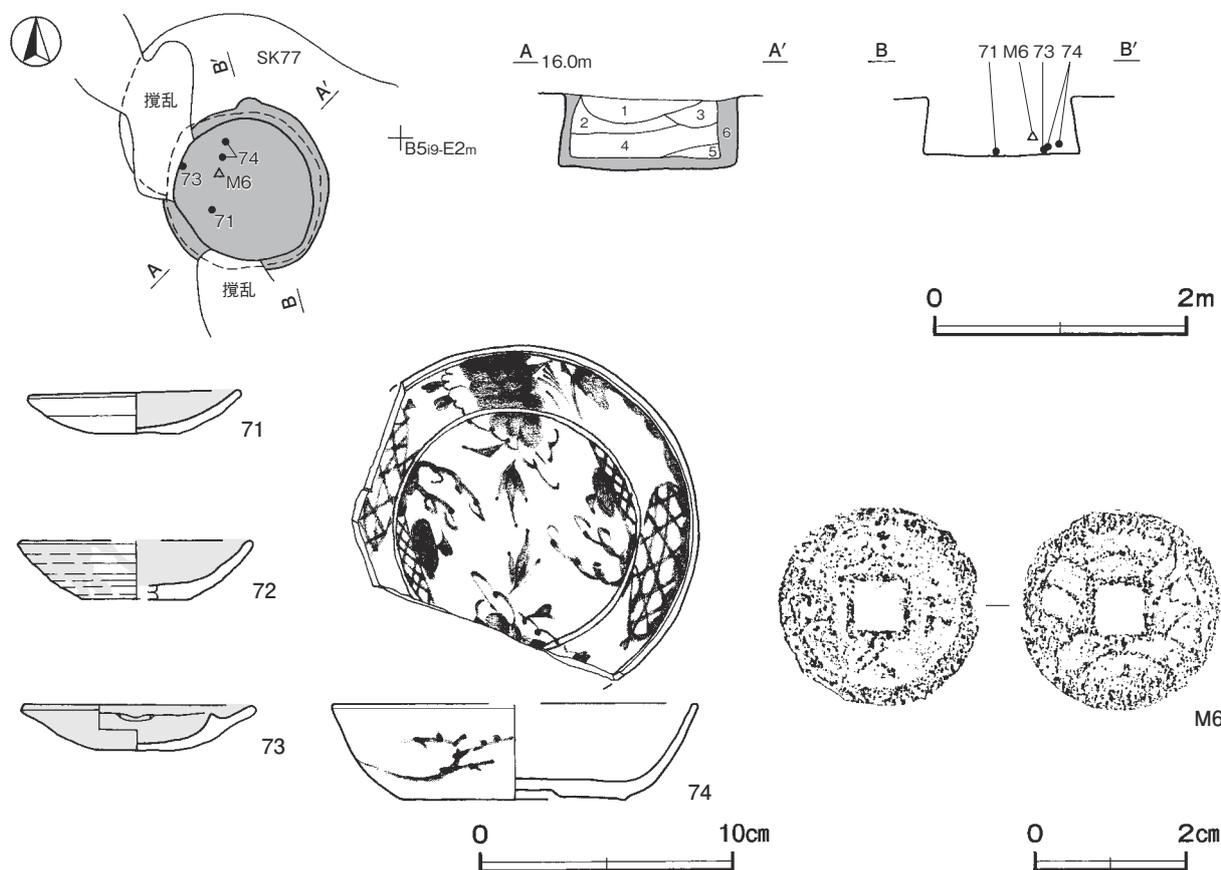
覆土 5層に分層できる。第1～5層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第6層は底面と壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック・炭化物微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 | 5 暗褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化物少量, ロームブロック・粘土ブロック微量 | 6 灰白色 | 粘土ブロック多量 |

遺物出土状況 土師質土器片 21点 (焙烙 4, 鉢 17), 陶器片 12点 (皿 1, 灯明皿 1, 灯明受皿 1, 挿鉢 1, ちりり 8), 磁器片 30点 (碗 25, 蓋 1, 皿 1, 火入れ 1, 土瓶 1, 戸車 1), 石製品 8点 (砥石), 鉄製品 3点 (釘 1, 不明 2), 銅製品 1点 (煙管), 銭貨 2点 (文久永寶), 鉄滓 1点 (28.6 g) が, 覆土中から出土している。遺物は覆土下層から底面にかけて多く出土していることから, 埋め戻す前に廃棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土遺物から 19世紀中葉以降と考えられる。性格は, 構造から水溜めの可能性があるが, 遺物出土状況から最終的にはゴミ捨て場として利用されたと考えられる。



第 134 図 第 6 号粘土貼土坑・出土遺物実測図

第 6 号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第 134 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
71	陶器	皿	8.2	1.7	3.6	長石・浅黄	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土下層	95% PL33
72	陶器	灯明皿	[9.0]	2.3	[4.2]	長石・明赤褐	外・内面ロクロナデ	透明	産地不明	覆土中	25%
73	陶器	灯明受皿	9.0	1.8	3.1	長石・にぶい赤褐	底部回転糸切り離し 外・内面ロクロナデ	透明	産地不明	覆土下層	80% PL33
74	磁器	皿	[14.6]	3.8	8.6	緻密・明緑灰	染付 唐草文	透明	肥前系	覆土下層	70% PL34

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M6	銭貨	文久永寶	27.3	6.3	2.78	銅	1863	草文 背十一波	覆土下層	PL36

第7号粘土貼土坑（第135図）

位置 調査区東部のB5i7区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第128号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分を第128号土坑に掘り込まれているため、掘方の規模は、東西径は1.64mで、南北径は1.40mしか確認できなかった。平面形は円形ないし楕円形と推測でき、深さは60cmである。東壁の一部を除いて底面と壁面に8～24cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は、東西径は1.12mで、南北径は0.96mしか確認できなかった。平面形は円形ないし楕円形と推測でき、深さは48cmである。底面はほぼ平坦で、北壁は内傾し、その他は外傾している。

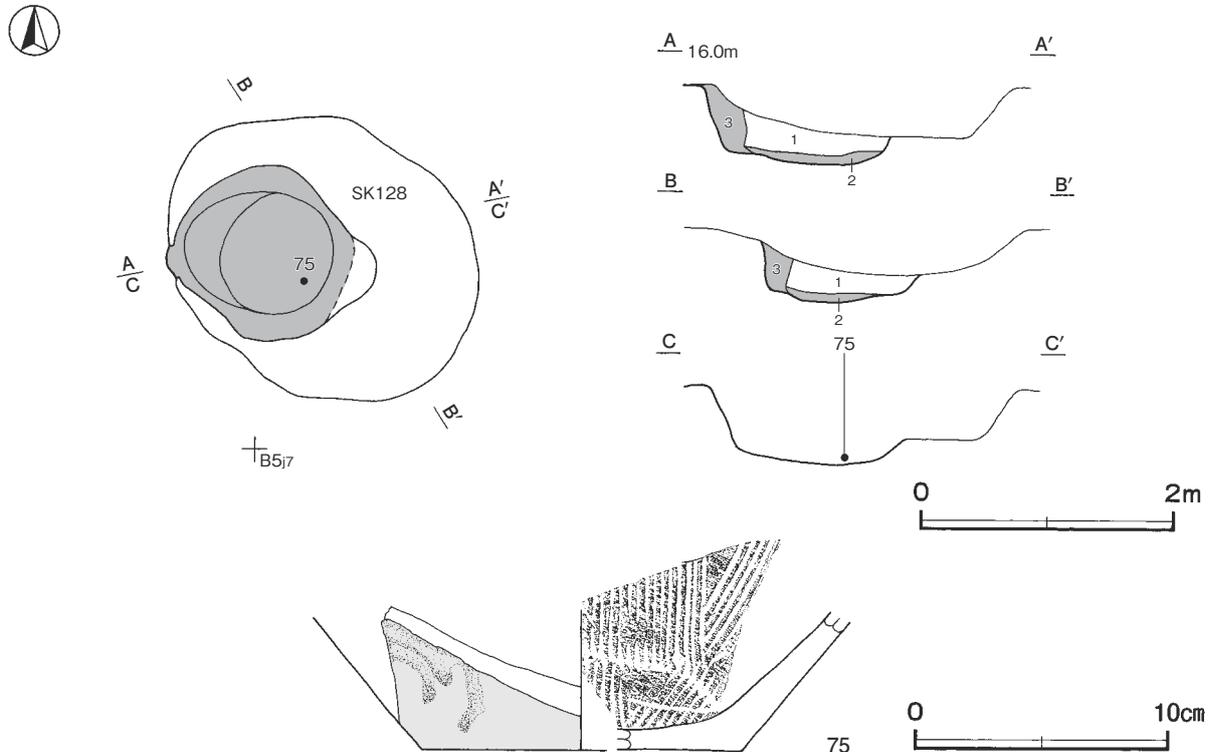
覆土 単一層である。第1層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第2・3層は底面と壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 3 灰白色 | 粘土ブロック多量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 陶器片1点（播鉢）が、覆土下層から出土している。土器は覆土下層から出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器及び第128号土坑との重複関係から、19世紀前半と考えられる。性格は、構造から水溜めの可能性があるが、詳細は不明である。



第135図 第7号粘土貼土坑・出土遺物実測図

第7号粘土貼土坑出土遺物観察表（第135図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
75	陶器	播鉢	-	(6.6)	[12.6]	長石・灰白	内面揺り目	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中	5% PL34

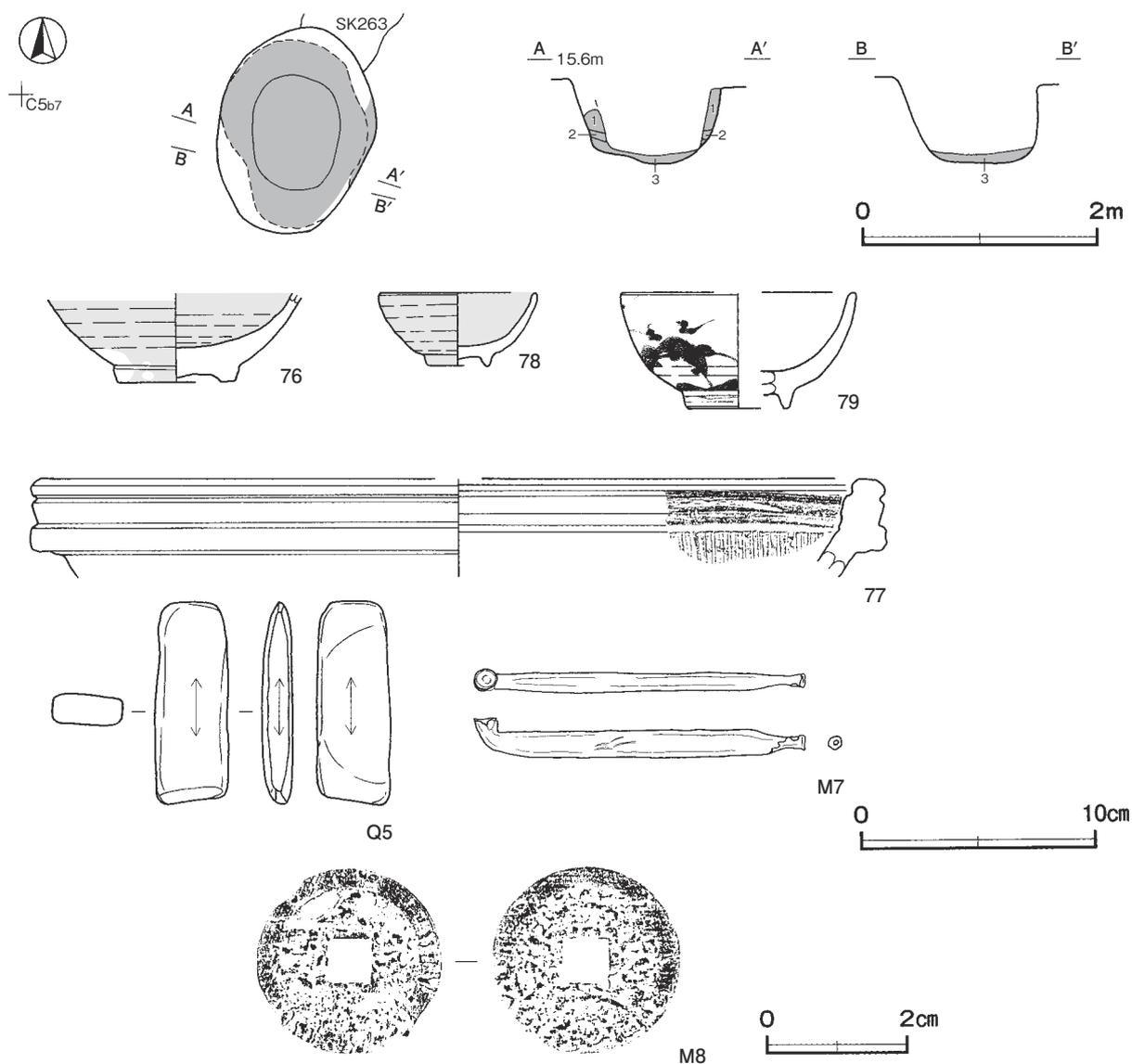
第8号粘土貼土坑（第136図）

位置 調査区東部のC5b7区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第263号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は，長径1.80m，短径1.24mの楕円形で，長径方向はN-11°-Eである。深さは68cmである。底面と壁面に8~16cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は，長径1.56m，短径0.92mの楕円形で，深さは60cmである。底面はほぼ平坦で，壁は外傾している。

覆土 第1~3層は底面と壁面に貼られた粘土である。



第136図 第8号粘土貼土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 灰 褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック・炭化物微量 3 灰 白色 粘土ブロック多量
 2 灰 褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック微量

遺物出土状況 土師質土器片 28 点 (焙烙 26, 焜炉 2), 陶器片 12 点 (碗 1, 皿 1, 灯明皿 1, 鉢 3, 播鉢 3, 土瓶 3), 磁器片 24 点 (碗 22, 仏飯器 2), 石製品 6 点 (砥石 4, 火打石 2), 銅製品 3 点 (煙管 2, 不明 1), 銭貨 4 点 (文久永寶 1, 不明 3) のほか, 石製品 5 点 (板碑), 鉄製品 4 点 (不明), 剥片 3 点 が, 覆土中から出土している。遺物は覆土中から出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土遺物から 19 世紀後半と考えられる。性格は, ほぼ同時期に機能していたと考えられる第 5・6 号掘立柱建物跡との位置関係から, 居住域に伴う水溜めの可能性があるが, 遺物出土状況から最終的にはゴミ捨て場として利用されたとみられる。

第 8 号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第 136 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
76	陶器	碗	-	(3.8)	5.0	長石・オリブ黄	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	50%
77	陶器	播鉢	[35.2]	(4.2)	-	長石・赤褐	内面播り目	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中	10%
78	磁器	碗	6.6	3.2	2.6	緻密・灰白	外・内面ロクロナデ	透明	肥前系	覆土中	60% PL34
79	磁器	碗	[9.8]	5.0	[4.2]	緻密・明緑灰	染付 草花文	透明	肥前系	覆土中	25% PL34

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	砥石	8.7	3.1	1.3	59.3	凝灰岩	砥面 3 面	覆土中	

番号	器種	長さ	火皿径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	煙管	14.2	1.0	0.6	30.54	銅	雁首部と吸口部一体	覆土中	PL36

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M8	銭貨	文久永寶	2.7	0.6	3.58	銅	1863	背十一文カ	覆土中	

第 9 号粘土貼土坑 (第 137 図)

位置 調査区東部の C 5 b8 区, 標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 12 号炉に掘り込まれ, 第 430 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は, 径 1.20 m ほどの円形で, 深さは 66cm である。壁面に 8~12cm の厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は, 径 1.0 m ほどの円形で, 深さは 66cm である。底面は皿状で, 壁はほぼ直立している。

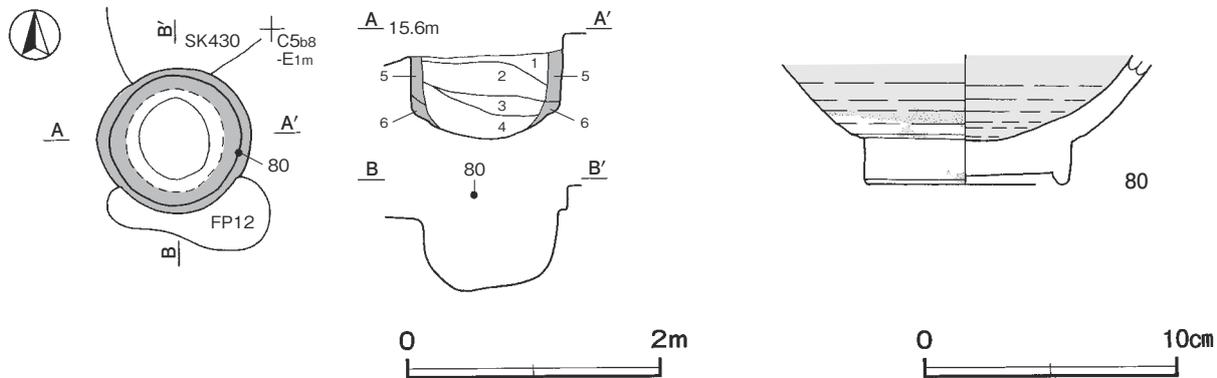
覆土 4 層に分層できる。第 1~4 層はロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。第 5・6 層は壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量 4 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
 2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量 5 灰褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量
 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量 6 褐灰色 粘土ブロック多量

遺物出土状況 陶器片 2 点 (碗, 鉢) が, 覆土中から出土している。80 は, 覆土上層から出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器及び第8号粘土貼土坑との位置関係から19世紀後半と考えられる。性格は、ほぼ同時期に機能していたと考えられる第5・6号掘立柱建物跡との位置関係から、居住域に伴う水溜めの可能性がある。



第137図 第9号粘土貼土坑・出土遺物実測図

第9号粘土貼土坑出土遺物観察表（第137図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
80	陶器	鉢	-	(5.2)	7.9	長石・灰白	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土上層	30% PL34

第10号粘土貼土坑（第138図）

位置 調査区西部のC4a3区、標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号ピット群を掘り込んでいる。

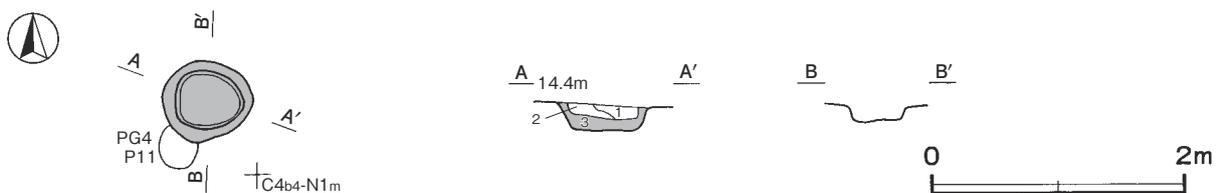
規模と形状 掘方の規模は、径0.72mほどの円形で、深さは20cmである。底面と壁面に8～12cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は、径0.58mほどの円形で、深さは8cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

覆土 2層に分層できる。第1・2層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第3層は底面と壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 3 灰白色 粘土ブロック多量

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる第4号粘土貼土坑との位置関係から、ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第138図 第10号粘土貼土坑実測図

表 17 江戸時代粘土貼土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	粘土の内側				掘方			覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)	底面	壁面	長径×短径 (m)	深さ (cm)	断面			
1	B 4 j1	N - 42° - E	楕円形	-	22	傾斜	外傾	0.92 × 0.86	28	U字状	人為		
2	C 3 b0	-	円形	0.76 × 0.76	8	平坦	ほぼ直立	1.00 × 1.00	16	U字状	人為	陶器	
3	B 4 j2	-	円形	0.80 × 0.80	28	皿状	ほぼ直立	1.00 × 1.00	56	U字状	人為	磁器, 石製品	SK33 → 本跡
4	C 4 a4	-	円形	0.88 × 0.88	48	平坦	直立	1.35 × 1.35	52	U字状	人為	土師質土器, 鉄製品	SA 8 → 本跡
5	C 4 d0	-	[円形・楕円形]	1.16 × (0.44)	24	皿状	内傾	1.48 × (0.64)	32	U字状	人為	陶器, 銅製品	
6	B 5 i9	-	円形	1.16 × 1.16	44	平坦	内傾	1.36 × 1.36	56	U字状	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石製品, 鉄製品, 銅製品, 銭貨, 鉄滓	SK77 → 本跡
7	B 5 i7	-	[円形・楕円形]	(1.12) × (0.96)	48	ほぼ平坦	直立外傾	(1.64) × (1.40)	60	U字状	人為	陶器	本跡 → SK128
8	C 5 b7	N - 11° - E	楕円形	1.56 × 0.92	60	ほぼ平坦	外傾	1.80 × 1.24	68	U字状	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 銅製品, 銭貨	SK263 → 本跡
9	C 5 b8	-	円形	1.00 × 1.00	66	皿状	ほぼ直立	1.20 × 1.20	66	U字状	人為	陶器	SK430 → 本跡 → FP12
10	C 4 a3	-	円形	0.58 × 0.58	8	平坦	ほぼ直立	0.72 × 0.72	20	U字状	人為		PG 4 → 本跡

(4) 土坑

第 1 号土坑 (第 139 図)

位置 調査区西部の B 3 h9 区, 標高 14 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 1.26 m, 短軸 1.00 m の長方形で, 長軸方向は N - 70° - E である。深さは 18 cm である。底面は平坦で, 壁は緩やかに立ち上がっている。

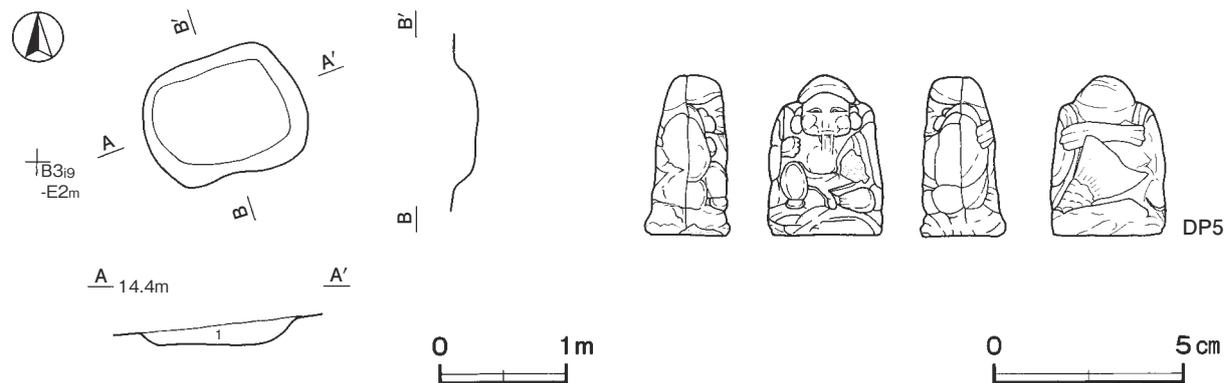
覆土 単一層である。ロームブロックが多く含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況 土師質土器片 2 点 (鉢), 土製品 1 点 (泥人形) が, 覆土中から出土している。遺物は覆土中から出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土遺物から江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第 139 図 第 1 号土坑・出土遺物実測図

第 1 号土坑出土遺物観察表 (第 139 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 5	泥人形	4.3	3.0	2.3	26.20	長石・石英	橙色	恵比寿	覆土中	PL35

第7号土坑（第140図）

位置 調査区西部のC4b1区，標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため，東西径は1.82mで，南北径は1.13mしか確認できなかった。平面形は楕円形で，長径方向はN-87°-Eと推測できる。深さは50cmである。底面は平坦で，壁はほぼ直立している。

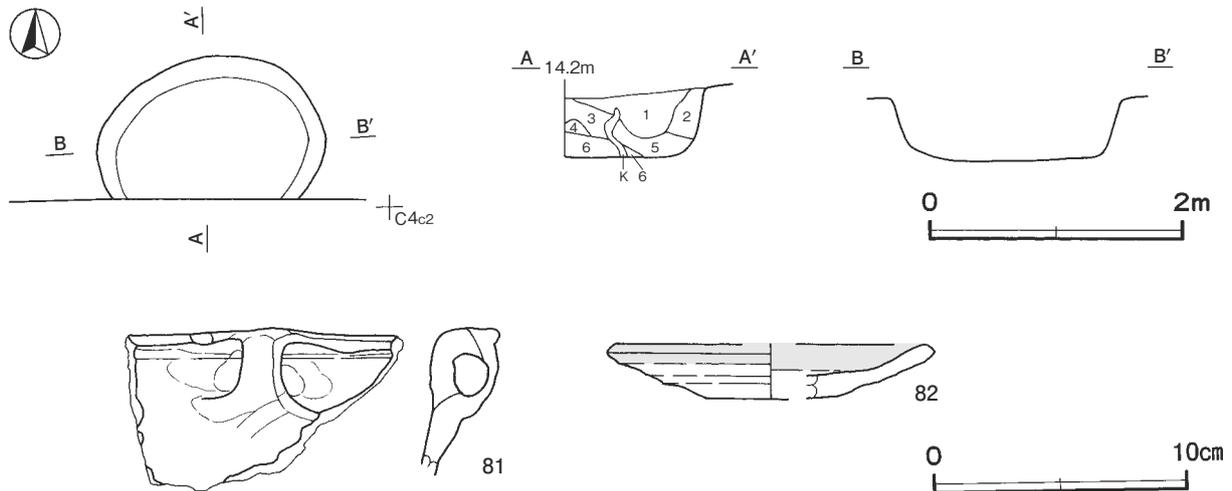
覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|--------|------------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 4 灰褐色 | ロームブロック中量，粘土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化物微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量，粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量，粘土ブロック微量 |

遺物出土状況 土師質土器片5点（鉢4，甕1），石器2点（砥石，石臼）のほか，縄文土器片3点（深鉢），土師器片2点（坏，高坏）が，覆土中から出土している。81・82は，覆土中から出土した破片であることから，埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は，出土土器から江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第140図 第7号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑出土遺物観察表（第140図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
81	土師質土器	焙烙	-	(5.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	内耳1か所残存 外・内面ナデ	覆土中	5%
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
82	陶器	皿	[12.4]	2.1	[5.0]	長石・にぶい黄橙	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	25%

第20号土坑（第141図）

位置 調査区西部のB4i2区，標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第30号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.42m，短径1.25mの楕円形で，長径方向はN-72°-Wである。深さは50cmである。底面は平坦で，壁は外傾している。

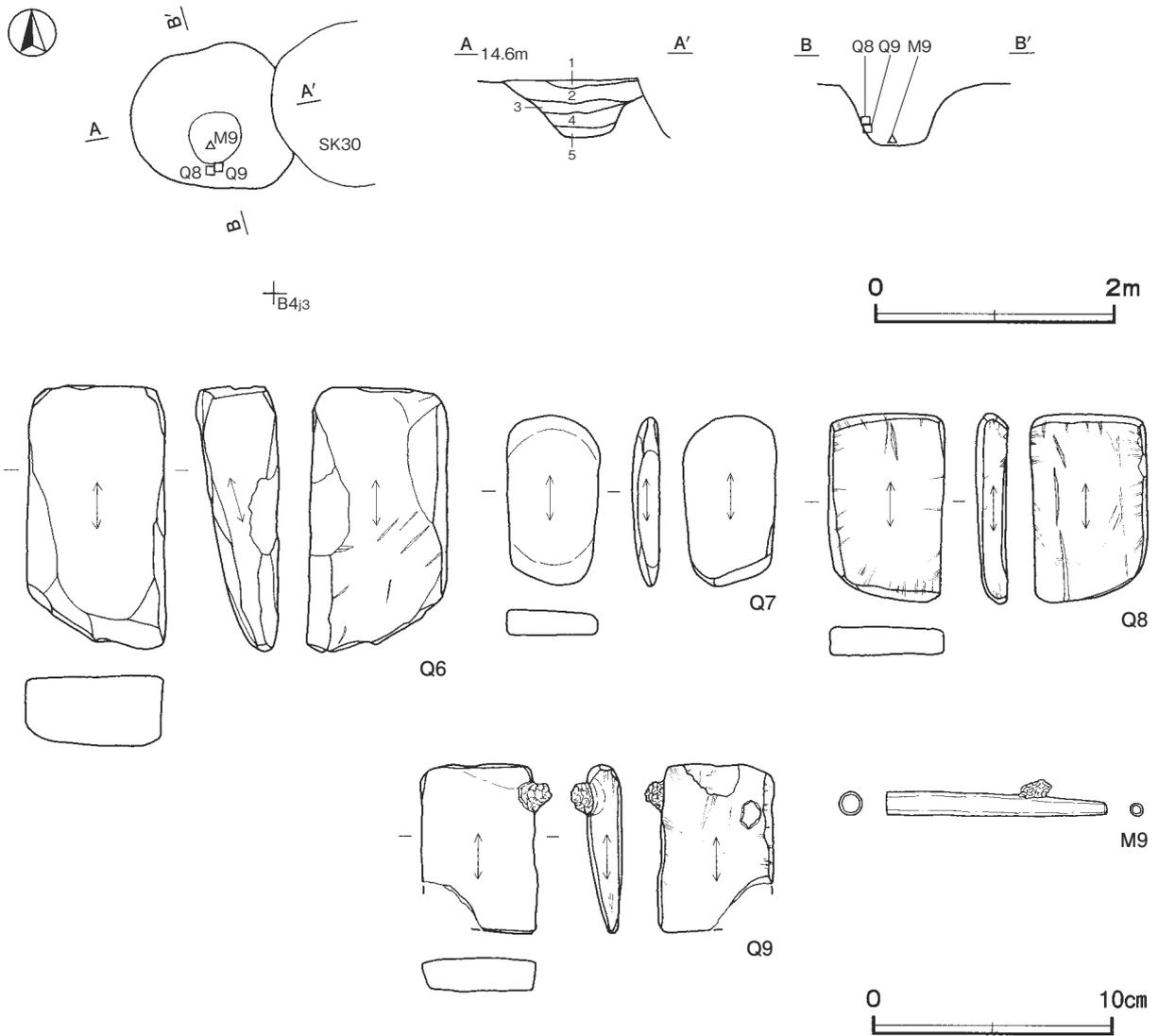
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(鉢), 陶器片1点(碗), 石器6点(砥石), 銅製品1点(煙管)のほか, 須恵器片1点(坏), 鉄製品1点(不明), 鉄滓1点(5.7g)が, 覆土中から出土している。遺物は覆土下層からまとまって出土したことから, 埋め戻す前に廃棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土遺物から江戸時代と考えられる。性格は, 遺物の出土状況からゴミ捨て場の可能性がある。



第141図 第20号土坑・出土遺物実測図

第20号土坑出土遺物観察表(第141図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	砥石	11.2	5.9	3.0	312.4	砂岩	砥面3面	覆土中	PL35
Q7	砥石	7.2	3.9	1.1	43.2	凝灰岩	砥面3面	覆土中	PL35
Q8	砥石	8.0	4.9	1.3	82.5	凝灰岩	砥面3面	覆土下層	PL35

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	砥石	7.2	4.9	1.5	(68.6)	凝灰岩	砥面3面 鉄附着	覆土下層	PL35

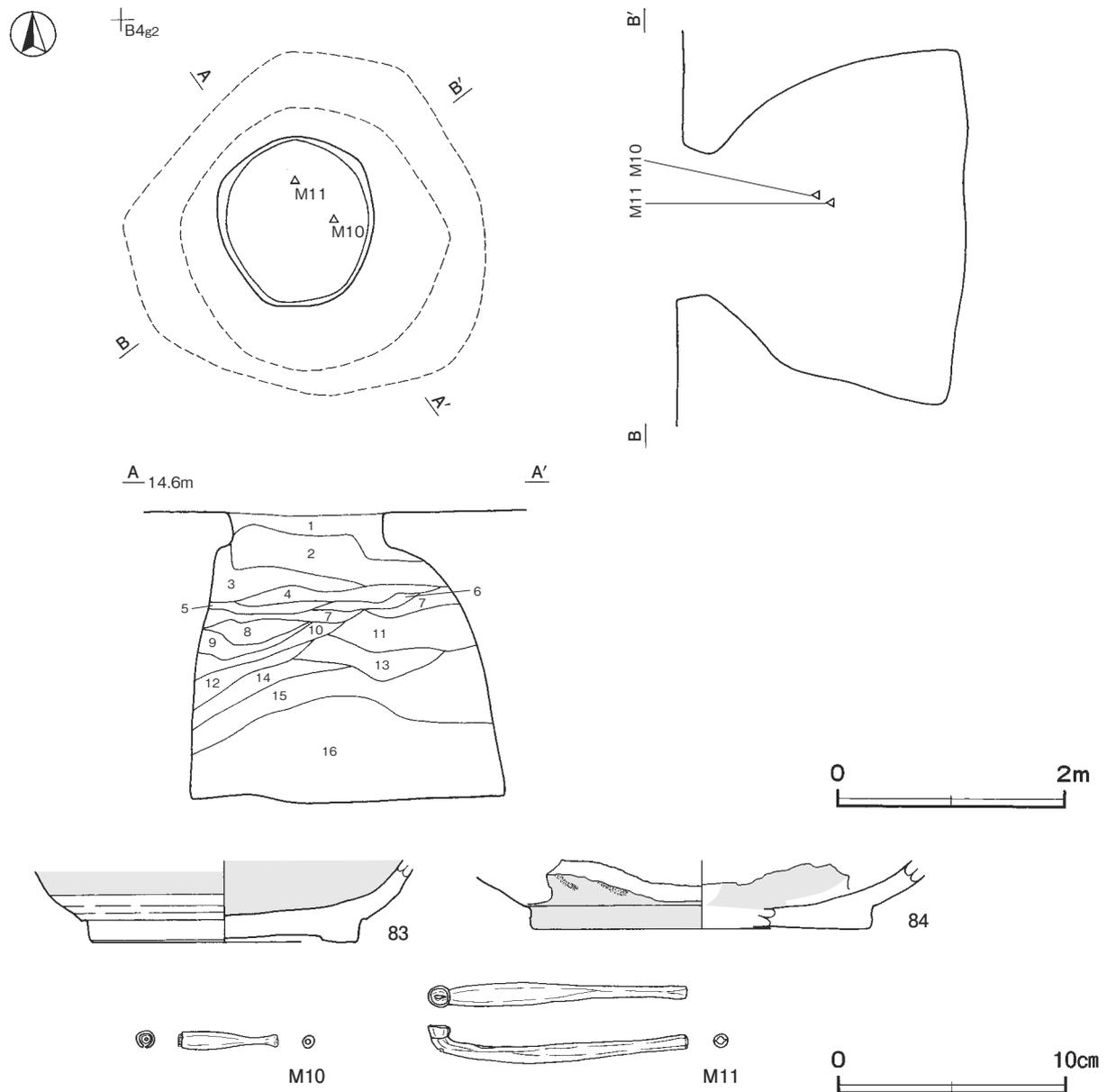
番号	器種	長さ	火皿径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M9	煙管	9.3	-	0.5	15.72	銅	吸口部 鉄附着	覆土下層	PL36

第23号土坑 (第142図)

位置 調査区西部のB4g2区、標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径3.16m、短径3.03mの不整円形である。深さは250cmで、底面はほぼ平坦である。壁は下部から内傾し、上位は直立している。

覆土 16層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。



第142図 第23号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 明褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 | 10 におい黄褐色 | ロームブロック多量, 粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック・炭化物微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 | 12 におい黄褐色 | ロームブロック多量, 粘土ブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 13 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 14 灰褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック微量 |
| 7 灰褐色 | ロームブロック少量 | 15 黒褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック微量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 16 灰褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(鉢), 陶器片3点(鉢), 銅製品2点(煙管)のほか, 土師器片4点(高坏1, 甕3)が, 覆土中から出土している。遺物は覆土中層から出土していることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土遺物から19世紀後半と考えられる。性格の特定は困難であるが, 遺構の形状から貯蔵目的の施設の可能性がある。

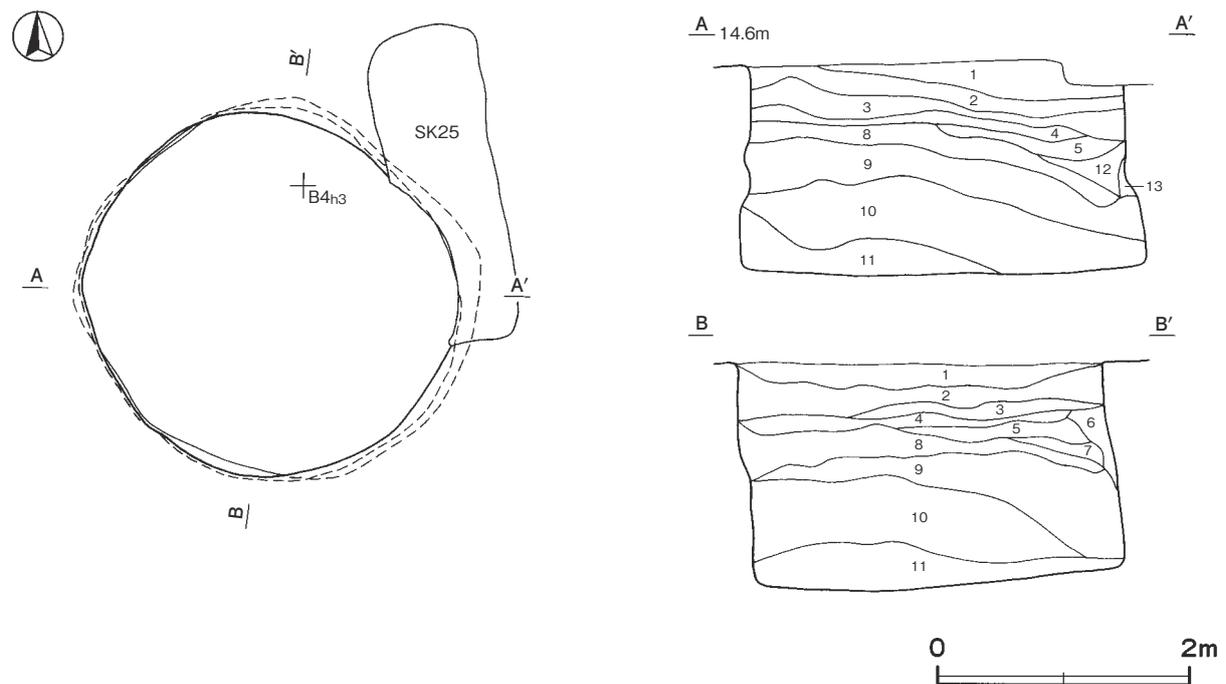
第23号土坑出土遺物観察表(第142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
83	陶器	鉢	-	(3.6)	[11.6]	長石・浅黄	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	10%
84	陶器	鉢	-	(3.0)	[14.9]	長石・灰白	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	5%

番号	器種	長さ	火皿径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M10	煙管	4.5	-	0.6	3.65	銅	吸口部	覆土中層	PL36
M11	煙管	11.4	1.55	0.5	8.90	銅	雁首部と吸口部一体	覆土中層	PL36

第24号土坑(第143図)

位置 調査区西部のB4h2区, 標高14mほどの平坦な台地上に位置している。



第143図 第24号土坑実測図

重複関係 第25号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.25 m, 短径3.05 mの不整円形である。深さは180cmで、底面はほぼ平坦である。壁は下部がやや内傾し、上位は直立している。

覆土 13層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|---------|---------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 | 8 灰色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 灰色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 褐灰色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 11 極暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 褐色 | ロームブロック少量 | 12 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 6 灰褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 13 暗褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 7 灰褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量 | | |

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、周辺の遺構配置から江戸時代の可能性がある。性格は不明である。

第33号土坑 (第144図)

位置 調査区西部のB4j2区, 標高14 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3号粘土貼土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部を第3号粘土貼土坑に掘り込まれているため、南北径は0.60 mで、東西径は0.82 mしか確認できなかった。平面形は楕円形で、長径方向はN-59°-Eと推測できる。深さは8 cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

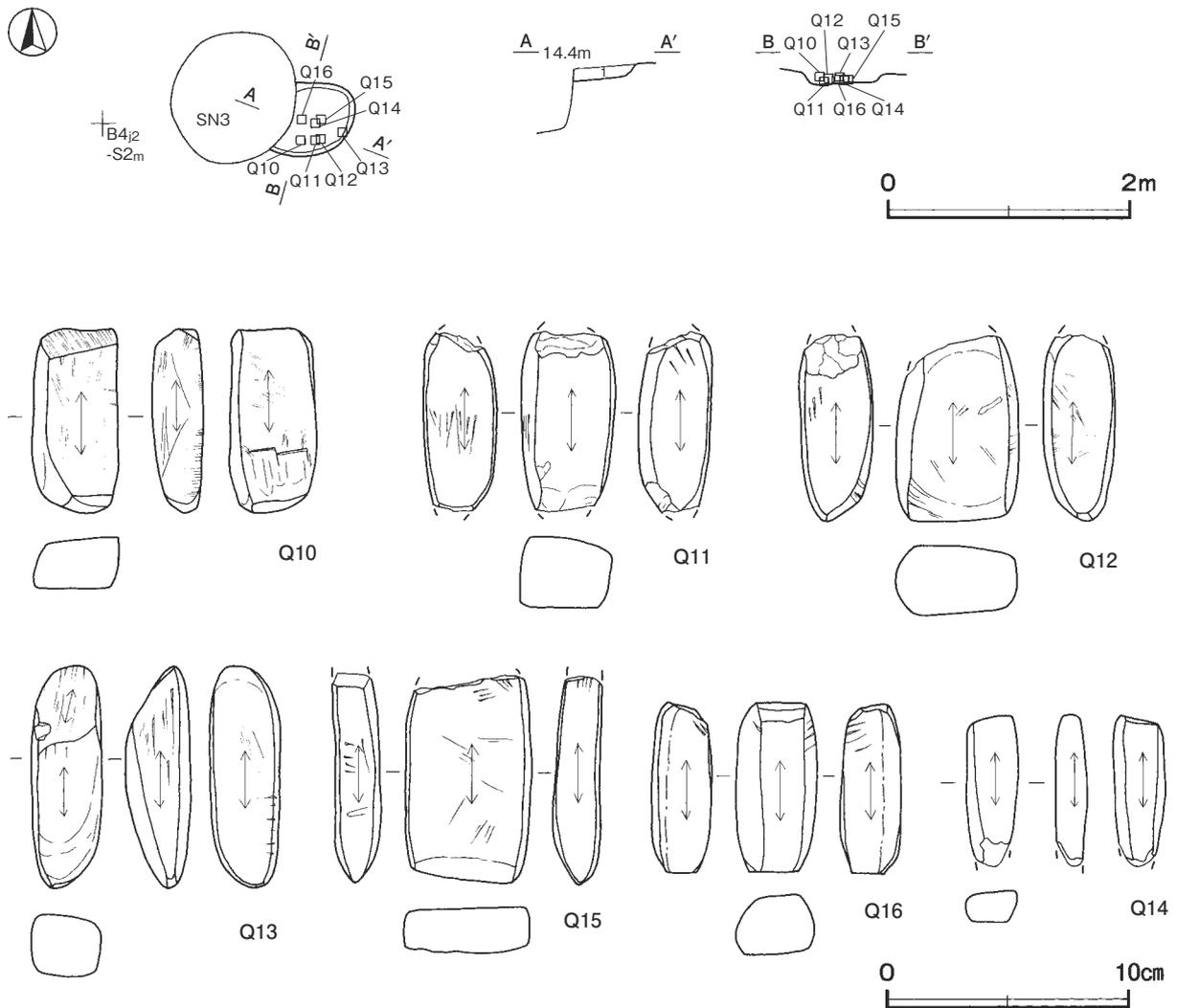
- 1 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片1点(甕), 陶器片1点(片口鉢), 磁器片1点(碗), 石器22点(砥石), 鉄製品1点(釘)が、覆土中から出土している。Q10~16は、底面にまとまっていることから、埋め戻す前に廃棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は、遺物出土状況からゴミ捨て場の可能性がある。

第33号土坑出土遺物観察表 (第144図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	砥石	7.7	3.6	2.1	84.5	凝灰岩	砥面3面	底面	PL35
Q11	砥石	(7.5)	3.9	3.0	(125.6)	凝灰岩	砥面3面	底面	PL35
Q12	砥石	(7.8)	5.1	2.9	(172.8)	凝灰岩	砥面3面	底面	PL35
Q13	砥石	9.3	2.9	2.7	98.3	凝灰岩	砥面3面	底面	PL35
Q14	砥石	(6.3)	2.1	1.3	(26.1)	凝灰岩	砥面3面	底面	PL35
Q15	砥石	(8.7)	5.2	2.0	(146.8)	凝灰岩	砥面3面	底面	PL35
Q16	砥石	7.0	3.3	2.5	89.5	凝灰岩	砥面3面	底面	PL35



第 144 図 第 33 号土坑・出土遺物実測図

第 54 号土坑 (第 145 図)

位置 調査区東部の B 5i0 区, 標高 16 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 77・516 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 1.56 m, 短軸 1.54 m の方形で, 深さは 42cm である。底面は平坦で, 壁は外傾している。

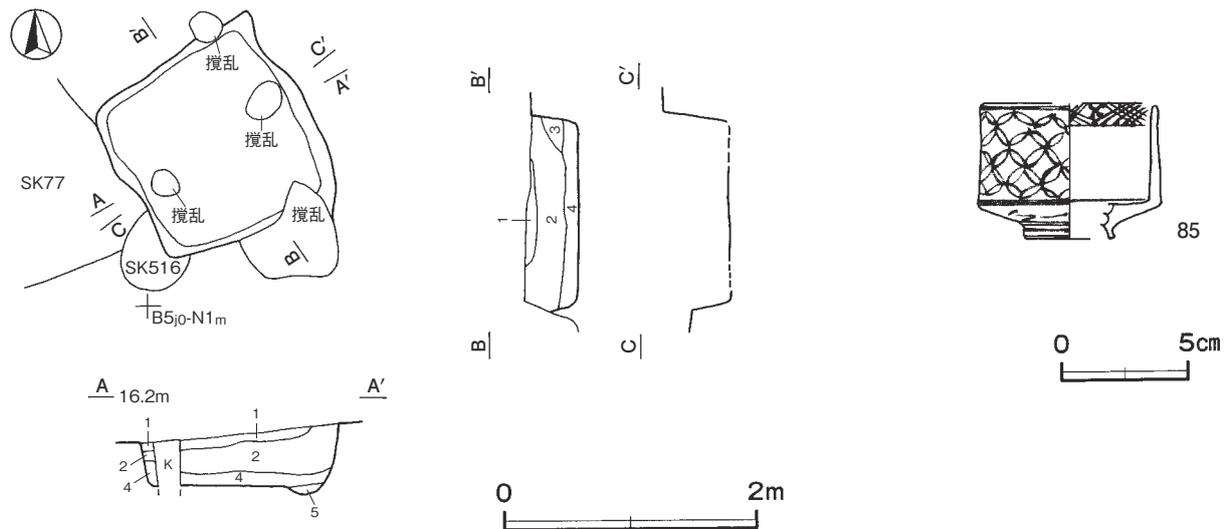
覆土 5 層に分層できる。ロームブロックを多く含んでいることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|-----------|
| 1 暗 褐 色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 4 褐 色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 5 暗 褐 色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片 8 点 (焙烙 5, 鉢 3), 陶器片 1 点 (碗), 磁器片 1 点 (碗) のほか, 土師器片 2 点 (甕) が, 覆土中から出土している。土器は覆土中から出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から 19 世紀前半と考えられる。性格は不明である。



第 145 図 第 54 号土坑・出土遺物実測図

第 54 号土坑出土遺物観察表 (第 145 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
85	磁器	碗	[6.8]	5.4	[3.2]	緻密・灰白	染付 七宝繋ぎ	透明	肥前系	覆土中	30% PL34

第 56 号土坑 (第 146 図)

位置 調査区東部の B 5j0 区, 標高 16 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 66 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 2.68 m, 短径 2.20 m の不定形で, 長径方向は N - 33° - W である。深さは 24cm である。底面は皿状で, 壁は緩やかに立ち上がっている。底面に径 40cm のピット 2 か所を確認したが, 性格は不明である。

覆土 4 層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

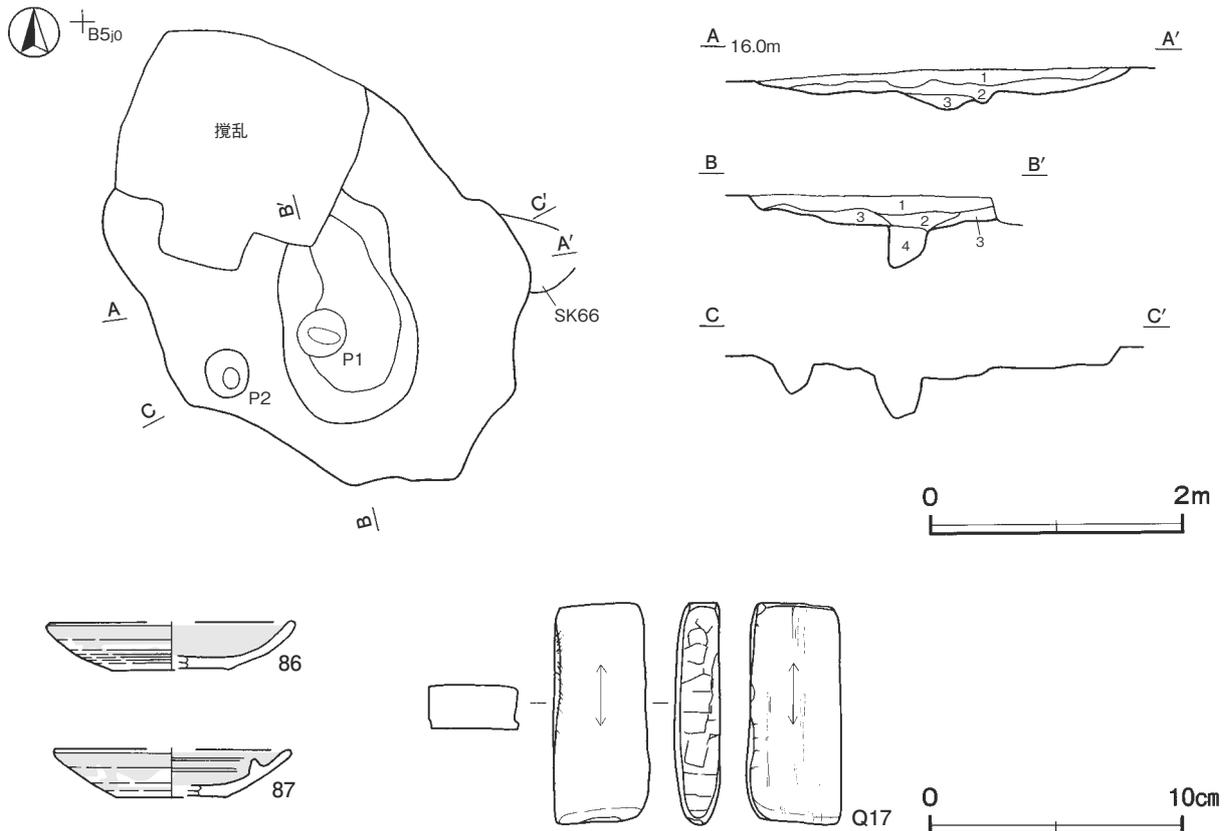
- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量
 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 4 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片 16 点 (焙烙), 陶器片 11 点 (碗 4, 皿 4, 灯明皿 1, 灯明受皿 1, 鉢 1), 磁器片 9 点 (碗 1, 花瓶 1, 徳利 4, 土瓶 3), 石器 4 点 (砥石), 銅製品 1 点 (煙管) が, 覆土中から出土している。遺物は覆土中から出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は, 出土土器から 19 世紀前半と考えられる。性格は不明である。

第 56 号土坑出土遺物観察表 (第 146 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
86	陶器	灯明皿	[9.6]	1.9	[4.4]	長石・灰黄	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	50% PL33
87	陶器	灯明受皿	[9.1]	1.9	[4.2]	長石・ぶい黄橙	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中	30% PL33



第146図 第56号土坑・出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q17	砥石	8.8	3.8	1.8	107.1	凝灰岩	砥面2面	覆土中	PL35

第75号土坑（第147図）

位置 調査区東部のB5i9区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第77号土坑を掘り込み、第2号炉に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.07m、短径1.77mの不定形で、長径方向はN-17°-Wである。深さは43cmである。底面は南西壁から中央部へと緩やかに下って平坦部に至っている。壁は外傾している。

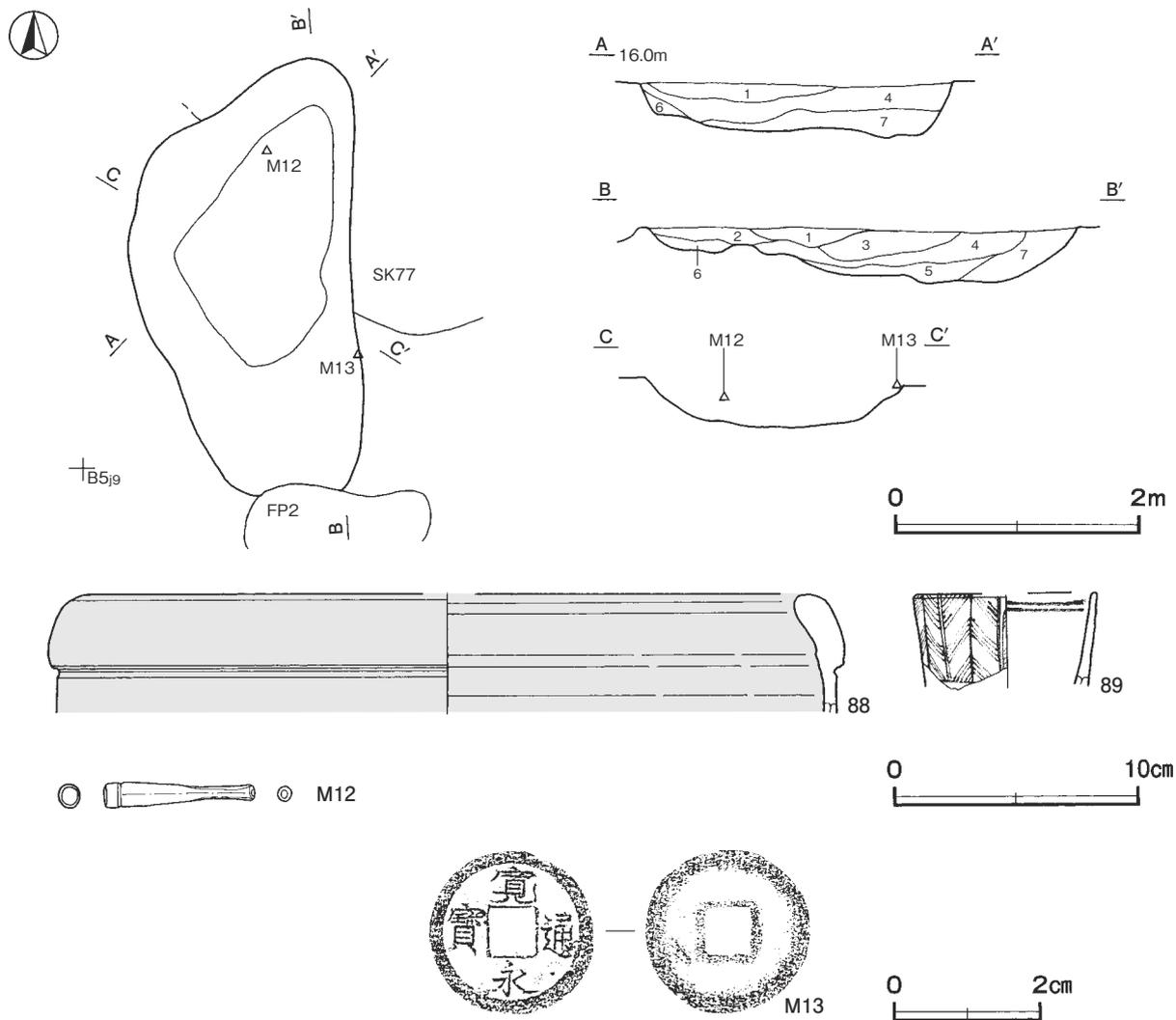
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片7点（焙烙）、陶器片10点（碗4、鉢1、土瓶5）、磁器片2点（碗）、石器2点（砥石）、鉄製品3点（鎌、銚、不明）、銅製品1点（煙管）、銭貨1点（寛永通寶）のほか、石製品1点（板碑）が、覆土中から出土している。遺物は覆土上層から中層にかけて出土した破片であることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後葉以降と考えられる。性格は不明である。



第 147 図 第 75 号土坑・出土遺物実測図

第 75 号土坑出土遺物観察表 (第 147 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
88	陶器	鉢	[29.4]	(5.0)	-	長石・灰オリーブ	外・内面ロクロナデ	透明	産地不明	覆土中	5%
89	磁器	碗	[7.4]	(3.9)	-	緻密・灰白	染付 矢筈	透明	肥前	覆土中	20%

番号	器種	長さ	火皿径	小口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 12	煙管	6.1	-	0.6	5.30	銅	吸口部	覆土中層	PL36

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M 13	銭貨	寛永通寶	2.3	0.6	2.14	銅	1697	新寛永	覆土上層	PL36

第 128 号土坑(第 148 ~ 150 図)

位置 調査区東部の B 5 i7 区, 標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第7号粘土貼土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 2.78 m, 短径 2.11 m の不整楕円形で, 長径方向は N - 72° - W である。深さは 38cm である。底面は皿状で, 壁は緩斜している。

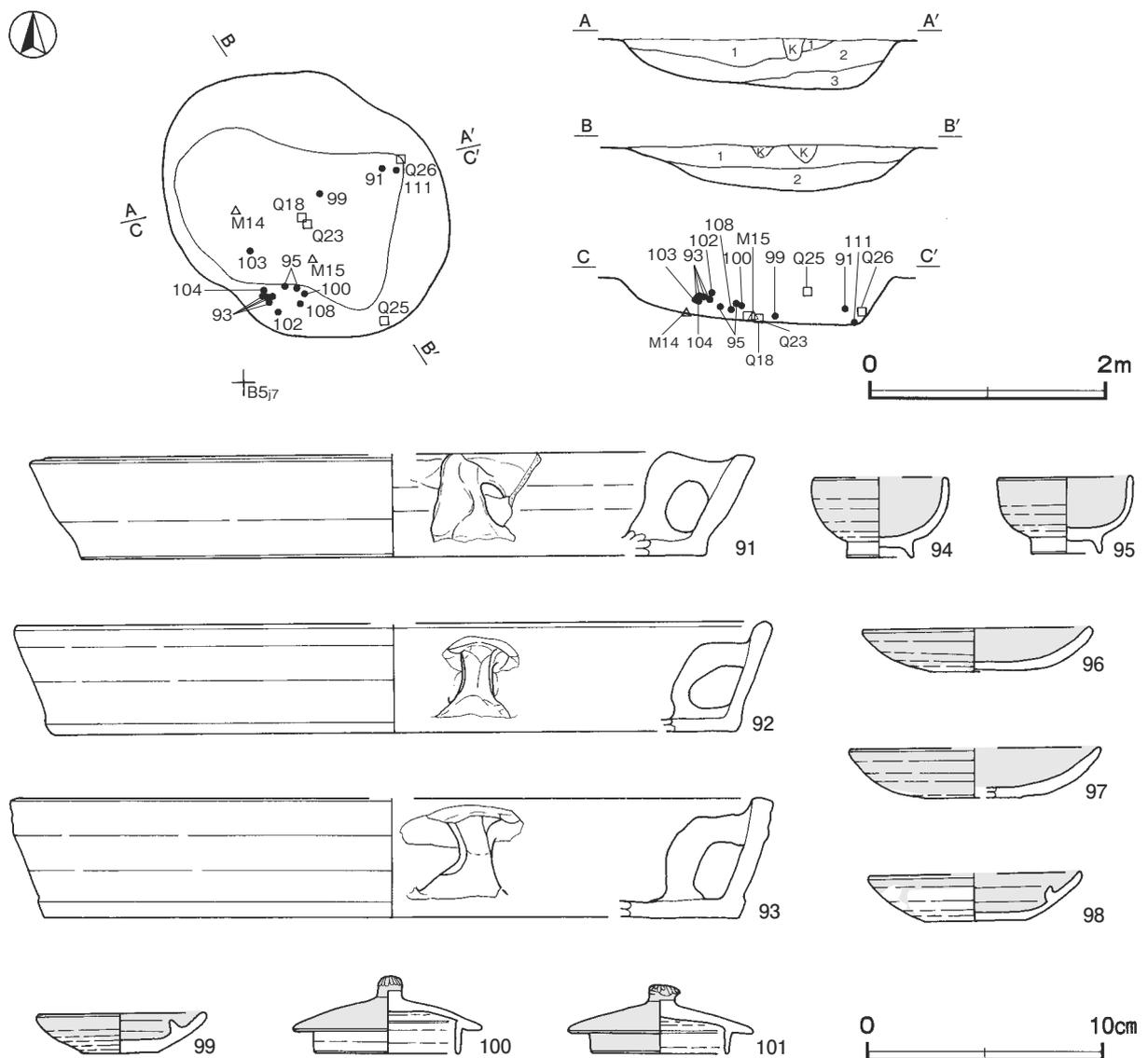
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

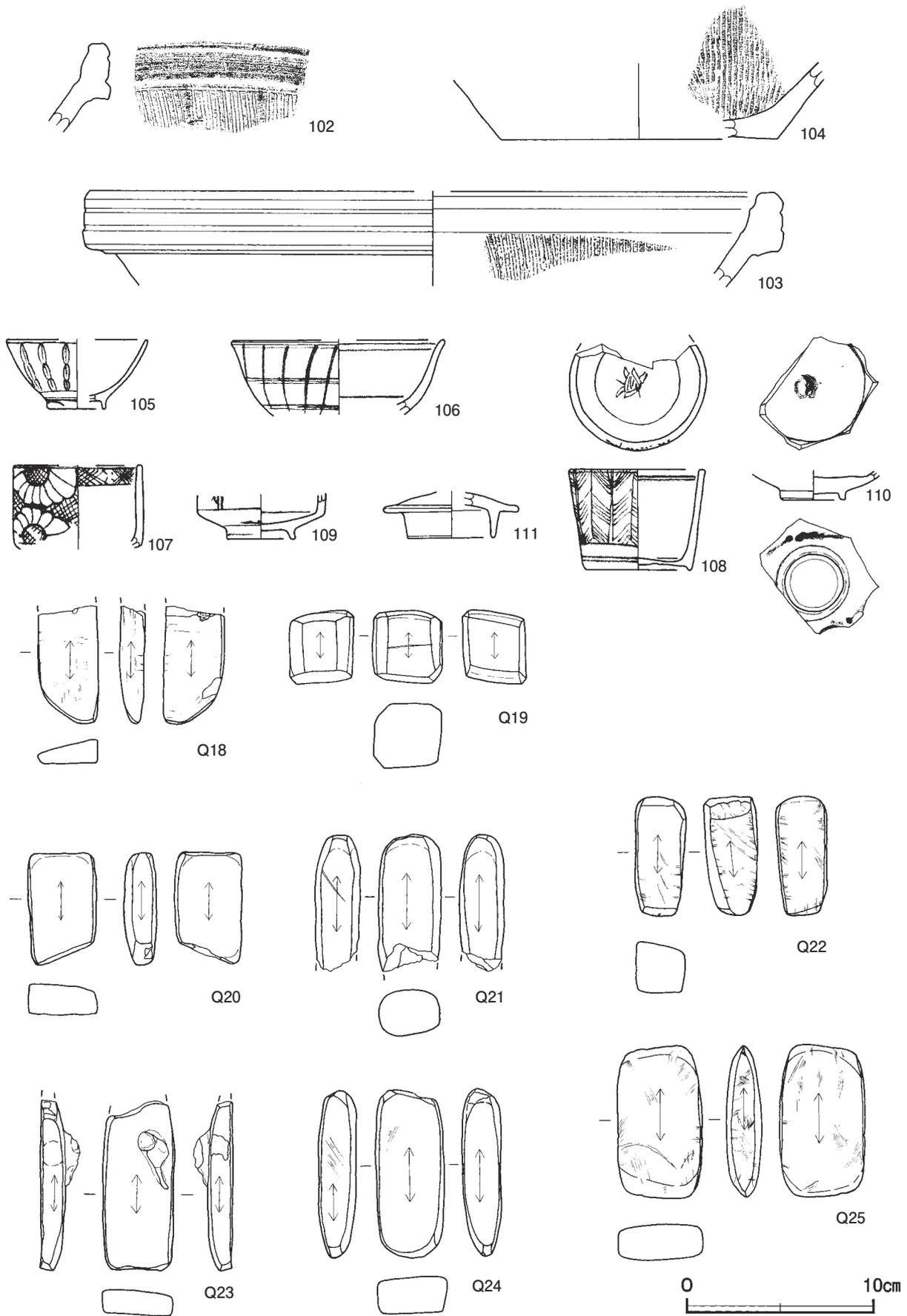
- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片 88 点 (小皿 3, 焙烙 75, 鉢 6, 焜炉 4), 陶器片 35 点 (碗 9, 灯明皿 6, 灯明受皿 2, 蓋 3, 猪口 6, 鉢 2, 播鉢 4, 土瓶 3), 磁器片 44 点 (碗 40, 蓋 1, 皿 2, 土瓶 1), 石器 58 点 (砥石), 銅製品 1 点 (小柄), 銭貨 2 点 (寛永通寶) が, 覆土中から出土している。遺物は覆土中層から下層にかけて出土した破片であることから, 埋め戻す際に一括して投棄されたものとみられる。

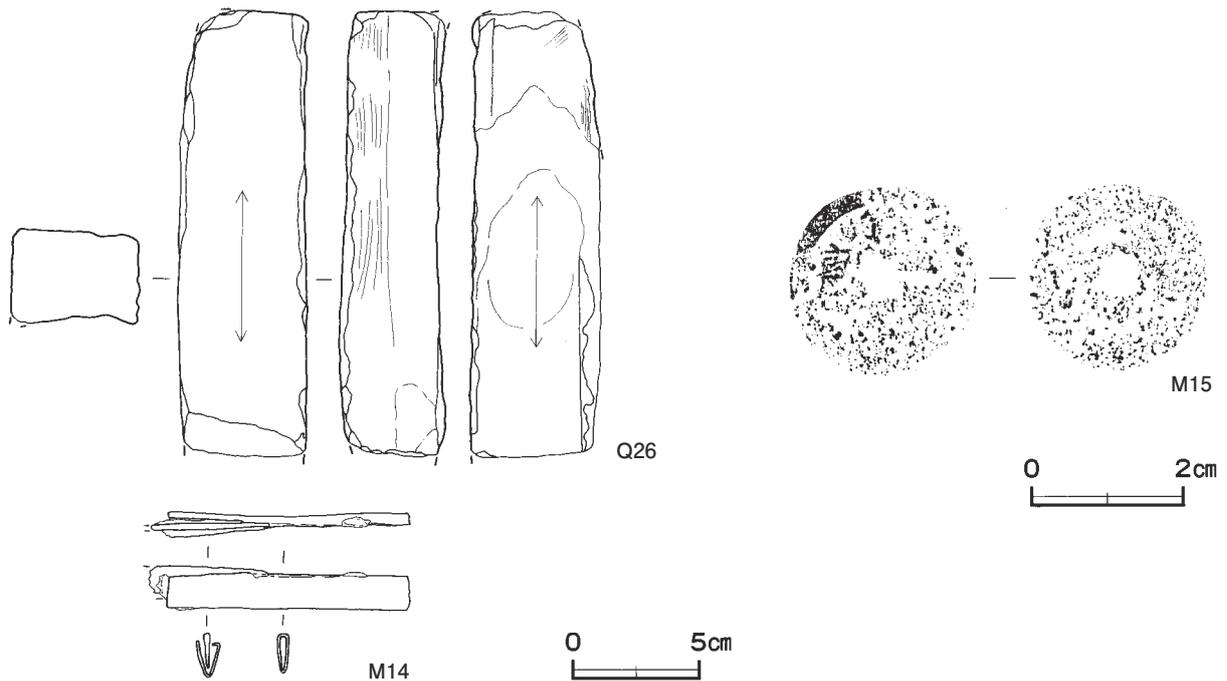
所見 時期は, 出土土器から 19 世紀後半と考えられる。性格は, 遺物出土状況からゴミ捨て場と考えられる。



第 148 図 第 128 号土坑・出土遺物実測図



第 149 图 第 128 号土坑出土遗物实测图 (1)



第 150 図 第 128 号土坑出土遺物実測図 (2)

第 128 号土坑出土遺物観察表 (第 149・150 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
91	土師質土器	焙烙	[30.8]	4.4	[26.4]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	内耳 1 か所残存 外・内面ナデ	覆土下層	10%
92	土師質土器	焙烙	[31.6]	4.7	[29.0]	長石・石英・角閃石	橙	普通	内耳 1 か所残存 外・内面ナデ	覆土中	5%
93	土師質土器	焙烙	[31.4]	5.1	[29.4]	長石・石英・角閃石	橙	普通	内耳 1 か所残存 外・内面ナデ	覆土中層	5% PL32

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
94	陶器	猪口	[5.5]	3.4	2.7	長石・灰白	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	覆土中	70%
95	陶器	猪口	5.6	3.3	2.8	長石・灰白	外・内面ロクロナデ	灰	瀬戸・美濃系	覆土下層	90% PL32
96	陶器	灯明皿	9.6	2.0	3.9	長石・にぶい赤褐	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中	90% PL33
97	陶器	灯明皿	[10.4]	2.1	[4.0]	長石・暗褐	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中	30% PL17
98	陶器	灯明受皿	[8.8]	2.0	4.4	長石・黒褐	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土中	40% PL33
99	陶器	灯明受皿	7.1	2.2	3.1	長石・赤褐	外・内面ロクロナデ	鉄	瀬戸・美濃系	覆土下層	80% PL33
100	陶器	蓋	[6.0]	3.3	-	長石・灰白	花摘み 外・内面ロクロナデ	透明	不明	覆土中層	70%
101	陶器	蓋	5.8	3.0	-	長石・浅黄橙	花摘み 外・内面ロクロナデ	透明	不明	覆土中	70% PL34
102	陶器	播鉢	-	(4.8)	-	長石・暗赤褐	内面播り目	鉄	堺・明石系	覆土上層	5%
103	陶器	播鉢	[36.6]	(5.1)	-	長石・橙	内面播り目	鉄	堺・明石系	覆土中層	5%
104	陶器	播鉢	-	(4.1)	[14.8]	長石・にぶい赤褐	内面播り目	鉄	堺・明石系	覆土中層	5%
105	磁器	碗	[7.4]	3.7	[3.0]	緻密・明緑灰	染付 木賊文	透明	肥前系	覆土中	40%
106	磁器	碗	[11.2]	(4.0)	-	緻密・灰白	染付 格子文	透明	肥前系	覆土中	20%
107	磁器	碗	[6.8]	(4.5)	-	緻密・灰白	染付 菊花	透明	肥前系	覆土中	30%
108	磁器	碗	7.1	5.4	5.5	緻密・灰白	染付 矢筈 見込み「昆虫」	透明	肥前系	覆土下層	70% PL34
109	磁器	碗	-	(2.4)	3.6	緻密・灰白	染付	透明	肥前系	覆土中	10%
110	磁器	碗	-	(1.6)	3.2	緻密・灰白	染付	透明	肥前系	覆土中	50%
111	磁器	蓋	[4.6]	(2.5)	-	緻密・灰白	外・内面ロクロナデ	透明	不明	底面	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 18	砥石	(6.3)	3.3	1.4	(33.4)	凝灰岩	砥面3面	底面	PL35
Q 19	砥石	4.0	3.7	3.4	66.5	凝灰岩	砥面3面	覆土中	PL35
Q 20	砥石	6.0	3.6	1.7	60.4	凝灰岩	砥面3面	覆土中	PL35
Q 21	砥石	(7.4)	3.3	2.4	(83.3)	凝灰岩	砥面3面	覆土中	PL35
Q 22	砥石	6.4	2.7	2.8	73.9	凝灰岩	砥面3面	覆土中	PL35
Q 23	砥石	(9.1)	3.9	1.4	(77.9)	凝灰岩	砥面3面 鉄付着	底面	PL35
Q 24	砥石	9.0	3.7	2.0	99.9	凝灰岩	砥面3面	覆土中	PL35
Q 25	砥石	8.1	4.5	1.9	105.0	凝灰岩	砥面3面	覆土中層	PL35
Q 26	砥石	(17.7)	5.1	3.8	(665.0)	凝灰岩	砥面2面	覆土下層	PL35

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 14	小柄	(9.6)	1.4	0.5	(22.4)	銅	端部欠損 内部小刀残存カ	底面	PL36

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 15	銭貨	寛□□寶	26.3	5.9	2.46	銅	-	判読不能	底面	

第 136 号土坑 (第 151 図)

位置 調査区東部の B 5 h5 区, 標高 16 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 6 号井戸跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北部と西部が調査区域外へ延びているため, 東西径は 2.20 m, 南北径は 1.40 m しか確認できなかった。平面形は円形ないし楕円形と推測できる。深さは 68cm である。底面は平坦で, 壁は緩斜している。

覆土 4 層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 3 暗褐色 炭化物少量, ロームブロック・焼土ブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片 21 点 (小皿 1, 焙烙 9, 播鉢 1, 火鉢 2, 甕 8), 陶器片 18 点 (碗 6, 蓋 2, 鉢 3, 土瓶 6, 甕 1), 磁器片 8 点 (碗 6, 德利 2), 土製品 1 点 (鳩笛), 鉄製品 3 点 (鎌, 釘, 不明), 銭貨 1 点 (文久永寶) のほか, 須恵器片 10 点 (坏) が, 覆土中から出土している。遺物は覆土中層から下層にかけて出土した破片であることから, 埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

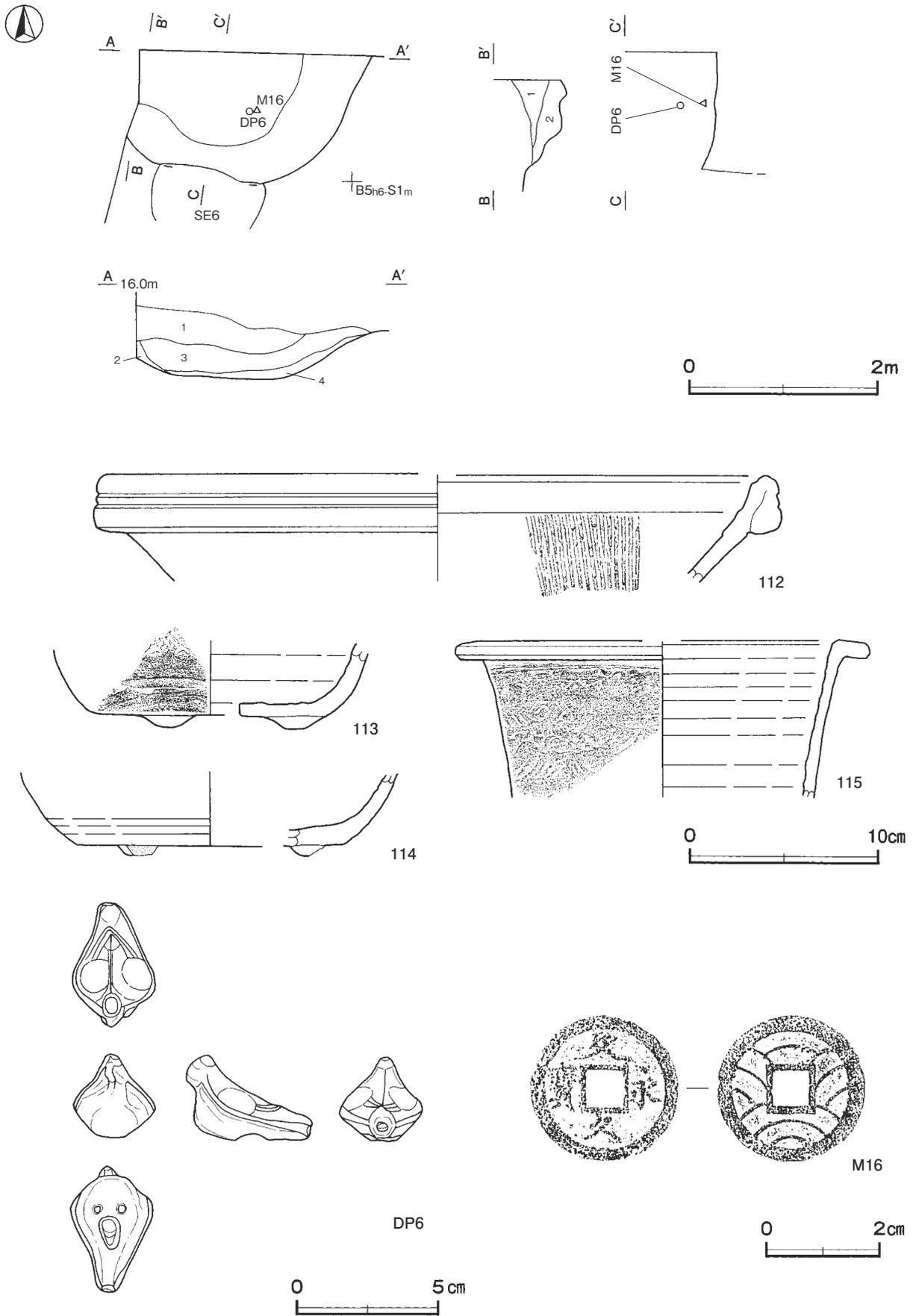
所見 時期は, 出土遺物から 19 世紀後半と考えられる。性格は, 遺物出土状況からゴミ捨て場と考えられる。

第 136 号土坑出土遺物観察表 (第 151 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
112	土師質土器	播鉢	[35.1]	(5.7)	-	長石・石英	にふ赤褐	普通	内面播り目	覆土中	5%
113	土師質土器	火鉢	-	(4.7)	[12.0]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	脚部 1 か所残存	覆土中	10%
114	土師質土器	火鉢	-	(4.4)	[14.0]	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	脚部 1 か所残存	覆土中	10%
115	土師質土器	甕	[22.0]	(8.4)	-	長石・石英・雲母	暗灰	普通	内面ロクロナデ	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 6	鳩笛	4.4	2.9	3.0	11.01	長石・石英	橙	腹・尾部穿孔	覆土中層	PL35

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 16	銭貨	文久永寶	26.8	6.5	1.4	銅	1863	草文 背十一波	覆土下層	



第 151 図 第 136 号土坑・出土遺物実測図

第 530 号土坑 (第 152 図)

位置 調査区東部の C 5 b8 区, 標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 6 号方形竪穴遺構を掘り込み, 第 8 ~ 11・13・16 ~ 18 号炉に掘り込まれている。

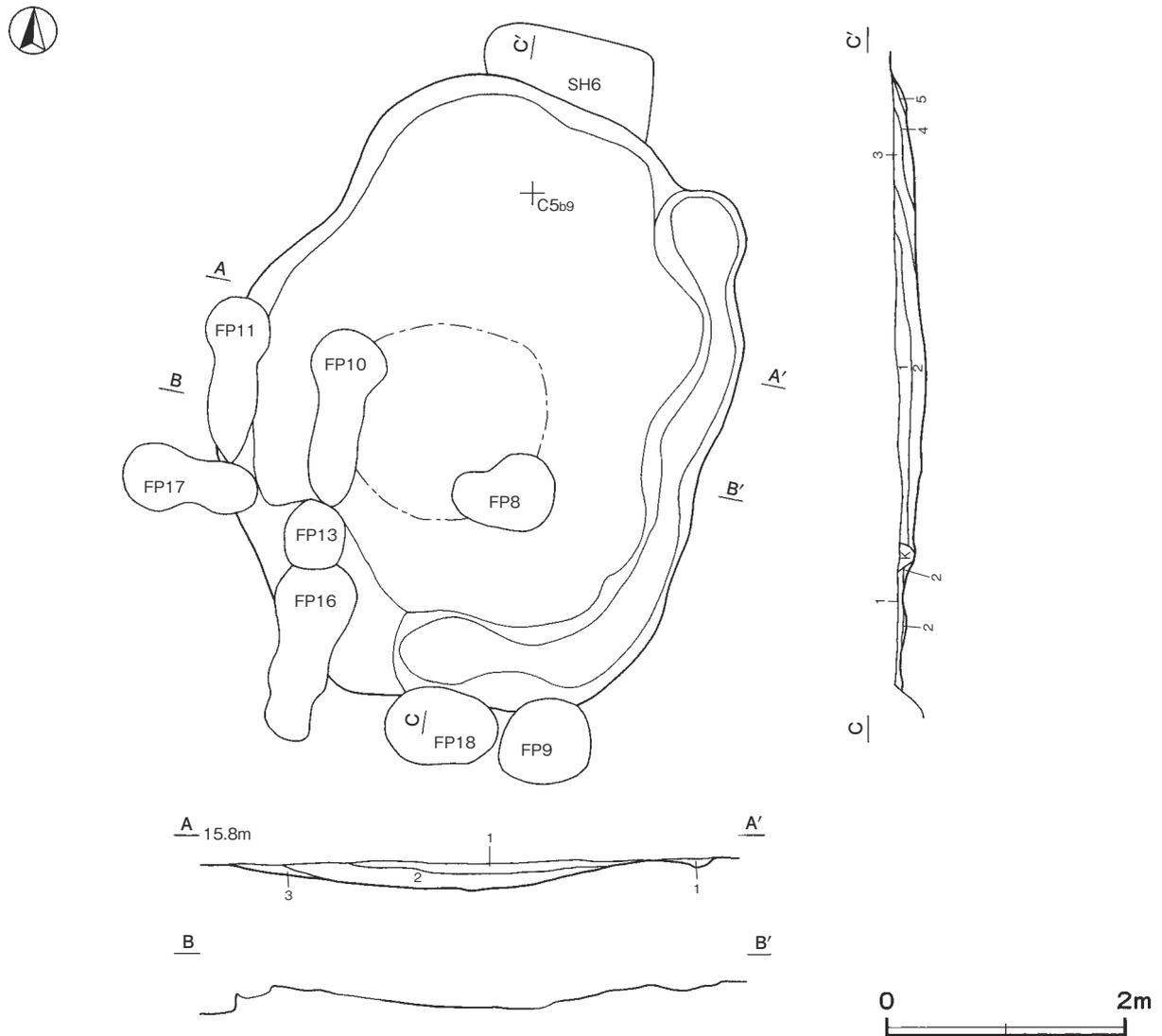
規模と形状 長径 5.20 m, 短径 4.18 m の不定形で, 長径方向は N - 10° - E である。深さは 24 cm である。底面は皿状で, 中央部が踏み固められている。壁は緩やかに立ち上がっている。東壁に幅 0.28 ~ 0.70 m, 長さ 5.84 m, 深さ 7 cm で, 平面形が U 字状を呈する溝 1 条を確認した。

覆土 5 層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから, 自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片 14 点 (小皿 2, 焙烙 12), 陶器片 8 点 (碗 4, 播鉢 1, 鉢 1, 土瓶 2), 磁器片 1 点 (碗), 鉄製品 2 点 (鎌) のほか, 土師器片 6 点 (甕), 粘土塊 1 点が, 覆土中から出土している。遺物は覆土中から出土した破片であることから, 埋没する過程で流れ込んだものとみられる。



第 152 図 第 530 号土坑実測図

所見 時期は、出土土器と重複関係から19世紀後半と考えられる。性格は、遺構の形状及び同時期に機能していたと考えられる第5・6号掘立柱建物跡との位置関係から、馬屋の可能性はある。東壁で確認したU字状の溝は、形状と位置から尿溜めと考えられる。

表 18 江戸時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	B 3 h9	N - 70° - E	長方形	1.26 × 1.00	18	平坦	緩斜	人為	土師質土器, 土製品	
7	C 4 b1	N - 87° - E	[楕円形]	1.82 × (1.13)	50	平坦	ほぼ直立	人為	土師質土器, 石器	
20	B 4 i2	N - 72° - W	楕円形	1.42 × 1.25	50	平坦	外傾	人為	土師質土器, 陶器, 石器, 銅製品	本跡→SK30
23	B 4 g2	-	不整形	3.16 × 3.03	250	ほぼ平坦	内傾直立	人為	土師質土器, 陶器, 銅製品	
24	B 4 h2	-	不整形	3.25 × 3.05	180	平坦	内傾直立	人為		本跡→SK25
33	B 4 j2	N - 59° - E	[楕円形]	(0.82) × 0.60	8	平坦	緩斜	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 鉄製品	本跡→SN 3
54	B 5 i0	-	方形	1.56 × 1.54	42	平坦	外傾	人為	土師質土器, 陶器, 磁器	SK77・516→本跡
56	B 5 j0	N - 33° - W	不定形	2.68 × 2.20	24	皿状	緩斜	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 銅製品	SK66→本跡
75	B 5 i9	N - 17° - W	不定形	3.07 × 1.77	43	傾斜	外傾	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 鉄製品, 銅製品, 銭貨	SK77→本跡→FP 2
128	B 5 i7	N - 72° - W	不整形楕円形	2.78 × 2.11	38	皿状	緩斜	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 石器, 銅製品, 銭貨	SN 7→本跡
136	B 5 h5	N - 55° - W	[円形・楕円形]	(2.20) × (1.40)	68	平坦	緩斜	人為	土師質土器, 陶器, 磁器, 土製品, 鉄製品, 銭貨	本跡→SE 6
530	C 5 b8	N - 10° - E	不定形	5.20 × 4.18	24	皿状	緩斜	自然	土師質土器, 陶器, 磁器, 鉄製品	SH 6→本跡→FP 8~11・13・16~18

(5) 炉跡

第1号炉跡 (第153図)

位置 調査区東部のC 5 a9区, 標高15 mほどの平坦な台地上に位置している。

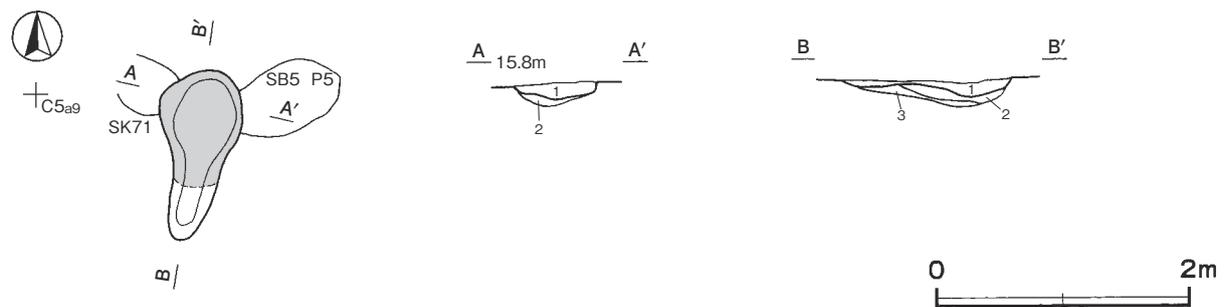
重複関係 第5号掘立柱建物跡, 第71号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長1.38 mの柄鏡形で, 南部の奥行0.78 m, 横幅0.32 mの半楕円形を呈した焚口部に, 北部に奥行・横幅とも0.68 mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN - 12° - Eである。焚口部は深さ6 cmで, 底面は燃焼部へと向かって下がっている。燃焼部は深さ12 cmで, 底面は皿状である。火床面の第2層上面と燃焼部の壁が, 火熱を受けて赤変硬化している。第2・3層を埋め戻して炉を構築している。

覆土 単一層である。第2・3層は掘方への埋土である。第1層はロームブロックが多く含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量 3 灰赤色 ロームブロック・炭化物微量
2 赤褐色 ロームブロック・炭化物微量



第153図 第1号炉跡実測図

遺物出土状況 陶器片1点(碗), 鉄製品1点(釘)が, 覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。
所見 時期は, 出土土器が細片のため特定は困難であるが, 江戸時代と考えられる。性格は不明である。

第2号炉跡 (第154図)

位置 調査区東部のB5j9区, 標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第75・141号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長1.52mの瓢箪形で, 東部の奥行0.84m, 横幅0.52mの半楕円形を呈した焚口部に, 西部に奥行・横幅とも0.66mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-95°-Wである。焚口部は深さ12cmで, 底面は燃焼部に向かって下がっている。燃焼部は深さ16cmで, 底面は皿状である。火床面は第3・4層上面で, 火熱を受けて赤変硬化している。第3~6層を埋め戻して炉を構築している。

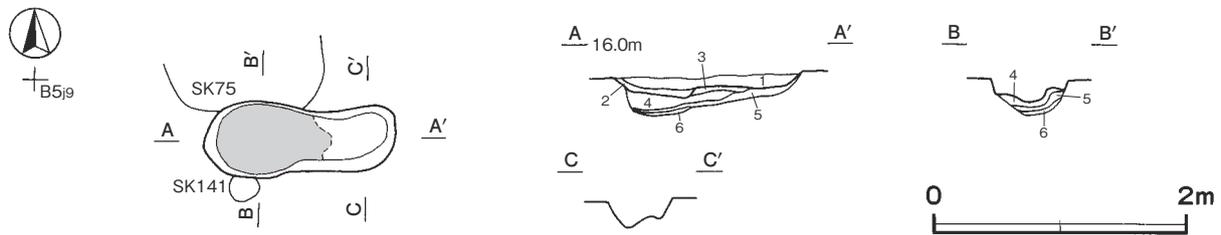
覆土 2層に分層できる。第3~6層は掘方への埋土である。第1・2層はロームブロックが多く含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|---------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 4 暗赤褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 5 褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 3 赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師質土器片3点(鉢), 鉄製品4点(釘1, 不明3)が, 覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土土器が細片のため特定は困難であるが, 17世紀後葉以降と考えられる第75号土坑との重複関係から, それ以降の可能性はある。性格は不明である。



第154図 第2号炉跡実測図

第3号炉跡 (第155図)

位置 調査区東部のB5i8区, 標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号地下式坑, 第4号炉跡を掘り込んでいる。

規模と形状 全長1.56mの瓢箪形で, 南部の奥行0.90m, 横幅0.44mの半楕円形を呈した焚口部に, 北部に奥行0.76m, 横幅0.66mの楕円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-13°-Wである。焚口部は深さ10cmで, 底面は燃焼部に向かって緩やかに下がっている。燃焼部は深さ12cmで, 底面は平坦である。火床面の第3層上面と燃焼部の壁が, 火熱を受けて赤変硬化している。第3・4層を埋め戻して炉を構築している。

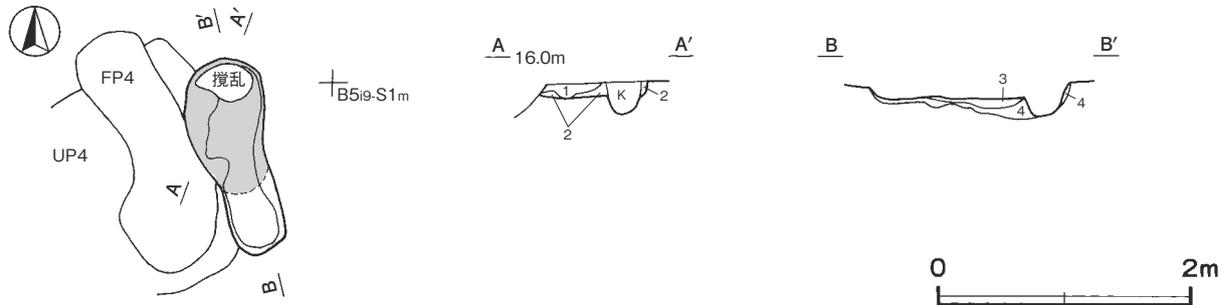
覆土 2層に分層できる。第3・4層は掘方への埋土である。第1・2層はロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 3 赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |

遺物出土状況 土師質土器片4点（鉢3，甕1），陶器片4点（甕），鉄製品1点（釘）が，覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器が細片のため特定は困難であるが，15世紀後葉以降と考えられる第4号地下式坑との重複関係から，江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第155図 第3号炉跡実測図

第4号炉跡（第156図）

位置 調査区東部のB5i8区，標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号地下式坑を掘り込み，第3号炉に掘り込まれている。

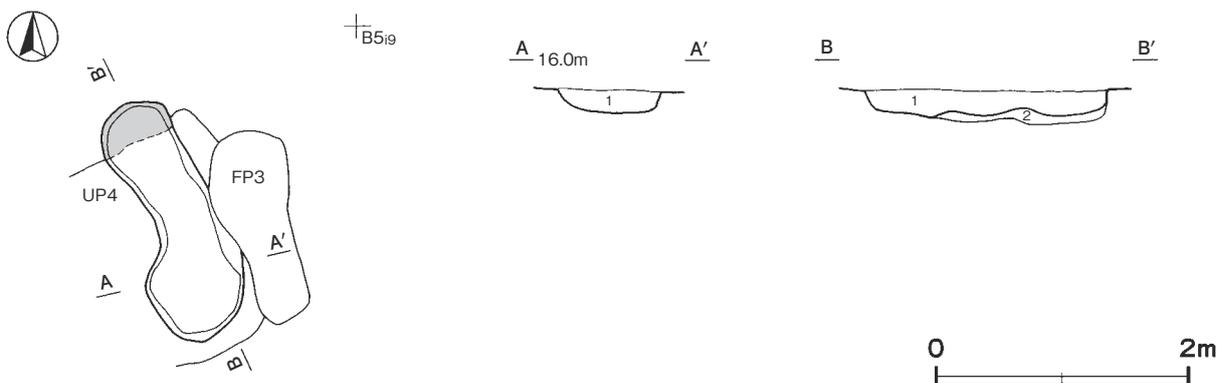
規模と形状 全長1.90mの瓢箪形で，南部の奥行1.34m，横幅0.82mの不整半楕円形を呈した焚口部に，北部に奥行0.76m，横幅0.60mの楕円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-24°-Wである。焚口部は深さ22cmで，底面は凹凸があるが，燃焼部へと向かって緩やかに上がっている。燃焼部は深さ20cmで，底面は平坦である。火床面の第2層上面と燃焼部の壁が，北部のみ火熱を受けて赤変硬化している。第2層を埋め戻して炉を構築している。

覆土 単一層である。第2層は掘方への埋土である。第1層はロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック微量 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，15世紀後葉以降と考えられる第4号地下式坑との重複関係，周辺で江戸時代と考えられる同形状の炉跡が確認されていることから，ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第156図 第4号炉跡実測図

第5号炉跡（第157図）

位置 調査区東部のC5a9区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

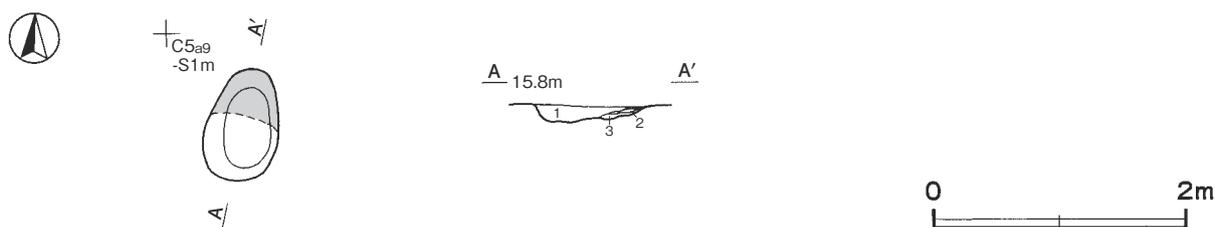
規模と形状 長径0.92m，短径0.58mの楕円形で，長径方向はN-14°-Eである。深さは12cmで，底面は南から北へと向かって緩やかに上がっている。火床面は第3層下面で，北部が火熱を受けて赤変硬化している。南壁は外傾し，北壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化物微量 | 3 暗褐色 | 焼土ブロック少量，ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック微量 | | |

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，周辺に江戸時代と考えられる炉跡が位置していることから，ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第157図 第5号炉跡実測図

第6号炉跡（第158図）

位置 調査区東部のB5j8区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

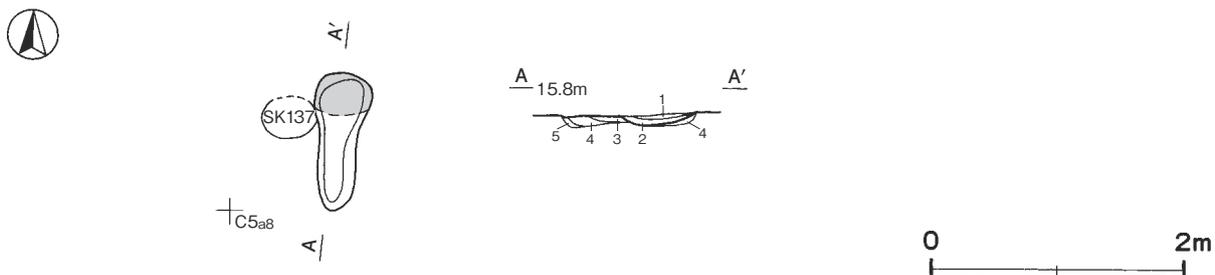
規模と形状 全長1.09mの柄鏡形で，南部の奥行0.66m，横幅0.30mの半楕円形を呈した焚口部に，北部に奥行・横幅ともに0.42mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-6°-Eである。焚口部は深さ2cmで，底面は燃焼部に向かって緩やかに上がっている。燃焼部は深さ8cmで，底面は皿状である。火床面の第3層上面と燃焼部の壁が，火熱を受けて赤変硬化している。第3～5層を埋め戻して炉を構築している。

覆土 2層に分層できる。第3～5層は掘方への埋土である。第1・2層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|--------|------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 明赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる同形状の炉跡が確認されていることから，ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第158図 第6号炉跡実測図

第7号炉跡（第159図）

位置 調査区東部のB 5j8区，標高15 mほどの平坦な台地上に位置している。

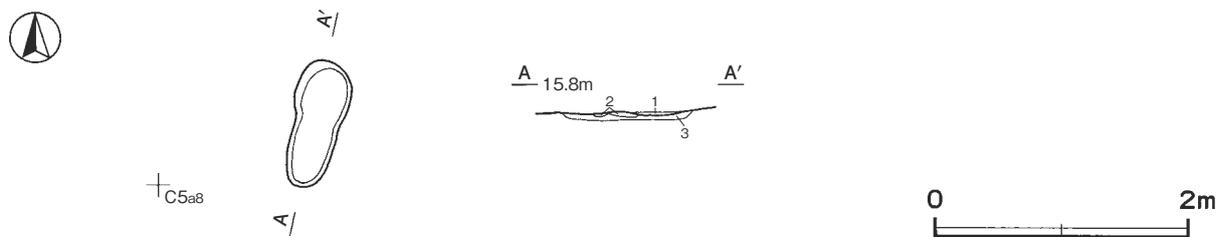
規模と形状 全長1.04 mの柄鏡形で，南部の奥行0.58 m，横幅0.36 mの半楕円形を呈した焚口部に，北部に奥行・横幅とも0.44 mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN - 13° - Eである。焚口部は深さ3 cmで，底面は燃焼部に向かって緩やかに上がっている。燃焼部は深さ3 cmで，底面は平坦である。火床面は確認できなかったが，第2・3層を埋め戻して炉を構築している。

覆土 単一層である。第2・3層は掘方への埋土である。第1層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | | |

所見 火熱を受けた痕跡を確認できなかったが，西側に隣接する江戸時代と考えられる第6号炉跡と比較して，規模と形状が類似していることから，炉跡の可能性はある。時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，上記の理由から江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第159図 第7号炉跡実測図

第8号炉跡（第160図）

位置 調査区東部のC 5b8区，標高15 mほどの平坦な台地上に位置している。

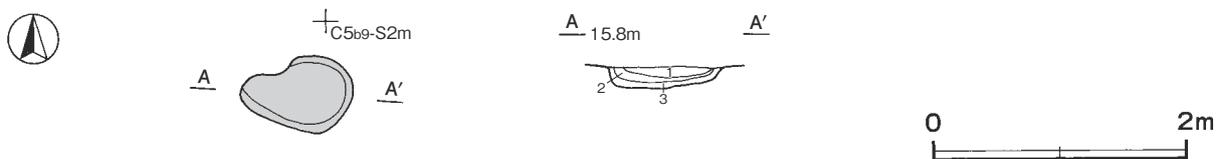
規模と形状 長径0.86 m，短径0.61 mの不整楕円形で，長径方向はN - 82° - Wである。深さは18cmで，底面は西から東へと向かって緩やかに上がっている。火床面は第3層下面で，火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|--------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，周辺に江戸時代と考えられる炉跡が位置していることから，ほぼ同時期の可能性はある。性格は不明である。



第160図 第8号炉跡実測図

第9号炉跡（第161図）

位置 調査区東部のC5c9区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第180・530号土坑，第18号炉跡を掘り込んでいる。

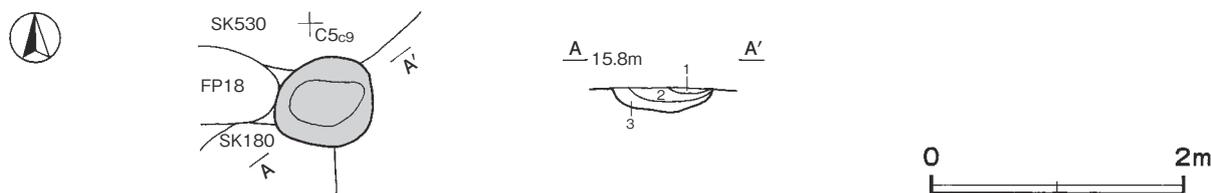
規模と形状 長径0.81m，短径0.70mの楕円形で，長径方向はN-67°-Eである。深さは21cmで，底面は皿状である。火床面は第3層下面で，火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子微量 | |

所見 時期は，伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが，周辺に江戸時代と考えられる炉跡が位置していることから，ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第161図 第9号炉跡実測図

第10号炉跡（第162図）

位置 調査区東部のC5b8区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

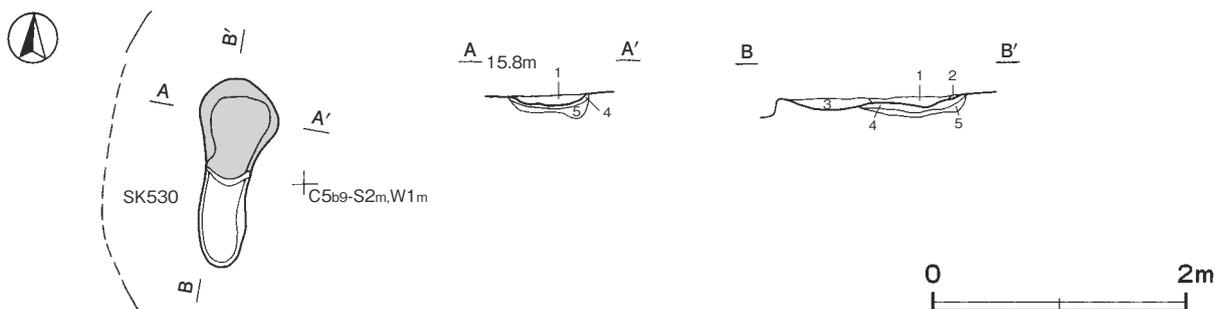
重複関係 第530号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長1.50mの柄鏡形で，南部の奥行0.94m，横幅0.38mの半楕円形を呈した焚口部に，北部に奥行・横幅とも0.64mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-7°-Eである。焚口部は深さ8cmで，底面は燃焼部に向かって上がっている。燃焼部は深さ8cmで，底面は皿状である。火床面の第4層上面と燃焼部の壁が，火熱を受けて赤変硬化している。第4・5層を埋め戻して炉を構築している。

覆土 3層に分層できる。第4・5層は掘方への埋土である。第3層は焚口部からの流入土である。第1・2層は天井部の崩落土である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 褐灰色 粘土ブロック多量，焼土粒子微量 | 4 赤褐色 ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量，炭化物微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | |



第162図 第10号炉跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片3点（小皿2，鉢1）のほか，土師器片8点（坏5，甕3）が，覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器が細片のため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる。性格は不明である。

第11号炉跡（第163図）

位置 調査区東部のC5b8区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第530号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長1.38mの柄鏡形で，南部の奥行0.88m，横幅0.40mの半楕円形を呈した焚口部に，北部に奥行・横幅とも0.56mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-3°-Eである。焚口部は深さ8cmで，底面は燃焼部に向かって緩やかに上がっている。燃焼部は深さ10cmで，底面は皿状である。火床面の第3・4層上面と燃焼部の壁面が，火熱を受けて赤変硬化している。第3・4層を埋め戻して炉を構築している。

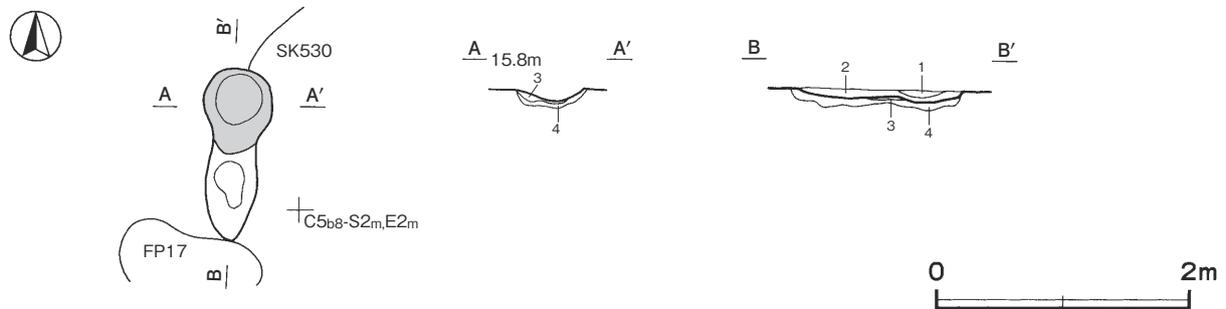
覆土 2層に分層できる。第3・4層は掘方への埋土である。第1・2層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|---------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 3 赤褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量 | 4 暗赤褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |

遺物出土状況 陶器片1点（碗），磁器片1点（碗）のほか，土師器片1点（甕）が，覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器が細片のため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第163図 第11号炉跡実測図

第12号炉跡（第164図）

位置 調査区東部のC5b8区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第9号粘土貼土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長1.32mの柄鏡形で，西部の奥行0.72m，横幅0.40mの半楕円形を呈した焚口部に，東部に奥行・横幅とも0.58mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-97°-Eである。焚口部は深さ8cmで，底面は燃焼部に向かって緩やかに下がっている。燃焼部は深さ18cmで，底面は皿状である。火床面の第3・4層上面と燃焼部の壁が，火熱を受けて赤変硬化している。第3・4層を埋め戻して炉を構築している。

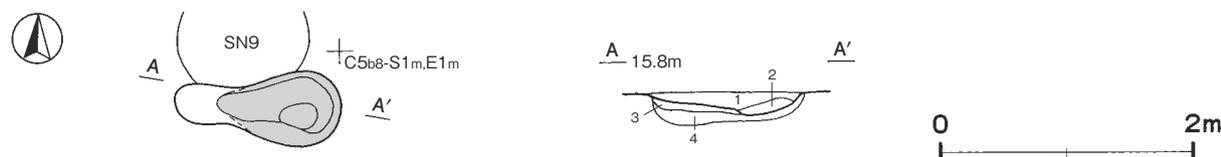
覆土 2層に分層できる。第3・4層は掘方への埋土である。第2層は天井部の崩落土である。第1層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|-------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 褐灰色 | 粘土ブロック多量, 焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 陶器片1点(鉢), 磁器片1点(油壺)が, 覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土土器が細片のため特定は困難であるが, 19世紀後半と考えられる第9号粘土貼土坑との重複関係から, それ以降の可能性はある。性格は不明である。



第164図 第12号炉跡実測図

第13号炉跡 (第165図)

位置 調査区東部のC5b8区, 標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第16号炉跡を掘り込んでいる。

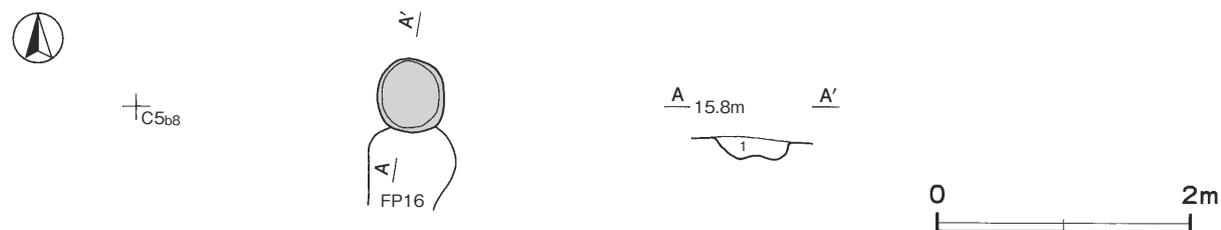
規模と形状 長径0.58m, 短径0.52mの楕円形で, 長径方向はN-7°-Eである。深さは16cmで, 底面は凹凸がある。火床面は第1層下面で, 火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾している。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量

所見 時期は, 伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが, 江戸時代と考えられる第16号炉跡との重複関係から, それ以降である。性格は不明である。



第165図 第13号炉跡実測図

第14号炉跡 (第166図)

位置 調査区東部のC5a8区, 標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第15号炉に掘り込まれている。

規模と形状 全長1.04mの柄鏡形で, 北部の奥行0.56m, 横幅0.44mの半楕円形を呈した焚口部に, 南部に奥行・横幅とも0.54mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-170°-Wである。焚口部は深さ5cmで, 底面は燃焼部に向かって緩やかに下がっている。燃焼部は深さ13cmで, 底面は皿状である。火床面の第3層上面と燃焼部の壁が, 一部火熱を受けて赤変硬化している。第3層を埋め戻して炉を構築している。

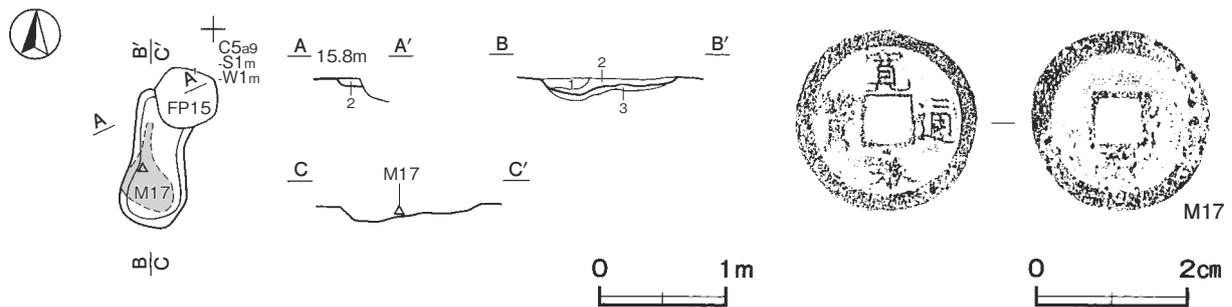
覆土 2層に分層できる。第3層は掘方への埋土である。第1・2層はロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 鉄製品1点（不明）、銭貨1点（寛永通寶）が、覆土中から出土している。M17は、覆土下層から出土していることから、埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後葉以降と考えられる。性格は不明である。



第166図 第14号炉跡・出土遺物実測図

第14号炉跡出土遺物観察表（第166図）

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M17	銭貨	寛永通寶	2.5	0.6	3.40	銅	1697	新寛永	覆土下層	PL36

第15号炉跡（第167図）

位置 調査区東部のC5a8区、標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第14号炉跡を掘り込んでいる。

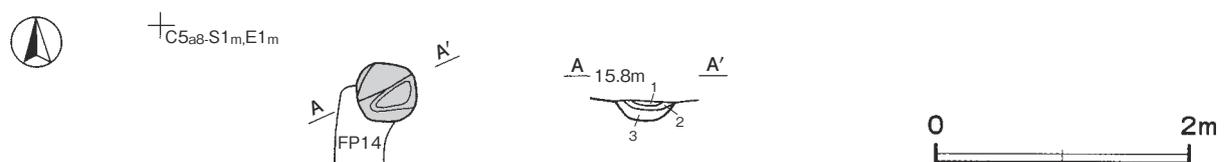
規模と形状 径0.50mの円形である。深さは17cmで、底面は皿状である。火床面は第3層下面で、火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。土砂が周囲から流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが、17世紀後葉以降と考えられる第14号炉跡との重複関係から、それ以降の可能性はある。性格は不明である。



第167図 第15号炉跡実測図

第16号炉跡（第168図）

位置 調査区東部のC5b8区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第530土坑を掘り込み，第13号炉に掘り込まれている。

規模と形状 全長1.50mの柄鏡形で，南部の奥行1.00m，横幅0.50mの不整半楕円形を呈した焚口部と，北部に奥行0.68m，横幅0.48mの楕円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-9°-Eである。焚口部は深さ12cmで，底面は凹凸があるが，燃焼部に向かって緩やかに上がっている。燃焼部は深さ16cmで，底面は平坦である。火床面の第2層上面と燃焼部の壁が，火熱を受けて赤変硬化している。第2～4層を埋め戻して炉を構築している。

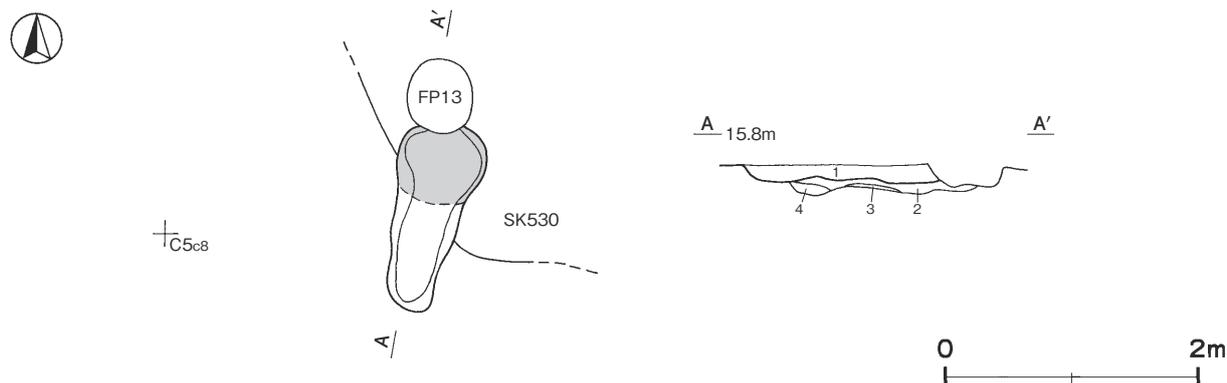
覆土 単一層である。第2～4層は掘方への埋土である。第1層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量 | 3 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点（鉢），磁器片1点（碗）が，覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は，出土土器が細片のため特定は困難であるが，江戸時代と考えられる。性格は不明である。

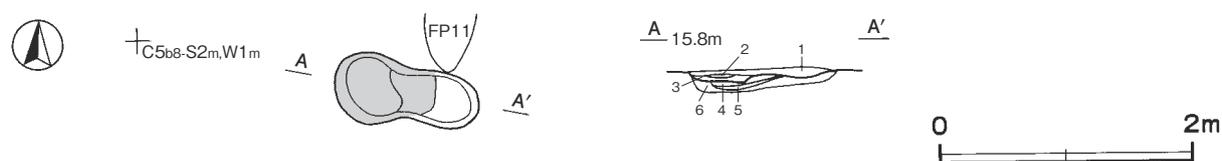


第168図 第16号炉跡実測図

第17号炉跡（第169図）

位置 調査区東部のC5b8区，標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 全長1.16mの柄鏡形で，東部の奥行0.70m，横幅0.42mの半楕円形を呈した焚口部に，西部に奥行・横幅とも0.46mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-78°-Wである。焚口部は深さ8cmで，底面は燃焼部に向かって緩やかに上がっている。燃焼部は深さ10cmで，底面は平坦である。火床面の第4・6層上面と燃焼部の壁が，火熱を受けて赤変硬化している。第4～6層を埋め戻して炉を構築している。



第169図 第17号炉跡実測図

覆土 3層に分層できる。第4～6層は掘方への埋土である。第1～3層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|----------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量 | 4 赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点(鉢)が、覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は不明である。

第18号炉跡 (第170図)

位置 調査区東部のC5b8区, 標高15mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第530号土坑を掘り込み, 第9号炉に掘り込まれている。

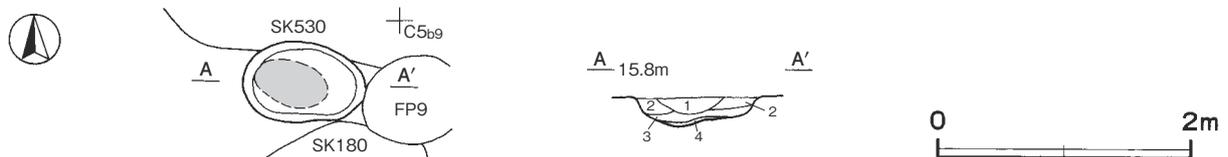
規模と形状 長径0.98m, 短径0.65mの楕円形で, 長径方向はN-88°-Wである。深さは24cmで, 底面は東から西に向かって下がっている。火床面は第4層下面で, 中央部が火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |

所見 時期は, 伴う遺物が出土していないため特定は困難であるが, 周辺に江戸時代と考えられる炉跡が位置していることから, ほぼ同時期の可能性がある。性格は不明である。



第170図 第18号炉跡実測図

第23号炉跡 (第171図)

位置 調査区東部のB5h8区, 標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3号地下式坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長1.54mの瓢箪形で, 東部の奥行0.92m, 横幅0.68mの不整半楕円形を呈した焚口部に, 西部に奥行・横幅とも0.60mの円形の燃焼部が接続している。長軸方向はN-71°-Wである。焚口部は深さ28cmで, 底面は燃焼部に向かって緩やかに上がっている。天井部はブリッジ状に一部残存している。燃焼部は深さ24cmで, 底面は皿状である。火床面は第3層上面で, 中央部が火熱を受けて赤変硬化している。第3層を埋め戻して炉を構築している。

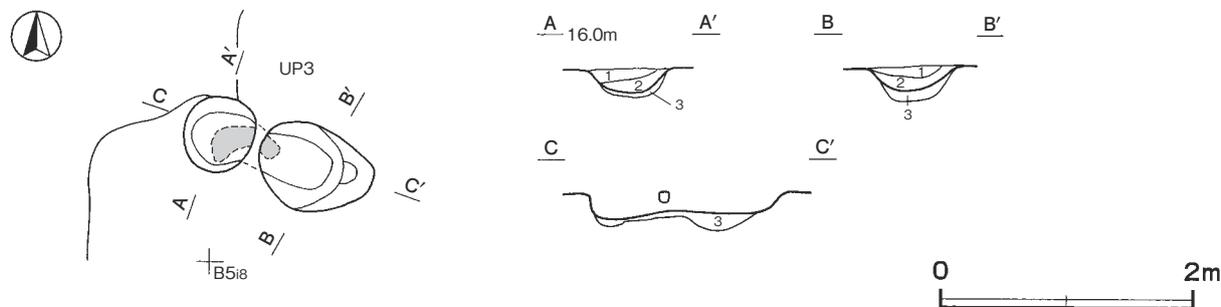
覆土 2層に分層できる。第3層は掘方への埋土である。第1・2層はロームブロックが多く含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 3 暗 赤 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 磁器片1点(碗), 鉄製品1点(釘)のほか, 土師器片1点(甕)が, 覆土中から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土土器が細片のため特定は困難であるが, 江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第171図 第23号炉跡実測図

表19 江戸時代炉跡一覧表

番号	位置	軸方向	平面形	全長(m)	焚口部			燃焼部			覆土	主な出土遺物	備考
					奥行×横幅(m)	深さ(cm)	底面	奥行×横幅(m)	深さ(cm)	底面			
1	C5a9	N-12°-E	柄鏡形	1.38	0.78×0.32	6	傾斜	0.68	12	皿状	人為	陶器, 鉄製品	SB5, SK71→本跡
2	B5j9	N-95°-W	瓢箪形	1.52	0.84×0.52	12	傾斜	0.66	16	皿状	人為	土師質土器, 鉄製品	SK75・141→本跡
3	B5i8	N-13°-W	瓢箪形	1.56	0.90×0.44	10	傾斜	0.76×0.66	12	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 鉄製品	UP4, FP4→本跡
4	B5i8	N-24°-W	瓢箪形	1.90	1.34×0.82	22	傾斜凹凸	0.76×0.60	20	平坦	人為		UP4→本跡→FP3
6	B5j8	N-6°-E	柄鏡形	1.09	0.66×0.30	2	傾斜	0.42	8	皿状	人為		
7	B5j8	N-13°-E	柄鏡形	1.04	0.58×0.36	3	傾斜	0.44	3	平坦	人為		
10	C5b8	N-7°-E	柄鏡形	1.50	0.94×0.38	8	傾斜	0.64	8	皿状	-	土師質土器	SK530→本跡
11	C5b8	N-3°-E	柄鏡形	1.38	0.88×0.40	8	傾斜	0.56	10	皿状	人為	陶器, 磁器	SK530→本跡
12	C5b8	N-97°-E	柄鏡形	1.32	0.72×0.40	8	傾斜	0.58	18	皿状	人為	陶器, 磁器	SN9→本跡
14	C5a8	N-170°-W	柄鏡形	1.04	0.56×0.44	5	傾斜	0.54	13	皿状	人為	鉄製品, 銭貨	本跡→FP15
16	C5b8	N-9°-E	柄鏡形	1.50	1.00×0.50	12	傾斜凹凸	0.68×0.48	16	平坦	人為	土師質土器, 磁器	SK530→本跡→FP13
17	C5b8	N-78°-W	柄鏡形	1.16	0.70×0.42	8	傾斜	0.46	10	平坦	人為	土師質土器	
23	B5h8	N-71°-W	瓢箪形	1.54	0.92×0.68	28	傾斜	0.60	24	平坦	人為	磁器, 鉄製品	UP3→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
5	C5a9	N-14°-E	楕円形	0.92×0.58	12	傾斜	外傾緩斜	人為		
8	C5b8	N-82°-W	不整楕円形	0.86×0.61	18	傾斜	外傾	自然		
9	C5c9	N-67°-E	楕円形	0.81×0.70	21	皿状	外傾	自然		SK180・530, FP18→本跡
13	C5b8	N-7°-E	楕円形	0.58×0.52	16	凹凸	外傾	人為		FP16→本跡
15	C5a8	-	円形	0.50×0.50	17	皿状	外傾	自然		FP14→本跡
18	C5b8	N-88°-W	楕円形	0.98×0.65	24	傾斜	外傾	人為		SK530→本跡→FP9

(6) 柱穴列

第8号柱穴列は, 第2号掘立柱建物跡に付帯する遺構であるため, 掘立柱建物跡の項で記述した。

第7号柱穴列 (第172図)

位置 調査区東部のC 5 a3区, 標高15 mほどの平坦な台地上に位置している。

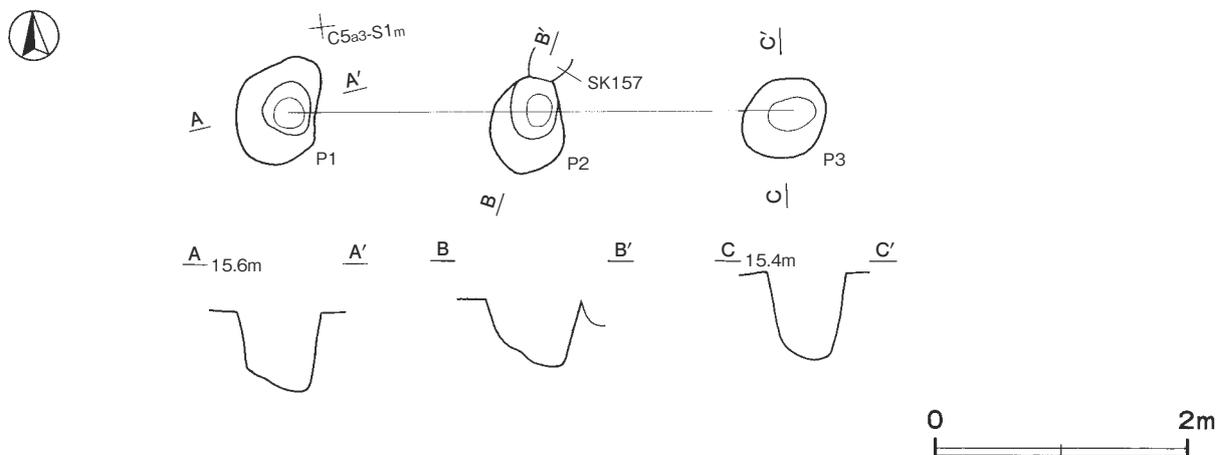
重複関係 第157号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 東西方向4.20 mの間に配列された柱穴3か所を確認した。軸方向はN - 85° - Wで、柱間寸法は、2.10 m (7尺)である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 3か所。平面形は円形または楕円形で、長径68 ~ 90cm, 短径60 ~ 66cmである。深さは49 ~ 71cmで、掘方の断面はU字状である。

遺物出土状況 土師質土器片4点(焙烙), 陶器片1点(碗), 磁器片2点(碗)が、柱穴の覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため特定は困難であるが、江戸時代と考えられる。性格は不明である。



第172図 第7号柱穴列実測図

表20 江戸時代柱穴列一覧表

番号	位置	主軸方向	長さ (m)	柱間 (m)	柱 穴					主な出土遺物	備 考
					柱穴数	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
7	C 5 a3	N - 85° - W	4.20	2.10	3	円形・楕円形	68 ~ 90	60 ~ 66	49 ~ 71	土師質土器, 陶器, 磁器	本跡→SK157
8	C 4 a2 ~ C 4 a5	N - 11° - W N - 78° - E	南北 6.00 東西 5.40	1.50 ~ 2.40	7	円形・楕円形	40 ~ 62	34 ~ 44	14 ~ 42		本跡→SN 4 SB 2に付帯する遺構

4 その他の遺構と遺物

今回の調査で、伴う遺物が出土していないことから、時期が明らかでない竪穴建物跡1棟, 土坑321基, 炉跡4基, 道路跡1条, 溝跡5条, 柱穴列6条, ピット群4か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第2号竪穴建物跡 (第173図)

位置 調査区東部のB 6 j4区, 標高16 mほどの平坦な台地上に位置している。

確認状況 確認面で、竈が付設された北壁中央部から東壁中央部にかけての範囲及び柱穴4か所を確認した。

重複関係 第106・107・110号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分が削平されているため、規模や形状は不明であるが、竈と柱穴の配置から1辺4.80mほどの方形と推測できる。壁は高さ11～17cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。確認できた範囲の壁下には、壁溝が巡っている。

竈 柱穴の配置から、北壁の中央部に付設されていると推測できる。確認できた規模は、焚口部から煙道部まで116cmで、燃焼部幅は42cmである。東側の袖部は、床面とほぼ同じ高さの地山に粘土粒子を主体とした第3層を積み上げて構築されている。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめた部分に第2層を埋土として構築されている。火床面は第2層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部及び煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 灰褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・細砂微量

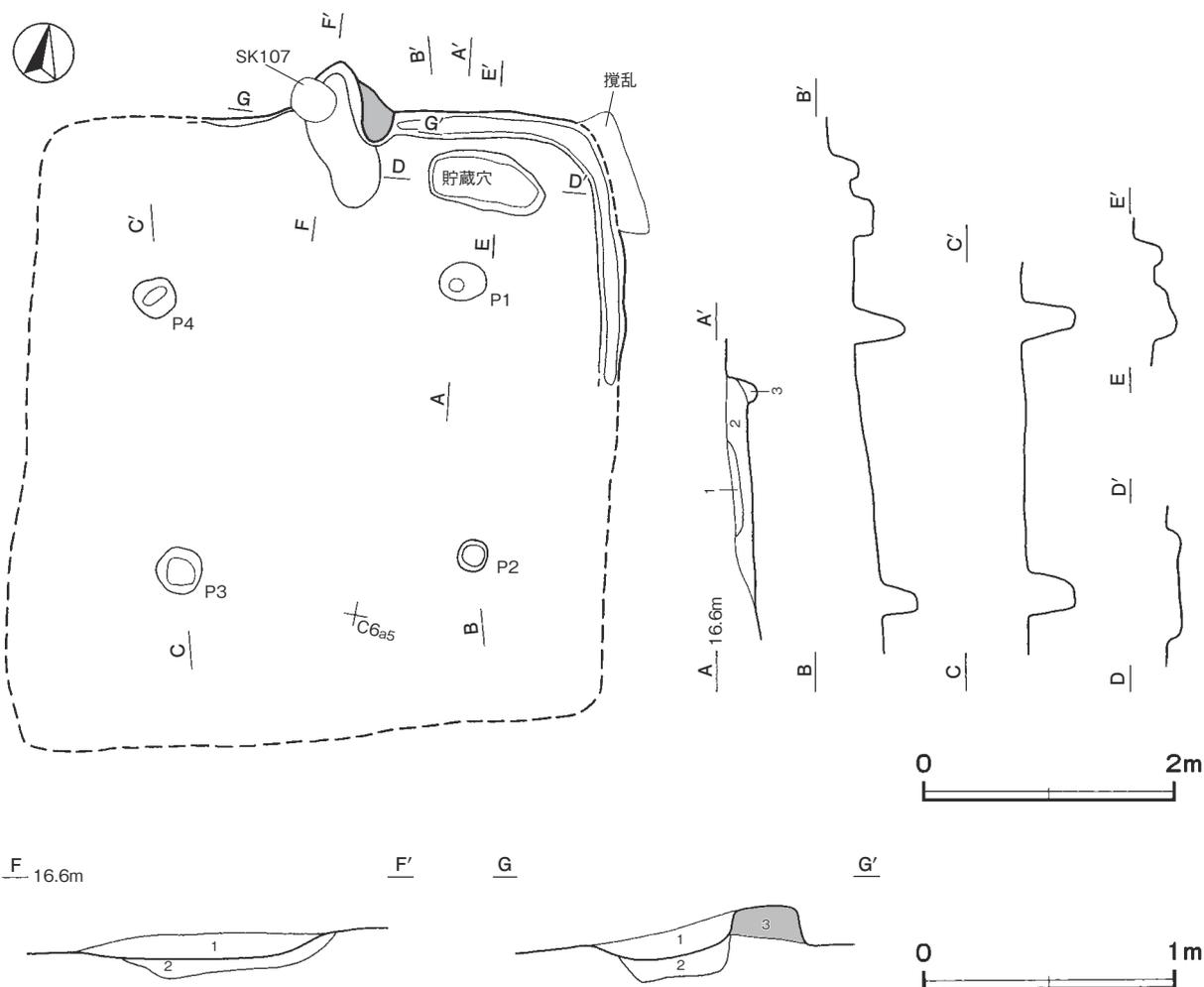
ピット 4か所。P1～P4は深さ30～45cmで、規模と配置から支柱穴である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径94cm、短径47cmの不整長楕円形で、深さは18cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。含有物の少ない黒褐色土と暗褐色土であることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量



第173図 第2号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 8 点 (坏 2, 甕 6), 須恵器片 2 点 (甕) が, 覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

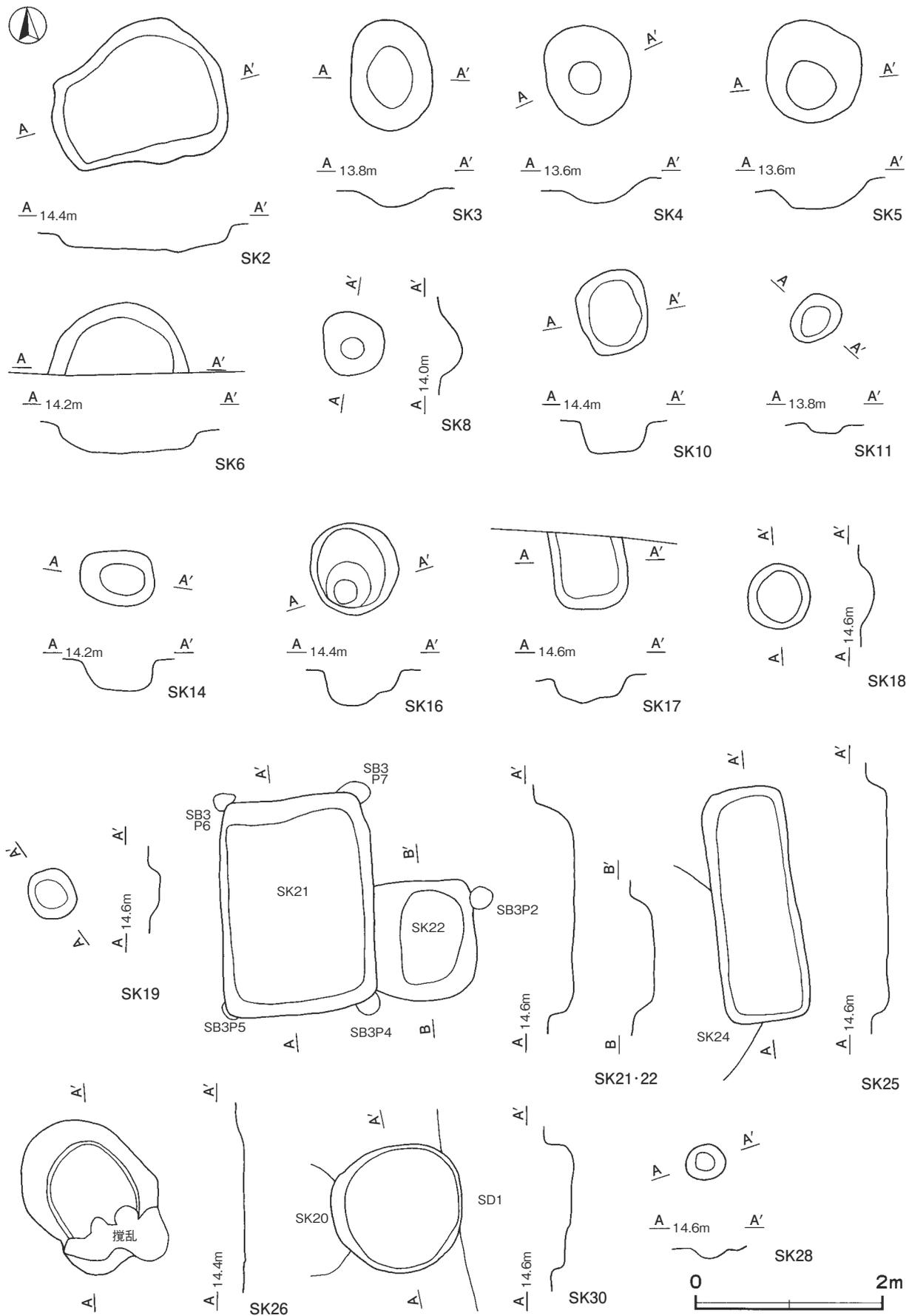
所見 時期は, 規模や形状から奈良・平安時代の可能性があるが, 出土土器が細片のため, 詳細は不明である。

(2) 土坑

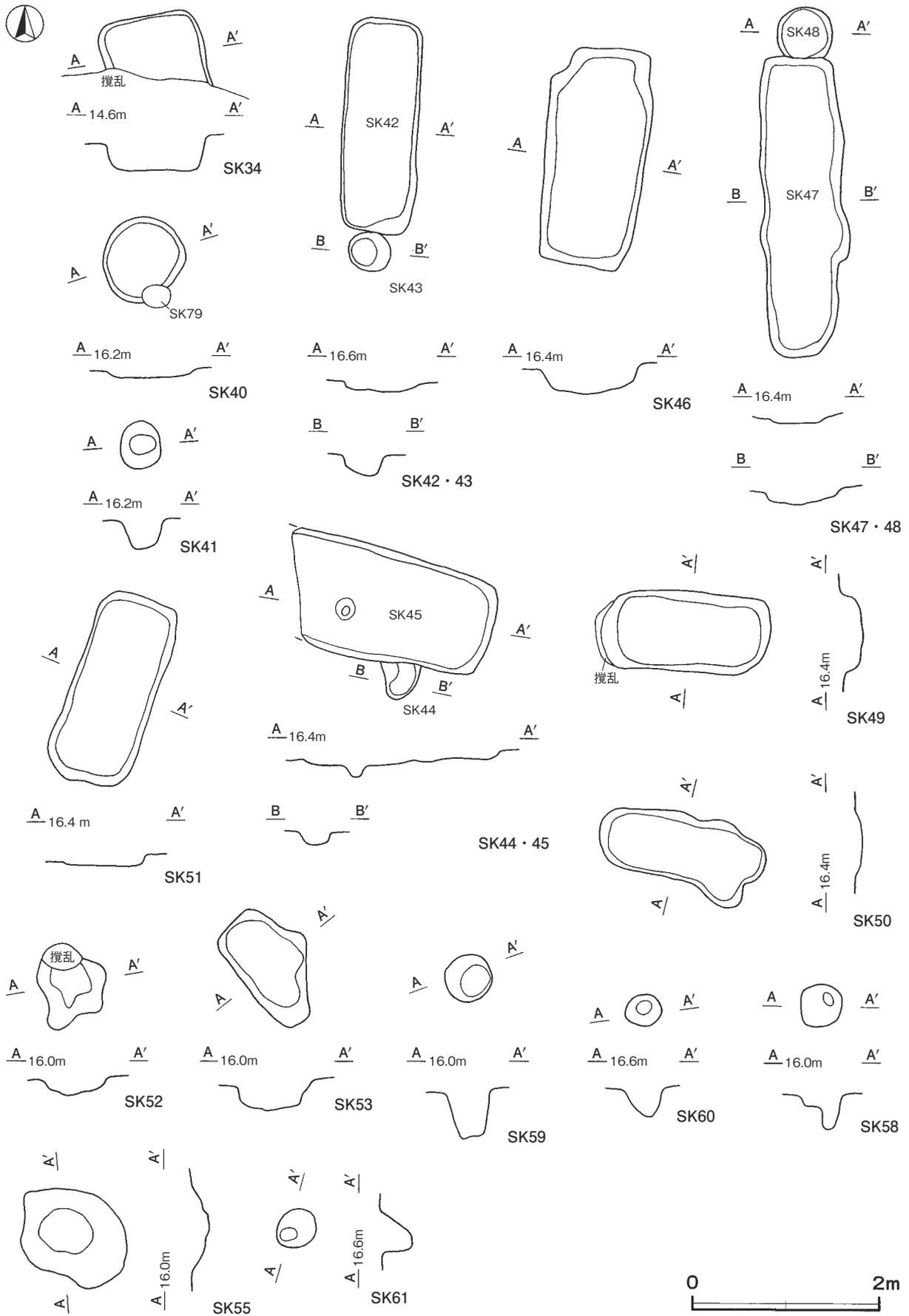
時期不明の土坑 321 基については, 実測図 (第 174 ~ 186 図) と一覧表を掲載する。

表 21 その他の土坑一覧表

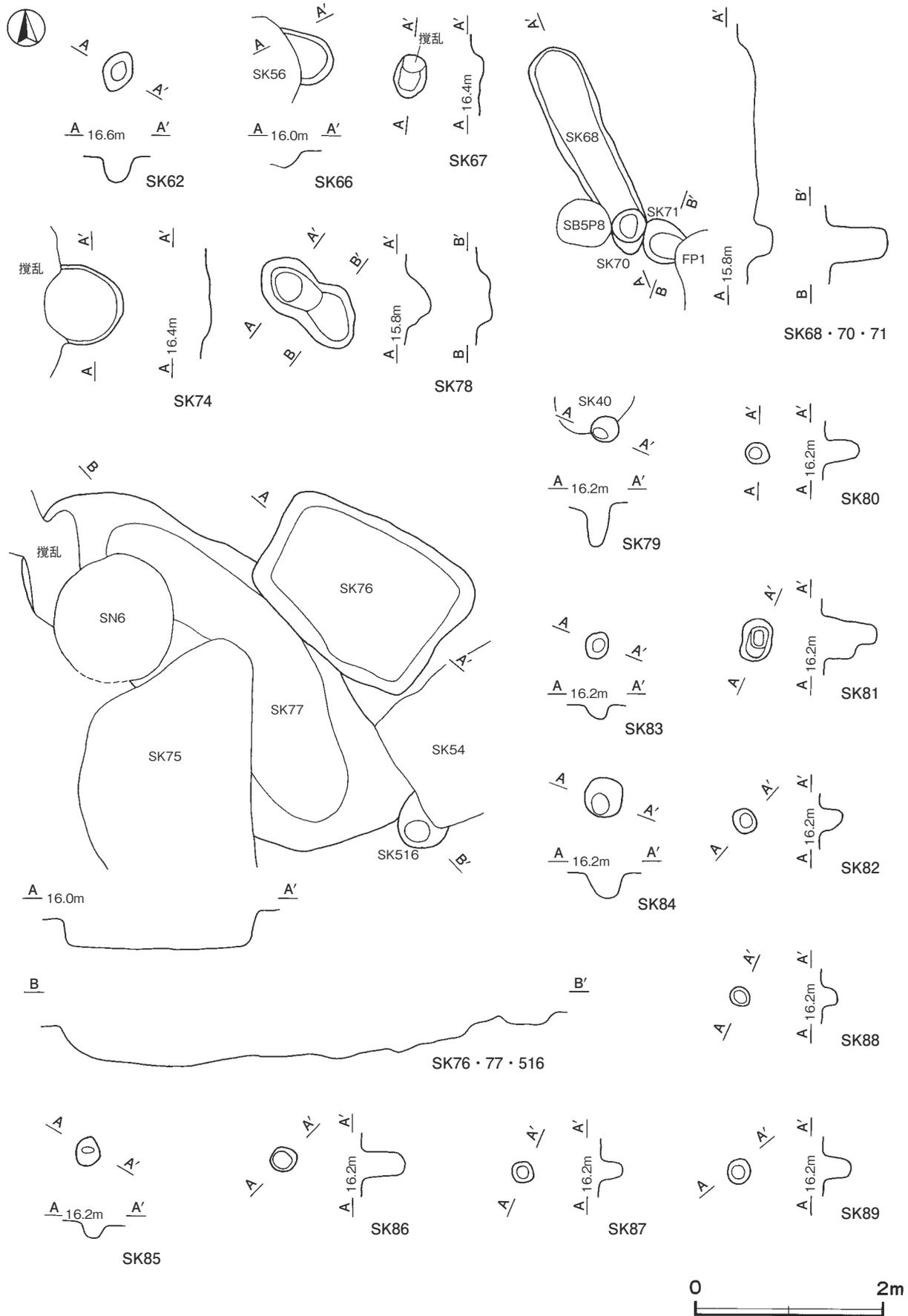
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	B 3 h0	N - 66° - E	不整楕円形	1.90 × 1.55	26	平坦	外傾	自然		
3	C 3 b9	N - 3° - E	楕円形	1.20 × 0.88	20	皿状	緩斜	自然		
4	C 3 b9	N - 3° - W	楕円形	1.06 × 0.90	20	皿状	緩斜	自然		
5	C 3 b9	-	円形	1.13 × 1.03	26	平坦	外傾	自然		
6	C 4 b1	-	[円形]	(1.50) × (0.76)	30	平坦	外傾	自然		
8	C 3 b0	-	円形	0.72 × 0.68	22	皿状	緩斜	自然		
10	C 4 a2	N - 19° - W	隅丸長方形	0.88 × 0.75	35	平坦	外傾	自然		
11	C 3 a0	N - 49° - E	楕円形	0.58 × 0.47	12	平坦	外傾	自然	縄文土器, 土師器	
14	C 4 b1	N - 80° - W	楕円形	0.83 × 0.63	33	平坦	外傾直立	自然		
16	C 4 a2	-	円形	1.00 × 0.94	40	有段	外傾	自然		
17	B 4 f1	N - 8° - W	[隅丸長方形]	(0.80) × 0.76	29	凹凸	外傾	自然		
18	B 4 g3	-	円形	0.72 × 0.68	16	皿状	緩斜	自然		
19	B 4 g2	-	円形	0.55 × 0.52	14	平坦	外傾緩斜	自然		
21	B 4 g3	N - 1° - W	隅丸長方形	2.36 × 1.64	38	平坦	緩斜	人為	土師器, 土師質土器, 陶器, 鉄製品, 剥片	SK22 → SB 3 → 本跡
22	B 4 g3	N - 1° - W	隅丸長方形	1.31 × 1.09	25	平坦	外傾	人為		本跡 → SB 3 → SK21
25	B 4 g3	N - 7° - W	隅丸長方形	2.54 × 0.93	20	平坦	外傾	自然	縄文土器, 土師器	SK24 → 本跡
26	C 4 b3	N - 22° - W	不整楕円形	1.64 × 1.26	6	平坦	緩斜	自然	陶器	
28	B 4 h4	-	円形	0.43 × 0.40	13	皿状	緩斜	自然		SK34 → 本跡
30	B 4 i3	-	円形	1.46 × 1.38	30	凹凸	外傾直立	自然	縄文土器, 陶器, 磁器	SK20, SD 1 → 本跡
34	B 4 h4	N - 75° - E	[方形・長方形]	1.07 × (0.80)	36	平坦	外傾	自然		本跡 → SK28
40	C 6 a8	-	円形	0.93 × 0.89	9	平坦	緩斜	自然	土師器	本跡 → SK79
41	B 6 j8	N - 0°	楕円形	0.50 × 0.42	32	傾斜	外傾	自然		
42	B 6 h3	N - 3° - E	隅丸長方形	2.29 × 0.84	10	平坦	緩斜	自然		
43	B 6 i3	-	円形	0.44 × 0.41	21	傾斜	外傾	自然		
44	B 6 j2	N - 10° - E	[円形・楕円形]	(0.41) × 0.41	14	皿状	外傾	自然	土師器, 陶器	SK45 → 本跡
45	B 6 j2	N - 77° - W	[長方形]	(2.11) × 1.23	16	凹凸	緩斜	自然		本跡 → SK44
46	B 6 i2	N - 9° - E	不整長方形	2.38 × 1.09	39	皿状	外傾	自然	土師器, 土師質土器	
47	B 6 h1	N - 0°	不整長方形	3.23 × 0.96	12	平坦	外傾	自然		SK48 → 本跡
48	B 6 h1	-	円形	0.60 × (0.55)	5	平坦	緩斜	自然		本跡 → SK47
49	B 6 j2	N - 88° - W	隅丸長方形	(1.80) × 0.86	22	皿状	外傾	自然	土師器, 土師質土器	
50	B 6 j2	N - 75° - W	不整長楕円形	1.83 × 0.74	7	平坦	緩斜	自然		
51	B 6 i1	N - 22° - E	隅丸長方形	2.10 × 0.90	10	平坦	外傾	自然		
52	B 5 i9	N - 19° - W	不定形	(0.74) × 0.71	17	凹凸	外傾	自然		
53	B 5 j9	N - 41° - W	不整楕円形	1.30 × 0.83	39	皿状	外傾	自然		
55	B 5 j9	N - 50° - W	不整楕円形	1.30 × 0.98	18	皿状	緩斜	自然	陶器	
58	B 5 j9	-	円形	0.46 × 0.44	37	有段	外傾	自然		



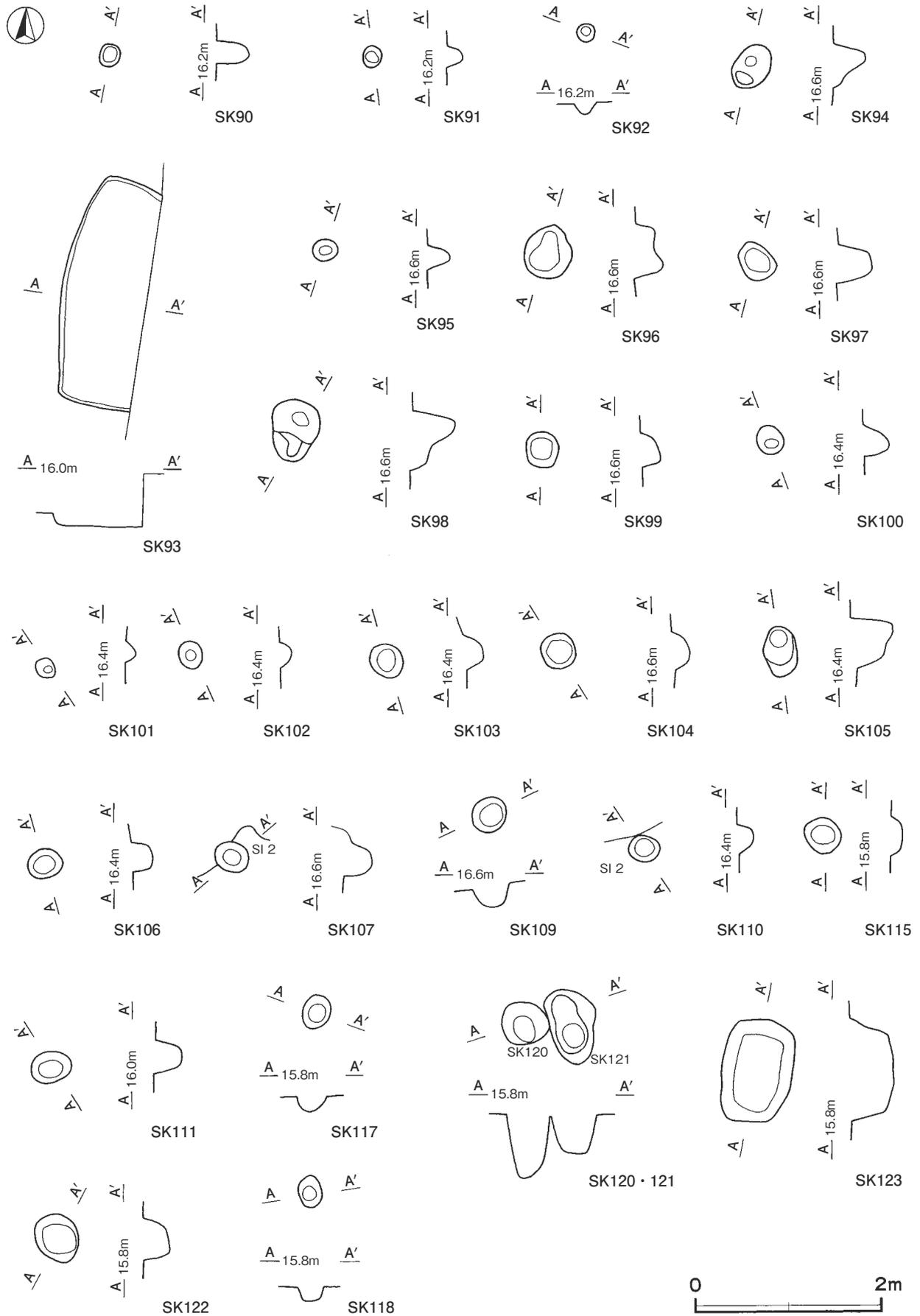
第 174 図 その他の土坑実測図 (1)



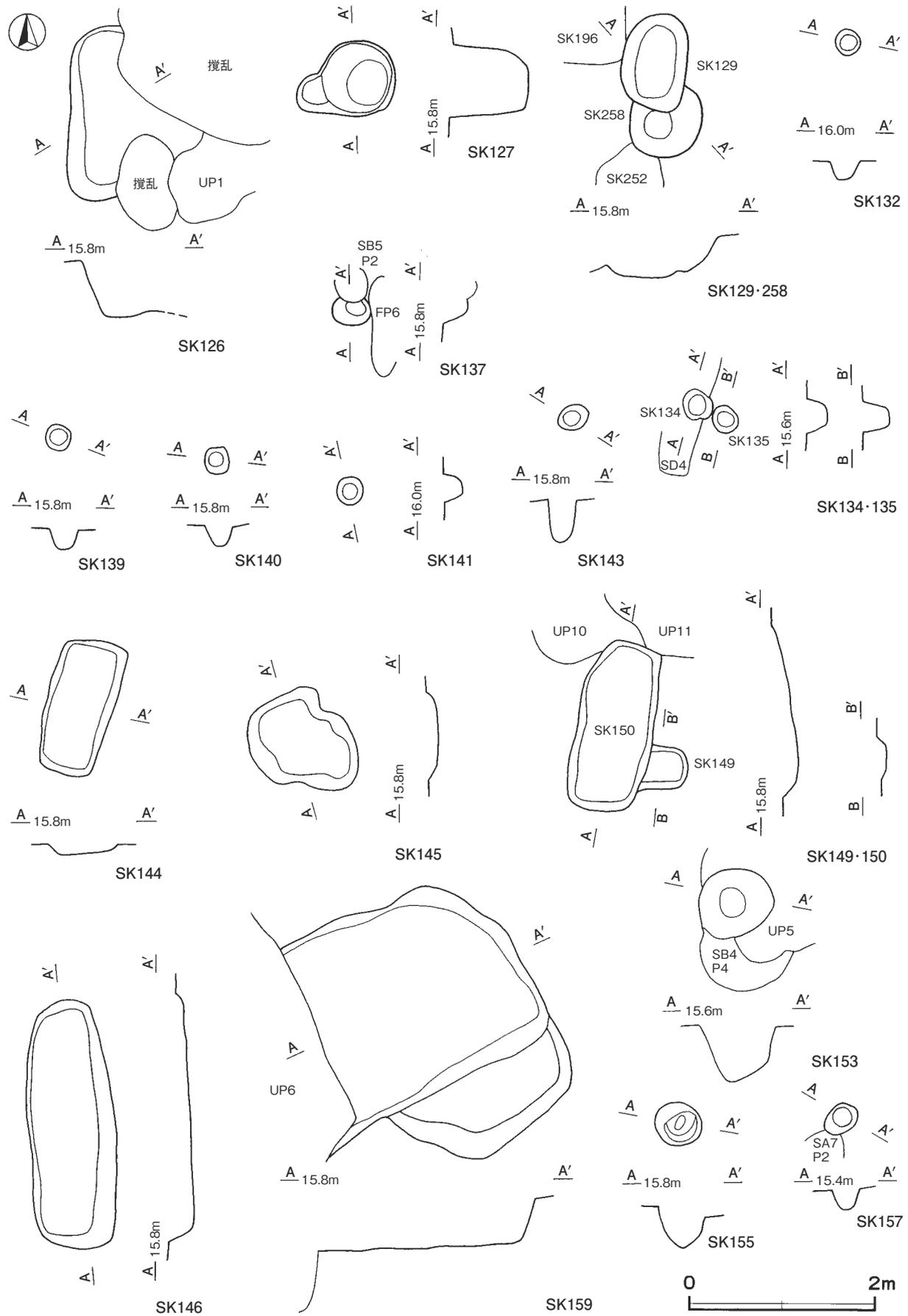
第 175 図 その他の土坑実測図 (2)



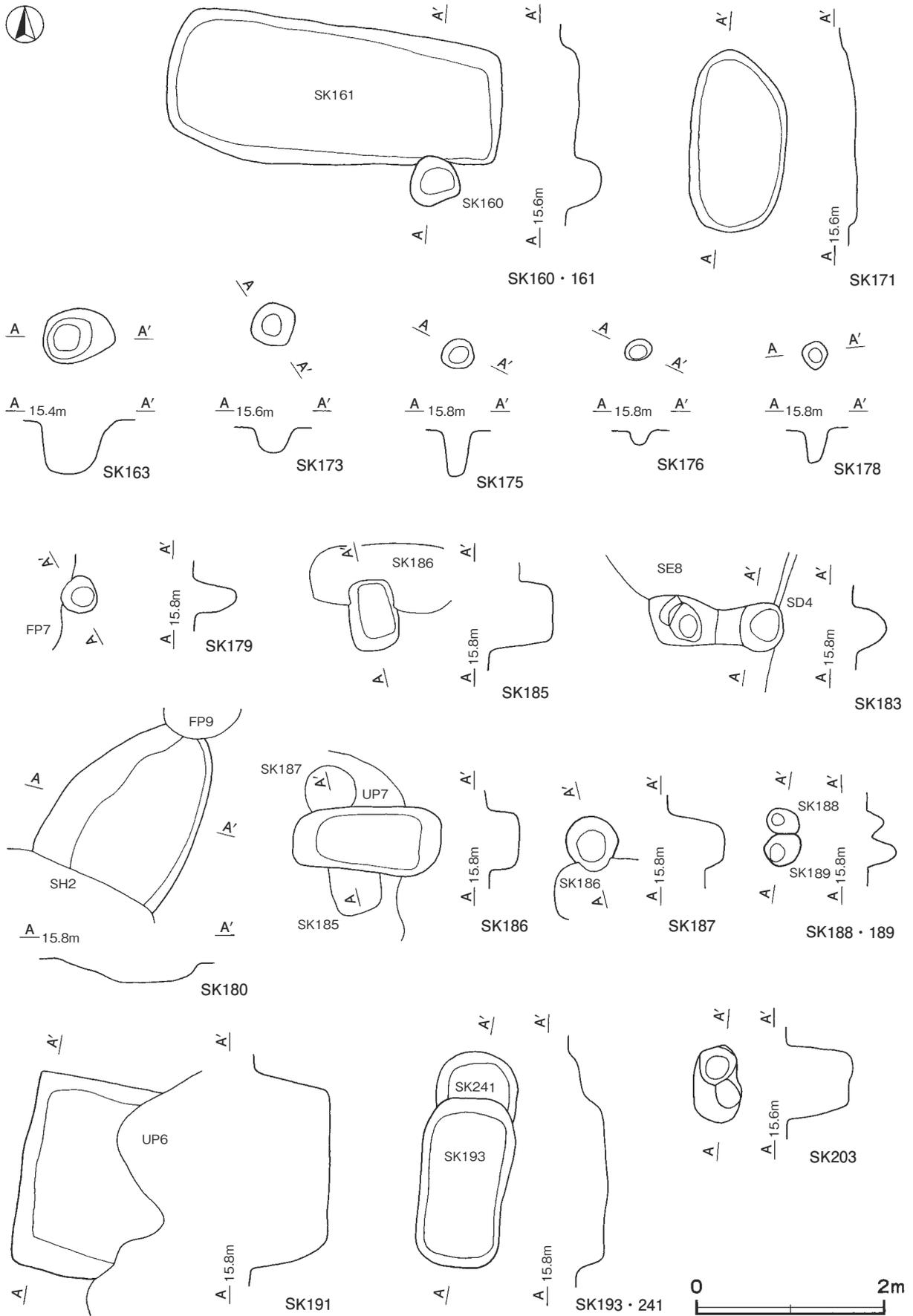
第 176 図 その他の土坑実測図 (3)



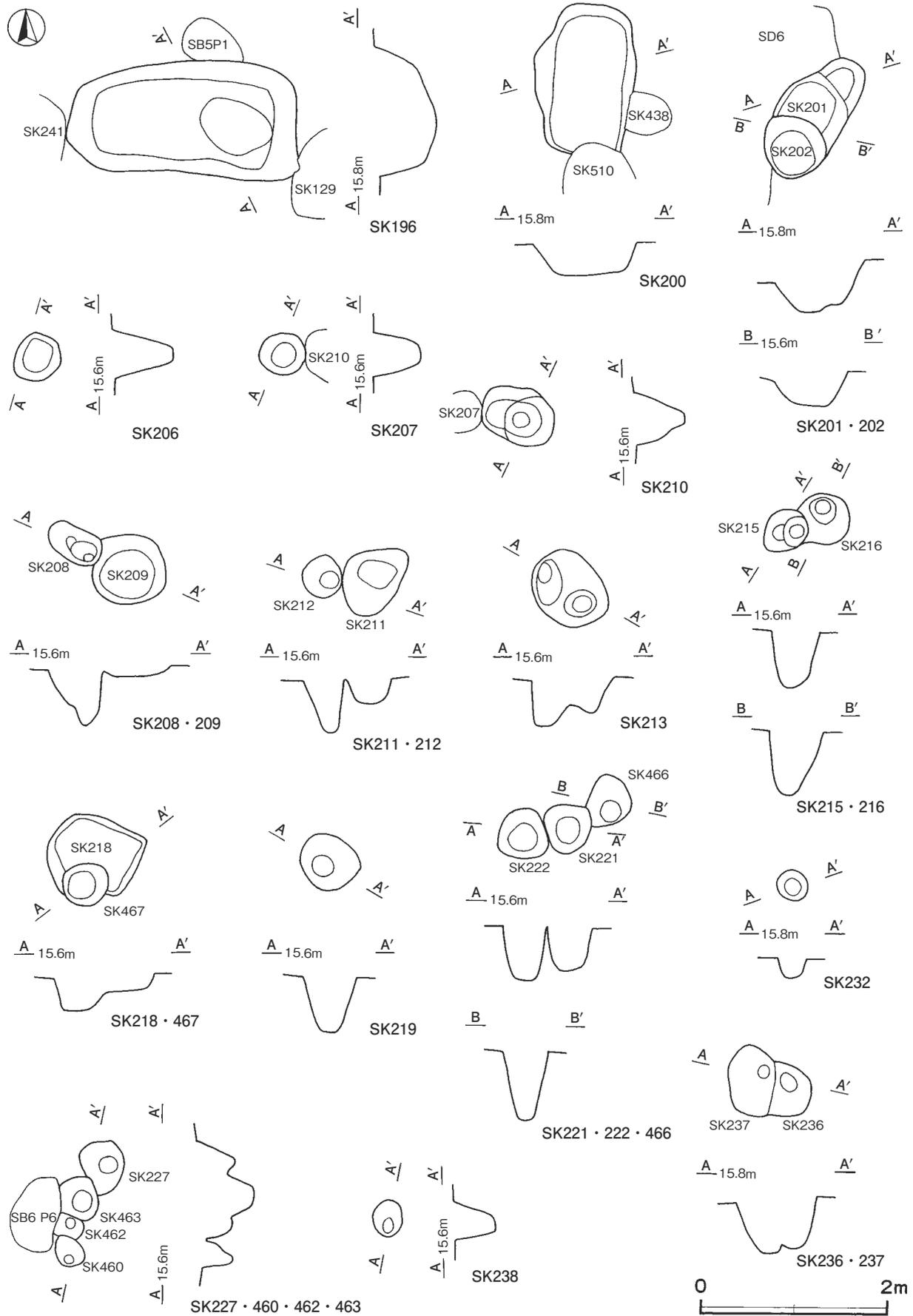
第 177 図 その他の土坑実測図 (4)



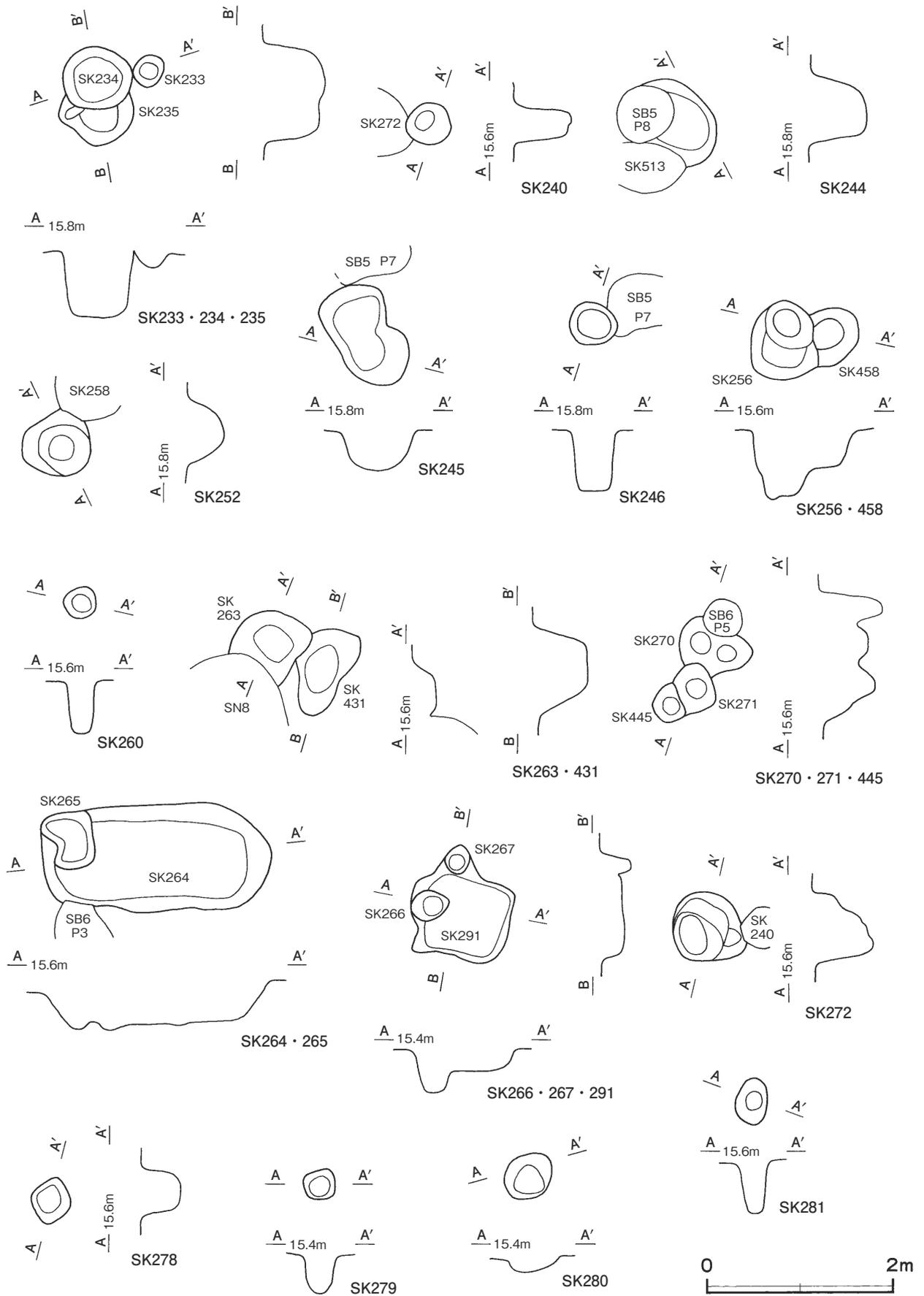
第 178 図 その他の土坑実測図 (5)



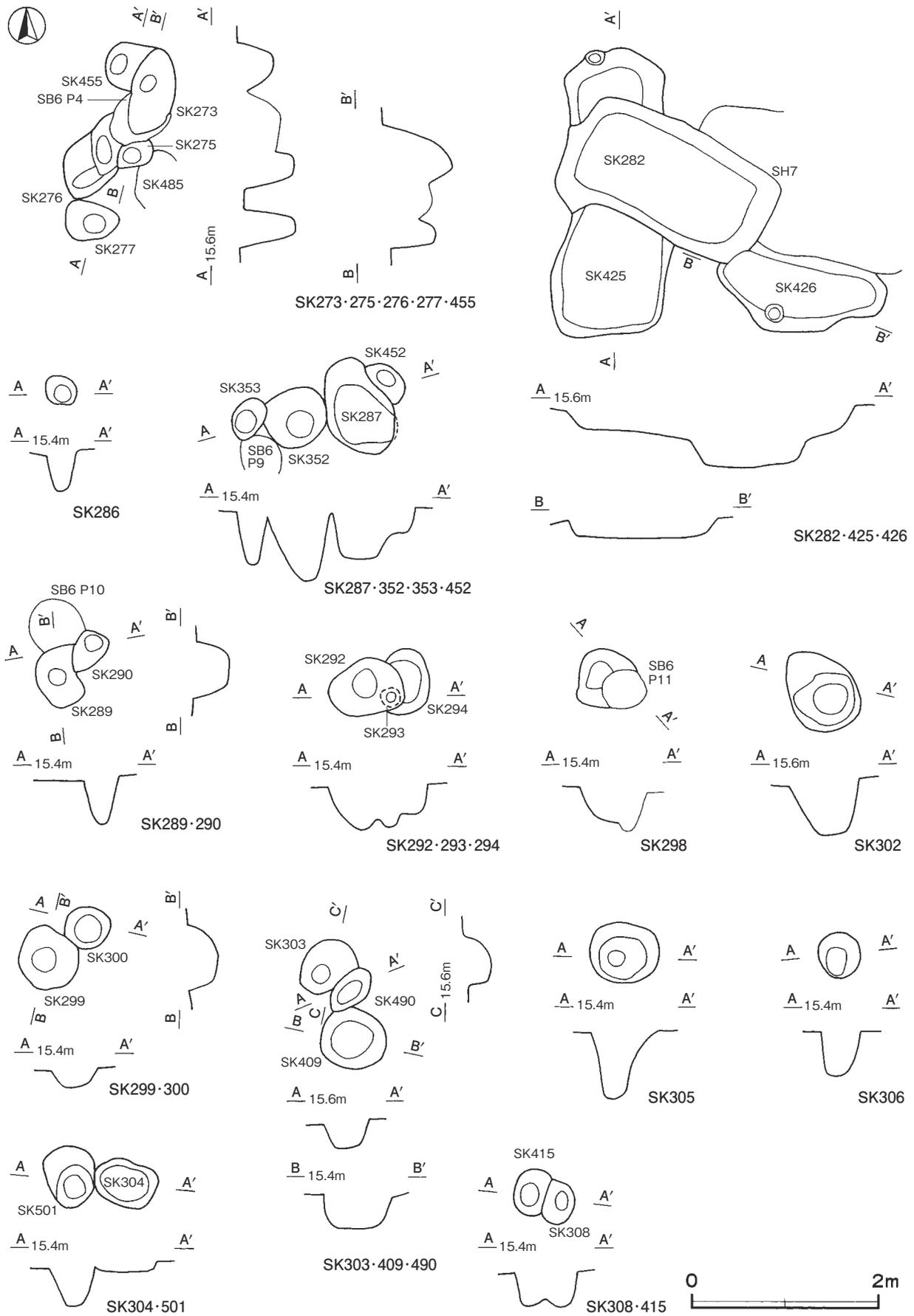
第 179 図 その他の土坑実測図 (6)



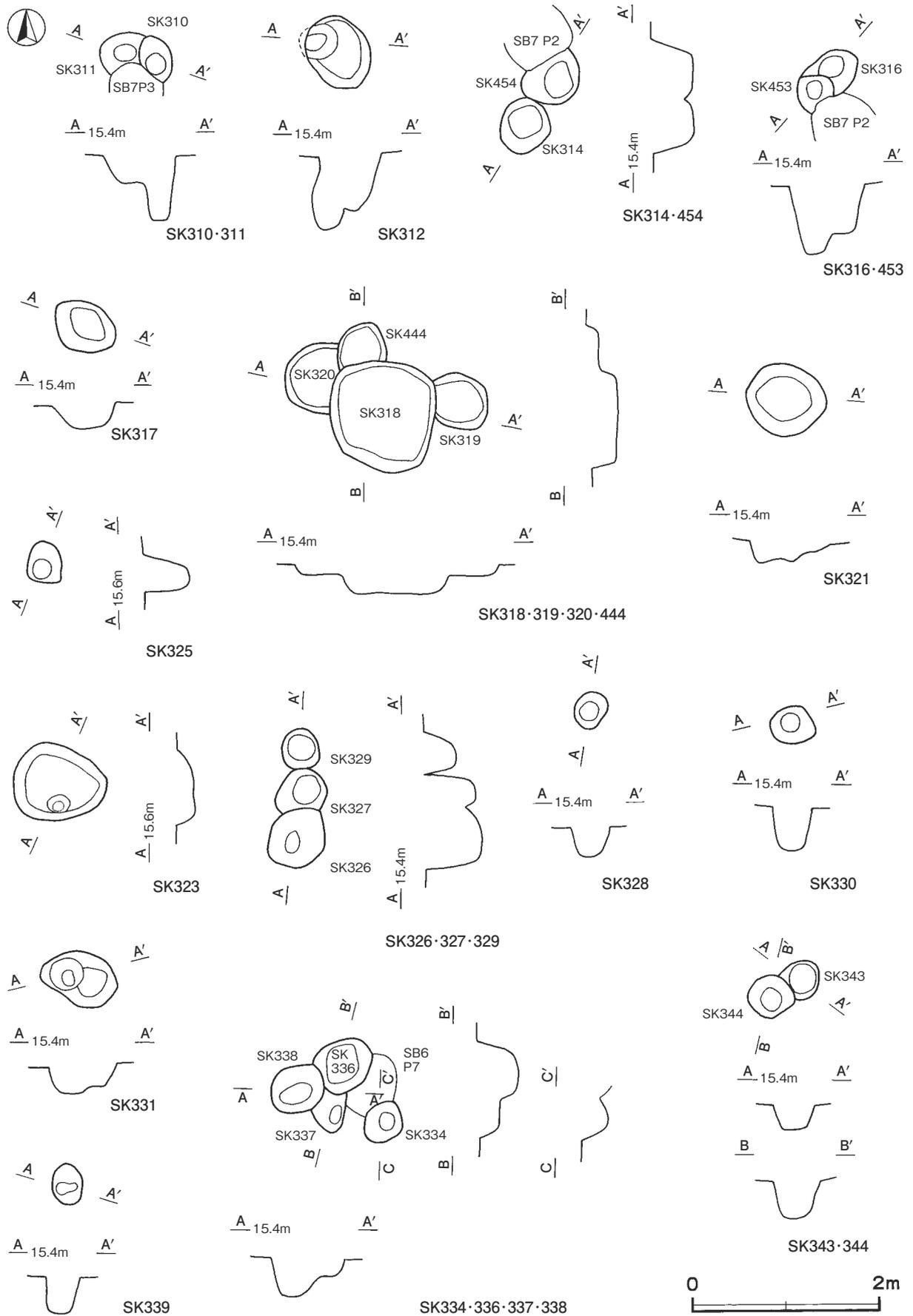
第 180 図 その他の土坑実測図 (7)



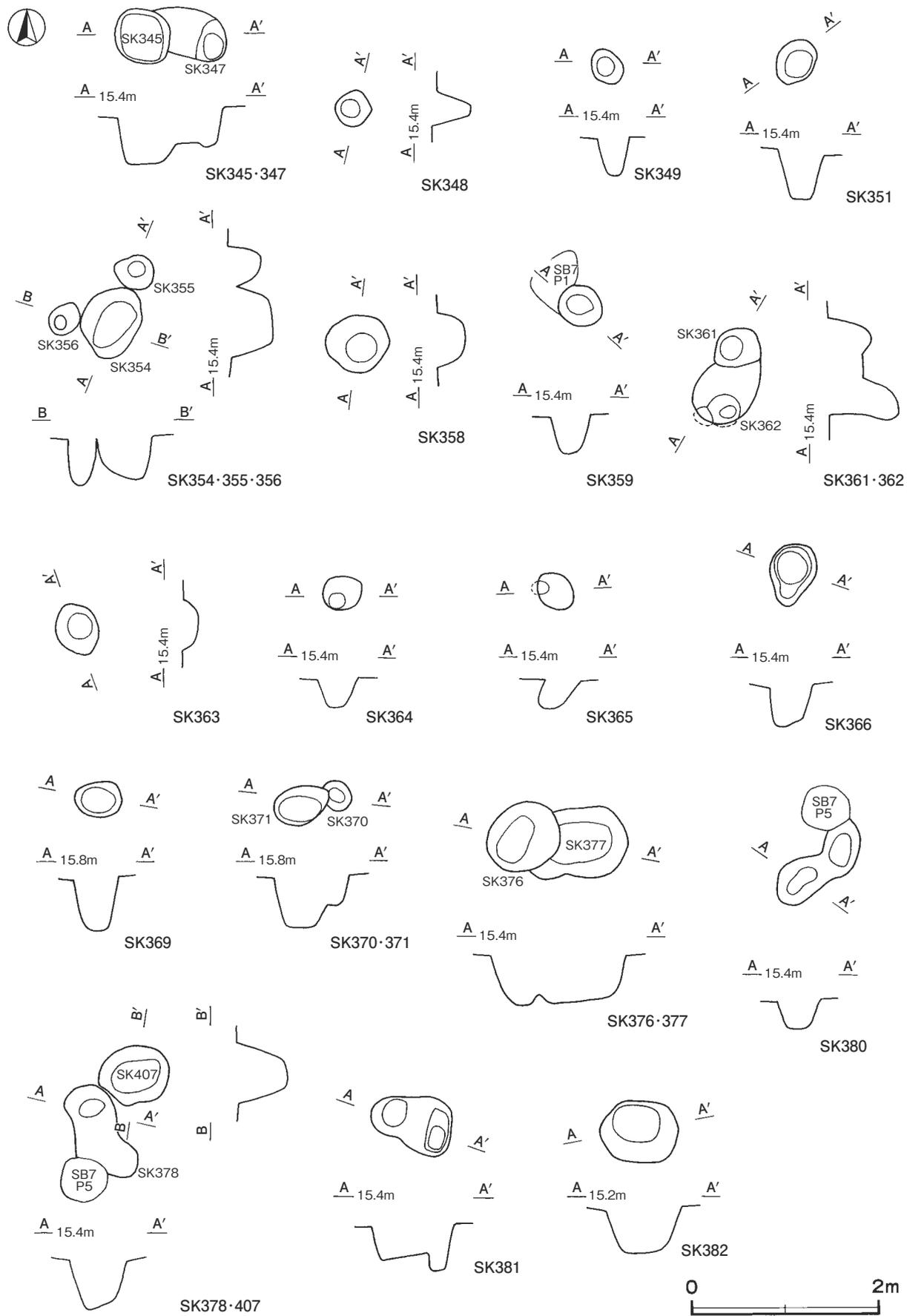
第 181 図 その他の土坑実測図 (8)



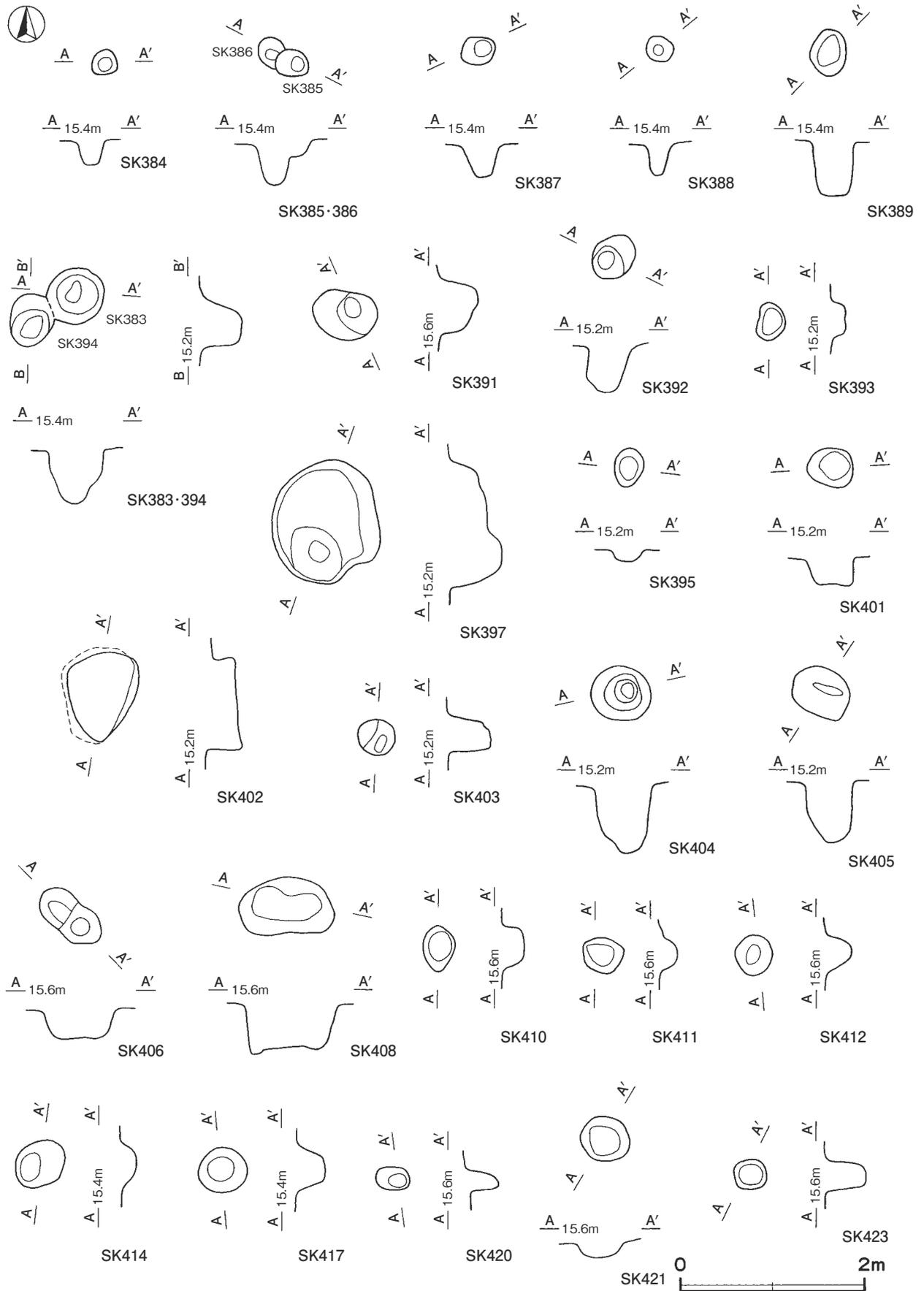
第 182 図 その他の土坑実測図 (9)



第 183 図 その他の土坑実測図 (10)



第 184 図 その他の土坑実測図 (11)



第 185 図 その他の土坑実測図 (12)

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
59	B 5j9	-	円形	0.50 × 0.50	50	平坦	外傾	自然	土師器	
60	B 6i2	N - 90°	楕円形	0.40 × 0.35	32	皿状	外傾	自然		
61	B 6i3	-	円形	0.45 × 0.41	31	皿状	外傾	自然		
62	B 6i3	N - 25° - E	楕円形	0.45 × 0.31	28	皿状	外傾	自然		
66	B 5j0	N - 75° - W	[楕円形]	(0.52) × (0.48)	16	皿状	外傾	自然		本跡→SK56
67	B 6i3	N - 5° - E	楕円形	0.47 × 0.35	18	皿状	外傾 緩斜	自然		
68	B 5j8	N - 22° - W	長楕円形	2.40 × 0.55	15	平坦	外傾	自然	土師質土器	本跡→SB 5 SK70と新旧不明
70	B 5j9	N - 4° - E	楕円形	0.48 × 0.35	28	皿状	外傾	自然		SK68と新旧不明
71	B 5j9	N - 67° - W	[楕円形]	(0.51) × 0.41	61	平坦	外傾	自然		本跡→FP 1
74	C 6a6	-	[円形・楕円形]	0.84 × (0.80)	8	凹凸	緩斜	自然	土師質土器	
76	B 5i9	N - 60° - W	隅丸長方形	2.11 × 1.65	38	平坦	直立	人為		SK77→本跡
77	B 5i9	N - 43° - W	不整楕円形	4.84 × (1.81)	48	凹凸	外傾 緩斜	人為	土師器, 土師質土器, 陶器, 磁器, 石製品, 鉄製品, 鉄滓	本跡→SN 6, SK54・ 75・76・516
78	B 5i7	N - 56° - W	[不整楕円形]	1.25 × 0.62	26	皿状	外傾	自然		
79	C 6a8	-	円形	0.30 × 0.28	40	有段	外傾 直立	自然		SK40→本跡
80	C 6a7	-	円形	0.26 × 0.24	36	皿状	直立	自然		
81	C 6a7	N - 20° - E	楕円形	0.46 × 0.32	58	有段	外傾	自然	土師器, 須恵器, 土師質土器	
82	C 6a7	N - 20° - W	楕円形	0.27 × 0.23	26	皿状	外傾	自然	土師器	
83	C 6a8	N - 28° - E	楕円形	0.30 × 0.25	17	皿状	外傾 緩斜	自然		
84	C 6a8	-	円形	0.43 × 0.41	28	平坦	外傾	自然		
85	C 6a7	N - 15° - W	楕円形	0.29 × 0.25	15	平坦	外傾	自然		
86	C 6a7	-	円形	0.28 × 0.27	47	皿状	直立	自然		
87	C 6a7	-	円形	0.24 × 0.23	26	平坦	直立	自然		
88	C 6b7	-	円形	0.23 × 0.22	18	平坦	直立	自然	土師器	
89	C 6b7	-	円形	0.26 × 0.24	31	平坦	外傾	自然		
90	C 6b7	-	円形	0.23 × 0.21	36	皿状	直立	自然	土師器, 須恵器	
91	C 6a7	-	円形	0.21 × 0.20	15	皿状	外傾	自然		
92	C 6b7	-	円形	0.20 × 0.20	14	皿状	外傾	自然		
93	B 6j8	N - 11° - E	[長方形]	2.35 × (0.94)	12	平坦	直立	自然	土師器, 陶器	
94	B 6i5	N - 35° - E	楕円形	0.51 × 0.37	34	有段	外傾	自然		
95	B 6i5	-	円形	0.27 × 0.25	22	皿状	外傾	自然	石製品	
96	B 6i4	N - 16° - E	楕円形	0.59 × 0.51	29	凹凸	外傾	自然		
97	B 6h5	N - 43° - W	楕円形	0.43 × 0.35	35	平坦	外傾	自然		
98	B 6i4	N - 14° - E	楕円形	0.65 × 0.52	45	有段	外傾	人為	土師器	
99	B 6i4	-	円形	0.40 × 0.37	19	皿状	外傾	自然	鉄製品	
100	B 6h3	N - 20° - W	楕円形	0.32 × 0.27	28	皿状	外傾	自然		
101	B 6i3	N - 42° - W	楕円形	0.23 × 0.20	10	皿状	外傾	自然		
102	B 6i3	N - 24° - W	楕円形	0.29 × 0.25	12	皿状	外傾	自然		
103	B 6j3	N - 53° - W	楕円形	0.40 × 0.34	20	平坦	外傾	自然		
104	B 6j3	-	円形	0.38 × 0.37	16	皿状	外傾	自然		
105	B 6i4	N - 5° - W	楕円形	0.52 × 0.38	42	有段	外傾	人為		
106	B 6j4	N - 90°	楕円形	0.37 × 0.32	22	平坦	直立	自然	土師器	SI 2→本跡
107	B 6j4	N - 47° - W	楕円形	0.37 × 0.33	30	皿状	直立	自然		SI 2→本跡
109	B 6i4	-	円形	0.38 × 0.37	26	皿状	外傾	自然		
110	B 6j4	-	円形	0.31 × 0.31	15	皿状	外傾	自然	須恵器	SI 2→本跡
111	B 5i8	N - 65° - E	楕円形	0.45 × 0.36	30	平坦	外傾	自然	土師器, 土師質土器, 陶器, 鉄製 品	
115	B 5j5	-	円形	0.30 × 0.30	12	平坦	外傾	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
117	C 5 b9	N - 26° - E	楕円形	0.36 × 0.30	18	皿状	外傾	自然		
118	C 5 c9	N - 0°	楕円形	0.34 × 0.25	12	皿状	外傾	自然		
120	C 5 a8	-	円形	0.50 × 0.49	73	皿状	直立	人為		SK121 と新旧不明
121	C 5 a8	N - 22° - W	楕円形	0.82 × 0.52	64	有段	外傾 直立	自然	須恵器	SK120 と新旧不明
122	C 5 a8	N - 23° - W	楕円形	0.53 × 0.45	30	平坦	外傾	自然		
123	B 5 j6	N - 10° - E	隅丸長方形	1.13 × 0.75	46	皿状	外傾	自然		
126	B 5 j8	N - 0°	[不定形]	1.88 × (1.44)	60	平坦	外傾	人為		UP 1 → 本跡
127	B 5 j7	N - 70° - E	不整楕円形	1.10 × 0.81	82	有段	直立	人為		
129	C 5 a8	N - 8° - E	楕円形	1.05 × 0.71	50	平坦	外傾	人為		SK196・258 → 本跡
132	B 5 j8	-	円形	0.28 × 0.27	19	平坦	外傾	自然		
134	B 5 j5	-	円形	0.36 × 0.35	22	平坦	外傾	自然		本跡 → SD 4
135	B 5 j5	-	円形	0.30 × 0.29	29	平坦	外傾	自然		
137	B 5 j8	N - 0°	不整楕円形	1.42 × (0.24)	41	平坦	外傾	自然		本跡 → SB 5
139	C 5 b8	-	円形	0.28 × 0.26	22	平坦	外傾	自然		
140	C 5 a9	-	円形	0.28 × 0.27	21	平坦	外傾	自然		
141	B 5 j9	-	円形	0.30 × 0.30	19	平坦	外傾	自然		
143	C 5 a8	N - 57° - E	楕円形	0.33 × 0.26	45	皿状	直立	自然		
144	B 5 i3	N - 15° - E	長方形	1.48 × 0.75	10	平坦	緩斜	自然		
145	B 5 i2	N - 45° - W	不定形	1.26 × 1.03	11	平坦	緩斜	自然		
146	B 5 h2	N - 6° - W	長楕円形	2.70 × 0.93	28	平坦	緩斜	自然		
149	B 5 i3	N - 86° - E	[楕円形]	(0.82) × 0.47	9	平坦	緩斜	人為		本跡 → SK150
150	B 5 i3	N - 10° - E	隅丸長方形	1.82 × 0.81	20	傾斜	緩斜	自然		UP10・11, SK149 → 本跡
153	B 5 j5	N - 24° - E	楕円形	0.80 × 0.70	62	外傾	皿状			UP 5 → 本跡 → SB 4
155	B 5 i3	-	円形	0.53 × 0.49	40	皿状	緩斜	自然		
157	C 5 a3	N - 57° - E	楕円形	0.40 × 0.32	22	平坦	外傾	自然		SA 7 → 本跡
159	B 5 h6	N - 29° - W	不定形	2.82 × (2.35)	53	平坦	外傾	人為		本跡 → UP 6
160	B 5 j3	N - 6° - E	楕円形	0.55 × 0.52	38	皿状	外傾	自然		SK161 → 本跡
161	B 5 j3	N - 82° - W	長方形	3.60 × 1.59	20	平坦	外傾	自然		本跡 → SK160
163	C 5 a3	N - 87° - E	[楕円形]	0.78 × (0.60)	57	平坦	外傾 直立	人為		
171	C 5 c7	N - 1° - E	長楕円形	1.92 × 1.01	12	平坦	緩斜	自然		
173	B 5 j8	-	円形	0.50 × 0.50	25	皿状	外傾	自然		
175	C 5 a8	N - 90°	楕円形	0.39 × 0.35	47	平坦	直立	自然		
176	C 5 a8	N - 60° - E	楕円形	0.31 × 0.23	15	皿状	外傾	自然		
178	B 5 j7	N - 0°	楕円形	0.30 × 0.27	35	傾斜	外傾	自然		
179	B 5 j8	-	円形	0.41 × 0.39	44	皿状	外傾	自然		
180	C 5 c8	N - 30° - E	楕円形	(1.85) × 1.37	24	平坦	外傾	自然		本跡 → SH 2, FP 9
183	B 5 j4	N - 87° - W	不定形	1.41 × 0.54	30	凹凸	外傾	自然		SE 8 → 本跡
185	B 5 i6	N - 16° - W	隅丸長方形	0.78 × 0.52	72	平坦	外傾	人為		UP 7 → 本跡 → SK186
186	B 5 j6	N - 90°	隅丸長方形	1.56 × 0.72	32	平坦	外傾	自然		UP 7 → SK185・187 → 本跡
187	B 5 j6	-	円形	0.60 × 0.58	58	平坦	外傾	自然		UP 7 → 本跡 → SK186
188	C 5 b7	N - 68° - W	楕円形	0.37 × 0.27	47	皿状	外傾	自然		SK189 と新旧不明
189	C 5 b7	N - 77° - E	楕円形	0.39 × 0.35	51	皿状	外傾	自然		SK188 と新旧不明
191	B 5 h5	N - 10° - E	[方形・長方形]	2.14 × (1.56)	81	平坦	外傾	人為		本跡 → UP 6
193	C 5 a7	N - 10° - E	隅丸長方形	1.82 × 0.95	34	平坦	外傾	自然		SK241 → 本跡
196	B 5 j7	N - 87° - W	長方形	2.44 × 1.24	27	皿状	外傾	人為		SB 5 → 本跡 → SK129
200	C 5 a7	N - 0°	隅丸長方形	1.60 × (1.10)	38	平坦	外傾	自然		本跡 → SK438・ 510

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
201	C 5 a7	N - 35° - E	[楕円形]	(0.82) × 0.75	64	平坦	外傾	人為		SD 6 → 本跡 → SK202
202	C 5 a6	N - 38° - W	楕円形	0.70 × 0.63	38	平坦	外傾 直立	自然		SD 6, SK201 → 本跡
203	C 5 a6	N - 5° - E	楕円形	0.83 × 0.52	70	平坦	直立	人為		
206	C 5 b6	N - 47° - E	楕円形	0.55 × 0.46	62	平坦	外傾	自然		
207	C 5 b6	N - 90°	楕円形	0.50 × 0.45	51	平坦	外傾	自然		SK210 → 本跡
208	C 5 b6	N - 60° - W	楕円形	0.62 × 0.38	89	有段	外傾 直立	自然		SK209 → 本跡
209	C 5 b7	-	円形	0.85 × 0.80	13	平坦	緩斜	自然		本跡 → SK208
210	C 5 b7	N - 61° - W	楕円形	(0.83) × 0.57	57	皿状	外傾	自然		本跡 → SK207
211	C 5 b6	N - 31° - E	楕円形	0.84 × 0.58	27	平坦	外傾	自然		SD 6 → 本跡
212	C 5 b6	-	円形	0.45 × 0.44	55	皿状	外傾	自然		SD 6 → 本跡
213	C 5 c6	N - 59° - W	楕円形	0.90 × 0.72	50	有段	外傾	人為		
215	C 5 b6	N - 37° - W	楕円形	0.51 × 0.43	60	皿状	外傾	人為		SK216 → 本跡
216	C 5 c6	N - 42° - E	楕円形	0.70 × 0.56	68	皿状	外傾	自然		本跡 → SK215
218	C 5 c6	N - 68° - W	不定形	0.96 × 0.85	18	平坦	外傾	自然		本跡 → SK467
219	C 5 c6	-	円形	0.60 × 0.56	63	平坦	外傾	自然		
221	C 5 c6	-	円形	0.50 × 0.50	48	傾斜	外傾	自然		
222	C 5 c6	-	円形	0.58 × 0.56	58	平坦	外傾	自然		
227	C 5 c5	N - 0°	[楕円形]	(0.56) × 0.50	40	皿状	外傾	自然		本跡 → SK463
232	C 5 a6	-	円形	0.33 × 0.33	21	皿状	外傾	自然		
233	C 5 a6	N - 30° - E	楕円形	0.36 × 0.30	21	皿状	外傾	自然		
234	C5a6	N - 65° - E	楕円形	0.74 × 0.67	75	皿状	外傾	人為		SK235 → 本跡
235	C 5 a6	N - 90°	[楕円形]	0.83 × (0.39)	60	平坦	外傾	人為		本跡 → SK234
236	C 5 a6	N - 55° - W	[楕円形]	0.53 × (0.46)	63	皿状	外傾	自然		SK237 → 本跡
237	C 5 a6	N - 34° - W	楕円形	0.85 × 0.53	69	皿状	外傾	自然		本跡 → SK236
238	C 5 a6	N - 10° - E	楕円形	0.39 × 0.33	46	皿状	外傾	自然		
240	C 5 b6	-	円形	0.48 × 0.44	42	凹凸	直立	自然		SK272 → 本跡
241	B 5 j7	N - 10° - E	[円形・楕円形]	0.87 × (0.52)	13	平坦	外傾	自然		本跡 → SK193
244	C 5 a8	N - 61° - W	[楕円形]	(0.52) × 0.76	63	平坦	外傾	人為		本跡 → SB 5, SK513
245	C 5 a8	N - 30° - W	不定形	1.18 × 0.72	42	皿状	外傾	自然		SB 5 と新旧不明
246	C 5 a8	N - 90°	楕円形	0.53 × 0.45	66	直立	平坦	自然		SB 5 → 本跡
252	C 5 a8	-	円形	0.75 × 0.72	42	皿状	外傾	自然		本跡 → SK258
256	C 5 a5	N - 0°	楕円形	0.87 × 0.71	70	有段	外傾	人為		SK458 → 本跡
258	C 5 a8	N - 90°	[楕円形]	0.79 × (0.58)	43	皿状	外傾	自然		SK252 → 本跡 → SK129
260	C 5 a5	-	円形	0.35 × 0.33	58	平坦	直立	自然		
263	C 5 a7	N - 31° - E	[不整楕円形]	(0.60) × 0.70	54	平坦	外傾	自然		SN 8, S K 413 と新旧不明
264	C 5 b6	N - 85° - E	長楕円形	2.43 × 1.18	44	平坦	外傾	自然		本跡 → SB 6, SK265
265	C 5 b5	N - 20° - W	不整楕円形	0.62 × 0.52	41	皿状	外傾	自然		SK264 → 本跡
266	C 5 b5	N - 75° - E	楕円形	0.43 × 0.32	38	平坦	外傾	自然		SK291 → 本跡
267	C 5 b5	-	円形	0.27 × 0.25	32	平坦	外傾	自然		SK291 → 本跡
270	C 5 c5	N - 69° - W	不整楕円形	0.80 × (0.63)	50	有段	外傾 緩斜	自然		本跡 → SB 6, SK271
271	C 5 c5	N - 20° - W	[楕円形]	0.51 × (0.40)	54	皿状	外傾	自然		SK270 → 本跡 S K 445 と新旧不明
272	C 5 b5	N - 61° - W	楕円形	0.94 × 0.82	63	皿状	外傾	人為		本跡 → SK240
273	C 5 b5	N - 15° - E	楕円形	0.52 × 0.44	72	皿状	緩斜	人為		SK455 → 本跡 → SB 6
275	C 5 c5	N - 20° - E	[楕円形]	0.34 × (0.30)	52	皿状	直立	人為		SK276, 485 → 本跡 → S B 6
276	C 5 c5	N - 41° - E	[楕円形]	0.74 × 0.54	56	平坦	外傾 緩斜	自然		本跡 → SB 6, SK275
277	C 5 c5	N - 76° - W	楕円形	0.58 × 0.43	56	平坦	外傾	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
278	C 5 c5	N - 14° - E	楕円形	0.52 × 0.42	44	平坦	外傾	自然		
279	C 5 c5	-	円形	0.37 × 0.36	35	皿状	直立	自然		
280	C 5 b5	N - 40° - W	楕円形	0.58 × 0.47	13	皿状	緩斜	自然		
281	C 5 b7	N - 0°	楕円形	(0.50) × (0.35)	55	平坦	直立	自然		
282	C 5 b7	N - 65° - W	[隅丸長方形]	2.06 × 1.19	66	平坦	外傾	人為		SH 7 → 本跡 → SK425・426
286	C 5 b5	N - 37° - W	楕円形	0.37 × 0.32	47	皿状	直立	自然		
287	C 5 b5	N - 24° - W	不整楕円形	1.09 × 0.76	55	有段	外傾	人為		SK452 → 本跡
289	C 5 b5	N - 22° - W	楕円形	0.61 × 0.44	54	平坦	外傾	自然		SB 6 → 本跡 → SK290
290	C 5 b5	N - 31° - E	楕円形	0.49 × 0.34	53	皿状	外傾	自然		SB 6, SK289 → 本跡
291	C 5 b5	N - 79° - W	隅丸長方形	1.09 × 0.90	19	平坦	外傾	自然		本跡 → SK266・267
292	C 5 c5	N - 65° - E	楕円形	0.76 × 0.60	43	皿状	外傾	自然		SK293 → SK294 → 本跡
293	C 5 c5	-	円形	0.24 × 0.23	40	平坦	外傾	自然		本跡 → SK294 → SK292
294	C 5 c5	N - 10° - E	楕円形	0.70 × 0.55	29	平坦	外傾	自然		SK293 → 本跡 → SK292
298	C 5 a5	N - 55° - E	[楕円形]	0.66 × (0.34)	30	皿状	外傾	自然		本跡 → SB 6
299	C 5 a4	-	[円形]	0.71 × (0.65)	35	皿状	外傾	自然		SK300 と新旧不明
300	C 5 a4	-	円形	0.48 × 0.46	23	平坦	外傾	自然		SK299 と新旧不明
302	C 5 a5	N - 46° - W	楕円形	0.96 × 0.72	55	平坦	外傾	人為		
303	C 5 a4	N - 54° - E	楕円形	0.67 × (0.48)	36	皿状	外傾	自然		本跡 → SK490
304	C 5 c5	N - 80° - W	楕円形	0.70 × 0.49	7	平坦	直立	自然		SK510 と新旧不明
305	C 5 c3	N - 63° - W	楕円形	0.77 × 0.68	71	皿状	外傾 直立	人為		
306	C 5 d3	-	円形	0.48 × 0.48	50	皿状	直立	自然		
308	C 5 c4	N - 20° - E	楕円形	0.45 × 0.37	36	皿状	外傾	自然		SK415 → 本跡
310	C 5 c4	N - 21° - W	[楕円形]	0.44 × (0.32)	70	平坦	直立	自然		SK311 → 本跡 → SB 7
311	C 5 c4	N - 74° - W	[楕円形]	(0.43) × (0.36)	32	平坦	外傾	自然		本跡 → SK310 → SB 7
312	C 5 b4	N - 30° - W	楕円形	0.83 × 0.66	81	有段	外傾 内傾	自然		
314	C 5 c4	N - 20° - E	楕円形	0.59 × 0.53	42	平坦	外傾	自然		
316	C 5 b4	N - 50° - E	[楕円形]	(0.43) × 0.36	30	平坦	外傾	自然		本跡 → SB 7, SK453
317	C 5 b4	N - 56° - W	楕円形	0.72 × 0.56	28	平坦	外傾	自然		
318	C 5 c4	-	隅丸方形	1.20 × 1.13	28	平坦	外傾	人為		SK319・320・444 → 本跡
319	C 5 c4	-	円形	(0.56) × 0.55	6	平坦	外傾	自然		本跡 → SK318
320	C 5 c4	N - 72° - W	[楕円形]	(0.78) × (0.56)	9	平坦	外傾	自然		本跡 → SK318・444
321	C 5 c4	-	円形	0.81 × 0.76	25	凹凸	外傾 緩斜	自然		
323	C 5 c6	N - 79° - W	楕円形	1.00 × 0.85	30	平坦	外傾	自然		
325	C 5 c6	N - 23° - E	楕円形	0.42 × (0.37)	48	皿状	外傾	自然		
326	C 5 b3	N - 42° - E	楕円形	0.73 × 0.58	73	皿状	直立	人為		SK327 → 本跡
327	C 5 b3	N - 35° - E	[楕円形]	0.55 × 0.48	56	皿状	外傾	人為		本跡 → SK326 SK329 と新旧不明
328	C 5 b3	N - 1° - E	楕円形	0.40 × 0.33	33	皿状	外傾	自然		
329	C 5 b3	-	円形	0.46 × 0.45	37	皿状	外傾	自然		SK327 と新旧不明
330	C 5 b4	N - 71° - W	楕円形	0.49 × 0.44	48	平坦	直立	自然		
331	C 5 b4	N - 61° - W	不整楕円形	0.80 × 0.57	29	有段	外傾	自然		
334	C 5 c4	N - 36° - E	[楕円形]	0.48 × (0.36)	30	皿状	外傾	自然		SB 6 → 本跡
336	C 5 c4	N - 45° - E	[楕円形]	(0.62) × 0.54	39	平坦	外傾	自然		SB 6 → 本跡 → SK337・338
337	C 5 c4	N - 10° - E	[楕円形]	0.50 × (0.34)	32	平坦	外傾	自然		SB 6, SK336 → 本跡 → SK338
338	C 5 c4	N - 39° - E	楕円形	0.62 × 0.55	39	平坦	外傾	自然		SK336・337 → 本跡
339	C 5 c3	N - 22° - W	楕円形	0.44 × 0.33	40	平坦	直立	自然		
343	C 5 c3	-	[円形]	0.45 × (0.42)	29	平坦	外傾	自然		本跡 → SK344

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
344	C 5 c3	-	円形	0.51 × 0.50	44	皿状	外傾 直立	自然		SK343 → 本跡
345	C 5 c5	-	円形	0.58 × 0.58	52	平坦	直立	自然		本跡 → SK347
347	C 5 c5	N - 72° - W	[楕円形]	(0.62) × 0.52	40	平坦	外傾 緩斜	自然		SK345 → 本跡
348	C 5 c5	-	円形	0.38 × 0.35	34	平坦	外傾	自然		
349	C 5 c5	N - 30° - W	楕円形	0.41 × 0.32	40	平坦	外傾	自然		
351	C 5 b5	N - 40° - E	楕円形	0.53 × 0.42	48	平坦	外傾	人為		
352	C 5 b5	-	円形	0.69 × 0.63	73	皿状	外傾	人為		本跡 → SK353
353	C 5 b5	N - 29° - E	楕円形	0.37 × 0.32	45	皿状	外傾	自然		SB 6, SK352 → 本跡
354	C 5 b4	N - 22° - E	楕円形	0.75 × 0.61	44	平坦	外傾	人為		
355	C 5 b4	N - 76° - W	楕円形	0.42 × 0.34	40	皿状	外傾	自然		
356	C 5 b4	N - 20° - E	楕円形	0.42 × 0.31	48	皿状	外傾	自然		
358	C 5 b4	-	円形	0.67 × 0.62	27	平坦	外傾	自然		
359	C 5 b4	-	円形	0.47 × 0.44	37	平坦	外傾	自然		SB 7 → 本跡
361	C 5 b4	N - 55° - E	楕円形	0.52 × 0.42	46	皿状	外傾	自然		SK362 → 本跡
362	C 5 b4	N - 46° - E	[楕円形]	(0.86) × 0.61	93	平坦	外傾 内傾	人為		本跡 → SK361
363	C 5 c4	N - 30° - W	楕円形	0.56 × 0.48	13	皿状	緩斜	自然		
364	C 5 c5	N - 52° - E	楕円形	0.45 × 0.40	31	平坦	外傾	自然		
365	C 5 c4	N - 40° - W	楕円形	0.45 × 0.36	32	皿状	外傾 内傾	自然		
366	C 5 b3	N - 20° - E	不整楕円形	0.70 × 0.49	48	傾斜	直立	人為		
369	C 5 a9	N - 83° - W	楕円形	0.50 × 0.37	56	平坦	外傾	人為		
370	C 5 a9	N - 35° - W	[楕円形]	0.34 × (0.26)	29	平坦	外傾	自然		本跡 → SK371
371	C 5 a9	N - 52° - E	楕円形	0.62 × 0.44	53	平坦	直立	自然		SK370 → 本跡
376	C 5 b4	N - 32° - E	楕円形	0.82 × (0.69)	52	皿状	外傾	自然		SK377 → 本跡
377	C 5 b4	N - 55° - E	[不整楕円形]	(0.82) × 0.81	50	平坦	外傾	人為		本跡 → SK376
378	C 5 c3	N - 35° - W	不定形	1.00 × 0.55	58	傾斜	外傾	自然		本跡 → SB 7
380	C 5 c3	N - 63° - E	不定形	0.75 × 0.58	36	平坦	外傾	自然		本跡 → SB 7
381	C 5 c3	N - 64° - W	不定形	0.92 × 0.61	45	傾斜	外傾	自然		
382	C 5 b3	N - 84° - W	楕円形	0.85 × 0.67	48	皿状	外傾	人為		
383	C 5 b3	-	円形	0.64 × 0.59	56	皿状	外傾	自然		SK394 と新旧不明
384	C 5 b5	-	円形	0.29 × 0.27	35	平坦	外傾	自然		
385	C 5 b5	N - 61° - W	楕円形	0.36 × 0.30	14	平坦	外傾	自然		SK386 → 本跡
386	C 5 b5	N - 39° - W	楕円形	(0.51) × 0.29	41	平坦	外傾	自然		本跡 → SK385
387	C 5 b5	N - 59° - E	楕円形	0.41 × 0.32	28	平坦	外傾	自然		
388	C 5 a5	-	円形	0.29 × 0.28	29	皿状	外傾	自然		
389	C 5 b5	N - 25° - E	楕円形	0.48 × 0.39	60	平坦	外傾	自然		
391	C 5 i4	N - 83° - W	楕円形	0.72 × 0.52	40	有段	外傾	自然		
392	C 5 b2	N - 37° - E	楕円形	0.53 × 0.43	48	皿状	外傾	人為		
393	C 5 b2	N - 12° - E	楕円形	0.42 × 0.30	15	凹凸	外傾	自然		
394	C 5 b3	N - 20° - E	楕円形	0.57 × 0.49	42	平坦	外傾	自然		SK383 と新旧不明
395	C 5 b2	N - 5° - E	楕円形	0.43 × 0.30	12	平坦	外傾	自然		
397	C 5 c2	N - 19° - E	不定形	1.38 × 1.20	53	有段	外傾	人為		
401	C 5 c2	N - 87° - E	不整楕円形	0.53 × 0.43	31	凹凸	外傾 直立	自然		
402	C 5 c2	N - 4° - W	楕円形	1.00 × 0.79	40	平坦	内傾	自然		
403	C 5 c2	-	円形	0.42 × 0.39	45	平坦	直立	自然		
404	C 5 c2	-	円形	0.65 × 0.62	72	皿状	直立	人為		
405	C 5 c3	N - 60° - W	楕円形	0.65 × 0.51	64	皿状	直立	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
406	C 5 a5	N - 52° - W	楕円形	0.80 × 0.41	44	凹凸	外傾	人為		
407	C 5 b3	N - 71° - E	不整楕円形	0.77 × 0.61	56	平坦	外傾	人為		
408	C 5 a5	N - 90°	楕円形	1.03 × 0.61	49	凹凸	直立	人為		
409	C 5 a4	-	円形	0.70 × 0.65	40	皿状	外傾	自然		本跡→SK490
410	B 5 j5	N - 0°	楕円形	0.50 × 0.36	25	平坦	外傾 直立	自然		
411	C 5 a5	N - 62° - W	楕円形	0.45 × 0.38	27	皿状	外傾	自然		
412	B 5 j5	-	円形	0.44 × 0.41	44	皿状	外傾	自然		
414	C 5 c4	N - 40° - E	楕円形	0.59 × 0.50	22	皿状	緩斜	自然		
415	C 5 c4	N - 19° - E	楕円形	0.52 × (0.35)	34	皿状	外傾	自然		本跡→SK308
417	C 5 d5	-	円形	0.61 × 0.59	32	平坦	外傾	自然		
420	C 5 b5	N - 86° - W	楕円形	0.35 × 0.24	34	皿状	外傾	自然		
421	B 5 j2	-	円形	0.55 × 0.50	15	平坦	外傾	自然		
423	B 5 j8	-	円形	0.35 × 0.35	42	平坦	外傾	自然		
425	C 5 b7	N - 6° - E	不整長方形	3.10 × 1.24	45	平坦	緩斜	自然		SK282→本跡
426	C 5 c9	N - 79° - W	不整楕円形	1.85 × 0.78	18	平坦	外傾 緩斜	自然		SH 7, SK282→ 本跡
429	C 5 c7	N - 61° - E	不定形	1.17 × 0.93	10	凹凸	緩斜	自然		本跡→SK506
430	C 5 a8	N - 67° - W	[不整楕円形]	1.22 × (1.04)	28	平坦	緩斜	自然		本跡→SN 9
431	C 5 a7	N - 13° - E	不整楕円形	1.00 × 0.56	25	平坦	外傾	人為		本跡→SK263
433	C 5 a4	-	円形	0.32 × 0.30	20	皿状	外傾	自然		
435	C 5 b3	-	円形	0.38 × 0.37	33	皿状	外傾	自然		
437	C 5 b2	N - 56° - W	楕円形	0.45 × 0.35	39	皿状	外傾	自然		
438	C 5 a7	N - 75° - W	楕円形	(0.50) × 0.45	50	皿状	外傾	自然		SK200→本跡
439	C 5 c7	N - 63° - W	楕円形	0.33 × 0.28	32	皿状	外傾	自然		
440	C 5 c7	N - 8° - E	楕円形	0.48 × 0.40	51	皿状	外傾	自然		
444	C 5 c4	N - 14° - E	[楕円形]	(0.50) × 0.44	12	平坦	外傾	自然		SK320→本跡 →SK318
445	C 5 c5	-	[円形]	0.45 × (0.34)	32	皿状	外傾	自然		SK271と新旧不明
446	C 5 c4	N - 41° - W	不整楕円形	0.71 × 0.36	54	皿状	外傾 直立	自然		SB 6→本跡
447	C 5 c5	N - 24° - E	楕円形	0.43 × 0.30	38	平坦	外傾	自然		SB 6→本跡
449	B 5 j4	-	円形	1.00 × 0.91	15	皿状	緩斜	自然		
452	C 5 b5	N - 45° - W	[楕円形]	0.52 × (0.28)	25	平坦	外傾	自然		本跡→SK287
453	C 5 b4	N - 24° - E	[円形・楕円形]	0.43 × (0.33)	72	平坦	外傾	自然		SK316→本跡 →SB 7
454	C 5 b4	N - 59° - E	[楕円形]	0.68 × (0.48)	33	平坦	緩斜	自然		本跡→SB 7
455	C 5 b5	-	[円形]	0.50 × (0.34)	36	平坦	外傾 緩斜	自然		本跡→SK273
458	C 5 a5	N - 62° - E	[楕円形]	0.60 × (0.52)	40	平坦	外傾	人為		本跡→SK256
460	C 5 d5	N - 41° - W	楕円形	0.38 × 0.28	33	皿状	直立	自然		SK462と新旧不明
461	C 5 a6	N - 0°	楕円形	(0.38) × 0.53	34	平坦	外傾	自然		本跡→SB 6
462	C 5 d5	N - 90°	[円形・楕円形]	(0.36) × (0.23)	28	皿状	緩斜	自然		本跡→SB 6, SK463 SK460 と新旧不明
463	C 5 c5	N - 0°	[円形・楕円形]	0.49 × (0.40)	28	皿状	外傾	自然		SK227・462→本 跡→SB 6
465	C 5 c6	-	不整円形	0.52 × 0.48	53	平坦	外傾	自然		
466	C 5 c6	N - 17° - W	不整楕円形	0.52 × (0.47)	70	平坦	外傾	自然		本跡→SK221
467	C 5 c6	N - 66° - E	楕円形	0.53 × 0.45	30	平坦	外傾	自然		SK218→本跡
475	C 5 a4	-	円形	0.48 × 0.45	42	平坦	外傾	自然		
485	C 5 c5	N - 82° - E	楕円形	0.32 × 0.26	50	凹凸	外傾	自然		本跡→SK275
490	C 5 a4	N - 28° - E	楕円形	0.55 × 0.33	28	外傾	平坦	自然		SK303・409→本 跡
493	C 5 b6	N - 15° - E	楕円形	0.40 × 0.34	16	平坦	外傾 緩斜	自然		
494	C 5 b6	N - 39° - E	楕円形	0.42 × 0.37	54	平坦	外傾 緩斜	自然		SD 6と新旧不明

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
501	C 5 c5	N - 12° - W	楕円形	0.67 × 0.52	42	平坦	外傾	自然		SK304と新旧不明
503	C 5 b5	-	円形	0.44 × 0.40	44	皿状	外傾	自然		
506	C 5 b7	N - 66° - W	楕円形	0.45 × 0.39	24	平坦	外傾	自然		SK429 → 本跡
510	C 5 a7	N - 20° - W	楕円形	0.98 × 0.83	58	平坦	外傾	人為		SK200 → 本跡
513	C 5 a7	N - 69° - W	楕円形	0.84 × 0.61	16	平坦	外傾	自然		SK244 → 本跡
516	B 5 i9	N - 0°	[円形・楕円形]	(0.61) × 0.53	18	皿状	緩斜	自然		SK77 → 本跡 → SK54
525	B 5 j6	N - 41° - E	不整楕円形	1.70 × 1.36	20	平坦	外傾 緩斜	自然		UP 7, SK184 → 本跡
528	B 5 j7	N - 25° - W	楕円形	1.42 × 0.80	68	皿状	外傾 緩斜	自然		SK184・529 → 本跡
529	B 5 j7	N - 35° - E	[円形・楕円形]	1.06 × (0.90)	64	皿状	外傾 緩斜	自然		本跡 → SK528

(3) 炉跡

第 19 号炉跡 (第 187 図)

位置 調査区東部の C 3 b9 区, 標高 15 m ほどの平坦な台地上に位置している。

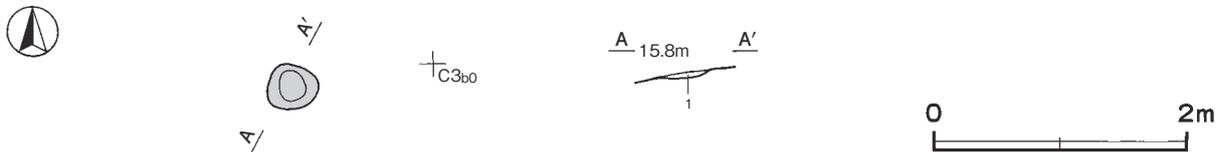
規模と形状 長径 0.43 m, 短径 0.38 m の楕円形で, 長径方向は N - 64° - E である。深さは 3 cm である。炉床は皿状で, 火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層である。含有物の少ない黒褐色土であることから, 自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量

所見 時期, 性格ともに不明である。



第 187 図 第 19 号炉跡実測図

第 20 号炉跡 (第 188 図)

位置 調査区東部の C 3 a9 区, 標高 13 m ほどの平坦な台地上に位置している。

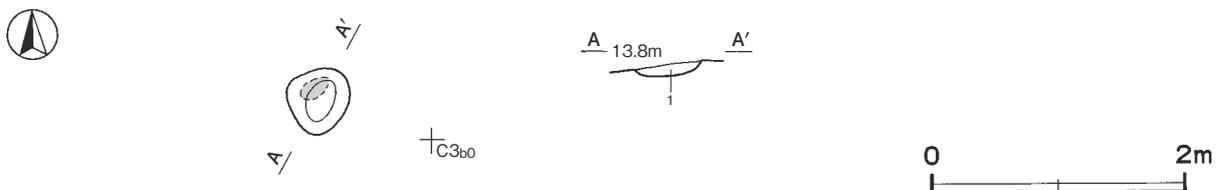
規模と形状 長径 0.57 m, 短径 0.50 m の楕円形で, 長径方向は N - 30° - E である。深さは 7 cm である。炉床は平坦で, 火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層である。含有物の少ない黒褐色土であることから, 自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

所見 時期, 性格ともに不明である。



第 188 図 第 20 号炉跡実測図

第 21 号炉跡 (第 189 図)

位置 調査区西部の B 4 i3 区, 標高 14 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 1 号溝に掘り込まれている。

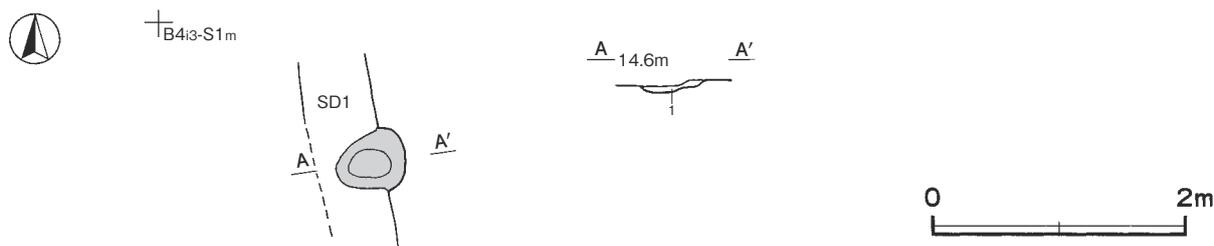
規模と形状 長径 0.58 m, 短径 0.49 m の楕円形で, 長径方向は N - 68° - E である。深さは 9 cm である。炉床は東から西に向かって下がっており, 火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層である。含有物が少ない黒褐色土であることから, 自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

所見 時期, 性格ともに不明である。



第 189 図 第 21 号炉跡実測図

第 22 号炉跡 (第 190 図)

位置 調査区西部の B 4 j3 区, 標高 14 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 3 号ピット群に掘り込まれている。

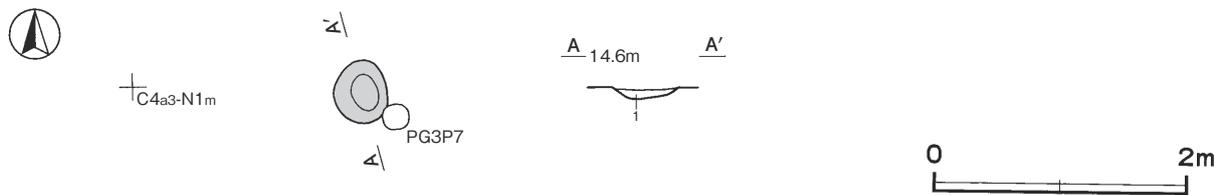
規模と形状 長径 0.51 m, 短径 0.42 m の楕円形で, 長径方向は N - 7° - W である。深さは 7 cm である。炉床は皿状で, 火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層である。含有物が少ない黒褐色土であることから, 自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

所見 時期, 性格ともに不明である。



第 190 図 第 22 号炉跡実測図

表 22 その他の炉跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
19	C 3 b9	N - 64° - E	楕円形	0.43 × 0.38	3	皿状	緩斜	自然		
20	C 3 a9	N - 30° - E	楕円形	0.57 × 0.50	7	平坦	緩斜	自然		
21	B 4 i3	N - 68° - E	楕円形	0.58 × 0.49	9	傾斜	緩斜	自然		本跡→ SD 1
22	B 4 j3	N - 7° - W	楕円形	0.51 × 0.42	7	皿状	緩斜	自然		本跡→ PG 3

(4) 道路跡

時期不明の道路跡1条については、文章と土層断面図(第191図)を掲載し、平面図は遺構全体図で示す。

第1号道路跡(第191図)

位置 調査区西部のB5g1～C5d1区、標高14mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第10号井戸跡を掘り込んでいる。

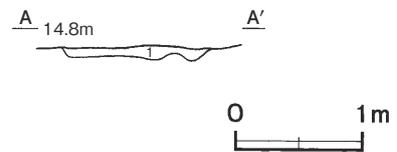
規模と形状 南北両端部が調査区域外に延びているため、長さは25.40mしか確認できなかった。C5d1区からN-8°-E方向にはほぼ直線的に延びており、路面の幅は1.80～2.40mである。路面は、確認面から深さ12cmほど掘りくぼめた部分に、第1層を埋土して構築されている。

構築土 第1層は構築土で、踏み固められて硬化している。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、室町時代と考えられる第10号井戸跡を掘り込んでいることから、それ以降の可能性はあるが、詳細は不明である。



第191図 第1号道路跡実測図

(5) 溝跡

時期不明の溝跡5条については、土層図(第192図)と土層解説、一覧表を掲載し、平面図は遺構全体図で示す。

第1号溝跡土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第4号溝跡土層解説

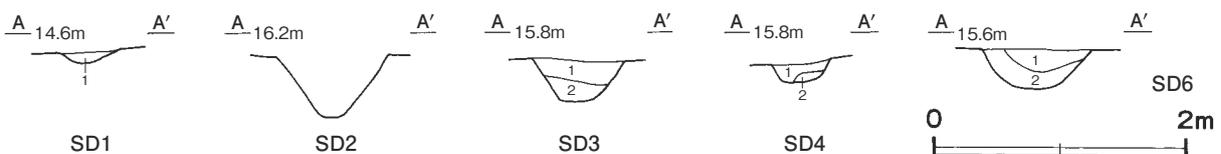
- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第3号溝跡土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第6号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量



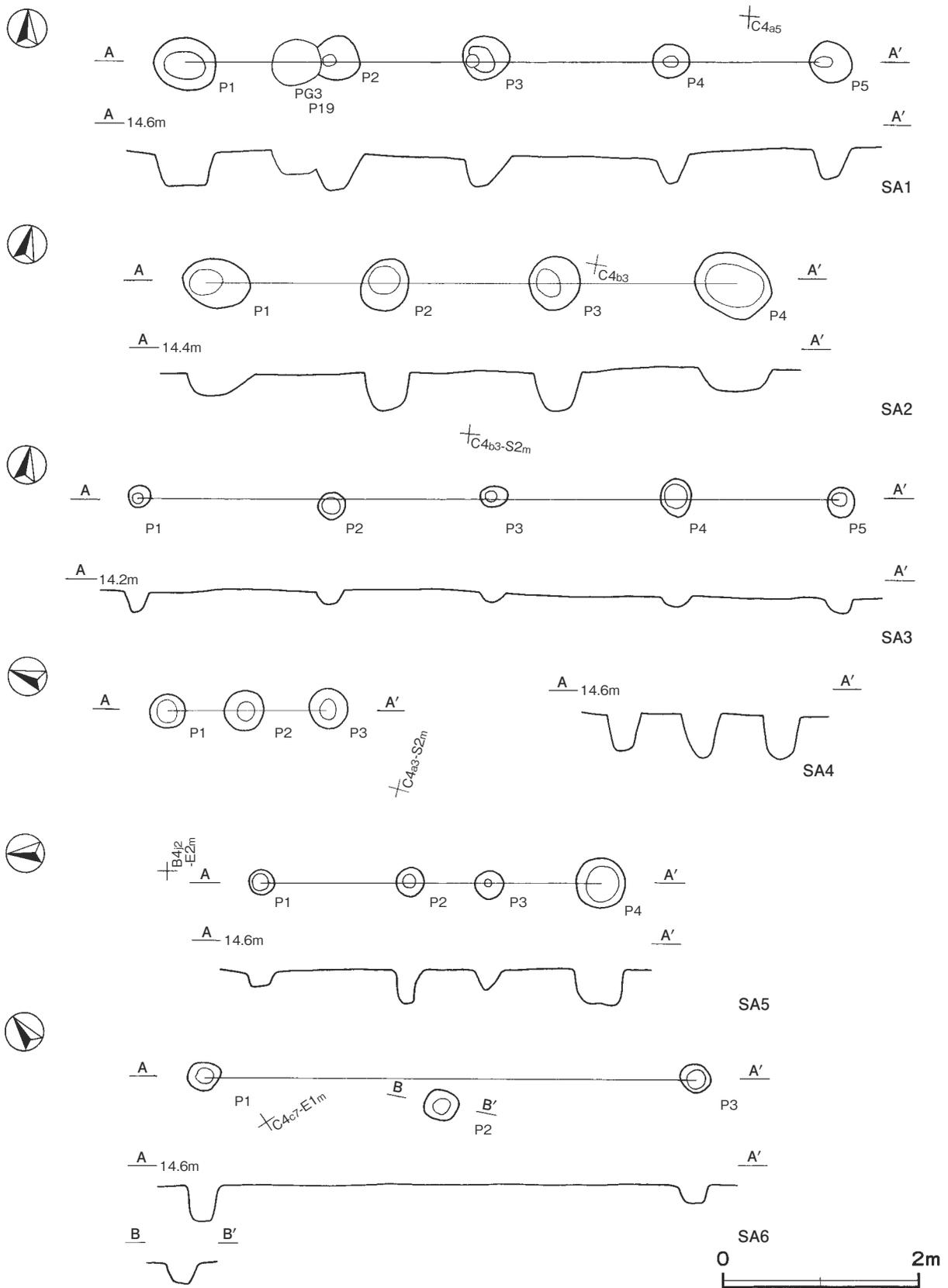
第192図 その他の溝跡実測図

表23 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	B4i3	N-10°-W	直線	(2.84)	0.48～0.55	0.24～0.36	7	浅いU字状	緩斜	人為	土師質土器	FP21→本跡→SK30
2	B6i1～C5d0	N-7°-E	逆L字状	(22.72)	0.64～1.04	0.18～0.40	26～56	U字状	外傾	-	土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器	
3	B5i5	N-81°-W	直線	(2.74)	0.66～0.90	0.28～0.35	23～34	U字状	外傾	人為		SD4→本跡→SE7
4	B5i5～B5j5	N-10°-E	直線	7.52	0.35～0.64	0.20～0.35	10～26	浅いU字状	外傾	人為	土師器、陶器	本跡→SH5、SE8、SK134・183、SD3
6	C5a6～C5b6	N-20°-E	直線	6.66	0.90～1.02	0.38～0.60	26～34	U字状	外傾	自然		本跡→SK201～203・211・212・494

(6) 柱穴列

時期不明の柱穴列6条については、実測図（第193図）と一覧表を掲載する。



第193図 その他の柱穴列実測図

表 24 その他の柱穴列一覧表

番号	位置	主軸方向	長さ (m)	柱間 (m)	柱 穴					主な出土遺物	備 考
					柱穴数	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
1	C 4 a3 ~ C 4 a5	N - 85° - E	6.56	1.50 ~ 2.00	5	円形・楕円形	37 ~ 62	37 ~ 57	25 ~ 35		本跡→PG 3
2	C 4 b2 ~ C 4 a3	N - 79° - E	5.44	1.70 ~ 1.90	4	楕円形	55 ~ 80	46 ~ 62	23 ~ 40	土師質土器	
3	B 4 b3 ~ B 4 b4	N - 83° - E	7.18	1.60 ~ 1.90	5	円形・楕円形	23 ~ 39	20 ~ 31	9 ~ 18		
4	B 4 j3 ~ C 4 a3	N - 14° - W	1.62	0.80	3	円形	36 ~ 44	34 ~ 42	36 ~ 45		
5	B 4 j2 ~ C 4 a2	N - 0°	3.50	0.80 ~ 1.50	4	円形	27 ~ 53	25 ~ 49	14 ~ 37		
6	C 4 b7 ~ C 4 c8	N - 50° - W	5.05	2.50 ~ 2.60	3	円形・楕円形	32 ~ 33	27 ~ 30	17 ~ 39		

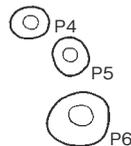
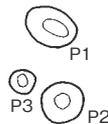
(7) ピット群

第1号ピット群 (194 図)

位置 調査区西部 (B 3 g9 ~ B 3 h0 区), 標高 14 m ほどの平坦な台地上の東西 4.25 m, 南北 3.25 m の範囲から, ピット 7 か所を確認した。

規模 平面形は長径 20 ~ 50 cm, 短径 19 ~ 43 cm の円形または楕円形で, 深さは 16 ~ 43 cm である。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

所見 時期, 性格ともに不明である。



第 194 図 第 1 号ピット群実測図

第 1 号ピット群ピット計測表

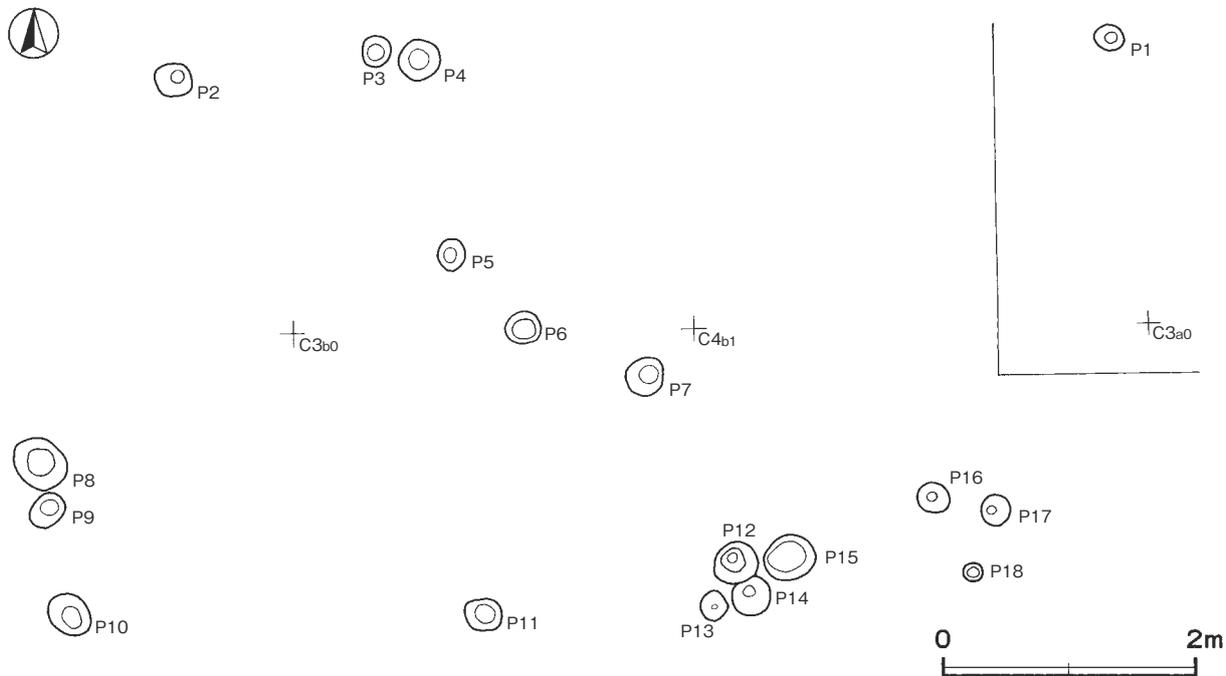
番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	B 3 a9	楕円形	41	32	28	4	B 3 g9	円形	30	28	35	7	B 3 h0	円形	32	30	16
2	B 3 g9	円形	35	33	30	5	B 3 g9	円形	31	29	30						
3	B 3 g9	円形	20	19	43	6	B 3 h9	楕円形	50	43	38						

第2号ピット群 (195 図)

位置 調査区西部 (B 3 j9 ~ C 4 b1 区), 標高 14 m ほどの平坦な台地上の東西 10.00 m, 南北 8.80 m の範囲から, ピット 18 か所を確認した。

規模 平面形は長径 22～78cm, 短径 18～49cmの円形または楕円形で, 深さは7～40cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

所見 時期, 性格ともに不明である。



第 195 図 第 2 号ピット群実測図

第 2 号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	B 3 j9	円形	27	25	14	7	C 3 b0	楕円形	41	36	40	13	C 4 b1	楕円形	27	27	15
2	B 3 a9	楕円形	39	35	16	8	C 3 b9	楕円形	58	47	25	14	C 4 b1	[楕円形]	40	39	19
3	C 3 a0	円形	32	30	28	9	C 3 b9	楕円形	38	31	24	15	C 4 b1	楕円形	52	44	14
4	C 3 a0	円形	43	40	14	10	C 3 b9	楕円形	47	37	35	16	C 4 b1	楕円形	78	49	20
5	C 3 a0	楕円形	32	28	7	11	C 3 b0	楕円形	39	35	20	17	C 4 b1	円形	30	30	36
6	C 3 a0	円形	36	33	18	12	C 4 b1	楕円形	45	40	33	18	C 4 b1	楕円形	22	18	16

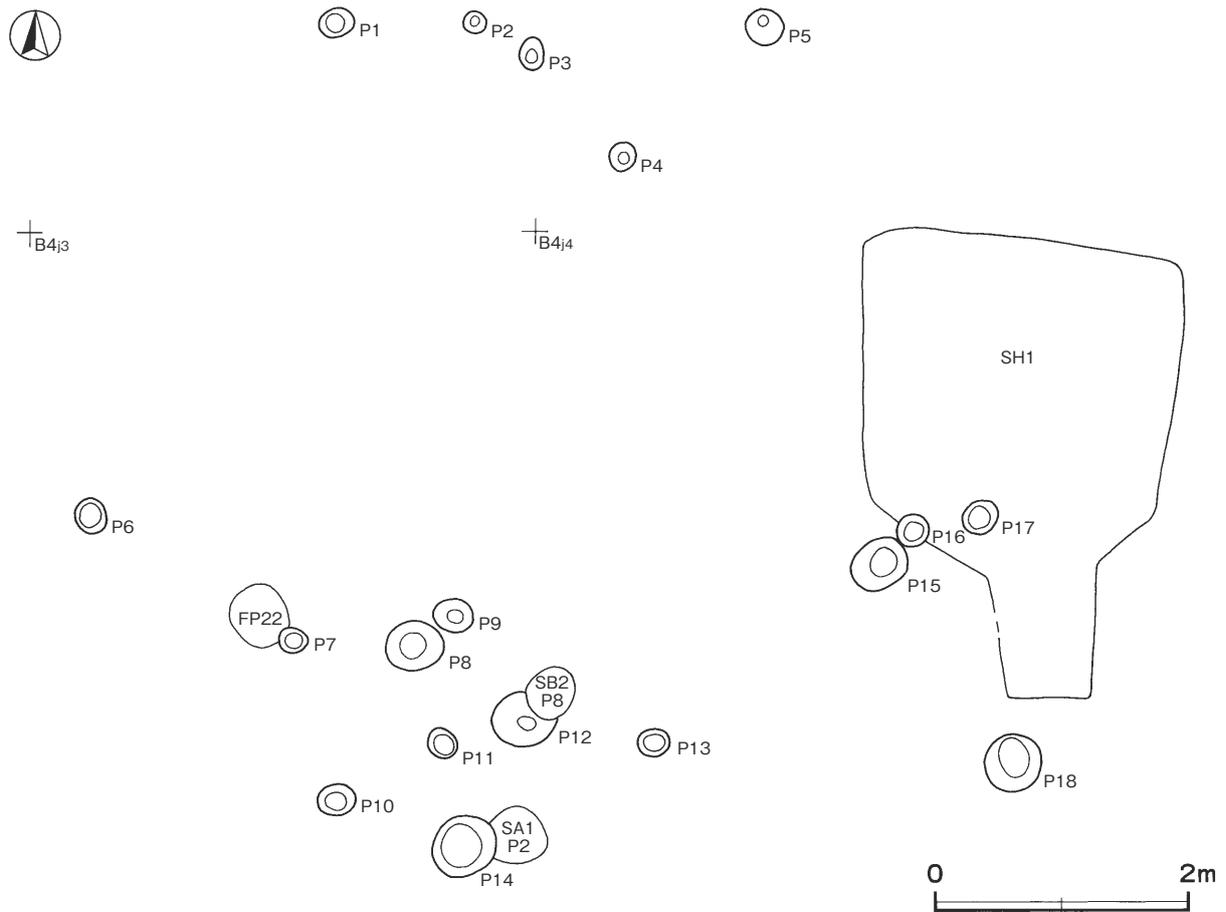
第 3 号ピット群 (196 図)

位置 調査区西部 (B 4 i3～C 4 a4 区), 標高 14 m ほどの平坦な台地上の東西 7.58 m, 南北 6.88 m の範囲から, ピット 18 か所を確認した。

重複関係 第 1 号方形竪穴遺構, 第 22 号炉跡, 第 1 号柱穴列を掘り込み, 第 2 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模 平面形は長径 17～53cm, 短径 16～50cmの円形または楕円形で, 深さは10～38cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

所見 時期, 性格ともに不明である。



第 196 図 第 3 号ピット群実測図

第 3 号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	B 4 i3	楕円形	26	23	10	7	B 4 j3	円形	21	19	38	13	C 4 a4	円形	24	22	14
2	B 4 i3	円形	17	16	12	8	B 4 j3	楕円形	50	40	17	14	C 4 a3	円形	50	50	26
3	B 4 i3	円形	27	20	24	9	B 4 j3	楕円形	32	28	14	15	B 4 j4	楕円形	46	40	32
4	B 4 i4	円形	24	23	21	10	C 4 a3	楕円形	29	24	24	16	B 4 j4	円形	25	25	27
5	B 4 i4	円形	29	27	20	11	C 4 a3	円形	23	22	15	17	B 4 j4	楕円形	28	25	13
6	B 4 j3	楕円形	29	25	35	12	B 4 j3	楕円形	53	43	27	18	C 4 a4	円形	47	44	26

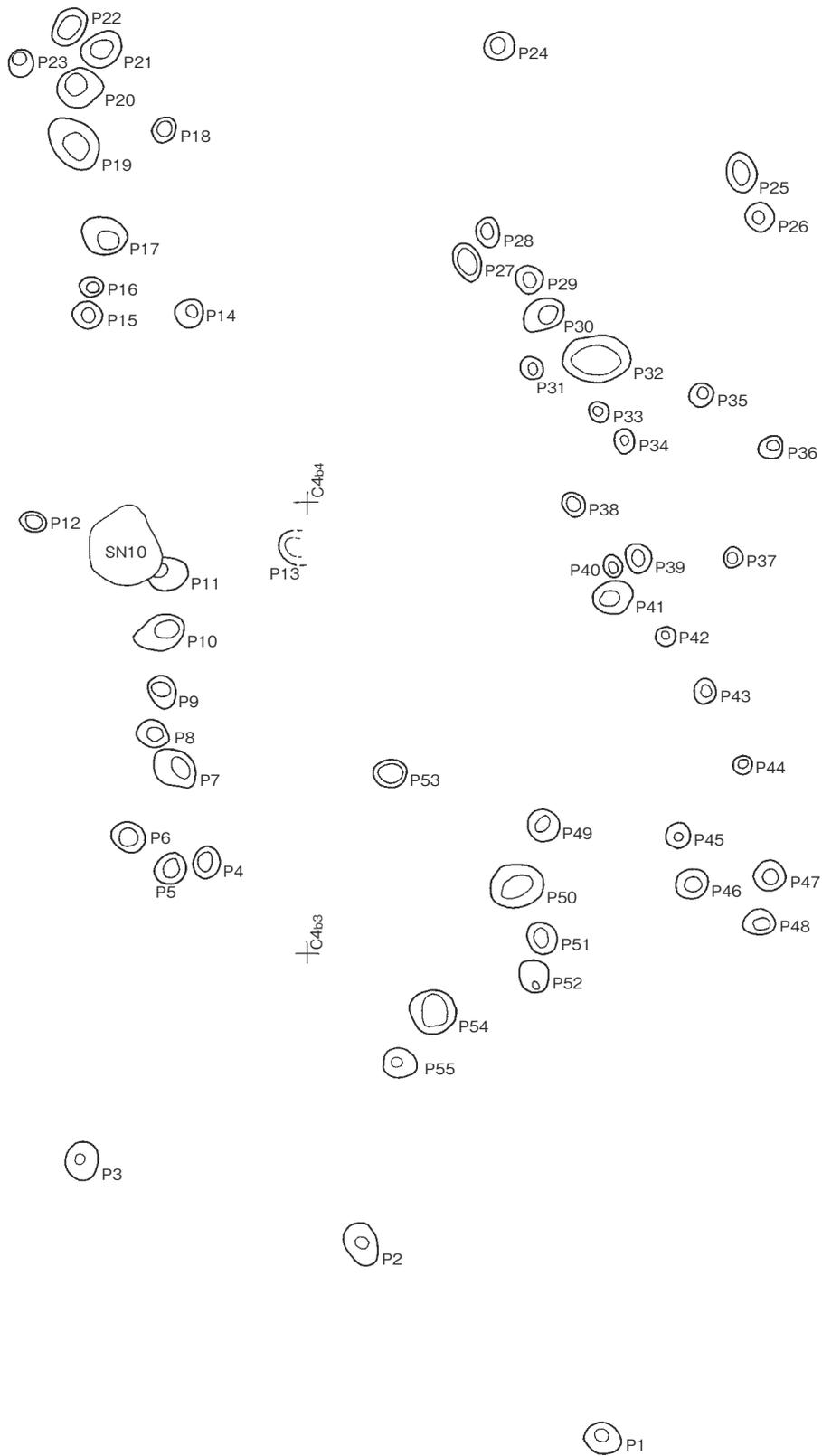
第 4 号ピット群 (197 図)

位置 調査区西部(C 4 a2～C 4 b5 区), 標高 14 m ほどの平坦な台地上の東西 12.60 m, 南北 6.75 m の範囲から, ピット 55 か所を確認した。

重複関係 第 10 号粘土貼土坑に掘り込まれている。

規模 平面形は長径 17～60cm, 短径 15～43cm の円形または楕円形で, 深さは 8～42cm である。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

所見 時期, 性格ともに不明である。



第 197 図 第 4 号ピット群実測図

第4号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	C 4 b1	円形	33	30	13	20	C 4 a4	楕円形	40	34	13	39	C 4 b3	楕円形	28	23	10
2	C 4 b2	楕円形	41	30	17	21	C 4 a4	楕円形	37	30	32	40	C 4 b3	楕円形	21	15	11
3	C 4 a2	楕円形	35	28	31	22	C 4 a5	楕円形	37	26	37	41	C 4 b3	楕円形	37	30	19
4	C 4 a3	楕円形	30	24	15	23	C 4 a4	楕円形	24	20	20	42	C 4 b3	円形	18	18	12
5	C 4 a3	楕円形	30	27	17	24	C 4 b5	円形	27	25	13	43	C 4 b3	円形	22	20	8
6	C 4 a3	円形	30	28	38	25	C 4 b4	楕円形	35	27	12	44	C 4 b3	円形	20	19	17
7	C 4 a3	楕円形	42	33	19	26	C 4 b4	円形	25	25	42	45	C 4 b3	楕円形	17	15	22
8	C 4 a3	楕円形	28	25	18	27	C 4 b4	楕円形	33	24	9	46	C 4 c3	楕円形	28	27	21
9	C 4 a3	楕円形	29	24	20	28	C 4 b4	楕円形	26	20	14	47	C 4 b3	円形	22	21	11
10	C 4 a3	楕円形	44	31	22	29	C 4 b4	円形	25	23	13	48	C 4 b3	楕円形	28	22	22
11	C 4 a3	[楕円形]	34	30	31	30	C 4 b4	楕円形	33	29	19	49	C 4 b3	円形	30	28	16
12	C 4 a3	楕円形	24	18	22	31	C 4 b4	円形	20	20	14	50	C 4 b3	楕円形	50	38	16
13	C 4 a3	[楕円形]	32	(13)	22	32	C 4 b4	楕円形	60	43	15	51	C 4 b3	楕円形	30	25	15
14	C 4 a4	円形	25	23	25	33	C 4 b4	円形	20	18	11	52	C 4 b2	楕円形	28	25	20
15	C 4 a4	円形	27	25	21	34	C 4 b4	楕円形	21	16	12	53	C 4 b3	楕円形	28	25	18
16	C 4 a4	円形	20	18	10	35	C 4 b4	楕円形	24	21	10	54	C 4 b2	円形	41	39	16
17	C 4 a4	楕円形	38	33	40	36	C 4 c4	円形	22	21	13	55	C 4 b2	円形	29	29	9
18	C 4 a4	楕円形	23	20	16	37	C 4 b3	円形	17	16	9						
19	C 4 a4	楕円形	50	42	31	38	C 4 b3	円形	20	19	17						

表 25 その他のピット群一覧表

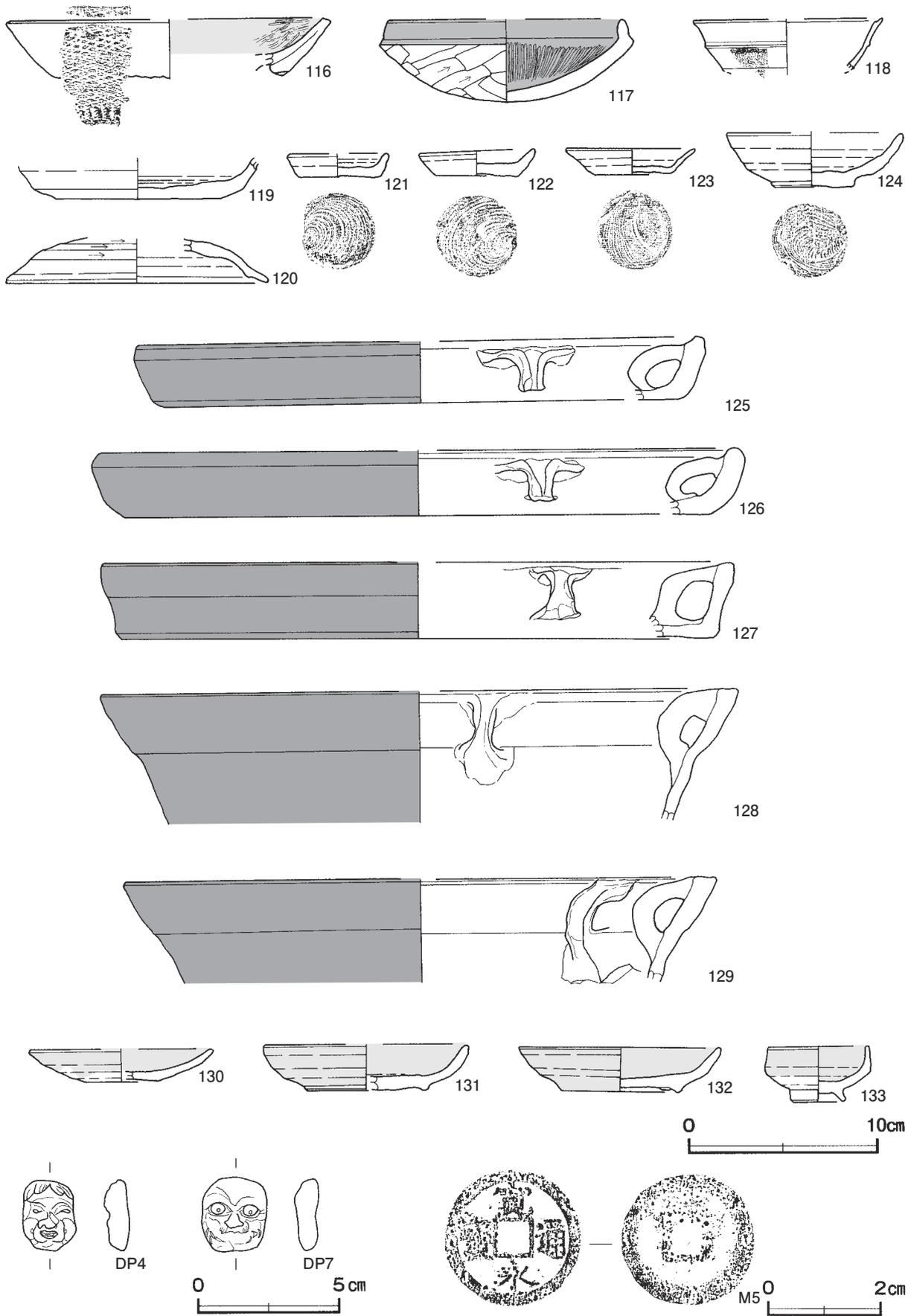
番号	位置	範囲	柱 穴				主な出土遺物	備 考
			柱穴数	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)		
1	B 3 g9 ~ B 3 h0	東西 4.25 m, 南北 3.25 m	7	円形・楕円形	20 ~ 50	19 ~ 43	16 ~ 43	
2	B 3 j9 ~ C 4 b1	東西 10.00 m, 南北 8.80 m	18	円形・楕円形	22 ~ 78	18 ~ 49	7 ~ 40	
3	B 4 i3 ~ C 4 a4	東西 7.58 m, 南北 6.88 m	18	円形・楕円形	17 ~ 53	16 ~ 50	10 ~ 38	SH 1, FP22, SA 1 → 本跡 → SB 2
4	C 4 a2 ~ C 4 b5	東西 12.60 m, 南北 6.75 m	55	円形・楕円形	17 ~ 60	15 ~ 43	8 ~ 42	本跡 → SN10

(8) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については、実測図(第198図)と観察表を掲載する。

遺構外出土遺物観察表(第198図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
116	土師器	壺	[16.6]	(3.2)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	複合口縁 口唇部格子状のキザミ目 口縁部外面網目状燃糸文 口縁部下端にキザミ目状圧痕 内面へラ磨き及び赤彩	表土	5%
117	土師器	坏	[12.4]	4.4	-	長石・石英	橙	普通	体部外面多方向のへら削り 内面放射状のへら磨き	表土	50% PL28
118	須恵器	甗	[10.0]	(2.8)	-	長石・黒色粒子	暗灰黄	良好	櫛描波状文 外・内面ロクロナデ	表土	10%
119	須恵器	坏	-	(2.2)	[8.4]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転へら削り 外・内面ロクロナデ	表土	15% 産地不明
120	須恵器	蓋	[14.0]	(2.4)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	天井部回転へら削り	表土	10% 新治産
121	土師質土器	小皿	[5.1]	1.3	4.3	長石・石英・赤色粒子	黄橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	表土	60%
122	土師質土器	小皿	6.0	1.5	4.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	表土	90% PL31
123	土師質土器	小皿	6.7	1.4	3.9	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	表土	100% PL31
124	土師質土器	小皿	[9.2]	2.9	4.0	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り 外・内面ロクロナデ	表土	70% PL31
125	土師質土器	焙烙	[30.0]	3.3	[27.2]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内耳1か所残存 外・内面ナデ	表土	5%



第 198 図 遺構外出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
126	土師質土器	焙烙	[33.8]	3.3	[31.2]	長石・石英・雲母	橙	普通	内耳1か所残存 外・内面ナデ	表土	5%
127	土師質土器	焙烙	[33.4]	4.1	[31.4]	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	内耳1か所残存 外・内面ナデ	表土	10%
128	土師質土器	内耳鍋	[33.8]	(7.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	内耳1か所残存 外・内面ナデ	表土	10%
129	土師質土器	内耳鍋	[31.2]	(5.6)	-	長石・石英・雲母	明黄褐	普通	内耳2か所残存 外・内面ナデ	表土	15%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
130	陶器	灯明皿	[9.6]	1.7	[3.8]	長石・にぶい黄橙	外・内面ロクロナデ	透明	不明	表土	25%
131	陶器	皿	[10.6]	2.4	[6.2]	長石・浅黄	外・内面ロクロナデ 見込み無釉	透明	瀬戸・美濃系	表土	45% PL33
132	陶器	皿	10.6	2.5	6.1	長石・浅黄	外・内面ロクロナデ 見込み無釉	透明	瀬戸・美濃系	表土	60% PL33
133	陶器	猪口	5.2	2.9	2.6	長石・灰白	外・内面ロクロナデ	透明	瀬戸・美濃系	表土	100% PL32

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 4	泥面子	2.5	2.0	0.9	3.50	長石	橙	おかめ	表土	PL34
DP 7	泥面子	2.6	2.3	0.8	5.14	長石	橙	鬼カ	表土	PL34

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 5	銭貨	寛永通寶	25.0	5.5	1.5	銅	1636	古寛永	UP 7 覆土上層	

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査によって、古墳時代の竪穴建物跡2棟、室町時代の方形竪穴遺構7基、井戸跡2基、地下式坑12基、土坑1基、江戸時代の掘立柱建物跡7棟、井戸跡9基、粘土貼土坑10基、土坑12基、炉跡19基、柱穴列2条をはじめ、時期不明の竪穴建物跡、土坑、炉跡、道路跡、溝跡、柱穴列、ピット群が確認できた。当遺跡は、人々の生活の痕跡が古墳時代から江戸時代にかけて断続的に残されていることが判明した。ここでは、各時代における土地利用の変遷を概観し、若干の考察を加えることで、まとめとしたい。

2 土地利用の変遷（第199・200図）

(1) 古墳時代の様相

古墳時代の遺構は、竪穴建物跡2棟を確認したことから、集落が営まれていた。第1号竪穴建物跡では炉を3か所確認したが、廃絶時期は建物内に遺棄された完存率の高い土師器の年代から6世紀初頭と考えられる。江川を挟んで当遺跡に近接する宮内遺跡¹⁾では、5世紀末葉から6世紀初頭には竈が導入されており、その中には炉を併設している事例もあるが、6世紀初頭以降の竪穴建物跡では竈の設置が常態化することから、本跡が前代からの伝統的な炉のみを使用している点は特徴的である。

その他、遺構には伴わないが、上記した竪穴建物跡に先行する時代の土師器（116）と須恵器（118）が、調査区域内から出土している。116の土師器壺は、複合口縁で網目状捺糸文を施し、内面ヘラ磨きで赤彩されている。これは器形や技法の特徴から、南関東地域の系譜を引くものと考えられる。このような特徴を有する土器は、当遺跡周辺では北前遺跡²⁾や高崎貝塚³⁾などの江川流域に展開する古墳時代前期の集落から出土しており、116については北前Ⅱ期（古墳時代前期前葉）段階のものに類似している。118は、

5世紀後葉に比定できる須恵器甕の口縁部破片で、産地は不明であるが、県内における当該期の窯跡は現段階で確認されていないことから、他地域からの搬入品とみられる。

(2) 室町時代の様相

室町時代の遺構は、方形竪穴遺構7基、井戸跡2基、地下式坑12基、土坑1基を確認した。地下式坑の分布は、調査区東部の標高16mほどの台地上に集中している。出土遺物の大半は、廃絶後の窪地に投棄された後世のものであることから、機能していた時期を検討することが困難であったが、遺構の構造、配置、重複関係などから、すべてが同時期に存在した可能性は低い。性格は、関東地方における中世後半の屋敷跡の周辺で確認されることが多いことから⁴⁾、屋敷に伴う穀物類等の農作物を貯蔵するための倉庫あるいは埋葬施設の可能性があるが、詳細は不明である。第4号地下式坑については、天井部が崩落する以前の覆土から銭貨（明銭・北宋銭）が6枚まとまって出土しており、葬送儀礼に伴う六文銭とすれば、埋葬施設の可能性もある。

その他、第9号井戸跡からはいわゆる「武蔵型板碑」の完形品1点が、覆土最下層から二つに割れた状態で出土している。板碑（Q1）は緑泥片岩製で、表面に主尊と装飾の一部を確認できた。主尊は阿弥陀如来（異体キリク）で、装飾は山形の頂部の下に二条線が刻まれている。県内に分布する武蔵型板碑の主尊は、阿弥陀如来が圧倒的に多いことが指摘されており⁵⁾、当地においても阿弥陀如来に対する信仰が浸透していたことが伺える。

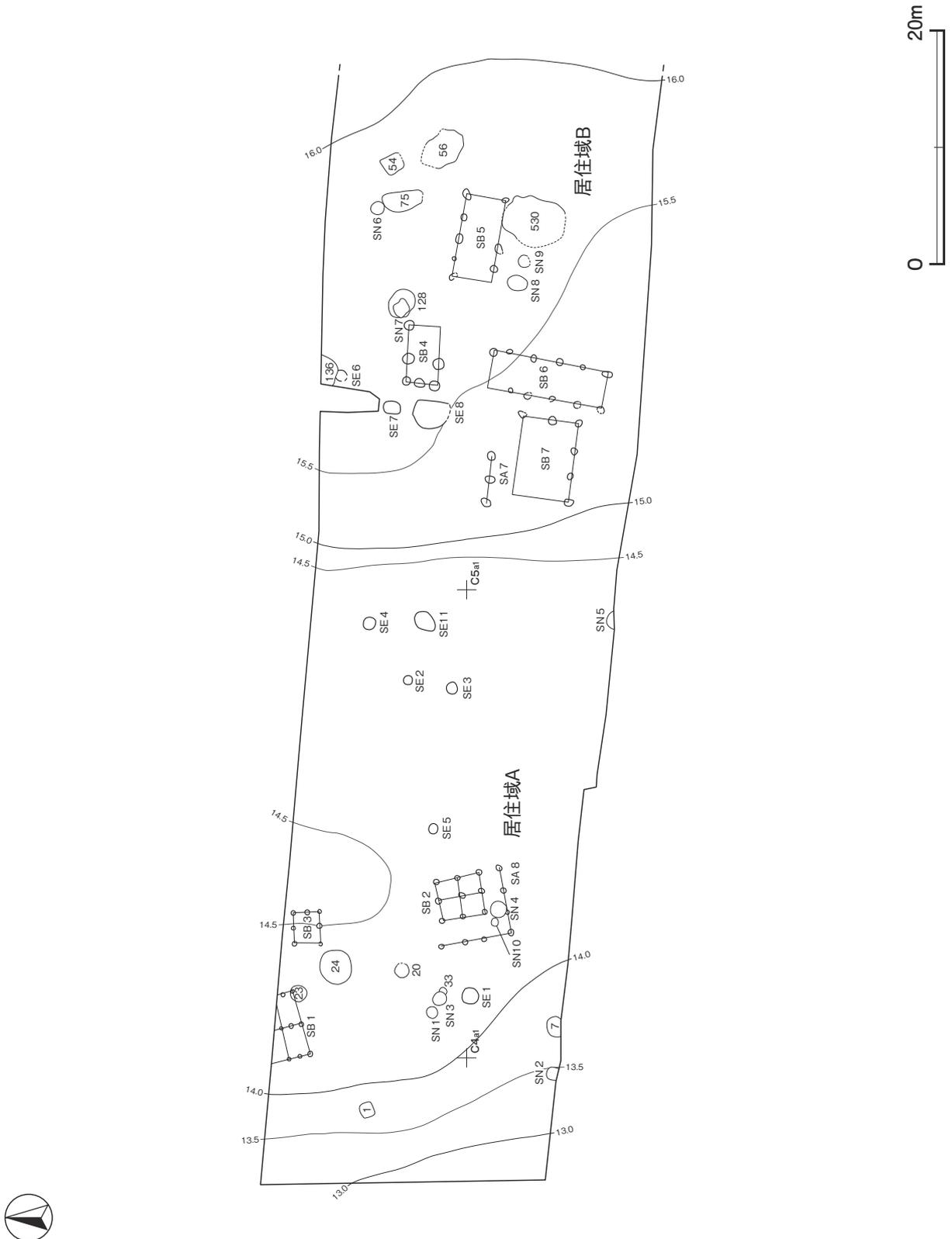
(3) 江戸時代の様相（第199・200図）

江戸時代の遺構は、掘立柱建物跡7棟、井戸跡9基、粘土貼土坑10基、土坑12基、炉跡19基、柱穴列2条を確認した（第199図）。時期は、伴う遺物が少ないため、詳細に検討することができなかったが、当該期の土地利用は、主に19世紀後半に行われたとみられる。調査区域内では、居住目的の建物と納屋などの倉庫と考えられる掘立柱建物跡を中心として、その他の遺構が規格的な配置をとり、一つの居住域として機能していたと推測できる。遺構の分布状況からは、少なくとも2か所の居住域が存在した可能性があり、以下では便宜的に「居住域A」「居住域B」と呼称する。

居住域Aは、調査区西部の標高13～14mの江川へと向かう台地平坦部から斜面部にかけての範囲である。該当する遺構は、第1～3号掘立柱建物跡、第1・5号井戸跡、第1～4・10号粘土貼土坑、第1・7・20・23・24・33号土坑、第8号柱穴列である。これらは、重複するものもあることから、すべてが同時期に機能していたものではないが、居住目的の建物と考えられる第2号掘立柱建物跡と第8号柱穴列を中心として、その周囲に第1・5号井戸跡、西側斜面部に水溜めと考えられる第1～3号粘土貼土坑が分布するという配置が注目できる。第8号柱穴列は、その配置から第2号掘立柱建物跡に付帯する遮扉の可能性があり、その内側で確認した第4・10号粘土貼土坑は水溜めの可能性がある。

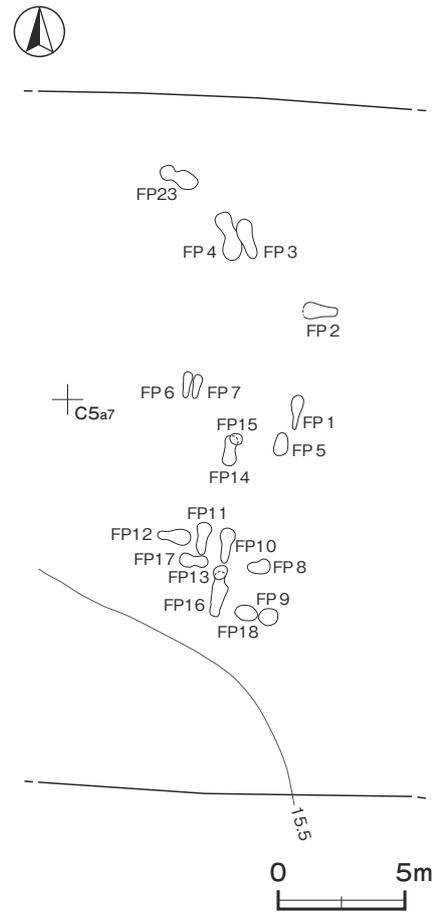
居住域Bは、調査区東部の標高15mほどの台地平坦部で確認した第4～7号掘立柱建物跡、第6～8号井戸跡、第6～9号粘土貼土坑、第54・56・75・128・136・530号土坑、第7号柱穴列が位置する範囲である。その中で、第5号掘立柱建物跡と第6号掘立柱建物跡はL字状の配置となっており、南面して建てられた前者が居住目的の建物、後者が納屋などの倉庫と考えられる。また、第5号掘立柱建物跡の南側には、水溜めと考えられる第8・9号粘土貼土坑、馬屋と考えられる第530号土坑が、北側には第6・7号井戸跡、ゴミ捨て場と考えられる第54・56・75・128号土坑がそれぞれ位置しており、このような性格が異なる遺構の配置は、当該期における母屋を中心とする敷地内の空間利用を反映したものとみられる。当該期の遺物は、主に粘土貼土坑やゴミ捨て場と考えられる土坑の覆土中から出土しているが、その中で

砥石の出土量が多いことが注目できる。特に第128号土坑からは、大小様々な主に凝灰岩製の砥石が総数にして58点出土している。これらの砥石は、土師質土器や陶磁器とともに廃棄されたものとみられ、平面形や大きさの違いは使用目的や頻度に起因するものと考えられる。多量の砥石が出土した背景には、頻繁に農具や工具を使用した集団の存在も考えられるが、推測の域を出ない。



第199図 江戸時代の遺構全体図

炉跡は、調査区東部の限られた範囲に分布しているが、平面形が柄鏡形ないし瓢箪形を呈するもの、円形ないし楕円形を呈するものがみられる（第200図）。前者は、東北地方に分布するいわゆる「カマド状遺構」⁶⁾と呼称されるものに類似しており、焚口部と燃焼部から構成されている。時期については、出土遺物が少ないため詳細は不明であるが、上記した江戸時代の遺構との重複関係をみると、第1・6・7号炉が第5号掘立柱建物跡を、第2号炉が第75号土坑を、第10・11・16・17号炉が第530号土坑を、第12号炉が第9号粘土貼土坑を掘り込んでいることから、その大半は居住域Bと同時期に機能していた可能性は低い。なお、燃焼部の位置については、北部に構築されているものが多いが、その相違が時期差あるいは風向きによる造り替えに起因するものなのか、詳細は不明である。後者は、平面形や構造に違いがあるものの、位置関係から前者と比較的近い時期に機能していたものとみられるが、その相違が用途によるものなのか、詳細は不明である。性格については、前者のような特徴的な構造の炉跡に限られた範囲に集中し、全てではないが一時期に複数が同時に機能していたとすれば、集団で利用する作業場に伴う燃焼施設の可能性もあるが、詳細は不明である。



第200図 炉跡の分布状況

3 おわりに

以上、今回の調査では、古墳時代から江戸時代にかけての人々の痕跡を確認することができた。特に遺構の確認状況からは、室町時代以降の土地利用が活発に行われていたことが明らかとなり、江戸時代の屋敷跡を確認できたことは、調査例の少ない当該期の様相を解明する上で貴重な資料となった。今後の県西部における発掘調査の進展に期待するとともに、本報告が当地域の歴史解明の一助となれば幸いである。

註

- 1) 小林和彦・宮崎剛「宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第359集 2012年3月
- 2) 大森雅之「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第83集 1993年3月
- 3) 鶴見貞雄「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第88集 1994年3月
- 4) 今井恵昭「地下式坑が作られた時代」『駒沢史学』第82号 2014年3月
- 5) 大関武「水海道市羽生町所在の板碑について」『研究ノート』5号 財団法人茨城県教育財団 1996年6月
- 6) 茅野嘉雄「カマド状遺構の集成と今後の研究課題について」『研究紀要』第13号 青森県埋蔵文化財調査センター 2008年3月

付 章

1 馬立原遺跡出土弥勒仏立像の成分分析結果

株式会社吉田生物研究所

1 はじめに

茨城県に所在する馬立原遺跡から出土した弥勒仏立像について、材質を明らかにする為に以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

2 資料

調査した資料は表1に示す弥勒仏立像である。

表1 調査資料一覧

No.	資料名	概要
1	弥勒仏立像	緑青に覆われている。所々に白い錆が見られる。

3 方法

資料を用いて蛍光X線分析を行い、金属元素を同定した。装置はRIGAKU製の波長分散型蛍光X線分析装置ZSX-PRIMUS IIを用いた。

4 分析結果

成分分析結果のスペクトルを付す(図1)。表2に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。また、Al, Siは土壌に由来する成分と思われる。調査資料は主成分として銅(Cu)が検出されており、銅製品である。

表2 弥勒仏立像の成分分析結果一覧表

元素	No.1(wt%)
Al	20.40
Si	32.00
Cu	47.60

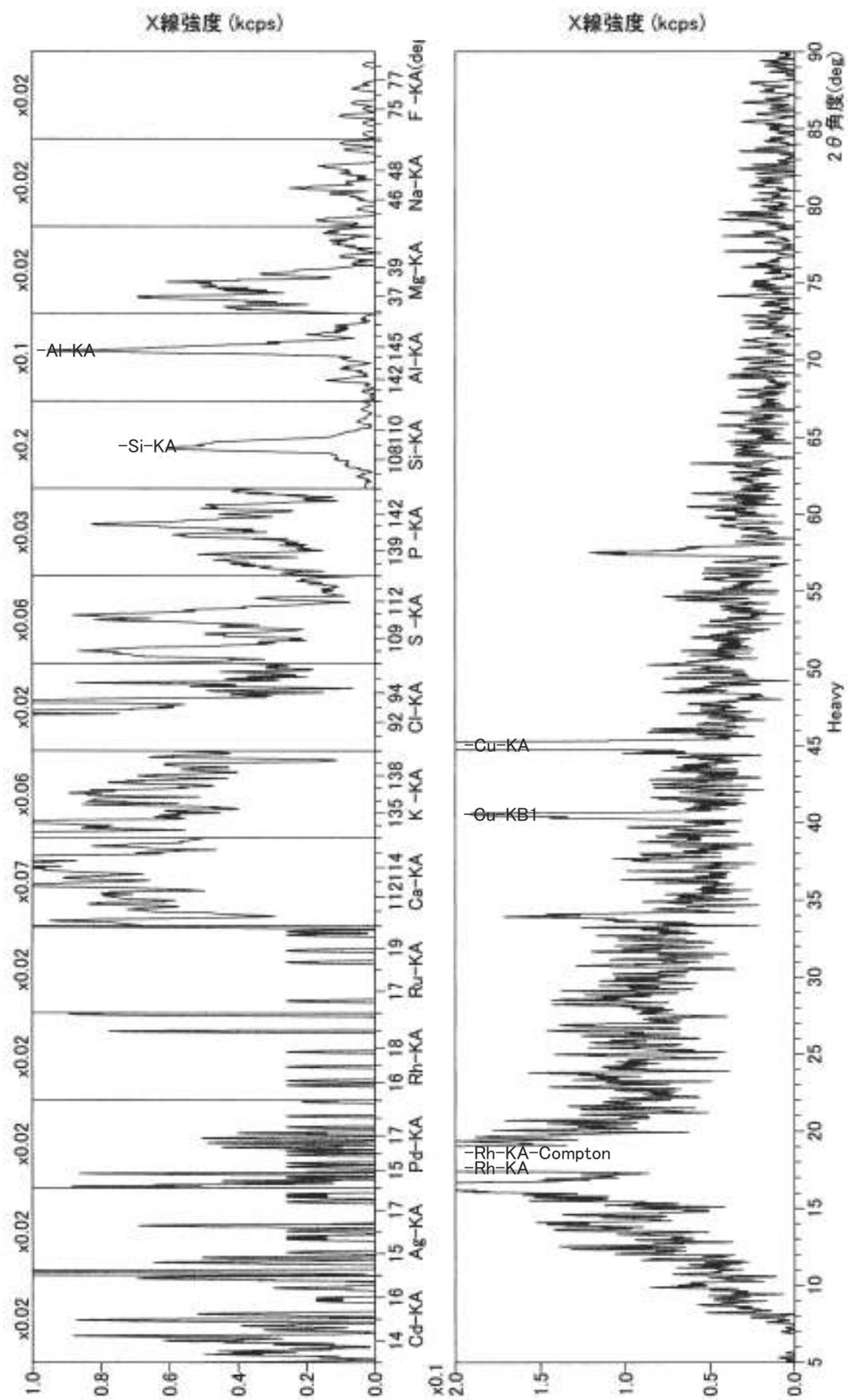


図1 弥勒仏立像

2 馬立原西遺跡出土木製品の樹種同定結果

株式会社吉田生物研究所

1 試料

試料は馬立原西遺跡から出土した木製品 1 点である。

2 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果（広葉樹 1 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（ $\sim 500 \mu\text{m}$ ）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは 2～3 個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

参考文献

- 林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所 1991 年
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所 1999 年
島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 1988 年
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 1979 年
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」 1985 年
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」 1993 年

使用顕微鏡

Nikon DS-Fil

表1 馬立原西遺跡出土木製品同定表

No.	品名	樹種
3	漆器椀	ブナ科クリ属クリ

写真1 ブナ科クリ属クリ



木口



柁目



板目

写 真 图 版

馬 立 原 遺 跡
馬 立 原 西 遺 跡



馬立原遺跡遺物集合



調査区遠景（東から）

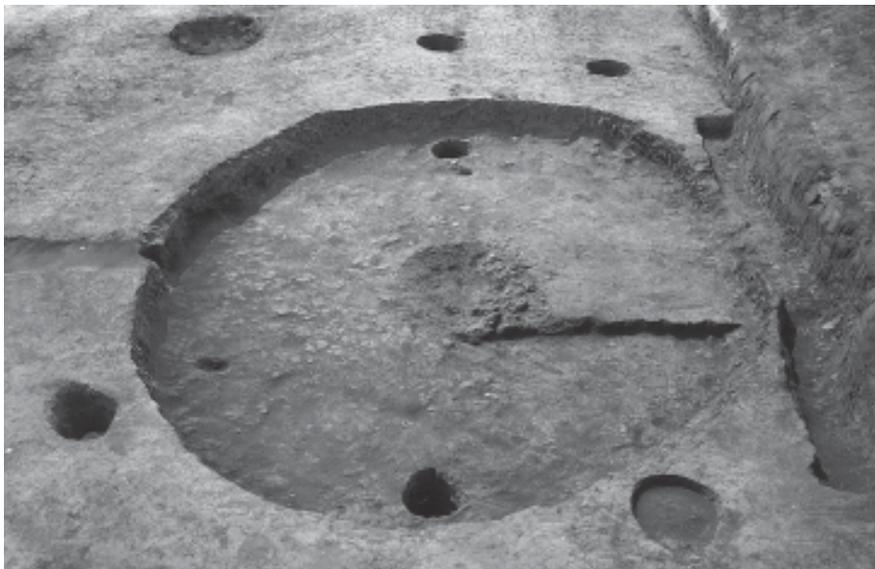


調査区西部（平成25年度調査区域）

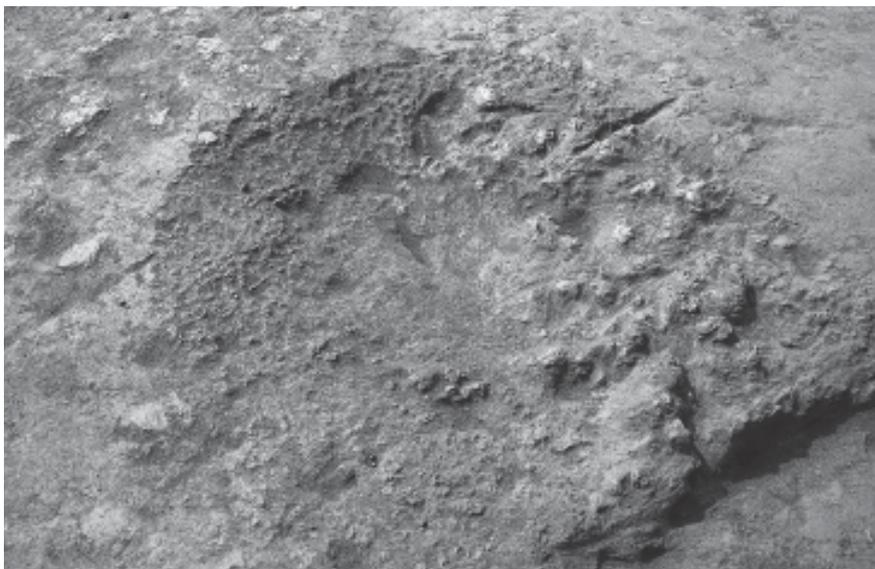
PL2



第 1 号豎穴建物跡
遺物出土狀況

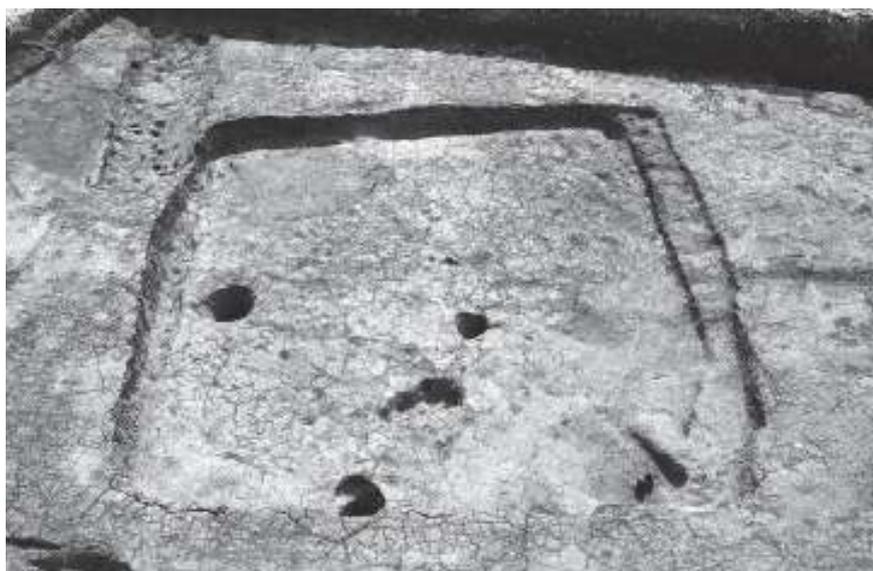


第 1 号豎穴建物跡
完掘狀況



第 1 号豎穴建物跡
炉完掘狀況

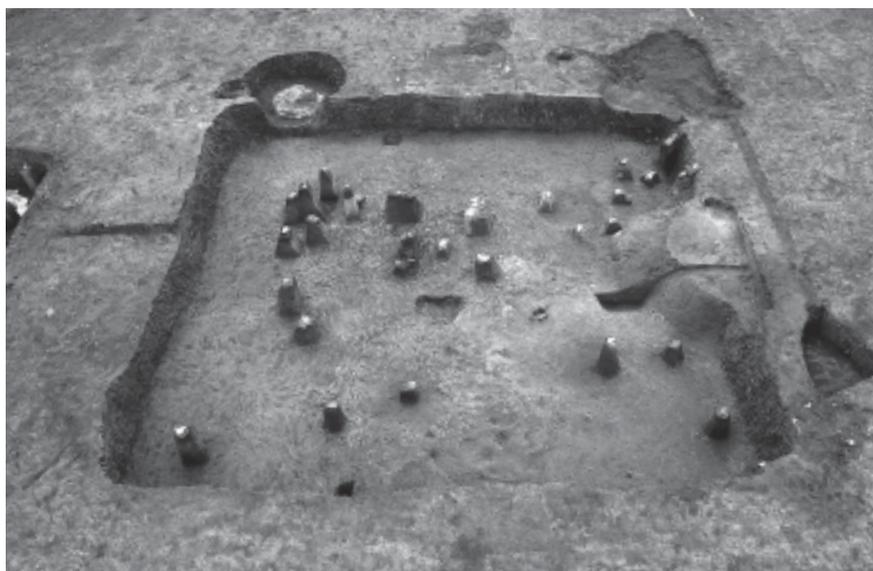
第2号豎穴建物跡
完掘狀況



第2号豎穴建物跡
竈完掘狀況



第4号豎穴建物跡
遺物出土狀況



PL4



第4号竖穴建物跡
完掘状況

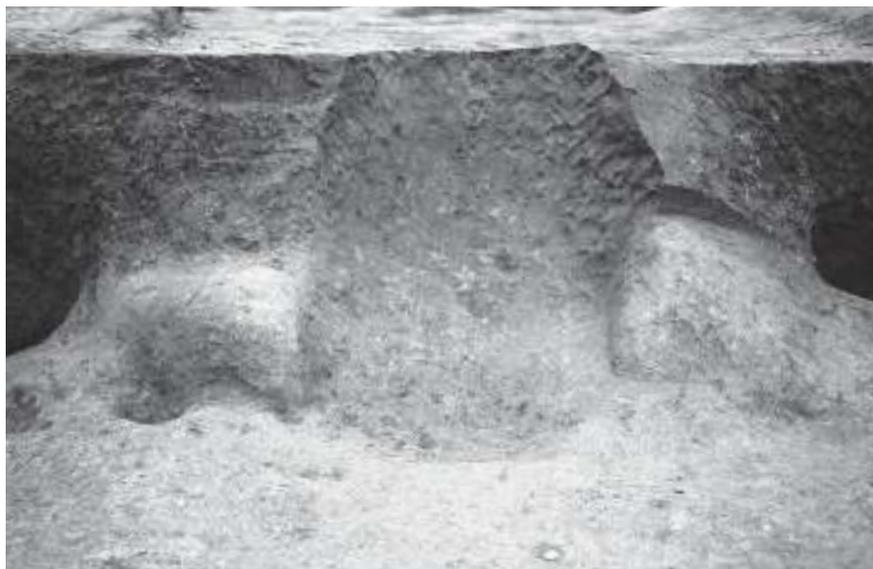


第4号竖穴建物跡
竈完掘状況



第5号竖穴建物跡
完掘状況

第5号豎穴建物跡
竈完掘狀況



第6号豎穴建物跡
遺物出土狀況



第6号豎穴建物跡
完掘狀況



PL6



第6号竖穴建物跡
竈完掘狀況



第7号竖穴建物跡
遺物出土狀況



第7号竖穴建物跡
遺物出土狀況

第7号豎穴建物跡
完掘狀況



第7号豎穴建物跡
竈遺物出土狀況



第8号豎穴建物跡
遺物出土狀況



PL8



第8号竖穴建物跡
完掘狀況



第8号竖穴建物跡
竈完掘狀況



第9号竖穴建物跡
遺物出土狀況

第9号豎穴建物跡
完掘狀況



第316号土坑
遺物出土狀況



第1号掘立柱建物跡
完掘狀況



PL10



第2号掘立柱建物跡
完掘状況

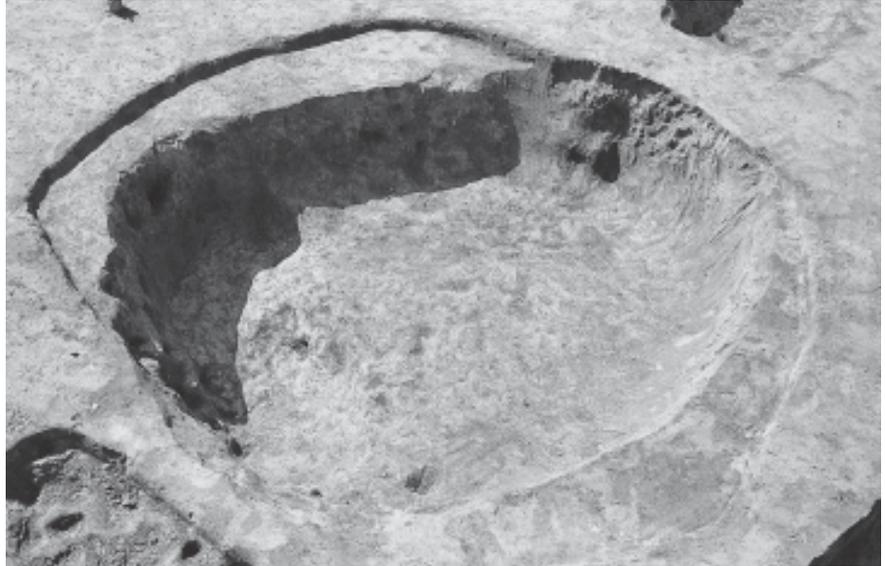


第5号井戸跡
完掘状況



第1号粘土貼土坑
完掘状況

第 75 号 土 坑
完 掘 状 况



第 1・2 号 溝 跡
第 1 号 道 路 跡
完 掘 状 况



第 4 号 溝 跡
完 掘 状 况





SI 1-1



遺構外-TP 4



遺構外-TP 5



遺構外-TP 6



SI 4-10



SI 4-15



SI 4-9



SI 4-16

第1・4号竖穴建物跡，遺構外出土土器

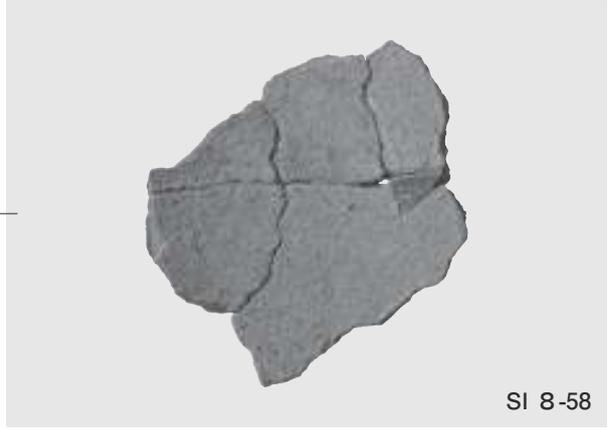


第4～6・8・9号竪穴建物跡，遺構外出土土器

PL14



第4・7・9・10号竖穴建物跡出土土器



SI 8-58



SI 5-34



SI 7-46



SI 3-7



SI 3-8



SI 4-25



SI 4-26



SD2-96

第3～5・7・8号竪穴建物跡，第2号溝跡出土土器

PL16



第1号溝跡，第75号土坑出土土器



SD 1-87



SD 1-86



SD 2-97



SK75-100



SK75-101



SI 4-DP 3



SD 1-89



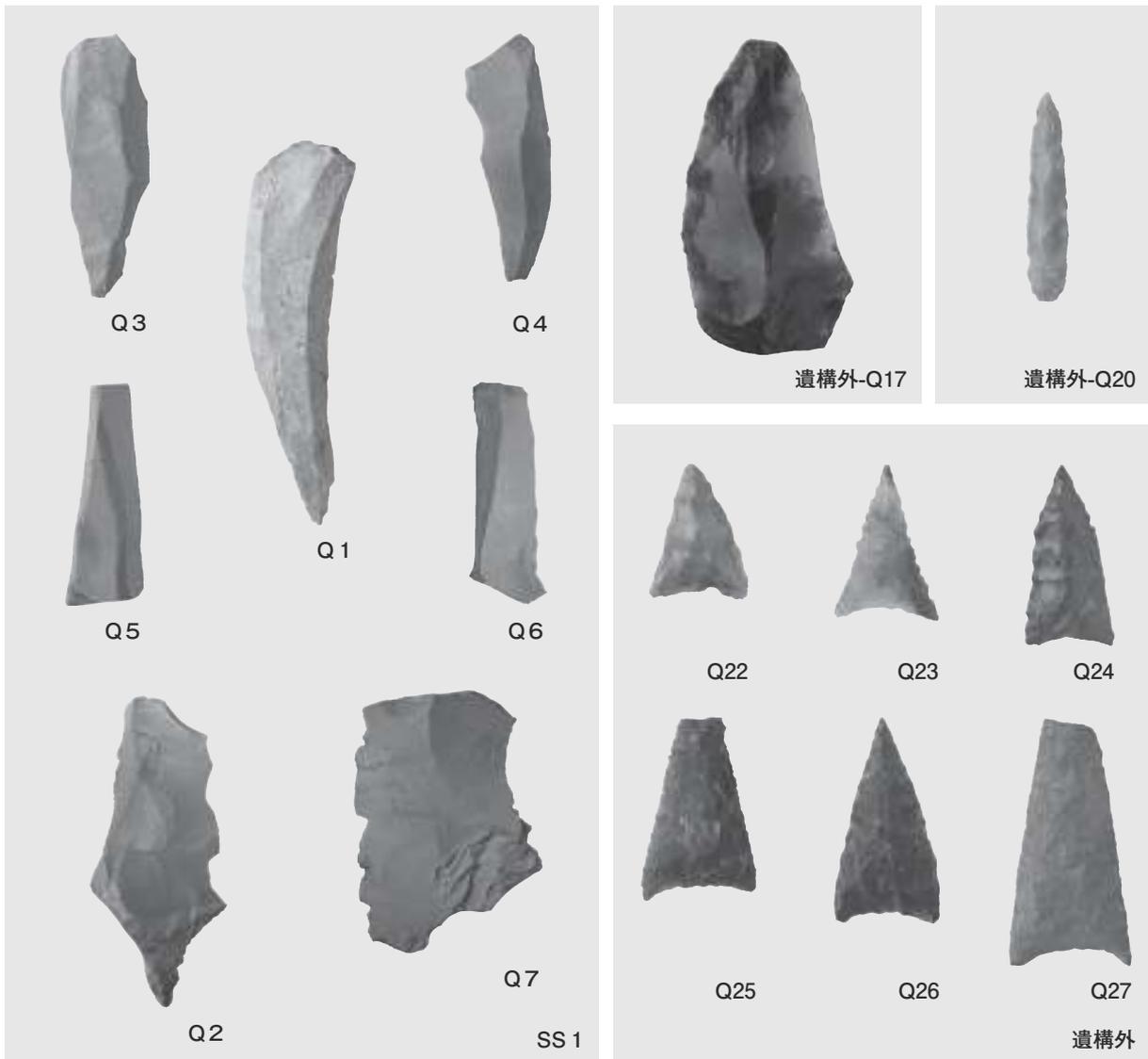
遺構外-108



SI 4-DP 5

第4号竖穴建物跡, SD 1・2号溝跡, 第75号土坑, 遺構外出土遺物

PL18



第1号石器集中地点，第8号竖穴建物跡，遺構外出土遺物



SI 7-Q13



SI 7-Q12



SD2-Q16



SE4-Q15



SI 6-Q11



SI 9-M3

SI 2-M2



SB3-M9



遺構外-M13



遺構外-M12



SD 1-M8

第2・6・7・9号竪穴建物跡，第3号掘立柱建物跡，第4号井戸跡，第1・2号溝跡，遺構外出土遺物

PL20



調査区遠景（北東から）



調査区東部（平成25年度調査区域）

第1号豎穴建物跡
完掘狀況



第1号豎穴建物跡
貯藏穴
遺物出土狀況



第3号豎穴建物跡
完掘狀況



PL22



第6号方形竖穴遺構
完掘状況



第9号井戸跡
遺物出土状況



第2号地下式坑
完掘状況

第3号地下式坑
完掘状況



第4号地下式坑
完掘状況



第6号地下式坑
遺物出土状況



PL24



第 8 号地下式坑
完 掘 状 况



第 9 号地下式坑
完 掘 状 况



第 2 号掘立柱建物跡
第 8 号柱穴列
完 掘 状 况

第 6 号 井 戸 跡
完 掘 状 況



第 8 号 井 戸 跡
完 掘 状 況



第 4 号 粘 土 貼 土 坑
遺 物 出 土 状 況



PL26



第4号粘土貼土坑
完掘狀況



第6号粘土貼土坑
遺物出土狀況



第6号粘土貼土坑
完掘狀況

第 530 号 土 坑
完 掘 状 况



第 2 号 炉 跡
完 掘 状 况



第 2 号 溝 跡
完 掘 状 况





第1号竖穴建物跡，遺構外出土土器



第8号井戸跡，第5・6・11号地下式坑出土土器

PL30



第2号方形竖穴遺構，第8・10号井戸跡，第5～7号地下式坑出土土器



第5号方形豎穴遺構，第5・11号地下式坑，第184号土坑，遺構外出土土器

PL32

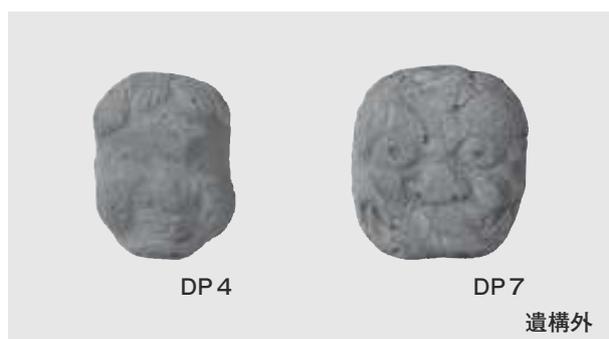
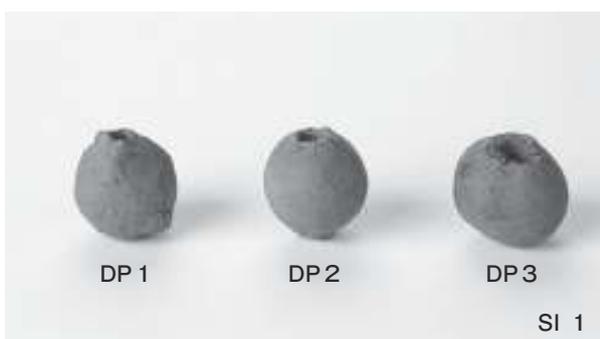


第10号井戸跡，第5・6・11号地下式坑，第128号土坑，遺構外出土土器



第7号地下式坑，第6号粘土貼土坑，第56・128号土坑，遺構外出土土器

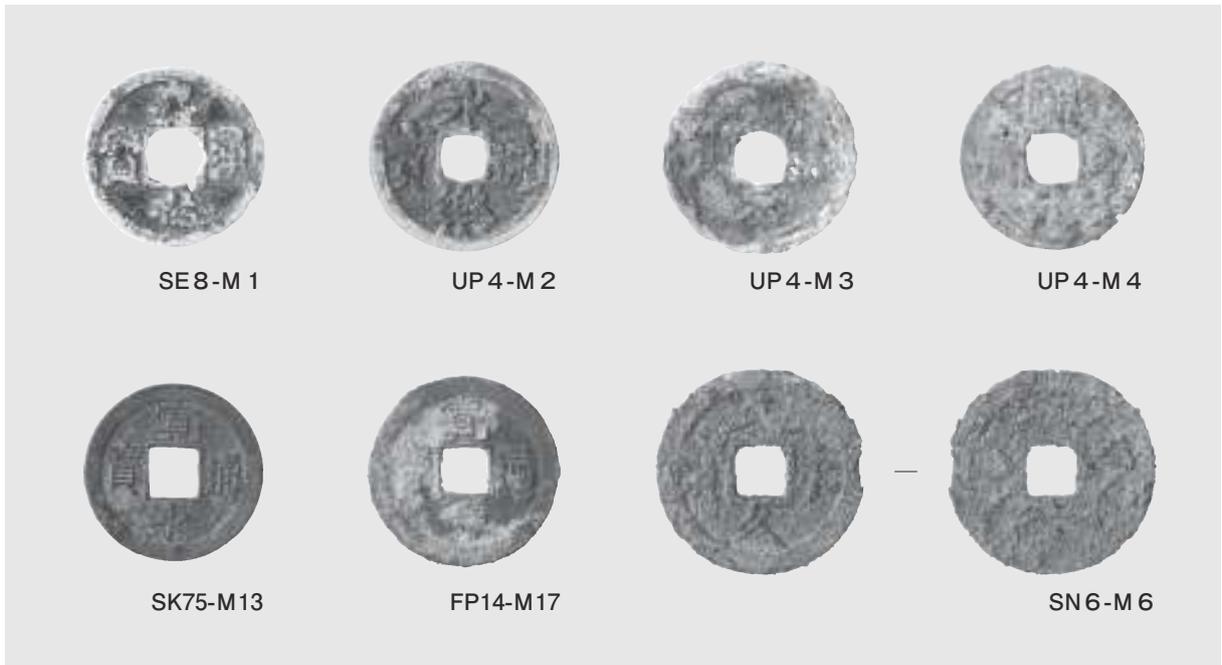
PL34



第1号竖穴建物跡，第6～9号粘土貼土坑，第54・128号土坑，遺構外出土遺物



PL36



出土銅製品・木製品

抄 録

ふりがな	またてはらいせき またてはらにしいせき							
書名	馬立原遺跡・馬立原西遺跡							
副書名	国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第402集							
著者名	中泉雄太							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2015(平成27)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
馬立原遺跡	茨城県坂東市 おおあごまたてあごほら 大字馬立字原674-1 番地ほか	08218 224	36度 03分 45秒	139度 53分 59秒	16 ~ 18m	20110101 ~ 20110630 20130601 ~ 20130731	9,212 m ² 5,024 m ²	国道354号岩井バイパス事業に伴う事前調査
馬立原西遺跡	茨城県坂東市 おおあごまたてあごにし 大字馬立字西143 番地ほか	08218 230	36度 03分 45秒	139度 53分 51秒	13 ~ 16m	20121015 ~ 20121109 20130201 ~ 20130331 20130401 ~ 20130531	1,503 m ² 1,993 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
馬立原遺跡	包蔵地	旧石器	石器集中地点 1か所		剥片			
	集落跡	縄文	竪穴建物跡	1棟	縄文土器(深鉢)			
		奈良・平安	竪穴建物跡	9棟	土師器(坏・甕), 須恵器(坏・高台付坏・蓋・長頸瓶・鉢・甕・甌), 土製品(土玉・支脚・紡錘車), 石器(磨石・敲石・砥石・台石・紡錘車), 鉄製品(手鎌・鏝)			
	その他	時期不明	土坑	379基	土師質土器(小皿・焙烙), 陶器(碗・皿・鉢・播鉢・香炉), 磁器(碗), 石器(砥石), 鉄製品(刀子), 銅製品(煙管・弥勒仏立像), 銭貨(寛永通寶)			
炉跡			1基					
			溝跡	30条				
			柱穴列	5条				
			ピット群	1か所				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬立原西遺跡	集落跡	古墳	竪穴建物跡 2棟	土師器(坏・甕・甑), 土製品(土玉)	
		室町	方形竪穴遺構 7基 井戸跡 2基 地下式坑 12基 土坑 1基	土師質土器(小皿・内耳鍋・播鉢), 陶器(碗・皿), 磁器(碗), 石器(砥石) 石製品(板碑), 銭貨(嘉祐通寶・永樂通寶・景祐通寶・熙寧元寶)	
		江戸	掘立柱建物跡 7棟 井戸跡 9基 粘土貼土坑 10基 土坑 12基 炉跡 19基 柱穴列 2条	土師質土器(小皿・焙烙・播鉢・火鉢), 陶器(碗・蓋・皿・灯明皿・灯明受皿・播鉢・鉢), 磁器(碗・皿・猪口), 土製品(泥人形・鳩笛), 石器(砥石), 銅製品(小柄・煙管), 銭貨(寛永通寶・文久永寶), 木製品(椀)	
	その他	時期不明	竪穴建物跡 1棟 土坑 321基 炉跡 4基 道路跡 1条 溝跡 5条 柱穴列 6条 ピット群 4か所	縄文土器(深鉢), 土師器(坏・壺), 須恵器(坏・蓋・甕), 土師質土器(小皿・内耳鍋・焙烙), 陶器(皿・灯明皿・猪口), 磁器(碗), 土製品(泥面子), 銭貨(寛永通寶)	
要約	<p>馬立原遺跡は、旧石器時代から江戸時代にかけて断続的に土地利用された遺跡であることが判明した。特に奈良時代には本格的な集落が形成され、竪穴建物跡からは複数の産地が異なる須恵器が出土した。江戸時代には居住目的の建物や倉庫と考えられる掘立柱建物跡とともに井戸跡を確認したことから、屋敷地として利用されたと考えられる。また、調査区東部で確認した区画溝からは、土師質土器や陶磁器とともに、室町時代に製作された小銅仏(弥勒仏立像)が出土し、中世以降、当地に弥勒信仰が浸透していたことが伺える。</p> <p>馬立原西遺跡は、古墳時代から江戸時代にかけて断続的に土地利用された遺跡であることが判明した。古墳時代には小規模な集落地、室町時代には倉庫と考えられる地下式坑が群集し、江戸時代には居住目的の建物や倉庫と考えられる掘立柱建物跡をはじめ、井戸跡や水溜めと考えられる粘土貼土坑を確認したことから、屋敷地として利用されたと考えられる。</p>				

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	EPSON ES-G11000
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第402集

馬立原遺跡

馬立原西遺跡

国道354号岩井バイパス事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成27(2015)年 3月13日 印刷

平成27(2015)年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社あけぼの印刷社

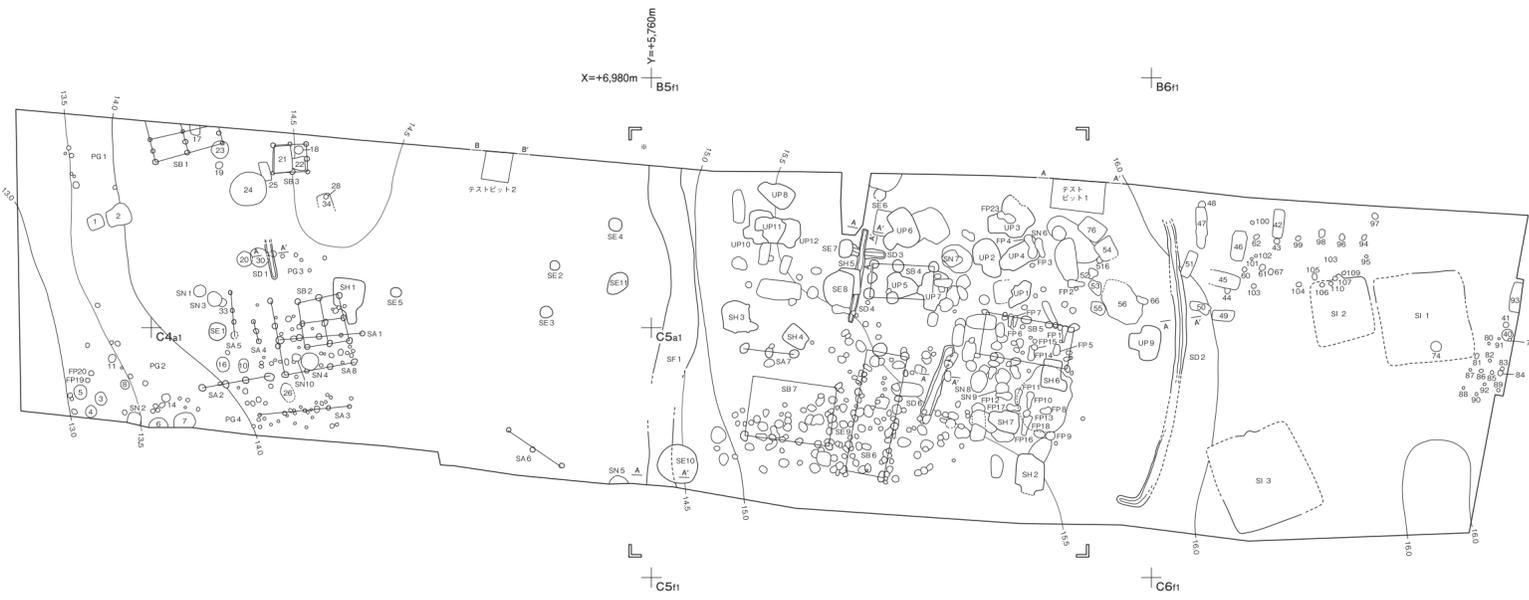
〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号

TEL 029-227-5505



X=+7,000m
Y=+5,720m
B4a1

B7a1



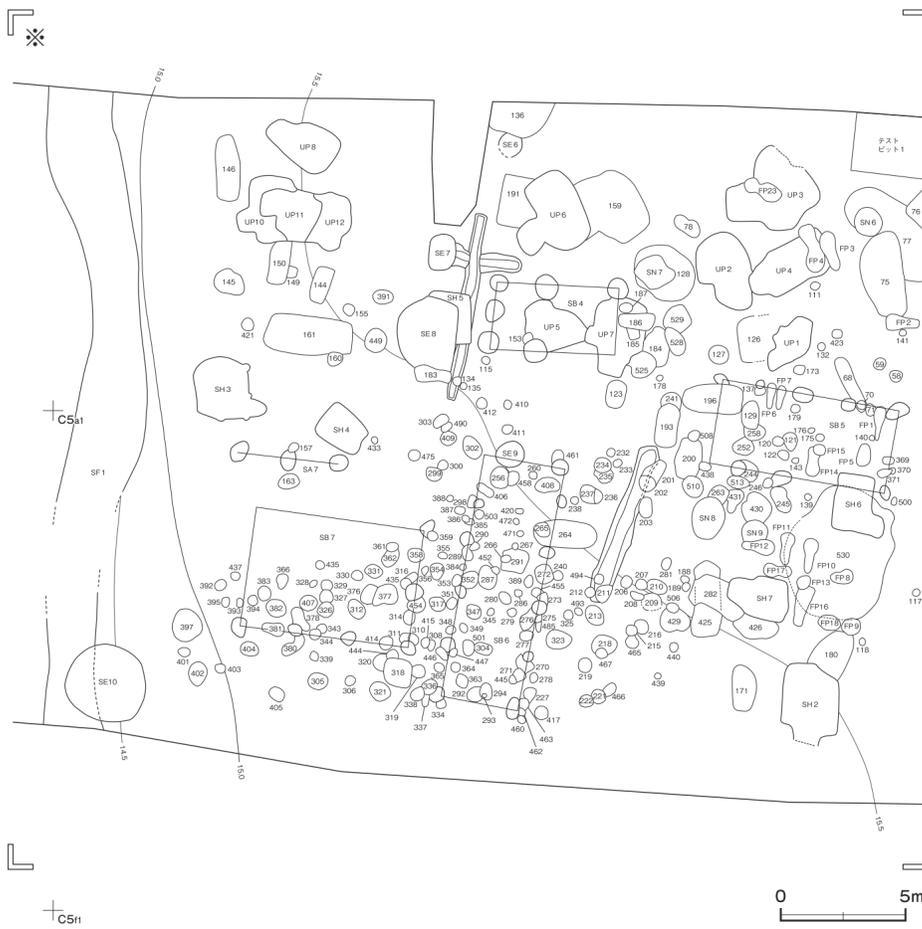
D4a1

X=+6,920m
Y=+5,840m
D7a1



X=+6,980m
Y=+5,760m
B5a1

B6a1



C6a1

付図2 馬立原西遺跡遺構全体図 (『茨城県教育財団文化財調査報告』第402集)